本居豐穎
木村正辭
小杉榲邨
井上頼圀
落合直文
監修

國文大觀

9

日記草子部

板倉屋書房

國文大觀日記草子部目次

土佐日記

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。それの年(承平四年)のしはすの二十日あまり一日の、戌の時に門出す。そのよしいさゝかものにかきつく。ある人縣の四年五年はてゝ例のことゞも皆しをへて、解由など取りて住むたちより出でゝ船に乘るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬおくりす。年ごろよく具しつる人々(イ共)なむわかれ難く思ひてその日頻にとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。

廿二日(イ行に)、和泉の國までとたひらかにねがひたつ。藤原の言實船路なれど馬の餞す。上中下ながら醉ひ過ぎていと怪しくしほ海のほとりにてあざれあへり。

廿三日、八木の康教といふ人あり。この人國に必ずしもいひつかふ者にもあらざる(イ行)なり。これぞ正しきやうにて馬の餞したる。かみがらにやあらむ、國人の心の常として今はとて見えざなるを心あるものは恥ぢずき(イぞ)なむきける。これは物によりて譽むるにしもあらず。

廿四日、講師馬の餞しに出でませり。ありとある上下童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

廿五日、守のたちより呼びに文もて來れり。呼ばれて至りて日ひとひ夜ひとよとかく遊ぶや

うにて明けにけり。

廿六日、なほ守のたちにてあるじしのゝしりてをのこらまでに物かづけたり。からうた聲あげていひけり。やまとうた、あるじもまらうどもこと人もいひあへりけり。からうたはこれにはえ書かず。やまとうたあるじの守のよめりける、

「都いでゝ君に逢はむとこしものをこしかひもなく別れぬるかな」

となむありければ、かへる前の守のよめりける、

「しろたへの浪路を遠くゆきかひて我に似べきはたれならなくに」。

ことひとびとのもありけれどさかしきもなかるべし。とかくいひて前の守も今のも諸共におりて、今のあるじも前のも手取りかはしてゑひごとに心よげなることして出でにけり。

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに京にて生れたりし女子（子イ）こゝにて俄にうせにしかば、この頃の出立いそぎを見れど何事もえいはず。京へ歸るに女子のなきのみぞ悲しび戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間にある人のかきて出せる歌、

「都へとおもふものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり」。

又、或時には、

「あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりける」

といひける間に鹿兒の崎といふ所に守のはらからまたことひとこれかれ酒などもて追ひきて、磯におり居て別れ難きことをいふ。守のたちの人々の中にこの來る人々ぞ心あるやう

にはいはれほのめく。かく別れ難くいひて、かの人々の口網ももろもちにてこの海邊にて荷ひいだせる歌、

「をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうち群れてこそ我はきにけれ」

といひてありければ、いといたく愛でゝ行く人のよめりける、

「棹させど底ひも知らぬわたつみのふかきこゝろを君に見るかな」

といふ間に楫取ものゝ哀も知らでおのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて「潮滿ちぬ。風も吹きぬべし」とさわげば船に乘りなむとす。この折にある人々折節につけて、からうたども時に似つかはしき（從イ）いふ。又ある人西國なれど甲斐歌などいふ。かくうたふに、ふなやかたの塵も散り、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。今宵浦戸にとまる。藤原のとき實、橘の季衡、こと人々追ひきたり。

廿八日、浦戸より漕ぎ出でゝ大湊をおふ。この間にはやくの國の守の子山口の千岑、酒よき物どももてきて船に入れたり。ゆくゆく飲みくふ。

廿九日、大湊にとまれり。くす師ふりはへて屠蘇白散酒加へてもて來たり。志あるに似たり。

元日、なほ同じとまりなり。白散をあるもの夜のまとてふなやかたにさしはさめりければ、風に吹きならさせて海に入れてえ飲まずなりぬ。芋し（カラ）あらめも齒固めもなし。かやうの物もなき國なり。求めもおかず。唯おしあゆの口をのみぞ吸ふ。このすふ人々の口を押年魚もし思ふやうあらむや。今日は都のみぞ思ひやらるゝ。「九重の門のしりくめ繩のなよしの頭

ひゝら木らいかに」とぞいひあへる。
二日、なほ大湊にとまれり。講師、物、酒などおこせたり。
三日、同じ所なり。もし風浪のしばしと惜む心やあらむ、心もとなし。
四日、風吹けばえ出でたゝず。昌連酒よき物たてまつれり。このかうやうの物もて來るひとになほしもえあらでいさゝげわざせさすものもなし。にぎはゝしきやうなれどまくるこゝちす。
五日、風浪やまねば猶同じ所にあり。人々絶えずとぶらひにく。
六日、きのふのごとし。
七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は白馬を思へどかひなし。たゞ浪の白きのみぞ見ゆる。かゝる間に人の家（イ所）の池と名ある所より鯉はなくて鮒よりはじめて川のも、海のも、ことものども、ながびつにになひつゞけておこせたり。わかなこに入れて雉など花につけたり（十七字イ無）。若菜ぞ今日をば知らせたる。歌あり。そのうた、
「淺茅生の野邊にしあれば水もなき池につみつるわかななりけり」。
いとをかしかし。この池といふは所の名なり。よき人の男につきて下りて住みけるなり。この長櫃の物は皆人童までにくれたれば、飽き滿ちて舟子どもは腹皷をうちて海をさへおどろかして浪たてつべし。かくてこの間に事おほかり。けふわりごもたせてきたる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひいひて浪の

立つなること丶憂へいひて詠める歌、

「ゆくさきにたつ白浪の聲よりもおくれて泣かむわれやまさらむ」

とぞ詠める。いと大聲なるべし。持てきたる物より歌はいかゞあらむ。この歌を此彼あはれがれども一人も返しせず。しつべき人も交れゝどこれをのみいたがり物をのみくひて夜更けぬ。この歌ぬしなむ「またまからず」といひてたちぬ。ある人の子の童なる密にいふ「まろこの歌の返しせむ」といふ。驚きて「いとをかしきことかな。よみてむやは。詠みつべくばはやいへかし」といふ。「まからずとて立ちぬる人を待ちてよまむ」とて求めけるを、夜更けぬとにやありけむ、やがていにけり。「そもそもいかゞ詠んだる」といぶかしがりて問ふ。この童さすがに恥ぢていはず。强ひて問へばいへるうた、

「ゆく人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ」

となむ詠める。かくはいふものか、うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。童ごとにては何かはせむ、女翁にをしつべし、惡しくもあれいかにもあれ、たよりあらば遣らむとておかれぬめり。

八日、さはる事ありて猶同じ所なり。今宵の月は海にぞ入る。これを見て業平の君の「山のはにげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおもほゆる。もし海邊にてよまゝしかば「浪たちさへて入れずもあらなむ」と詠みてましや。今この歌を思ひ出でゝある人のよめりける、

「てる月のながるゝ見ればあまの川いづるみなとは海にざりける」

とや。
九日、つとめて大湊より那波の泊をおはむとて漕ぎ出でにけり。これかれ互に國の境の内はとて見おくりにくる人數多が中に藤原のときざね、橘の季衡、長谷部の行政等なむみたちより出でたうびし日より此所彼所におひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志はこの海には劣らざるべし。これより今は漕ぎ離れて往く。これを見送らむとてぞこの人どもは追ひきける。かくて漕ぎ行くまにまに海の邊にとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし、船にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの歌を獨言にしてやみぬ。

「おもひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずやあるらむ」。

かくて宇多の松原を行き過ぐ。その松の數幾そばく、幾千年へたりと知らず。もとごとに浪うちよせ枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして船人のよめる歌、

「見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」

とや。この歌は所を見るにえまさらず。かくあるを見つゝ漕ぎ行くまにまに、山も海もみなくれ、夜更けて、西ひんがしも見えずして、てけのこと檝取の心にまかせつ。男もならはねばいとも心細し。ましてをんなは船底に頭をつきあてゝねをのみぞなく。かく思へば舟子檝取は船歌うたひて何とも思へらず。そのうたふうたは、

「春の野にてぞねをばなく。わが薄にて手をきるきる、つんだる菜を、親やまぼるらむ、姑

やくふらむ。かへらや。よんべのうなゐもがな。せにこはむ。そらごとをして、おぎのり
　わざをして、せにももてこずおのれだにこず」。
これならず多かれども（無益）（もイ）書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども心は少しなぎぬ。かくゆきくらして泊にいたりて、おきな人ひとり、たうめ一人あるがなかに、心ちあしみしてものも物し給はでひそまりぬ。
十日、けふはこの那波の泊にとまりぬ。
十一日、曉に船を出して室津をおふ。人皆まだねたれば海のありやう（まイ）（二字さ）も見えず、唯月を見てぞ西東をば知りける。かゝる間に皆夜明けて手あらひ例の事どもして晝になりぬ。いましはねといふ所にきぬ。わかき童この所の名を聞きて「はねといふ所は鳥の羽のやうにやある」といふ。まだ幼き童のことなれば人々笑ふ。時にありける女の童なむこの歌をよめる、
「まことにて名に聞く所はねならば飛ぶがごとくにみやこへもがな」
とぞいへる。男も女もいかで疾く都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねどげにと思ひて人々わすれず。このはねといふ所問ふ童の序にて（イぞ）、又昔の人を思ひ出でゝいづれの時にか忘るゝ。今日はまして母の悲しがらるゝ事は、くだりし時の人の數足らねば、ふるき歌に「數はたらでぞかへるべらなる」といふことを思ひ出でゝ人のよめる、
「世の中におもひやれ（イふ）どもこを戀ふる思ひにまさる思ひなきかな」
といひつゝなむ。

十二日、雨降らず。文時、維茂が船のおくれたりし。ならしつより室津に行きぬ。
十三日の曉にいさゝか小雨ふる。しばしありて止みぬ。男女これかれ、ゆあみなどせむとてあたりのよろしき所におりて行く。海を見やれば、
「雲もみな浪とぞ見ゆる海士もがないづれか海と問ひて知るべく」
となむ歌よめる。さて十日あまりなれば月おもしろし。船に乘り始めし日より船には紅こくよききぬ着ず。それは海の神に怖ぢてといひて、何の蘆蔭にことづけてはやのつまのいずしすしあはびをぞ心にもあらぬはぎにあげて見せける。
十四日、曉より雨降れば同じ所に泊れり。船君せちみす。さうじものなければ午の時より後に楫取の昨日釣りたりし鯛に、錢なければよねをとりかけておちられぬ。かゝる事なほありぬ。楫取又鯛もてきたり。よね酒しばしばくる。楫取けしきあしからず。
十五日、今日小豆粥煮ず。口をしくなほ日のあしければゐざるほどにぞ今日廿日あまり經ぬる。徒に日をふれば人々海をながめつゝぞある。めの童のいへる、
「立てばたつゐれば又ゐる吹く風と浪とは思ふどちにやあるらむ」。
いふかひなきものゝいへるにはいと似つかはし。
十六日、風浪やまねば猶同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくしていつしかみさきといふ所渡らむとのみなむおもふ。風浪ともにやむべくもあらず。ある人のこの浪立つを見て詠めるうた、

「霜だにもおかぬかたぞといふなれど浪の中にはゆきぞ降りける」。
さて船に乘りし日よりけふまでに廿日あまり五日になりにけり。
十七日、曇れる雲なくなりて曉月夜いとおもしろければ、船を出して漕ぎ行く。このあひだに雲のうへも海の底も同じ如くになむありける。うべも昔のをのこは「棹は穿つ波の上の月を。船は襲ふ海のうちの空を」とはいひけむ。きゝされに聞けるなり。又ある人のよめる歌、
「みなそこの月のうへより漕ぐふねの棹にさはるは桂なるらし」。
これを聞きてある人の又よめる、
「かげ見れば浪の底なるひさかたの空こぎわたるわれぞわびしき」。
かくいふあひだに夜やうやく明けゆくに、楫取等「黑き雲にはかに出できぬ。風も吹きぬべし。御船返してむ」といひてかへる。このあひだに雨ふりぬ。いとわびし。
十八日、猶同じ所にあり。海あらければ船いださず。この泊遠く見れども近く見れどもいとおもしろし。かゝれども苦しければ何事もおもほえず。男どちは心やりにやあらむ、からうたなどいふべし。船もいださでいたづらなればある人の詠める、
「いそぶりの寄する磯には年月をいつともわかぬ雪のみぞふる」
この歌は常にせぬ人のごとなり。又人のよめる、
「風による浪のいそにはうぐひすも春もえしらぬ花のみぞ咲く」。
この歌どもを少しよろしと聞きて、船のをさしける翁、月頃の苦しき心やりに詠める、

「立つなみを雪か花かと吹く風ぞよせつゝ人をはかるべらなる」。

この歌どもを人の何かといふを、ある人の又聞きふけりて詠める。その歌よめるもじ三十文字あまり七文字、人皆えあらで笑ふやうなり。歌ぬしいと氣色あしくてえず。まねべどもえまねばず。書けりともえ讀みあへがたかるべし。今日だにいひ難し。まして後にはいかならむ。

十九日、日あしければ船いださず。

二十日、昨日のやうなれば船いださず、皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ、唯日の經ぬる數を、今日いくか、二十日、三十日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寢ず。二十日の夜の月出でにけり。山のはもなくて海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲麻呂といひける人は、もろこしに渡りて歸りきける時に、船に乘るべき所にて、かの國人馬の餞し、わかれ惜みて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし「我が國にはかゝる歌をなむ神代より神もよんたび、今は上中下の人もかうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしみもある時には詠む」とてよめりける歌、

「あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」

とぞよめりける。かの國の人聞き知るまじくおもほえたれども、ことの心を男文字にさまを書き出して、こゝの詞傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの

外になむめでける。もろこしとこの國とはことと〔有ィ〕ことなるものなれど、月の影は同じことなるべければ人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

「都にてやまのはに見し月なれどなみより出でゝなみにこそ入れ」。

廿一日、卯の時ばかりに船出す。皆人々の船出づ。これを見れば春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげの願に依りてにやあらむ、風も吹かずよき日いできて漕ぎ行く。この間につかはれむとて、附きてくる童あり。それがうたふ船うた、

「なほこそ國のかたは見やらるれ、わが父母ありとしおもへば。かへらや」

とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、くろとりといふ鳥岩のうへに集り居り。その岩のもとに浪しろくうち寄す。楫取のいふやう「黑〔有きィ〕鳥のもとに白き浪をよす」とぞいふ。この詞何とにはなけれど、ものいふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば咎むるなり。かくいひつゝ行くに、船君なる人浪を見て、國よりはじめて海賊報いせむといふなる事を思ふうへに、海の又おそろしければ、頭も皆しらけぬ。七十八十は海にあるものなりけり。

「わが髮のゆきといそべのしら浪といづれまされりおきつ島もり」

楫取いへ〔有りィ〕。

廿二日、よんべのとまりよりことゞまりをおひてぞ行く。遙に山見ゆ。年九つばかりなるの童、年よりは幼くぞある。この童、船を漕ぐまにまに、山も行くと見ゆるを見て、あやしきこと歌をぞよめる。そのうた〔イ四字脫〕、

「漕ぎて行く船にて見ればあしびきの山さへゆくを松は知らずや」
とぞいへる。幼き童のことにては似つかはし。けふ海あらげにて磯に雪ふり浪の花さけり。
ある人のよめる。
「浪とのみひとへに聞けどいろ見れば雪と花とにまがひけるかな」。
廿三日、日てりて曇りぬ。此のわたり、海賊のおそりありといへば神佛を祈る。
廿四日、昨日のおなじ所なり。
廿五日、楫取らの北風あしといへば、船いださず。海賊追ひくといふ事絶えずきこゆ。
廿六日、まことにやあらむ、海賊追ふといへば夜はばかりより船をいだして漕ぎくる。道にたむけする所あり。楫取してぬさたいまつらするに、幣のひんがしへちれば楫取の申し奉ることは、「この幣のちるかたにみふね速にこがしめ給へ」と申してたてまつる。これを聞きてある女の童のよめる、
「わたつみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やまずふかなむ」
とぞ詠める。このあひだに風のよければ楫取いたくほこりて、船に帆あげなど喜ぶ。その音を聞きてわらはもおきなもいつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。このなかに淡路のたうめといふ人のよめる歌、
「追風の吹きぬる時はゆくふねの帆手うちてこそうれしかりけれ」
とぞ。ていけのことにつけていのる。

廿七日、風吹き浪あらければ船いださず。これかれかしこく（八字誰も無 もおそれイ）歎く。男たちの心なぐさめに、からうたに「日を望めば都遠し」などいふなる事のさまを聞きて、ある女のよめる歌、

「日をだにもあま雲ちかく見るものを都へとおもふ道のはるけさ」。

又ある人のよめる。

「吹くかぜの絶えぬ限りし立ちくれば波路はいとゞはるけかりけり」。

日ひと日風やまず。つまはじきしてねぬ。

廿八日、よもすがら雨やまず。けさも。

廿九日、船出して行く。うらうらと照りてこぎゆく。爪のいと長くなりにたるを見て日を數ふれば、今日は子の日なりければ切らず。正月なれば京の子の日の事いひ出で丶、「小松もがな」といへど海中なれば難しかし。ある女の書きて出せる歌、

「おぼつかなけふは子の日かあまならば海松をだに引かましものを」

とぞいへる。海にて子の日の歌にてはいかゞあらむ。又ある人のよめるうた、

「けふなれど若菜もつまず春日野のわがこぎわたる浦になければ」。

かくいひつゝ漕ぎ行く。おもしろき所に船を寄せて「こゝやいづこ」と問ひければ、「土佐のとまり」とぞいひける。昔土佐といひける所に住みける女、この船にまじれりけり。そがいひけらく、「昔しばしありし所の名たぐひにぞあなる。あはれ」といひてよめる歌、

「年ごろをすみし所の名にしおへばきよる浪をもあはれとぞ見る」。

三十日、雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して阿波のみとを渡る。夜中なれば西ひんがしも見えず、男女辛く神佛を祈りてこのみとを渡りぬ。寅卯の時ばかりに、ぬ島といふ所を過ぎてたな川といふ所を渡る。からく急ぎて和泉の灘といふ所に至りぬ。今日海に浪に似たる物なし。神佛の惠蒙ぶれるに似たり。けふ船に乘りし日より數ふればみそかあまり九日になりにけり。今は和泉の國に來ぬれば海賊ものならず。

二月朔日、あしたのま雨降る。午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でゝ漕ぎ行く。海のうへ昨日の如く風浪見えず。黑崎の松原を經て行く。所の名は黑く、松の色は靑く、磯の浪は雪の如くに、貝のいろは蘇枋にて五色に今ひといろぞ足らぬ。この間に今日は箱の浦といふ所より綱手ひきて行く。かく行くあひだにある人の詠める歌、

「玉くしげ箱のうらなみたゝぬ日は海をかゞみとたれか見ざらむ」。

又船君のいはく「この月までなりぬること」と歎きて苦しきに堪へずして、人もいふことゝて心やりにいへる歌、

「ひく船の綱手のながき春の日をよそかいかまでわれはへにけり」。

聞く人の思へるやう、なぞたゞごとなると密にいふべし。「船君の辛くひねり出してよしと思へる事をえしもこそしいへ」とてつゝめきてやみぬ。俄に風なみたかければとゞまりぬ。

二日、雨風止まず。日ひとひ夜もすがら神佛をいのる。

三日、海のうへ昨日のやうなれば船いださず。風の吹くことやまねば岸の浪たちかへる。こ

れにつけてよめる歌、

「緒をよりてかひなきものは落ちつもる涙の玉をぬかぬなりけり」。

かくて、今日暮れぬ。

四日、楫取「けふ風雲のけしきはなはだあし」といひて船出さずなりぬ。然れどもひねもすに浪風たゝず。この楫取は日も得計らぬかたゐなりけり。この泊の濱にはくさぐさの麗しき貝石など多かり。かゝれば唯昔の人をのみ戀ひつゝ船なる人の詠める、

「よする浪うちも寄せなむわが戀ふる人わすれ貝おりてひろはむ」

といへれば、ある人堪へずして船の心やりによめる、

「わすれ貝ひろひしもせじ白玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ」

となむいへる。女兒のためには親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけむをと人いはむや。されども死にし子顔よかりきといふやうもあり。猶おなじ所に日を經ることを歎きて、ある女のよめるうた、

「手をひでゝ寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日ごろ經にける」。

五日、けふ辛くして和泉の灘より小津のとまりをおふ。松原めもはるばるなり。かれこれ苦しければ詠めるうた、

「ゆけどなほ行きやられぬはいもがうむをつの浦なるきしの松原」。

かくいひつゞくる程に「船疾くこげ、日のよきに」と催せば楫取船子どもにいはく「御船より

仰せたぶなり。あさぎたの出で來ぬさきに綱手はやひけ」といふ。この詞の歌のやうなるは楫取のおのづからの詞なり。楫取はうつたへにわれ歌のやうなる事いふとにもあらず。聞く人の「あやしく歌めきてもいひつるかな」とて書き出せればげに三十文字あまりなりけり。今日浪なたちそと、人々ひねもすに祈るしるしありて風浪たゝず。今し鷗むれ居てあそぶ所あり。京のちかづくよろこびのあまりにある童のよめる歌、

「いのりくる風間と思ふをあやなくに鷗さへだになみと見ゆらむ」

といひて行く間に、石津といふ所の松原おもしろくて濱邊遠し。又住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人の詠める歌、

「今見てぞ身をば知りぬる住のえの松よりさきにわれは經にけり」。

こゝにむかしつ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

「住の江に船さしよせよわすれ草しるしありやとつみて行くべく」

となむ。うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しき心ちしばしやすめて又も戀ふる力にせむとなるべし。かくいひて眺めつゞくるあひだに、ゆくりなく風吹きてこげどもこげどもしりへしぞきにしぞきてほとほとしくうちはめつべし。楫取のいはく「この住吉の明神は例の神ぞかし。ほしきものぞおはすらむ」とは今めくものか。さて「幣をたてまつり給へ」といふにしたがひてぬさたいまつる。かくたいまつれどももはら風やまで、いや吹きにいや立ちに風浪の危ふければ楫取又いはく「幣には御心のいかねば御船も行かぬなり。猶うれしと思ひ

たぶべき物たいまつりたべ」といふ。又いふに従ひて「いかゞはせむ」とて「眼もこそ二つあれ。たゞ一つある鏡をたいまつる」とて海にうちはめつればいとくちをし。さればうちつけに海は鏡のごとなりぬれば、或人のよめるうた、

「ちはやぶる神のこゝろのあるゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな」。

いたく住の江の忘草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら鏡に神の心をこそは見つれ。楫取の心は神の御心なりけり。

六日、澪標のもとより出でゝ難波につきて河尻に入る。みな人々女おきなひたひに手をあてゝ喜ぶこと二つなし。かの船酔の淡路の島のおほい子、都近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげてかくぞいへる、

「いつしかといぶせかりつる難波がた蘆こぎそけて御船きにけり」。

いとおもひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に心ちなやむ船君いたくめでゝ「船酔したうべりし御顔には似ずもあるかな」といひける。

七日、けふは川尻に船入り立ちて漕ぎのぼるに、川の水ひて悩みわづらふ。船ののぼることいと難し。かゝる間に船君の病者もとよりこちごちしき人にて、かうやうの事更に知らざりけり。かゝれども淡路のたうめの歌にめでゝ、みやこぼこりにもやあらむ、からくしてあやしき歌ひねり出せり。そのうたは、

「きときては川のほりえの水をあさみ船も我が身もなづむけふかな」。

これは病をすればよめるなるべし。ひとうたにことの飽かねば今ひとつ、
「とくと思ふ船なやますは我がために水のこゝろのあさきなりけり（しるべイ）」。
この歌は、みやこ近くなりぬるよろこびに堪へずして言へるなるべし。淡路の御の歌におとれり。ねたき、いはざらましものをとくやしがるうちによるになりて寝にけり。
八日、なほ川のほとりになづみて、鳥養の御牧といふほとりにとまる。こよひ船君例の病起りていたく惱む。ある人あざらかなる物もてきたり。よねしてかへりごとす。男どもひそかにいふなり「いひぼしてもてる」とや。かうやうの事所々にあり。今日節みすればいをもちゐず。
九日、心もとなさに明けぬから船をひきつゝのぼれども川の水なければゐざりにのみゐざる。この間に和田の泊りのあかれのところといふ所あり。よねいをなどこへばおこなひ（りイ三字く）つ。かくて船ひきのぼるに渚の院といふ所を見つゝ行く。その院むかしを思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には松の木どもあり。中の庭には梅の花さけり。こゝに人々のいはく「これむかし名高く聞えたる所なり。故惟喬のみこのおほん供に故在原の業平の中將の「世の中に絶えて櫻のさかざらは春のこゝろはのどけからまし」といふ歌よめる所なりけり。今興ある人所に似たる歌よめり、
「千代へたる松にはあれどいにしへの聲の寒さはかはらざりけり」。
又ある人のよめる、
「君戀ひて世をふる宿のうめの花むかしの香にぞなほにほひける」

といひつゝぞ都のちかづくを悦びつゝのぼる。かくのぼる人々のなかに京よりくだりし時に、皆人子どもなかりき。いたれりし國にてぞ子生める者どもありあへる。みな人船のとまる所に子を抱きつゝおりのりす。これを見て昔の子の母かなしきに堪へずして、

「なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくてくるが悲しさ」

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかゞあらむ。かうやうの事ども歌もこのむとてあるにもあらざるべし。もろこしもこゝも思ふことに堪へぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまる。

十日、さはることありてのぼらず。

十一日、雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに東のかたに山のよこをれるを見て人に問へば「八幡の宮」といふ。これを聞きてよろこびて人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。こゝに相應寺のほとりに、しばし船をとゞめてとかく定むる事あり。この寺の岸のほとりに柳多くあり。ある人この柳のかげの川の底にうつれるを見てよめる歌、

「さゞれ浪よするあやをば青柳のかげのいとして織るかとぞ見る」

十二日、山崎にとまれり。

十三日、なほ山崎に。

十四日、雨ふる。けふ車京へとりにやる。

十五日、今日車ゐてきたれり。船のむつかしさに船より人の家にうつる。この人の家よろこ

べるやうにてあるじしたり。このあるじの又あるじのよきを見るに、うたておもほゆ。いろいろにかへりごとす。家の人のいで入りにくげならずゐやゝかなり。
十六日、けふのようさりつかた京へのぼるついでに見れば、山崎の小櫃の繪もまがりのおほちの形もかはらざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちてゆきし時よりはくる時ぞ人はとかくありける。これにもそれにもかへりごとす。よるになして京にはいらむと思へば、急ぎしもせぬ程に月いでぬ。桂川月あかきにぞわたる。人々のいはく「この川飛鳥川にあらねば、淵瀬更にかはらざりけり」といひてある人のよめる歌、

「ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり」。

又ある人のいへる、

「あまぐものはるかなりつる桂川そでをひでゝもわたりぬるかな」。

又ある人よめる、

「桂川わがこゝろにもかよはねどおなじふかさはながるべらなり」。

みやこのうれしきあまりに歌もあまりぞおほかる。夜更けてくれば所々も見えず。京に入り立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもましていふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなればのぞみて預れるなり。さるはたよりごとに物も絶えず得

させたり。こよひかゝることゝ聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど志をばせむとす。さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに千年や過ぎにけむ、かた枝はなくなりにけり。いま生ひたるぞまじれる。大かたの皆あれにたれば、「あはれ」とぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子のもろともに歸らねばいかゞはかなしき。船人も皆子だかりてのゝしる。かゝるうちに猶かなしきに堪へずして密に心知れる人といへりけるうた、

「うまれしもかへらぬものを我がやどに小松のあるを見るがかなしさ」

とぞいへる。猶あかずやあらむ、またかくなむ、

「見し人の松のちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや」。

わすれがたくくちをしきことおほかれどえつくさず。とまれかくまれ疾くやりてむ。

土佐日記終

蜻蛉日記

蜻蛉日記卷上

かくありし時過ぎて（村上御時天暦八年）世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで世に經る人ありけり。かたちとても人にも似ずて、たましひもあるにもあらで、かうものゝやうにもあらであるもことはりと思ひつゝ、唯臥し起き明し暮すまゝに、世の中におほかたふる物語のはしなどを見れば世に多かるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上まで日記して珍しきさまにもありなむ。天下の人の品たかきやとはむためしにもせよかしと覺ゆるも過ぎにし年月ごろの事もおぼつかなかりければ、さてもありぬべき事なむ多かりける。さてあのけ（二字よなイ）かりしすきごとゞもの、それはそれとして、かしはぎの木高きわたり（藤原兼家）よりかくいはせむと思ふ事ありけり。例の人はあないする便もしはなま女などしていはする事こそあれ。此は親（藤原倫寧）とおぼしき人にたはぶれにもまめやかにもほのめかしゝに、ひけきこととしいひつぎをも知らずがほに、馬にはひ乗りたる人して打ちたゝかす。たれなどいはするはおぼつかなからず騒いたれば、もて煩ひ取り入れてもて騒ぐ。みなばかみなども例のやうにもあらず、いたらぬ所なしと聞きふるしたる手もあらじと覺ゆるさまでわしければ、いとぞあやしき。ありける事は、

一音にのみ聞けばかなしなほとゝぎすことかたらむと思ふこゝろあり」(家集)

とばかりぞある。いかにかへり事はすべてくやあるなどさだむるほどに、かたゐなかなる人

ありて猶とかしこさ(かま)りてこゝら(かゝ)すれば、

「かたらはむ人あき(ぎ)さとにはほとゝぎすかひなかるべきこゑなふるしそ」(拾遺 若)

これを初めにて、またまたもおこすれどかへりごともせざりければ、

「おぼつかな音なき瀧のみづなれやゆき(かく)へも知らぬ瀬をぞ尋ぬる」

これを今これよりといひたれば知れたるやうなり。やがてかくぞある、

「人知れずいまやいまやと待つほどにかへりこぬこそ侘しかりけれ」

とありければ、例の人(俗説者 若父)「かしこし。をさをさしきやうにも聞えむこそよからめ」とて、さる

べき人してあるべきに書かせてやりつ。それをしもまめやかにうち喜びて繁う通はす。又そ

へたる文見れば、

「濱千鳥あともなぎさにふみ見ればわれをこす波うちやけつらむ」。

この度も例のまめやかなるかへりごとする人あれば紛はしつ。又もあり。「まめやかなるや

うにてあるもいと思ふやうなれど、このたびさへ無うばいとつらうもあるべきかな」などま

めや(かな脱)文のはしに書きて添へけり。

「いづれともわかぬ心はそへたれどこたびはさきに見ぬ人のがり」

とあれば例の紛はしつ。かたればまめなる事にて月日は過ぐしつ。秋つ方になりにけり。そ

へたる文に心さかしらついたるやうに見えつるうさ（イうた）になむねんじつれどいかなるにかあらむ、

「しかの音も聞えぬ里に住みながらあやしく逢はぬ目（驗カを）も見るかな」

とあるかへりごと、

「高砂のをのへわたりにすまふともしかさめぬべきめとは聞かぬを」。

げにあやしのことやとばかりなむ。又程經て、

「あふ坂の關やなになり近けれど越えわびぬればなげきてぞ經る」

かへし、

「越えわぶるあふ坂よりも音に聞くなこそを（新作は）かたき關としらなむ」（通釋得）

などいふ。まめ文かよひかよひて、いかなるあしたにかありけむ、

「夕ぐれの流れくるまをまつほどになみだおほゐの川とこそなれ」。

かへりごと、

「思ふことおほゐの川の夕ぐれはこゝろにもあらずなかれこそすれ」。

又三日ばかりのあしたに、

「しのゝめにおきけるそらにおもほえで怪しく露と消えかへりつる」

かへし、

「さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめするわれは何よ（カなり）」

かくてあるやうありてしばし旅なる所にあるにものしてつとめて「今日だにのどかにと思ひつるを、びなげなりつれば。いかにぞ身には山がくれとのみなむ」とあるかへりごとに、たゞ、

「思ほえぬかきほにをれは撫子のはなにぞつゆはたまらざりけり（るカ）」

などいふ程に九月になりぬ。つごもりがたにしきりて二夜ばかり見えぬほど文ばかりあるかへりごとに、

「消えかへる露もまだひぬ袖の上に今朝はしぐるゝ空もわりなし」。

たちかへり、かへり事、

「おもひやる心の空になりぬれば今朝（は脱渊）時雨ると見ゆるなるらむ」

とて、かへり事書きあへぬほどに見えたり。又ほどへて見えをこたるほど、雨など降りたる日ぐれに「來む」などやありけむ、

「かしはぎの杜の下草くれごとになほたのめとやもるを見る見る」（ル）（謹洲）。

かへり事はみづから來て紛はしつ。かくて十月になりぬ。こゝにものいみなるほどを心もとなげにいひつゝ、

「なげきつゝかへす衣のつゆけきにいとゞ空さへしぐれ添ふらむ」（兼家）。

かへし、いとふるめきたり。

「思ひあらばひなましものをいかでかは返す衣のたれもぬるらむ」

とあるほどに、わがたのもしき人（倫寧長能 著者父兄）みちのくにへ出で立ちぬ。時はいとあはれなるほどなり。人（兼家）はまだ見馴るといふべきほどにもあらず。見ゆることはたゞささ（一字衍字）しくめるにのみあり。いと心細く悲しきことものに似ず。見る人もいと哀に忘るまじきさまにのみ語らふめれど、人の心はそれに從ふべきかはと思へば、唯ひとへに悲しう心ぼそき事をのみ思ふ。今はとて皆出で立つ日になりて行く人もせきあへぬまであり。き（止カ）まる人はた況いていふ方なく悲しきに、時違ひぬるといふに（まカ）までもえ出でやらず。又みなる硯に文をおし卷きてうち入れて、又はろはろとうち泣きて出でぬ。しばしは見む心もなし。みいではてぬるにためらひてより（てイ 衍）何事ぞと見れば、

「君をのみたのむたび（カ）なるこゝろには行く末遠くおもほゆるかな」（父倫寧）

とぞある。見るべき人（兼家）見よとなめりとさへ思ふにいみじう（かなしうイ 衍）て、ありつるやうにおきて、とばかりあるほどにものしたり。目も見合せず思ひいりてあれば「などかよのつねのことにてそあれ。いとかうしもあるはわれを頼まぬなめり」などあへしらひ硯なる文を見つけて「哀」といひて、門出の所に、

「我をのみたのむといへばゆくすゑのまつの千代をもきみこそは見め」（兼家）

となむ。かくて日の經るまゝに旅の空を思ひやるだち（にカ）いとあはれなるに、人（兼家）の心もいとたのもしげには見らん（二字にカ）ずなむありける。しはすになりぬ。横河にものするとありて上りぬ。人「雪に降りこめられていと哀れに戀しき事多くなむ」とあるにつけて、

「氷るらむよかはの水に降る雪もわがごと消えてもの思はじ（道綱）
などいひてその年はかなく暮れぬ。』正月（天暦九年）ばかりに二三日見ぬ程にものへ渡らむとて「人こば取らせよ」とて書き置きたる、
「知られねば身を鶯のふりいでつゝなきてこそ行け野にも山にも」。
かへりごとあり、
「うぐひすのあたにて行かむ山く（かべ）にもなく聲聞かば尋ねばかりぞ」
などいふうちよりなほもあらぬことありて春夏なやみ暮して、八月つごもりにとかうものしつ（道綱誕生）。その程の心ばへしも懇なるやうなりけり。さて九月ばかりになりていでにたるほどに箱のあるを手まさぐりにあけて見れば、人のもとにやらむとしける文あり。あさましさに見てけりとだにしられむと思ひて書きつく。
「うたがはしほかに渡せるふみ見ればこゝやとだえにならむとすらむ」
など思ふほどに、心えなう十月つごもり方に三よ志きりて見えぬ時あり。つれなうてしばし試みるほとになどけしきあり。これより夕さりつかた「うちのかたるまじかりけり」とて出へかるに心をかたて人をつけて見すれば「まちの小路なるそこそこになむとまり給ひぬる」とて來たり。さればよといみじう心憂しと思へどもいはむやうも知らである程に、二三日ばかりありてあかつきがたに門も叩く時あり。さなめりしと思ふに、憂くてあけさせねば、例の家とおぼしき所にものしたり。つとめて猶もあらじと思ひて、

「歎きつゝ一人ぬる夜の明くるまはいかに久しきものとかは知る（一選擇得）」

と例よりはひきつくろひて書きて、うつろひたる菊にさしたり。かへりを明くるまでも試みむとしつれど、とみなるめし使の來あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは、

「げにやげに冬の夜ならぬ眞木の戶に遲くあくるは侘しかりけり。

さてもいとあやしかりつるほどにことなしびたる、しばしは忍びたるさまにこうぢに」などいひつゝぞあるべきをいとしう心つきなく思ふ事ぞ限りなきや。『年かへりて三月（天明十年）ばかりにもなりぬ。桃の花などやとり設けたりけむ。待つに見えず。今一かたも例は立ちさらぬ心ちに今日ぞ見えぬ。さて四日のつとめてぞ皆見えたる。「夜べより待ちくらしたるものども猶あるよりは」とて、こなたかなたとり出でたり。志ありし花を（元如）おひ（二字折りてカ）うちの方よりあるを見れば、心たゞにしもあらで手ならひにしたり。

「待つほどのきのふ過ぎにし花のえは今日折る事ぞかひなかりける」

と書きて、よしやにくきにと思ひてかくしつるけしきを見て、ばひとりて返し玄たり。

「みちとせをみつべきみには年毎にすくにもあらぬ花と知らせむ」

とあるを今一夜だにも聞きて、

「花によりすくてふ事のゆゝしきによそながらにて暮してしなり」。

かくて今はこのまちの小路にわざと色に出でにたり。本は人なだにあやし悔しと思ひげなる時がちなり。いふ方なうところ（心ちカ二字）愛しと思へどもなにわざをかせむ。この今一かた（[illegible]）のいで

入りするを見つゝあるに、今は心安かるべき所へとてゐてわたす。とまる人まして心ぼそし。影も見えがたかべい事などまめやかに悲しうなりて、車寄するほどにかくいひやる、

「などかゝる歎きはしげさまさりつゝ人のみかゝる宿となるらむ」

かへりごとは男ぞしたる、

「思ふてふ我が言の葉をあだびとのしげきなげきにそへてうらむな」

などいひ置きて皆わたりぬ。思ひしもしるく只ひとり臥し起きず大ひ(イかた)の世のうちあはぬことはなければ唯人の心の思はすなるを、我のみならず、年ごろの所にも絶えにたなりと聞きて、文など通ふ事ありければ五月三四日のほどにかくいひやりぬ、

「底にさへよ(かか)るといふなるまこも草いかなるさと(かは)に根をとゞむらむ」(返闕)。

かへし、

「まこも草刈るとは淀のさはなれや根をとゞむてふ澤はそことか」(家集)。

六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出して獨言に、

「我が宿のなげきのしたは色ふかく(秋またでイ)うつろひにけりながめふるまに」

などいふほどに七月になりぬ。絶えぬと見ましかばかりに來るには勝りなましなど思ひ續くるをりに、物したる日あり。物もいはねばさうざうしげなり。前なる人ありし下葉の事を物の序にいひ出でたれば聞きてかくいふ、

「をりならで色つきにけるもみぢ葉はときにあひてぞいろまさりける」

とぞ書きつくる書きつくる（五字衍か）。かくわり續き絶えずはくれども、心のとくる夜なさに、荒れ勝りつゝ來ては氣色惡しければ、たふるゝ（ひたぶるか）にたち山と立ち歸る時もあり。近き隣に心ば へ知れる人出づるに合せてかくいへり、

「藻鹽やく烟の空に立ちぬるはふすべやえつるくゆる思ひに」

などとなり。さかしらするさ（まかで）ふすべかはして、この頃は殊に久しう見えず、たゞなりし折はさしもあらざりしを、かくこゝろ（二字心ナ下同か）わか（か恐衍）くがれて いかなるものとうか（三字かそこイか）にうち置きたるものと（のか）見えぬ擗なむありける。かくて止みぬらむそのものと思ひ出づべきたよりだになくぞありけるかしと思ふに、十日ばかりありて文あり。なにくれといひて「帳の柱にゆひつけたりし小弓の矢取りて」とあれば、これぞありけるかしと思ひて解きおろして、

「思ひ出づる時もわらじとおもへども（後拾作みれつれど）やといふにこそ驚かれぬる（るれか）」

とてやりつ。かくて絶えたるほど我が家はうちより參りまかづる道にして（かも）あれば、夜なか曉とうちしはぶきてうち渡るも聞かじといへどもうちとけたるいも寢られず。夜長うしてねぶる事なければ、さながらと見聞く心ちは何にかは似たる。今はいかで見さ（きか）かずだにありにしがなと思ふに「昔すきごとせし人も今はおはせずとか」など人につきて聞えごつを聞くを、ものしうのみ覺ゆれば、日くれば（ぬかぬか）なしうのみ覺ゆ。子供あまたありと聞く所もむげに絶えぬと聞くあはれましていかばかりと思ひてとぶらふ。九月ばかりの事なりけり。あはれなど（隠し脱か）けく書きて、

「吹く風につけてもとはむさゝがにの通ひしみちは空に絶ゆとも」。

かへり、殊にこまやかに、

「色かはるこゝろと見ればつけてとふ風ゆゝしくも思ほゆるかな」

とぞある。かくて常にしもえいなな（カび）はてゞ時々見えて冬にもなりぬ。臥し起きは唯幼き人をもて遊びて「いかにして網代の氷魚にこととはむ」とぞ心にもあらでうちいはるゝ。」年また越えて（天徳元年）春にもなりぬ。この頃讀ん（カむ）とてもてわりく文、取り忘れて（カを祕）んなを取りにおこせたり。包みてやる紙に、

「ふみおきしうらも心もあれたればあとをとゞめぬ千鳥なりけり」（道綱）。

かへり事をさかしらに立ちかへり、

「心あるとふみかへすとも濱千鳥うらにのみこそあとはとゞめゝ」（兼家）。

つかひあれば、

「濱千鳥あとのとまりを尋ぬとてゆくへも知らぬうらみをやせむ」

などいひつゝ夏にもなりぬ。この時の所に子生むべきほどになりてよきかたはこひて、一つ車に這ひ乗りて、ひときやう響き續きていと聞きにくきまでのゝしりて「このかどの前よりしもわたるものか。我は我にもあらず、物だにいはねば見る人仕ふより始めて、いと胸痛きわざか。世に道しもこそはあれ」などいひ罵るを聞くに、たゞ（カも）し死ぬるものにもがなと思へどころ（カ心）にしかなはねば今よりのち猛くはあらずとも絶えて見えずだにあらむ、いみじう心そ

かしと思ひてあるに、三四日ばかりありて文あり。あさましうつへたましと思ふ思ふ見れば、「この頃こゝにわづらはるゝ事ありて見參らぬを昨日なむたひらかにものせられめる。けがらひもや忌むとてなむ」とぞある。あさましうめづらかなる事限なし。たゞ「賜はりぬ」とてやりつ。使こ人問ひければ「男君になむ」といふを聞くにいと胸ふさがり。三四日ばかりありてみづからいともつれなく見えたり。何か來たるとて見入れねば、いとはしたなくて歸ることゝ度々になりぬ。七月になりてすまひの頃古き新しきと一くだりづゝ引き包みて「これせさせ給へ」とてはあるものか。見るに目くるゝ心ぞする。古代の人は「あないとほし。よしこにはえ仕うまつらずこそはあらめ」。なま心ある人などさし集りて「すゞろはしや。えせでわろからむをだにこそ聞かめ」など定めてかへしやりつるもしるく、こゝかしこになむもてちりてすると聞く。かしこにもいと情なしとかやあらむ。二十よ日音づれもなし。いかなるをりにかあらむ、文ぞある。「參りこまほしけれどつゝましうてなむ。たしかにことあらばおづおづも」とあり。かへり事もすまじと思ふもこれかれ「いと情なし。あまりなり」などものすれば、

「ほに出でゝいはじやさらにおほよその靡く尾花に任せても見む」。

たちかへり、

「ほに出でばまづ靡きなむ花ずゝきこちてふ風の吹かむまにまに」。

使あれば、

「嵐のみ吹くめる宿にはなずゝき穂に出でたりとかひやなからむ」
など、よろしういひなして又見えたり。ぜざいの花いろいろに咲き亂れたるを見やりて臥しながらかくぞいはるゝ、かたみに恨むるきさまのことゞもあるべし、
「百草に亂れて見ゆるはなの色は置く志ら露のおくにやあるらむ」
とうちいひたれば、からかくいふ、
「身のあきを思ひ亂るゝ花の上にうちのこゝろはいへばさらなり」
などいひて、例のつれなうよぶけてねまちの月の山の端出づるほどに出でむとするけしきあり。さまでもありぬべき夜かなと思ふけしきや見えけむ、「とまりぬべき事あらば」などいへどさしも覺えねば、
「いかにせむ山の端にだにとゞまらでこゝろも空に出でむ月をば」。
かへし、
「久方の空にこゝろの出づといへば影はそらにもとまるべきかな」
とてとゞまりにけり。さて又のあきのやうなることとして二日ばかりありて來たり。「一日の風はいかにと誰む。例の人はとひてまし」といへばげにとや思ひけむ、ことなし。
「言の葉は散りもやするとゞめ置きて今日はみからもとふにやはあらぬ」
といへば、
「散りきてもとひぞ志てまし言の葉をこちはさばかり吹きしたよりに」。

かくいふ、

「こちといへばおほろふなりし風にいでつけてはとはむわたらなだてに」。

まけじ心にて又

「散らさじとをしみ置きける言の葉をきながらだにぞ今朝はとはまし」。

これはさもいふべしとや人ことわりけむ。又十月ばかりにそれはしもやんごとなき事ありとて出でむとするに、時雨といふばかりにもあらず、あやにくにあるに猶出でむとす。あさましさにかくいはる、

「ことわりのをりとは見れど小夜更けてかくは時雨の降りははつべき」。

といふに、強ひて人あらむやは。らうやうなるほどに、かのめでたき所には子産みてしよりすさまじげになりてたべかめれば人にくかりし心思ひしやうは、いのちはあらせで我が思ふやうにおし返しものを思はせばやと思ひしをさやうになりもていて、はてはうみのゝしりし子さへ死ぬものは、そんわうのひかみたりし子の落しだねなり。いふかひなくわろき事限りなし。唯この頃の知らぬ人のもて騒ぎつるにかゝりてありつるをにはかせにかくなりぬれば、いかなるうちちかはしけむ。我が思ふには今少しうちまさりて歎くらむと思ふに今に胸はわきたる。今ぞ例の所にうちはらひてなど聞く。されどこゝには例のほどにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふほどに、こゝなる人かたことなどするほどになりてぞある。いへとては必「今來む」といふを聞きもたりてまねびありてかく。かくて

又心の解くるにかよなくなけわかるゝみかになまさかしとからなどする人は、若きつかみそらになどかくではいふ事もあれど、人はいとつれなう、我やわしきなどうらもなう、罪なきさまにもてないたれば、いかゞはすべきなど萬に思ふ事のみ繁きを、いかでつぶつぶといひしらするものにもがなと思ひ亂るゝ時、心づきなきや、胸うちさめ若わてものいはれずのみあり。なほ書きつゞけても見せむと思ひて、

「おもへたゞ　むかしもいまも　わがこゝろ　のどけからでや
はてぬべき　みそめしあきは　ことの葉の　うすいろにや
うつろふと　なげきのゑたに　なげかれき　ふゆはくもゐに
わかれゆく　ひとなをしむと　はつしぐれ　くもりもあへず
降りそぼち　こゝろぼそくは、　わりしかど　きみにはしもの
わするなと　いひおきつとか　聞きしかば　さりともと思ふ
ほどもなく　とみにはるけき　わたりにて　白てくもばかり
わりしかば　こゝろそらにて　經しほどに　きみみかぎりも疑き
絶えにけり　またふるさとに　かりがねの　歸るつらにやと
おもひつゝ　ふれどかひなし　かくしつゝ　我が身むなしく
せみの羽の　いましもひとの　うすからず　なみだのかはの
はやくより　かくわさましき　そらゆゑに　ながるゝことも

絶えねども
かくてのみ
水のあわの
みちのくの
またでやは
おもひつゝ
經べき身を
志かすがに
うらもなく
かひもなし
おもふまに
ひとりねの
たびなりと
あまぐもは
ことの葉を
聞くごとに
たゝへても

いかなるつみか
ひとのうき瀬に
消えば消えなむと
つゞじのをかの
はする（三字惇本絶ゆべき）
なげくなみだの
なぞやと思へど
こひしかるべき
なれしこゝろを
おもひ出でなき
やまとつもれる
かずにしとらは
おもふものから
かへりしときの
さもやとまつの
ひとわろくなる
みるめもよせぬ

おもるらむ
たゞよひて
おもへども
くまつゞじ
あふくまの
ころも手に
あふばかり
からごろも
おもひては
われ（イ例）やせむ
志きたへの
つきぬべし
かぜ吹きて
なぐさめに
みとりでの
なみだのみ
みその浦は

ゆきもはなれず
つらきこゝろは
かなしきことは
くるほどをだに
あひ見てだにと
かゝらぬ世にも
かけはなれては
うち着てひとの
うき世をされる
と思ひかく思ひ
まくらのちりも
なにか絶えぬる
ひと目も見えじ
今こむといひし
たえずまねぶも
わが身をうみと
かひもあらじと

知りながら　いのちあらばと　たのめこし　ことばかりこそ
しらなみの　たちもよりこば　問はまほしけれ」

と書きつけて二階の中に置きたり。例のほどにものしたれどそなたにも出でずなどあれば、居わづらひてこの文ばかりをとりて歸りにけり。さてかれよりかくぞある、

「折りそめし　ときのもみぢの　さだめなく　うつろふいろは
さのみにぞ　逢ふわきごとに　常ならぬ　なげきのしたの
木の葉には　いとゞいひ置く　はつしもに　ふかきいろにや
なりにけむ　おもふおもひの　絶えもせず　いつしかまつの
みどり子を　行きては見むと　するがなる　田子のうらなみ
立ちよれど　ふじのやまべの　けぶりには　ふすぶることの
絶えもせず　あまぐもとのみ　たなびけば　絶えぬ我が身は
しらいとの　まひくるほどを　おもはじと　あまたのひとの
せにすれば　身ははしたかの　すゞろにて　なつくるやどの
なければぞ　ふるにかへる　まにまには　飛びくれ事の
ありしかば　ひとりふすまの　とこにして　寝ざめのつきの
眞木の戸に　ひかりのこさず　もりてくる　かげだに見えず
ありしより　うとむこゝろぞ　つきそめし　たれかよづまと

あかしけむ　いかなるいろの　おもきぞと　いふはこれこそ
つみならし　とはあふくまの　あひも見で　かゝらぬひとに
かゝれかし　なにのいは木の　身ならぬは　おもふこゝろも
いさめぬに　うらのはまゆふ　いくかさね　いへだてはてつる
からころも　なみだのかはに　そぼつとも　おもひしいでば
たきもの丶　この目ばかりは　かわきなむ　かひなきことは
甲斐のくに　つみのみに　荒るゝ馬の　いかでかひとは
かけとめむと　おもふものから　たらちねの　親とか知るらむ
かたかひの　こまやこひつゝ　いなかせむと　おもふばかりぞ
あはれなるべき」

とか。使あればかくものす、

「なつくべき人も放てばみちのくのうまやかぎりにあらむとすらむ」。

いかゞ思ひけむたちかへり、

「われがなををふりの駒のあればこそなつくにつかぬ身とも知られめ」。

かへ、しまた、

「こまぞげになりまさりつゝなつけぬをこ繩絶えずぞ頼み來にけり」。

又、かへし、

「白川の關のせけばやこまうくてあまたの日をばひき渡りつる」。

あさてばかりは逢坂とぞある。時は七月五日のこと、ながき物忌にさし籠りたるほどに、かくありしかへりごとには、

「天の河七日を契るこゝろあらばはしあひばかりのかげを見よとや」。

ことはかり（二字わかり）にもや思ひけむ（天徳四年）。すこし心をとめたるやうにて月頃（應和元年）になり行く。』めざましと思ひし所（町の家）は今は天下のわざを玄騒ぐと聞けば（以下理いみあれば流布本に依る）心安し。むかしよりの事をばいかゞはせむ。堪へがたくとも、我が宿世の怠にこそあめれなど心をちゞに思ひなしつゝあり經るほどに、少納言の年經て、よつの玄なになりぬれば、つかさめしにいとねぢけたるをのゝ大輔などゝいはれぬれば、世の中をいとうとましげにて、こゝかしこ通ふより外のありきなどもなければ、いとのどかにて二三日などあり。さてかく心もゆかぬつかさのかみの宮よりかくのたまへり、

「みだれ糸のつかさ一つになりてしもくる事のなど絶えにたるらむ」。

御かへり、

「絶ゆといへばいとぞ悲しき君により同じつかさにくるかひもなく」。

又立ちかへり、

「夏引のいとことわりやふためみめよりありくまに程の經るかも」。

御かへり

「泣くばかりありてこそあれ夏引のいとまやはなき一目二目に」。

又宮より、

「君と我猶忘らいとのいかにしてうきふしなくて絶えむとぞ思ふ。

ふためみめはげに少くしてけり。いみあればば（心安し以下十六行流布本無し）とゞめつ」とのたまへる御かへり、

「世をふとも契りおきてし中よりはいとゞゆゝしき事も見ゆらむ」

と聞えらる。その頃五月二十日よるばかりより四十九日の忌たがへむとて、ありたカありき

の所にわたりたるに、宮たゞ垣をつ（へ一説カ點）だつる所にわたり給ひてあるにみな月ばかりかけて雨

いたう降りたるに、たれも降りこめられたるなるべし。こなたにはあやしき所なればもりぬ

るさわぎをするに、かくのたまへるぞいとゞものくるほしき、

「つれづれのながめのうちにそゝぐらむことのすぢこそをかしかりけれ」。

かへり、

「いづこにもながめのそゝぐころなれば世にふる人はのどけからじを」。

又、のたまへり、「のどけからじとか、

天の下騒ぐこゝろもおほみづにたれもこひ路にぬれざらめやは」。

御かへり、

「世とともにかつみる人の戀路をもほす世あらじと思ひこそやれ」。

又、宮に、

一しりもゐぬ君はぬるらむつねに住むところには又戀路だになし。
さもけしからぬ御さまかな」などいひつゝ諸共に見る。おまゝに例の通ひ所にものしたる日
例の御文あり。「おはせず」といへは「猶とのみのたまふ」とて入れたるを見れば、
「とこなつに戀しきことや慰むきみがかきほに折ると知らずや」。
さてもかひなければまかりぬるとにある。』さて二日ばかりありて見えたれば、「これさて
なむありし」とて見すれば、「程經にければびんなし」とて「唯この頃は仰せでともなきこと」
と聞えられたれば、かくのたまへる、
「水增りうらもなぎさのころなれば千鳥のあとをふみはまどふる
ところ見つれ。うらみ給へりわりなき。みづからとあるは誠か」と女手にかき給へり。男
の手にてこそ苦しけれ。
「浦がくれ見ることかたき跡ならば汐干をまたむからきわざかな」。
又、宮、
「うらもなくふみやる跡をわたつ海の汐の干るまも何にかはせむ
とこそ思ひつれ。ことざまにもはた」とあり。かゝるほどにむらひのほども過ぎぬらむ。た
なばたは明日ばかりと思ふ。忌も三十日ばかりになりにたり。日頃なやましうして亥はぶ
きなどいたうせらるゝを物のけにやあらむ、加持も試みむ、せばき所のわりなく暑きころな
るを、水いものする山寺へ上る。十五六日になりぬればぼになどするほどになりにけり。

見ればあやしきさまに荷ひいたゞき、さまざまにいそぎつゝ集まるを諸共に見て、あはれがりも笑ひもす。さて心ちもことなることなくて忌も過ぎぬれば京に出でぬ。秋冬はかなう過ぎぬ。』年（[illegible]）かへりて（[illegible]）でふこともなし。人の心のことなる時は、萬おいらにかぞありける。このついたちよりぞ殿上ゆるされてある。みそぎの日例の宮より物見ければその車に乗らむとのたまへり。御文の端にかゝる事あり、

「わがとしの　　　ほんのにかく」。

例の宮にはおはせぬなりけり。まちの小路わたりかとてまゐりたれば「上なむおはします」といひけり。まつ硯こひてかく書きて入れたり、

「君がこのまちの南にとみにおそきはるにはいまだたづねまゐれる」

とて諸共に出で給ひにける。』そのころはひすぎてぞ例の宮にわたり給へるに、まゐりたればこぞも見しに花おもしろかりき。薄むらむら茂りていとほそやかに見えければ「これ堀りわかたを（ばせ）給はゞすこし給はらむ」と聞えおきてしを、程へて河原へものするに、諸共なれば「これぞかの宮かし」などいひて、人を入る。「まゐらむとするに「をりなきる（かれ）いのあれからなむ。一日とりまうす。」薄聞えてとさぶらはむ人にいへ」とて引き過ぎぬ。はかなきわらべなれば、ほどなくかへりたるに「宮よりすゝき」といへば、見れば、なり（かが）びつといふものにうるはしう堀りたてゝ青き色紙に結びつけたり。見ればかくぞ、

「はに出でば道ゆく人も招ぐべきやどのすゝきをほるがわりなき（さ）」。

いとをかしう(ゐ)この御かへりはいかゞ。忘るゝほど思ひやればかくてもありなむ。されどさきざきもいかゞとぞ覺えたるかし。(康保元年)春うち過ぎて夏ごろとのえ(がゐ)がちなるうちず(ゞ)みにつとめて一日ありてくるれば參りなどするをあやしうと思ふに、ひぐらしの初聲聞えたり。いとあはれと驚かれて、

「あやしくもよるの行くへを知らぬかな今日ひぐらしの聲は聞けども」

といふに出でがたかりけむ(家正)し(一字衍)かし。かくてなでふ事なければ、人の心を猶たゆみなたり(三字ならたのみ)にたり。月夜の頃よからぬ物語して、あはれなるさまのことゞも語らひてもありしころ思ひ出でられて(もの)しければかくいはる、

「くもり(がち)夜の月と我が身の行く末のおぼつかならさ(かさ)はいづれまされり」。

かへりごとたはぶれのやうに、

「敎へける月は西へぞ行くさきは我のみこそは玄かる(べしかる)かりけれ」

などたのもしげに見ゆれど、我が家とおぼしき所はことになんめれば、いと思はずにのみぞ世はありける。さいはひある人のためには年月見し人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはかなくて思ふことのみ繁し。さいふいふも女親といふ人(附著)あるかぎりはありけるを、久しうわづらひて秋の初のころはひむなしくなりぬ。さらにせむかく(かた)なくわびしき事のよのつねの人にはまさりたり。あまたある中にこれはおくれじおくれじと惑はるゝもしるくいかなるにかあらむ。足手など唯すくみにすくみて絶え入るやうこ(にかず)す。さいふいふものを

語らひおきなどすべき人は京にありけり。山寺にてかゝるめは見れば幼き子を引きよせて僅にいふやうは「われはかなくて死ぬるなめり。かしこに聞えむやうはおのがうへをばいかにもいかにもな知り給ひそ。この御後の事を人々のものせられむうへにもとぶらひものしたまへと聞えよ」とて、いかにせむとばかりいひてものもいはれずなりぬ。日ごろ月ごろわづらひてかくなりぬる人を、今はいふかひなきものになして、これにぞ皆人はかゝりて、ましていかにせむよとからはと、泣くがうへに又泣き惑ふ人多かり。ものはいはねどまた心はあり。目は見ゆる程にいたはしと思ふべき人よりきて「親は一人やはある。などかくはあるぞ」とてゆく湯藥をせめて入るれば、のみなどして見などなほりもてゆく。さて猶思ふにもいきたるまじき心ちするは、この過ぎぬる人わづらひつる日ごろものなどもいはず、唯いふことゝては「かくものはかなくてありふるを夜晝歎きにしかば哀れいかに志給はむずらむ」としばしは息のしたにもものせられしを、おもひ出づるに、かうまでもあるなりける。人聞きつけてものしたり。我はものも覺えねば知りも知られず。人そにあひて「志かじかなむものし給ひつる」と語れは、うち泣き、けがらひも忌むまじきさまにありければ、いとびんなかるべしなどみがものして、立ちながらなむそのほどのありさまはしもいと哀れに志あるやうに見えけり。かくてとかうものすることなどいたづら人多くて皆志はてつ。今はいとあはれなる山寺につどひてつれづれとあり。よる目もあはぬまゝに歎きあかしつゝ山づらを見れば霧ぞげに麓をこめたり。京もげにたがもとへかは出でむとすらむ。いで猶みながら死なむと思

へど、生くる人ぞいとつらきや。』かくて十よ日になりぬ。そうどもねぶつのひまに物語するを聞けば、「このなくなりぬる人のあらはに見ゆる所なむある。さて近くよれば消え失せぬなり。遠うては見ゆなり。いづれの國とかやみえくちの島となむいふなる」など口々語るを聞くに、いと知らまほしう悲しう覺えてかくぞいはるゝ、

「ありとだによそにても見む名にしおはゞわれかぎりせよ耳くらくの山」

といふをせうとなる人聞きて、それもなくなく、

「いづことか音にのみ聞くみゝくらの島がくれにし人をたづねむ」。

かくてあるほどに立ちながらものして人に問ふめれど、唯今は何心もなきに、からひの心もとなき事おぼつかなき事などむつかしきまで書きつゞけてあれど、物覺えざりしほどの事なればにや、誠にいそがねど心にしまかせねば今日皆出で立つ日になりぬ。こし時は膝に臥し給へり人をいかでなりぬこしか安らかにと思ひつゝ、わがみはあせになりつゝさりともと思ふ心添ひてたのもしかりき。にたみはいとやすらかにてあさましきまでくつろかにのこがれたるにも道すがらいみじう悲し。おりて見るにもさらにも覺えず悲しく諸共に出でゐつゝつくろはせて草などもわづらひしより初めてうち捨てたりければ、生ひこりていろいろに咲き亂れたり。わざとの事なども皆おのとりどりすれば我はたゞつれづれとながめをのみして「一むらすゝきむしの音の」とのみぞいはるゝ。

「手ふれねど花はさかりになりにけりとゞめおきける露にかゝりて」

などぞ覺ゆる。これかれぞ殿上などもせねばけがらひも一つに志なしためれば、己がじゝひきつぼねなど志つゝゐめるなかに我をのみぞまぎる（過ぐる歟）ことなくてよはねぶつの聲聞きはじむるより、やがて泣きのみあかさる。四十九日のこと誰も闕く事なくて家にてぞする。我が知る人大かたの事を行ひためれば人々多くさしあひたり。我が志をば佛をば書かせたる。その日過ぎぬればみなおのがじゝいきあかれぬ。まして我が心ちは心細うなりまさりていとゞやる方なく、人はかう心細げなるを思ひてありしよりは繁う通ふ。さて寺へものせし時、

「はちす葉の玉となるらむむすぶにもそでぬれまさるけさのつゆかな」

と書きてやりつ。又この袈裟の（供養の）この（頭か）みも法師にてあれば祈りなどもつけて賴もしかりつるを、にこり（外はか）に又かくなりぬと聞くにも、このはらからの心ちいかならむ。われもいと口をし。賴みつる人のかうのみなど思ひ亂るれば屢とぶらふ。さるべきやうにありて雲林院に侍ひし人なり。四十九日などはてゝかくいひやる、

「思ひきや雲の林にうち捨てゝそらのけぶりにたゝむものとは」

などなむおのが心ちのわびしきまゝに野にも山にもかゝりける。はかなながらかう秋冬もすごしつ。一つところにはせうと一人伯母とおぼしき人ぞ住む。それを親のごと思ひてあれど、猶昔を戀ひつゝ泣きあかしてある所に、年かへりて（康保二年）春夏も過ぎぬれば、今ははての事すとてこたびばかりはかの ありし山寺にてぞする。ありし事ども思ひ出づるにいとゞいみじう哀に悲し。導師のはじめにてうつたへに秋のやまべを尋ぬ給ふにはあらざりける。まな

こたぢ給ひしところにて經の心說かせ給はむとにこそありけれ。とばかりいふを聞くに、もの覺えずなりてのちの事どもはおぼえずなりぬ。あるべき事ども終りてかへる。やがて服ぬぐににび色のものども扇まではらへなどするほどに、

「藤衣流すなみだのかはみづはきしにもまさるものにぞありける」

と覺えていみじうなかるれば人にもいはでやみぬ。さるなど果てしが例のつれづれなるに彈くとはなけれど琴おしのごひてかきならしなどするに、忌なき程にもなりにけるを、あはれにはかなくてもなど思ふ程に、あなたより、

「今はとて彈き出づる琴のねを聞けばうちかへしても猶ぞ悲しき」

とあるにことなることもあらねどこれを思へばいとゞ泣きまさりて、

「なき人はおとづれもせでことの緒を斷ちしつき日ぞかへりきにける」。

かくてあまたある中にも賴もしきものに思ふ人この夏より遠くもろこしぬべき事のあるを、服果てゝとありつれば、この頃出で立ちなむとす。これを思ふに心細しと思ふにぞおろかなり。今はとて出で立つ日渡りて見る。さうずく一くだりばかりはかなき物など硯筥一よろひに入れていみじう騷がしう罵りみちたれど、我も行く人も目も見合せず唯向ひ居て涙をせきかねつゝ「皆人はかなど念ぜさせ給へ」「いみじう忌むなり」などにいふ。されば車に乘り果てむを見むはいみじからむと思ふに家より「疾く渡りね。こゝに物したり」とあれば車寄せさせて乘るほどに、行く人はふたゐの小袿なり。とまるは唯うすものゝ赤朽葉を

着たるをぬぎ更へて別れぬ。九月十よ日の程なり。家に來てもなく（カも）かくまがまがしくと咎むるまでいみじう泣かる。さて昨日今日は關山ばかりにぞ物すらむかしと思ひやりて月のいと哀なるに詠めやりてゐたる（カれ）ば、あなたにもまた起きて琴彈きなどしてかくいひたり、

「引きとむるものとはなしに逢坂の關の朽ちめのねにぞそばつる」。

これも同じ思ふべき人なればなりけり、

「思ひやる逢坂山のせきのねは聞くにもそでぞくちめつきぬる」

など思ひやるに年もかへりぬ。（康保三年）三月ばかりこゝに渡る程にして（カも）苦しがりそめて（宗朝）いとわりなう苦しと思ひ惑ふをいといみじうと見る。いふことは「こゝにもいとあらまほしきを何事もせむにいとびんなかるべければかしこへものしなむ。つらしとなおぼしそ。俄にもいくばくもあらぬ心ちなむするなむいとわりなき。あはれ玄らぬ（傍ら符）ともおぼし出づべきことのなきなむいと悲しかりける」とて泣くを見るに物おぼえずなりて、又いみじう泣かるれば「な泣き給ひそ。苦しさ増る。世にいみじう（傍う符）かるべきわざは心はからぬほどにかゝる別せむなむありける。いかにし給はむずらむ。ひとと（傍と符）りは世におはせじな。さりとておのが忌の中にしらなから（四字たまよなるしイ有）死なずばありとて限りと思ふなり。ありとてうちはえ參ら（イ有る）まし。おのがさかしからむ時こそ、いかでもいかでも物し給はめと思へば、かくて死なばこれこそは見奉るべ（きら）限なめれ」など、伏しながらいみじう語ひて泣く。これかれある人々呼び寄せつゝ「こゝにはいかに思ひ聞えたりとか見る。かくて死なば又對面せで止みなむと思ふこそいみ

じけれ」といへば皆泣きぬ。みづからはましてものだにいはれず、唯泣きにのみ泣く。かゝる程に心ちいと重くなりまさりてくるさし寄せて乘らむとてかき起されて人にかゝりてものす。うち見おこせてつくづくとうち守りていといみじと思ひたり。とまるは更にもいはずこのせうとなる人なむ、「何かかくまかまがしう事かおはしまさむ。はや奉りなむ」とて、やがて乘りてかへてものしぬ。思ひやる心ちいふかたなし。日にふたゝびみたび文をやる。人憎しと思ふ人もあらむと思へとていかゞはせむ。返事はかしになるおとなき人して書かせてあり。「みづから聞えぬがわりなき事とのみなむきこえ給へ」などぞある。ありしよりもいたう煩ひまさると聞けば、いひしことみづから見るべうもあらず。いかにせむなど思ひ歎きて、十よ日にもなりぬ。讀經修法などしていさゝか怠りたるやうなればゆふのことみづから返りごとす。いとあやしう怠るともなくて日を經るに、いとまどはれし事はなければにやあらむ、おぼつかなき事などひとまにこまでまと書きてあり。「物覺えにたればあらはにもなどもあるべうもあらぬを、夜のまに渡れ」などあるを、人はいかゞは思ふべきなど思へど、我も又いと覺束なきに立ち歸り同じことのみあるをいかゞはせむとて「車を給へ」といひたれば、さし離れたる廊の方にいとようとりなししつらひて端に待ち臥したりけり。火ともしたるにい消たせておりたればいと暗うて入らむ方も知らねばあやし。「こゝにぞある」とて手を取りて導く。「などかう久しうはありつる」とて日頃ありつるやうくつし語らひて、とばかりあるに「火ともしつけよ。いいと暗し。更に後めた

なくば猶しうかし」とて屏風のうしろにほのかにとつかしたり。「まだいをなども食はず今宵なむおはせば諸共に」とてある。「いづら」などいひてもの參らせたり。少し食ひなどしてせじたちありければ、夜うち更けてたゞしんにとてものしたれば「今はうちやすみ給へ。日頃よりは少し休まりたり」といへば大とこ「忌かおはしますなり」とて立ちぬ。さて「さかは明けぬるを人など召せ」といへば「なにか。まだいと暗からむ。忌ばし」とてあるほどに、明うなればをのこども呼びて、しとみ上げさせて見つ。「見給へ。草どもはいかゞうゑたる」とて見出したるに「いとかたはなるほどになりぬ」などいそげば「なにか今は粥など參りて」とあるほどに晝になりぬ。さて「いざ諸共に歸りなむ。またばものしかるべし」などあれば、「かく參り來たるをだに人いかにもおもふに、御迎へなりけると見ば、いとうたてものしからむ」といへるほ「さらばをのこども車寄せよ」とて寄せたれば、乘る所もかつがつとあゆみ出でたればいとあはれと見る見る「いつか御ありきは」などいふ程に淚浮きにけり。いと心もとなければ「あすあさての程ばかりには參りなむ」とて、いとさうざうしげなる氣色なり。少し引き出でゝ牛懸くる程に見通せば、ありつる所に歸りて見おこせて、つくづくとあるを見つゝ引き出づれば、心にもあらで顧みのみぞせらるゝかし。さて晝つ方文あり。何くれと書きて、

「かぎりかと思ひつゝこし程よりもなかなかなるは侘びしかりけり」。

かへりごと猶いと苦しげにおぼしたりつれば、「今もいと覺束なくなむ。なかなかに、

我もさぞのどけきとこのうらならで歸る波路はあやしかりけり」。

さて猶苦しげなれど念じて二三日の程に見えたり。やうやう例のやうになりもて行けば、例の程に通ふ。この頃は四月祭見に出でたればかの所にも出でたりけり。さなめりと見て迎ひに立ちぬ。待つ程のさうざうしければ橘の實などあるに葵をかけて、

「あふひとかきけどもよそにたち花の」

といひやる。や丶久しうありて、

「きみがつらさを今日こそは見れ」

とぞある。にくかるべきものにては年經ぬるを、など(かげ)にとのみいひたらむといふ人もあり。歸りて「さありし」など語れば「くひつぶしつべき心ちこそすれとや いはざりし」とていと(をりか)をかしと思ひけり。』今年はせち聞し召すべしとていみじう騒ぐ。「いかで見むと思ふに所ぞなき。見むと思はゞ」とあるを聞きはさめて「すぐろく打たむ」といへば、「よかなり。物見つぐのひに」とてめうちぬ。喜びてさるべきさまの事どもえつ丶よね(かひ)の間靜まりたるに、硯引き寄せて手習に、

「あやめ草生ひにし數をかぞへつ丶ひくや五月のせちに待たると(かな)」

とてさしやりたればうち笑ひて、

「隠れぬに生ふる數をば誰か知るあやめ知らずに待たるなるかな」

といひて、見せむの心ありければ、宮の御さじきの一續きにて二まありけるを別けてめでたうしつらひて見せつ。かくて人にくからぬさまにて十といひて、一つふたつの年は餘りにけ

り。されど明け暮れ世の中の人のやうならぬを歎きつゝ盡きせず過ぐすなりけり。それもことわり、身のあるやうはよるとても人の見え愈(今)時は、人ずくなに心細う、今は一人を賴む。たのもし人はこの十よ年のほどあがたありきにのみあり。たまさかに京なるほども四五條のほどなりければ我は左近のうまばを片岸に玄たればいと遙なり。かゝる所も(かざ)も取りつくろひかゝはる人もなければいとあしくのみなり行く。これをつれなく出で入りするは殊に心細う思ふらむなど、深う思ひよらぬなめりなどちぐさに思ひ亂る。事繁しといふは何かこの荒れたる宿の蓬よりも繁げなりと思ひ眺むるに、八月ばかりになりにけり。心のどかに暮らす日はかなき事いひいひのはてに、我も人(兼家)も惡しういひなりてうち怨じて出づるになりぬ。端の方にあゆみ出でゝ幼き人(道綱)を呼び出でゝ「我(兼家)は今はこじとす」などいひ置きて出でにける即ち這ひ入りておどろおどろしう泣く。「こはなぞあぞ」といへどいらへもせで、ろんなうさやうにぞあらむと推しはからるれど、人の聞かむもうたて物狂ほしければ、問ひさしてとかうこしらへてあるに、五六日ばかりになりぬるに音もせず。例ならぬほどになりぬれば、あな物狂ほし、戯ぶれ事とこそ我は思ひしか、はかなきなかなればかくて止むやうもありなむかしと思へば、心細うて眺むる程に、出でし日つかひし、ゆ(感ず)るつきの水はさながらありけり。上にちり居てあり。かくまでとあさましう、

「絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水はみくさゐにけり」

など思ひしひしも見えたり。例の事にて止みにけり。かやうに胸つぶらはしき折のみあるが

世に心ゆるびなきなむ侘しかりける。』九月になりて、世の中をかしからむ、物人(かへ)詣でせばや。から物はかなき身の上も申さむなど定めていと忍びわ(かた)たる所に(ぬ)のしたり。ひとはさみのみてぐらにかう書きつけたりけり、まづしものみ社に、

「いちじるき山口ならばこゝながら神の氣色を見せよとに(かぞ)思ふ」。

中のに、

「いなりやま多くの年ぞ越えにけり(元如)いのるしるしの杉をたのみて」。

はてのに、

「神々とのぼり下りはわぶれどて(かも)まださかゆかぬこゝろ(かち)こそすれ」。

又同じ晦に、ある所に同じやうにて詣でけり。ふたはさみつゝしものに、

「かみやせくしもにやみくづ積るらむ思ふこゝろの行かぬみたらし」。

又、

「榊葉のときはかきはにゆふしでやかたくるしなるめな見せそ神」。

又上のこ(かに)、

「いつしかもいつしかもとぞ待ちわたる森のた(かひ)まより光見むまを」。

又、

「ゆふだすき結ばゝれつゝ歎くこと絶えなば神のしるしと思はむ」

などなむ、神の聞かぬ所に聞えごちける。』秋はてゝ冬は朔つごもりとて(康保四年)あしきもよきも

騷ぐめるものなれば、獨寐のやうにて過ぐしつ。三月晦方にかりのこの見ゆるを「これ十づゝ重ぬるわざをいかでせむ」と手まさぐりにすゞしの糸を長う結びて、一つ結びては、ゆひゆひ玄て引きたてたればいとようかさなりたり。猶あるよりはとて九條殿の女御殿の御方(安子)に奉る。卯の花にぞつけたる。何事もなく唯例の御文にて端に「この十かさなりたるはかうても侍りぬべかりけり」とのみ聞えたる。御かへり、

「數知らず思ふこゝろにくらぶれば十かさぬるものとやは見る」(安子)

とあれば、御かへり。

「思ふことしらではかひやあらざらむかへすがへすもかずをこそ見め」(兼家)。

それより五の宮になむ奉れ給ふと聞く。』五月にもなりぬ。十よ日にうち(村上天皇)の御藥のことありての、しるほどもなくて、二十よ日のほどにかくれさせ給ひぬ。東宮(冷泉)即ちかはり居させ給ふ。東宮の亮といひつる人(兼家)は藏人のとうなどいひての、忘れば、悲しびは大かたの事にて、おほん喜ろびといふことのみ聞ゆ。わひ答へなどして少し人の心ちすれど、私の心は猶同じ事あれど、引きかへたるやうに騷がしくなどあり。みさゝぎや何やと聞くに時めき給へる人々いかに思ひやり聞ゆるあはれなり。やうやう日頃になりて貞觀殿の御方にいかになど聞えけるついでに、

「世の中をはかなきものとみさゝぎの埋るゝ山になげくらむやう」(登子)。

御かへりごといと悲しげにて、

「おくれじとうきみさゝぎに思ひ入る心は死出の山にやあるらむ」。

御四十九日はてゝ七月になりぬ。うへに侍ひし兵衛の佐まだ年も若くて思ふ事ありげもなきに、親をもめをもうち捨てゝ山に這ひのぼりて法師になりにけり。「あないみじ」とのゝしりあはれといふ程に女は又尼になりぬと聞く。さきざきなども文通しなどする中にて、いと哀にあさましき事をとぶらふ。

「おくやまの思ひやりだに悲しきに又あま雲のかゝるなになり」

て(さればカ)ばさながらかへりごと云たり、

「山深く入りにし人も尋ぬれどなほ天ぐものよそにこそなれ」

とあるもいと悲し。かゝる世に中將にや、三位にや三位にや(四字衍歟)、などよろこびを云きりたる人はところどころなるいと騒しければあしきを近う去りぬべき所いで來たりとて渡して乘物なきほどに這ひ渡るほどなれば、人は思ふやうなりと思ふべかめり。霜月なかの程なり。云はす晦方に貞(觀)殿の御方この西なる方にまかで給へり。晦の日になりてなま(みカ)といふもの心(假カ)に見(ふカ)るを、又昔よりこはこはたはたとするぞひとりゐみせは(らカ)れてあるほどに、あけぬれば(安和元年)昔つかたまらうどの御かた男なんど立ちまじらねばのどけし。我ものこるおは(元如)となりにきゝて待たるゝものはなんどうち笑ひてあるほどに、あるもの手まさぐりにかい栗をあゑ(イな)たてゝにつ(イたひ)にしてきをつく(一字)りたるをのこのかたをとりよせてありし雉のはした(イな)はぎにおしつけて、それに書きつけてあの御方に奉る、

「かたぐひやくるしかるらむやまがつのあふごなしとは見えぬものから」
と聞えたればみるのひきぼしの短くちぎりたるをゆひ集めて、木のさきに荷ひかへさせて
細かりつるかたの足にもとのこひをもけづりつけて、もとのよりも大きにてかへし給へり。
見れば、
「やまがつのあと（一字よ）まち出でゝくらぶればこひまさりけり方（かる）もありけり」。
日たくれば節供まゐりなどすめる。こなたにもさやうになどして、十五日にも例のごとして
過ぐしつ。『三月にもなりぬ。まらうどの御かたにとおぼしかりける文をもて遊へたり。見れ
ば、「なほしもあらで近きほどに參らむと思へど、われならでと思ふ人や侍らむとて」など書
いたり。年頃見給ひなりにたればからもあるなめりと思ふに、猶もあらでいとちひさく書い
つく。
「松山のさし越えてしもあらじよを我によそへて騷ぐ波かな」
とて、「あの御方みもかく（四字にもて行）まゐれ」とて返しつ。見給ひてければ即ち御返りあり。
「ましまえ（つれまイ）の風にしたがふなみなれやよするかたこそ立ちまさりけれ」。
この御方春宮（院円歟）の御親のごとして侍ひ給へば參り給ひぬべし。からてやなど度々しばしば
の給へば宵のほどに參りたり。時しもこそあれあなたに人の聲すれば「そゝ」などのたまふ
に、聞きも入れねばよひまどひし給ふやうに聞ゆるを「ろなうむつかられ給はじや」との給
へば「乳母なくとも」とてしぶしぶなるに、ものあゆみ來て聞えたてばのどかならで返りぬ。

又の日の暮に參り給ひぬ。』五月にみかどの御服ぬぎにまかで給ふに、さきのごとこなたになどあるを、「夢にものしく見えし」などいひてかなたにまかで給へり。さてしばしば夢のさとしありければ、ちがふるわざもがなとて、七月、月のいとあかきにかくのたまへり、

「見し夢をちがへ侘びぬる秋の夜に寐難きものと思ひしりぬる」。

御かへり、

「さもこそはちがふる夢はかたからめ逢はで程經る身さへ憂きかな」。

たちかへり、

「逢ふと見し夢になかなかくらされてなごり戀しくさめぬなりけり」

とのたまへれば、又、

「こと絕ゆるうつゝや何ぞなかなかに夢はかよひぢありといふものを」。

又「こと絕ゆるは何事ぞ。あなまがまがし」とて、

「かはと見てゆかぬ心を詠むればいとゞゆゝしくいひや果つべき」

とある、御かへり、

「渡らねばをち方人になれる身を心ばかりはふち瀨やはわく」

となむ、夜一夜いひける。かくて、年頃願あるをいかで泊瀨にと思ひ立つを、む月にと思ふをさすがに心にしまかせねばからうじて九月に思ひ立つ。たゞむ月には大嘗會の御けいこれより女御御たいでたゝるべし。これ過ぐして諸共にやはとあれど、我が方の事にしあらね

ば、忍びて思ひ立ちて日惡しければ門出ばかり法正寺のべにして、曉より出で立ちてうまの時ばかりに宇治の院に至りつゝ見やれば、木の間より水のおもてつやゝかにていと哀なる心ちす。忍びやかにと思ひて人あまたもなうて出で立ちたるも、我が心の怠りにはあれど、我ならぬ人ならせばいかにのゝしりてと覺ゆ。車さしまはして幕など引きて、しりなる人ばかりを下してかはり(べイ)に向へてすだれ卷きあげて見れば網代とて(しもカ)にし渡したり。行きかふ舟とてあまた見ざりし事なれば、すべてあはれにをかし。じか(かりカ)の方を見れば來こうじたるげすどもあ(やイ)しげなるゆや梨やなどをなつかしげにもたりて食ひなどするも哀に見ゆ。わりに(ごカ)などものして舟に車掻きすゑて急ぎもていけば、にへのゝ池泉河などいひつゝ(もごカ)りどて(しもカ)居などしたるも心にしみて哀にをかしう覺ゆ。かい忍びやかなれば萬につけて涙もろく覺ゆ。その泉河もわたりて橋寺といふ所にとまりぬ。酉の時ばかりにおりて休みたれば、はたにとしろ(六字はたゝ所カ)と思しきる(にイ)た(ちイ)より切大根ものしなしてあへしらひてまづ出したり。かゝる旅立ちたるわざどもをしたりしこそあやしう忘れがたうをかしかりしか。明くれば川渡りていくに柴垣しわたしてある家どて(しもカ)を見るに、いづれならむよもの物語の家など思ひいくにいとぞ哀なる。今日も寺めく所にとまりて又の日はつばちといふ所にとまる。又の日霜のいと白きに、詣でもら(しカ)歸りもするなめり。脛を布の端して引きめぐらかしたるものどて(しもカ)ありきちがひ騷ぐめりしとみさしあげたる所に宿りて、湯わ(かイ)しなどする程に見ればさまざまなる人のいきちがふ、おのがじゝは思ふ事こそはあらめと見ゆ。とばかりあれば文捧

げてくる者あり。そこにとまりて「御文」といふめり。見れば「昨日今日の程何事かいと覺束なくなむ人少なにて物しにし。いかゞいひしやうに三夜さぶらはむずるか。歸るべからむ日聞きて迎へにだに」とぞある。返どには「つば市といふまでは平かになむ。かゝるついでにこれよりも深くと思へば歸らむ日をえこそ聞え定めね」と書きつ。「こゝそこにて猶三日作給ふ事いとびんなし」など定むるな、使聞きて歸りぬれば、それより立ちていきもていけるは、なでふ事なき道も山深きこゝちすれば、いとあはれに、水の聲も例に過ぎもと行きさしも立ちわたり木の葉は色々に見えたり。水は石がちなるなかより湧きかへり行く。夕日のさしたるさまなどを見るに涙も留まらず。道は殊にをかしくもあらざりつ。紅葉もまだし。花も皆失せにたり。をれたる薄ばかりぞ見えつる。こゝはいと心ことに見ゆればすだれ卷きあげて下簾おしはさみて見れば、着なやしたる物の色もあらぬやうに見ゆ。薄色なるうすものゝ裳を引きかくれば、こしなどちりてこがれたるくち葉にあひたる心ちもいとをかしう覺ゆ。かたゐなどものつきなべなど居ゑてをるもいと悲し。げすぢかなる心ちして生けおとりしてぞ覺ゆる。ねぶりもせられずいそがしからねば、つくづくと聞けば目も見えぬ者のいみじげにしもあらぬが、思ひける事どもを人や聞くらむとも思はずのゝしり申すを聞くも哀にて唯涙のみぞこぼるゝ。かくて今しばしあらばやと思へど明くればのゝしりて出し立つ。かへさは忍ぶれどこゝかしこあるじ去つゝとゞむれば、物さわがしうて過ぎ行く。三日といふに京につきぬべけれど、いたう暮れぬとて山城の國久世のみやけといふ所にとまりぬ。い

みじうむつかしけれど夜に入りぬれば唯明くるを待つ。まだ暗きよりいけば黒みたるものの、てぞ追ひてはしらせてく。や丶遠くよりおりてついひざまづきたり。見ればず丶いんしなりけり。何ぞとこれかれ問へば「昨日の酉の時ばかりに宇治の院におはしまし着きてかへらせ給ひぬやと參れと仰せごと侍りつればなむ」といふ。さきさきなるをのこどもとそ丶ながせやなど行ふ。宇治の河はりによるほど、霧はきし方見えず立ち渡りていとおぼつかなし。車かきおろしてこちたくとかくするほどに人聲多くて「御車おろし立てよ」との丶しる。霧の下より例のあじろも見えたり。いふ方なくをかし。みづからはあなたにあるなるべし。まづかくきてわたす、

「人心宇治のあじろにたまさかによるひるだにもたづねけるかな」。

船の岸さするほどに返し、

「かへる日を心のうちに數へつ丶誰によりてかあじろをもとふ」。

見るほどに車かき居ゑての丶しりてさし渡る。いとやんごとなきにはあらねど卑しからぬ家の子ども、何のぞうの君などいふものども、ながみとびの尾のなかに入りこみて、ひのあじろ僅かに見えて霧所々に晴れ行く。あなたの岸に家の子衛府の佐などかいつれて見おこせたり。なかに立てる人も旅立ちて狩ぎぬなり。岸のいと高き所に船を寄せてわりなくた丶あげに擔ひあぐ。轅をいたじきに引きかけて立てたり。としみの設けありければとかうものするほどにはのあなたにあぜちの大納言のらうじ給ふところありける。「この頃のあ

じろは御覽ずとてこゝになむものし給ふ」といふ人あれば、「かうてありと聞き給へらむをまうでこそすべかりけれ」など定むるほどに紅葉のいとをかしきえだに、きじひをなどをつけて、「かうものし給ふと聞きてもろともにと思ふもあやしう、ものなき日にこそあれ」とあり。御かへり「こゝにおはしましけるを唯今侍らひかしこまりは」などといひてひとへぎぬぬぎてかづくごながらさし渡りぬめり。又鯉鱸などしきりにあめり。あるすきものども醉ひあつまりて「いみじかりつるものかな。御車のつぎのわかたのほどの日にあたりて見えつるは」ともいふめり。車のしりの方に花紅葉などやさしたりけむ、「家の子とおぼしき人「近う花咲き實なるまでなりにける日頃よ」といふなればしりなる人もとかくいらへなどするほどに、あなたへ舟にて皆さしわたる。ろなうゑはむものぞとて皆酒飲むものどもを選りてゐて渡る。川の方に車むかへ榻立てさせてふた舟にて漕ぎ渡るまで醉ひ惑ひて歌ひ歸るまゝに「御車かけよかけよ」とのゝしれば、困じていと侘しきにいと苦しうて來ぬ。あくればごけいのいそぎ近くなりぬ。こゝにし給ふべき事それぞれとあれば、いかゞはとてし騒ぐ。儀式の車にてひきつゞきり。しものかづかへ手振などかくしいけば、いろふしに出でたらむこゝちして今めかし。月立ちては大ざう會のけみやとし騒ぎ、我も物見のいそぎなどしつるほどに、晦に又いそぎなどすめり。かく年月はつもれど思ふやうにもあらぬ身をし嘆けば、聲あらたまるもよろこぼしからず。猶物はかなきを思へばあるかなきかの心ちするかげろふのにきといふべし。

蜻蛉日記卷中

かくはかなくから年立ち歸るあしたにはなりにけり。年頃あやしく世の人のする事忌などもせぬ所なればや、かうはあらむと思ひ臥きてゐざり出づるまゝに「いづらこゝに人々今年だにいかで事忌などして世の中試みむ」といふを聞きてはらからと覺しき人まだ臥しながらもの聞ゆ。「天地を袋に縫ひて」とすずるに、いとをかしくなりて「さらにみ（カ作）には三そ日三そ夜は我がもとにともいはむ」といへば、前なる人々笑ひて「いと思ふやうなる事にも侍るかな。同じくばこれを書かせ給ひて殿にやは奉らせ給はぬ」といふ。臥したりつる人も起きて「いとよき事なりってん（如元）けのゑはうにもまさらむ」など笑ふ笑ふいへばさながら書きてちひさき人（道脫）して奉れたれば、この頃時の世の中人にて人はいみじく多く參りこみたり。內へも疾くとていと騷がしげなりけれどかくぞある、今年はさ月二つあればなるべし、

「年ごとにあまれは（イる）こひる（イか）君がため閏月をばおくにやあるらむ」

とあればいはひそしつと思ふ。又の日こなたあなたげすのなかより事出で來ていみじき事どもあるを、人はこなたざまに心寄せていとほしげなるけしきにあれど、我はすべて近きかすることなり。悔しくなど思ふ程に、家うつりとかせらるゝ事ありて我は少し離れたる所に渡りぬれば、わざときらきらしくて日ませなどにうち通ひたれば、はかならうち（ちイ一字の）には猶か

くてぞあるべかりける。家に錦を着てこそいへ。故郷へも歸りなむと思ふ。」三月三日せくなど物したるを、人なくてさうざうしとてこゝの人々かしこの侍にかう書きてやるあり。戯ぶれに、

「もゝの花すき物どもをさいわうがそのあたりまで尋ねにぞやる」。

即かいつれて來たり。おろしいだし酒飲みなどして暮しつ。中の十日のほどにこの人々方分きて小弓のことせむとす。かたみに出でいるとぞし騒ぐ。しりへの方の限こゝに集りてなす日、女房にかけもの乞ひたれば、さながらに、物や忽に覺えざりけむ、侘びざれに青き紙を柳の枝に結びつけたり。

「山風のまへ(イほ)よりふけばこの春のやなぎのいとはしりへにぞよる」。

かへし口々したる(イれ)ど忘るゝ程押しはからなむ。一つはかくぞある、

「數々に君かたよりて引くなればやなぎのまゆもいまぞひらくる」。

つごもり方にせむと定むる程に世の中にいかなる咎勝りたりけむ。てんけ(三字のイ)と人々流さるゝとのゝしる事いで來て紛れにけり。廿五日六日の程に西の宮の左のおとゞ(明高)流され給ふ。見奉らむとて天の下ゆすりて西の宮へ人走り惑ふ。いといみじき事かなと聞く程に人にも見え給はで逃げ出で給ひにけり。あたごになむときよ(カ明に)しはになどゆすりて遂に尋ね出でゝ流し奉ると聞くに、あいなしと思ふまでいみじう悲しく心もとなき身だにかく思ひ知りたる人は袖をぬらさぬといふ類ひなし。あまたの御子供もあやしき國々の空になりつゝ行

くへも知らずちりぢり別れ給ふめるぞ、御ぐしおろしなどすべていへばおろかいみじ。おとゞも法師になり給ひにけれど、強ひて師になし奉りて追ひくだし奉る。そのころをいたみの事にて過ぎぬ。身の上をのみするにきには入まじきことなれども、なしと思ひ入りしも誰ならねば記し置くなり。そのまの五月雨の二十よ日のほど物忌もあり。長きしやうじも始めたる人山寺に籠れり。雨いたく降りて詠むるに、いとあやしく心細き所になむなどもあるべし。返り事に、

「時しもあれかく五月雨とまさかにをちかた人のひともこそふれ」

とものしたる返し、

「ましみづのまして程ふる物ならばおなじぬれにもおるも立ちなむ」

といふ程に閏五月にもなりぬ。晦日より何でちにかわらむ、そこはかとなくいと苦しけれど、さばれとのみ思ふ。命をしむと人に見えずもありにしがなとのみ念ずれど、見聞く人たへならで芥子やきのやうなるわざすれど、猶しるしなくて程ふるに、人はかくきよまはるほどゝて例のやうにも通はず。新しき所造るとて通ふたよりにぞ立ちながらなど物して、いかにぞなどもある。心ち弱く覺ゆるにおしかこて悲しく覺ゆる夕暮に例の所より歸るとてはすの實一本を人して入れたり。「暗くなりぬれば參らぬなり。これ彼處のなるを見給へ」となむいふ。返り事には唯「生きて生けらぬとこえよ」といはせて思ひ臥したれば、哀れげにいとをかしかなる所を、命も知らず人の心も心も知らねばいつしか見せむとありしも、

さもあらぬにやみなむかしと思ふも哀なり。

「花に咲き實になりかはる世を捨てゝ浮葉の露とわれぞ消ぬべき」

など思ふまで日を經て同じやうなれば心細し。よからずばとのみ思ふ身なればかゝ惜しとにはあらぬを、唯この一人ある人いかゞせむとばかり思ひつゞくるにぞ涙せきあへぬ。猶怪しく例の心ちに違ひて覺ゆるけしきも見ゆべければ、やんごとなき僧など呼びおこせなどしつゝ試みるに更にいかにもいかにもあらねば、かうしつゝ死にもこそすれ、俄にてはおぼしき事もいはれぬものにこそ、あはれ、かくて果てなばいとくちをしかるべし、あるほどにだにあらば思ひあらむにたがひても語らひつべきをと思ひて、脇息におしたがへりて書きける事は「命なかるべしとのみのたまへ。見えて奉りてむとのみ思ひつゝありつるにうゝよもやなりぬらむ。怪しく心細き心ちのすればなむ。常に聞ゆるやうに世に久しきことのいと思はずなれば塵ばかり惜しきにはあらず。唯この幼き人の上なむいみじく覺え侍る。物かおかりける戯ぶれにも御氣色の物しきをば、いと侘しと思ひてはんべるめるをばいとおほきなる事なくて侍らむ。さは御氣色など見せ給ふな。いと罪深き身に侍られば、

風だにも思はぬ方によせざらばこの世のことはかの世にも見む。

侍らざらむよにさへうとうとしくもてなし給ふ人あらば、つらくなむ覺ゆべき。年ごろ御覧じ果つまじく覺えながらかばかりもはてざりける御心を見給ふれば、それいとよくかへりみさせ給へ。讓り置きてなど思ひ給へつるもしるく、かくなりぬべかめればいと長く

なむ思ひ聞ゆる。人にもいはぬ事のをかしうなど聞えつるも忘れずやあらむとすらむ。なり
しもわれ對めんに聞えつべき程にもあらざりければ、

露しげき道とかいとゞしでの山かつがつぬるゝそでいかにせむ

と書きて、端に「跡にとはひなどもちりのをなむおやまたざなるさへよくならへと
なむ聞え置きたるとのたまはせよ」と書きて上に「忌などはてなむに御覽ぜさす
べし」と書きて傍なるからうつにゐざりよりて入れつ。見る人あやしと思ふべけれど、久し
くしならばかくだにものせざらむ事のいとむせ痛かるべければなむ。』かくて猶同じやう
なれば祭祓などいふ業ことごとしうはあらで、やうやうなどしつゝみなつきの晦方にいさ
ゝか物おぼゆる心ちなどするほどに聞けば、そち殿の北の方尼になり給ひにけりとおは
にもいとあはれに思うてまつる。西の宮へ流され給ひて三日といふに、かきはらひ燒けに
しかば、北の方我が御殿桃園なるに渡りていみじげにながめ給ふと聞くにもいみじう悲し
く我がうちのさわやかにもならねば、つくづくと臥して思ひ集むることぞあひなきまで
多かるを書き出したれば、いと見苦しけれど、

「あはれ今は　かくいふかひも　なけれども　おもひしことは
はるのすゑ　はななむ散ると　さわぎしを　あはれあはれと
聞きしまに　にしのみやまの　うぐひすは　かぎりのこゑを
ふりたてゝ　きみがむかしの　わたごやま　さして入りぬと

聞きしかど
なげきわび
さわぐまに
立ちかへり
鳴かざ（かり欤）し
ふるかぎり
さつきさへ
くたしてき
己がよ（かま）ゝ
むこどりの
すもりにも
おもふらむ
ならしけめ
行（イなが）むらむ
なりぬとや
なりぬらむ
世のなかを

ひとごと玄げき
たにがくれなる
世を卯つきにも
きみを玄のぶの
ましてながめの
たれがたもとか
かさねたりつる
ましてこひぢに
いかばかりかは
おのがちりぢり
なにかはかひの
いへばさらなり
おなじかずとや
かつはゆめかと
きみもなげきを
ふねをながして
ながめかるらむ

わりしかば
やまみづの
なりしかば
こゝ絶えず
さみだれは
たゞならむ
ころも手は
おりたてる
そぼちけむ
巣ばなれて
あるべきと
こゝのへの
こゝのへ（かく）に
いひながら
こりつみて
いかばかり
行きかへり

みちなきことゝ
つひにながると
やまほとゝぎす
いづれのと（かげ）か
うき世のなかに
絶えずぞうるふ
うへしたわかず
あまたの田子は
四つにわかるゝ
わづかにとまる
くだけてものを
うちをのみこそ
しま二つをば
あふべきごなく
玄は燒くあまと
うらさびしかる
かりのわかれに

わらばこそ　きみがとこ(よ脱歟)も　われざらめ　塵のみおく(イけ)ば
むなしくて　枕のゆくへも　玄らじかし　いまはなみだも
みなつきの　こかげにわぶる　うつせみの　むねさけてこそ
嘆くらむ(かめ)　ましてやあきの　かぜ吹けば　まがきのをぎの
なかなかに　そよとこたへむ　をりごとに　いとゞ目さへや
わはざらば　ゆめにもきみが　きみ(イたむな)見て　ながき夜すがら
鳴くむしの　おなじこゑにや　堪へざらむと　おもふころ(イ新字)は
おほわらき　もりの玄たなる　くさのみも　おなじくぬると
玄るらめや露」。

又奥に、

「宿見ればよもぎの門もさしながらあるべきものと思ひけむやぞ(イは)」

と書きて、うち置きたるをまへなる人見つけて、「いみじう哀なることかな。これをかの北の方に見せ奉らばや」などいひなりて「げにそこよりといはゞこそかたくなはしく見ぐるしからめ」とてかんや紙に書かせて、立文にて削木につけたり。「いづこよりとあらば多武の峯よりといへ」といをしふるは、この御はらからの入道の君(高光)の御もとよりといはせよとてなりけり。人とりていりぬるほどに使は歸りにけり。かしこにいかやうにかせ(イさだめ)おぼしけむは知らず。かくわるほどに心ち聊人(ごか乙脱)ちすれど二十日よひのほどに御嶽(金峰山也)にとて急ぎ立

つ。幼き人も御供にとて物すればとかく出だし立てゝぞその日の暮にぞ我がもとの所などすりしはてつれば渡る。供なるべき人などさし置きてければさて渡りぬ。それよりさかりうしろめたき人をさへ添へてしかば、いかにいかにと念じつゝ、七月一日のころ曉に來て「唯今なむ歸り給へる」など語る。こゝは程いと遠くなりにたれば玄ばしはありきなども離かりなむかしなど思ふに晝つ方なつく〱も見えたりしはあに事にかありけむ。さてその頃師殿の北の方いかでにかありけむ。さゝの峯よりなりけりと聞き給ひて、このみなつきとでろとおぼしけるを、使もてたるゑて今一つ所へもて至りけり。取り入れてあやしともや思はずありけむ。かへりでとはなど聞えてけりと傳へ聞きて、かの返り事を聞きて所違へてけり。いふかひなき事を又同じ事をも物したらば傳へても聞くらむに、いとねぢけたるべし。いかに心もなく思ふらむとなむ騷がるゝと聞くがをかしければ、かくてはやまじと思ひてさきの手して、

「やまびこの答ありとは聞きながらあとなき空をたづねわびぬる」

とあさはなだなる紙に書きて、一葉繁うつきたる枝に立文にしてつけたり。またさし置きて失せにければ、先のやうにやあらむとてつゝみ給ふにやありけむ。猶おぼつかなし。あやしくのみあるになと思ふ。程經てたしかなるべきたよりを尋ねてかくのたまへる、

「吹く風につけて物思ふあまのたくしほのけぶりは尋ね出でずや」

とて、いとけなき手して薄鈍の紙にて心の枝につけて給へり。御かへりには、

「あるゝうらに鹽の煙は立ちけれどこなたにかへす風ぞなかりし」

とて、胡桃色の紙に書きて色かはりたる松につけて（一字欠）』八月になりぬ。その頃小一条の左のおとゞ（師尹）の御賀とて世にのゝしる。左衞門の督（濟時）の御屏風の事せらるゝとて、繪さるまじきたよりをはからひて責めらるゝ事あり。契（かね）の所々書き出したるなり。いとさらさらしき事とてあまたゝびかへすを、せめてわりなくあれば、宵の程月見るあひたなどに、一つ二つなど思ひてものしけり。人の家に賀したる所あり。

「大空をめぐる月日のいくかへり今日行くすゑにあはむとすらむ」。

旅行く人の濱づらに馬とめて千鳥の聲聞く所あり。

「一聲にやがて千鳥と聞きつれば（イ世）世々をつくさむかずも知られず」。

あはだ山より駒引く。そのわたりなる人の家に引き入れて見る所な（かり）り。

「あまた年越ゆる山べに家居してつなひくこまもおもなれにけり」。

人の家の前近き泉に八月十五や月の影うつりたるを女ども見る程に、垣てのとより大路に笛吹きて行く人あり。

「雲るよりうちえ（こちくか）の聲を聞くなべにさしくむばかり見ゆるつきかげ」。

田舍人の家の前の濱づらに松原あり。鶴群れて遊ぶ。ふたつ歌あるべしとあり。

「なみかげの見やりに立てる小松ばらこゝろをよすることぞある（イべらし）」

松のかげ眞砂のなかと尋ぬるはなにのあかぬぞたづのむらとり」。

網代のかたある所あり。

「あじろぎに心をよせて日を經ればあまたの夜こそ旅寐してけれ」。

濱べにいざり火ともし釣舟などある所あり。

「いざりびもあまのこ舟ものどけか（かし）な生けるかひあるうらに來にけり」。

女車、紅葉見けるついでに、又紅葉多かりけり（ける）人の家に來たり。

「よろづよを野べのあたりに住む人はめぐるめぐるやあきを待つらむ」

などあぢきなく、あまたにさへ强ひなされて、これらが中にいざりびとむこどりて（むらちどりイ）とはとまりにけりと聞くに、ものしから（如元）などしゐたるほどに、秋は暮れ冬になりぬれば、何事にあらねど事騷がしきこゝちしてありふる中、しも月に雪はいと深く積りて、いかなるにかありけむ、わりなく身心憂く人つらく悲しく覺ゆる日あり。つくづくと詠むるに思ふやう、

「降る雪につもる年をばよそへつゝ消えむごもなき身をぞ恨むる」

など思ふほどに晦の日（二字すぎイ）春（天祿元年）のなかばにもなりにけり。人はめでたくつくりかゞやかしつる所に「明日なむこよ（二字わたイ）るなむ」とのゝしるなれど我は、思ひしもしるくかくてぬあれかしになりにたるなめり、されば、ことにこ（一字人々まゐイ）りしかばなど思ひのべてある程に、三月十日のほどに、うちののりゆみのことありていみじくいとなむなり。をさなき人しりへの方にとられて出でにたり。かたかへ（かつ）物ならばその方の舞もすべしとあれば、このしころは萬忘れてこの事を急ぐ。舞ならはすとて日々に樂をしのゝしる。射手射につきて賭物とりてまかでた

り。いとゆゝしとぞうち見る。十日の日になりぬ。今日ぞこゝにて試樂のやうなることとする。舞の師大江のよしもち女房よりあまたの物かづく。男方もありとある限りぬぐ。殿(兼家)は御物忌なりとてをのこどもはさながら來たり。事はてがたになる夕暮に、よしもち胡蝶くら(かく)舞ひていできたるに、黃なるひとへ脫ぎてかづけたる人あり。折にあひたる心ちす。また十二日しりへの方人さながら集りて舞はすべし、こゝには弓場なくて惡しかりぬべしとて彼所にのゝしる。殿上人數を多く盡して集りて、よしもも(一字闕文)ちうづもれてなむと聞く。我はいかにいかにと後めたく思ふに、夜更けて送り人あまたなどしてものしたり。さてとばかりありて人々あやしと思ふに這ひ入りて「これがいとらうたく舞ひつる事かたりになむものしつる。皆人の泣きあはれがりつる事。明日明後日物忌いかにおぼつかなからむ。五日の日まだしきに渡りて事どもはすべし」などいひて歸られぬれば、常に行かぬ心ちもあはれに嬉しう覺ゆる事限りなし。その日になりてまだしきに物して、舞の裝やうぞくの事など人いと多く集りて裝ひ騷ぎ出し立てゝ又弓のことを念ずるに、かねてよりいふやう「後へはさしてのまけものぞ。射手いとあやしうとりたり」などいふに、舞をかひなくやなしてむ、いかならむいかならむと思ふに、夜に入りぬ。月いとあかければ格子などもおろさで念じ思ふほどに、これかれ走り來つゝまづこの物語をす。「いくつなむ射えかつる。かたきには右兵源中將なむある。多く多く射伏せられぬ」とてさゝと(三字き くそイ)の心に嬉しう悲しき事物に似ず。「まけ物と定めし方のこの矢輛にかゝりてなむ持になりぬる」とまた告げおこする人もあり。ぢになりにければ

まづ陵王舞ひけり。それも同じほどのわらはにて我が甥なり。馴しつるほど、こゝにて見、かしこにて見な[illegible]かたみにしつ。されば次に舞ひておぼえによりてにや、御ぞ賜はりたり。内よりはやがて車のしりに陵王も乗せてまかでられたり。ありつるやう語り我がおもてを興しつる事、上達部どもの皆泣きらうたがりつる事などかへすがへすも泣く泣く語らる。弓の師呼びにやりきて又こゝにてなにくれとてやゝかづくれば憂きみかとも覺えず。嬉しきとぞものこき[二字によめず]。その夜もかその後の二三日まで知りと知りたる人法師に至るまで若君の御喜きこえにきこえにとおこせいふを聞くにも、あやしきまで嬉し。』かくて、四月になりぬ。十日よりしも又五月十日ばかりまで「いとあやしく惱ましき頃になむある」とて例のやうにもあらで「七八日おほとにて念じてなむおぼつかなさに」などいひて「夜の程にてもあれば、かく苦しうてなむ、内へも參らねばかくありきけりと見ら[illegible]むもびんなかるべし」とて歸りなどせし人おこ[せイ]たりて[ティ]と聞くに待つほど過ぐる心ちす。怪しと人知れず今宵を試みむと思ふほどに、はてはせうそくだになくて久しくなりぬ。めづらしくあやしと思へどつれなしをつくり渡るに、よるは世界の車の聲に胸うち潰れつゝ時々は寢入りて明けにけるはと思ふにぞ、ましてあさましき。幼き人通ひつゝ聞けど、さるはなでふ事もなるなり。いかにぞとだに問ひふれざなり。ましてこれよりは何せむにかはあやしとものせむと思ひつゝ暮し明して格子などあぐるに見出したれば、よる雨の降りける氣色にて木ども露かゝりたり。見るまゝに覺ゆるやう、

「よのうちは松にも露はかゝりけり明くれば消ゆるものこそ思へ」。

かくて經るほどにその月つごもりに小野の宮のおとゞかくれ給ひぬとて、「世はさはりありて世の中いと騒がしかなればつゝしむとてえ物せぬなり。服になりぬるをこれら疾くして」とはあるものか。いとあさましければこの頃ものするものども里にてなむとて歸しつ。これにまして心やましきさまにて絶えて事づてもなし。』さながら六月になりぬ。かくて數ふるは夜見る事は三十よ日、晝見る事は四十よ日になりにけり。いとにはかにおやしといはゞおろかなり。心もゆかぬ世とはいひながら、まだいとかゝる目は見ざりつれば、見る人々もあやしうめづらかなりと思ひたり。物しおぼえねば、詠めのみぞせらるゝ。人目もいと恥しう覺えて落つる涙おし隱しつゝ臥して聞けば、ぐひすぞをりはへて鳴くにつけて覺ゆるやう、

「鶯もごもなきものやおもふらむみなつきはてぬ音をぞ鳴くなる」。

かくながら二十餘日になりぬる心ち、せむ方知らずあやしく置き所なきを、いかで涼しき方もやあると、心ものべがてら濱づらの方に祓へもせむと思ひて唐崎へとて物す。寅の時ばかりに出で立つに月いと明し。我が同じやうなる人又供に人一人ばかりぞある。唯三人乘りて馬に乘りたるをのこども七八人ばかりぞある。加茂川のほどにてほのぼのと明く。うち過ぎて山路になりて京に違ひたるさまを見るにも、この頃の心ちなればにやあらむ、いとあはれなり。いはむやとさに至りてしばし車とゞめてうしかへなどするに、むなぐるま引き

つゞけて、かやしき木こりおろしていとを暗き中より來るも、心ち引きかへるたるやうに覺えていとをかし。鷗のぢ哀れ哀れとおぼえて、行くさきを見やりたれば行くへも知らず見え渡りて、鳥の二つ三つ居たると見ゆるものを、强ひて思へば釣舟なるべし。そこにこそえ淚は留めずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば、まして異人は哀と泣くなり。はしたなきまで覺ゆれば目も見合せられず。行くさきおほゆ（イか）るに大津のいと物むづかしき家どもの中に引き入りにけり。それもめづらかなる心ちして行き過ぐれば遙々と濱に出でぬ。きし方を見やれば海づらに並びて集りたるやどりの前に船どもをきた（カレ）に並べ寄せつゝあるぞいとをかしき。う（イこ）ぎ行きちがふ舟どもゝあり。いにも（イかてイ）ゆく程に巳のときはてになりにたり。玄ばし馬ども休めむとて玄水といふ所に、かれと見やられたるほどに大きなるわふちの木唯一つ立てるかげに車かきおろして馬どもうらに引きおろしてひやうしなどして「こゝにて御破子待ちつけむ。かの（イから）さゝ（イかき）はまだいと遠かめり」といふほどに幼き人一人勞れたる顔にて寄り居たればゑぶくろなるものとり出でゝくひなどするほどに、破子持てきぬればさまざまわかちなどして、かたへはこれよりかへりて玄水にきつるとて、行ひやりてなどすなり。さて車かけてそのさきにさしいたり、車引きかへてはらへしに行くまゝに見れば、風うち吹きつゝ浪たかくなる。行き交ふ舟ども帆を引き上げつゝいく。濱づらにをのこども集り居て「歌仕うまつりてまかれ」といへば、いふかひなき聲引き出でゝ歌ひて行く。はらへのほどにけい（イば）いた（イたい無）になりぬべくなからくるいとはどせばきさきにてしものかたはみづ際に車立

てたり。皆おろしたれば志き波によせてなごりにはなしといひふるしたるかひもありけり。志りなる人々は落ちぬばかりのぞきてうちゆらす程に天下（なにイ）見えぬものども取りあげませて騷ぐめり。若きをのこもほどさし放れで、なみ居て「さゞなみや志賀の唐崎」など、例のかみ聲振り出したるもいとをかしう聞えたり。風はいみじう吹けども木陰なければいと暑し。いづらか（なしイ）みづにと思ふ。ひとしのをりはき（八字ひつじはかりイ）にはてぬれば歸る。ふり難く哀と見つゝ行き過ぎて山口に至りかゝればさるのはてばかりになりにたり。ひぐらしさかりとなき滿ちたり。聞けばかくぞ覺えける、

「鳴きかへる聲ぞきほひて聞ゆなるまちやしつらむ關のひぐらし」

とのみいへる。人にはいはず。走井にはこれかれ馬うちはやして先だつもありて至りつきたれば、さき立ちし人々いとよくやすみすゞみて、心ちよげにて車かきおろす所により來たれば、しりなる人、

「うらやまし駒のあしとく走井の」

といひたれば、

「志みづにかげはよどむものかは」。

近く車寄せてあてなる方に、幕るとる（三字などひイ）きおろして皆おりぬ。手足もひたしたれば、こゝちもの思ひはるけるやうにぞ覺ゆる。石どもにおしかゝりて水やりたる樋のうへにをしきどもすゑて、ものくらひて手づからすゐえなどする心ちいと立ち憂きまであれど、日暮れぬな

どそゝのかす。かゝる所にては物などいふ人もあらじかしと思へども、日の暮るればわりなくて立ちぬ。いきもて行けば粟田山といふ所にぞ京よりまづ持ちて人來たる。「この書殿（宗北）おはしましたりつ」といふを聞くいとぞあやしき。なきまをうかゞはれけるとまでぞ覺ゆる。さてなどこれかれ問ふなり。我はいとあさましうのみ覺えて來着きぬ。おりたれば心ちいとせむかたなく苦しきに、とまりたりつる人々出でまして問はせ給ひつれば、ありのまゝになむ聞えさせつる。なさ（然さ言）どこのこゝ（然こ言）ろありつる。あしうも來にけるかなとなむありつるなどあるを聞くにも夢のやうにぞ覺ゆる。又の日はこうじ暮して明くる日、幼き人殿へと出で立つ。あやしかりける事もや問はましと思ふも物憂けれど、ありし濱べを思ひ出づる心ちい忍びがたきにまけて、

「うき世をばかばかりみつの濱べにて涙になごりありやとぞ見し」

と書きて、「これ見給はざらむほどにさしおきて、やがて物しね」と敎へたれば「さしつ」とて歸りたり。もし見たるけしきもやとしら（恐ら待）た待たれけむかし。されどつれなくてつごもり頃になりぬ。さいつ頃つれづれなるまゝに草どもつくろはせなどせしに、あまたわかなへの生ひたりしを取り集めさせて、やの軒にあてゝ植ゑさせしが、いとをかしうはらみて、水まかせなどせさせしかど、色づける葉のなづみて立てるを見ればいと悲しくて、

「いなづまのひかりだにこぬやがくれは軒ばのなへものおもふらし」

と見えたる。』貞觀殿の御かた（貞觀殿北方）はをとゝしないしのかみになりにたまひにき。あやしくか

ゝる世をも問ひ給はぬは、このさるまじき御中の違ひにたれば、こゝをもけうとくおぼすにやあらむ。かく事の外なるをも知り給はでと思ひて御文奉るついでに、

「さゝがにの今はと限るすぢにてもかくてはしばし絶え（に脱）とぞ思ふ」

と聞えたり。かへり事なにくれといと哀に多くのたまひて、

「絶えきとも聞くぞ悲しき年月をいかにかけこしくもならなくに」。

これを見るにも見聞き給ひしかばならぬ（二字ぞイ）思ふに、いみじく心ちまさりて、詠めくらすほどに文あり。「文もすれど返り事もなく、はしたなげにのみあめれば、つゝましくなむ。今日もと思へども」などぞあめる。これかれそゝのかせばかへりごと書くほどに日暮れぬ。又いきもつかじかしと思ふほどに見えたる。人々「猶あるやうあらむ。つれなくてけしきを見よ」などいへば、思ひかへしてのみあり。「愼む事のみあればこそあれ。さらに來ずとなむ我は思はぬ。人のけしきばみくせぐせしきをなむあやしと思ふ」など、うらなくけしきもなければけうとく覺ゆ。「つとめては物すべき事のあればなむ。いま明日明後日の程にも」などあるに誠とは思はねど、思ひ直るにやあらむと思ふべし。若しはたこの度ばかりにやあらむと試みるにやうやう又日數過ぎ行く。さればよと思ふにありしよりもげにものぞ悲しき。つくづくと思ふうつゞくることは猶いかで心として死にもえにしがなと思ふより外のこともなきを、唯この一人ある人を思ふにぞいと悲しき。人となしてうしろやすからむ女などに預けてこそ、しかも心安からむとは思ひしか、いかなる心ちしてさすらへむずらむと思ふに、猶いと死に

難くいかゞはせむ、形をかへて世を思ひ離るやと試みむも、語らへば又深くもあらぬなれどいみじうさくりもよゝと泣きて「さなりたまはゞまろも法師になりてこそあらめ。何せむにかは世にもまじろはむ」とて、いみじくよゝと泣けば、我もえせきあへねどいみじさに、たはぶれにいひなさむとて、さて「たかくはてはいかゞし給はむずる」といひたれば、やをら立ち走りてしすゑたる鷹をきりはなちつ。見る人も涙せきあへず。まして日暮しかたき心ちに覺ゆるやう、

「あらそへば思ひにわぶるあまぐもにまづそる鷹ぞかなしかりける」

とぞ。日暮るゝ程は文見えたり。天下そらどならむと思へば「唯今心ち惡しくて、漸今は」とてやりつ。『七月十日にもなりぬれば世の人さわぐまゝにばにの事年頃はま心にものしつるもはなれやしぬらむと哀なま人も悲しうおぼすらむかし。しばし試みてすら齋もせむかしと思ひつゞくるに、涙のみだり暮すに例のごと調じて文添ひてあり。「なき人をこそ思し忘れざりけれとをしからで悲しきものになむ」と書きてものしけり。かくてのみ思ふに猶いと怪し。「珍しき人に移りてなどもなし。俄にかゝる事を思ふに心さへ知りたる人のうせ給ひぬる、小野の宮のおとゞの御めしうどもあり。これらをぞ思ひかくらむ。近江ぞあやしきことなどありていろめく者なめれば、それらにこゝに通ふと知らせじとかねて斷ち置かむとならむ」といへば、聞く人「いでや、さらずともかれらいと心安しと聞く人なれば、何かはわざわざしうかまへ給はずともありなむ」などぞいふ。「もしさらずば光だいのみこたちが

ならむ方こそともかくもあれ、唯いと怪しきを入る日を見るやうにてのみやはおはしますべき。こゝかしこに詣でなどもし給へかし」など唯この頃はことごとなく明くればいひ暮るれば歎きて、さらにいと暑き程なりともげにさいひてのみやはと思ひ立ちて、石山に十日ばかりと思ひ立つ。忍びてと思へばはらからといふばかりの人も知らせず、心一つに思ひ立ちて明けぬらむと思ふ程に出で走りて、加茂川の程ばかりなどにぞ、いかで聞きあへつらむ、追ひて物したる人もあり。有明の月はいと明けれど逢ふ人もなし。河原には死に人もふせりと見聞けど怖しくもあらず。粟田山といふ程に行き去りていと苦しきをうち休めば、ともかくも思ひわかれず唯涙ぞこぼるゝ。人やみると涙はつれなしづくりて唯走りて行きもて行く。山階にて明け離るゝにぞいとけんえうなる心ちすれば、あれか人かに覺ゆる。人は皆おくらかしさいだてなどしてかすかにて歩みいけば、逢ふものの見る人あやしげに思ひて、さゝめき騒ぐぞいとわびしき。からうじていきすぎて、走井にてわりごなどものすとて幕引きまはしてとかくするほどに、いみじくのゝしる者く。いかにせむ、誰ならむ、供なる人見知るべきものにもこそあれ、あないみじと思ふ程に、馬に乗りたる者あまた車二つ三つ引き續けてのゝしりてく。若狭の守の車なりけりといふ。立ちもとまらで行き過ぎては、思ふことなげにても行くかな、さるは明け暮れひざまづきありくもののぐしてゆけばにこそとあめれと思ふにも胸さくる心ちす。げすども車の口につけるもさわらぬも、この幕ちかく立ち寄りつゝとあみだ騒ぐふるまひのなめう覺ゆる物に似ず。我が供の人僅にあふる

「立ちのきて」などいふめれば「例も行きゝの人よる所をは知り給はぬか。咎める（定如）は」などいふを見る心ちはいかゞはある。やり過ごして今は立ちて行けば、關うち越えてうちいでの濱に死にかへりていたりたれば、先だちし人船に菰やかたひきて設けたり。物も覺えず這ひ乘りたれば遙々とさし出して行く。いと心地いと侘しくも苦しうもいみじうもの悲しう思ふこと類ひなし。さるのをはりばかりに寺の中に着きぬ。ゆやにものなどしきたりければいきて臥し（かぬイ）。心ちせむ方知らず苦しきまゝに臥しまろびうるかな（四字ぞな かゝイ）。よるになりてゆなど物して御堂に昇る。身のあるやうを佛に申す（ほど けイ）にも涙に咽ぶ。とすて（二字か くイ）いひもやられず。ようち更けてとの方を見出したれば堂は高くてしもは谷と見えたり。かたき軒（れイ）に木ども生ひこりて、いとこぐらかりたる。二十日の月夜更けていとあかるければこ陰にもりて所々に前方ぞ見えわたりたる。見おろしたれば麓にある泉はかゞ（鏡如イ）みのごと見えたり。高欄におし懸りてとばかり守り居たれば、片岸に草のなかにそよそよし（なイ）らしたるものあやしき聲するを、「こはなにぞ」と問ひたれば「鹿のいふなり」といふ。などかれいの聲には鳴かざらむと思ふ程にさし離れたる谷の方より、いとうら若き聲に遙に詠め鳴きたなり。聞く心ち空なりといへばおろかなり。思ひ入りて行ふ心ちもの覺えで猶あれば、みやか（りイ）なる山のあなたばかりに、おたもりの物追ひたる聲いふかひなくなさけなげにうちよばひたり。かうしも取り集めて肝を砕くこと多からむと思ふぞ、はてはあきれてぞ居たる。さて後夜行ひつれば、おりぬ。身よわければゆやにあり。夜の明くるまゝに見やりたればひんがしに風はいとのどかにて

霧立ちわたり、川のあなたは繪に書きたるやうに見えたり。川づらに放ち馬どものあさりありくも遙に見えたり。いと哀なり。二なく思ふ人をも、人目によりてとゞめ置きてしかば、出で離れたる序に、死ぬるたばかりをもせばやと思ふにはまづこのほだし覺えて戀しう悲し。涙の限をぞ盡しはべる。をのこどもの中には「これよりいと近くなり。いさうくなたの身には、いまも口ひき過ごすと聞くぞからかなるや」などいふを聞くに、さて心にもあらず引かれいなばやと思ふ。かくのみ心盡せば物なども食はれず。「しりへの方なる池にしぶきといふもの生ひたる」といへば、「とりてもてこ」といへばもて來たりける。けにあへしらひてゆをし切りてうちかざしたるぞ、いとをかしう覺えたる。さては夜になりぬ。御堂にてよろづ申し泣き明して、曉方にまどろみたるに見ゆるやう、この寺のべたうと覺しき法師、銚子に水を入れてもて來て、右の方の座に入りくと見る。ふと驚かされて佛の見せ給ふにこそはあらめと思ふに、まして物ぞ哀に悲しく覺ゆる。明けぬといふなればやがて御堂よりおりぬ。まだいと暗ければ湖海のうへ白く見え渡りて、さいふいふ人二十人ばかりあるを、乘らむとする舟の、さ(イき)しかげのかたへばかりに見くさ(イだ)されたるぞいと哀にあやしき。みあかしたて參らせし僧の見送るとて岸に立てるに、唯さし出でにさし出でつれば、いと心細げにて立てるを見やれば、かれはめなれにたるらむ一つ(所イ二字)に悲しくや、とまりて思ふらむとぞ(心イ)うる。をのこども「今らいねんの(於今)月友(於今)ひ參らむよ」とよばひたれば「さなり」と答へて遠くなるまゝに、影のごと見えたるもいと悲し。空を見れば月はいと細くて影は海のおもてに移り

てある。風うち吹きて海のおもていと騒がしうさらさらと騒ぎたり。若きをのこども聲はそやかにて、おも(［illegible］)せにたるといふ歌を歌ひ出でたるを聞くにもつぶつぶと涙ぞ落つる。いかゞ崎山吹の崎などいふ所々見やりて蘆の中より漕ぎ行く。まだ物う(かた)しかにも見えぬ程に遙なる楫の音して心細く歌ひ來る舟あり。行きちがふ程に「いづくのぞや」と問ひければ「石山へ人の御迎に」とぞこな(かた)ふなる。この聲もいと哀に聞ゆる。め(イさ)いひおきし遲くい(イぐ)れば、かしこなりつるして出でぬれば遊ひていくなめり。留めてをのこどもかたへは乘りかへりて、心のほしきに歌ひ行く。瀬田の橋の本行きかゝるほどにぞほのぼのと明け行く。千鳥うちかけりつゝ飛びちがふ。物の哀に悲しき事さらに數なし。さてありし濱わに至りたれば迎の車出で來たる。きやうに巳の時ばかりいき着きぬ。此彼集まりてせかいにまでなどいひ騷ぎけるとなどいへば「さもあらばあれ、今は猶去かるべき身かは」などぞ答ふる。おほやけにすまひの頃なり。幼き人參らまほしげに思ひたれば、さうぞかせて出し立つま(［illegible］)殿へとて物したりければ、車のしりに乘せて、暮にはこなたざまに物し給ふべき人の、さるべきさまに申しつけて、を(イさ)はおなたざまにときは(かく)にも、まして淺まし。又の日もきの(［illegible］)のごと參るさまにえ知らでよさりは一つのさうさ(二字所の、類色カ)、これらかれ(がから)送りせよとて、さいだちて出でにければ、獨龍でゝ、いかに心に思ふらむ、例ならましかば、諸共にあらましをと、幼き心ちに思ふなるべし。うちぐしたるさまにて入りくるを見るに、せむかたなくいみじく思へど、何のかひかあらむ。身一つをのみ切り碎く心ちす。』かくて八月になりぬ。二日のよさり方、(［illegible］)はかに見え

たり。おやしと思ふに、「明日は物忌なるを、門强くさゝせよ」などうちいひ散らす。いとあさましく、ものゝわくやうにおぼへ(衍)ゆるに「これさしよりかれ引きよせ念ぜよ念ぜよ」と耳おしそへつゝ、まねさゝめき戯はせば、我が一人のおれものにて向ひ居たれば、むげにくんじ果てにたりと見えけむ。又の日も日暮しいふと、「我が心の違はぬを人のあしう見なして」とのみあり。いといふかひもなし。五日の日は司召とて大將になどいとゞまさりていともめづらたし(五字めでたしカ)。それより後ぞ、少し履見えたる。この大共うへ(三字衍カ)に、院の御給はかり申さむ。幼き人にかうぶりせさせてむ。十の日と定めてす。事ども例の如し。ひきいれに、源氏の大納言物し給へり。事はてゝ方ふたにけ(二字衍カ)りにたれど、夜更けぬるをとてとゞまれり。かゝれども、こたみや限ならむと思ふ心になりにたり。九、十月も、同じさまにてすぐすめり。世には大上と(大餘カ)のごけ(おかい)とて騷ぐ。我も人も物見るさじきとて渡り見ればみこしのつら近くつらしとは思へど、目くれておぼゆるに、これかれやいでなは人にすぐれ給へりかし。「あなあたらし」などもいふめり。聞くにもいとゞ物のみすべなし。』しもつきになりて、「大まゐ(二字衍カ)とての丶しるべき、その中には、少しま近く見ゆる心ちす。かうぶり故に、人も又あいなしと思ふ思ふ、わざもなく經て、とかくすれば、いと心あわたゞし。事はつる日、夜更けぬほどにものして、行幸に侍ひであがりぬべかりつれど、夜の更けぬべかりつれば、空胸やみてなむまかでぬる。いかに人いふらむ。明日はこれがきぬ着かへさせて出でむなどあれば、いさゝか昔の心ちしたり。「つとめて供にありかすべきをのこどもなど、まゐらざめるを、かしこにも

のして、行幸にとゝのへむさうすへ(二字ぞくか)して來よ」とて、いでられぬ。よろこびにありきなどすれば、いとあはれにうれしき心ちす。それよりしも、例の愼むべき事あり。二日もか(みか)か(か)ごとになむきたるも、たよりにもあるを、さもやと思ふ(際に夜いたくよけゆくウヽしごおもよイ佮)人も、たゞ一人出で(さイ佮)たり。胸うちつぶれてぞあさましき。「唯今なむ歸り給へる」など語れば、夜更けぬるに昔ながらの心ちならましかば、かゝらましやはと思ふ心ぞいみじき。それより後もおとなし。「」しはすのついたちになりぬ。七日ばかりの晝さしのぞきたり。今はいとまばゆき心ちもしにたれば几帳引き寄せて、けしき(も)のしげなるを見て、「いで日暮れにけり。内より召しありつれば」とて立ちにしまゝに、おとづれもなくて、十七八日になりにけり。今日の晝つ方より、雨いといたうはらめに(侍)て、霰につれづれと降る。まして若しやと思ふべき事も絶えにたり。いにしへを思へば我がめ(イ心)にしもあらじ、心の本上にやありけむ、雨風にもさはらぬものと、ならはしたりしものを、今日思ひ出づれば、昔も心のゆるぶやうにもなかりしかば、我が心のおほけなきにこそありけれ、あはれさらぬものと見しものを、それまで思ひかけられぬと、ながめ暮さる。「雨の脚同じやうにて火燈す程(熱に成)もなりぬ。南おもてにこの頃來る人あり。足音すればさにぞあなた(かる)。あはれをかしく來たるはと、涌きたぎる心をば、傍に置きてうちいへば、年頃見知りたる人むかひて、「あはれこれにまさりたる雨風にもいにしへ、人の障り給はざめりし物を」といふにつけてぞうちこぼるゝ涙の熱くてかゝるに覺ゆるやう、

「思ひせは(かく)胸のひむらはつれなくてなみだをわかす物にざりけり(かる)。」

と、くり返しいはれし程にぬるところにもあらでよは明してけり。その月みたるばかりの程にて年は越えにけり。その程の作法例のとなればしるさず』。さて年頃思へば、何事にかわらむ。ついたちの日は見えずして、止むべきなめりき。さもやと思ふ心遣ひせらる。ひつじの時ばかりにさきおひの〻しるぞなど人も騷ぐほどに、ふときひき過ぎぬ。いそなだこそはと思ひかへしつれど、よるもさてやみぬ。つとめてこ〻に、縫ふ物ども取りがてら「昨日の前わたりは日の暮れにし」などあり。いと返り事せまうけれど猶「年の初に、腹立ちなめそ」なんどいへば、少しはくねりて書きつ。かくしも安からず覺え、いふやうは、「このおしはかりし近江になむ文通ふ。さなりたるべしと、世にもいひ騷ぐ心づきなさになりけり」。さて二三日すごしつ。三日又申の時に、一日よりもけにの〻しりて來るを、「おはしますおはします」といひ續くるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつ〻、さすがに胸走りするを、近くなれば、こ〻なるをのこども、中門おし開きて、ひざまづきてをるに、うべもなく引き過ぎぬ。今日まして思ふ心おしはからなむ。又の日は大饗とての〻しる。いと近ければ今宵さりともと試みむと人知れず思ふ。車の音ごとに胸潰る。よき程にて皆歸る音も聞ゆる。かどいもとよりも、あまた追ひくらしつ〻行くを過ぎぬと聞く度毎に心は踈く、限りと聞きはてつればすべてものぞおぼえぬ。わくる日、又つとめてなほもあらで文見ゆ。かへりごともせず。又二日ばかりありて、「心の怠にはあれど、いと事繁き頃にてなむ。ようさりものせむにいかならむ。恐しさに」などあり。「心ち惡しき程にてえ聞えず」ともいひして思ひ

絶えぬるに、つれなく見えたり。あさましと思ふに、うらもなく戯ぶるれば、いとねたさに、こゝらの月頃念じつるとをいふに、いかなるものと、絶えていらへもなくて、（聞き聞きてイ有）疑たるが、うち驚くさまにて、「いづら。はや寝給へる」といひ笑ひて、人わろげなるまでもあれど、岩木のごとして、明しつれば、つとめて物もいはで歸りぬ。それより後、しひてつれなくて、例のことわり、これとしてかくしてなどあるもいとにくゝて、いひかへしなどして、こと絶えて、二十よ日になりぬ。あらたまれどもて（かさ）いふなる日のけしき、鶯の聲などを聞くまゝに、涙のかぬきく（四字うかぬごきイ）なし。』二月も十よ日になりぬ。聞く所に、十よなん通へると、ちぐさに人はいふ。つれづれとあるほどに、彼岸に入りぬれば、猶あるよには、しやうじせむとて、うはむしろたゞのむしろの清きぞ敷きかへさすれば、塵掃ひなどするを見るにも、かやうの事は、思ひかけざりしものをなど思へば、いみじうて、

「うちはらふ塵の（みぬ）積るさむしろをなげく數にはしかじとぞおもふ」。

これよりやがて長さうじゑて、山寺に籠りなむに、さてめわりぬべくば、いかで猶、世の人の絶え易く、そむく方にもやなりなましと思ひ立つを、人々「しやうじは、秋程よりすることそ、いとかしこかなれ」といへば、えさらず思ふべき。そふや（三字さいのイ）事もあるを、これすぐすべしと思ひて、立たむ月をぞ待つ。さばれ、よろづにこの世のことは、あいなく思ふを、こぞ恭呉竹植ゑむとて乞ひしを、この頃奉らむといへば、「いさやありもとぐまじう思ひにたる世の中に、心なげなるわざをやゑおかむ」といへば、「いと心せばき御事なり。行基菩薩は、行く

末の人の爲にこそ實なるには心(ィほ)は植ゑ給ひけれ」などいひておこせたれば、哀にありし所とて、「見む人も見よかしと思ふに、涙こぼれて植ゑさす。二日ばかりありて、雨いたく降り、こちかぜはげしく吹きて、一筋二筋うちかたぶきたれば、いかでなほさせむ、雨間もがなと思ふまゝに、

「なびくかな思はぬかたに呉竹のうき世のすゑはかくこそありけれ」。

今日は二十四日、雨の脚いとのどかにてあはれなり。夕つけて、いと珍しき文あり。「いと怖しきけしきにおぢてなむ日頃經にける」などぞある。返り事なり(ィか)。(ィ二十 脱歟)五日、猶雨やまで、つれづれと思はぬ山々とかやいふやうに、物の覺ゆるまゝに、(ィ)書きせぬものは涙なりけり。

「降る雨のあしとも落つるなみだかなこまかにものを思ひ碎けば」。

今は三月つごもりになりにけり。いとつれづれなるを忌も違へがてら、去ばしはかにと思ひて、縣ありきの所(ィ家 給家)に渡る。思ひさはりし事も平かになりにしかば、長き去やうじ始めむと思ひ立ちて、物など取り去たゝめなどする程に、「からうじは猶や重からむ。ゆるされあらば暮にいかゞ」とあり。これかれ見聞きて、「かくのみあくがらしはつるはいと惡しきわざなり。猶こたみだに、御返りやんごとなきにも」と騷げば唯「月も見なくに、あやしく」とばかりものしつ。か(ィよ)にわらじと思へばいそぎ渡りぬ。つれ(ィき)なきはそう(ィら)に夜うち更けて見えたり。例のわきたぎるとも多かれど、ほどせばく人騷がしき所にて息もえ(ィせ)ず、胸に手を置きたらむやうにて明しつ。心(ィつ)とめてその事かの事ものすべかりければ急ぎぬるを(ィなほ 猶)しもあるべき心

を、又今日や今日やと思ふに、音なくて四月になりぬ。も(無)(もイ)いと近き所なるを、みかどにて車立てり。「内やおはしまさむずらむ」などやすくもあらずいふ人さへあるぞいと苦しき。ありしよりも、まして心を切りくだき(かく)心ちす。返り事をもなはせよなはせよといひし人さへ變くつらし。ついたちの日、幼き人を呼びて、長き衣やうじをなむ始むる。諸共にせよとありとて始めつ。我はた始めつ(六字闕)。我はた始よりも、ことごとしうはあらず、たゞかはらけにかううちもりて、脇息の上に置きて、やがておしかゝりて、佛を念じ奉る。その心ばへ、「唯きはめてさいはひなかりける身なり。年頃をだに、世に心ゆるびなく、うしと思ひつるを、ましてかくあさましくなりぬ。とく死なさ(元如)せ給ひて菩提かなへ給へ」とこそ。行ふまゝに、涙ぞほろほろとこぼるゝ。あはれ、今様は女も珠數引きさげ、經引きさげぬなしと聞きし時、まさり顔なさる(元如)ものぞやもめには成るてふなどもときし心はいづちか行きけむ。よの明け暮るゝも心もとなくいとまなきまでそこはかともなけれど行ふ。とそて(三字今從ま)ゝに、あはれさいひしを聞く人いかにをかしと思ひ見るらむ。はかなかりける世を、などてさいひけむと思ふ思ふ行へば、片時涙浮ばぬ時なし。人目ぞいとまさり顔なく耻かしければ、おし隱しつゝ明し暮らす。二十日ばかり行ひたる夢に、我がかしらをとりおろして、ひたひを分くと見る。惡し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、我が腹のうちなるくちなはありきて肝をはむ、これを治せむやうは、おもてに水なむ入るべきと見る。これもあやし善しも知らねどかく衣るし置くやうは、かゝる身のはてを見聞かむ人、夢をも佛をも用ゐるべしや用ゐるまじやと定めよと

なり。五月にもなりぬ。我が家にとまれる人のもとより「おはしまさずとも、しやうぶ葺かではゆゝしからむを、いかゞせむずる」といひたり。「いでなにかゆゝしからむ。世の中にある我が身かはわびぬれば更にあやめも知られざりけり」とぞいひやらまほしけれど、さるべき人しなければ心に思ひ暮さる。かくていみはてぬれば例の所にわたりて、ましていとつれづれにてあり。ながめになりれば草ども生ひ立ちてあるを、行ひのひまに掘りあかたせなどする。あさましき人、我がかどより、例のきらきらしう追ひ散らして渡る日あり。行ひし居たるほどに、「おはしますおはします」とのゝしれば、例の如くぞあらむと思ふに、胸つぶつぶとはしるに、ひき過ぎぬれば皆人おもてをまぼりかくして居たり。我はまして二時三時まで物もいはれず。人は「あな珍らか。いかなる御心ならむ」とて泣くもあり。わづかにためらひて、「いみじう悔しう人にいひ妨げられて、今までかゝる里住をして、又かゝる目を見つるかな」とばかりいひて胸のこがるゝ事はいふ限もあらず。六月のついたちの日、「御物忌なれど、みかどの下よりも」とて文あり。怪しく珍らかなりと思ひて見れば「いたみは今はも過ぎぬらむをいつまでかあるへにたるすみかぞ。いとびんなかめりしかばえ物せず。もの詣でゝけがらひ出で來てとゞまりぬ」などぞある。そこらにといまだきりぬやうもあらじと思ふに心うさもまさりぬれど念じてかへりどかく、「いと珍しきはおぼめくまでなむ。こゝにはひさしくなりぬるをげにいかでかはおぼしよらむ。さても見給ひしわたりとは、思しかけぬ御ありきの度々になむ。すべて今まで世に侍る

身の怠りなれば、さらにきこえず」とものしつ。さて思ふに、かくだに思ひ出づるもむづかしく、さきのやうに悔しき事もこそあれ、猶しばし身をさりなむと思ひ立ちて、西山に例のものする寺あり、そちものしなむ、かの物忌果てぬさまにとて、四日出で立つ。物忌も、今日ぞあくらむと思ふ給ふるなれば、心あわたゞしく思ひつゝ、物取りしたゝめなどするに、うはむしろのしたに、つとめてくふ薬といふもの、たゝう紙の中にさし入れてありしは、こゝに行き帰るまでありけり。これかれ見出でゝ、「これ何ならむ」といふを、取りてやがてたゝう紙の中にかく書きけり、

「さむしろのしたまつ事も絶えぬれば置かむかただになきぞ悲しき」

とて、文には「身をしかへねばとぞいふめれど、前わたりせさせ給はぬ世界もやあるとて、今日なむ。これもあやしき問はずがたりにこそなりにけれ」とて、幼き人のひたやでもりならむせうそこきこえにとて、ものするにつけたり。「もし問はるゝやうもあらば、これはかき置きて早くものしぬ、置いてなむ罷るべきとをものせよ」とぞいひ持たせたる。ふみうち見て、心あわたゞしげに思はれたりけりかむ。返り事には、「よろづいとことわりにあれど、まづいくらむはなにへ給にぞ。頃は行ひにもびんなからむを、こたみばかりいふこと聞くと思ひて、とまれいひあはすべき事もあれば、唯今渡る」とて、

「あさましやのどかにたのむとこのうへをうちかへしける波の心よ。

いとつらくなむ」とあるを見れば、まいて急ぎまたがりてものしぬ。山ぢなでふ事なけれどあ

はれにいにしへ諸共にのみ時々はものせしものを、又やむことありし二三四日もこの頃のほどぞかし。宮仕も絶え籠りて、諸共にありしはなど思ふ。げに遙なる道すがら、涙もこぼれ行く。供人三人ばかり添ひていく。まづ僧坊におりゐて、見出したれば、前にませゆひわたして、また何とも知らぬ草ども繁き中にぼうたん草どもいと情なげにて、花散り果てゝ立てるを見るにも、崩ゆるうへはとよといふ事を、かへし覺えつゝいと悲し。湯などものして御道（加盛）にと思ふ程に、里より心あわたゞしげにて人は（思ふほど以下十八字流本無）走り來たり。とまれる人の文あり。見れば「唯今殿（家将）より御文もて、それがしなむ參りたりつる。さうして參り給ふ事あなり。かつかつ參りて、とゞめ聞えよ、唯今渡らせ給ふといひつれば、ありのまゝにはや出でさせ給ひぬ、これかれも追ひてなむ參りぬるといひつれば、いかやうに思してにかあらむとぞ御けしきありつるを、いかゞさは聞えむとありつれば、月頃の御ありさま、さうじのよしなどをなむ物しつれば、うち泣きて、とまれかくまれ、まづとくを聞えむとて、急ぎ歸りぬるを、さればろなうそこに御せうそくありなむ。さる用意せよ」などぞ、いひたるを見て、うたて心幼くおどろおどろしげにや、もしいな（一字で たか）つらむ、いと物しくもあるかな、けがれなどせば明日明後日などもなむとするものをと思ひつゝ、湯の事急がして道にのぼりぬ。あつければ、しばし戸推しあけて見わたせば、搭いと高くて立てり。山めぐりて、ふところのやうなるに、木立いと繁く面白けれど、闇のほどなれば唯今暗がりてぞある。しよそ（流そ付）や行ふとて法師ばらさうぞけば、戸おしあけて念ずるほどに、時は山寺わざの貝四つふくるほどになりにた

り。大門の方に、「おはしますおはします」といひつゝ、のゝしる音すれば、わげたるすどもうちおろして見やれば、こまより、火ふたともしみともし見えたり。幼き人けいめいして出でたれば、車ながら立ちてゐる。「御迎になむ參りきつるを、今日までこのけがらひあればえおりぬを、いづくにか車はよすべき」といふに、いとものくるほしき心ちす。返りみがに、「いかやうに思してかかく怪しき御ありきはありつらむ。今宵ばかりと思ふみ侍りてなむのぼり侍りつれば、ふじやうのこともおはしますなれば、いとわりなかるべき事になむ。夜更けて侍りぬらむ。とく歸らせ給へ」といふを始めて行きかへる事度々になりぬ。一丁の程をいしばしおりのぼりなどすれば、ありく人こうじて、いと苦しうするまでなりぬ。これかれなどは「あないとほし」など弱き方ざまにのみいふ。このありく人、「すべてきんぢいと口をし。かばかりの事をば、いひなさぬはなどぞ。御氣色惡し」とて、なきにもなく。「されどなどてか更にものすべき」といひはてつれば、「よしよしかくけがらひたれば、とまるべきにもあらず。いかゞはせむ。車かけよとあり」と聞けば、いと不安し。ありきつる人は、「御送りせむ。御車のしりにてまきる心更にまたは詣で來じ」とて泣く泣く出づれば、これをたのもし人にてあるにいみじうもいふかなと思へども、ものいはであれば人など皆出でぬと見えてこの人は歸りて御送せむとしてつれど、きんぢはよからむ時にをとて、おはしましぬ」とてしゝ、と泣く。いとほしう思へど、あなしれそことをさへかくてやむやうもあらじなどいひならさむ。時は八つになりぬ。道はいと遙なり。「御供の人はとりあひけるに從ひて、京のう

(供の以下十七字諸本無)ちの御ありきよりも、いとすくな(脱か)りつる」と人々いとほしがりなどする程に、夜は明けぬ。京へ物しやるべき事などあれば、人出し立つ。大夫「よべのいとおぼつかなきを御かどのへんにて、御けしきも聞かせむ」とてものすれば、それにつけて文物す。「いとあやしう、おどろおどろしかりし御ありきの、夜もや更けぬらむと思ひ給へしかば、たゞ佛をおくり聞えさせ給へとのみ祈り聞えさせつる。さてもいかに覺えたる事ありてかはと思ら給へれば、いまたあまたいたくて罷り歸らむ事も難かるべきこゝちしける」など、こまかに書きて端に、「昔も御覽ぜし道とは見給へつゝ、罷り入りしかどたぐひなく思ひやり聞えさせし。今いとくまかでぬべし」と書きて、苔ら着いたる松の枝につけてものす。霧か雲かと見ゆるもの立ち渡りてあはれに心すごし。晝つ方出でつる人歸り來たり。「御文は出で給ひにければ、をのこどもに預けて來ぬ」とものす。さらずともかへりごとあらじと思ふ。さて晝は日一日例の行ひをし、夜はおかし(二字誤る)の佛を念じ奉る。めぐりて山なれば晝も人や見むの疑なし。すだれ卷き上げてなどあるに、この時過ぎたる鶯の、鳴き鳴きて(本ノ有)のたちがらしに、人く人くとのみいちはやくいふにぞすだれおろしつべく覺ゆる。そもうつし心もなきなるべし。かくて程もなくふじやうのことあるを、出でむと思ひ置きしかど、京は皆形ことにいひなしたるには、いとはしたなき心ちすべしと思ひて、さし離れたるやにおりぬ。京よりをばなど思しき人ものしたり。「いとめづらかなるすまひなれば、ま(ゝ)づ心もなくてなむ」(など イ有)語ひて、五なるほど六(五六日よる程イ)月さかりになりにたり。木蔭いとあはれなり。山陰の暗がりたる所を

見れば、はたかし（四字ほたるはおきろくまでてらずめり里にてむかしイ）もの思ひうすかりし時二聲と聞くとはなしにと、腹だゝしかりし時鳥もうち解けて鳴く。水鷄はそこと思ふまでたゝく。いといみじげさまさるもの思ひのすみかなり。人やりならぬわざなれば、問ひとぶらはぬ人ありとも、ゆめにつらくなど思ふべきならねば、いと心安くてあるを、唯かゝるすまひをさへせむとはかまへたりける身の宿世ばかりをながむるにそひて、悲しき事は日頃の長しやうじ去つる人の、たゞもしげなけれど、みゆづる人もなければ、かしらもさし出でず。松の葉ばかりに思ひなりにたる身の同じさまにてくはせたれど、えもくひやらぬを見るたびにぞ涙はこぼれまさる。かくてあるはいと心安かりけるを唯涙もろなるこそいとくるしかりけれ。夕暮の入相の聲ひぐらしのね、めぐりの小寺ちひさき鐘ども、我も我もとうちたゝきなどし、前なる岡に神の社もあれば、法師ばら讀經（など已下廿一字流本無）まつりなどする聲を聞くにぞいとせむ方なくものは覺ゆる。かく不淨なるほどは、夜晝の暇もあればはしの方に居て詠むるを、この幼き人「入りね入りね」といふけしきを見れば、物を深く思ひ入れさせじとなるべし。「などかくはのたまふ。猶いとわ（がらイ）じ。ねぶたくも侍り」などいへば、「ひた心になくもなりつべき身を、そこにさはりて今まであるを、いかゞせむずる。世の人のいふなるさまにもなりなむ。むげに世になからむよりは、さてあらばおぼつかなからぬほどに通ひつゝなき物に思ひなして見給へ。かくていとありぬべかりけりと、身一つに思ふを、唯いとかくあしき物して、物を參れば、いといたく瘦せ給ふを見るなむいといみじき。形ことにてもきやうにある人こそ（いみじきかたちことにてもこそ十四字流本有恐衍歟）はと思へど、そ

れなむいともどかしう見ゆることなれば、かくかく思ふ」といへば、いらへもせでさくりもよゝになく。さて五日ばかりにきよまはりぬればまた堂に上りぬ。日頃物しつる人（脱歟）今日ぞ歸りぬる。車の出づるを見やりてつくづくとたてれば、木蔭にやうやういくも、いと心すごし。見やりて詠めたてりつる程に、けやあがりぬらむ、心ちいと（御しうイ有）おぼえてわざといと苦しければ山籠りしたるぜじ呼びて護身せに（一字さすか）る。夕暮になるほどに、念ず聲に加持したるを、あないみじと聞きつゝ、思へば、むかし我が身にあらむこととはゆめに思はで、あはれに心すごき事とてはた高やかに思ふにも、うき心ちのあまりにいひにもいひて、あなゆゝしとかつは思ひしさまに一つ違はず覺ゆれば、かゝらむとて、物思はせいは（イかで）なりけると、思ひ臥したるほどに、我が元のはらから一人また人も歸りも（歟も寄）にものしたり。這ひ寄りてまづいかなる心ちぞとさとりて、思ひがたくまゐる日よりも、山に入り立ちてはいみじく物のおぼえはべることとてふだんすまるなりとて、よゝと泣く。人やりにもあらねば、念じ返せどえ堪へず。泣きさみ、わかる（わらひかう）み、よろづの事をいひあかして、明けぬれば「るゐしたる人いそぐ事あるを今日は歸りて後に參り侍らむ。そもそもかくてのみやは」などいと心ぼそげにいひても、かすかなるさまにて、歸る心ち、けしうはあらねば、例の見送りて詠め出したるほどに、またをさなく（四字なほすおはすイ）との丶しりてくる人あり。さならむと思ひてあれば、いとにぎはゝしく、さと心ちしてうつくしき者ども、さまざまにさうぞき集りて、二車ぞあ（漏る脱）馬どもなどふさに引き散し、かいて騒ぐ。破子やなにやとふさにあり。誦經うちし、哀げなる法師ばらに、かたびらや

布やなど、さまざまにくばり散らして、物語のついでに、「多くは殿（家本）の御もよはしにてなむ
詣で來つる。きう（イさら）して物したりしかど出で（ずイ本）なりにき。又物したりともさてこそあらめ、お
のが物せむにはと思へば、えものせず。のぼりてわがちたてまつれ。法師ばらにも、いとたい
だいしく經敎へなどすなるは、なでふとぞとなむのたまへりし。かくてのみはいかなる人か
ある。世の中にいふなるやうに、ともかくも限になりておはせば、いふかひなくてもあるべ
し。かくて人も仰せざらむ時、歸り出でゝゐ給へらむも、をこにぞあらむ。さりとも今一度は
おはしなむ。それにさへ出で給はずばいと人笑へにはなりはて給ふらむ」など、ものはこり
かにいひのゝしるほどに、西の京に侍ふ人々こゝにおはしましぬとて、奉らせたるとて、天
下のものふさにあり。山の末と思ふやうなる人のために遙ぞあるに、となるにも身のうきこ
とはまづ覺えけり。夕影になりぬれば急ぐとあればえひきも聞えず、おぼつかなくはあり、
「猶いとこそあしけれ。さていつともおぼさぬか」といへば「唯今はいかにもいかにも思は
ず。今物すべき事あらばまかでなむ。つれづれなるこゝろなればにこそあれ」などゝて、とて
も、出でむも（如元）行ひみむつき（一字ら）（むイ）。さや思ひなるとて、出さじと思ふなる人のいはするならむ、
さとらでも何わざをかせむずると思へば、「かくてあべきほどばかりと思ふなり」といへば
（かくて以下二十字流布本無）「こもなくおぼすにこそあなれ。萬の事よりも、この君のかくそゞろなる心やうじを
しておはするよ」と、かつうち泣きつゝ、車にものすれば、こゝなるこれかれ、送りに立ち出
でたれば、「思ふどちも皆かんだうにあたり給ふなり。よく聞えてはや出し奉り給へ」などい

ひ散らして歸る。この度のなごりは、まいていとこよなくさうざうしければ、我ならぬ人はほとはとなにぬべく思ひたり。かくおもておもてにとざまかくざまにいひなされるれど、我が心はつれなくなむありける。惡しとも善しともあらむを辭むまじき人はこの頃さやうに物し給はず。文にてかくてなむとあるにはたよかなり。忍びやかにてさて暫しも行はるとあれば、いと心安し。人はなほしずかしがてらに、さもいはるゝにこそあらめ、限なき腹を立つとかゝる所を見置きて歸りにしまゝにいかにともおとろれてず、いかにもいかにもなりなば、去るべくやはありけるなど思へば、これより深く入るともぞおぼえける。今日は十五日、いもひなどしてあり。からく催していをなどものせよとて、けさ京へ出し立てゝ、思ひながむるいどに、空暗き松風音高くて、我こはことなき今しまた降りくべかるらむものを、道にて雨もや降らむ、神もや鳴りまさらむと思ふに、いとゆゝしう悲しくて佛に申しつればにやあらむ、晴れて程もなく歸りたり。「いかにぞ」と問へば「雨もやいたく降り侍ると思へば、神の鳴りつる音になむ出でゝまうで來つる」といふを聞くにもいとあはれにおぼゆ。こびのたよりにぞ文ある。「いとあさましくて、歸りにしかば、又々もさこそはあらめ、うく思ひはてにためればと思ひてなむ。若したまさかに出づべき日あらば告げよ。迎へはせむ。怖しき物に思ひ果てにためれば、近くはえ思はず」などぞある。又人の文どもあるを見れば、「とてさのみやはおむらとけかる。日の經るまゝにいみじくなむ思ひやる」などさまざまに問ひたり。又の日返り事す。さてのみやはとある人のもとに、「かくてのみとしも思

ひ給へねど、詠むるほどになむ元如、はかなくて過ぎつ。日數ぞつもりにける。

　かけてだに思ひやはせし山深く入りあひの鐘に音を添へむとは」。

又の日かへりごとあり、「事は書きあふべくもあらず。入相になむ肝碎く心ちする」とて、

「いふよりも聞くぞ悲しき敷島の世にふるさとの人やもイなになり元如」

とあるをいとあはれに悲しくながむる程に、とのゐの人數多ありしなかに、いかなる心ある

にかありけむ、こゝにある人の許に、いるをう四字いひおとかせたるやう、「いづれもおろかに思ひ聞え

させざりし御すまひなれど、まかでしよりは、いとゞ珍らかなるさまになむ思ひ出で聞えさ

する。いかにおもとたちも思し見奉らせ給ふらむ。賤しきもといふなれば、すべてすべて聞

えさすべき方なくなむ。

　身を捨てゝうきをも知らぬ旅だにも山路にふかく思ひこそ入れ」

といひたるを、もて出でゝ讀み聞かするに、又いといみじ。かばかりの事も、又いとかく覺ゆ

る時あるものなりけり。「はや返どせよ」とてあれば「をだ卷はかく思ひ知る事も難き事よと

思ひつるを、御まへにもいとせきあへぬまでなむ思しためるを見奉るも唯推し量り給へ。

　思ひ出づる時ぞかなしき奥山のこのしたつゆのいとゞしげきに」

となむいふめる。大夫挧進「一日の御かへりいかで賜はらむ。又かんだうありなむをもて參ら

む」といへば、「なにかは」とて、「かく即ち聞えさすべく思うたまへしを、いかなるにかあら

む、詣で難くのみ思ひてはんべめるたよりになむまかでむとは、いつとも思う給へわかれね

ば、聞えさせむ方なく」など書きて「何事にかありけむ、御はしがきはいかなる事にかありけむと思う給へ出でむに、ものしかんべければ更に聞えさせず。あなかしこ」など書きて、出し立てたれば、例の時しもあれ雨いたく降り神いといたく鳴るを、胸ふたがりて歎く。少し靜りて暗くなる程にぞ歸りたる。物のいと恐しかりつるありさまのわたりなどいふにぞ、いとぞいみじき。返り事を見れば、「一夜の心ばへよりは、心よわげに見ゆるは、行ひ弱りにけるかと思ふにもあはれになむ」などぞある。その暮れて又の日なま（一字ある べイ）し。をばだつ人とぶらひに物したり。破子などあまたあり。「まづいかで、かくは何事などせさせ給ふにかあらむ。ことなきことゝあらでは、いとびんなきわざなり」といふに、心に思ふやう身のある事を、かきくづしいふにぞ「いとことわり」といひなりて、いといたく泣く。日暮し語らひて、いと夕暮の程、例のいみじげなる事どもいひて、鐘の聲どもし侍る程にぞ歸る。心深く物思ひ入る人にもあれば、誠に哀とも思ひいくならむと思ふに、又の日、旅に久しくもありぬべきさまの物どもあまたある。心には、いひ盡すべくもあらず、悲しう哀なり。歸りし空なかりし言の葉の中に「こだかきみちを分け入りけむと見しまゝに、いといといみじうなむ」などよろづ書きて、

「世のなかの世のなかならば夏草のしげき山邊もたづねざらまし（諸本 掛抄）

物を、かくておはしますを見給へおきて、歸ることゝ思う給へしに、寢ぬる目も皆くれ惑ひてなむ。あり（イが）きみ深く物思し亂る（べ脱 歟）かめるかな。

世の中はおもひの外になるたきのふかき山路をたれ知らせけむ」

など、すべてさし向ひたらむやうに、こまやかに書きたり。鳴瀧といふそこの前より行く水なりける。返りごとも思ひゐたるかぎり物して、「たづねたまへりしも、げにいかでと思ふ給へりし」とて（たまへり以下二十字諸本無）、

「物おもひの深さくらべに來て見れば夏の玄げりも物ならなくに（道綱母）。

まかでむ事は、いつともなけれど、かくのたまふ事なむ、思ふ給へ煩ひぬべければ、

身ひとつのかくなる瀧を尋ぬればさらにかへらぬ水もすみけり

と見ればためしある心ちしてなむ」などものしつ。又ないしのかんの殿（貞子登子）よりとて賜へる御かへりに、心細くかきかきて、うはぶみに「西山より」といるたるを、いかゞ思しけむ、又ある御かへりに、「鳥羽のおほさとより」とあるを、いとをかしと思ひけむも、いかなる心々に持たるにかわりけむ。かくしつゝ日頃になり、詠めまさるに、ある修行者、御嶽より熊野へ大峯通りに越えけるがごとなるべし、

「外山だにかゝりけるをと玄ら雲のふかき心は知るも知らぬも」

とて落したりけり。かくなんど見つゝ經る程に、ある人まつ方、大門の方に馬のいなゝく聲して、人のあまたあるけはひしたり。木のまより見通しやりたれば、多なは人あまた見えて、歩み歩みあるへ（三字來る、ありイ）。中に關白殿（伊尹）のともえのすけ（六字兵衛佐イ）と申しけるとかやなめりと思へば、大夫（道綱）よりかゝ（三字よびイ）出して、「今まで聞えさせつ（イさ）りつるかしこまり、取り重ねてとてなむ參り來

たる」といひ入れてき陰に立り(ち)やすらふさま、きやう覺えていとをかしかめり。このことばゝ後にといひし人ものぼりわればそれに猶しもわらぬやうにわれば（それになほしもあらぬやうにあれば十六字原本重複）いたく氣色ばみ立てり。「返り事はいと嬉しきみ名なるを、早く此方に入り給へ。さきざきの御不宏やうはいかで事無かるべく祈り聞えむ」と物したれば、歩み出でゝ高欄におしかゝりて、まづてうづなどものして（ゐり一字入）たり。萬の事どもいひもてゆくに「昔こゝは見給ひしは、覺えさせ給ふや」と問へば、「いかゞは。いとたしかにおぼえて、今こそかく疎くても候へ」などいふを思ひまはせば、物もいひさして涕かはるこゝちすれば、暫しためらへば、人もいみじと思ひて、とは（かに）に物もいはず。さて「御こゑなどかはらせ給ふなるは、（いとかはらせたまふなるは十二字原本有脱符）いとことわりにはあれど、更にかくおぼさじ。世にかくて止み給ふやうはあらじなど、ひがざまに思ひなしてにやあらむ」（を脱）いふ。「かく參らば、よく聞え合せよなどのたまひつる」といへば「などか人のさはのたまはすとも、今に入りなむ」などいへば（なども以下廿五字諸本無）さらば同じくは今日出でさせ給へ。やがて御供仕うまつらむ。まづはこの大夫のまれまれ京に物しては日だに（か脱）たぶけば山寺へと急ぐを見給ふるに、いとなむゆゝしき心ちし侍る」などいへど、氣色もなければ、しばしやすらひて歸りぬ。かくのみ出で煩ひつゝ人もとぶらひつきぬれば、又は問ふべき人もなじとぞ心のうちに覺ゆる。さて經るほどに、京のこれ（かれ）の許より、文どもあり。見れば、「今日殿（家）おはしますべきやうになむ聞く。にたみさへおりずば、いとつく（べ）たましきさまになむ世の人も思はむ。又はた、世に物し給はじ。さらむ後に物したらむ、いかゞは（ん）笑へならむ」と

人々同じ事どもを物したるに、いとあやしき事にもあるかな、いかにせむ、こたみは世にしぶらすべくも物せじと思ひ騒ぐ程に、我が頼む人、物よに（イり）たゞ今のぼりけるまゝに來て、天下の事語らひて「げにかくてもしばし行はれよと思ひつるを、を（なイ）この君いと口惜しうなり給ひにけり。はや猶物しね。けふも日ならば諸共にものしね。今日も明日も迎へに參らむ」など、うたがひもなくいはるゝに、いと力なくおもひわづらひぬ。釣するあまのうけばかり、思ひ亂るゝにのゝしりて物に似ぬ。さなめりと思ふに心ち惑ひたちぬ。こたみはつゝむに（イた）となく、さし歩みて、たゞ入りに入れば、侘びて几帳ばかりを引き寄せて、はく（イた）かくるれど何のかひなし。かうもりすゑずゝれきあげへ（七字みすはきあはけ給イ）うち置きなどして（作る）を見て「あな恐ろし。いとかくは思ひ（ひはイ）かずこそありつれ。いみじくけうとくてもおはしけるかな。もし出で給ひぬべくやと思ひてまうで來つれどかへりては罪得べかめり。いかに大夫、かくてのみあるをばいかゞ思ふ」と問へば、「いと苦しう侍れどいかゞは」とうちうつぶして居たれば、「あはれ」とうちいひいひて、「さらばともかくも、きむぢが心（にイ有）、出で給ひぬべく（ばイ有）車寄せさせよ」といひも果てぬに、立ち走りて散りかひたる物ども唯取りに包み、袋に入るべきは入れて車どもに皆入れさせ、引きたるぜさうなども放ち、たくり（へ一字はイ）たる者ども、みしみしと取り拂ふ。ふり拂ふに、こゝちはあきれて、あれか人かにてあれば、人は目をくち（イは）せいとよくゑみてまは（かば）り居たるべし。「このことかくすれば出で給ひぬべきにこそはあめれ。佛にことのよし申し給へ。例の作法なる」とて、天下のさるがうことをいひのゝしらるめれど、ゆめに物もいはれ

ず。涙のみうけれど、念じかへしてあるに、車寄せていと久しくなりぬ。申の時ばかりに物せしを、火ともすほどになりにけり。つれなくて動かねば、「よしよし我は出でなむ。きむぢ(押遣)にまかす(か脱)とて立ち出でぬれば、とくとくと手を取りて、泣きぬばかりにいへば、いふかひもなきに出づる心ちぞさらに我にもあらぬ。大門引き出づれば、乘りくは(は脱)りて、道すがらうちも笑ひぬべき事どもを、ふさにあれど、ゆめぢかものぞいはれぬ。このもろともなりつる人(大夫)も、暗ければあへなむとて、同じ車にあれば、それぞ時々いらへなどする。はるはると到る程に、亥の時になりにたり。京には、晝、さるよしいひたりつる人々、心づかひしちりかいはき、戸どもあけたりければ、われにもあらずながらおりぬ。心も苦しければ、几帳さし隔で、うち臥す所にこゝにある人、ひやうと寄り來てふすといふ。「なでしこの種取らむと志侍り(しか脱)かど根もなくなりにけり。呉竹も一すぢ倒れて侍りし。つくろはせしかど」などいふ。唯今いはでもありぬべき事かなと思へば、いらへもせであるに、ねぶるかと思ひし人(兼家)、いとよく聞きつけて、このたびとり(四字ひとイ)車にて物しつる人の、さうじを隔でゝあるに、「聞い給ふや。こゝにことあり。この世をそむきて、家を出でゝ、菩提を求むる人に、唯今こゝなる人々がいふを聞けば、なでしこはなでおほしたるや、くれにければたてやり(十字呉竹はたてたりイ)やとはいふ物か」と語ればば聞く人いみじう笑ふ。あさましうをかしけれど露ばかり笑ふ氣色も見せず。かゝるに夜やうやうなかばばかりになりぬるに、「方はいづかたかふたがる」といふに、數ふればうべもなくこなたふたがりたりけり。「いかにせむ。いとからきわざかな。いざ諸共に近き所へ」など

あれば、いらへもせで、あな物くるほし、いとたとしへなき樣にもあるべかなるかなと思ひ臥して、更に動くまじければ、さふらはへこそはすべかなれ、方明きなばこそは參りくべかなれと思(ひイ)ふに、例の人「ゆか(二字ナシ)の物忌になりぬべかりけり」など惱ましげにいひつゝ出でぬ。つとめて文あり。「夜更けにければ、心ちいと惱ましくてなむ。いかにぞ。はやとしみをこそ玄給ひてめ。この大夫のさもふつゝかに見ゆるかな」などぞあめる。何かは、かばかりぞかしと思ひ離るゝものから物忌はてむ日いぶかしき心ちぞ添ひて覺ゆるに、六日を過ごして七月三日になりにたり。「晝つ方渡らせ給ふべし。こゝに侍へさになむ仰事ありつる」といふ。物どもゝ來たれば、これかれ騷ぎて、日頃みだれがはしかりつる所々をさへ、こほこほと造るを見るに、いと傍いたく思ひ暮すに、暮れはてぬれば來たる。をのこども「御車のさうぞくなどもゝ、みなしつるを、など今まではおはしまさゞらむ」などいふ程に、やうやう夜もふけぬ。ある人々「猶あやし。いざ人して見せに奉らむ」などいひて、見せに遣りたる人歸りにて、「唯今なむ御車の玄やうぞく解きて、みずゐしんばらも皆亂れ侍りぬ」といふ。さればよとぞ又思ふに、はしたなき心ちすれば、思ひ歎かなど(二字る、ことゝもイ)、更にいふ限なし。山ならまし時、かく胸ふたがる目を見ましやと、こよなく思ふ。ありとある人も、あやしあさましと思ひさわぎあへり。事どもゝ三夜ばかりに來ずなりぬるやうにぞ見えたる。いかばかりのことにてとだに聞かば、やすかるべしと思ひ亂るゝ程に、まらうどぞ物したる。心ちのむつかしきにと思へど、とかく物いひなどするにぞ少し紛れたるぞ。さて明けぬれば、大夫「何事によりてにかあり

けむと、參りて聞かむ」とて物す。「よべは惱み給ふ事なむありける。俄にいと苦しかりしかばなむえ物せずなりにしとなむのたまひつる」といふしもぞおいかゝりにあるべかりけるとぞ覺えたる。さはりにぞあるを、もしとだに聞かば、何か思はましと思ひむつかる程に、ないしのかんの殿(登子于時尚侍)より、御文あり。見れば、まだ山さかとおぼしくて、いとあはれなるさまにのたまへり。「などかはさびしげさまさるすさびをもし給ふらむ。されどそれにもさはり給はぬ人もありと聞くものを、もて離れたるさまにのみいひなし給ふめれば、いかなるぞと覺束なきにつけても、

妹背川むかしながらのなかならば人のゆきゝのかげは見てまし」。

御かへりには、「山のすまひは秋の氣色もこゝろ(イみ)給はむとせしに、又憂き時のやすらひにて中空になむ。しげさは知る人もなしとこそ思う給へし(元如)。いかに聞し召したるにか、おぼめかせ給ふにもげにまた、

よしや身のあはせむなげきは妹背山なか行く水の名もかはりけり」

などぞ聞ゆる。かくて、その日をひまにて、又物忌になりぬと聞く。明くる日こなたふたがりたる。またのひとひを見むかしと思ふ心こりずまなるに、夜更けて見えられたり。一夜の事どもしかじかといひて「今宵だにとて急ぎつるを、忌みたるべきに、皆人物しつるを出したてゝ、やがて見すてゝなむ」など、罪もなくさりげもなく、いふかひもなし。明くれば、知らぬところに物しつる人々、いかにとてなむ出で來ぬ。それより後も七八日になりぬ。わがたあ

るきの所は、御ぜんなどあれば、諸共にとて愼む所にわたりぬ。所かへたるかひあく午の時ばかりに俄にのゝしる。あさましや。「誰かあなたのかどはあけつる」などあるじも驚き騒ぐに、ふと這ひ入りて、日頃例のかうもりすゑて行ひつるも俄に投け散らし珠數もまきにうちわげなど、らうがはしきに、いとぞあやしき。その日のどかにくらして又の日歸る。』さて七八日ばかりありて、初瀨へ出で立つ。巳の時ばかり家を出づ。人いと多く、きらきらしうて物すめり。未の時ばかりに、このあせちの大納言(氏師)の領し給ひし、宇治の院に至りたり。人はかくてのゝしれど、我が心ははつかにて、(みイ有)めぐらせば、あはれに心に入れてつくろひ給ふと聞きし所に(二字せかイよ)し。この月にこそは、御はてはしつらめ、程なく荒れにたるかなと思ふ。こゝ(二字こイ)ごろの預り去けるもの、まうけをしたれば、建てたるもの、こ住のなめりと見る物、とばり、すだれ、網代屛風、黑がいの骨に朽葉のかたびらかけたる几帳ども、いとつきづきしきもあはれとのみ見ゆる。こうじにたるこ(にイ)風は挪ふやうに吹きて、頭さへ痛きまであれば、かざかくれ作りて見出したる。やゝ木くらくなりぬれば、鵜船ども篝火さし燈しつゝ一人はさしいきたり。をかしく見ゆる事限なし(頭さへ以下六十六字流布本無)。頭の痛さの紛れぬればはしのす卷きあげて、見出して、あはれ我が心とまうでし旅、かへさにあがたの院にぞゆきかへし(イり)せしこゝ(脱石)になりけり。見しあせち殿のおはして物など仰せ給ふめりしは哀にもありけるかな、いかなる世に、さだにありけむと思ひ續くれば、目もあはで夜中過ぐるまでながむる。鵜船どもゝ、のぼりくだり行きちがふを見つゝは、

「かへ(イう)去たと(イにこ)がるゝことをたづぬれば胸のほかに(二字のほイ)は鵜船なりけり」

など覺えて、猶見れば、曉がたには、ひきかへて、いさりといふものをぞする。又なくをかしくあはれなり。明けぬれば、急ぎ立ちて行くに、立野の池、泉川、はじめ見しには違はであるを見るも哀にのみ覺えたり。よろづにおぼゆる事いと多かれど、物騷がしくにぎはしきに紛れつゝあり。よかう(イか)だての森に車とゞめて、破子などものす。皆人の口うまげなり。春日へとて過ぐ。院のいとむつかしげなるに、とゞまりぬる。わ(イそ)れより立つほどに、雨風いみじく降りふゞく。三笠山をさして行くかひもなく濡れ惑ふ人多かり。からうじて詣でつきてみてぐら奉りて初瀨ざまに趣く。飛鳥にみあかし奉りければ、唯くぎぬきにくる(缺ま脱)を引き懸けて見れば木立いとをかしき所なりけり。庭清げにゐもいと(四字みもひもイ)飲まゝほしければ、うべやどりはすべしといふらむと見えたり。いみじきわめいやまさりなればいふかひもなし。からうじてははいう(四字つぼいちイ)にいたりて、れいのとゝかくして出で立つほどに日も暮れはてぬ。雨や風猶やまず。火ともしたれど、吹きけちていみじく暗ければ、夢の道の心ちしていとゆゝしく、いかなるにかとまで思ひ惑ふ。からうじて祓へ殿に至り給ひければ、雨も知らず。唯水の聲のいとはげしきを、うきぬなりと聞く。御堂にものする程に、こゝちわりなし。おぼろげに思ふ事多かれどかくわりなきに、物覺えずなりにたるべし。何事も申さで明けぬといへど、雨猶おなじやうなり。夜べに懲りてむげに晝(イにこ)になしつ。音せで渡る森の前を、さすがにあ(缺な脱)かまあ(缺な脱)かまと唯手を搔きおもてを振り、そこらの人のわざとふやうにすれば、さすがにいとせむ

方なくをかしく見ゆ。つば市に歸りて、としみなどいふ（隙な脱）れど、我は猶しやうじなり。そこより始めてあるじする所行きもやらずあり。物かづけなどするに、手を盡してものすめり。「泉河水まさりたり。いかに」などいふほどに「宇治より舟の上手具して參れり」といふがわづらはし。例のやうにて、ふとわたりなど男方には定むるを、女方に猶舟にてをとあれば、「さらば」とて皆乘りて遙々と下る。心ちいとらうあり。楫取より始め歌ひのゝしる。宇治近き所にて、又車に乘りぬ。さて例の所には、方惡しとてとゞまりぬ。さか（イる）用意したりければ、鵜飼數を盡して、二河浮きて騒ぐ。「いざ近くて見む」とて岸づらに物建て、しき（イぢ）など取りもていきて、「おりたれば、足の下に鵜飼ち（イつ）かう（イは）こ（イら）つしどもなどまだ見ざりつる事なればいとをかしう見ゆ。きこかうじたる心ちなれて（イ夜）夜の更くるも知らず、見入りてあれば、これかれ「今は歸らせたびなむ。これよりはかに、今はなきを」などいへば「さわき（二字イはれ）」とてのぼりぬ。さてもあかず見遣ればい（イ例）の夜一夜ともしわたる。いさゝかまどろめばふなばたをこほこほと打ち叩く音に我をしも驚かすとん（二字イむ）やうにぞさん（二字イはゆ）る。明けて見ればよるの鮎いと多かり。それよりさべき所々に、遣りわがつめるも、あらましきわざなり。ひよい（三字イひ）程にたる（イち）しかば、暗くぞ京に來着たる。我もやがていづくと思ひつれど、人もこうじたりとて、えものせず。又の日もひるつ方、こゝなるに文あり。「御迎にもと思ひしかども、こゝろの御ありきにもあらざりければ、びんなく覺えてなむ。例の所にか、唯今物に」などあれば、人々はやばやとそゝのかして渡りたれば即ち見えたり。かうしもあるは昔のことをたとしへなく思ひ出づ

らむとてなるべし、つとめてはかへりあるじの近くなりたればなどつきづきしういひなしつ。おしたのかごとがちになりにたるも、今更にと思へば悲しうなむ。』八月といふは明日になりにためれば、それより四日例の物忌とかおきて二度ばかり見えたり。かへりあるじははてゝ、いと深き山寺に修行せさすとてなどきて(イく)。三四日になりぬれど音なくて雨いといたく降る日、「心細げなる山住は人とふものとこそ聞きしか。さらぬは、つらき物といふ人もあり」とある。返りごとに「聞ゆべきものとは、人より先に思ひよりながら、(イつらき)物と知らせむとてなむ露よりながらものと知せむとてなむ(露より以下に十六字衍歟)露けさはなかりしもあらじと思う給ふれば、よその雲むら(三字衍イ)もあいなくなむ」とものしけり。又も立ちかへりなどあり。さて三日ばかりの程に、「今日なむ」とてようさり見えな(イた)り。常にしもいかなる心の、え思ひおへずなりにたれば、我らつれなければ人はた罪もなきやうにて七八日の程にぞ僅に通ひたる。』長月のつごもりいと哀なる空のけしきなり。まして昨日今日風いと烈しく、時雨うちしつゝ、いみじく物哀に覺えたり。遠山を眺めやれば、こんざうを塗りたるとやいふやうにて、霰降るらしとも見えたり。「野のさまいかにをかしからむ。見がてら物に詣でばや」といへば、前なる人「げにいかにめでたからむ。初瀬にこの度は忍びたるやうにて、おぼし立てよかし」などいへば、「こぞも試みむとていみじげにて詣でたりしに、石山の御心をまづ見果てゝ、春つ方さも物せむ。そもそもさまでやは。猶うくて命あらむ」など、心細うていはる。

「袖ひづる時をだにこそなげきしか身さへ時雨のふりも行くかな」。

すべて世にふる事、かひなくあぢきなき心ちいとする頃なり。さながら明け暮れて、廿（日イ）になりにたり。明くれば（おきくればイ）臥すを事にてあるぞいと怪しく覺ゆれどいかゞせむ。けさも見出したれば、屋の上の霜もいと白し。わらはべよべの姿ながらしもくちまじなはむとて騷ぐもいと哀なり。「あな、さも雪はづかしき霜かな」と口おほ（ひ）しつゝかゝるみれ（の）頼むべきもると（四字かめる人イ）どものうち聞えける、たゞならずなむおぼえける（たゞ以下十二字イ無）。神無月も、せちに別（をイ）しみつゝ過ぎぬ。霜月も同じ事にて、二十日になりにければ、今日見えたりし人、そのまゝに、廿よ日跡を斷ちて、文のみぞ二度ばかり見えける。からのみ胸安からねど思ひつきにたれば心弱き心ちして、ともかくもおぼえで、八日ばかりの物忌しきりつゝなむ、唯今日だにこそ思ふなどあやしきまでこまかなる。はての月の十日六日ばかりなり、しばしありて俄にかい曇りて雨になりぬ。たう（二字むかイ）ならむ、かた（らイ）ならむかしと思ひ出でゝながむるに、暮れ行く氣色なり。いといたく降ればさはらむにもことわりなれば、昔はとばかり覺ゆるに、涙の浮びて哀に物のおぼゆれば念じ難くて人出し立つ。

「かなしくも思ひ絶ゆるかいそのかみさはらぬものとならひしものを」

と書きて、今ぞいくらむと思ふほどに、南おもての格子もあげぬ。とに人のけおぼゆ。人はえ知らず、我のみぞあやしと覺ゆるに、妻戸押し明けて（家おイ）ふと這ひ入りたり。いみじき雨のさかりなれば音もえ聞えぬなりけり。とに「御車とくさし入れよ」などのゝしるも聞ゆ。「などしも月（頃イ）のよ（かイ）うじなりとも、今日の參りにはゆるされなむとぞ覺ゆるよし多し。明日はあな

たふたがる。あさてよりは物忌なり（かぜ）すべかめれば」など、いとことよし。やりつる人はちが
ひぬらむと思ふにいとめやすし。夜のまに雨止みにためれば「さらばくれに」など（いひ イ本無）て歸り
ぬ。方ふたがりたればうべもなく待つに見えずなりぬ。「夜べは人の物したりしに（夜べ以下十二字流布本無）、夜
の更けにしかば經など讀ませてなむとまりにし。例の如何におぼしけむ」などあり。山籠り
の後は、あまがへるといふ名を付けられたりければ、かくものしけり、「こなたざまならで
は、方も（一本無）などけ（げがイ 一本なし）しくて、

「大はこの神の助やなかりけむちぎりしことをおもひかへるは」

とやうにて、例の日過ぎてつごもりになりにたり。「忌の所になむ夜毎に」と告ぐる人あれ
ば、心安くてあり經るに、月日はさながらおにやらひ來ぬるとあれば、あさましあさましと
思ひはつるもいみじきに、人はわらはおとなともいはず、なやらふなやらふと騷ぎのゝしる
を、我のみのどかにて見聞けば、今年も心ちよげならむ所の限せまほしげなるわざにぞ見え
ける。雪なむいみじう降るといふなり。年のをはりには何事につけても、思ひのこさゞりけ
むかし。

蜻蛉日記卷下

かくて又明けぬれば、天祿三年にといふめり。今年も、憂きもつらきも共に心ち晴れておぼえ

などして、大夫（道綱）さうぞかせて出し立つ。おりはしりてやがて拜するを見れば、いとゆく（イら）しう覺えて涙ぐまし。行ひもせばやと思ふ今宵よりふざうなる事あるべし。これ人忌むといふ事なるを、又いかなるとてにかと心一つに思ふ。今年は天下にくき人ありとも思ひなはらじなどさめりて思へばいと心安し。三日は帝の御かうぶりとて世は騒ぐ。白馬やなどいへども心ちすさまじうて七日も過ぎぬ。八日ばかりに見えたる人、「いみじう節會がちなる頃にて」などあり。つとめて歸るに、しばし立ちとまりたる、をのこどものなかより、かく書きつけて、女房の中に入れたり、

「しもつけや桶のふたく（イら）をあぢきなきかげもうかばぬ鏡とぞ見る」。

そのふたに、酒くだものと入れて出す。土器に女房、

「さし出でたるふたく（イら）を見れば身を捨てゝこのむは玉のこぬと定めつ」。

かくてなかなかなる身のひまなきにつゝみて、世の人々のさり（イも）て行ひもせで二七日は過ぎぬ。十四日ばかりに、「古きうへのきぬ、これいとようして」などいひてあり。「著るべき日は」などあれど、いそぎも思はであるに、使のつとめて「おそか（[illegible]）し」とあるに、

「久しとはおぼつかなしやからごろもうち著てなれむさて贈らせよ」

とあるに、違ひてこれより文もなくてものしたれば、「これからよろしかめり。き（イよ）をならぬがあろさ」とよ（かイ）（一字ば）りあり。ねたさにかくものしけり、

「わびて又とくと騒げどかひなくて程經る物はかくこそありけれ」

こそ(二字イ)のしつ。それより後「つかさめしにて」などゝて音なし。今日は二十三日、まだ格子は上げぬ程に、或人起きはしにて妻戸をおし明けて「雪こそ降りたりけれ」といふ程に、鶯の初聲たり(二字なれイ)など今年もまいて心ちも老いず。さて例のかひなき一つごとも覺えざりけり。つかさめし二十五日に大納言になどのゝしれど、我が爲はまして、所せきにこそあらめと思へば御よろし(にイ)びなどおこする人も、かへりては嘲ずる心ちしてゆめ嬉しからず。大夫ばかりぞえもいはずゑたには思ふべかめる。又の日ばかり「などかいかにといふまじきよろこびのかひなくなむ」などあり。又つごりの日ばかりに、「なに事かある。騷しうてなむ。などか音をだにつらし」など、果はいはむ事のなきにやあらむ、さかさまでとぞある。今日もみづからは思ひかけられぬなめりと思へば、かへりごとに「御まへまうしこそ御いとまひまなかべかめれど(はイ)あいなけれ」とばかり物しつ。かゝれど今はものともおぼえずなりにたれば、なかなかいと心安く(てイ)(れイ)、よるも裏もなう、うち臥して寐たい(いイ)りたる程に、かど叩くに燃き(吹き衍)かれて怪しと思ふ程に、ふと明けてけれる(はイ)心々騷しく思ふ程に、妻戸口に立ちて「とくあけよや」などあなり。前なりつる人々も、皆うち解けたれば逃げ隱れぬ。見苦しさにゐざりよりて「やすらひにだになくなりにたれば、いと難しや」とてあくれば、「さし(イら)でのみ參り來ればにやあらむ」とあり。さとかあり月(六字さてあかつきイ)方に松吹く風の音いと荒く聞ゆる。こゝら一人明す夜、かゝる音のせねばものゝ助に(にイ)そありけれとまでぞ聞ゆる。明くれば二月にもなりぬめり。雨いと長閑に降るなり。格子などあけつれど、例のやうに心あわたゞしからねば、雨のするなめり。

されどとまる方は、思ひ懸けられずとばかりありて、「をのこどもは參りにたりや」などいひて起き出で丶、なよらかならぬ直衣しをれよい程なるかいねりの袿ひとかさね、帶ゆるらかにてあゆみ出づるに、人々御粥などてうじて侍るめれど、例食はぬものなれば「何かは」など心よげにうちいひて、太刀とくよとあれば、大夫とりて、すのこにかたひざまづきてゐたり。のどかに歩み出で丶見廻して、「前栽をらうがはしく燒きためるかな」などあり。やがてそこもとにあまかははりたるをさし寄せ、をのこどもかるらかにてもたげたれば、這ひ乘りぬめり。下簾引きつくろひて、中門より引き出で丶、さきよい程に追はせてあるも、妬げにぞ聞ゆる。日頃いと風早しとて、南面の格子は明けぬを、今日からうて見出して、とばかりあれば、雨よい程にのどやかに降りて庭うち荒れたるさまにて、朽葉所々靑み渡りにけり。哀と見えたり。晝つ方かへしうち吹きて晴る丶がほの空はしたれど、心ちあやしうて惱しうて暮れ果つるまでながめ暮しつ。『三日になりぬる夜、降りける雪三四寸ばかりたまりて今も降る。すだれを卷きて眺むれば「あれとかむ（五字あな　さむイ）」といふ聲こ丶かしこに聞ゆ。風さへ早し。世の中いと哀なり。さて日晴れなどして八日のほどに（あがた　イ在）ありきの所に渡りたる（イれは）は、多く若き人がちにて、箏の琴、琵琶など折にあひたる聲に調べなどして、うち笑ふことがちにて暮れぬ。つとめてまらうど歸りぬる後、心のどかなり。唯今ある文を見れば、「長き物忌に、うち續き若座といふわざしては、惱みければ、今日なむいと狹くと思ふ」などいとこまやかなり。返り事物して、いとゞげにあめれど、世にもあらじ、今は人知れぬさまになり行くものをと、思ひ過ぐし

てあさまし（なうイ）、うち解けたる事多くてある所に、午の時ばかりに「おはしますおはします」とのゝしる。いとわわたゞしき心ちするに、這ひ入りたれば、怪しくわれかひとり（かイ）にもあらぬ（さまイ）程にて向ひゐれば、心ちもに（さイ）らなり。しばしありて臺など參りたれば少しくひなどして、日暮れぬと見ゆる程に、明日春日の祭なればみてぐら出し立つべかりければなど（出でイ）てうるはしうひれさうぞき、ごぜんあまた引きつれ、おどろおどろしう追ひ散して（出でイ）らる。即ちこれかれさし集りて、いとあやしううち解けたりつる程に、「いかに御覽じつらむ」など、口々いとほしげなることをいふに、まして見苦しき事多かりつると思ふ心ちだに、身にうじはてられぬると覺えける。いかなるにかありけむ、このごろの日、照りみ曇りみ、いと春寒む（以か歟）る年とおぼえたり。よるは月あかし。十二日雪こちかぜにたぐひて、散りま（以下二十字流布本無）がふ。午時ばかりより雨になりて靜に降り暮すまゝ、（にイ）從ひて世の中哀げなり。今日まで音なき人も、思ひしにたがはぬ心ちするを、今日より四日かの物忌にやあらむと思ふにぞ少しのどめたる。十七日雨のどやかに降るに、方ふたがりたりと思ふ事もあり。世の中哀に心ぼそく覺ゆる程に石山にをとゝし詣でたりしに、心細かりし夜な夜な、陀羅尼いと尊う讀みつゝ、らいだうにたゝずむ法師ありき。問ひしかば「こぞから山籠りして侍るなり。穀斷なり」などいひしかば「さらば祈せよ」と語らひし法師のもとよりいひおこせたるやう「いぬる五日の夜の夢に、御に（ほイ）手に、月と日とを受け給ひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてゝ抱き給ふとなむ見て侍る。これ夢ときに問はせ給へ」といひたり。いとうたておどろおどろしとおもふに、疑

そひてをこなる心ちすれは、人にも解かせぬ時しもあれ、夢あはするもの來たるに、異人の上にて問はすれば「うへもなくいかなる人の見たるぞ」と驚きて「みかどを我がまゝにおぼしきさまの政せむものぞ」とぞいふ。「さればよ。これが空あはせにはあらず。いひおこせたる僧の疑しきなり。あなかま、いとにげなし」とて止みぬ。又あるものゝいふ「この殿のみかどを、四つ足になすをこそ見しか」といへば、「これは大臣公卿いでき給ふべき夢なり。かく申せば男君の大臣近くものし給ふを申すとぞおぼすらむ。さにはあらず。公達御行く先の事なり」とぞいふ。又みづからのをとゝひのよ見たる夢、右の方の足の裏に、男かとく（本ノイ）いふ文字を、ふと書きてつくれば、驚きて引き入ると見しを問へば、「この頃の同じ事の見ゆるなり」といふ。これもをこなるべきことなれば、物ぐるほしと思へど、さらぬ御ぞうにはあらぬ我が一人もたる人（本離）も（本ノイ）覺えぬさいはひもやとぞ心の中に思ふ。かくはあれど唯今の如くにては行く末さへ心細きに、唯一人男にてあれば、年頃もこゝかしこに詣うでなどする所にはいにの事を申し盡しつれば、今はまして離かるべき年よはひになり行くを、いかで賤しからざらむ人の、をんなご一人とりてうしろみもせむ、一人ある人をもうち語らひて、我が命のはてにもあらせむとこの日頃思ひ立ちて、これかれにもいひ合はすれば「殿の通はせ給ひし源宰相兼忠とか聞えし人の御むすめの腹にこそ、女君いと美くしげにてものし給ふなれ。同じうはそれをやは、さやうにも聞えさせ給はぬ。今は志賀の麓になむかのせうとの禪師の君といふに就きてものしたまふなる」などいふ人あるとき（本ノイ）に、「そよやさることありきかし。

故陽成院の御のちぞかし。宰相なくなりてまだ服の中に、例のさやうの事聞き過ぐされぬ心にて、なにくれとありしほどに、さめ侍りしことぞ。人はまづその心ばへにて、ことに今めかしうもあらぬうちに、齢などもおうよりにたへ侍りければ、女はさらむとも思はずやありけむ。されど返り事などすめりし程に、みづからふたゝびばかりなどものして、いかでにかわらむ、ひとへぎぬの限なむ取りてものしたりし。こと侍らどもなどもありしかど忘れにけり。さていかゞありけむ、

關越えて旅寐なりつるくさまくらかりそめにはたおもほえぬかな、

とか、いひやり給ははめりし。猶もありしかば返り、ことごとしうもあらざりき。

おぼつかな我にもあらぬ草まくらまだこそ知らねかゝる旅寐は、

とぞありしを、度重りたるぞあやしきなど諸共にとぞ笑ひてきこし。後々しるき事もなくてやありけむ、いかなるかへりごとにか、かくありき、

置き添ふる露に夜な夜な濡れこしは思ひのなほかにかわくそでかは、

などありし程に、ましてはかなうなりはてにしを、後に聞きしかばありし所に女子生みたなり。「さぞ」となむいふなる。さもあらむ、「こゝに取りてやは置きたらぬなどの給ひしそれなゝり。させむかし」などいひなりて、便りを尋ねて聞けば、この人も知らぬ。幼き人は十二三の程になりにけり。唯それ一人を身にかゝへてなむ、かの志賀のひんがしの麓にて、海を前に見、志賀の山をしりへに見たる所の、いふ方なう心細げなるに、明し暮してあなると聞き

て、身をつめば、難波のことを、さるすまひにて、思ひ殘し、いひ殘すらむとぞまづ思ひやりける。かくてこと腹のせうとも京にて法師にてあり。こゝにかくいひ出したる人知りたりければ、それして呼び取らせて語らはするに「何かは。いと善き事なりとなむおのれは思ふ。そもそもかしたに（イに）まは（イか）りて物せむ。世の中いとはかなければ今はかたちをもことになしてむとてなむさ、（二字缺カ）の處に月頃は物せらるゝ」などいひ置きて、又の日といふばかりに山越えに物したりければ、異腹にてこまかになどしもあらぬ人のふりはへたるをあやしがる。「何事によりて」などありければとばかりありてこの事をいひ出したりければ、まづともかくもあらで、いかに思ひけるにか、いといみじう泣き泣きて、とかうためらひて「こゝにも今は限に思ふ身をばさるものにて、かゝる所にこれをさへひきさげてあるを、いといみじと思へどて（イも）いかゞはせむとて（イ有り）つるを、さらばともかくも、そこに思ひさだめてもの玄給へ」とありければ、又の（イ有り）日歸りてさなむといふ。うへなきさ（イと）にてもありけるかな。宿世やありけむ、いと哀なるに、「さらばかしこにまづ御文をものせさせ給へ」とものすれば、「いかゞはせて（イ也）。かく年ごろは聞えぬばかりに承り馴れたれば、たればかり覺束なくはおぼされずやとてなむ怪しとおぼされぬべきことなれど、この禪師の君に、心細き愛ひを聞えしを、傳へ聞えたる（かり）けるに、いと嬉しくなむのたまはせしと承れば、喜びながらなむ聞ゆる。（イけ）しうつゝましき事なれどあまたと承るには、睦しき方にても思ひ放ち給ふやとてなむ」などものしたれば、又の日返り事あり。喜びしなどありて、いと心ようゆるしたり。かの語らひける事の筋も

そこの文もある。かつは思ひやる心ちいと哀なり。よろづ書き書きて「霞に立ちこめられて、筆のたちどて(イも)知られねばあやし」とあるも、げにと覺えたり。それより後も、二度ばかり文ものして、「事定まり果てぬれば、このせじたち至りて末(イ旅)に出し立てけり。唯獨出し立てけむも思へばいと悲し。おぼろげにてかくあらむや。唯親もし見給はゞなどにこそはあらめ、さ思ひたらむに、我がもとにても同じ事と見る事難からむと、又さとて(イな)な(イか)らむ時、なかなかいとはしうもあるべきかなゝど、思ふ心添ひぬれどいかゞはせむ。かくいひ契りつれば、思ひ歸るべきにもあらず。この十九日宜しき日なるをと定めてしかば、これ迎へに物す。忍びて唯清げなる網代車に、馬に乘りたるをのこども四人、忍も人はあまたある。大夫やりて這ひ乘りて、しりに、この事に口入れたる人と乘せてやりつ。今日珍しきせうそこありつれば「さもぞある。引き合ひては惡しからむ。いととくものせよ。暫しはけしき見せじ。すべてありやうに從はむ」など定めつるかひもなく、さきだゝれにたれば、いふかひなくてある程に、とばかりありて來ぬ。「大夫はいづこにいきたりつるぞ」とあれば、とかういひ紛らはしてあり。「日頃もかく思ひまうけしかば、身の心細さに人の捨てたる子をなむ取りたる」などものし置きたれば「いで見む。たが子ぞ。我今は老いにたりとて、わかうど求めて、我をかんだて(かう)し給へるならむ」とあるに、いとをかしうなりて、「さは見せ奉らむ。御子にし給はむや」とものすれば、「いとよかなり。させむ猶々」とあれば、(わイ)われもとういぶかしさに呼び出でたり。聞きつる年よりもいとちひさくいふかひなく幼げなり。近う呼びよせて「立て」とて立

てたれば、たけ四尺ばかりにて、髪は落ちたるにやあらむ、裾さきたる心ちして、たけに四寸ばかりぞ足らぬ。いとらうたげにてかしらつきをかしげにてやうだいいとあてはかなり。見て「あはれいとらうたげなめり。誰が子ぞ。猶いへいへ」とあれば、耻ぢなかめるを、さばれあらはしてむと思ひて、「さはらうたしと見給ふや。聞えてむ」といへば、まして責めらる。「あなかましつらにかし」といふに、驚きて、「いかにいかにいづれぞ」とあれど、とみにいはねば「もしさゝの所にありと聞きしか」とあれば、「さなめり」とものするに、「いといみじき事かな。今ははふれうせにけむとこそ思ひしか。かうなるまで見ざりける事よ」とてうち泣かれぬ。この子もいかに思ふにかあらむ、うちうつ伏して泣き居たり。見る人も哀に、むかし物語のやうなれば皆泣きぬ。ひとへの袖あまたゝび引き出でつゝ泣かるれば、いとうちつけにもあり。「こゝにはいまだ來じとする所に、かつていましたる事、我ゐていなむ」など、たはぶれいひつゝ、夜更くるまで泣きみ笑ひみして皆寢ぬ。つとめて歸らむとて、呼び出して「いとらうたかりけり。今ゐていなむ。車寄せばふと乘れよ」と、うち笑ひて出でられぬ。それより後、文などあるには、必ず、「小き人はいかにぞ」などしばしばあり。さて二十五日のよ、宵うち過ぎてのゝしる。火の事なりけり。「いと近し」など騷ぐを聞けば、憎しと思ふ所なりけり。その五六日は例のもの忌と聞くを、「みかどの玄たよりなむ」とて文あり。なにくれとこまやかなり。いれはかたかる（七字今はかゝるもゆゆし。ご思ふ七日は方ふたがるイ）。八日の日、未の時ばかりに、「おはしますおはします」とのゝしる。中門おしあけて、車ごめ引き入るゝを見れば、御前のをのこども、あ

またながえにつけて、すだれ巻きあげ、下すだれ左右おし挟みたり。楊もて寄りたれば、おり走りて、紅梅の唯今盛りなるしたよりさしあげたるに、似げなうもあるまじ。うち擧げつゝ「あな面白」といひつゝ、歩みのぼりぬ。さての（ゑ佃）を思ひたれば、又南ふたがりにけり。「などかは、さは告げざりし」とあれば、「さ聞えたらましかば、いかゞあるべかりける」とものすれば、「違へこそせましか」とあり。「思ふ心をや、今よりこそは試みるべかりけれ」など、猶もあらじに、たれもの（がも）のしけり。ちひさき人には手習ひ歌よみなど教へ、こゝにてはけしうはあらじと思ふを、「思はずにては、いとわしからむ。今かしこなると諸共に、裳着せむ」などいひて日暮れにけり。「同じうは院へ参ら（給せィ）む」とての、しりて出でられぬ。この頃空の氣色なはり立ちて、うらうらとのどかなり。暖かにもあらず、寒むくもあらぬ風、梅にたぐひて、鶯をさそふは、鳥の聲などさまざまなでう聞えたり。屋のうへをながむれば巣くふ雀ども瓦の下を出でゝ入り囀づる。庭の草、氷にゆるされ顔なり。うるふ二月の朔日の日、雨のどかなり。それより後空晴れたり。三日方明きぬと思ふを音なし。よう（繚うけ）かもはや暮れぬるをあやしと思ふ思ふねて聞けば、夜中ばかりに火の騒ぎする所あり。近しと聞けども憂くて起ぎもあがられぬを、これかれ問ふべき人がちから（得）あるまじきもあり。其にぞ起きて出でゝ答へなどして「めひしめりぬめり」とてあかれぬれば、入りてうち臥す程にさきおふ者門にとまる心ちす。あやしと聞く程に、「おはします」といふ。燈火の消えて、這ひ入りに暗ければ、「あなくら。ありつる物を、賴まれたりけるにこそありけれ。近き心ちのしつれば、なむ。今は歸りなむ

かし」といふいふうち臥して、「宵より參りこまはしうてありつるを、をのこども、皆能りてにげにければえものせで。昔ならましかば馬に這ひ乘りても、物しなまし。なでふ身にはあらむ。何ばかりの事あらばかとてきなむやなど思ひつゝ寐にしけるを、かうのゝしりつれば、いとをかし。怪しうてこそありつれ」など志ありげにありけり。明けぬれば車などことやうならむとて急ぎ歸られぬ。六七日物忌と聞く。八日雨降る。よるにで石の上の苔苦しげに聞えたり。十日、加茂へ詣うづ。「忍びて諸共に」といふ人あれば「何かは」とて詣でたり。いつも珍しき心ちする所なれば今日も心のばゐに心ちあらたるべしなどするも、かうびけるはと見ゆらむ。さきの通りに北野にものすれば、さへにもの摘む女わらはべなどもあり。うちつけにゑぐ摘むかと思へば、裳裾思ひやられてけり。ふるおりうちめぐりなどするもいとをかし。くらう家に歸りて、うち寢たるほどに、かどいちはやくたゝく。胸うちつぶれて覺めたれば、思ひのほかにさなりけり。心の鬼は、若してゝちかき所に障ありて歸されてにやあらむと思ふに、人はさりげなけれど、うち解けずこそ思ひあかしけれ。つとめて、少し日たけて歸る。さて五六日ばかりあり。十六日、雨の脚いと心細し。明くれば、このぬる程に、こまやかなる文見ゆ。「今日は方ふたがりたりければなむ。いかゞせむ」などあべし。返り事物してとばかりあればみづからなり。日も暮れ方なるをあやしと思ひけむかし。よに入りて「いかにみてぐらをや奉らまし」など休らひの氣色あれど「いとやうない事なり」などそゝのかし出す。歩み出づるほどに、おひなうよるかずにはしもせじとす」と、忍びやかにいふを聞

く。「さらばいとかひなからむことよ」とありて、「必ず今宵は」とあり。それもしるく、その後覺束なくて八九日ばかりになりぬ。かく思ひおきて、數にはとありしなりけりと思ひあまりて、たまさかにこれよりものしけること、

「かた時にかへし夜數をかぞふればしぎのもろ羽もたゆしとぞなく」。

かへりごと、

「いかなれやしぎのはねがきかき（げイ）知らず思ふかひなき聲に鳴くらむ」

とはありけれど、猶かしても悔しげなる程をなむいかなるにかと思ひける。この頃庭もはらはず。花降り敷きて海ともなりなむと見えたり。今日は二十七日、雨昨日の夕よりくだり、風ののち（二字そのイ）花を拂ふ。三月になりぬ。木の芽少しこがくれになりて、祭の頃覺えてたる（三字さかきイ）ふえ（如元）戀しう、いともそはれ（四字ものあはれイ）なるに添へても音なき事を猶驚しけるも悔し。それより（れイ）いの絶えまよりも、安からず覺えけむは何の心にかありけむ。この月七日になりにけり。「今日ぞこれ縫ひて。愼むとありてなむ」とあり。珍らしげもなければ「うけ給はりぬ」などつれなう物しけり。晝はた（二字つかたイ）より、雨のどかに（はりイ）はじめたり。十日おほやけは、八幡の祭の事とのゝしる。我は人のまうづめる所あめるにいと忍びで出でたるに、晝つ方かへりたれば、あるじの若き人々入りてもの見むと又渡る。さなりとあればかへりたる車もやがて出し立つ。又の日、かへさ見むと、人々の騷ぐにも、心いとあしうて臥しくる（らイ）さるれば、み（むイ）心ちなきに、「これかれそゝのかせば、唯び榔一つに四人ばかり乘りて出でたり。冷はれ（二字ぜんかイ）院のみかど

の北の方に立てり。こと人多くも見ざりければ、人一人こち（二字ほたりイ）して立てれば、とばかりありて渡る人、我が思ふべき人もいじう一人舞ひ人に一人まじりたり。この（ころイ有）ことなるこ（せイ有）なし。十八日に清水へまうづる人に又忍びてまじりたり。そやはて〻まかづれば時は子ばかりなり。諸共なる人の所に歸りて物などものする程に、あるものども「この戌亥の方に（めひイ）なむみゆる」と、「出で〻見よ」などいふなれば「もろこしぞ」などいふなり。うちには猶苦しきにたり（三字かイ）など思ふ程に、人々「かうの殿なりけり」といふにいとあさましういみじ。我が家もついぢばかり隔てたれば騷しう若き人をも惑しやしつらむ、いかで渡らむと惑ふにしも、車のすだれはかけられける。ものとはから（四字さわがしイ）うして乘りてこし程に、皆はてにけり。わかかたかく（二字はかりイ）殘り、あなたのひともこなたにつどひたり。こ〻には大夫ありければ、いかに土にやはしらすらむと思ひつる人も車に乘せ、かど強うなどものしたりければ、らうがはしき事もなかりけり。あはれ、をのことてよう行ひたりけるよと見聞くも悲し。渡りたる人々は、唯命のみわつかなりと見なげくに、火しめりはて〻しばしあれど、問ふべき人（家脱）は音づれもせず。さしもあるまじき所々よりも問ひつ〻（くイ）して、このわたりならむやの、うか（たイ）がひにて急ぎ見えし。よ（かイ）くもありしものを、ましても（なイ）なり（くイ）果てにけるあさましさ、かなた（二字しきイ）なんど語るべき人は、さすがに雜色や侍やと聞き及びける限は、語りつと（聞き以下十一字誤有不審）聞きつるを、あさましあさましと思ふ程にぞかどた〻く。人見て「おはします」といふにぞ少し心落ちゐて覺ゆる。さて「こ〻にありつるをのこどもの、き〻告げつるになむ驚きつる。あさましう來ざりけるが

いとはしきこと」などある程に、(だにイ)ばかりになりぬれば、とりもなきぬと聞く聞く寢にければ、ことしも心ちよげならむやうに、あさいになりにけり。今もとふ人あまたのゝしれば(せにイ)て、「名に(二字おきイ)ても(ものイ)し(たりイ)。騷しうぞなりまさらむとて急がれぬ。暫しありて、男の着るべき物どもなど數あまたあり。「取りあへたるに從ひてなむ。かみにまづ」とてありける。「かく集まりたる人に物せよ」とて、急ぎけるは、俄にひはだの杉色めぐしたり。いとあやしければ見ざりき。物問ひなどすれば、三人ばかりやまひでと口ぜちなどいひたり。廿日はさて暮れぬ。一日の廿日より四日、例の物忌と聞く。こゝにつどひたりし人々は、南ふたがる年なれば、しばしもあらじかし。かく廿(五イ)日あがたありきの所へ皆わたられにたり。こゝろもとなきことはあらじかしと思ふに、我が心そ(うイ)きぞまづ覺えけむかし。かくのみうく覺ゆる身なれば、この命をゆめばかり惜しからずおぼゆる。このそみ(四字もののいみイ)どもは、柱に押し付けてなど見ゆるこそ、もしも惜しからむ身のやうなりければ、その二十五日に、物忌なり果つるよしも、かどの音すれば、「かうてなむ固うさしたる」とものすれば、たうるゝ(四字とはきイ)方に立ちかへり(るイ)音す。又の日は例の方ふたがると、しかじか。晝間にみそ(二字なりイ)て御さ(だイ)いまつ(一字るイ)といふ程に(ぞイ)(いイ)て歸る。それより例のさはりなど聞えつゝ日經ぬ。こゝに物忌繁くて、四月は十よ日になりたれば、世には祭とてのゝしるなり。人、忍びてとさそへば、みそぎよりはじめて見る。わたくしみてぐら奉らむとてまうでたれば、一條のおほきおと(ゞ伊カ)まうであひ給へり。いといかめしうのゝしるなどいへばさらなり。さし歩みなどし給へるさま、いたう似給へるかなと思ふに、大

方の儀式も、これに劣る事あらじかし。これをあなめでた、いかなる人など、思ふ人も聞く人も、いふせ(ィな)きくぞいとゞものは覺えけむかし。さる心ちなからむ人に引かれて、又く[illegible]院のわたりにものする日、大夫も引き續けてあるに、車どもかへるほどに、よろしきさまに見えける、女車のしりに續きそめにければ、後れずおも[illegible]ひきければ、家を見せじとにやわらむ、とく紛れいきにけるを、追ひて尋ねはじめて、又の日かくいひやるめる(ィり)、

「思ひそめ物をこそおもへ今日よりはあふひ遙になりやしぬらむ」

とてやりたるに、さらにおぼえずなどいひけむかし。されど、又、

「わりなくもすぎ立ちにける心かな三輪の山もとたづねはじめて」

といひやりけり。大和(ィへ)立つ人なるべし。かへし、

「三輪の山まち見る事のゆゝしさに杉立てりともえこそ知らせね」

となむ。かくてつごもりになりぬれば、人は卯の花の蔭にも見えず、音だになくてはてぬ。廿八日にぞ例のひもろぎのたよりに「なやましき事ありて」などありき。五月になりぬ。「さうぶの根長き」などこゝなる若き人騒げば、徒然なるに取り寄せてつらぬきなどす。「これかしこに、同じほどなる人に奉り(ィれ)」などいひて、

「かくれぬに生ひそめにけるあやめ草知る人なしに深きした根を」[illegible]

と書きて、なかにむすびつけて、大夫の參るにつけてものす。かへりごと、

「菖蒲草根に顯るゝ今日だに(ィこそ)はいつかと待ちしかひもありけれ」[illegible]。

大夫に、今ひとつ、とかくしてかの所に、

「我が袖は引くとぬらしつあやめ草人のたもとにかけてかわかせ」。

御返り事、

「引きつらむ袂はしらずあやめ草あやなき袖にかけずもあらなむ」

といひたなり。六日のつとめてより、あや(イめ)はじまりて三四日降る。川とまさりて人流るといふ。それもよろづをながめ思ふに、いといふぞ限にもあらねど今はおも馴れにたる事などはいかにもいかにも思はぬに、この石山に逢ひたりし法師の許より、「御いのりをなむする」といひたる。返り事に「今は限に思ひはてにたる身をば佛もいかゞ云給はむ。唯今はこの大夫を人々しくてあらせ給へなどばかりを申し給へ」とかくにぞ何とをりあらむ。かきくらして涙こぼるゝ。十日になりぬ。今日ぞ大夫につけてふみある。「惱ましき事のみありつゝ、覺束なき程になりにけるを、いかに」などぞある。返り事、又の日物するにぞつくる。「昨日は立ちかへり聞ゆべく思ひ給へしを、このたよりならでは聞えむ事もびなき心ちになりにければなむ。いかにとのたまはせたるは何かよろづことわりに思ひ給ふる(ろ脱歟)べき。こゝろみねば、なかなかいと心やすくなむなりにたる。風だにさむくと聞えさすれば、ゆゝしや」と書きけり。「引かれて賀茂て(イの)いづみにおはしつれば、御かへりも聞えで歸りぬ」といふ。「めでたの事や」とぞ心にもあらでうちいはれける。この頃、雲のたゝずまひ、しづ心なくて、ともすれば田子のもすそ思ひやらるゝ。郭公の聲鳴き(あ脱歟)かす。物思はしき人は、いこそ寢られざなれ。

おやしう心よう疑らるゝけなるべし、これもかれも「一夜聞きゝ。この曉にも鳴きつる」といふを、人しもこそあれ、我しもまだしといはむも、いと耻しければ、物はいはで心の中におぼゆるやう、

「我ぞげにとけてぬらめや郭公ものおもひまさる聲となるらむ」

とぞ忍びていはれける。『かくて、つれづれと六月になし（りイ）つ。ひんがしおもての朝日の影いと苦しければ、みなの（二字南のイ）廂に出でたるに、つゝましき人のけ近くおぼゆれば、やをらかたれ（はカ）らふして聞けば、蟬の聲いと繁うなりにたるを、覺束なうてまだ耳を養はぬ翁ありき（けイ）り。庭掃くとて、はきゝを持ちてきの下に立てる程に、俄にいちはやうなきたれば驚きてふり仰ぎていふやう、「よひぞよひぞといふなは（二字てなくイ）蟬來にけるは、蟲だにときせちを知りたるよ」と、ひとりごつに合せて、しかしかと鳴きみちたるに、をかしうもあはれにもありけむ心ちぞあり（おイ）きなかりける。大夫そばの紅葉のうちまじりたる枝につけて、例の處にやる、

「夏山の木のしたつゆのふかければかつぞなげきの色もえにける」。

返り事、

「露にのみいろもえぬれば言の葉をいくしほとかは知るべかるらむ」

などいふ程に、宵になりて珍しき文こまやかにてあり。二十よ日、いとたまさかなりけり。あさましき事と目馴れにたれば、いふかひなくて、中頃なきさまにもてなすも、侘びぬればなめりかしと、かつ思へば、いみじうなむ、あはれにありしよりけにいそぐ。その頃縣ありきの

家なくなりにしかば、こゝにうつろひて、ない(二字さはイ)多く事騷がしくて明け暮るゝも、人めいかにと思ふ心あるまで音なし。』七月十よ日になりて、まらうどかへりぬれば、名殘ならうつれづれにて、ぼにの事のふうなど、さまざまに歎く。人々のいきざしをきく(三字ときめきイ)もあはれにもあり、安からずもあり。三日例のごと調じて、玄て(二字衍歟)まどころの贈文添へてあり。いつまでかこゝにと物はいはで思ふ。さながら八月になりぬ。ついたちの日雨降り暮す。時雨だちたるに、未の時ばかりに晴れて、くつくつぼうしいとかしがしきまで鳴くを聞くにも「われだ(に衍イ)ものは」といはる。如何なるにかあらむ、あやしうも心細う涙浮ぶ日なり。たゞ心(一字このイ)つきに、玄ぬべしといふさとしも玄たれば、この月にやともおもふ。すまひの會あるべしなどものゝしるをばよそに聞く。十一日になりて、いと覺えぬ夢見たりとて、かうてなど、例のまことにしもあるまじき事も多かれど、ちりにもの(五字あるにもあらイ)で、物もいはれねば、「などか物もいはれぬ」とあり。「なに事をかは」といらへたれば、「などかこぬと(衍いイ)はぬ」「にくし、わ(あ衍歟)からしとてうちもつみも玄給へかし」といひ續けらるれば、聞ゆべき限のたまふめれば、「何かは」とて止みぬ。つとめて「今このけいめいすぐして參らむよ」とて歸る。十七日にぞ、かへりあるじとき(く脱歟)。つごもりになりぬれば、契りしけいめい多く過ぎぬれど、今は何事もおぼえず、愼めといふ月日、近うなりにける事をあはれとばかり思ひつゝ經る。大夫、例の所に文やる。さきざきのかへり事どもみづからのとは見えざりければ、恨みなどして、

「夕されの寢屋のつまづま詠むればてづからのみぞ蜘蛛もかきぬる」

とゐるをいかゞ思ひけむ、白い紙に物のさきにして書きたり、

「蜘蛛のかくいとぞあやしき風吹けば空に亂るゝものとゑるゑる」。

立ちかへり、

「露にてもいのちかけたる蜘蛛のいにあらき風をば誰かふせがむ」。

「暗し」と（何てイ）返り事なし。又の日、昨日のゑら紙思ひ出でゝにやあらむ、かくいふめり、

「たじろ（はイ）のやく（たくイ）ひ（燃ひイ）火のあとを今日見れば雪の白濱白くては見し」

とて、やりたるを「物へなむ」とて、かへりごとなし。又の日歸りにたりや、かへりごと、言葉にてこひにやりたれば、「昨日のはいとふるめかしき心ちすれば聞えず」といはせたり。又の日「（一日イ何日イ）はふるめかしとか、いとことわりなり」とて、

「ことわりやいはでなげ（歎き）し年月もふるのやしろのかみさびにけむ」

とあれば、「今日明日は、物忌」とかへりごとなし。明くらむと思ふ日のまだしきに、

「夢ばかり見てしばかりに惑ひつゝ明くるぞ遲きあまの戶ざしは」。

この度も、とかういひ紛らはせば、又、

「さもこそは葛城山になれたらめ唯ひとことやかぎりなりける（むイ）。誰かはならはせる」となむ。若き人こそかやうにいふめれ。我は春の夜のつね、秋のつれづれいとあはれ深き詠めをするよりは殘らむ人の思ひ出でにも見よとて、繪をぞ書く。さるうちにも今や今日やと待たるゝ命やうやう月立ちて日も行けば、されはよ、よも死なじ物を、幸

ひある人こそ命はつゞむれと思ふにそ（行イ）へもなく、九月も立ちぬ。二十七（衍八イ）日の程に、つちをかすとて、ほ（はイ）かなる（きイ）よしも珍しき事ありけるを、人告げに來たるもなめ（にイ）こと（衍とイ）もおぼえねばう（衍くイ）とてやみぬ。』神無月、例の年よりも時雨がちなる心なり。十よ日の程に例の物する山寺に、紅葉も見がてらと、これかれいざなはれば物す。今日しも時雨、降りみ降らずみひねもすに、この山いみじう面白きほどなり。ついたちの日、一條の太政のおとゞ（衍伊尹イ）うせ給ひぬとのゝしる。例の「あないみじ」などいひて聞きあへる夜、初雪七八寸の程たまれ（衍るイ）。あはれあはれいかで君達歩み給はむなど、我がする事もなきさまゝに思ひをれば、例の世の中、いよいよさかえのゝしる。しはすの二十日あまりに見えたり。さて年暮れはてぬれば、例のことしてのゝしり明して、三四日もなりにためれど、こゝには改れる心ちもせず。鶯ばかりぞいつしかとおとしたるをあはれと聞く。五日ばかりの程に晝見え、又十よ日廿日ばかりに、人寐亂れたる程見え、この月ぞ少しあやしと見えたる。この頃、つかさめしとて、例の暇なげにのゝしる。二月になりぬ。紅梅の常の年よりも色こく、めでたう匂ひたり。我がこゝちにのみあはれと見な（ゆイ）れど何と見たる人なし。大夫ぞ折りて例の所にやる、

「かひなくて年へにけりとながむればたもと（袂も脱）花の色にこそしめ」。

かへりごと、

「年を經てなどかあやなく空にしも花のあたりを立ちは染めけむ」

といへり。猶ありのごとやと待ち見る。さてついたち三日の程に、午の時ばかりに見えたり。

おつ（イ作）て恥しうなりにたるにいと苦しけれどいかゞはせむ。とばかりありて、「方ふたがりたり」とて、我が染めたるともいはじ、匂ふばかりの櫻がさねの綾、文はこぼれぬばかりして、かたもんのうへの袴つやつやとして遙におひちらして歸るを聞きつゝ、あな苦し、いみじうもうち解けたりつるかなゝど思ひて、なりをうち見れば、いたうしをれたり。鏡を見ればいとゞ（以下十字三字流布本無）いとにくげにはあり。又こたびうじはてぬらむと思ふ事限なし。かゝる事を盡きせず眺むる程に、朔日より雨がちになりにたれば、いとなげにめを（イ作）やすとのみなむありける。五日、夜中ばかりに、世の中騒ぐを聞けば、され（イき）に燒けにしにくき所、こたみはおしなぶるなりけり。十日ばかりに、又壹つ方見えて、「春日へなむ詣づべき程の覺束なさに」とあるも例ならねばあやしう覺ゆ。二（イ三）月十五日に、院の小弓始まりて出でぬなどのゝしる。前しりへわきてさうぞけば、その事大夫により、とかう物す。その日になりて、上達部あまた「今年やんごとなかりけり。小弓思ひおなく（イげ）りて念ぜざりけるを、いかならむと思ひたれば、さいそには出でゝもろ矢しつ。つぎつぎあまたの數この矢になむさして勝ちぬる」などのゝしる。さて又二三日過ぎて、大夫「後の諸矢は悲しかりしかな」などあれば、まして我も。おほやけには、例のその頃、八幡の祭になりぬ。つれづれなるをとて忍びやかに立てれば、ことにはなやかにて、いみじう追ひ散らすものく。誰ならむと見れば、御ぜんどもの中に、例見ゆる人などあり。さなりけりと思ひて見るにも、まして我が身いとはしき心ちす。すだれ卷きあげ、したすだれおしはさみたれば、おぼつかなき事もなし。この車を見つけて、ふと扇をさしかくして

渡りぬ。御文ある。かへり事のはしに、「昨日はいとまばゆくて渡り給ひにき」とかたるれば「などかは。さはせでぞなりけむ。わかわかしう」と書きたりけり。返り事には「老い耻かしさにこそありけり。まばゆきさまに見なしけむ人こそ、にくけれ」などぞある。又かき絶えて、十よ日になりぬ。日頃の絶えまよりは久しき心ちすれば、又いかになりぬらむとぞおもひける。大夫例の所に文ものする。ことついつけてもあらず。これよりもいと幼きほどの事をのみいひければ、かうものしけり、

「みがくれのほどゝいふとてあやめ草なほしたからむ思ひおふやと」。

かへりごと、なほなほし。

「したからむ程をもしらずまこも草世に生ひそはじ人はかるとて」。

かくて又二十よ日の程に見えたり。さて三四日のほどに、近う火のさわぎす。燃き騒ぎするほどに、いととく見えたり。風吹きて久しう移り行くほどに、とり過ぎぬ。さらなればとて、歸る。こゝにと見聞きける人は、まゐりたりつるよしきこえよとて、かへりぬと聞くも、おもだゝしげなりつるなどかたるも、くしはてにたる所につけて見ゆるならむかし。又つごもりの又の日ばかりにわり。「這ひ入るまゝに、火など近き夜こそきにはゝしけれ」とわれば、「衞士のたくは、いつも」とみえたり。五月の初めの日になりぬれば、例の大夫、

「うちとけて今日だに聞かむ時鳥忍びもあへぬときは來にけり」。

かへり事、

「時鳥かくれなき音を聞かせてはかけはなれぬる身とやなるらむ」。

五日、

「物おもふに年經けりとて(イも)あやめ草今日に(イな)たびたびすぐしてぞしる」。

かへり事、

「つもりける年のあやめもおもほえず今日も過ぎぬる心見ゆれば」

とぞある。いかに恨みたるにかあらむとぞあしかりける。さてれいのもの思ひは、この月も時々同じやうなり。二十日の程に「遠うものする人にとく(から)せむ。この餌袋の内に袋結びて」とあれば、結ぶほどに出で來にたりや。「歌を一重袋に入れ給へ。こゝにいとなやましうて、え讀むまじ」とあれば、いとをかしうて「のたまへる物ある限り讀み入れて奉るをもしもりやうせむ。に(イな)とふくる(イろ)をぞ給はまし」とものしつ。二日ばかりありて、心ちのいと苦しうても、「事久しければなむ、ひとへ袋といひたりしものを、わびてかくなむものしたりし。返しかうかうなどあまた書きつけて、「いとようさだめて給へ」とて、雨もよにあれば、少し情ある心ちして待ち見る。劣り優れり(イりて)見ゆれど、さかしうことわらむもあいなくてかうものしけり、

「うちとのみ風の心をよすめれば返しは吹くも劣るらむかし」

とばかりぞものしける。六七月、同じ程にありつゝはてぬ。つごもり二十八日に「すまひの事により內に侍ひつれど化う(イた)ちものせむとてなむ急ぎ出でぬるな(イむ)」とて見えたりし人、その

まゝに八月廿日餘まで（見ねたり以下十八字流布本無）見えず。聞けば例の所に繁くなむと聞く。移りにけりと思ふ。からくらうつし心もなくてのみあるに、住む所はいよいよ荒れ行くを、（有ひイ）とすくなにもありしかば、人にものして、我がすて（有むイ）所にわらせむといふ事を、我が頼む人定めて、今日明日（ひむイ）えはた（無カイ）中川の程に渡りぬべし、さべしとは、さきざきほのめかしたれど、今日などもなくてやはとて、聞えさすべきこともものしたれど「つゝしむとありてなむ」とてつれもければ、なにかはとて、音もせで渡りぬ。山近う河原かたかき（有げイ）なる所に、今は心のほしきに入りたれば、いとあはれなる住ひと覺ゆ。二三日になりぬれど、知りげもなし。五六日ばかり、「さりけるを告げざりける」とばかりあり。かへりどに「さなむとは告げ聞ゆ（有べイ）となむおもひし。いとびなき所にはたかたう（四字ありけたまふごイ）覺えしかばなむ、見給ひなれにし所にて今一たび聞ゆべくは思ひし」など絶えたるさまにものしつ。「さもこそはあらめ、ひなかなればなむ」とて、跡を斷ちたり。九月になりて、まだしきに、格子を上げて見出したれば、内なるにも、となるにも、川霧立ち渡りて、麓も見えぬ山の見やられたるもいと物悲しうて、

「流れてのとこ（無と絶）頼みてこしかども我が中川はあせにけらしも」

とぞいはれける。ひんがしのかどの前なる田ども苅りてゆひわたしてかけたり。たまさかにも見え問ふひとには、青稲苅らせて馬に飼ひ、やいごめ（有せイ）させなどするわざにおりたちてあり。こだかの人もあれば、たかどもとに立ち出でゝ遊ぶ。例の所に驚かしにやるめり。

「さごろものつまも結ばぬ玉の緒の絶えみ絶えずみ世をや結ばむ」。

かへり事なし。又はど過ぎて、

「露深き袖にひえつゝ、あかすかなたれ長き夜のかたきなるらむ」。

返りごとありとも、よしかゝじ。さて二十餘日にこの月もなりぬれど、跡絶えたり。あさましさは「これして」とて冬の物あり。「御文ありつるは、はや落ちにけり」といへば愚なるやうなり。返事せぬにてあらむとて、何事とも知らでやみぬ。ありしものどもは、してふみもなくてものしつ。その後は夢の通ひ路絶えて年暮れはてぬ。晦に又「これしてとなむ」とてはては文だにもなうてぞ下襲ある。いかにせましと思ひやすらひて、これかれにいひ合すれば、猶「この度ばかり試にせよ。いと忌みたるやうにのみあればばか」と定むる事ありて、留めてき。さるけなくして、朔の日大夫に持せてものしたれば、「いと清くなりぬとてなむありつる」とてやみぬ。あさましといへばおろかなり。さてこの霜月に縣ありきの所に、うぶやの事ありしを、え問はで過してしを、いかになりにけむ。これにだにと思ひしかど、ことごとしきわざはえものせず、ことはたゞ（二字よきイ）をぞさまざまにしたる、例の事なり。白う調じたるこ梅の枝につけたるに、

「冬ごもり雪にまどひしをり過ぎて今日ぞ垣根のうめを尋ぬる」

とて、たちはきのを（さ脱歟）それがしなどいふ人、使にて夜に入りてものしけり。使つとめてぞ歸りたる。薄色のうちきひとかさねかづけたり。

「枝若み雪まに咲ける初花はいかにとゝふに匂ひますかな」

などいふほどに、行ひのほども過ぎぬ。忍びたる方にいざとさそふ人もあり。何かはとてものしたれば、人おほう詣でたり。誰と志るべきにもあらなくに、我一人苦しうかたはらいたし。はらへなどいふ所にたるひ いふかたなうしたり。をかしうもあるかなと見つゝ歸るに、おとなゝるものゝ、わらはさうぞくして髪をかしげにて行くあり。見ればありつる氷を一重の袖に包みもたりて、くひゆく。故あるものにやあらむと思ふほどに、我が諸共なる人、物をいひかけたれば、ひくゝみたる聲にて、「丸をのたまふか」といふを聞くにぞ、なほものなりけりと思ひぬる。頭ついて「これ食はぬ人は、思ふ事ならざるかは」といふ。まがまがしう「さいふものゝ袖ぞぬらすめる」とひとりごちて、又思ふやう、

「我が袖のこほりは春も知らなくにこゝろとけても人の行くかな」。

歸りて三日ばかりありて賀茂に詣でたり。雪風いふかたなう降りくらがりて わびしかりしに、風おこりて臥しなやみつるほどに、志もつきにもなりぬ。しはすも過ぎにけり。十五日なかびあり。大夫の雜色のをのこどもなびすとて騒ぐを聞けば、やうやうゑはひ過ぎて、「あなかまや」などいふ聲聞ゆる。をかしさに、やをら端の方に立ち出でゝ、見出したれば、月いとをかしかりけり。ひんがしざまにうち見やりたれば、山霞み渡りて、いとほのかに心すごし。柱により立ちて思はぬ山など思ひ立てれば、八月より絶えにし人はかなくてむつきにぞなりぬるかしと覺ゆるまゝに、涙ぞさくりもよゝにこぼるゝまで、

「もろ聲に鳴くべきものを鶯はむつきともまだ知らずやあるらむ」

とおぼえたり。十五日に大夫しもにかしなどにもさはひ行ひなどす。などにすらむと思ふ程につかさめしの事あり。珍しき文にて「うまの佐になむ」と告げたり。こゝかしこに喜びものするに、その司のかみ、をぢさへものしたまへば參うでたりける。いとかしこう喜びて、「事のついでに殿にものし給ふなる。「姫君はいかゞものし給ふ。いくつにか御年などは」と問ひけり。歸りてさなむと語れば、いかで聞き給ひけむ、など心もなく思ひかくべき程にしあらねばやみぬ。その頃、院ののしりゆみあべしとて騷ぐ。かみも佐も同じ方に出でゐのて、日々にはいきあひつゝ同じ事をのみのたまへば「いかなるにかあらむ」など語るに二月廿日の程に夢に見る、平ある所に、忍びて思ひ立つ。何ばかり深くもあらずといふべき所なり。野燒きなどする頃の花はあやしう遲き頃なれば、をかしかるべき道なれどまだし。いと奧山は鳥の聲もせぬものなりければ鶯だに音せずとのみぞ珍らかなるさまに涌きかへり流れたる。いみじう苦しきまゝに、辛うじてある人もありかし。うき身一つをもて煩ふにこそはあめれと思ふ思ふ、いりあひ告ぐるほどにぞ至りあひたる。みあかしなど奉りて、人すくばかり待ちゐするほど、いとゞ苦しうて夜あけぬと聞く程に雨降り出でぬ。いとわりなしと思ひつゝ、法師の坊に至りて「いかゞすべき」などいふほどに、ことゞと明けはてゝ、簑笠やと人は騷ぐ。我はのどかにて眺むれば、前なる谷より雲しづしづと昇るに、いともの悲しうて、

「思ひきや天つそらなるあま雲を袖して分くる山踏まむとは」

とぞ覺えけらし。ありいふ方なければさてあるまじければとかうたばかりて出でぬ。哀なる人の身にそひて見るぞ我が苦しさもまぎるばかり悲しう覺えける。からうじて歸りて、又の日いでゐの所より夜更けて歸り來て臥したる所よりいふやう「殿なむきんぢが、司のかみのこぞよりいとせちにのたうぶ事のあるを、そこにあらむ子は、いかゞなりたる、大きなりや、心ちづきにたりやなどのたまひつるを、又かのかみも、殿は仰せられつるよやわつなどなむのたまひつれば、さりつとなむ申しつれば、あさてばかり、よき日なるを御文奉らむとなむのたまひつる」と語る。いとあやしきことかな、まだ思ひかくべきにもあらぬをと思ひつゝ寢ぬ。こてその日になりてまたあり。いと返りしとうち解けしにくげなるさましたり。內はの詞は「月頃は思ふる事ありて殿に傳へ申さゝせ侍りしかば、事のさまばかり聞し召しつ。今はやがて聞えさせよとなむ仰せ給ふと承りにしてと、いとおほけなき心の侍りけると思し咎めさせ給はむを、つゝみ侍りつるになむ。ついでなくてとさへ思ひ給へしに、つかさめし見給へしになむ、この佐の君のかうおはしませば參り侍らむと人見とがむまじう思ひ給ふるに」など、いとあるべかしうになし、端に「武藏といひ侍る人の御曹司に、いかで侍はむ」とあり。返りごと聞ゆべきを「まづこれはいかなる事ぞと、物してこそは」とてあるに「物忌や何やと折惡しとて、え御覽せさせず」とて歸る程に五六日になりぬ。覺束ならうもやありけむ、すけの許に「せちに聞えさすべき事なむある」とて呼び給ふ。いよいよとてある程に、よろこひは歸しつ。その程に雨降ればいとほしとて出づる程

に文とりて歸りたるを見れば紅の薄葉一かさねにて紅梅につけたり。詞は「いそのかみといふことは知ろしめしたらむかし。

春雨にぬれたる花の枝よりも人知れぬ身のそでぞわりなき。

わが君わが君猶おはしませ」と書きて、などにかあらむ、わが君とあるうへは、かいけちたり。佐「いかゞせむ」といへば、「あなむづかしや。道になむ逢ひたるとて、參うでられね」とて出しつ。かへりて、「などか御せうそく聞えさせ給ふあひだにても、御返りのなかるべきといみじう恨み聞え給へ(一作ひる)」など語るぞ(作今)二日三日ばかりありて、からうじて見せ奉りつ。「のたまひつるやうは、何かは、今思ひ定めて」となむいひてしかば、「返り事は早うおし量りてものせよ。まだきに來むとあるをなむびんなかめる。そこにむすめありといふ事は、なべて知る人もあらじ。人ことやうにもこそ聞けとなむのたまふ」と聞くに、あな腹立し、そのはむ人を知るは、などと思はむかし。さて返り事今日ぞものする。「この覺えぬ御せうそこはこの除目の德にやと思ひたまへしかば、即ちも聞えさすべかりしを、殿はなどのたまはせたる事のいとあやしう覺束なきを、尋ね侍るほどのもろこしばかりになりにければなむ。されど猶心えはべらぬは、いと聞えさせむ方なく」とて、ものしつ。はしに「曹司にとのたまはせたる武藏は、みだりに人をとこそ聞きさすめれ」となむ。さて後同じやうなることどもあり。かへりごと、たびことにしもあらぬに、いたうはゞかりたり。「三月になりぬ。むかしこゝにも、女房につけて申しつかせければ、その人の返りごと見せにおこせり、「おぼめかせ給ふめればな

む。これかくなむ殿の仰せはべめる」とあり。見れば、「この月日惡しかりけり。月立ちてとなむ。とよみ御覽じて、たゞ今ものたまはする」などぞ書いたる、いと怪しういち早き暦にもあるかな、なでふ事なり（以下かけ）よか（二字けイ）る、あらじ、この文書く人のそらごとならむと思ふ。朔七八日のほどの晝つ方、「うまの頭おはしたり」といふ。「あなかま、こゝになしと答へよ。ものいはむとあらむに、まだしきにびなし」などいふ程に、入りてあらはなる簾の前に立ちやすらひ、例も淸げなる人の、ねはそ（二字けイ）したるにて、なよゝかなる直衣、太刀ひき佩き例の事なれどあか色の扇すこしみだれたるをもてまさぐりて、風早き程に纓吹き（上げイ）られつゝ立てるさま、繪に書きたるやうなり。淸らの人ありとて、おくまりたる女らの裳などうち解け姿にて出でゝ見るに、時しもあれ、この風のすかた（三字けイ）をとへ吹き内へ吹き惑はせば、すだれをたのみたるものども、我か人かにておさへひかへ騒ぐまに、何かあやしの袖口も皆見つらむと思ふに、死ぬばかりいとほし。よべいでゐの所より、夜更けて歸りてねふしたる人を、起す程にかゝるなりけり（七字けイ）。からうじて起き出でゝ、こゝには人もなきよしいふ。風の心ちあり（わたイ）ゞしさに、格子みは（なかイ）かねておろしたる程になれば、何事いふも宜しきなりけり。強ひて簀子にのぼりて、「今日よき日なり。わらふだかひ（二字たうびイ）給へ。ゐそめむ」など（云イ）ばかり語ひて、「いとかひなきわざかな」と、うち歎きて歸りぬ。二日ばかりありて、唯詞にて、侍らぬほどにものし給へりけるかしこまりなどいひて奉れて後、「いと覺束なくてまかでにしを、いかで」と常にあり。にげない事故に、あやしの聲さ（はイ）でやはなどあるは、ゆるしなきを、「佐にもの聞えむ」

といひがてら蔀にものしたり。「いかゞはせむ」とて格子二まばかりあげて、箕子に火ともして、廂にものしたり。佐たいめして早くとてえんにのぼりぬ。妻戸を引きあけて、「これより」といふめれば、おゆみ寄るもの、又立ちのきて、「まづ御せうそこ聞えさせ給へかし」と、忍びやかにいふなれば、入りてさなむと物するに「思しかならむ所に聞えよかし」など人は（二字衍カ）、少しうち笑ひて、よき程にうちそよめきて入りぬ。佐と物語忍びやかにして、さくら（催馬楽）に扇のうちあたる音ばかり、時々してゐたり。内に音なうてやゝ久しければ、「佐に一日かひなくてまかでにしかば、心もとなきになむと聞え給へ」とて入れたり。「早う」といへば、ゐざりよりておれど、とみに物もいはず。内よりはた、まして音なし。とばかりありて「覺束ならおん（ﾏﾏ）ふみにやあらむ」とて、いさゝかしはぶきの氣色ゑたるにつけて「時しもあれ、惡しかりける折に侍ひあひ侍りて」といふを初めにて、思ひはじめけるよりの事いと多かり。内には唯いとまがまがしき程なれば「かうのたまふも、夢の心ちなむする。ちひさきよりも、世にいふなる鼠追ひの程にだにあらぬを、いとわりなき事になむ」などやうに（歟こ為）たふ。聲いたうつくろひたなりと聞けば、我もいと苦し。雨うち亂る暮れにて、蛙の聲いと高し。夜更け行けば内より「いとかくむくつけゞなるあたりは内なる人だにゑづ心なく侍るを」といひ出したれば、「何か、これよりまろと思ひ給へ。むか（歟かは）しは怖ろしきと侍らじ」といひつゝ、いたう更けぬれば、「佐の君の御いにき（二字衍カ）も近うなりにたらむを、その程の雜役をだに仕うまつらむ。殿にかうなむ仰せられしと、御けしき給はりて、又のたまはせむ事聞えさせに、あすあさての

程にも侍ふべしとあれば、立つなゝり」とて、几帳のほころびよりかきわけて見出せば、簀子にともしたりつる火は、早う消えにけり。内には物のしりへにともしたれば、光ありて、との消えぬるも知られぬなりけり。影もや見えつらむと思ふにあさましうて、「腹黒う、さえぬとものたまはせで」といへば「何かは、侍ふ人も、答へで立ちにけり、來そめぬれば、志ばしばものしつゝ同じ事をものすれど、こゝには御ゆるされあらむ所よりさぞあらむときこそは、わびてもあべかめれと思ふ人（二字へか）ば、せやんとなき許されはなりにたるを」とて、かしかましう責む。「この程こそは殿にも仰せは（侍り有）し。二十よ日のほどなむよき日はあなる」とてせめらるれど、佐、司（の使有）にとて祭にものすべければその事をのみ思ふに、人はいにき（二字ひイ）のはつるを待ちけり。みそぎの日犬の死にたるを見つけて、いふかひなくとまりぬ。さて猶こゝにはいといちはやき心ちすれば思ひかくる事もなきを「これそよりかくなむ仰せありき（如元）」とて「ぜむること聞えよ」とのみあれば、いかでさはのたまはせ（る脱思）にかあらむ、いとかしかましければ見せ奉りつべくて御返りこといひたれば「さは思ひしかども、佐の急ぎしつる程にて、いとは（るイ有）かになむなりにける。おもへ（三字もイ）御心變らずば、八月ばかりになむ、なりに（二字にもイ）ものし給へかし」とあれば、いとめやき心ちして「かくなむはべめる。いちはやかりけるこよみは、ふぢやうなりとは、さればこそ聞えさせしか」と物したれば、返り事もなくて、とばかりありて「みづからいと腹立しき事聞えさせになむ參りつる」とあれば「何事にか、いとおどろおどろしく侍らむ。さらばこなたに」といはせたれば、「よしよしかう夜晝參りつるとあれば何ごとに

か（つろ以下十一字流本無）さてはいとゞ遙になりなむ」とて、いらへてとばかり佐と物語して、立ちて硯紙とこひたり。出したれば、書きておしひねりて入れていぬ。見れば、

「契りおきし卯月はいかに時鳥我が身のうきにかけ離れつゝ。

いかにし侍らまし。くしいたくこそ。暮にを」と書きたり。手もいとはべり（三字なつかはイ）しげなりや。返りごとやがて追ひて書く、

「なほ忍べ花橘の枝やなきわふひ過ぎぬる卯月なれども」。

さてその日頃えらび設けつる、廿二日の夜ものしたり。こたみは、さきざきのさまにもあらず、いとつゞやかになりまさりたるものから、責むるさまいとわりなし。「殿の御許されは道なくなりにたり。その程はるかに覺え侍るを、御かへりみにて（有はイ）いかで（有かイ）となむ」とあれば「いかに思してかうはのたまふ。その遙なりとの給ふ程にや、うひごとゞもせむとなむ見ゆる」といへば「かひなきほども、物語はするは」といふ。「これはいとさにはあらず。あやにくにおもぎらひするほどなればこそ」などいふも、聞き分かぬやうにいとわびしく見えたり。「むね走るまで覺え侍るを、このみすの内にただにさぶらふと思ひ給へてまかでむ。一つ一つをだに、爲すことに志侍らむ。かへりみさせ給へ」といひて、すだれに手なかくれば、いとけうとけれど聞きも入れぬやうにて、「いたう更けぬらむを、例はさしも覺え給ふ夜になむある」と、「つれもなういへば、「いとかうは思ひきこえさせずこそありつれ。あさましう、いみじう、限りなううれ（有はイ）しと思ひ給ふべし。御暦もちて（くイ）（三字おち）元になりぬ。わるく聞えさする御氣色も

かゝ(一字あイ)かり」などおり立ちてわびいりたれば、いとなつかしさに、「猶いとわりなきことなりや。院にうちになど侍ひ給ふらむ。晝間のやうに思しなせ」などいへば、その事の心は苦しうこそはあれ。とにすわりてこたふるにいといふかひなし。いらへわづらひて、はては物もいはねば「あなかしこ、御けしきも惡しうはべめり。さらば今は仰事なからむには聞えさせじ。いとかしこく」とて、つまはじきうちして、ものもいはで暫しありて起ちぬ。出づるに「まつ」などいはすれど、「更にとら(二字おイ)せで」なんど聞くに、いとほしくなりて、又つとめて、「いとあやにくに、まつとものたまはせで、歸らせ給ひ(元如)めりしは、たひらかにや」と聞えさせになむ。

「ほとゝぎすまた問ふべくも語らはでかへる山路のこぐらかりけむ

こそいとほしう」と書きて物したり。さし置きてな(イけ)ければ、かれより、

「問ふこゑはいつとなけれど郭公あけてくやしきものをこそ思へ

といたうかしこまりうけ給はりぬ」とのみあり。さゝ(二字きイ)ねりても、又の日、「佐の君今日人々のがりものせむとするを、もろともにつかさにと聞えになむ」としとし(四字とてかイ)ごとにものしたり。例の硯こへば紙おきて出したり。入れて(三字置きて入れ)たるを見れば、恠しうわなゝきたる手にて「昔の世に如何なる罪を作くり侍りて、から妨げさせ給ふ身となり侍りけむ。あやしきさまにのみなりまどひ侍るは、なり侍らむことも、いと難し。さらにさらに聞えさせじ。今は高き峰になむのぼり侍るべき」などふさに書きたり。かへりごと「あな怖ろしや。などからはのたまはすらむ。恨み聞え給ふべき人はことにこそはべめれ。峰は知り侍らず。谷のしるべはし

も」と書きて出したれば、佐、一つに乗りて物しぬ。佐の賜はり馬、いと美くしげなるを、とりて歸りたり。その暮に又ものして「一夜のいとかしこきまで聞えさせ侍りしをおもひ給ふれ・ば、更にいとかしこし。今はたゞ殿より仰せあらむほどを、(まちイ)さふらはむなど聞えさせになむ今宵はおひ直りして參り侍りつる。な死にそと仰せ侍りしは、千歳の命堪ふまじき心ちなむゑ侍る。手を折り侍るは、および三つばかりはいとようふしおきし侍ると、思ひ(三つ以下二十字流布本缺)やりのはるかに侍れば、つれづれとすごし侍らむ月日を殿居ばかりを簀のはしわたり許され侍りなむや」といとたとしへなくけざやかにいへば、それに從ひたる。かへりごとなど物して、今宵はいととく歸りぬ。佐を、明暮呼びまとはせるつ(さイ)まに物す。女繪をかしくかけりけるがありければ、取りて懷に入れてもて來たり。見れば釣殿と思しき高欄におしかゝりて、中島の松をまは(もイ)りたる女あり。そこもとに紙の端に書きてかくおしへて(二字だ、りイ)

「いかにせむ池のみづ波さわぎてはこゝろのうちのまつにかゝらば」。

またやもめずみしたる男の、文書きさして、つらづゑつきて、ものおもふさましたる所に、

「さゝがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも」

とものして、もて歸り置きけり。かくて猶同じごと「絶えず殿にもよほし聞えよ」など常にあれば返りごとも見せむとて、かくのみあるを「こゝには答へなむ煩ひぬる」とものしたれば、「(いまイ)程はさ物してしを、などか、かくはあらむ。八月待つ程は、そこにびゞしうもてなし給ふとか、世にいふめる。それはしも、うめきも聞えてむかし」などあり。たはぶれと思ふ程に、た

びたびかゝれば、（お脱）やしう思ひて、「こゝにはもよほし聞ゆるにはあらず。いとうるさく侍れば、すべてこゝにはの給ふまじきことなりと、物し侍るを、なほう（イせ）あめれば、見給へ餘りてなむ。さてなでふとにも侍るかな。

今更にいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれせぬ身を。

あなまばゆ」とものしけり。かうの君、猶この月の内には頼みをかけて責む。この頃例の年にも似ず。郭公たちおとをしてといふばかりに鳴くと聞くにもかく文の端つかたに、例ならぬ郭公の音なひにも、安き空なく思ふべかめれ（イ伝）、かしこまりを、甚だしうおきたれば、つやゝかなることはものせざりけり。すけ、うまぶねしばしと借りけるを、例の文のはしに、「佐の君に異ならずば、うまぶねなしと聞えさせ給へ」とあり。かへりごとにも「うまぶねはたてたる所ありて覺えずなれば、給ふらむに煩しく（イ伝）はか（二字イ伝）」なんど物したれば、立ち歸りて「たてたる所はべなるふねは、今日明日の程に掃ふすべき所はしげになむ」とぞある。かくて月果てぬれば、遙になり果てぬるに、おもひうじぬるにやあらむ、音なうて月立ちぬ。四日に雨いといたう降るほどに、すけの許に、「あまゝ侍らば立ち寄らせ給へ。聞えさすべき事なむある。うへには身の宿世の思ひ知られ侍りて、聞えさせずと執り申させ給へ」とあり。かくのみ呼びつるは、何ごとゝいふこともなくて、戯れつゝぞ歸しける。今日かゝる雨にもさはらで、同じ所なる人（イ伝）ものへまうでつ。障ることもなきにと思ひて出でたれば、ある者「女かみには、きぬ縫ひて奉るこそよかなれ。さし給へ」と、寄り來てさゝめけば、「いで試みむかし」と

て、かとりのひゝなぎぬ三つ縫ひたり。したがひどもにかうぞ書きたりけるは、如何なる心ばへにかありけむ、かみぞ知るらむかし、

「白妙のころもは神にゆづりてむへだてぬ中にかへしなすべく」。

たま（二字き ナイ）、

「唐衣なれにしつまをうちかへしわが志たがひになすよしもがな」。

又、

「夏ごろもたつやとぞ見る千早ふる神をひとへにたのむ身なれば」。

暮るれば歸りぬ。明くれば五日の曉にせうとたる人はかより來て「いづら、今日のさそう（二字は よイ）は、などか遲うは仕うまつる。よる（二字早 くイ）しつるこそよけれ」などいふに驚きてしやうぶふくなれば、皆人も起きて、格子放ちなどすれば、「暫し格子はな參りそ。たゆくかまへてせむ。御覽ぜんにもともなりけり」などいへど、みな起き果てぬれば、事行ひてつはかす。昨日の雲返す風うち吹きたれば、あやめの香は、やうかゝへていとをかし。簀子に佐と二人ゐて「天下の木草を取り集めて、めづらしげなる藥玉せむ」などいひて、そゝくりゐたる程に、「この頃はめづらしげなう、郭公のむらとがり（がイ）てそふくにおり居たる」などいひのゝしる聲なれど、空をうちかけりて、二聲三聲聞えたるは、身にしみてをかしうおぼえたれば、「山郭公今日とてや」など、いはぬ人なうぞうち遊ぶめり（元如）。少し日たけてかんの君、「まてつがひに物し給はゞ、諸共に」とあり。「さぶらはむ」といひつるを、しきりに「遲し」などいひて人くれば物しぬ。又の

日もまだしきに、「昨日はうそ（三字如此イ）ふかせ給ふことしげかんめりしかば、え物も聞えずなりにき。今のあひだも御いとまあらばおはしませ。うへ（此間脱字）のつらくおはしますと丶（一字闕）更にいはむかたなし。さりとも命侍らば、世の中は見給へてむ。死なば思ひ較べてもいかゞあらむ。よしよしこれは忍びごと」とて、みづからはものせず。又二日ばかりありて、「まだしきよりよくきせむ。そなたにや參りつべき」などあれば「早う物せよ。こゝには何せむに」とて出し立つ。「例の（せむに以下十一字流布本無）事もなかりつ」とて、歸りきたりぬ。「今二日ばかりありて、とり聞ゆべきことあり。おはしませ」とのみ書きて、まだしきにあり。「唯今さぶらふ」といはせて、しばしある程に、雨いたう降りぬ。夜さへかとりて止まぬ（れイ）ば、えものせでなさけなし。せうそこをだにとて、「いとわりなき雨に障りてわび侍り。かばかり、

「絶えず行くわがなか河の水まさりをちなる人ぞこひしかりける」。

かへりごと、

「あはぬせを戀しとおもはゞ思ふどちへむ中川にわれをすませよ」。

などあるほどに、暮れはてゝ雨やみたるにみづからな（一字きたれイ）り。例の心もとなきすぢをのみあれば「なにかみつとのたまひし。および一つは折りあへぬほどに、過ぐめるものを」といへば「それもいかゞ侍らむ。ふじやうなる事どもゝはべめれば、くじはから（二字てイ）またお（花イ）らす程にもやなり侍らむ。など（イほ）いかでおとゞの御こと（イ例）のみ、なか切りて續くわざも忘侍りにしがな」とあれば、いとをかしうて、「歸る雁を鳴かせて」など答へたれば、いとはからかにうち笑

ふ。さてかの美々しうもてなすとありしことをおもひて、「いとまめやかには心一つにも侍らず。そゝのかし侍らむことは難き心ちなむある」と物すれば、「いかなることにか侍らむ。いかでこれをだにうけ給はらむ」とて、あまたたび責めらるれば、げにとも知らせむ、詞にいへば出でにくきをと思ひて、「御覽ぜさするにも、びなき心ちすれど、たゞこれ催し聞えむとの苦しきを見たまへとてなむ」とてかたはなつに(二字ろべきにイ)そはやり(ろイ)と(们イ)てさし出でたれば簀子にすゞり出でゝ、おぼるなる月にあてゝ久しう見て入りぬ。「紙の色にさへまぎれて、更に之見給へず。猶侍ひて見給へむ」とて、さしいれ(在イ)(つイ)。「(はイ在イ)や今はやりてむ」といへば「猶しばしやらせ給はむ」などいひて、これなるとほのかにも見たり顔にもいはで、たゞ「こゝにわづらひ侍りし程の力なれば愼むべき物なり」と人もいへば、「心細う物の覺え侍る事」とて、をりをりにそのことゝも聞えぬ程に、玄のびてうちずて(一字イ無)することぞある。「つとめてつかさに物すべきと侍るも(二字れはイ)佐の君に聞えにやりてさふらはむ」とて、立ちぬ。うは(よイ)べ見せし文、枕上にあるを見れば、われ(がイ)やると思ひしところはことにて、又やれたる所あるはあやしと(さイ)に思はくの返り事せしに、いかなる駒かとありし事のとかく書き付けたりしを、やりとりと(たイ)るなべし。まだしきに、すけのもとに「みだり風起りてなむ聞えしやうにはえ參らぬ。こゝに午時ばかりにおはしませ」とあり。例の何事にもあらじとて物せぬ程に文あり。それには「例よりもいそぎ聞えさせむとしつるを、いとつゝみ思ひ給ふることありてなむ。よべの御文をわりなく見給へ難くてなむ。わざと聞えさせ給はむ事こそ難からめ。をりをりには、よろしかべ

いさまにと賴み聞えさせながら、はかなき身のほどをいかにと、あはれに思う給ふる」など例よりもひきつくろひて、らうたげに書いたり。返り事は、やうなく常にしもと思ひてせずなりぬ。又の日猶いとほしく若やかなるさまにもありと思ひて、「昨日は人の物忌侍りしに、日暮れてなむ。心あるとやといふらむやうに、おき給へしをりにはいかでと思ひ給ふるを、ついでなき身になり侍りてこそ、心し（一字ちありイ）げなる御はしがきをなむげにと思ひ聞えさせそ（げイ）や、紙の色は誰もやおぼつかなう思さるらめ」とて、これよりぞものしたりけるをりに、法師ばらあまたありてさわがしげなりければさしおきて來にけり。まだしきにこれより、さまかはりたる人々ものし侍りしに、日も暮れてなむ使もまゐりにける。

「なげきつゝあかしくらせば郭公この卯のはなのかげに鳴きつゝ」

いかにし侍らむ。今宵はかしこまり」とさへあり。返り事は「昨日のかへりにてこそ歸（侍イ）りけめ。何かさまではとあやし。

かげにしもなどか鳴くらむ卯の花のえだにしのぶの心とぞ聞く」

とて、「うへ書いけちてはしに、「かたはなる心ちし侍りや」と書いたり。その程に左京の官うせ給ひぬと物すべかめる。内にも愼み深うて山寺になどしげうて、時々驚かしてみなつきもはてぬ。七月になりぬ。八月近き心ちするに、見る人は猶いとうら若く、いかならむと思ふとしげきにまぎれて、わが思ふとは今は絶え果てにな（けイ）り。七月中の十日ばかりになりぬ。かうの君いとあさり、かれは我を賴みたるかなと思ふ程に、或人のいふやう「こ（うイ）まのかんの君は

もとのめを盜みとりてなむゐるとそたろに隱れゐ給へる。いみじうをこなる事になむ世にもいひ騷ぐなる」と聞きつれば、我は限なくめやすい事をも聞くかな、月の過ぐるにいかにいひやらむと思ひつるにと思ふものから、怪しの心やとは思ひなむかし。さて又文あり。見れば人しも問ひたらむやうに「いでおなおさましや。心にもあらぬ事を聞えさせはつべきにもすまじ。かゝらぬすぢにてもとり聞えさする事侍りしかば、さりとも」などぞある。かへりでと「心にもあらぬことのたまはせたるは、何にかわらむ。かゝらぬさまにて、とりもの忘れをせさせ給はざりけると見給ふるなむいとうしろやすき」とものしけり。』八月になりぬ。この世のなかはもがさおこりてのゝしる。二十日のほどに、このわたりにも來にたり。佐いふかたなく重く煩ふ。いかゞはせむとて事絕えたる人にもつぐばかりあるに、我がうちは、まいてせむかた知らず。さいひてやはとてふもして告げたれば、かへりでといとあらゝかにており。さては詞にてぞいかにといはせたる。さるまじき人だにぞきとぶらふめると見る心ちぞそへてたゞならざりける。うまの頭もなくしばしばとひ給ふ。九月ついたちにをこたりぬ。八月二十よ日よりふけりそめにし雨、この月もやまず降りくらがりて、この中河も大路も、一つに行きあひぬべく見ゆれば、今や流るゝとさへおぼゆ。世の中いとおはれなり。かどのわさだもいまだ刈り集めず。たまさかなるおまゝに、やいでめばかりぞわかにしたる。もがさせりいかにもさかりにて、この一條の大政の大とのゝ子二人ながら、その月の十六日になくなりぬといひ騷ぐ。思ひやるもいみじき事限なし。これを聞くもをこたりに

たる人ぞゆゝしき。かくてあれどことなる事なければまだありきもせず。廿日あまりにいと珍しき文にて「佐はいかにぞ。こゝなる人は皆をこたりにたるに、いかなれば見えざらむとおぼつかなさになむ。いとにくゝし給ふめれば、うとむとはなくて、いどみなむ過ぎにける。忘れぬ事はありながら」と、こまやかなるを、あやしとぞ思ふ。かへりごと、問ひたる人(道綱)のうへばかりきく(二字きこイなてイ)はしに「まこと忘るゝは、さもや侍らむ」と書きてものしつ。佐ありきしはじむる日、道に、かの文やりし所行きあひたりけるを、いかゞ思ひけむ、車のとうかゝりてわづらひけりとて、あくる日「よべはさらになむ知らざりける。さても、

年月のめぐりくるまのわになりて思へばかゝるをも(イう)ありけり」

といひたりけるを取り入れて見て、その文のはしに、なほなほしき手して、あ(イか)ゝす。「こゝにはこゝには」とぢうてんがちにかへしたりけむこそ、なほあら[illegible]。かくて神無月になりぬ。二十日あまりのほどに、「忌み違ふとて、わな(イた)りたるところにて聞けば、かのは(イ三字無)かの忌の所には、子産みたなりと人いふ。なほあらむよりはあなにくとも聞き思ふべけれどつれなうて、ある宵のほど(イ従)もじだいなどものしたるほどに、せうとゝおぼしき人、近う這ひよりて、ふところよりみちのくに紙にて、引き結びたる文の、枯れたる薄にさしたるをとり出でたり。「あやし。たがぞ」といへば、「なほ御覧ぜよ」といふ。あけてひかげに見れば、心つきなき人の手のすぢにいとよう似たり。書いたる事は、「かのいかなるこまかとありけむはいかゞ。

霜がれの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな。

あな心苦し」とぞある。我が人にいひやりて、くやしと思ひし事のなゝもじなればいとあやし。「こはなぞと後堀河殿のことにや」と問へば「おほきおとゞの御文なり。御隨身にあるそれがしなむ殿にもて來たりけるを、おはせずといひけれど、なほぞたしかにとてなむ、おきてけり」といふ。いかにして聞き給ひけることにかあらむと、思へども思へどもいとあやし。又人ごとにいひ合はせなどすれば、ふるめかしき人、聞くけて、「いと忝し。はや御返りして、かのもて來たりけむ御隨身に取らすべきものなり」とかしこまる。されば、かくおろかには思はざりけめど、いとなほざりなりや。

「さゝわけばあれこそまさめ草枯のこまなつくべきもりの下かは」

とぞ聞えける。ある人のいふやう、「これがかへし今一度せむとて、なからまではあそばしたなるを、未あむまだしきとのたまふなる」と聞きて久しうなりぬるなむをかしけり。臨時の祭あさてとて佐俄に舞ひ人にめされたり。これにつけてぞ珍しき文ある。「いかゞする」などゝているべきもの皆ものしたり。試樂の日あるやう「けがらひの暇なる所なれば内にもえ參るまじきを、參り來て見出したてむとするを、寄せ給ふまじかなればいかゞずつらむ。いとおぼつかなき事」とあり。胸つぶれて今さらになにせむにかと思ふ事玄げれば「とくさうぞきて、かしこへを參れ」とていそがしやりたりければ、まづぞうち泣かれける。諸共に立ちて舞ひ人わたりならせて參らせてけり。祭の日いかゞは見ざらむとて出でたれば、またのつらになでふこともなきびりやうせしわくちうちおろして立てり。口の方、すだれの下

より淸げなるかいねりに、紫の織物重なりたる袖ぞ（イさし）出でためるを女車なりけりと見る所に、車のしりの方にあたりたる人の家の門より六位なるもの丶、たちはきたるふるまひ出で來て、前の方にひざまづきて、ものをいふに、驚きて目をとゞめて見れば、かれが出で來つる車のもとには、あかき人黑き人多うて數もしらぬほどに立てりけり。よく見もていけば、見し人々のあたりなりけりと思ふ。例の年よりはことどうなりて、上達部の車かいつれてくるもの皆かれを見てなべし。そことにもとまりて、おは（イな）じ所に口をつどへて立ちたり。我が思ふ人にはかに出でたる程よりは、供人などもきらきらしう見えたり。上達部手毎に菓物などさし出でつゝものいひなどし給へばおもたゝしき心ちす。又ふるめかしき人も、例のゆるされぬとにて山吹のなかにあるを、うち散りたる中にさし分きてとらへさせて、かのうちより酒などとり出でたれば、かはらけさしかけられなどするを見れば、唯そのかた時ばかりや、行く心もありけむ。さて佐（細道）にかくてやなどさかしらがる人のありてものいひ續く人あり。八橋の程にやありけむ、始めて、

「かづらきや神代のしるし深からばたゞ一ことにうちもとけなむ」。

かへりごとこたびはな（イあ）めり。

「葛城の蛛手はいづこやつはしのふみ見てけむ（イり）とたのむかひなく」。

こたびぞかへりごと、

「通ふべき道にもあらぬやつはしの（イを）ふみ見てきとてなに賴むらむ」

と書きて去て（元如）書いたり。又、

「なにかその通はむ道のかたからむふみ始めたるあとをたのめる（イは）」

又かへりごと、

「尋ぬらむ（イも）かひやなからむ大空のくもぢは通ふあとはかもあらじ」。

まけじと思ひ顔なめれば、又、

「おは空も雲のかけはしなくばこそかよふはかなき歎きをもせめ」。

かへし、

「ふみゝれど雲のかけはしあやふしと思ひしらずもたのむなるかな」。

又やる、

「なほをらむ心たのもしあしたづのくもぢおりくるつばさやはなき」。

これたみはくらしとてやみぬ。しはすになりにたり。又、

「かたしきし（イて）としはふれどもさごろものなみだに去むる時はなかりき」。

「ものへなむ」とてかへり事なし。又の日ばかり返りごと、こひにやりたれば、「そばの木に見き」とのみ書きておこせたり。やがて、

「我がなる（イか）はそばのぬるかと思ふまで見きとばかりも氣色ばむかな」。

かへりごと、

「天雲の山のはるけきまろ（イつ）なればそばぬるいろはときはなりけり」。

「ふる年にせち分するを、こなたに」などいはせて、

「いとせめて思ふ心を年のうちにはるくることもしらせてしがな」。

かへり事なし。又ほどなき事をすくせなどやありけむ、

「かひなくて年暮れはつる物ならば春にもあはぬ身ともこそなれ」。

こたみもなし。いかなるにかあらむと思ふほどに、かういふ人あまたあなりと聞く。さてなるべし、

「我ならぬ人まつならば待つといはでいたくな越しそ沖つ白浪」。

返り事、

「越しもせずこさずもあらず浪よせの濱はかけつゝ年をこそ經れ」。

年せめ（二字かへりイ）て、

「さもこそは浪の心はつらからめとしさへ越ゆるまつもありけり」。

かへりごと、

「千歳經るまつもこそあれほどもなく越えては歸る程やとはか（イほ）らず」

とぞある。あやし、なでふ事ぞと思ふ。風（浪上脱）さわるゝほどにやる、

「吹く風につけてものを思ふかな大海の浪のしづこゝろなく」

とてやりたるに、「聞ゆべき人は今日のことを知りてなむ」と、異手してひと葉ついたる枝につけたる。たちかへり「いとほしう」などいひて、

「我が思ふ人はたそとは見なせどもなげきのえだにやすまらぬかな」

などぞいふめる。今年いたうわる〻となくて、はだら雪ふた〻びばかりぞ降りつる。佐の朔日のものどもの(四字カ具こそイ)白馬にものすべきなどものしつるほどに、暮れはつる日にはなりにけり。明日のものをりまかせつ〻、人にまかせなどして思へば、かうながらこ(にイ)ひけふになりにけるもあさましう、みたまなど見るにも、例の盡きせぬことにおぼ〻れてぞはてにける。年のはてなれば、夜いたう更けてぞた〻きくなる。今に平に(流布本有本ノマ丶四字)

(以下後人所補歟)佛名のあしたに雪の降りければ、

「年の内に積み消す庭にふる雪はつとめてのちはつもらざらなむ」。

殿かな(れイ)給ひて久しうありて、七月十五日ぼと(れイ)のことな(流布本脱)きこえのたまへるつかそつかそとよ(入字御返り亦にイ)

「か〻りけるこの世も知らず今とてやあはれはちすの露をまつらむ」。

四の宮(爲平親王)の御ねの日に、殿にかはり奉りて、

「峰の松おのがよはひの數よりもいまいく千世ぞきみにひかれて」。

その子の日の日記を宮に侍ふ人に、借り給へりけるを、その年は后宮(安子上村)うせさせ給へ・けるほどに暮れはてぬれば、又の年の春かへし給ふとて、はしに、

「袖の色かはれる春を知らずしてこぞにならへる野邊のまつらむ(かもイ)」。

内侍のかんの殿、「天の羽衣といふ題をよみて」と聞えさせ給へりければ、
「ぬれぎぬに天の羽衣むすびけりかつはもしほの火をし消たねば」。
みちの國にをかしかりける所々を繪に書きて、もてのぼりて見せ給ひければ、
「みちのくのちかの島にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし」。
ある人加茂の祭の日婿とりせむとするに、男のもとよりあふひ嬉しきよしいひおこせたりけるかへりごとに、人にかはりて、
「たのみ(イは)ずな御垣をせばみあふひ(イは)ゝ(イくさ)しめのほかに(イも)ありといふなり(元如)」。
親の御忌にて、一つ所にはらか(イから)たちあつりておはするを、こと人々は忌みはてゝ家に歸りぬる(イに)一人とまりて、
「深草のや(イさ)とになりぬるやどもなどとまれるつゆのたのもしげなき」。
かへし、ためまさの朝臣、
「深草の誰もこゝろにしげりつゝあさぢがはらのつゆにけぬべし」。
當代の御いかに、ゐのこのかたを作りたりけるに、
「よろづ世をよばふ山べの猪の子こそきみがつ(イさか)ふゆるよはひなるべし」。
殿より八重山吹を奉らせ給へりけるに、
「誰かこの數は定めしわれはたゞとへとぞおもふやまぶきのはな」。
はらからの、みちのくにの守にて下るを長雨しける頃、その下る日、晴れたりければ、かの國

にかはくといふ神あり。

「我が國の神のまもりや添へりけむかはくげかりしあまつ空かな」。

かへし、

「今ぞ知るかはくと聞けば君がため天照る神の名にこそはあれ」。

鶯、柳の枝にありといふ題を、

「我が宿のやなぎの糸は細くとも來るうぐひすは絶えずもあらなむ」。

傅の殿、始めて女のがりやり給ふにかはりて、

「今日ぞとやつらく待ち見むわが戀は（イの）始もなきかこなたなるらむ（イべし）」。

度々のかへり事な（イか）りければ、時鳥のかたをつくりて、

「飛びちがふ鳥のつばさをいかなればすだつ歎きに返さゞるらむ」。

猶返り事せざりければ、

「さゝがにのいかになるらむ今日だにも知らばや風の亂る氣色を」。

又、

「絶えてなほすみのえになき中ならばきしに生ふなるくさもがなき」。

かへし、

「すみよしの岸に生ふとは知りにけりつまむ摘まじはきみがまにまに」。

さねかたの兵衛の佐にあはすべしと聞きたまひて、少將にぞ（イた）おはしけるほどのことなる

べし、
「かしはぎの森だにしげく聞くものをなどか三笠の山のかひなき」。
かへし、
「かしはぎの（杜）三笠のやまも夏なればしげり（かれ）ど（て）わやな人の知らなく」。
かへりごとするを、親か（は）らはか（から）ら制すと聞きて、まろ小菅にさして、
「うちそばみ君一人見よまろこすげまろは一すげなしといふなり」。
わづらひ給ひて、
「うつせがは淺さの程も知らは（れ）じと思ひしわれやまづ渡りなむ」。
かへし、
「みつせ川われよりさきに渡りなばみぎはにわぶる身とやなりなむ」。
かへりごと、するをりせぬをりのわりければ、
「かくめりと見れば絶えぬるさゝがにの糸ゆゑ風のつらくもあるかな」。
七月七日、
「七夕にけさひく糸の露をにもみたわむけしきも見でややみなむ」。
これはわしたの、
「わ（何ご）ろよりわしたのそでぞぬれにけるなにを逢まの慰めにせむ」。
入道殿（兼家）、中納言爲雅朝臣のむすめを忘れ給ひにける後、「日陰の糸結びて」とて給へりけれ

ば、それにかはりて、

「かけて見し末も絶えにし日陰草なにゝよそへて今日結ぶらむ」。

女院（上東門院）いまだ位におはしましゝをり八講行はせ給ひける棒げ物にはちすの珠數參らせ給ふとて、

「となふなる波の數にはわらねどもはちすのうへの露にかゝら（なイ待）む」。

同じ頃、傅の殿、橘を參らせ給へりければ、

「かばかりもとひやはしつるほとゝぎすはな橘のこゝ（二字イか）にこそありけ（一字イ無）れ」。

かへし、

「橘のも（イなり）ものならぬ身を忘れば忘づえなくてはとはぬとぞ聞く」。

小一條の大將（濟時）、ひつにおはしけるに、傅の殿（道綱）を「必ずおはせ」とて、待ち聞え給ひけるに、雨いたう降りければ、えおはせぬ程に、隨身雨いたうふりければえおはせぬほどにすゐじん（下缺）（一字闕）「したくらをおほみ」と聞え給へりける、かへり事に、

「ぬれつゝも戀しきみちはより（イぎ）なくにまださこへ（一字闕）ずると思はざらむ」。

中將の、尼に家を借り給ふに、借じ奉らざりければ、

「蓮葉の浮葉をせばみこの世にもやどらぬつゆと身をぞ知りぬる」。

かへし、

「はちすにもたまゐよとこそむすびしか露は心を置きたがへけり」。

粟田野見て歸り給ふとて、

「花薄招きもやまぬやまざとにこゝろのかぎりとゞめつるかな」。

故爲雅朝臣、普門寺に千部の經供養するにおはして歸り給ふに、小野殿の花いとおもしろかりければ、車引き入れて歸り給ふに、

「たきゞこることは昨日につきにしをいざをのゝえはこゝにくたさむ」。

駒くらべのまけわざとおぼしくて白銀のこりわりかご(そりわりこイ)をして院に奉らむとし給ふに、このけに歌かゝむとて攝政殿(家實)より歌聞えさせ給へりければ、

「千代もへよたちかへりつゝ山城のこまにくらべしこりの末なり」。

給の所に、山里にながめたる女あり。時鳥鳴くに、

「都びとねてまつらめやほとゝぎすいまぞ山べを鳴きて過ぐなり(元如)」。

この歌は寬和二年の歌合にあり。法師舟に乘りたる所、

「渡つ海はあまの舟こそありと聞け乘りたがへても漕ぎてけるかな」。

殿(家實)かれ給ひて後、「通ふ人あべし」など聞え給ひければ、

「いざ(はイ)さらば(にイ)いかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」。

歌合に卯の花、

「卯の花の盛あるべしやまざとのころもさほせるをりと見ゆるは」。

時鳥、

「ほとゝぎす今ぞさわたる聲すなるわが告げなくに人や聞くらむ」。
あやめ草、
「菖蒲草今日のみぎはを尋ぬればねをしりてこそかたよりにけれ」。
螢、
「五月雨やこぐらき宿の夕されはおもてるまでもてらすほたるか」。
とこなつ、
「咲きにける枝なかりせばとこなつものどけき名をや殘さゞらまし」。
蚊遣火、
「あやなしや宿の蚊やり火つけそめてかたらふ虫の聲をさけつる」。
蟬、
「おくるといふ蟬の初聲聞くよりぞいまかと猴のあきを知りぬる」。
夏草、
「こまやくる人や別くると待つほどに繁りのみます宿のなつくさ」。
戀、
「思ひつゝ戀ひつゝはねじに逢ふと見る夢をさめてはくやしかりけり」。
いはひ、
「數知らぬ眞砂にたづの程よりはちぎりそめけむ千代ぞすくなき」。

（以下後人奥書）心得ぬ所々は本のまゝに書けり。賀の歌は日記にあれば書かず。

蜻蛉日記 終

枕草紙

春は曙、やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏はよる、月のころはさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山ぎはいと近くなりたるに、烏のねどころへゆくとて三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるいとをかし。日入りはてゝ風のおと蟲のねなどいとあはれなり。冬は雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒き、火などいそぎおこして炭もてわたるもいとつきづきし。ひるになりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝひとゝせながらをかし。正月一日はまいてそらのけしきうらうらとめづらしくかすみこめたるに、世にあるほどとある人は、すがたかたち心ことにつくろひ、君をも我が身をも祝ひなどしたるさま殊にをかし。七日は雪まの若菜青やかに摘み出でつゝ、例はさしもさる物めぢかゝらぬ所にもてさわぎ、白馬見むとて里人は車清げに玄たてゝ見にゆく。中の御門のとじきみひきいるゝ

程かしらども一ところにまろびあひて、さしぐしも落ち、用意せねば折れなどして笑ふも又をかし。左衞門の陣などに殿上人あまた立ちなどして、舍人の馬どもをとりて驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、たて蔀などの見ゆるに、とのもりづかさ、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝうちにも見るはいとせばきほどにて、舍人がかほのきぬもあらはれ、白きものゝゆきつかぬ所はまことに黑き庭に雪のむら消えたる心ちしていと見ぐるし。馬のあがり騷ぎたるもおそろしく覺ゆれば、引きいられてよくも見やられず。

八日、人々よろこび（四字なし にはかに）してはしりさわぎ、車のおともつねよりは殊に聞えてをかし。

十五日はもちかゆのせくまゐる。かゆの木ひきかくして、いへのごだち、女房などのうかゞふを、うたれじとよういして、つねにうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ちあてたるはいみじうけうありとうちわらひたるもいとはえばえし。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年よりあたらしうかよふむこの君などのうちへ參るほどを、こゝろもとなくところにつけて我はとおもひたる女房ののぞき、おくのかたにたゝずまふを、まへに居たる人はこゝろえてわらふを、「あなかまあなかま」とまねきかくれど、君見知らずがほにておほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむ」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐればあるかぎり笑ふ。男君もにくからず、あいぎやうづきてゑみたる。ことにおどろかず、顏すこしあかみて居たるもをかし。又かたみに打ちて男などをさへぞうつめる。いか

なる心にかはらむ、なきはらだち、打ちつる人をのろひ、まがまがしくいふもをかし。うちわたりなどやんごとなきも今日はみな亂れてかしこまりなし。除目のほどなどうちわたりはいとをかし。雪降りこほりなどしたるに申しぶみもてありく。四位五位わかやかにこゝちよげなるはいとたのもしげなり。老いてかしら白きなどが人にとかくあんないひ、女房のつぼねによりておのが身のかしこき由など心をやりて說き聞かするを、若き人々はまねをし笑へど、いかでか知らむ。「よきにそうし給へ、けいし給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそいとあはれなれ。

三月三日、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳などいとをかしきこそ更なれ。それもまだまゆにこもりたるこそをかしけれ。ひろごりたるはにくし。花も散りたるのちはうたてぞ見ゆる。

おもしろく咲きたる櫻を長く折りて、大きなる花がめにさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に出し袿してまらうどにもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこ近く居て物などうち言ひたるいとをかし。そのわたりに鳥蟲のひたひつきいと美くしうてとびありくいとをかし。

祭のころはいみじうをかしき。木々のこの葉まだしげうはならでわかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空の景色のなにとなくそゞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、よるなど忍びたる杜鵑のとほうそら耳かと覺ゆるまでたどたどしきを聞きつけたらむ、何ごゝちかはせむ。祭近くなりて青朽葉二藍などのものどもおしまきつゝ、細櫃のふたに入れ、紙な

どにけしきばかり包みて行きちがひもてありくこそをかしけれ。すそで、むらご、まきぞめなど常よりもをかしう見ゆ。わらはべのかしらばかり洗ひつくろひて、なりは皆なえほころび、うち亂れか丶りたるもあるが、けいし、くつなどの緒すげさせ、裏をさせなどもてさわぎいつしかその日にならむと急ぎ走りありくもをかし。あやしう踊りてありくものどものさうぞきたてつれば、いみじくちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほどほどにつけて親をばの女姉などのともして、つくろひありくもをかし。

ことことなるもの

法師の詞、男女の詞。げすの詞にはかならず文字あまりしたり。

おもはむ子を法師になしたらむこそはいと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうに思ひたらむこそいとほしけれ。さうじもの丶わしきをくひ、いぬるをも、若きは物もゆかしからむ。女などのある所をもなどか忌みたるやうにさしのぞかずもあらむ。それをも安からずいふ。まして驗者などのかたはいと苦しげなり。み嶽、くまの、か丶らぬ山なくありく程に、おそろしき目も見、しるしあるきこえ出できぬれば、こ丶かしこによばれ時めくにつけてやすげもなし。いたく煩ふ人にか丶りて、もの丶けてうずるもいと苦しければ、こうじてうちねぶれば「ねぶりなどのみして」と咎むるもいと所せく、いかに思はむと、これは昔のことなり。いまやうはやすげなり。

大進なりまさが家に宮の出でさせ給ふに、ひんがしのかどはよつあしになしてそれより御

輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども陣屋の居ねば入りなむやと思ひて、かしらつきわろき人もいたくもつくろはず、よせておるべきものと思ひあなづりたるに、びらうげの車などは門ちひさければさはりてえ入らねば、例の筵道しきておるゝに、いとにくゝ腹だゝしけれどいかゞはせむ。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るもねたし。御前に參りてありつるやうけいすれば「こゝにも人は見るまじくやは。などかはさしもうちとけつる」と笑はせ給ふ。「されどそれは皆めなれて侍ればよくしたてゝ侍らむにしこそ驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に車入らぬ門やはあらむ。見えば笑はむ」などいふ程にしも「これまゐらせむ」とて御硯などさしいる。「いで、いとわろくこそおはしけれ。などてかその門せばくつくりて住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて「家のほど身の程に合せて侍るなり」といらふ。「されど門のかぎりを高くつくりける人も聞ゆるは」といへば「あなおそろし」と驚きて「それはうていこく（五字う こうイ）がことにこそ侍るなれ。ふるきしんじなどに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たまたま此の道にまかり入りにければ、かうだにわきまへられ侍る」といふ。「その御道もかしこからざめり。筵道しきたれば皆おち入りてさわぎつるは」といへば「雨の降り侍ればげにさも侍らむ。よしよし、また仰せかくべき事もぞ侍る。罷り立ち侍りなむ」とていぬ。「何事ぞ、なりまさがいみじうおぢつるは」と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつるといひ侍る」と申しておりぬ。おなじ局に住む若き人々などしてよろづの事も知らず、ねぶたければ皆ねぬ。東のたいの西の廂かけてある北のさうじにはかけがねもなかりけるを、それも尋ねず家

ぬしなれば案内をよく知りてあけてけり。あやしうかればみたるもの丶聲にて「侍はむにはいかゞ」とあまたたびいふ聲に、驚きて見れば几帳のうしろに立てたる燈臺の光もあらはなり。さうじを五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきずきしきわざゆめに（三字ゆめゆめイ）せぬもの丶、家におはしましたりとてむげに心にまかするなめりと思ふもいとをかし。我が傍なる人を起して「かれ見給へ。かゝる見えぬもののあめるを」といへば、頭をもたげて見やりていみじう笑ふ。「あれはたぞ、けそうに」といへば「あらず。家あるじと局あるじと定め申すべき事の侍るなり」といへば「門の事をこそ申しつれ。さうじあけ給へとやはいふ」。「なほその事申し侍らむ。そこに侍はむはいかにいかに」といへば「いと見苦しきこと、更にえおはせじ」とて笑ふめれば、「若き人々おはしけり」とてひきたてゝいぬるのちに笑ふこといみじ。あけぬとならば唯まづ入りねかし。せうそこをするによかなりとは誰かはいはむと、げにをかしきに、つとめておまへ（中宮定子）に參りて啓すれば「さる事も聞えざりつるを、よべのことにめでゝ入りにたりけるなめり。あはれあれをはしたなくいひけむこそいとほしけれ」と笑はせ給ふ。

姫宮（脩子）の御かたのわらはべのさうぞくせさすべきよし仰せらるゝに「わらはのあこめのうはおそひは何色に仕うまつるべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮のおまへのものはれいのやうにてはにくげに候はむ。ちうせいをしき、ちうせい高つきにてこそよく候はめ」と申すを「さてこそはうはおそひ着たるわらはべもまゐりよからめ」といふを「猶れいの人

のやうにかくな言ひ（八字つらにこれなイ）笑ひそ。いとさすくなるものを、いとはしげに」とせいし給ふもをかし。ちゆうげんなるをりに、「大進物聞えむとおり」と人の告ぐるを聞しめして、「又なでふこといひてわらはれむとならむ」と仰せらるゝもいとをかし。「ゆきて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば「一夜の門のことを、中納言（惟仲生昌兄）に語り侍りしかばいみじう感じ申されて、いかでさるべからむをりに對面して申し承らむとなむ申されつる」とて又こともなし。一夜の事やいはむと心ときめきしつれど、「今しづかに御局にさぶらはむ」と辭していぬれば、歸り參りたるに、「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事をさなむとまねび啓して、「わざとせうそこし呼び出づべきことにもあらぬを、おのづからしづかに局などにあらむにもいへかし」とて笑へば、「おのが心ちにかしこしとおもふ人の褒めたるを嬉しとや思ふとて告げ知らするならむ」とのたまはする御氣色もいとをかし。

うへに侍ふ御猫はかうぶり給はりて、命婦のおとゞ（おもとイ）とていとをかしければ、かしづかせ給ふが、はしに出でたるを、乳母の馬の命婦「あなまさなや、入り給へ」とよぶに、きかで日のさしわたりたるにうちねぶりて居たるをおどすとて「おきなまろいづら。命婦のおとゞ（おもとイ）くへ」といふに、まことかとてしれものの走りかゝりたれば、おびえ惑ひてみすの内に入りぬ。あさがれひのまにうへはおはします。御覽じていみじう驚かせ給ふ。猫は御ふところに入れさせ給ひてをのこども召せば藏人忠隆參りたるに、「このおきなまろうちちようじて犬島につかはせ。唯今」と仰せらるればあつまりて狩りさわぐ。うまの命婦もさいなみて「乳母かへて

む。いとうしろへわたし」と仰せらるれば、かしこまりて御前にも出でず。犬は狩り出で、瀧口などして追ひつかはしつ。「あはれいみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に頭の辨、柳のかづらをせさせ桃の花かざしにさゝせ、櫻こしにさゝせなどしてありかせ給ひしをり、かゝる目見むとはおもひかけゝむや」とあはれがる。「おものゝ折はかならず向ひさぶらふに、さうざうしくこそあれ」などいひて三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにぞの犬のかく久しくなくにかあらむと聞くに、萬の犬どもはしり騒ぎとぶらひに行き、みかはやうどなるもの走り來て「あないみじ。犬を藏人二人して打ちたまひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸り參りたるとてちようじ給ふ」といふ。「心うのとや。おきなまろなり。忠隆さねふさなむ打つ」といへば、せいしに遣るほどに辛うじてなき止みぬ。「死にければ門のほかにひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする。夕つかたいみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるがわなゝきありけば「あはれまろか。かゝる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、「おきなまろ」と呼べど、みゝにも聞き入れず。「それぞ」といひ、「あらず」といひ、口々申せば「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて、しもなるをまづとみのことゝて召せば參りたり。「これはおきなまろか」と見せさせ給ふに、「似て侍れどもこれはゆゝしげにこそ侍るめれ。又おきなまろと呼べば悦びてまうでくるものを、呼べど寄りこず。あらぬなめり。それは打ち殺して棄て侍りぬとこそ申しつれ。さるものどもの二人して打たむには生きなむや」と申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて物くはせたれどくはねば、あらぬものにいひな

して止みぬる。つとめて御けづりぐしに參り御てうづまゐりて御鏡もたせて御覽ずれば、侍ふに、犬の柱のもとについ居たるを「あはれきのふおきなまろをいみじう打ちしかな。死にけむこそ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらむ。いかにわびしき心ちしけむ」とうちいふほどに、このねたる犬ふるひわなゝきて淚をたゞ落しにおとす。いとあさまし。さはこれおきなまろにこそありけれ、よべは隱れ忍びてあるなりけりと、あはれにてをかしきことかぎりなし。御鏡をもうちおきて「さはおきなまろ」といふに、ひれ伏していみじくなく。御前(中宮)にもうち笑はせ給ふ。人々參り集りて、右近内侍めして、かくなど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへ(一條院)にもきこしめして、渡らせおはしまして「あさましう犬などもかゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども聞きに參り集りて呼ぶにも今ぞ立ちうごく。猶かほなど腫れたためり。「物てうぜさせばや」といへば「つひにいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて臺盤所のかたより「まことにや侍らむ。かれ見侍らむ」といひたれば「あなゆゝし。さるものなし」といはすれば、「さりとも終に見つくるをりも侍らむ、さのみもえかくさせ給はじ」といふなり。さてのちかしこまりかうじゆるされてもとのやうになりにき。猶あはれがられて、ふるひなき出でたりし程こそ世に忘らずをかしくあはれなりしか。人々にもいはれてなきなどす。

正月一日、三月三日はいとうらゝかなる。五月五日はくもりくらしたる。七月七日はくもり、夕がたは晴れたる空に月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日はあかつきがたより雨

すこし降りて菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめてはやみにたれどなほ曇りてやゝもすれば降り落ちぬべく見えたるもをかし。

よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、御前の方に向ひてたてるを拜し舞踏しさわぐよ。

今内裏のひんがしをば北の陣とぞいふ。ならの木の遙にたかきが立てるを常に見て「いくひろかわらむ」などいふに、權中將の「もとより打ちきりて、定澄僧都の枝扇にせさせばや」とのたまひしを、山階寺の別當になりてよろこび申す日、近衞づかさにてこの君の出で給へるに、高きけいしをさへはきたれば、ゆゝしく高し。出でぬるのちこそ「などその枝扇はもたせ給はぬ」といへば、「ものわすれせず」と笑ひ給ふ。

山は

小倉山、三笠山、このくれ山、わすれ山、いりたち山、かせ山、ひはの山。かたさり山こそ誰に所おきけるにかと(十字いかなるらむとイ)をかしけれ。いつはた山、のちせの山、笠取山、ひらの山。とこの山は「わが名もらすな」とみかどのよませ給ひけむいとをかし。伊吹山。朝倉山、よそに見るらむいと(九字こそ見るかイ)をかしき。岩田山。大比禮山もをかし。臨時の祭の使など思ひ出でらるべし。たむけ山。三輪の山いとをかし。音羽山、待かね山、玉坂山、耳無山、末の松山、葛城山、美濃のお山、はゝそ山、位山、吉備の中山、嵐山、さらしな山、姨捨山、小鹽山、淺間山、かたゝめ山、かへる

山、妹背山。

峰は

ゆづるはの峰、阿彌陀の峰、いやたかの峰。

原は

たか原、みかの原、あしたの原、その原、萩原、粟津原、奈志原、うなゐこが原、あべの原、篠原。

市は

辰の市。つばいちは大和にあまたあるなかに、長谷寺にまうづる人のかならずそこにとゞまりければ、觀音の御えんあるにやと心ことなるなり。おふさの市、しかまの市、飛鳥の市。

淵は

かしこ淵、いかなる底の心を見えてさる名をつきけむといとをかし。ないりその淵、誰にいかなる人の敎へしならむ。靑色の淵こそまたをかしけれ。藏人などの身にしつべくて。いな淵、かくれの淵、のぞきの淵、玉淵。

海は

水うみ、よさの海、かはくちの海、伊勢の海。

わたりは

しかすがのわたり、みつはしのわたり、こりずまのわたり。

みさゝぎは

うぐひすのみさゝぎ、かしはゞらのみさゝぎ、あめのみさゝぎ。

家は

近衞御門。二條、一條もよし。染殿の宮、せかゐ(院イ)、菅原の院、れんせい院、朱雀院、とうゐ、小野宮、紅梅、縣のゐど、東三條、小六條、小一條。

清涼殿のうしとらのすみの北のへだてなる御さうじには荒海のかた、いきたるものどものおそろしげなる、手ながあしながをぞかゝれたる。うへのみつぼねの戸押しあけたれば常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ程に、高欄のもとに、青きかめの大きなる据ゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば、高欄のもとまでこぼれ咲きたるに、ひるつかた大納言殿(伊周)櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御ぞども、うへに濃き綾のいとあざやかなるを出して參り給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口のまへなる細き板敷にゐ給ひてものなど奏し給ふ。みすのうちに女房、櫻のからぎぬどもくつろかにぬぎ垂れつゝ、藤山吹などいろいろにこのもしく、あまたこはじとみのみすよりおし出でたるほど、ひのおましのかたにおものまゐる。足音高し。けはひなどおしおしといふ聲聞ゆ。うらうらとのどかなる日の景色いとをかしきに、はてのごばんもたる藏人參りておもの奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言參らせ給うて、ありつる花のもとにかへりゐ給へり。宮(定子)の御まへの御几帳押しやりて、なげしのもとに出でさせ給へるなど、唯何事もなくよろづにめでたきを、侍ふ人も思ふことなき心ちするに、「月も日もかはりゆ

けどもひさにふる三室の山の」といふふることをゆるゝかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。げにぞちとせもあらまほしげなる御ありさまなるや。

はいせんつかうまつる人のをのこどもなど召す。ほどもなくわたらせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるゝに、目はそらにのみにて唯おはしますをのみ見奉れば、ほど遠き目も放ちつべし。白きしきしおしたゝみて「これに唯今覺えむふること一つづゝ書け」と仰せらるゝ。とに居給へるに「これはいかに」と申せば「とく書きて參らせ給へ。をのこはことくはへ候ふべきにもあらず」とて御硯とりおろして「とくとく、たゞ思ひめぐらさで、なにはづも何もふと覺えむ事を」と責めさせ給ふに、などさは臆せしにか、すべておもてさへ赤みてぞ思ひみだるゝや。春の歌花の心などさいふいふも上臈二つ三つ書きて「これに」とあるに、

年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたるを御覽じて、「唯この心ばへどものゆかしかりつるぞ」と仰せらるゝついでに「圓融院の御時御前にて、さうしに歌一つ書けと殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくゝすまひ申す人々ありける。更に手のあしさよさ、歌の折にあはざらむをも知らじと仰せられければ、わびて皆書きける中に唯今の關白殿の三位の中將と聞えける時、

しほのみついづもの浦のいつもいつも君をばふかくおもふはやわが

といふ歌の末をたのむはやわがと書き給へりけるをなむいみじくめでさせたまひける」と

仰せらるゝも、すゞろに汗あゆる心ちぞ志ける。若からむ人はさもえ書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。れいいとよく書く人もあいなく皆つゝまれて書き汚しなど志たるもあり。古今のさうしを御まへに置かせ給ひて、歌どものもとを仰せられて「これが末はいかに」と仰せらるゝに、すべて夜晝心にかゝりて覺ゆるもあり。げによく覺えず、申し出でられぬことはいかなることぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それも覺ゆるかは。まいて五つ六つなどは唯覺えぬよしをぞけいすべけれど「さやはけにくゝ、仰せ事をはえなくもてなすべき」といひ、口をしがるもをかし。知ると申す人なきをばやがて詠み續けさせ給ふを「さてこれは皆知りたることぞかし。などかくつたなくはあるぞ」といひ歎く。「中にも古今あまた書き寫しなどする人は皆覺えぬべきことぞかし。村上の御時、宣耀殿の女御芳子と聞えけるは、小一條の左大臣殿師尹の御むすめにおはしましければ、誰かは知り聞えざらむ。まだ姫君におはしける時、ちゝおとゞの敎へ聞えさせ給ひけるは、一つには御手を習ひ給へ。次にはきんの御琴を、いかで人にひきまさむとおぼせ。さて古今の歌二十卷を皆うかべさせ給はむを、御學問にはせさせ給へとなむ聞えさせ給ひけると、きこしめしおかせ給ひて御ものいみなりける日、古今をかくしてもて渡らせ給ひて、例ならず御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御草紙をひろげさせたまひて、その年その月、なにのをりその人の詠みたる歌はいかにと問ひきこえさせたまふに、　かうなりと心得させたまふもをかしきもの、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらばいみじかるべき事とわりなくおぼし亂れぬべし。そのかたおばめ

かしからぬ人二三人ばかり召し出でゝ、でいし志てかずを置かせ給はむとて聞えさせ給ひけむ程、いかにめでたくをかしかりけむ。御前に侍ひけむ人さへこそうらやましけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがて末までなどはあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかで猶少しおぼめかしくひがごと見つけてをやまむとねたきまでおぼしける。十卷にもなりぬ。更に不用なりけりとて、御草紙にけうさんしてみとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久しうありて起きさせ給へるに、猶この事さうなくてやまむ、いとわろかるべしとて、下の十卷をあすにもならばことをもぞ見給ひ合するとて、今宵定めむとおほとなぶら近く參りて夜ふくるまでなむよませ給ひける。されど終にまけ聞えさせ給はずなりにけり。うへ聲渡らせ給うてのち、かゝる事なむと人々殿に申し奉りければ、いみじうおぼし騒ぎて御誦經などあまたせさせ給うてそなたに向ひてなむ念じくらさせ給ひけるもすきずきしくあはれなる事なり」など語り出させ給ふ。うへ一卷も聞しめしてめでさせ給ひ、「いかでさ多くよませ給ひけむ、我は三まき四まきだにもえよみはてじ」と仰せらる。「昔はえせものも皆すきをかしうこそありけれ。この頃かやうなる事やは聞ゆる」など御まへに侍ふ人々、うへの女房のこなた許されたるなど參りて、口々いひ出でなどしたる程はまことに思ふ事なくこそ覺ゆれ。おひさきなくまめやかにえせざいはひなど見て居たらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世の中の有樣も見せならはさまほしう、内侍などにても志ばしあらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば

あはあはしうかろきことに思ひ居たる男こそいとにくけれ。げにそも又さる事ぞかし。かけまくも畏きおまへを始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人はすくなくこそはあらめ。女房のずんざどもその里よりくるものども、をさめ、みかはやうど、たびしかはらといふまでいつかはそれを耻ぢかくれたりし。とのばらなどはいとさしもあらずやあらむ。それもある限はさぞあらむ。うへなどいひてかしづきすゑたるに、心にくからず覺えむことわりなれど、内侍のすけなどいひて折々うちへ參り、祭の使などに出でたるもおもだゝしからずやはある。さて籠り居たる人はいとよし。ずりやうの五せちなど出すをり、さりともいたうひなび、見知らぬこと人に問ひ聞きなどはせじと心にくきものなり。

すさまじきもの

晝ほゆる犬、春の網代、三四月の紅梅のきぬ、ちごのなくなりたる産屋、火おこさぬ火桶すびつ、牛にくみ得たる牛飼。はかせのうちつゞきによしうませたる。かたたがへにゆきたるにあるじせぬ所。ましてせちぶんはすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、されどそれはゆかしき事をも書き集め、世にある事を聞けばよし。人のもとにわざと清げに書きたてゝやりつる文の返事見む、今はきぬらむかしと、あやしく遲きと待つほどに、ありつる文の結びたるもたて文も、いときたなげにもちなしふくだめて、うへにひきたりつる墨さへ消えたるをおこせたりけり。「坐しまさゞりけり」とも若しは「物忌とて取り入れず」などいひてもて歸りたるいとわびしくすさまじ。又かならず來べき人の

許に車を遣りて待つに入り來る音すれば、さなありと人々出で丶見るに、車やどりに入りてながえほうとうちおろすを「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず。渡り給はず」とて牛の限りひき出で丶いぬる。又家ゆすりてとりたる聟の來ずなりぬるいとすさまじ。さるべき人の宮仕するがりやりて、いつしかと思ふもいとはいなし。ちごの乳母の唯あからさまと　てぬるをもとむれば、とかくあそばし慰めて「疾くこ」といひ遣りたるに、「今宵はえ參るまじ」とて返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふる男ましていかならむ。待つ人ある所に夜すこし更けて、忍びやかに門を叩けば胸すこしつぶれて人出してとはするに、あらぬよしなきものゝ名のりしてきたるこそすさまじといふ中にもかへすがへすすさまじけれ。驗者のもの丶けてうずとていみじうしたりがはにとこやずゞなどもたせて、せみ聲にしぼり出し讀み居たれど、いさゝかさりげもなく、護法もつかねば集めて念じ居たるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまで讀みこうじて更につかず。「たちね」とてずゞとり返してあれど「げんなしや」とうちいひて、ひたひよりかみざまにかしらさぐりあげて、あくびをおのれうちしてよりふしぬる。ぢもくにつかさ得ぬ人の家、今年はかならずと聞きてはやうありしものどもの外々なりつる、片田舍に住むものどもなど皆集り來て、出で入る車のながえもひまなく見え、物まうでする供にも我も我もと參り仕うまつり、物くひ酒飮みのゝしりあへるに、はつる曉までかど叩く音もせず、あやしなど耳立て丶聞けば、さきおふ聲して上達部など皆出で給ふ。ものきゝに宵より寒がりわなゝき居

りつるげすをのこなどいと物うげに歩みくるを、をるものどもはとひだにもえ問はず。外よりきたるものどもなどぞ「殿は何にかならせ給へる」などとふ。いらへには「なにのぜんじにこそは」とかならずいらふる。まことに頼みけるものはいみじうなげかしと思ひたり。つとめてになりてひまなく居りつるものもやうやう一人二人づゝすべり出でぬ。ふるきものゝさもえゆき離るまじきは、來年の國々を手を折りてかぞへなどしてゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさましげなり。よろしう詠みたりと思ふ歌を人のもとに遣りたるに返しせぬ。けさう文はいかゞせむ。それだにをりをかしうなどある返り事せぬは心おとりす。又さわがしう時めかしき處にうちふるめきたる人の、おのがつれづれといとまあるまゝに、昔覺えて殊なる事なき歌よみしておこせたる物のをりの扇いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけ（學ばせイ）たるに、その日になりて思はずなる繪など書きてえたる。うぶやしなひ、うまのはなむけなどの使に祿などとらせぬ。はかなきくすだま、うづちなどもてありくものなどにも猶かならずとらすべし。思ひかけぬ事にえたるをばいと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと心ときめきしてきたるに、たゞなるはまことにすさまじきぞかし。

むことゝて四五年までうぶやのさわぎせぬ所。おとなゝる子どもあまた、ようせずはうまごなどもはひありきぬべき人の親どちのひるねしたる。傍なる子どもの心ちにも、親のひるねしたるはよりどころなくすさまじくぞありし。ねおきてあぶる湯は腹だゝしくさへこそ覺ゆれ。しはすのつごもりのなが雨。一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからむ。八月のしら

がさね。ちあえずなりぬる乳母。

たゆまるゝもの

さうじの日のおこなひ、日遠きいそぎ、寺に久しくこもりたる。

人にあなづらるゝもの

家の北おもて（六字イ無）、あまり心よきと人に知られたる人、年老いたるおきな（八字イ無）、又あはあはしき女、ついぢのくづれ。

にくきもの

急ぐ事あるをりにながごとするまらうど。あなづらはしき人ならばのちになどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし。硯に髮の入りてすられたる。又墨のなかに石こもりてきしきしときしみたる。俄かに煩ふ人のあるにけんざもとむるに、例ある所にはあらでほかにあるを尋ねありく程に待遠に久しきを辛うじて待ちつけて悦びながら加持せさするに、この頃もののけにこうじにけるにや、ゐるまゝにすなはちねぶり聲になりたるいとにくし。なんでふことなき人のすゞろにえがちに物いたういひたる。火桶すびつなどに手のうらうちかへし、皺おしのべなどしてあぶりをるもの。いつかは若やかなる人などのさはしたりし。老いばみうたてあるものこそ火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝにおしすりなどもするらめ。さやうのものは人のもとに來てゐむとする所を、まづ扇してちり拂ひすてゝゐも定まらずひろめきて、狩衣の前下ざまにまくり入れてもゐるかし。か

ゝるとはいひかひなきものゝきはにやと思へど、すこしよろしきものゝ式部大夫、駿河のせんじなどいひしがさせしなり。又酒のみて赤き口をさぐり、髭あるものはそれを撫でゝ盃人に取らする程のけしき、いみじくにくしと見ゆ。又のめなどいふなるべし。身ぶるひをし、かしらふり、口わきをさへひきたれて「わらはべのこうどのに參りて」など謠ふやうにする、それはしもまことによき人のさし給ひしより心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身のうへなげき人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりていひ知らぬをばえんじそしり、又わづかに聞きわたる事をば我もとより知りたる事のやうに、ことびとにも語りしらべいふもいとにくし。物聞かむと思ふ程に泣くちご、烏の集りて飛びちがひ鳴きたる。忍びてくる人見知りて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に隱し伏せたる人のいびきしたる。又ひそかに忍びてくる所に長烏帽子してさすがに人に見えじと惑ひ出づる程に、物につきさはりてそよろといはせたる、いみじうにくし。いよすなど懸けたるをうちかつぎて、さらさらとならしたるもいとにくし。もかうのすはましてこはき物のうちおかるゝ、いとしるし。それもやをら引きあげて出入するは更にならず。又やり戸など荒くあくるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてあくるは鳴りやはする。あしうあくればさうじなどもたをめかし、ごほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに蚊のほそ聲になのりて、かほのもとに飛びありく羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ。きしめく車に乘りてありくもの、耳も聞かぬにやあらむといとにくし。我が乘りたるはその車のぬしさへ

にくし。物語などするにさし出で丶我ひとりさいまくるもの、凡てさし出は童もおとなもいとにくし。昔物語などするに、我が知りたりけるはふと出で丶いひくたしなどするいとにくし。鼠の走りわりくいとにくし。わからさまにきたる子どもわらはべをらうたがりて、をかしきものなど取らするにならひて常に來て居入りて、てうどやうち散らしぬるにくし。家にても宮仕ひ所にても逢はでありなむと思ふ人のきたるに、そらねを玄たるを我が許にあるものどものおこしよりきては、いぎたなしと思ひ顔にひきゆるがしたるいとにくし。今まゐりのさしこえて物玄り顔に、をしへやうなる事いひうしろみたるいとにくし。わが知る人にてあるほどはやう見し女の事褒めいひ出だしなどするも、過ぎてほどへにけれど猶にくし。ましてさしわたりたらむこそ思ひやらるれ。されどそれはさしもわらぬやうもわりかし。はなひて誦文する人。大かた家の男しうならでは高くはなひたるものいとにくし。のみもいとにくし。きぬの下にをどりわりきてもたぐるやうにするも。又犬のもろ聲に長々となきわげたる、まがまがしくにくし。乳母の男こそわれ、女はされど近くも寄らねばよし。をのこゞをば唯我が物にして、立ちそひりやうじてうしろみ、いさゝかもこの御事にたがふものをばざんし、人をば人とも思ひたらず、あやしけれどこれがとがを心に任せていふ人もなければ、所えいみじきおも丶ちして事を行ひなどするに。

小一條院をば今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて渡らせ給ふ。常にまうのぼらせ給ふおまへはつぼなれば、前栽などうゑ、

ませゆひていとをかし。二月十日の日のうらうらと長閑に照り渡るに、わたどのゝ西の廂にてうへ（一條院）の御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳御笛の師にて物し給ふを、ことふえ二つして高砂ををりかへし吹かせ給へば、なほいみじうめでたしといふもよのつねなり。御笛の師にてそのことゞもなど申し給ふいとめでたし。みすのもとに集り出でゝ見奉るをりなどは、我が身にせりつみしなど、覺ゆる事こそなけれ。すけたゞは木工のぞうにて藏人にはなりにける。いみじう荒々しうあれば、殿上人女房はあらはにとぞつけたるを、歌につくりて「さうなしのぬし、をはりうどのたねにぞありける」とうたふは、尾張のかねときがむすめの腹なりけり。これを笛に吹かせ給ふを添ひ侍ひて「猶たかう吹かせおはしませ。え聞きさぶらはじ」と申せば「いかでか、さりとも聞き知りなむ」とてみそかにのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、「このものなかりけり。唯今こそふかめ」と仰せられて吹かせたまふ、いみじうをかし。

文ことばなめき人こそいとゞにくけれ。世をなのめに書きなしたる詞のにくきこそ。さるまじき人のもとにあまりかしこまりたるも、げにわろきことぞ。されど我がえたらむはことわり、人のもとなるさへにくゝこそあれ。大かたさし向ひてもなめきはなどかくいふらむとかたはらいたし。ましてよき人などをさ申すものは、さるはをこにていとにくし。男しうなどわろくいふいとわろし。我がつかふものなど、おはする、のたまふなどいひたるいとにくし。こゝもとに、侍るといふもじをあらせばやと聞くことこそ多かめれ。あいぎやうなくと詞し

なめきなどいへば、いはるゝ人も聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり嘲哢するなどいはるゝまで、ある人もわろきなるべし。殿上人宰相などを唯なのる名をいさゝかつゝましげならずいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず。女房の局なる人をさへ、あのおもと君などいへば、めづらかに嬉しと思ひてほむる事ぞいみじき。殿上人きんだちを御まへよりほかにてはつかさをいふ。又御前にて物をいふとも、きこしめさむにはなどてかは、まろがなどいはむ。さいはざらむにくし。かくいはむにわろかるべき事かは。ことなる事なき男のひきいれ聲してえんだちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする、たゞなるだにいとしも思はしからぬ人のにくげごとしたる。一人車に乘りて物見る男、いかなるものにかあらむ、やんごとなからずとも、わかき男どもの物ゆかしう思ひたるなどひきのせても見よかし。すきがけに唯一人かくよひて心一つにまもり居たらむよ。曉に歸るひとの、よべおきし扇ふところがみもとむとて、暗ければさぐりあてむさぐりあてむとたゝきもわたし、「あやし」などうちいひもとめ出でゝ、そよそよとふところにさし入れて、扇ひきひろげてふたふたとうちつかひてまかり申したる、にくしとはよの常いとあいぎやうなし。おなしごと夜深く出づる人の烏帽子の緒強くゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも人のとがむべきことかは。いみじうしどけなうかたくなくたゞ、直衣狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせむ。とする人はなほ曉のありさまこそをかしくもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起きがたげなるをしひてそゝのかし、「あけすぎぬ、あな見苦

し」などいはれてうち歎くけしきも、げにあかず物うきにしもあらむかしと覺ゆ。指貫なども居ながら着もやらず、まづさしよりてよひと夜いひつることの殘りを女の耳にいひ入れ、何わざすとなけれど帶などをばゆふやうなりかし。格子あけ、妻戶あるところはやがてもろともに出で行き、晝の程のおぼつかなからむ事などもいひいでにすべり出でなむは、見送られて名殘もをかしかりぬべし。などりも出所あり。いときはやかに起きてひろめきたちて指貫の腰つよくひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帶強くゆふにくし。明けて出でぬる所たてぬ人いとにくし。

心ときめきするもの

雀のこがひ。ちごあそばする所の前わたりたる。よきたきものたきて一人臥したる。唐の鏡のすこしくらき見たる。よき男の車とゞめて物いひあないせさせたる。かしらあらひけさうじて、かうにしみたるきぬ着たる、殊に見る人なき所にても心のうちはなほをかし。待つ人などある夜、雨のあし風の吹きゆるがすもふとぞおどろかるゝ。

すぎにしかたこひしきもの

枯れたる葵、ひゝなあそびのてうど。ふたあゐゑびぞめなどのさいでのおしへされて、さうしのなかにありけるを見つけたる。又をりから哀なりし人の文、雨などの降りてつれづれなる日さがし出でたる。こぞのかはほり、月のあかき夜。

こゝろゆくもの

よくかいたる女繪の詞をかしうつゞけておほかる。物見のかへさに乘りこぼれて、をのこどもいと多く牛よくやるものゝ車走らせたる。白く淸げなるみちのくがみにいとほそう書くべくはあらぬ筆して文書きたる。川舟のくだりざま。はぐろめのよくつきたる。てうばみにてう多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせぐりしたる。物よくいふおんやうじして河原に出でゝすそのはらへしたる。よるねおきて飮む水。徒然なるをりにいとあまり睦しくはあらず、疎くもあらぬまらうどのきて、世の中の物がたりこの頃あることのをかしきもにくきも、怪しきも、これにかゝり、かれにかゝり、おほやけわたくしおぼつかなからず聞きよき程に語りたるいと心ゆくこゝちす。社寺などに詣でゝ物申さするに、寺には法師、社にてねぎなどやうのものゝ思ふ程よりも過ぎて、とゞこほりなく聞きよく申したる。びらうげはのどやかにやりたる。急ぎたるはかろかろしく見ゆ。網代は走らせたる。人の門より渡りたるをふと見る程もなく過ぎて、供の人ばかり走るを誰ならむと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しく行けばいとわろし。牛はひたひいと小く白みたるが腹のした足のしも尾のすそ白き。馬は紫の斑づきたる、蘆毛、いみじく黑きが足肩のわたりなどに白きところ、薄紅梅の毛にて髮尾などもいとしろき、げにゆふかみともいひつべき。牛飼は大きにて、かみあかしらがにて顏の赤みてかどかどしげなる。ざうしきずゐじんはほそやかなる。よきをのこも猶わかき程はさるかたなるぞよき。いたく肥えたるはねぶたからむ人とおもはゆる。小舍人はちひさくて髮のうるはしきがすそさはらかに聲をかしうて、かしこまりて物などいひたるぞり

やうりやうじき。猫はうへのかぎり黒くてことは皆白からむ。說經師は顏よきつとまもらへたるこそその說く事のたふとさも覺ゆれ。ほかめしつればふと忘るゝに、にくげなるは罪やうらむと覺ゆ。この詞はとゞむべし。すこし年などのよろしき程こそかやうの罪はえがたの詞かき出でけめ。今は罪いとおそろし。又たふとき事、だうしんおほかりとて、說經すといふ所にさいそにいきぬる人こそ猶この罪の心ちにはさしもあらで見ゆれ。藏人おりたる人、昔は御せんなどいふ事もせず、その年ばかりうちわたりにはまして影も見えざりける。今はさしもあらざめる。藏人の五位とてそれをしもぞいそがしうつか[illegible]ど、猶名殘つれづれにて心一つはいとまある心ちぞすべかめれば、さやうの所に急ぎ行くを、一たび二たび聞きそめつれば、常にまうでまほしくなりて、夏などのいとあつきにもかたびらいとあざやかに、うすふたあゐ、あをにぶの指貫などふみちらして居ためり。ゑぼしにものいみつけたるはけふさるべき日なれど、くどくのかたにはさはらずと見えむとにや、急ぎ來てその事するひじりと物語して車たつるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しく逢はざりける人などのまうで逢ひたるめづらしがりて近くゐより物語し、うなづき、をかしき事など語り出でゝ、扇ひろうひろげて口にあてゝ笑ひさうぞくたるずゞかいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして車のよしあしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、經供養などいひくらべ居たるほどに、この說經の事もきゝ入れず。なにかは、常にきくことなれば耳なれてめづらしう覺えぬにこそはあらめ。さはあらで講師ゐてしばしあるほどに、さ

きすこしおはする車とゞめておるゝ人。蟬のはよりもかろげなる直衣、指貫、すゞしのひとへなどきたるも狩衣姿にても、さやうにてはわかくほそやかなる三四人ばかり、さぶらひのもの又さばかりして入れば、もとゐたりつる人もすこしうち身じろきくつろぎて、かうざのもと近き柱のもとなどにすゑたれば、さすがにずゞおしもみなどして伏し拜み居たるを、講師もはえばえしう思ふなるべし。いかで語り傳ふばかりと說き出でたる。聽問すると立ち騷ぎぬかづく程にもなくて、よきほどにて立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふ事も何事ならむとおぼゆ。見知りたる人をばをかしと思ひ、見知らぬは誰ならむそれにやかれにやと目をつけて思ひやらるゝこそをかしけれ。「說經しつ。八講しけり」など人いひ傳ふるに「その人はありつや、いかゞは」などさだまりていはれたるあまりなり。などかはむげにさしのぞかではあらむ。あやしき女だにいみじく聞くめるものをば、さればとて始めつ方はかちありきする人はなかりき。たまさかにはつぼさうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物まうでをぞせし。說經などは殊に多くもきかざりき。このごろその折さし出でたる人の命長くて見ましかば、いかばかりそしりひばうせまし。菩提といふ寺にけちえん八かうせしが、きゝにまうでたるに、人のもとより「とく歸り給へ、いとさうざうし」といひたれば、はちすのはなびらに、

「もとめてもかゝるはちすの露をおきてうき世にまたは歸るものかは」

と書きてやりつ。まことにいとたふとく哀なれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちう

が家の人のもどかしさも忘れぬべし。

こゝらかはといふ所は、小一條の大將殿(濟時)の御家ぞかし。それにて上達部、けちえんの八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人の集り行きて聞く。「おそからむ車はよるべきやうもなし」といへば、露とともに急ぎおきて、げにぞひまなかりける。ながえの上に又さし重ねて三つばかりまでは少し物も聞ゆべし。六月十よ日にて、あつきこと世に知らぬほどなり。池のはちすを見やるのみぞ少し涼しき心ちする。左右のおとゞたちをおき奉りてはおはせぬ上達部なし。二藍の直衣指貫・淺黄のかたびらをぞすかし給へる。少しおとなび給へるは靑にびのさしぬき白き袴もすゞしげなり。やすちかの宰相なども若やぎだちてすべてたふときことの限にもあらず、をかしき物見なり。廂のみす高くまき上げてなげしのうへに上達部奥に向ひて、ながながとゐ給へり。その次には殿上人、わかきんだち、かりさうぞく、直衣などもいとをかしくてゐもさだまらず、こゝかしこに立ちさまよひ、あそびたるもいとをかし。實方の兵衞の佐、なかあきらの侍從など家の子にて今すこしいでいりたり。まだ童なるきんだちなどいとをかしうておはす。少し日たけたるほどに三位中將とは關白殿(道隆)をぞ聞えし。からのうすもの、二藍の直衣、おなじ指貫、こき蘇枋の御袴に、はりたる白きひとへのいと鮮やかなるを着給ひて、歩み入り給へる、さばかりかろび涼しげなる中に、あつかはしげなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ。ほそぬりぼねなど、骨はかはれど、たゞ赤き紙をおなじなみにうちつかひ持ち給へるは、なでしこのいみじう咲きたるにぞい

とよく似たる。また講師ものぼらぬ程にかけばんどもして何にかはあらむ物參るべし。よしちかの中納言の御ありさま、常よりもまさりて消げにおはするさまぞ限なきや。上達部の御名など書くべきにもあらぬを、誰なりけむと少しほどふれば、色あひはなばなといみじく、にほひあざやかにいづれともなき中のかたびらを、これはまことにたゞ直衣一つを着たるやうにて常に車のかたを見おこせつゝ物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけむを、後にきたる車のひまもなかりければ、池にひき寄せたてたるを見給ひて、實方の君に「人のせうそこつきづきしくいひつべからむもの一人」と召せば、いかなる人にかあらむ、えりてゐておはしたるに「いかゞ言ひ遣るべき」と近く居給へるばかり言ひ合せてやり給はむ事は聞えず。いみじくよそひして車のもとに歩みよるをかつは笑ひ給ふ。あとのかたによりていふめり。久しく立てれば歌などよむにやあらむ。兵衛佐「返しおもひまうけよ」など笑ひていつしかかへりごと聞かむと、おとな上達部まで皆そなたざまに見やり給へり。げにけそうの人々まで（二字イ無）見やりしも（六字みるもイ）をかしうありしを、かへり事きゝたるにや、すこし歩みくる程に扇をさし出でゝ呼びかへせば、歌などのもじをいひ過ちてばかりこそ呼びかへさめ、久しかりつる程に、あるべきとかは、猶すべきにもあらじものをとぞ覺えたる。近く參りつゝも心もとなく「いかにいかに」と誰も問ひ給へどもいはず。權中納言（義懐）見給へば、そこによりてけしきばみ申す。三位の中將「とくいへ。あまりうしんすぎてしそこなふな」とのたまふに、「これも唯おなじ事になむ侍る」といふは聞ゆ。藤大納言（爲光）は人よりもけにのぞきて「いかゞ

いひつる」とのたまふめれば、三位の中將（道隆）「いとなほき木をなむ押し折りためる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何となくさと笑ふ聲聞えやすらむ。中納言「さて呼び返されつるさきにはいかゞいひつる。これやなほしたるこ」と問ひ給へば「久しうたちて侍りともかくも侍らざりつれば、さは參りなむとてかへり侍るを、呼びて」とぞ申す。「たれが車ならむ、見知りたりや」などのたまふほどに、講師のぼりぬれば、皆ゐしづまりてそなたをのみ見るほどに、この車はかいけつやうにうせぬ。えたすだれなど、たゞけふはじめたりと見えて、濃きひとへがさねに、二藍の織物蘇枋のうすもの〻うはぎなどにて、えりにすりたるもやがてひろげながらうち懸けなどしたるはなに人ならむ、何かは、人のかたはならむことよりはげにときこえて、なかなかいとよしとぞ覺ゆる。あさざの講師せいはん、かうざのうへも光みちたる心ちしていみじくぞあるや。あつさの侘しきにそへてえさすまじき事の今日すぐすまじきをうち置きて、唯少し聞きて歸りなむとえつるを、えきなみにつどひたる車の奥になむ居たれば、出づべきかたもなし。あしたの講はてなばいかで出でなむとてまへなる車どもにせうそこすれば、近くたゝむうれしさにや、はやばやとひき出であけて出すを見給ふ。いとかしかましきまで人ごといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、きゝも入れずいらへもせでせばがり出づれば、權中納言「やゝまかりぬるもよし」とてうち笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑きに惑ひ出でゝ、人して「五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と聞えかけて歸り出でにき。そのはじめよりやがてはつる日までたてる車のありけ

るが、人寄りくとも見えず。すべてたゞあさましう綸などのやうにて過ごしければ、ありがたくめでたく心にく、「いかなる人ならむ、いかで知らむ」と問ひけるを聞き給ひて、藤大納言「なにかめでたからむ、いとにくし。ゆゝしき物にこそあなれ」とのたまひけるこそをかしけれ。さてその二十日あまりに、中納言義懐の法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも猶よのつねなりや。「老を待つまの」とだにいふべくもあらぬ御ありさまにこそ見え給ひしか。

七月ばかりいみじくあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころは寝おきて見いだすもいとをかし。やみも又をかし。有明はたいふもおろかなり。いとつやゝかなる板のはし近うあざやかなるたゝみ一ひらかりそめにうち敷きて、三尺の几帳奥のかたに押しやりたるぞあぢきなき。はしにこそ立つべけれ。奥のうしろめたからむよ。人は出でにけるなるべし。うす色のうらいと濃くてうへは少しかへりたるならずば、濃き綾のつやゝかなるがいたくはなえぬを、かしらこめてひき着てぞねためる。かうぞめのひとへ、紅のこまやかなるすゞしの袴の腰いと長く、きぬの下よりひかれたるもまだ解けながらなめり。そばのかたに髮のうちたゝなはりてゆらゝかなるほど、長さおしはかられたるに、又いづこよりにかあらむ、あさぼらけのいみじうきり滿ちたるに、二藍の指貫あるかなきかのかうぞめの狩衣、白きすゞし、紅のいとつやゝかなるうちぎぬの霧にいたくしめりたるをぬぎ垂れて、鬢の少しふくだみたれば烏帽子の押し入れられたるけしきもしどけなく見ゆ。朝顔の露落ちぬさき

に文書かむとて、道の程も心もとなく「おふの下草」など口ずさひて我がかたへ行くに、格子のあがりたれば、みすのそばをいさゝかあけて見るに、起きていぬらむ人もをかし。露を哀と思ふにや(イ猶)、暫し見たれば、枕がみのかたに、ほゝ(イのた)に紫の紙はりたる扇ひろごりながらあり。みちのくに紙のたゝう紙のほそやかなるが、花か紅か少しにほひうつりたるも几帳のもとに散りぼひたる。人のけはひあれば、きぬの中より見るに、うちゑみて長押におしかゝり居たれば、はぢなどする人にはあらねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかなと思ふ。「こよなき名殘の御あさいかな」とてすのうちになからばかり入りたれば、「露よりさきなる人のもどかしさに」といらふ。をかしき事とりたてゝ書くべきにあらねど、かくいひかはすけしきどもにくからず。枕がみなる扇を我がもちたるしておよびてかき寄するが、あまり近う寄りくるにやと心ときめきせられて、今少し引き入らるゝ。とりて見などしてうとくおぼしたる事などうちかすめ恨みなどするに、あからうなりて人の聲々し、日もさし出でぬべし。霧の絶間見えぬ程にと急ぎつる文も、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる人もいつの程にかと見えて、萩の露ながらあるにつけてあれど、えさし出でず。かうのかのいみじうしめたるにほひいとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でゝ我がきつるところもかくやと思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

木の花は

梅のこくも薄くも紅梅。櫻の花びらおほきに葉色こきが枝はそくして咲きたる。藤の花しな

ひ長く色よく咲きたるいとめでたし。卯の花は品おとりてなにとなけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑の、かげにや隱るらむと思ふにいとをかし。祭のかへさに紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などにいと白う咲きたるこそをかしけれ。靑色のうへに白きひとへがさねかづきたる、靑くちばなどにかよひていとをかし。四月のつごもり五月のついたちなどのころほひ、橘の濃くあをきに花のいと白く咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實のこがねの玉と見えていみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる（七字恐のあさぼらけのイ）櫻にも劣らず。杜鵑のよすがとさへ思へばにや猶更にいふべきにもあらず。梨の花世にすさまじくあやしき物にして、目に近くはかなき文つけなどだにせず。あいぎやうおくれたる人の顏など見ては、たとひにいふもげにその色よりしてあいなく見ゆるを、もろこしにかぎりなきものにて文にも作るなるを、さりともあるやうあらむとてせめて見れば、花びらのはしにをかしきにほひこそ心もとなくつきためれ。楊貴妃、みかどの御使に逢ひて泣きける顏に似せて「梨花一枝春の雨をおびたり」などいひたるはおぼろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は類ひあらじと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、さまうたてあれども、又こと木どもとひとしういふべきにあらず。もろこしにことごとしき名つきたる鳥のこれにしも住むらむ心ことなり。ましてことに作りてさまざまなる音の出でくるなど、をかしとはよのつねにいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまぞにくげなれどあふちの花いとをかし。かれ

ばなにさまことに咲きてかならず五月五日にあふもをかし。

池は

勝間田の池。にえのゝ池、初瀨に參りしに水鳥のひまなくたちさわぎしかいとをかしく見えしなり。水なしの池、「あやしうなどてつけゝるならむ」といひしかば、「五月などすべて雨いたく降らむとする年は、この池に水といふ物なくなむある。又日のいみじく照る年は春のはじめに水なむ多く出づる」といひしなり。むげになくかわきてあらばこそさもつけめ、出づるをりもあるなるを一すぢにつけゝるかなといらへまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げゝるをきこしめして行幸などありけむこそいみじうめでたけれ。「ねくたれ髮を」と人丸がよみけむほどいふもおろかなり。御まへの池又何の心につけゝるならむとをかし。鏡の池。狹山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆるにやあらむ。こひぬまの池。原の池、「玉藻はなかりそ」といひけむもをかし。ますだの池。

せちは

五月にしくはなし。さうぶよもぎなどのかをりあひたるもいみじうをかし。九重の內をはじめていひしらぬ民のすみかまで、いかで我がもとに繁くふかむとふきわたしたる、猶いと珍しくいつかこと折はさはしたりし。空のけしきのくもりわたりたるに、きさいの宮などには縫殿より御藥玉とていろいろの絲をくみさげて參らせたれば、みちやう奉る母屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を綾とすゞしのきぬにつゝみて參らせたる。同じ柱にゆひつけ

て月ごろある藥玉とりかへてすつめる。又くすだまは菊のをりまであるべきにやあらむ。されどそれは皆いとをひき取りて物ゆひなどしてしばしもなし。御せくまゐり、わかき人々はさうぶのさしぐしさし、ものいみつけなどして、さまざま、唐ぎぬ、かざみ、ながき根をかしきをり枝どもむらごのくみして結びつけなどしたる、珍らしう言ふべきことならねどいとをかし。さて春ごとに咲くとて櫻をよろしう思ふ人やはある。つぢありくわらはべのほどはどにつけてはいみじきわざしたると常に袂をまもり、人に見くらべ、えもいはずけうありと思ひたるを、そばへたるこどねりわらはなどにひきとられて泣くもをかし。紫の紙に、あふちの花、靑き紙にさうぶの葉、ほそうまきてひきゆひ、又白き紙を根にしてゆひたるもをかし。いと長き根など文のなかに入れなどしたる人どもなども、いとえんなる。返り事かヽむと言ひ合せかたらふどちは見せ合せなどするをかし。人のむすめやんごとなき所々に御文聞え給ふ人も、けふは心ことにぞなまめかしうをかしき。夕暮のほどに杜鵑の名のりしたるもすべてをかしういみじ。

木は

桂、五葉、柳、橘。そばの木はしたなき心ちすれども花の木どもちりはてヽ、おしなべたる綠になりたる中に、時もわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひかけぬ靑葉の中よりさし出でたる珍らし。まゆみ更にもいはず。その物どもなけれどやどり木といふ名いとあはれなり。榊、臨時の祭御神樂のをりなどいとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけむ

もとりわきをかし。くすのきは木立多かる所にも殊にまじらひたてらず、おどろおどろしき思ひやりなどうとましきを、ちえにわかれて戀する人のためしにいはれたるぞ、誰かはかずを知りていひ始めけむとおもふにをかし。ひの木、人ぢかゝらぬものなれどみつ葉よつ葉の殿づくりもをかし。五月に雨の聲まねぶらむもをかし。楓の木、さゝやかなるにも、もえ出でたる梢のあかみておなじかたにさしひろごりたる葉のさま、花もいと物はかなげにてむしなどの枯れたるやうにてをかし。あすはひの木、この世近くも見えきこえず。みたけ(金峰山)に詣でゝ歸る人などしかもてありくめる。枝ざしなどのいと手ふれにくげにあらあらしけれど、何の心ありてあすはひの木とつけゝむ、あぢきなきかねごとなりや。誰にたのめたるにかあらむと思ふに知らまほしうをかし。ねずもちの木、ひとなみなるべきさまにもあらねど葉のいみじうこまかにちひさきがをかしきなり。あふちの木、山梨の木、椎の木は、ときはぎはいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはれたるもをかし。志らかしなどいふもの、ましてみやまぎの中にもいとけどほくて、三位二位のうへのきぬそむる折ばかりぞ葉をだに人の見るめる。めでたき事をかしき事にとり出づべくもあらねど、いつとなく雪の降りたるに見まがへられて、そさのを(須佐の男)みことの出雲のくににおはしける御事を思ひて、人丸が詠みたる歌などを見る、いみじうあはれなり。いふ事にてもをりにつけても一ふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も木も鳥蟲もおろかにこそ覺えね。ゆづりはのいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う清げなるに思ひかけず似るべくもあらず。くきの赤う

きらきらしう見えたるこそ賤しけれどもをかしけれ。なべての月ごろは露も見えぬもの、しはすのつごもりにしも時めきて、なきひとのくひ物にもしくにやと哀なるに、又よはひのぶる歯固めの具にもしてつかひためるは、いかなるにか。「紅葉せむ世や」といひたるもたのもし。柏木いとをかし。はもりの神のますらむもいとかしこし。兵衛の佐、ぞうなどをいふらむもをかし。すがたなけれどすろの木からめきてわろき家のものとは見えず。

鳥は

こと、ころの物なれど鸚鵡いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。杜鵑、水鶏、鴫、みこ鳥、ひわ、ひたき。山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば慰むらむ、いとあはれなり。谷へだてたる程などいと心ぐるし。つるはこちたきさまなれども、鳴く聲雲ゐまで聞ゆらむいとめでたし。かしら赤き雀、いかるがのをとり、たくみどり。鷺はいと見る目もみぐるし。まなこゐなどもうたて、よろずになつかしからねど、ゆるぎの森にひとりはねじと爭ふらむこそをかしけれ。はこどり。水鳥は、をしいとあはれなり。かたみだがひに居かはりてはねのうへの霜を拂ふらむなどいとをかし。都鳥、川千鳥は友まどはすらむこそ。かりの聲は遠く聞えたるあはれなり。鴨ははねの霜うちはらふらむと思ふにをかし。鶯はふみなどにもめでたきものに作り、聲よりはじめてさまかたちもさばかりあてに美くしきほどよりは、九重の内になかぬぞいとわろき。人の、さなむあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかり侍ひて聞きしに、まことに更におともせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬ

べきたよりなりかし。まかでゝ聞けば、あやしき家の見どころもなき梅などには華やかにぞ鳴く。よるなかぬもいぎたなき心ちすれども今はいかゞせむ。夏秋の末までおい聲に鳴きてむしくひなど、やうもあらぬものは名をつけかへていふぞ口惜しくすごき心ちする。それも雀などやうに、常にある鳥ならばさもおぼゆまじ。春なくゆゑこそはあらめ。年立ちかへるなどをかしきことに歌にもふみにも作るなるは、猶春のうちならましかばいかにをかしからまし。人をも人げなう世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをば、そしりやはする。鳶、烏などのうへは見いれ聞きいれなどする人世になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに心ゆかぬ心ちするなり。祭のかへさ見るとて、うりんゐん、知足院などの前に車をたてたれば、杜鵑もしのばぬにやあらむ鳴くに、いとようまねび似せて木高き木どもの中に、もろごえに鳴きたるこそさすがにをかしけれ。杜鵑は猶更にいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に、卯の花、花橘などにやどりをして、はたかくれたるもねたげなる心ばへなり。五月雨の短夜にねざめをしていかで人よりさきに聞かむとまたれて、夜深くうち出でたる聲のらうらうしうあいぎやうづきたる、いみじう心あくがれ、せむかたなし。みなづきになりぬれば、おともせずなりぬる、すべていふもおろかなり。よるなくものすべていづれもいづれもめでたし。ちごどものみぞさしもなき。

あてなるもの

うす色にしらがさねのかざみ、かりのこ。けづりひのあまづらに入りて新しきかなまりに入

りたる。すゐさうのずゞ、藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美くしきちごのいちごくひたる。

むしは

鈴蟲、松蟲、はたおり、きりぎりす、蝶、われから、ひをむし、螢。みのむし、いと哀なり。鬼の生みければ親に似てこれもおそろしき心ちぞあらむとて、親のあしききぬひき着せて「今秋風吹かむをりにぞこむずる。待てよ」といひて逃げていにけるも知らず、風の音聞き知りて八月ばかりになれば「ちゝよちゝよ」とはかなげになくいみじうあはれなり。ひぐらし。ぬかづきむし又あはれなり。さる心に道心おこしてつきありくらむ。又おもひかけず暗き所などにほとめきたる聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきものゝうちに入れつべけれ。あいぎやうなくにくきものは人々しうかき出づべきものゝやうにあらねど、よろづの物にゐ、顔などにぬれたる足して居たるなどよ。人の名につきたるはかならずかたし。夏蟲いとをかしく廊のうへ飛びありくいとをかし。蟻はにくけれど輕びいみじうて水のうへなどを唯歩みありくこそをかしけれ。

七月ばかりに風のいたう吹き、雨などのさわがしき日、大かたいと涼しければ扇もうち忘れたるに、あせのか少しかゝへたるきぬのうすき引きかつぎてひるねしたるこそをかしけれ。

にげなきもの

髮あしき人のしろき綾のきぬ着たる。しゞらかみたる髮に葵つけたる。あしき手を赤き紙に

書きたる。下すの家に雪の降りたる。又月のさし入りたるもいとくちをし。月のいと明きにやかたなき車にあひ（のりイ作）たる。又さる車にあめうしかけたる。老いたるもの丶はらたかくてあへぎありく。又若き男もちたるいと見ぐるしきに、こと人のもとに行くとてねたみたる。老いたる男のね惑ひたる。又さやうに髯がちなる男の椎つみたる。歯もなき女の梅くひてすがりたる。げすの紅の袴着たる。このごろはそれのみこそあめれ。ゆげひのすけのやかう（イら）狩衣すがたもいとあやしげなり。又人におぢらる丶うへのきぬはたおどろおどろしく、たちさまよふも人見つけばあなづらはし。けんぎのものやあると戯にもとがむ。六位藏人、うへのはうぐわんとうちいひて、世になくきらきらしきものに覺え、里人げすなどはこの世の人とだに思ひたらず、目をだに見合せでおぢわな丶く人のうちわたりのほそどのなどに忍びて入りふしたるこそいとつきなけれ。そらだきものしたる几帳にうちかけたる袴の、おもたげにいやしうきらきらしからむもとおし量らる丶などよ。さかしらにうへのきぬわきあけにて、鼠の尾のやうにてわがねかけたらむ程ぞ似げなきやかうの人々なる。このつかさのほどは念じてとゞめてよかし。五位の藏人も。

細殿に人とあまた居て、ありくものども見やすからず呼び寄せてものなどいふに、清げなるをのこ、小舍人わらはなどのよきつ丶み袋にきぬどもつ丶みて指貫の腰などうち見えたる。袋に入りたる弓、矢、たて、ほこ、たちなどもてありくを「たがぞ」と問ふについ居て、「なにがし殿の」といひて行くはいとよし。氣色ばみやさしがりて「知らず」ともいひ、聞きも入れで

いぬるものは、いみじうぞにくきかし。月夜にむなぐるまありきたる。清げなる男のにくげなるめもちたる。髯ぐろににくげなる人の年老いたるが、物がたりする人のちごもてあそびたる。

とのもりづかさこそ猶をかしきものはあれ。下女のきははさばかりうらやましきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若くてかたちよく、なりなど常によくてあらむはましてよからむかし。年老いて物の例など知りて、おもなきさましたるもいとつきづきしうめやすし。とのもりづかさの顔あいぎやうづきたらむをもたりて、さうぞく時にしたがひてからぎぬなど今めかしうてありかせばやとこそ覺ゆれ。男は又ずゐじんこそあめれ。いみじくびゞしくをかしき君達も、ずゐじんなきはいとしらじらし。辨などをかしくよきつかさと思ひたれども、したがさねのしり短くてずゐじんなきぞいとわろきや。

しきの御ざうしの西おもてのたて蔀のもとにて、頭辨成行の人と物をいと久しく言ひたち給へればさし出でゝ、「それはたれぞ」といへば、「辨の内侍なり」とのたまふ。「何かはさも語らひ給ふ。大辨見えばうちすて奉りていなむものを」といへば、いみじく笑ひて「たれかかゝる事をさへ言ひ聞かせけむ。それさなせそと語らふなり」とのたまふ。いみじく見えてをかしきすぢなどたてたる事はなくてたゞありなるやうなるを、皆人さのみ知りたるに、猶奥ふかき御心ざまを見知りたれば「おしなべたらず」など御前にも啓し、又さしろしめしたるを「常に女はおのれを悦ぶもののためにかほづくりす、士はおのれを知れる人のために死ぬとい

ひたる」と言ひ合せつゝ申し給ふ。「とほたあふみの濱やなぎ」などいひかはしてあるに、わかき人々は唯いひにくみ、見苦しき事どもなどつくろはずいふに「この君こそうたて見侍ィにくけれ。こと人のやうにどきやうし、歌うたひなどもせず、けすさまじ」などそしる。更にこれかれに物いひなどもせず。「女は目はたてざまにつき、眉はひたひにおひかゝり、鼻はよこざまにありとも、唯口つきあいぎやうづき、おとがひのした、くびなどをかしげにて、聲にくからざらむ人なむ思はしかるべきとは言ひながら、猶顔のいとにくげなるは心憂し」とのみのたまへば、まいておとがひほそく、あいぎやうおくれたらむ人はあいなうかたきにして御前にさへあしう啓する。物など啓せさせむとても、その始め言ひそめし人をたづね、しもなるをも呼びのぼせ、局にも來ていひ、里なるには文書きてもみづからもおはして「遲く參らばさなむ申したると申しに參らせよ」などのたまふ。「その人の侍ふ」などいひ出づれどさしもうけひかずなどぞおはする。「あるにしたがひ、定めず何事ももてなしたるをこそよき事にはすれ」とうしろみ聞ゆれど、「我がもとの心の本性」とのみのたまひつゝ、「改まらざるものは心なり」とのたまへば「さてはゞかりなしとはいかなる事をいふにか」とあやしがれば、笑ひつゝ「中よしなど人々にもいはるゝ、かうかたらふとならば何か耻づる。見えなどもせよかし」とのたまふをいみじくにくげなれば「さあらむはえ思はじとのたまひしによりて、え見え奉らぬ」といへば「げににくゝもぞなる。さらばな見えそ」とておのづから見つべきをりも顔をふたぎなどして、まことに見給はぬも、まごゝろにそらごとし給はざりけりと思ふ

に、三月つごもりごろ、冬の直衣の着にくきにやあらむ、うへの衣がちにて殿上のとのゐすがたもあり。つとめて日さし出づるまで式部のおもとゝひさしにねたるに、奧のやり戶をあけさせ給うて、うへのおまへ（一條天皇）、宮の御前（中宮定子）出でさせ給へれば、起きもあへず惑ふをいみじく笑はせ給ふ。からぎぬをかみのうへにうち着て、とのゐ物も何もうづもれながらあるうへにおはしまして、陣より出で入るものなど御覽ず。殿上人のつゆ知らでより來て物いふなどもあるを「けしきな見せそ」と笑はせ給ふ。さてたゝせ給ふに、「二人ながらいざ」と仰せらるれど、「今顏などつくろひてこそ」とてまゐらず。入らせ給ひて猶めでたき事ども言ひあはせて居たるに、南のやり戶のそばに、几帳の手のさし出でたるにさはりて、すだれの少しあきたるより黑みだるもの丶見ゆれば、のりたかゞ居たるなめりと思ひて、見も入れでなほ事どもをいふに、いとよく笑みたる顏のさし出でたるを「のりたかなめり、そは」とて見やりたればあらぬ顏なり。「あさまし」と笑ひさわぎて几帳ひき直し隱るれど、頭の辨にこそおはしけれ。見え奉らじとしつるものをといとくちをし。もろともに居たる人はこなたに向きて居たれば顏も見えず。立ち出でゝ「いみじく名殘なくも見つるかな」とのたまへば「のりたかと思ひ侍ればあなづりてぞかし。などかは見じとのたまひしに、さつくづくとは」といふに、「女はねおきたる顏なむいとよきといへば、ある人の局に行きてかいばみして、又もし見えやするとて來たりつるなり。まだうへのおはしつる折からあるをえ知らざりけるよ」とてそれより後は局のすだれうちかづきなどしたまふめり。

殿上のなだいめんこそ猶をかしけれ。御前に人侍ふをりはやがて問ふもをかし。足音どもし
てくづれ出づるを、うへの御局のひんがしおもてに耳おとなへて聞くに、知る人の名のりに
はふと胸つぶるらむかし。又ありともよく聞かぬ人をもこの折に聞きつけたらむはいかゞ
覺ゆらむ。名のりよしあし聞きにくゝ定むるもをかし。はてぬるなりと聞く程に、瀧口の弓
ならし、くつの音そゝめき出づるに、藏人のいと高くふみこぼめかして、うしとらの隅の高
欄にたかひざまづきとかやいふゐずまひに、御前のかたに向ひて、「うしろざまに、誰々が侍
る」ととふ程こそをかしけれ。細う高う名のり、「また人々さふらはねばにや、なだいめん仕
うまつらぬよし奏するもいかに」と問へば、「さはる事ども申すに、さ聞きて歸るを、まさひろ
はきかずとて君達の敎へければ、いみじう腹だちしかりて、かんがへて瀧口にさへ笑はる。
みづし所のお物棚といふものに沓おきて拂へ（に字イ無）いひのゝしるをいとほしがりて「たが沓に
かあらむえ知らず」ととのもりつかさ人々のいひけるを「やゝまさひろがきたなき物ぞや」。
とりに來てもいとさわがし。

若くて宜しきをのこの、げす女の名をいひなれて呼びたるこそいとにくけれ。知りながらも
何とかやかたもじは覺えでいふはをかし。宮仕所の局などによりて、夜などぞさおぼめかむ
はわしかりぬべけれどとのもりづかさ、さらぬ所にてはさぶらひ、藏人所にあるものをゐて
行きてよばせよかし、手づからは聲もしるきに。はしたものわらはべなどはされどよし。

わかき人とちごは肥えたるよし。ずりやうなどおとなだちたる人はふとさいとよし。あまり

やせからめきたるは心いられたらむと推しはかられる。よろづよりは牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。ことものどもはされどしりにたちてこそいけ。さきにつとまもられいくもの、きたなげなるは心うし。車のしりにことなることなきをのこどものつれだちたるいと見ぐるし。ほそらかなるをのこ、ずゐじんなど見えぬべきが黒き袴のすそでなる、狩衣は何もうちなれればみたる。走る車のかたなどにのどやかにてうちそひたるこそ我が物とは見えね。猶大かたなりあしくて人使ふはわろかりき。やれなど時々うちしたれどなればみて罪なきはさるかたなりや。つかひ人などはありてわらはべのきたなげなるこそはあるまじく見ゆれ。家に居たる人もそこにある人とてつかひにてもまらうどなどのいきたるにも、をかしき童のあまた見ゆるはいとをかし。

人の家のまへをわたるにさぶらひめきたるをのこつちにをるものなどしてをのこゞの十ばかりなるが、かみをかしげなる引きはへてもさばきてたるも、又五つ六つばかりなるがかみはくびのもとにかいくゝみてつらいと赤うふくらかなる、あやしき弓。しもとだちたる物などさゝげたるいとうつくし。車とゞめていだき入れまほしくこそあれ。又さていくにたきものゝ香のいみじくかゝへたるいとをかし。よき家の中門あけてびらうげの車の白う清げなる、はしすはうの下すだれのにほひいときよげにてえぢにたちたるこそめでたけれ。五位六位などの下がさねのしりはさみてさゝのいと白きかたにうちおきなどして、とかくいきちがふに、又さうぞくしつぼやなぐひおひたるずゐじんの出で入るいとつきづきし。くりや女

のいと清げなるがさし出で丶「なにがし殿の人やさふらふ」などいひたるをかし。

たきは

おとなしの瀧。ふるの瀧は法皇の御覽じにおはしけむこそめでたけれ。那智の瀧は熊野にあるがあはれなるなり。とゞろきの瀧はいかにかしかましくおそろしからむ。

川は

飛鳥川、淵瀬さだめなくはかなからむといとあはれなり。大井川、泉川、水無瀬川。みゝと川、又何事をさしもさかしく聞きけむとをかし。おとなし川、思はずなる名とをかしきなり。ほそだに川、たまほし川、ぬき川。澤田川、催馬樂などのおもひはするなるべし。なのりその川。名取川もいかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、このしたにもあるなり。「七夕つめに宿からむ」と業平が詠みけむもましてをかし。

はしは

あさむつの橋、ながらの橋、あまびこの橋、濱名の橋、ひとつ橋、佐野の舟橋、うたじめの橋、とゞろきの橋、をがはの橋、かけはし、せたの橋、木曾路の橋、堀江の橋、かさゝぎの橋、ゆきあひの橋、をのゝうきはし。山すげの橋、名を聞きたるをかし。うたゝねの橋。

里は

あふさかの里、ながめの里、いさめの里、人づまの里、たのめの里、朝風の里、夕日の里、とをちの里、伏見の里、ながゐの里。つまどりの里、人にとられたるにやあらむ、我が取りたるに

やわらむ、いづれもをかし。

草は

さうぶ、こも。あふひ、いとをかし。祭のをり神代よりしてさるかざしとなりけむ、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし。おもだかも名のをかしきなり、心あがりしけむとおもふに。みくり、ひるむしろ、こけ、こだに、雪まの青くさ（わか本イ）。かたばみ、あやのもんにても異物よりはをかし。あやふ草は、岸のひたひに生ふらむもげにたのもしげなくあはれなり。いつまで草は生ふる所いとはかなくあはれなり。岸のひたひよりもこれはくづれやすげなり。まことのいしばひなどにはえおひずやあらむと思ふぞわろき。ことなし草は思ふ事なきにやあらむと思ふもをかし。又あしき事を失ふにやといづれもをかし。しのぶ草いとあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどにあながちに生ひ出でたるさまいとをかし。よもぎいとをかし。つばないとをかし。はまちの葉はましてをかし。まろこすげ、うきぐさ、あさぢ、あをつゞら、とくさといふ物は風に吹かれたらむ音こそいかならむと思ひやられてをかしけれ。なづな、ならしば、いとをかし。はすのうき葉のらうたげにてのどかに澄める池のおもてにおほきなるとちひさきとひろごりたゞよひてありくいとをかし。とりあげて物おしつけなどして見るもよにいみじうをかし。やへむぐら、やますげ、やまゐ、ひかげ、はまゆふ、あし。くずの、風に吹きかへされて裏のいとしろく見ゆるをかし。

集は

古萬葉集(類聚)、古今、後撰。

歌の題は

都、葛、みくり、駒、霰、笹、壺菫、ひかげ、こも、たかせ、をし、淺茅、芝、青つゞら、梨、棗、朝顏。

草の花は

なでしこ、からのは更なり、やまとのもいとめでたし。をみなへし、ききやう、菊のところどころうつろひたる。かるかや、りんどうは枝さしなどもむつかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるにいとはなやかなる色あひにてさし出でたるいとをかし。わざととりたてゝ人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。かりのくる花ともじには書きたる。かに(イ)ひの花色はこからねど藤の花にいとよく似て春と秋と咲くをかしげなり。つぼすみれ、すみれ同じやうの物ぞかし。おいていけばおしなどうし(元如)。しもつけの花、夕顏はあさがほに似て言ひつゞけたるもをかしかりぬべき花のすがたにて、にくきみのありさまこそいと口をしけれ。などてさはた生ひ出でけむ、ぬかづきなどいふものゝやうにだにあれかし。されど猶夕顏といふ名ばかりはをかし。あしの花更に見どころなけれど、みてぐらなどいはれたるこゝろばへあらむと思ふに、たゞならず。もじ(イたも)もすゝきにはおとらねど、みづのつらにてをかしうこそあらめとおぼゆ。これにすゝきを入れぬいとあやしと人いふめり。あきの野のおしなべたるをかしさは、すゝきにこそあれ。穗さきのすはうにいと濃きが あさぎりにぬれてうちなびきたるはさばかりの物やはある。秋のはてぞい

と見どころなき。いろいろに亂れ咲きたりし花のかたもなく散りたる後、冬の末までかしらいと白くおほどれたるをも知らで昔思ひ出でがほになびきてかひろぎ立てる人にこそいみじう似ためれ。よそふる事ありてそれをしもこそ哀とも思ふべけれ。萩はいと色ふかく枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよなよとひろごりふしたる、さをしかの分きてたちならすらむも心ことなり。からあふひはとりわきて見えねど、日の影にしたがひてかたぶくらむぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき。花の色は濃からねど咲く山吹にはいはつゝじもことなることなけれど、をりもてぞ見るとよまれたる、さすがにをかし。さうびはちかくて枝のさまなどはむつかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木のはしなどのつらにみだれさきたるゆふばえ。

おぼつかなきもの

十二年の山ごもりの法師のめおや。知らぬ所に闇なるに行きあひたるに、あらはにもぞあるとて火もともさでさすがになみゐたる。今まできたるもの丶心も知らぬにやんごとなき物もたせて人のがりやりたるにおそくかへる。物いはぬちごのそりくつがへりて人にもいだかれず泣きたる。暗きにいちごくひたる。人の顏見しらぬ物見。

たとしへなきもの

夏と冬と、よると晝と、雨ふると日てると、若きと老いたると、人の笑ふと腹だつと、黒きと白きと、思ふと憎むと、藍ときはだと、雨と霧と。おなじ人ながらも志うせぬるはまことにあ

らぬ人とぞ覺ゆるかし。常磐木おほかる所にからすのねて夜中ばかりにいねさわがしくおちまどひ、木づたひてねおびれたる聲に鳴きたるこそ晝のみめにはたがひてをかしけれ。忍びたる所にては夏こそをかしけれ。いみじう短き夜のいとはかなく明けぬるにつゆねずなりぬ。やがてよろづの所あけながらなれば涼しう見わたされたり。猶今少しいふべき事のあれば、かたみにいらへどもする程に、唯居たるまへ（行へ）より鳥の高くなきて行くこそいとけそうなる心ちしてをかしけれ。冬のいみじく寒きに思ふ人とうづもれふして聞くに鐘のおとのたゞ物の底なるやうに聞ゆるもをかし。鳥の聲もはじめははねのうちに口をこめながら鳴けば、いみじう物深く遠きがつぎつぎになるまゝに近く聞ゆるもをかし。けさうびとにてきたるはいふべきにもあらず。唯うちかたらひ又さしもあらねどおのづからきなどする人のすのうちにてあまた人々居て物などいふに入りて、とみに歸りげもなきを供なるをのこわらはなど「斧の柄も朽ちぬべきなめり」とむつかしければ、ながやかにうちながめて（みあげ）みそかにと思ひていふらめども「あなわびし。ぼんなうくなうかな。今は夜中にはなりぬらむ」などいひたるいみじう心づきなく、かのいふものはとかくもおぼえず。この居たる人こそをかしう見きゝつる事もうするやうに覺ゆれ。又「さは色に出でゝはえいはずある」と高やかにうちいひうめきたるも、志たゆく水のといとをかし。たてじとみ、すいがいのもとにて「雨降りぬべし」など聞えたるもいとにくし。よき人きんだちなどのともなるこそさやうにはあらね、たゞ人などさぞある。あまたあらむ中にも心ばへ見てぞゐてありくべき。

ありがたきもの

しうとに譽めらるゝむこ、又しうとめに思はるゝ嫁の君、物よく拔くるしろがねの毛拔、しう譏らぬ人のずさ、つゆのくせかたはなくてかたち心ざまも勝れて、世にある程いさゝかのきずなき人。同じ所に住む人のかたみにはぢかはしいさゝかの隙なく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそかたけれ。物語、集など書きうつす本に墨つけぬ事。よき草紙などはいみじく心して書けれどもかならずこそきたなげになるめれ。男も女も法師もちぎり深くて語らふ人の末まで中よき事かたし。つかひよきずんざ。かいねりうたせたるにあなめでたと見えておこす。うちの局はほそどのいみじうをかし。かみの小しとみあけたれば風いみじう吹き入りて夏もいとすゞし。冬は雪霰などの風にたぐひて入りたるもいとをかし。せばくてわらはべなどののぼり居たるもあしければ、屛風のうしろなどにかくしすゑたれば、こと所のやうに聲たかく笑ひなどもせでいとよし。晝などもたゆまず心づかひせらる。よるはたましていさゝかうちとくべくもなきが、いとをかしきなり。くつの音の夜ひと夜聞ゆるがとまりて唯および一つしてたゝくが、その人なりとふと知るこそをかしけれ。いと久しくたゝくに音もせねばねいりにけるとや思ふらむ。ねたく少しうちみじろくおと、きぬのけはひもさなりと思ふらむかし。扇などつかふもしるし。冬は火桶にやをら立つる火箸の音も忍びたれど聞ゆるを、いとゞたゝきまさり聲にてもいふに、かげながらすべりよりて聞くをりもあり。又あまたの聲にて詩をずじ歌などうたふにはたゝかねどまづあけたれば、こゝへとしも

思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて立ちわかすもをかし。みすのいと青くをかしげなるに、几帳のかたびらいとあざやかに、裾のつま少しうちかさなりて見えたるに、直衣のうしろにほころび絶えず着たる君だち、六位の藏人の青色など着て、うけばりて遣戸のもとなどにそばよせてえたてらず。へいの前など傍かにうしろ押して袖うち合せて立ちたるこそをかしけれ。また指貫いと濃う直衣のあざやかにていろいろのきぬどもこぼし出でたる人の、すを押し入れて、なから入りたるやうなるも、とより見るはいとをかしからむを、いと清げなる硯ひき寄せて文書き、もしは鏡こひてびんなどかき直したるもすべてをかし。三尺の几帳をたてたるに、もかうの表もは唯少しぞある。とに立てる人、内に居たる人と物いふ顏のもとにいとにくゝ、あたりたるこそをかしけれ。たけのいと高く、短からむ人などやいかゞあらむ。猶よのつねのはさのみぞあらむ。ましてりんじの祭のてうがくなどはいみじうをかし。とのもりの官人などの長き松を高くともしてくびはひき入れて行けば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしうあそび笛ふき出でゝ心ことに思ひたるに、君達の日のさうぞくして立ちとまり物いひなどするに、殿上人の隨身どもさきを忍びやかに短く、おのが君達のれうにおひたるも、あそびにまじりてつねに似ずをかしう聞ゆ。夜ふけぬれば猶あけて歸るを待つに、君達の聲にて「あらたに生ふるとみ草の花」と歌ひたるも、このたびは今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ。すくずくしうさし歩みて出でぬるもあれば笑ふを「暫しや」など、さ夜をすてゝ急ぎ給ふ。「とありて」などいへど、心ちなどやあしからむ、た

ふれぬばかり、もし人やおひてとらふると見ゆるまでまどひ出づるもあめり。
しきの御ざうしにおはしますころ、こだちなど遙に物ふり、屋のさまも高うけどほけれどすゞろにをかしう覺ゆ。母屋は鬼ありとて皆へだて出して、南の廂に御几帳たて丶またひさしに女房は侍ふ。近衛の御門より左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかければ、おほさきこさきと聞きつけてさわぐ。あまたたびになればその聲ども丶皆聞きしられて「それぞかれぞ」といふに「又あらず」などいへば、人して見せなどするに、いひあてたるは「さればこそ」などいふもをかし。有明のいみじうきり渡りたる庭におりてありくをきこしめして御まへにもおきさせ給へり。うへなる人(人のかぎりイ有)は皆おりなどして遊ぶに、やうやう明けもてゆく。左衛門の陣にまかりて見むとて行けば、我も我もと追ひつきて行くに、殿上人あまた聲して「なにがし一聲の秋」とずんじてい(一字まゐイ)る音すれば、にげ入りて物などいふ。月を見給ひけるなどめで丶歌よむもあり。よるも晝も殿上人の絶ゆる折(イよ)なし。上達部まかで參り給ふに、おぼろげに急ぐことなきはかならずまゐり給ふ。

あぢきなきもの

わざと思ひたちてみやづかへに出で立ちたる人の、ものうがりてうるさげに思ひたる。人にもいはれむつかしき事もあればいかでかまかでなむといふことぐさをして、出で丶親をうらめしければまた參りなむといふよ。とりこのかほにくさげなる。しぶしぶに思ひたる人を忍びて聟にとりて思ふさまならずとなげく人。

いとほしげなきもの

人によみて取らせたる歌の譽めらるゝ、されどそれはよし。遠きありきする人のつきづきさえん尋ねて文えむといはすれば、知りたる人のがりなほざりにかきて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて返り事もとらせでむとくにいひなしたる。

こゝちよげなるもの

卯杖のことぶき（四字ほ ふしイ）、かぐらのにんぢやう、池のはちすの村雨にあひたる、ごりやうゑのうまをさ、又御りやうゑ（祇園）のふりはた。

とりもてるもの

くゞつのことゝり（一字イ無）、除目に第一の國得たる人。

御佛名のあした（又の日イ）地獄（行のイ）繪の御屏風取りわたして、宮に御覽ぜさせ奉り給ふ。いみじうゆゝしき事限りなし。「これ見よかし」と仰せらるれど「更に見侍らじ」とてゆゝしさにうへやに隱れふしぬ。雨いたく降りてつれづれなりとて殿上人うへのみつぼねに召して御あそびあり。みちかたの少納言琵琶いとめでたし。なりまさの君さうのこと、ゆきなり笛、經房の中將さうの笛などいとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿（伊周）の「琵琶の聲はやめて物語することおそし」といふ事をずんじ給ひしに、隱れふしたりしも起き出で、「罪はおそろしけれど猶物のめでたきはえやむまじ」とて笑はる。御聲などのすぐれたるにはあらねど、折のことさらに作りいでたるやうなりしなり。

頭中將のそゞろなるそらごとをきゝていみじういひおとし、何しに人と思ひけむなど殿上にてもいみじくなむのたまふと聞くに、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてむ」など笑ひてあるに、黑戸のかたへなど渡るにも聲などする折は袖をふたぎてつゆ見おこせず、いみじうにくみ給ふをとかくもいはず見もいれで過ぐす。二月つごもりがた雨いみじう降りてつれづれなるに、御物いみにこもりて「さすがにさうざうしくこそあれ、物やいひにやらましとなむのたまふ」と人々語れど「よにあらじ」などいらへてあるに、一日しもに暮して參りたればよるのおとゞに入らせ給ひにけり。なげしのしもに火近く取りよせてさしつどひてへんをぞつく。「あなうれしや。とくおはせ」など見つけていへどすさまじき心ちして何しにのぼりつらむとおぼえて、すびつのもとに居たれば、又そこにあつまり居て物などいふに、「なにがしさふらふ」といと華やかにいふ。「あやしくいつのまに何事のあるぞ」と問はすれば「とのもりづかさなり。唯こゝに人づてならで申すべき事なむ」といへばさし出でゝ問ふに、「これ頭中將殿の奉らせ給ふ。御かへりとく」といふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならむと思へど、唯今急ぎ見るべきにあらねば「いね。今きこえむ」とてふところにひき入れて入りぬ。猶人の物いふきゝなどするに、すなはち立ち歸りて「さらばそのありつる文をたまはりてとなむ仰せられつる。とくとく」といふに「あやしく伊勢の物語なるや」とて見れば、靑きうすえふにいと淸げに書き給へるを心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「らんしやうの花の時きんちやうのもと」と書きて「末はいかにいか

に」とあるを、いかゞはすべからむ御まへのおはしまさば御覧ぜさすべきを、これがすゑしり顔にたどたどしきまんなに書きたらむも見苦しなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、唯その奥にすびつの消えたる炭のあるして「草のいほりを誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、返り事もいはで、みなねてつとめていととく局におりたれば、源中將の聲して「草のいほりやある草のいほりやある」とおどろおどろしうといへば「などてかさ人げなき物はあらむ。玉のうてなもとめ給はましかばいで聞えてまし」といふ。「あな嬉し。しもにありけるよ。うへまで尋ねむとしつるものを」とて「よべありしやう、頭中將のとのゐ所にて少し人々しき限、六位まで集りて萬の人のうへ、むかし今と語りていひしついでに、猶このものむげに絕えはてゝ後こそさすがにえあらね、もしいひ出づる事もやと待てどいさゝか何とも思ひたらず、つれなきがいとねたきを、今宵あしともよしとも定めきりてやみなむかしとて、皆いひ合せたりし事を、唯今は見るまじきとて入り給ひぬとてとのもりづかさ來りしを、又追ひ返してたゞ袖をとらへてとうざいをさせずこひとりもてこずば、文を返しとれといましめて、さばかり降るあめのさかりに遣りたるに、いと疾く歸りきたり。これとてさし出でたるがありつる文なれば、返してけるかとうち見るに、あはせてをめけば、あやし、いかなる事ぞとて皆寄りて見るに、いみじきぬす人かな、なほえこそすつまじけれと見さわぎて、これがもとつけてやらむ、源中將つけよなどいふ。夜更くるまでつけわづらひてなむやみにし。このことかならず語り傳ふべきことなりとなむ定めし」といみじくかたはら

いたきまでいひきかせて「御名は今は草のいほりとなむつけたる」とて急ぎたち給ひぬれば「いとわろき名の末まであらむこそ口惜しかるべけれ」といふ程に、修理亮のりみつ「いみじきよろこび申しに、うへにやとて參りたりつる」といへば「なぞつかさめしありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」といへば「いでまことにうれしき事のよべ侍りしを、心もとなく思ひ明してなむ。かばかりめんぼくある事なかりき」とてはじめありける事ども中將の語りつるおなじ事どもをいひて「このかへりごとにしたがひてさる物ありとだに思はじと頭中將のたまひしに、たゞに來りしはなかなかよかりき。もてきたりしたびはいかならむと胸つぶれて、まことにわろからむはせうとのためもわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこらの人の褒め感じて、せうとこそ聞けとの給ひしかば、した心にはいとうれしけれど、さやうのかたにはさらにえ侍ふまじき身になむはべると申しゝかば、ことくはへ聞き知れとにはあらず、唯人に語れとてきかするぞとのたまひしなむ、すこしくちをしき。せうとのおぼえに侍りしかど、これがもとつけ心みるに、いふべきやうなし。殊に又、これが返しをやすべきなどいひ合せ、わろきことといひてはなかなかねたかるべし」とて夜中までなむおはせし。これは身のためにも人のためにもさていみじきよろこびにははべらずや。司めしに少將のつかさ得て侍らむはなにとも思ふまじくなむ」といへば、げにあまたしてさる事あらむとも知らで、ねたくもありけるかな。これになむ胸つぶれて覺ゆる。このいもうとせうとゝいふことをばうへまで皆しろしめし、殿上にもつかさ名をばいはでせうとゝぞつけたる。物

語などして居たるほどにまづと召したれば、參りたるに、この事仰せられむとてなりけり。「うへの渡らせ給ひて語り聞えさせ給ひてをのこども皆扇に書きてもたる」と仰せらるゝにこそあさましう何のいはせける事にかと覺えしか。さてのちに袖ぎちやうなど取りのけて思ひなほり給ふめりし。

かへる年の二月廿五日に、宮、しきの御ざうしに出でさせ給ひし、御ともに參らで梅壺に殘り居たりし又の日、頭中將(齊信)のせうそことて「きのふの夜鞍馬へ詣でたりしにこよひ方のふたがればたがへになむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。かならずいふべき事あり。いたくたゝかせで待て」とのたまへりしかど「局に一人はなどてあるぞ。こゝにねよ」とてみくしげ殿(定子妹)めしたれば參りぬ。久しくねおきておりたれば「よるいみじう人のたゝかせ給ひし。からうじて起きて侍りしかば、うへにかたらばかくなむとのたまひしかども、よもきかせ給はじとて臥し侍りにき」と語る。「心もとなの事や」とて聞くほどにとのもりづかさきて、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。唯今まかり出づるを、聞ゆべき事なむある」といへば「見るべきことありて、うへ(中宮)になむのぼり侍る。そこにて」といひて局はひきもやあけ給はむと心ときめきして煩はしければ、梅壺の東おもてのはじとみあげて「こゝに」といへば、めでたくぞ歩み出で給へる。櫻の直衣いみじく花々とうらの色つやなどえもいはずけうらなるに、えびぞめのいと濃き指貫に藤のをり枝、ことごとしくをりみだりて、紅の色うちめなどかゞやくばかりぞ見ゆる。次第に白きうす色などあまたかさなりたる。せばきまゝに片つかたはしもなが

ら、少しすのもと近く寄り居給へるぞ、まことに給に書き物語のめでたきことにいひたる、これにこそはと見えたる。御前の梅は西はしろく東は紅梅にて少しおちかたになりたれど猶をかしきに、うらうらと日の氣色のどかにて人に見せまほし。すのうちにまして若やかなる女房などの髮うるはしく長くこぼれかゝりなどそひ居ためる、今すこし見所ありをかしかりぬべきに、いとさだ過ぎふるぶるしき人の、髮なども我にはあらねばや、ところどころわなゝきちりぼひて大かた色ことなるころなれば、あるかなきかなるうすにびどもあはひも見えぬきぬどもなどあれば、露のはえも見えぬに、おはしまさねば裳も着ずうちきすがたにて居たるこそ物ぞこなひに口をしけれ。「しきへなむまゐる。ことづけやある。いつかまゐる」などのたまふ。「さてもよべあかしもはてゞ。されどもかねてさいひてしかば待つらむ」とて月のいみじう明きに、西の京よりくるまゝに、局をたゝきし程からうじておびれて起き出でたりしけしき、いらへのはしたなさなど語りてわらひ給ふ。むげにこそ思ひうんじにしか、などさるものをばおきたるなど、げにさぞありけむといとほしくもをかしくもあり、しばしありて出で給ひぬ。とより見む人はをかしう内にいかなる人のあらむと思ひぬべし。奥のかたより見いだされたらむうしろこそとにさる人やともえ思ふまじけれ。暮れぬればまゐりぬ。御まへに人々多く集ひ居て物語のよきあしき、にくき所などをぞさだめいひしろひずうじ、なかたゞが事など御前にもおとりまさりたる事など仰せられける。「まづこれはいかにとことわれ。なかたゞがわらはおひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、

「何かは。きんなども天人おるばかりひきていとわろき人なり。みかどの御むすめやはえたる」といへば、なかたゞがかた人と心を得て、「さればよ」などいふに、「この事どもよりは、ひるたゞのぶが參りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるゝるに、人々「さてまことに常よりもあらまほしう」などいふ。「まづその事こそ啓せむと思ひて參り侍りつるに、物語の事にまぎれて」とてありつる事を語り聞えさすれば、「たれもたれも見つれどいとかく縫ひたるいとはりめまでやは見とほしつる」とて笑ふ。「西の京といふ所の荒れたりつる事、もろともに見る人あらましかばとなむおぼえつる。垣ども皆やぶれて苔おひて」など語りつれば、宰相の君の「かはらの松はありつや」といらへたりつるを、いみじうめでゝ「西のかた都門を去れることいくばくの地ぞ」と口ずさびに云つる事などかしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

里にまかでたるに、殿上人などのくるも安からずぞ人々いひなすなる。いとあまり心に引きいりたるおぼえはたなければ、さ言はむ人もにくからず。又よるも晝もくる人をば何かはなしなどもかゝやかへさむ。まことに睦しくなどあらぬもさこそはくめれ。あまりうるさくもげにあればこのたび出でたる所をばいづくともなべてには知らせず。つねふさ、なりまさの君などばかりぞ知り給へる。左衛門のぞうのりみつが來て物語などするついでに、「きのふも宰相中將殿(信斉)の、妹(少將)のありどころさりとも知らぬやうあらじといみじう問ひ給ひしに更に知らぬよし申しゝに、あやにくに強ひ給ひし事などいひてある事あらがふはいとわび

じうこそありけれ。ほどほどゑみぬべかりしに、左中將經房のいとつれなく知らず顏にて居給へりしを、かの君に見だにあはせばゑみぬべかりしにわびて、臺盤のうへにあやしきめのありしを、唯とりに取りてくひ紛らはしゝかば、ちうげんにあやしの食ひ物やと人も見けむかし。されどかしこうそれにてなむ申さずなりにし。笑ひなましかばふようぞかし。まことに知らぬなめりとおぼしたりしも、をかしうこそ」など語れば「更になな聞え給ひそ」などいとゞいひて日ごろ久しくなりぬ。夜いたく更けて門おどろおどろしくたゝけば、何のかく心もとなく遠からぬ程をたゝくらむと聞きて問はすれば、瀧口なりけり。左衞門則光の文とて文をもてきたり。皆ねたるに火ちかく取りよせて見れば「あすみどきやうのけちぐわんにて宰相中將の御物いみにこもり給へるに、妹のあり所申せと責めらるゝに、すぢなし更にえ隱し申すまじき。そことや聞かせ奉るべき。いかに。仰せに從はむ」とぞいひたる。返り事も書かでめを一寸ばかり紙につゝみてやりつ。さて後にきて「一夜責めて問はれて、すゞろなる所にゐてありき奉りて、まめやかにさいなむにいとからし。さてとかくも御かへりのなくてそゞろなるめのはしをつゝみて賜へりしかば、とりたがへたるにや」といふに、あやしのたがへものや、人のもとにさる物つゝみて贈る人やはある。いさゝかも心得ざりけると、見るがにくければ物もいはで硯のある紙のはしに、

「かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ」

とかきて出したれば「歌よませ給ひつるか。更に見侍らじ」とてあふぎかへしてにげていぬ。

かうかたみにうしろみかたらひなどする中に、何ごとともなくて少し中あしくなりたる頃文おこせたり。「びんなき事侍るとも、契り聞えし事は捨て給はでよそにてもさぞなどは見給へ」といひたり。常にいふ事は「おのれをおぼさむ人は歌などよみてえさすまじき。すべてあだかたきとなむ思ふべき。今はかぎりありて絶えなむと思はむ時、さる事はいへ」といひしかば、この返しに、

「くづれよる妹背の山のなかなればさらによし野の川とだに見じ」

といひ遣りたりしも、まことに見ずやなりにけむ、かへりごともせず。さてかうぶり得て、とほたあふみのすけなどいひしかば、にくゝしてこそやみにしか。

物のあはれ知らせがほなるもの

はなたるまもなくかみてものいふ聲。まゆぬく。

さてその左衛門の陣にいきてのち、里に出でゝしばしあるに「とく參れ」など仰せ事のはしに、「左衛門の陣へいきし朝ぼらけなむ常におぼし出でらるゝ。「いかでさつれなくうちふりてありしならむ。いみじくめでたからむとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御かへりごとに、かしこまりのよし申して「わたくしにはいかでかめでたしと思ひ侍らざらむ。御前にもさりとも中なる少女はおぼしめし御覽じけむとなむ思ひ給へし」と聞えさせたれば、たち歸り「いみじく思ふべかめるなり。たがおもてぶせなる事をばいかでかけはしたるぞ。唯今宵のうちによろづの事をすてゝ參られよ。さらずばいみじくにくませ給はむとなむ仰せ事

あるとあれば、よろしからむにてだにゆゝし、ましていみじくとあるもじには命もさなが
ら捨てゝなむとて參りにき。

しきのみざうしにおはします頃、西の廂にふだんの御どきやうあるに、佛などかけ奉り法師の居たるこそ更なる事なれ。二日ばかりありてえんのもとにあやしき者の聲にて「猶その佛供のおろし侍りなむ」といへば「いかでまだきには」といらふるを、何のいふにかあらむと立ち出でゝ見れば、老いたる女の法師の、いみじくすゝけたるかりばかまのつゝとかやのやうに細く短きを、帶より下五寸ばかりなるころもとかやいふべからむ、おなじやうにすゝけたるを着て猿のさまにていふなりけり。「あれは何事いふぞ」といへば、聲ひきつくろひて「佛の御弟子にさふらへば、佛のおろしたべと申すを、この御坊たちの惜みたまふ」といふ。はなやかにみやびかなり。かゝるものはうちくんじたるこそあはれなれ、うたてもはなやかなるかなとて「ことものはくはで佛の御おろしをのみくふがいとたふときことかな」と言ふけしきを見て「などかことものもたべざらむ。それがさふらはねばこそ取り申し侍れ」といへば、くだもの、ひろきもちひなどを物に取り入れて取らせたるに、むげに中よくなりてよろづの事をかたる。わかき人々出できて「男やある。いづこにか住む」など口々に問ふに、をかしきことそへごとなどすれば「歌はうたふや。舞などするか」と問ひもはてぬに「よるはたれとねむ。常陸のすけとねむ。ねたるはだもよし」。これが末いと多かり。又「男山の峯のもみぢ葉さぞ名はたつたつ」と頭をまろがしふる。いみじくにくければ、笑ひにくみて、「いねいね」とい

ふもいとをかし。「これに何とらせむ」といふを聞かせ給ひて「いみじうなどかくかたはらいたきことはせさせつる。えこそ聞かで耳をふたぎてありつれ。そのきぬ一つとらせてとくやりてよ」と仰せ事あれば、とりて「それ賜はらするぞ。きぬすゝけたり、白くて着よ」とて投げとらせたれば、伏し拜みて肩にぞうちかけて舞ふものか。まことににくゝて皆入りにし。のちにはならひたるにや、常に見えしらがひてありく。やがて常陸のすけとつけたり。きぬもしろめずおなじすゝけにてあれば「いづちやりにけむ」などにくむに、右近の內侍の參りたるに「かゝる物なむかたらひつけて置きためる。かうして常にくること」とありしやうなど小兵衞といふ人してまねばせて聞かせ給へば「あれいかで見侍らむ。かならず見せさせ給へ。御得意なゝり。更によも語らひとらじ」など笑ふ。その後また尼なるかたはのいとあてやかなるが出できたるを、又呼び出でゝ物など問ふに、これは恥かしげに思ひてあはれなればきぬひとつたまはせたるを、伏し拜むはされどよし。さてうちなき悅びて出でぬるを、はやこの常陸の介いきあひて見てけり。その後いと久しく見えねど誰かは思ひ出でむ。さてしはすの十よ日のほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどしてものゝふたに入れつゝいと多くおくを「おなじくは庭にまことの山を作らせ侍らむ」とてさぶらひ召して「仰せ事にて」といへば、あつまりてつくるに、とのもりづかさの人にて御きよめに參りたるなども皆よりていと高くつくりなす。宮づかさなど參り集まりてことくはへことにつくれば、所の衆三四人參りたる。殿守づかさの人も二十人ばかりになりにけり。里なるさぶらひ召しになど

す。「今日この山つくる人には祿賜はすべし。雪山に參らざらむ人には同じからずとゞめむ」などいへば、聞きつけたるはまどひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば宮づかさ召してきぬ二ゆひとらせてえんに投げ出づるを、ひとつづゝとりて、をがみつゝ腰にさして皆まかでぬ。うへのきぬなど着たるはかたへさらで狩衣にてぞある。「これついまでありなむ」と人々の給はするに「十餘日はありなむ」唯この頃の程をある限り申せば「いかに」と問はせ給へば、「む月の十五日まで候ひなむ」と申すを、御前にもえさはあらじとおぼすめり。女房などはすべて「年の内つごもりまでもあらじ」とのみ申すに、餘り遠くも申してけるかな、げにえしもさはあらざらむ、ついたちなどぞ申すべかりけると下にはおもへど「さばれさまでなくと言ひそめてむことは」とてかたうあらがひつ。二十日のほどに雨など降れど消ゆべくもなし。たけぞ少しおとりもてゆく。「白山の觀音これきやさせ給ふな」と祈るも物ぐるほし。さてその山つくりたる日、式部のぞうたゞたか御使にて參りたれば、しとねさし出し、物などいふに「けふの雪山つくらせ給はぬ所なむなき。御前のつぼにも作らせ給へり。春宮（三條院）弘徽殿（義子）にもつくらせ給へり。京極殿（道長）にもつくらせ給へり」などいへば、

「こゝにのみめづらしと見る雪の山ところどころにふりにけるかな」

とかたはらなる人していはすれば、たびたび傾ぶきて、「返しはえ仕うまつりけがさじ。あざれたり。みすの前にて人にをかたり侍らむ」とてたちにき。歌はいみじく好むと聞きしにあやし。御前にきこしめして「いみじくよくとぞ思ひつらむ」とぞのたまはする。つもごりがた

に少しちひさくなるやうなれど猶いと高くてあるに、晝つ方椽に人々出でゐなどしたるに、常陸の介出できたり。「などいと久しく見えざりつる」といへば、「なにか、いと心憂き事の侍りしかば」といふに、「いかに、何事ぞ」と問ふに、「猶かく思ひ侍りしなり」とてながやかによみ出づ、

「うらやまし足もひかれずわたつうみのいかなるあまに物たまふらむ

となむ思ひ侍りし」といふをにくみ笑ひて、人の、目も見いれねば、雪の山にのぼりかゝづらひありきていぬるのちに、右近の內侍にかくなむと言ひやりたれば「などか人そへてこゝには賜はせざりし。かれがはしたなくて雪の山までかゝりつたひけむこそいと悲しけれ」とあるを、又わらふ。ゆき山はつれなくて年もかへりぬ。ついたちの日又雪多くふりたるを、うれしくも降り積みたるかなと思ふに「これはあいなし。初のをばおきて今のをばかき棄てよ」と仰せらる。うへにて局へいととうおるれば侍のをさなるもの、ゆのはの如くなるとのゐぎぬの袖の上に靑き紙の松につけたるをおきてわなゝき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば「齋院(選子)より」といふに、ふとめでたく覺えて取りて參りぬ。まだおほとのごもりたれば母屋にあたりたるみかうしおこなはむなど、かきよせて一人念じてあく、るいと重し。片つかたなければひしめくにおどろかせ給ひて「などさはする」との給はすれば「齋院(選子)より御文の候はむにはいかでか急ぎあけ侍らざらむ」と申すに、「げにいととかりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを卯杖のさまにかしらつゝみなどし

て山たちばな、ひかげ、やますげなどうつくしげに飾りて御文はなし。「唯なるやうあらむやは」とて御覽ずれば、うづちの頭つゝみたるちひさき紙に、

「山とよむ斧のひゞきをたづぬればいはひの杖のおとにぞありける」。

御返しかゝせ給ふほどもいとめでたし。齋院にはこれより聞えさせ給ふ。御返しも猶心ことにかきけがし、多く御用意見えたる。御使に白き織物のひとへすはうなるは梅なめりかし、雪の降りしきたるに、かづきてまゐるもをかしう見ゆ。このたびの御かへりごとを知らずなりにしこそくちをしかりしか。雪の山はまことにこしのにやあらむと見えて消えげもなし。くろくなりて見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心ちしていかで十五日まちつけさせむと念ずれど、「七日をだにえ過ぐさじ」と猶いへば、いかでこれ見はてむと皆人思ふ程に、俄に三日内へ入らせ給ふべし。いみじうロをしくこの山のはてを知らずなりなむ事と、まめやかに思ふ程に、人も「げにゆかしかりつるものを」などいふ。御まへにも仰せらる。同じくはいひあてゝ御覽ぜさせむと思へるかひなければ、御物の具はこび、いみじうさわがしきにあはせて、こもりといふ者のついぢの程に廂さして居たるをえんのもと近く呼びよせて「この雪の山いみじく守りてわらはべなどに踏みちらさせこぼたせで十五日まで侍はせ。よくよく守りてその日にあたらばめでたき祿たまはせむとす。わたくしにも、いみじきよろこびいはむ」など語らひて常に臺盤所の人、げすなどにこひてくるゝくだものや何やと、いと多くとらせたればうち笑みて「いとやすき事、たしかに守り侍らむ。わらはべなどぞのぼり侍

らむ」といへば「それをせいして聞かざらむものは事のよしを申せ」などいひ聞かせて入らせ給ひぬれば、七日まで侍ひて出でぬ。そのほどもこれがうしろめたきまゝに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、拜みつるとなど、かへりては笑ひあへり。里にてもあくるすなはちこれを大事にして見せにやる。十日のほどには、五六尺ばかりありといへば、うれしく思ふに、十三日の夜雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむといみじう口をし。「今ひと日もまちつけで」とよるも起き居て歎けば聞く人も「物くるほし」と笑ふ。人の起きて行くにやがて起き居てげすおこさするに、更に起きねばにくみ腹だゝれて起きいでたるを遣りて見すれば「わらふだばかりになりて侍る。こもりいとかしこうわらはべも寄せで守りてわすわさてまでも侍ひぬべし、祿賜はらむと申す」といへば、いみじくうれしく、いつしかあすにならば、いととう歌よみて物に入れてまゐらせむと思ふもいと心もとなうわびしう、まだくらきに、大きなるをりびつなどもたせて「これにしろからむ所ひたもの入れてもてこ。きたなげならむはかき捨てゝ」など、言ひくゝめて遣りたれば、いととくもたせてやりつる物ひきさげて「はやう失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしうよみ出でゝ人にも語りつたへさせむとうめきずんじつる歌もいとあさましくかひなく「いかにしつるならむ。きのふさばかりありけむ物をよのほどに消えぬらむこと」と言ひくんずれば、こもりが申しつるは「きのふいと暗うなるまで侍りき。祿をたまはらむと思ひつるものを、たまはらずなりぬる事と手をうちて申し侍りつる」とい

ひさわぐに、うちより仰せ事ありて「さて雪は今日までありつや」とのたまはせたれば、いとねたく口をしけれど「年のうちついたちまでだにあらじと人々けいし給ひし。きのふの夕暮まで侍りしをいとかしてしとなむ思ひ給ふる。けふまではあまりの事になむ、夜のほどに人のにくがりて取りすて侍るにやとなむ推しはかりはべるとけいせさせ給へ」と聞えさせつ。さて二十日に參りたるにも、まづこの事を御前にてもいふ。皆消えつとてふたのかぎりひきさげて持てきたりつる、帽子のやうにてすなはちまうで來たりつるがあさましかりし事、物のふたにて山美くしうつくりて白き紙に歌いみじく書きて參らせむとせしとなどけいすれば、いみじく笑はせ給ふ。おまへなる人々も笑ふに「かう心に入れて思ひける事をたがへたれば罪得らむ。まことには四日の夕さり、侍どもやりて取りすてさせしぞ。かへりごとにいひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出できていみじう手をすりて言ひけれど、おほせ事ぞ、かのより來たらむ人にかうきかすな、さらば、やうちこぼたせむといひて、左近のつかさ、南のついぢのとに皆取りすてし、いと高くて多くなむありつ（如元）といふなりしかば、げに二十日までも待ちつけてようせずは今年の初雪にも降りそひなまし。うへ（一條院）にも聞しめしていと思ひよりがたくあらがひたりと殿上人などにも仰せられけり。さても彼の歌をかたれ。今はかく言ひあらはしつれば、同じごとかちたり。かたれ」など御まへにものたまはせ、人々ものたまへど「なにせむにか、さばかりの事を承りながらけいし侍らむ」などまめやかにうく、心うがれば、うへも渡らせ給ひて「まことに年ごろは多くの人なめりと見つるを、こ

れにぞあやしく思ひし」など仰せらるゝに、いとゞつらくうちも泣きぬべき心ちぞする。「いであはれいみじき世の中ぞかし。のちに降り積みたりし雪をうれしと思ひしを、それはあいなしとて、かき捨てよなど仰せ事侍りしか」と申せば、「げにかたせじとおぼしけるならむ」とうへも笑はせおはします。

めでたきもの

唐錦、かざりだち、作り佛のもく。いろあひよく花房長くさきたる藤の松にかゝりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれどもえしも着給はぬ綾織物を心にまかせて着たる、あを色すがたなどいとめでたきなり。ところのしう、ざうしき、たゞの人の子どもなどにて、とのばらの四位五位六位もつかさあるが下にうち居て何と見えざりしも、藏人になりぬればえもいはずぞあさましくめでたきや。せんじもてまゐり、大饗の甘栗の使などに參りたるをもてなしきやうようし給ふさまいづこなりし。あまくだりびとならむとこそおぼゆれ。御むすめの、女御、后におはします。まだ姫君など聞ゆるも御使にて參りたるに御文とり入るゝよりうちはじめ、しとねさし出づる袖ぐちなど明暮見しものともおぼえず。下がさねのしりひきちらしてしふなるは今すこしをかしう見ゆ。みづから盃さしなどし給ふを我が心にも覺ゆらむ。いみじうかしこまり、べちに居し家の君達をもけしきばかりこそかしこまりたれ。同じやうにうちつれありく。うへの近くつかはせ給ふさまなど見るはねたくさへこそ覺ゆれ。御文かゝせ給へば御硯の墨すり御うちはなどまゐり給へば、われつかうまつる

に三とせ四とせばかりの程を、なりあしく、物の色よろしうてまじろはむはいふかひなきものなり。からぶり得ておりむこと近くならむだに、いのちよりはまさりてをしかるべき事をその御たまはりなど申して、まどひけるこそ口をしけれ。昔の藏人はことしの春よりこそなきたちけれ。今の世にははしりくらべをなむする。

はかせのざえあるはいとめでたしといふもおろかなり。顔もいとにくげに、下﨟なれども世にやんごとなきものに思はれ、かしこき御前に近づきまゐり、さるべきことなど問はせ給ふ御文の師にて侍ふは、めでたくこそ覺ゆれ。願文も、さるべきもの丶序作り出してほめらる丶いとめでたし。法師のざえあるすべて言ふべきにあらず。持經者の一人してよむよりもあまたが中にてときなどさだまりたる御どきやうなどに、猶いとめでたきなり。くらうなりて「いづら御どきやうあぶらおそし」などいひて、よみやみたるほど忍びやかにつゞけ居たるよ。后の晝の行啓、御うぶや、みやはじめの作法しく〳〵、こまいぬ大しやうじなどもてまゐりて御ちやうのまへにしつらひすゑ、内膳御へつひわたしたてまつりなどしたる。姫君など聞えしたゞ人とてそつゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき、春日まうで。えびぞめの織物、すべて紫なるはなにもなにもめでたくこそあれ、花も糸も紙も。紫の花の中にはかきつばたぞすこしにくき。いろはめでたし。六位のとのゐすがたのをかしきにもむらさきのゆゑなめり。ひろき庭に雪のふりしきたる。今上の一の宮（敦康親王）、まだわらはにておはしますが御をぢに上達部などのわかやかに淸げなるにいだかれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ御馬引かせて

御覽じ遊ばせ給へる思ふ事おはせじとおぼゆる。

なまめかしきもの

ほそやかにきよげなるきんだちの直衣すがた、をかしげなる童女のうへのはかまなどわざとにはあらで、ほころびがちなるかざみばかり着てくすだまなど長くつけてからうらんのもとに扇さしかくして居たる。若き人のをかしげなる夏の几帳のしたうち懸けて、しろき綾ふたあゐ引き重ねて手ならひしたる。うすえふの草紙むらごの糸してをかしくとぢたる。柳のもえたるに青きうすえふに書きたる文つけたる。ひげこのをかしう染めたるごえふの枝につけたる。三へがさねの扇いつへはあまりあつくなりてもとなどにくげなり。よくしたるひわりご、白きくみのほそき。新しくもなくていたくふりてもなきひはだやにさうぶうるはしくふきわたしたる。青やかなるみすのしたより、(きちやうのイ作)くちきがたのあざやかに、ひもいとつやゝかにてかゝりたる。ひもの吹きなびかされたるもをかし。夏のもかうのあざやかなるすのとの高欄のわたりにいとをかしげなるねこの、赤きくびつなに白きふだつきて碇の緒くひつきて引きありくもなまめいたり。五月のせちのあやめの藏人、さうぶのかづら、あかひもの色にはあらぬをひれくたいなどしてくすだまをみこたち上達部などの立ちなみたまへるに奉るもいみじうなまめかし。取りて腰にひきつけて舞踏し拜したまふもいとをかし。ひとりのわらは。をみの君達もいとなまめかし。六位の青色のとのゐすがた、臨時の祭の舞人。五節のわらはなまめかし。

宮の五せち出させ給ふに、かしづき十二人。ことゞころには、（女御）御息所の人出すをば、わろき事にぞすると聞くに、いかにおぼすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今二人は女院（詮子）、しげいしやの人、やがてはらからなりけり。辰の日の青ずりの唐ぎぬ、かざみを着せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじう隱して皆さうぞくしたちて、暗うなりたる程にもて來てきす。わかひもいみじう結び下げていみじくやうしたる白ききぬに、かたぎのかた繪にかきたる織物の唐ぎぬのうへに着たるは誠にめづらしき中にわらはは今少しなまめきたり。下づかへまでつゞき立ちて居たる、上達部、殿上人おどろき興じて、をみの女房とつけたり。

をみのきんだちはとに居て物言ひなどす。五せちの局を皆こぼちすかして、いとあやしくてわらするいとことやうなり。「その夜までは猶うるはしくこそあらめ」とのたまはせて、さも惑はさず。几帳どものほころびゆひつゝこぼれ出でたり。小兵衞といふがあかひもの解けたるを「これを結ばゞや」といへば、實方の中將よりてつくろふにたゞならず。

「あしびきの山ゐの水はこほれるをいかなるひものとくるなるらむ」

といひかく。年わかき人のさるけせうの程なれば言ひにくきにやあらむ、返しもせず。そのかたはらなるおきな人たちもうち捨てつゝともかくも言はぬを、みやづかさなどは耳とゞめてきゝけるに久しくなりにけるかたはらいたさにことかたより入りて、女房のもとによりて「などかうはおはする」などぞさゝめくなるに、四人ばかりをへだてゝ居たれば、よく思

ひ得たらむにもいひにくし。まして歌よむと知りたらむ人のおぼろげならざらむはいかでかと、つゝましきこそはわろけれ。「よむ人はさやはある。いとめでたからねどねたうとこそはいへ」とつまはじきをしてわりくもいとをかしければ、

「うす氷あはにむすべるひもなればかざす日かげにゆるぶばかりを「ぞ」

と辨のおとゞといふに傳へさすれば、きえいりつゝえも言ひやらず。「などかなどか」と耳を傾ぶけてとふに、少しことどもりする人のいみじうつくろひ、めでたしと聞かせむと思ひければ、えもいひつゞけずなりぬるこそなかなか耻かくす心ちしてよかりしか。おりのぼる送りなどになやましといひ入れぬる人をも、のたまはせしかば、あるかぎりむれ立ちてごとにも似ず、あまりてそうるさげなめれ。まひ姫はすけまさのうまのかみのむすめ、染殿の式部卿の宮靉の御弟の四の君の御はら十二にていとをかしげなり。はての夜もおひかづきいくもさわがず。やがて仁壽殿よりとほりて清涼殿の前の東のすのこより、舞姫をさきにてうへの御局へ參りしほどをかしかりき。

細太刀の平緒つけて清げなるをのこのもてわたるもいとなまめかし。紫の紙をつゝみてふんじて、房長き藤につけたるもいとをかし。

内裏は五節のほどこそすゞろにたゞならで見る人もをかしうおぼゆれ。とのもりづかさなどのいろいろの細工を、物いみのやうにてさいしきつけたるなどもめづらしく見ゆ。清涼殿のそり橋にもとゆひのむらご、いとけざやかにて出で居たるも、さまざまにつけてをかしう

のみ、うへざうしわらはべどもいみじき色ふしと思ひたるいとことわりなり。やまゐひかげなどやない箱にいれて、かうぶりしたるをのこもてわりくいとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて扇やなにやと拍子にして「つかさまされどしきなみぞたつ」といふ歌をうたひて局どものまへわたる程はいみじくそひたちたらむ人の心騒ぎぬべしかし。ましてさと一度に笑ひなどしたるいとおそろし。行事の藏人のかいねりがさね、物よりことにきよらに見ゆ。しとねなど敷きたれどなかなかえものぼり居ず。女房の出でたるさま褒めそしり、このごろはことごとはなかめり。帳臺の夜、行事の藏人いときびしうもてなして「かいつくろひ二人、童より外は入るまじ」とおさへておもにくきまで言へば、殿上人など「猶これ一人ばかりは」などのたまふ。「うらやみあり。いかでか」などかたく言ふに、宮の御かたの女房二十人ばかり、おしこりてことごとしう言ひたる藏人なにともせず、戸をおしあけてさゝめきいれば、あきれて「いとこはすぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞかしづきどもゝ皆入るけしきいとねたげなり。うへもおはしましていとをかしと御覽じおはしますらむかし。わらは舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顏どもいとらうたげにをかしかりき。

むみやうといふ琵琶の御ことを、うへのもてわたらせ給へるを見などして、かきならしなどすと言へばひくにはあらず。緒などを手まさぐりにして「これが名よ、いかにとかや」など聞えさするに、唯いとはかなく名もなしとのたまはせたるは猶いとめでたくこそ覺えしか。しげいしやなどわたり給ひて御物語のついでに「まろがもとにいとをかしげなるさうの笛

こそあれ。こどのゝ得させ給へり」との給ふを、僧都の君の「それはりうゑんにたうべ。おのれがもとにめでたききん侍り。それにかへさせ給へ」と申し給ふを、きゝも入れ給はで猶こと事をのたまふに、いらへさせ奉らむとあまたたび聞え給ふに、なほ物のたまはねば、宮の御まへの「いなかへじとおぼいたる物を」とのたまはせけるが、いみじうをかしき事ぞ限なき。この御笛の名を僧都の君もえ知り給はざりければ唯うらめしとおぼしためる。これは玄きの御ざうしにおはしまし時の事なり。うへの御まへにいなかへじといふ御笛のさふらふなり。御まへに侍ふものどもは琴も笛も皆珍らしき名つきてこそあれ。琵琶はげんじやう、ぼくば、ゐゝへ、ゐけう、むみやうなど、又わごんなども、くちめ、鹽竈、二貫などぞ聞ゆ。すゐろう、こすゐろう、宇多の法師、くぎうち、はふたつ、なにくれと多く聞えしかど忘れにけり。宣陽殿の一の棚にといふことぐさは頭中將こそ玄給ひしか。

うへの御局のみすの前にて、殿上人日ひと日、こと、笛吹き遊びくらして、まかで別るゝ程、まだ格子をまゐらぬに、おほとなぶらをさし出でたれば、とのわきさたるがあらはなれば、琵琶の御ことをたゞざまにもたせ給へり。紅の御ぞのいふもよのつねなる。袿又はりたるもあまた奉りて、いと黒くつやゝかなる御琵琶に、御ぞの袖をうちかけて捕へさせ給へるめでたきに、そばより御ひたひのほど白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは譬ふべきかたなくめでたし。近く居給へる人にさし寄りて「なかば隱したりけむもえかうはあらざりけむかし。それはたゞ人にてこそありけめ」といふを聞きて、心ちもなきを、わりなく分け入りてけい

すれば、笑はせ給ひて「我は知りたりや」となむ仰せらるゝと傳ふるもをかし。
御めのとのたいふの、けふひうがへくだるに賜はする扇どものなかに、片つかたには日いとはなやかにさし出でゝ、旅人のある所井手の中將のたちなどいふさまいとをかしう書きて、今片つかたには京のかた雨いみじう降りたるに、ながめたる人などかきたるに、
「あかねさす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと」。
ことばに御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて遠くこそえいくまじけれ。

ねたきもの

これよりやるも、人のいひたる返しも、書きて遣りつるのち、文字一つ二つなど思ひなほしたる。とみのものぬふに縫ひはてつと思ひて針をひき拔きたれば、はやうしりを結ばざりける。又かへさまに縫ひたるもいとねたし。
南の院(道隆邸)におはしますころ、西の對に殿(道隆)のおはしますかたに、宮(定子)もおはしませば、しんでんに集り居て、さうざうしければふれあそびをし、わたどのに集りゐなどしてあるに、「これ唯今とみのものなり。誰も誰も集りて時かはさず縫ひて參らせよ」とてひらぬきの御ぞを給はせたれば、みなみおもてに集り居て御ぞかたみづゝ、誰かとく縫ひ出づるといどみつゝ、近くも對はず、縫ふさまもいと物ぐるほし。命婦の乳母いととく縫ひはてゝうち置きつる、ゆだけのかたの御身を縫ひつるがそむきざまなるを見つけず、とぢめもしあへず惑ひ置き

て立ちぬるに、御せ合せむとすればはやうたがひにけり。笑ひのゝしりて「これ縫ひ直せ」といふを「たれがあしう縫ひたりと知りてか直さむ。あやなどならばこそ裏を見ざらむ、縫ひたがへの人のけになほさめ。無紋の御ぞなり。何をしるしにてか直す人誰かあらむ。唯まだ縫ひ給はざらむ人になほさせよ」とて聞きも入れねば「さ言ひてあらむや」とて源少納言、新中納言など言ひ直し給ひし顏見やりて居たりしこそをかしかりしか。これはよさりのぼらせ給はむとて「とく縫ひたらむ人を、思ふと知らむ」と仰せられしか。

見すまじき人に、外へ遣りたる文取りたがへてもて行きたるねたし。げに過ちてけりとはいはで口かたうあらがひたる、人目をだに思はずば走りもうちつべし。おもしろき萩すゝきなどを植ゑて見る程に、ながびつもたるもの鋤などひきさげて たゞほりにほりていぬるこそわびしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをりはさもせぬものを、いみじうせいすれど「たゞすこし」など言ひていぬる言ふかひなくねたし。ずりやうなどの來てなめげに物いひ、さりとて我をばいかゞと思ひたるけはひに言ひ出でたるいとねたげなり。見すまじき人の文を引き取りて、庭におりて見たてるいとわびしうねたく、追ひて行けど、すのもとにとまりて見るこそ飛びも出でぬべき心ちすれ。すゞろなることはらだちて同じ所にもねず、身じくり出づるをしのびて引きよすれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて人もさばよかなりとゑじて、かいくゞみて臥しぬる後いと寒き折などに、唯ひとへぎぬばかりにてあやにくがりて、大かた皆人もねたるに、さすがに起きゐらむもあやしくて、夜の更くるまゝにねた

く起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にもとにも物うちなりなどしておそろしければ、やをらまろび寄りてきぬ引きあぐるに、そらねしたるこそいとねたけれ。「猶こそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

かたはらいたきもの

まらうどなどに逢ひて物いふに、奥のかたにうちとけごと人のいふをせいせで聞く心ち。思ふ人のいたくゑひておなじ事したる。聞き居たるをも知らで人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれどかたはらいたし。旅だちたる所近き所などにてげすどものざれかはしたる。にくげなるちごをおのれが心ちにかなしと思ふまゝにうつくしみ遊ばし、これが聲のまねにて言ひける事など語りたる。ざえある人の前にてざえなき人の物おぼえがほに人の名などいひたる。殊によしともおぼえぬ。我が歌を人に語りきかせて、人の譽めしことなどいふもかたはらいたし。人の起きて物語などするかたはらにあさましううちとけてねたる人。まだねもひきとゝのへぬ琴を心一つやりて、さやうのかた知りつる人の前にて彈く。いとゞしう（五字いとどうイ）住まぬむこのさるべき所にてゑうとに逢ひたる。

あさましきもの

さしぐしみがくほどに物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなるものはところせく久しくなどやあらむとこそ思ひしか。唯夢の心ちしてあさましうあやなし。人のために恥かしき事つゝみもなく、ちごもおとなもいひたる。かならずきなむと思ふ人を待

ちかかして、曉がたに唯いさゝか忘られて寢入りたるに、からすのいと近くかうと鳴くに、うち見あげたれば晝になりたるいとあさまし。てうばみにどう取られたる。むげに知らず見ずきかぬ事を人のさし對ひてあらがはすべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。のりゆみにわなゝくわなゝく久しうありてはづしたる矢のもてはなれてことかたへ行きたる。

くちをしきもの

せちゑ佛名に雪ふらで雨のかきくらし降りたる。節會さるべきをりの御物いみにあたりたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはる事出で來て俄にとまりたる。いみじうする人の子うまで年ごろ具したる。あそびをもし、見すべき事もあるに、かならずきなむと思ひて呼びに遣りつる人の「障る事ありて」などいひてこぬくちをし。男も女も宮仕へ所などに同じやうなる人もろともに寺へまうで、物へも行くにこのもしうこぼれ出でゝ用意はげしからず、あまり見ぐるしとも見つべくはあらぬに、さるべき人の馬にても車にても行きあひ見ずなりぬるいとくちをし。わびてはすきずきしからむげすなどにても、人に語りつべからむにてもがなと思ふもけしからぬなめりかし。

五月の御さうじの程、しきにおはしますにぬりごめの前、ふたまなる所を殊にしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。ついたちより雨がちにて曇りくらすつれづれなるを、「杜鵑の聲尋ねありかばや」といふを聞きて、われもわれもと出でたつ。賀茂の奥になにがしとかや、

七夕の渡る橋にはあらでにくき名ぞ聞えし。「そのわたりになむ日ごとに鳴く」と人のいへば「それはひぐらしなり」といらふる人もあり。そこへとて五日のあした宮づかさ車の事いひて、北の陣より「五月雨はとがめなきものぞ」とてさしよせて四人ばかりぞ乘りて行く。羨ましがりて「今一つして同じくは」などいへば「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、うまばといふ所にて人多くさわぐ。「何事するぞ」と問へば「てつがひにてま弓射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて車とゞめたり。「右近の中將皆つき給へる」といへど、さる人も見えず、六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬ事ぞ。はやく過ぎよ」とて行きもて行けば、道も祭の頃思ひ出でられてをかし。かういふ所にはあきのぶの朝臣家あり。「そこもやがて見む」といひて車よせておりぬ。田舍だち事そぎて馬のかた書きたるさうじ、網代屛風、みくりのすだれなど、殊更に昔の事をうつし出でたり。屋のさまもはかなだちてはしちかくあさはかなれど（らうめきてはしちかなれどイ）をかしきにげにぞかしがましと思ふばかりに鳴きあひたる郭公の聲を、口をしう御前にきこしめさず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。「所につけてはかゝる事をなむ見るべき」とていねといふもの多くとり出で、わかき女どもの穢げならぬそのわたりの家のむすめおんななどひきゐて來て、五六人してこかせ、見も知らぬくるべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、珍らしく笑ふに、郭公の歌よまむなど云つる忘れぬべし。からゑにあるやうなるかけばんなどして物くはせたるを、見いるゝ人なければ家あるじ「いとわろくひなびたり。かゝる所にきぬる人はようせずはあ

る（佐ほ）もなどせめ「出してこそ參るべけれ。むげにかくてはその人ならず」などいひてとりはやし「この下蕨は手づから摘みつる」などいへば、「いかで女官などのやうにつきなみてはおらむ」などいへば、とりおろして「れいのはひぶしに習はせ給へるおまへたちなれば」とてとりおろしまかなひさわぐ程に「雨ふりぬべし」といへば、急ぎて車にのるに「さてこの歌はこゝにてこそよまめ」といへば「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつゝ車のすだれそばなどに長き枝をふきさしたれば、唯卯の花がさねをこゝに懸けたるやうにぞ見えける。供なるをのこどもゝいみじう笑ひつゝ網代をさへつきうがちつゝ「こゝまだしこゝまだし」とさし集むなり。人も逢はなむと思ふに更にあやしき法師あやしのいふかひなきもののみたまさかに見ゆるいと口をし。近う來ぬれば「さりともいとかうて止まむやは。この車のさまをだに人に語らせてこそ止まめ」とて、一條殿（爲光）のもとにとゞめて「侍從殿（信公）やおはします。郭公の聲聞きて今なむかへり侍る」といはせたる。つかひ「唯今まゐる。あが君あが君となむのたまへる。さぶらひにまひろげて指貫奉りつ」といふに、「待つべきにもあらず」とて走らせて土御門ざまへやらするに、いつのまにかさうぞくしつらむ、帶は道のまゝにゆひて志ばしばと追ひくる。供に、さぶらひ、ざふしき、ものはかで走るめる。とくやれどいとゞいそがしくて、土御門にきつきぬるにぞあへぎまどひておはして、まづこの車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつゝの人の乘りたるとなむ更に見えぬ。猶おりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもゝ興じ笑ふ。「歌はいかにか。それ聞かむ」とのたまへば、「今おま

へに御覽ぜさせてこそは」など言ふ程に、雨まことに降りぬ。「などかことみかどのやうにおらでこの土御門しもうへもなくつくりそめけむと、今日こそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸らむずらむ。こなたざまは唯後れじと思ひつるに、人目も知らずはしられつるをおういかむこそいとすさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし。うちへ」などいふ。「それもゑばうしにてはいかでか。とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば笠なきをのこども唯ひきにひき入れつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせてうち見かへりうち見かへり、この度はゆるゆると物うげにて卯花ばかりを取りおはするもをかし。さて參りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。怨みつる人々、ゑじ心うがりながら、藤侍從、一條の大路走りつるほど語るにぞ皆笑ひぬる。「さていづら、歌は」と問はせ給ふ。かうかうとけいすれば「くちをしのことや。うへ人などの聞かむにいかでかをかしきなくてあらむ。その聞きつらむ所にてふとこそよまゝしか。あまり儀しき事さめつらむぞあやしきや。こゝにてもよめ。言ふかひなし」などのたまはすればげにと思ふにいとわびしきをいひ合せなどする程に、藤侍從の、ありつる卯の花につけて卯の花のうすえふに、

「ほとゝぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし」。

「かへしまつらむ」など局へ硯とりに遣れば「唯これしてとくいへ」とて御硯のふたに紙など入れて賜はせたれば、「宰相の君書き給へ」といふを、「なほそこに」などいふ程に、かきくらし雨降りてかみもおどろおどろしう鳴りたれば、物も覺えず唯おろしにおろす。ゑきの御ざ

うしは志とみをぞみ格子にまゐり渡し惑ひし程に、歌のかへりごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて少しやむ程はくらくなりぬ。「唯今猶その御返り事奉らむ」とて取りかゝるほどに、人々上達部などかみの事申しに參り給ひつれば、西おもてに出でゝ物など聞ゆる程に、まぎれぬ。人はたさしてえたらむ人こそ知らめとて止みぬ。「大かたこの事にすくせなき日なり。どうじて今はいかでさなむいきたりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、今もなどそれいきたりし人どものいはざらむ、されどもさせじと思ふにこそあらめと物しげにおぼしめしたるもいとをかし。「されど今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべきことかは」などのたまはせしかばやみにき。二日ばかりありてその日の事など言ひ出づるに、宰相の君「いかにぞ手づから折りたるといひし下蕨は」とのたまふを聞かせ給うて、「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙のちりたるに、

「志たわらびこそこひしかりけれ」

とかゝせ給ひて、「もといへ」と仰せらるゝもをかし。

「ほとゝぎすたづねてきゝし聲よりも」

と書きて參らせたれば「いみじううけばりたりや。かうまでだにいかで郭公の事をかけつらむ」と笑はせ給ふも恥かしながら、「何かこの歌すべて詠み侍らじとなむ思ひ侍るものを、物のをりなど人のよみ侍るにもよめなど仰せらるれば、えさぶらふまじき心ちなむ志はべる。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅の折は菊などをよむ事

は侍らむ。されど歌よむと言はれ侍りしすゑずゑは、少し人にまさりてそのをりの歌はこれこそありけれ。さはいへどそれが子なればなど言はれたらむこそかひある心ちし侍らめ。つゆとり分きたるかたもなくて、さすがに歌がましく我はと思へるさまに、さいそによみ出で侍らむなむ、なき人のためいとほしく侍る」などまめやかにけいすれば、笑はせ給ひて、「さらばたゞ心にまかす。我はよめともいはじ」とのたまはすれば、「いと心やすくなり侍りぬ。今は歌の事思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、かうしんせさせ給ひて内大臣殿(伊周)いみじう心まうけせさせ給へり。夜うち更くる程に題出して女ばうに歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがし出すに、宮の御まへに近く侍ひて物けいしなどこと事をのみいふを、おとゞ御覧じて「などか歌はよまで離れ居たる。題とれ」とのたまふを、「さる事承りて歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」。「ことやうなる事、まことにさる事やは侍る。などかは許させ給ふ。いとあるまじきことなり。よしこと時は知らず、今宵はよめ」などせめさせ給へど、けぎよう聞きも入れで侍ふに、こと人ども詠み出してよしあしなど定めらるゝ程に、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

「もとすけがのちといはるゝ君しもや今宵のうたにはづれてはをる」

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや。いみじく笑へば、「何事ぞ何事ぞ」とおとゞものたまふ。

「その人ののちといはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよまゝし。

つゝむ事さふらはずは、千歌なりともこれよりぞ出でまうでこまし」とけいしつ。御かたがた君達うへ人など御まへに人多く侍へば、廂の柱によりかゝりて女房と物語して居たるに、物をなげ賜はせたる、あけて見れば「思ふべしやいなや。第一ならずはいかゞ」と問はせたまへり。御前にて物語などするついでにも「すべて人には一に思はれずば、さらに何にかせむ。唯いみじうにくまれあしうせられてあらむ。二三にてはしぬともあらじ。一にてをあらむ」などいへば、一乘の法なりと人々わらふことのすぢなめり。筆紙たまはりたれば「九品蓮臺の中には下品といふとも」と書きてまゐらせたれば「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。言ひそめつる事はさてこそあらめ」とのたまはすれば「人に隨ひてこそ」と申す。「それがわろきぞかし。だい一の人に又一に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるゝもいとをかし。

中納言殿(隆家)まゐらせ給ひて御扇奉らせ給ふに「隆家こそいみじきはねをえて侍れ。それをはらせて參らせむとするを、おぼろけの紙ははるまじければもとめ侍るなり」と申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじく侍る。更にまだ見ぬはねのさまなりとなむ人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」とこと高く申し給へば、「さて扇のにはあらで、くらげのなり」と聞ゆれば、「これは隆家がことにしてむ」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそかたはらいたき物のうちに入れつべけれど、人ごとな落しそと侍れば、いかゞはせむ。

雨のうちはへ降るころ今日もふるに、御使にて式部のしようのぶつね參りたり。例のしとね

さし出したるを、常よりも遠く押し遣りて居たれば、「あれは誰がれうぞ」といへば笑ひて、「かゝる雨にのぼり侍らばあしがたつきていとふびんにきたなげになり侍りなむ」と言へば「など。せんぞくれうにこそはならめ」といふを、「これは御まへにかしこう仰せらるゝにはあらず。のぶつねがあしがたの事を申さゞらましかば、えのたまはざらまし」とてかへすがへすいひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ぼめかなとかたはらいたく。

はやうおほきさいのみや（子安）にゑぬたきといひて名高きゑもづかへなむありける。美濃の守にて亡せにける藤原の時柄、藏人なりける時、下づかへどもある所に立ち寄りて「これやこの高名のゑぬたきなどさも見えぬ」と言ひける返事に、「それはときからもさも見ゆる名なり」といひたりけるなむ、かたきにえりてもいかでかさる事はあらむ。殿上人上達部までも興ある事にのたまひける。「又さりけるなめりと今までかく言ひ傳ふるは」と聞えたり。「それ又時からがいはせたるなり。すべて題出しからなむふみも歌もかしこき」といへば、「げにさる事あることなり。さらば題出さむ。歌よみ給へ」といふに、「いとよき事。ひとつはなにせむ。同じうはあまたをつかうまつらむ」などいふほどに、御題は出でぬれば、「あなおそろし。まかりいでぬ」とて立ちぬ。手もいみじう、まなもかんなもあしう書くを、人も笑ひなどすれば「かくしてなむある」といふもをかし。

つくもどころの別當する頃、たれがもとにやりけるにかあらむ、物の繪やうやるとて「これがやうに仕るべし」と書きたるまんなのやう、もじの世にゑらずあやしきを見つけて、それ

かかたはらに「これがまゝにつかうまつらばことやうにこそあるべけれ」とて殿上にやりたれば、人々取りて見ていみじう笑ひけるに、おほはらだちてこそうらみしか。

しげいしや（女御原子）春宮（三條院）に參り給ふほどの事など、いかゞはめでたからぬ事なし。正月十日にまゐり給ひて宮（定子）の御方に御文などはしげう通へど、御對面などはなきを、二月十日宮の御方にわたり給ふべき御せうそこあれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房なども皆用意したり。よなかばかりに渡らせ給ひしかばいくばくもなくてあけぬ。登華殿のひんがしの二間に御しつらひはしたり。つとめていととく御格子參りわたしてあかつき、殿（道隆）うへ（高内侍）ひとつ御車にて參り給ひにけり。宮は御ざうしの南に、四尺の屛風西東に隔てゝ北西に立てゝ御たゝみしとねうち置きて御火桶ばかりまゐりたり。御屛風の南、御帳の前に女房いと多くさぶらふ。こなたにて御ぐしなどまゐる程、「しげいしやは見奉りしや」と問はせ給へば、「まだいかでか。しやくせん寺供養の日御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「その柱と屛風とのもとによりて我がうしろより見よ。いと美くしき君ぞ」とのたまはすれば、うれしくゆかしさまさりていつしかと思ふ。紅梅のかたもん、うきもんの御ぞどもに紅のうちたる御ぞ、みへがうへに唯引き重ねて奉りたるに「紅梅には濃ききぬこそをかしけれ。今は紅梅は着でもありぬべし。されど萠黄などのにくければ紅にはあはぬなり」との給はすれど、唯いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御ぞにやがて御かたちのにほひ合せ給ふぞ。猶ことよき人もかくやおはしますらむとぞゆかしき。さてゐざり出でさせ給ひぬればやがて御屛風に

添ひつきてのぞくを「あしかめり。うしろめたきわざ」ときこえごつ人々もいとをかし。御志やうじの廣うあきたればいとよく見ゆ。うへは白き御ぞども紅のはりたる二つばかり、女房の裳なめり。引きかけておくによりて東おもてにおはすれば、たゞ御ぞなどぞ見ゆる。志げい志やは北にすこしよりて南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて濃きあやの御ぞ、少しあかき蘇枋の織物の袿、萌黄のかたもんのわかやかなる御ぞ奉りて扇をつとさし隱し給へり。いといみじくげにめでたく美くしと見え給ふ。殿はうす色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御ぞども、御ひもさして廂の柱にうしろをあてゝこなたざまに向きておはします。めでたき御有樣どもをうちゑみて例のたはぶれごとをせさせ給ふ。志げい志やの繪に書きたるやうに美くしげにて居させ給へるに、宮いとやすらかに今すこしおとなびさせ給へる御けしきの紅の御ぞに匂ひ合せ給ひて、なほたぐひはいかでかと見えさせ給ふ。御てうづまゐる。かの御かたは宣耀殿、ぢやうぐわでんをとほりて童二人下仕四人してもてまゐるめり。から廂のこなたの廊にぞ女房六人ばかりさぶらふ。せばしとてかたへは御おくりして皆歸りにけり。櫻のかざみ、萌黄紅梅などいみじく、かざみ長く志り引きて取り次ぎまゐらすいとなまめかし。織物のからぎぬどもこぼれ出でゝ、すけまさのうまのかみのむすめ少將の君、北野の三位のむすめ宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見る程に、この御かたの御てうづばんの釆女、あをすそごの裳、唐ぎぬ、くんたい、ひれなどしておもてなどいと白くて下仕など取り次ぎてまゐる程、これはたおほやけしう唐めいてをかし。おものゝをりになりてみ

ぐしあげまゐりて、藏人どもまかなひのかみあげてまゐらする程に、へだてたりつる屏風も押しあけつれば、かいまみの人かくれ蓑とられたる心ちして飽かずわびしければ、みすと几帳との中にて柱のもとよりぞ見奉る。きぬの裾裳など唐ぎぬは皆みすのそとにおし出されたれば、殿のはしのかたより御覧じ出して「たぞや、霞のまより見ゆるは」ととがめさせ給ふに、「少納言が物ゆかしがりて侍るならむ」と申させ給へば、「あなはづかし。かれはふるきとくいを。いとにくげなるむすめども持ちたりともこそ見侍れ」などのたまふ。御けしきいとしたり顔なり。あなたにもおものまゐる。「うらやましくかたがたのは皆まゐりぬめり。とくきこしめして翁女におろしをだに給へ」など唯日ひと日さるがうことをし給ふほどに、大納言殿（伊周）三位中將（隆家）松君（伊周息）もゐて參り給へり。殿いつしかといだき取り給ひて膝にすゑ給へるいとうつくし。せばきえんに所せき日の御さうぞくの下襲など引きちらされたり。大納言殿はものものしう清げに、中將殿はらうらうしういづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにてうへの御すくせこそめでたけれ。御わらふだなど聞え給へど、陣につき侍らむとていそぎ立ち給ひぬ。しばしありて式部のしようなにがしとかや御使にまゐりたれば、おものやどりの北によりたる間にしとねさし出でゝすゑたり。御かへりは今日はとく出ださせ給ひつ。まだしとねも取り入れぬほどに、東宮の御使にちかよりの少將まゐりたり。御文とり入れてわたどのはほそきえんなれば、こなたのえんにしとねさし出でたり。御文とり入れて、殿、うへ、宮など御覧じわたす。「御かへりはや」などあれど、とみにも聞え給はぬを「なに

がしが見侍れば出で給はぬなめり。さらぬをりはまもなくこれよりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御おもてはすこしあかみながら少しうちほゝゑみ給へるいとめでたし。「とく」などうへも聞え給へば、奥ざまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、もろともにかゝせ奉り給へばいとゞつゝましげなり。宮の御かたより萠黃の織物の小袿袴押し出されたれば、三位中將かづけ給ふ。くるしげに思ひて立ちぬ。松君のをかしう物のたまふを、誰も誰もうつくしがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引き出でたらむにわろくは侍らじかし」などのたまはするを、げになどか今までさる事のとぞ心もとなき。ひつじの時ばかりに、えんだうまゐるといふ程もなく、うちそよめき入らせ給へば、宮もこなたに寄らせ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。らうに殿上人いと多かり。殿の御まへに宮司めしてくだものさかなめさす。「人々ゑはせ」などおほせらる。誠に皆ゑひて女房と物いひかはす程、かたみにをかしと思ひたり。日の入る程に起きさせ給ひて山井の大納言召し入れてみうちきまゐらせ給ひてかへらせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御ぞの夕ばえなどもかしこければとゞめつ。山のゐの大納言はいりたゝぬ御せうとにても、いとよくおはすかし。にほひやかなる方はこの大納言にもまさり給へるものを、世の人はせちに言ひおとしきこゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山のゐの大納言、三位の中將、內藏頭など皆さぶらひ給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にてうまの內侍のすけ參り給へり。「今宵はえ」などしぶらせ給ふを、殿聞かせ給ひて「いとあるまじき事。はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、又春宮

の御使しきりにある程いとさわがし。御むかへに女房、春宮のなども參りてとくとそゝのかし聞ゆ。「まづさばかの君わたし聞え給ひて」とのたまはすれば、「さりともいかでか」とあるを、「猶見おくり聞えむ」などのたまはする程いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづしげいしやわたり給ひて殿などかへらせ給ひてぞのぼらせ給ふ。道の程も殿の御さるがうことにいみじく笑ひてほとほとうちはしよりもおちぬべし。

殿上より梅の花の皆散りたる枝を「これはいかに」といひたるに唯「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩をじゆじて黑戶に殿上人いと多く居たるを、上の御前（一條院）きかせ坐しまして「宜しき歌など詠みたらむよりもかゝることは勝りたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

二月つごもり、風いたく吹きて空いみじくくろきに雪すこしうちちりたる程、黑戶にとのもづかさきて「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、「公任の君、宰相中將殿の」とあるを見ればふところ紙に、たゞ、

「すこし春あるこゝちこそすれ」

とあるは、げに今日のけしきにいとよくあひたるを、これがもとはいかゞつくべからむと思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それそれ」といふに、皆耻かしき中に宰相中將の御いらへをばいかゞことなしびにいひ出でむと心ひとつに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれども、うへのおはしましておほとのごもりたり。とのもづかさはとくとくといふ。げに遲くさへあらむはとりどころなければ、さばれとて、

「そらさむみ花にまがへてちるゆきに」とわなゝくわなゝく書きてとらせていかゞ見たまふらむと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふにそしられたらばきかじと覺ゆるを、「としかたの中將などなほ內侍に申してなさむと定めたまひし」とばかりぞ、兵衞の佐中將にておはせしがかたりたまひし。

はるかなるもの

千日のさうじはじむる日。はんぴのをひねりはじむる日。みちの國へゆく人の逢坂の關こゆるほど。うまれたるちごのおとなになるほど。大般若經御どきやう一人して讀み始むる。十二年の山ごもりの始めてのぼる日。

まさひろ(藏人)はいみじく人に笑はるゝものかな。親などいかに聞くらむ。ともにありくものどもいと人々しきを呼びよせて「なにしにかゝるものにはつかはるゝぞ。いかゞ覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて下がさねの色、うへのきぬなども人よりはよくて着たるを「これはことびとに着せばや」などいふに、げにぞ詞づかひなどのあやしき。里にとのゐものとりにやるに「男二人まかれ」といふに「一人して取りにまかりなむものを」といふに、「あやしの男や。一人して二人のものをばいかでもつべきぞ。ひとますがめに二ますは入るや」といふを、なでふ事と知る人はなけれどいみじう笑ふ。人の使のきて「御返り事とく」といふを「あなにくの男や。かまどにまめやくべたる。この殿上の墨筆は何ものゝ盜みかくしたるぞ。いひさけならばこそはしうして人の盜まめ」といふを又わらふ。女院(一條御母)なやませ給ふとて御

使にまゐりて歸り侍たるに「院の殿上人は誰々かありつる」と人のとへば「それかれ」など四五人ばかりいふに「又は」と問へば、「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも又あやしき事にこそはあらめ。人まに寄りきて「わが君こそまづ物きこえむ。まづまづ人のの給へることぞ」といへば、「何事にか」とて几帳のもとによりたれば、「むくろごめによりたまへ」といふを「五たいごめにとなむいひつる」といひてまたわらふ。ぢもくの中の夜さしあぶらするに、とうだいのうちしきをふみて立てるに、新しきゆたんなればつようとらへられにけり。さし歩みてかへればやがてとうだいはたふれぬ。志たうづはうちしきにつきてゆくに、まことに道こそ志んどうしたりしか。頭つき給はぬ程は殿上のだいばんに人もつかず。それにまさひろは豆一もりを取りて、こさうじのうしろにてやをらくひければ、ひきあらはして笑はるゝことぞかぎりなきや。

關は

逢坂の關、須磨の關、鈴鹿の關、くきだの關、白川の關、衣の關。たゞこえの關ははゞかりの關とたとしへなくこそ覺ゆれ。よこばしりの關、淸見が關、みるめの關。よしなよしなの關こそいかに思ひかへしたるならむと、いと知らまほしけれ。それをなこその關とはいふにやあららむ。逢坂などをまで思ひ返したらばわびしからむかし。足柄の關。

森は

おほあらぎの森、志のびの森、こゝひの森、こがらしの森、志のだの森、いくたの森、うつきの

森、きくだの森、いはせの森、立聞（三字たゞイ）の森、ときはの森、くるべ（ろつ）きの森、神なびの森、うたゝねの森、うきたの森、うへ（つイ）木の森、いはたの森。かうたての森といふがみゝとゞまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞひと木あるを何につけたるぞ。こひの森、こはたの森。

卯月の晦日にはせ寺にまうづとて淀のわたりといふものをせしかば、舟に車をかきすゑてゆくに、さうぶこもなどの末みじかく見えしをとらせたればいと長かりける。菰積みたるふねのありきしこそいみじうをかしかりしか。高瀬の淀にはこれをよみけるなめりと見えし。三日といふに歸るに雨のいみじう降りしかばさうぶかるとて笠のいとちひさきを着て、はぎいとたかきをのこわらはなどのあるも、屛風の繪にいとよく似たり。

湯は

なゝくりの湯、有馬の湯、玉つくりの湯。

常よりもことにきこゆるもの

元三の車のおと、鳥のこゑ、曉のしはぶき。物のねはさらなり。

繪にかきておとるもの

なでしこ、さくら、山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

かきまさりするもの

松の木、秋の野、山里、山路、鶴、鹿。冬はいみじくさむき。夏は世にしらずあつき。

あはれなるもの

孝ある人の子、鹿の音。よき男のわかきがみたけさうじしたる。へだて居てうちおこなひたる（十三字いで）（なたちむイ）暁のぬかなどいみじうあはれなり。むつましき人などの目さまして聞くらむ思ひやり（るイ）。まうづる程のありさまいかならむとつゝしみ（四字み）（おイ）たるにたひらかにまうでつきたるこそいとめでたけれ。ゑばうしのさまなどぞすこし人わろき。猶いみじき人と聞ゆれどこよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衞門の佐信賢はあぢきなきことなり「たゞ清き衣を着てまうでむになでふ事かあらむ。かならずよもあしくてよとみたけのたまはじ」とて三月つごもりに、紫のいと濃き指貫、ゑろき青山吹のいみじくおどろおどろしきなどにて、たかみつがとのもりのすけなるは青色の紅のきぬ、摺りもどろかしたる水干袴にて、うちつゞき詣でたりけるに、歸る人もまうづる人も珍らしくあやしき事に、すべてこの山道にかゝる姿の人見えざりつとあさましがりしを、四月晦日に歸りて六月十餘日の程に筑前の守うせにしかはりになりにしてそげにいひけむにたがはずもと聞えしか。これは哀なることにはあらねども、みたけのついでなり。九月三十日、十月一日の程に唯あるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの聲。鷄の子いだきて臥したる。秋深き庭の淺茅に露の色々玉のやうにて光りたる。川竹の風に吹かれたる夕暮。暁にめさましたる夜などもすべて。思ひかはしたる若き人の中にせくかたありて心にしも任せぬ。山里の雪。男も女も清げなるが黑き衣着たる。二十六七日ばかりの暁に物語してゐあかして見れば、あるかなきかに心細げなる月の山の

は近く見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うち過ぐしたる僧たちのおこなひしたる。荒れたる家にむぐらはひかゝり、蓬など高く生ひたる庭に月の隈なくあかき、いとあらうはあらぬ風の吹きたる。正月に寺にこもりたるはいみじく寒く雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき景色なるはいとわろし。はつせなどに詣でゝ局などするほどは、くれはしのもとに車引きよせて立てるに、おび（イなる）ばかりしたる若き法師ばらのあしだといふものをはきて、いさゝかつゝみ（イが）もなくおりのぼるとて何ともなき經のはしうち讀み、倶舍のじゆを少しいひつゞけありくこそ所につけてをかしけれ。わがのぼるはいとあやふくかたはらによりて、高欄おさへてゆくものを、唯板敷などのやうに思ひたるもをかし。局したりなどいひてくつどももてきておろす、きぬかへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳からぎぬなどこはごはしくさうぞきたるもあり。ふかぐつ、はうくわなどはきて廊のほどなどくつすり入るは、うちわたりめきて又をかし。うちとなどゆるされたる若き男ども家の子など又立ちつゞきて「そこもとはおちたる所に侍るめり。あがりたる」など教へゆく。何物にかあらむ、いと近くさし歩みさいだつものなどを「しばし、人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、げにとて少し立ちおくるゝもあり。又聞きも入れず我まづとく佛の御まへにとゆくもあり。局にゆく程も人のゐなみたる前を通り行けばいとうたてあるに、犬ふせぎの中を見入れたる心ちいみじくたふとく、などて月頃もまうでず過しつらむとてまづ心もおこさる。みあかし常灯にはあらでうちに又人の奉りたる、おそろしきまでもえた

るに佛のきらきらと見え給へるいみじくたふとげに、手ごとに文を捧げてらいはんに向ひてろぎちかふも、さばかりゆすりみちて、これはと取りはなちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしぼり出したるこゑごゑのさすがに又紛れず。「千とうの御志はなにがしの御ため」とわづかに聞ゆ。おびうちかけて拜み奉るに、「こゝにかうさぶらふ」といひてしきみの枝を折りてもてきたるなどのたふときなどもなほをかし。犬ふせぎのかたより法師寄りきて「いとよく申し侍りぬ。いくかばかりこもらせ給ふべき」など問ふ。「しかしかの人こもらせ給へり」などいひ聞かせていぬるすなはち火桶くだ物などもてきつゝかす。はんざふに手水など入れてたらひの手もなきなどあり。「御ともの人はかの坊に」などいひて呼びもて行けば、かはりがはりぞゆく。ずきやうの鐘のおとわがなゝりと聞けばたのもしく聞ゆ。かたはらによろしき男のいと忍びやかにぬかなどつく。たちゐのほども心あらむと聞えたるが、いたく思ひ入りたる氣色にて、いもねず行ふこそいと哀なれ。うちやすむ程は經高くは聞えぬほどに讀みたるもたふとげなり。高くうち出でさせまほしきにまして鼻などをけざやかに聞きにくゝはあらで、少し忍びてかみたるは何事を思ふらむ。かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。日ごろこもりたるに晝は少しのどかにぞ早うはありし。法師の坊にをのこどもわらはべなどゆきてつれづれなるに、唯かたはらにかひをいと高く俄かに吹き出したるこそ驚かるれ。淸げなるたて文などもたせたる男のずきやうの物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は山ひゞきあひてきらきらしう聞ゆ。鐘の聲ひゞきまさりていづこならむと聞く程に、やんごとなき所

の名うちいひて御さんたひらかになど、敎化などしたる。すゞろにいかならむと覺束なく念ぜらるゝ。これはたゞなるをりのことなめり。正月などには唯いと物さわがしく物のぞみなどする人のひまなくまうづる見るほどに、おこなひもしやられず、日のうち暮るゝにまうづるはこもるひとなめり。小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屛風などの高き、いとよくしんたいし、たゝみなどほうとたておくと見れば、唯局に出でゝ犬ふせぎにすだれをさらさらとかくるさまなどぞいみじくしつけたるは安げなりかし。そよそよとあまたおりておとなだちたる人の、いやしからず忍びやかなる御けはひにて、かへる人にやあらむ「そのうちあやふし。火の事制せよ」などいふもあり。七つ八つばかりなるをのこゞのあいぎやうづきおごりたる聲にて、「さぶらひ人呼びつけ物などいひたるけはひもいとをかし。又三つばかりなるちごのねおびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし。乳母の名、母などうち出でたらむにもこれならむといと知らまほし。夜一夜いみじうのゝしり行ひあかす。ねも入らざりつるを後夜などはてゝ少しうちやすみねぬる耳に、その寺の佛經をいとあらあらしう高くうち出でゝ讀みたるに、わざとたふとしともあらず。すぎやうしやだちたる法師のよむなめりとふとうち驚かれてあはれに聞ゆ。又よるなどはかは知らで人々しき人の行ひたるが靑にびの指貫のはたばりたる、白き衣どもあまた着て、子どもなめりと見ゆる若きをのこのをかしううちさうぞきたる、童などしてさぶらひのものどもあまたかしこまりゐねうしたるもをかし。かりそめに屛風たてゝぬかなどすこしつくめり。かは知らぬは誰ならむといとゆかし。知りた

るはさなめりと見るもをかし。若き人どもはとかく局どもなどのわたりにさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず。別當など呼びて打ちさゝめき物語して出でぬる、えせものとは見えずかし。二月晦日三月朔日ごろ花ざかりにこもりたるもをかし。清げなるをのこどもの忍ぶと見ゆる二三人、櫻靑柳などをかしうて、くゝりあげたる指貫の裾もあでやかに見なさるゝ。つきづきしきをのこにさうぞくをかしうしたるゑぶくろいだかせて、小舍人わらはども紅梅萠黄の狩衣に色々のきぬ、すりもどろかしたる袴など着せたり。花など折らせて、侍めきてほそやかなる物など具して、どんぐ打つこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人あれどいかでかは知らむ。うち過ぎていぬるこそさすがにさうざうしけれ。「氣色を見せましものを」などいふもをかし。かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所につかふ人の限りしてあるはかひなくこそ覺ゆれ。猶おなじほどにて一つ心にをかしき事もさまざまいひ合せつべき人、かならず一人二人あまたもさそはまほし。そのある人の中にも口をしからぬもあれども、目なれたるなるべし。男なども思ふにこそあめれ。わざと尋ね呼びもてありくめるはいみじ。

こゝろづきなきもの

（以下一段恐誤）祭みそぎなどすべてをのこの見る物見車に、唯一人乘りて見る人こそあれ。いかなる人にかあらむ、やんごとなからずとも、若き男どもの物ゆかしと思ひたるなど引きのせて見よかし。すきかげに唯一人かくよひて心一つにまもり居たらむよ、いかばかり心せばくけにくきならむとぞ覺ゆる。ものへもいき寺へもまうづる日の雨。つかふ人などの我をばおぼさず

なにがしこそ唯今時の人などいふをほのきゝたる。人よりは少しにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すゞろなるものうらみしわれさかしがる。

わびしげに見ゆるもの

六七月の午未の時ばかりにきたなげなる車にえせ牛かけてゆるがし行くもの。雨ふらぬ日はりむしろしたる車。降る日はりむしろせぬも。年老いたるかたゐ、いと寒きをりも暑きにも。げす女のなりあしきが子を負ひたる。ちひさき板屋の黑うきたなげなるが雨にぬれたる。雨のいたく降る日ちひさき馬に乘りてぜんくしたる人のかうぶりもひしげ、袍も下襲もひとつになりたる、いかにわびしからむと見えたり。夏はされどよし。

あつげなるもの

隨身のをさの狩衣、のふの袈裟、でゐの少將。いみじく肥えたるひとのかみおほかる。きんの袋。六七月のずほふの阿ざ梨、日中の時など行ふ。又おなじころの銅の鍛冶。

はづかしきもの

男の心のうち、いざとき〔いさ僧よゐイ〕よゐの僧。みそかぬすびとのさるべきくまにかくれ居て、いかに見るらむを誰かはしらむ、暗きまぎれにふところに物引き入るゝ人もあらむかし。それは同じ心にをかしとや思ふらむ。よゐの僧はいとはづかしきものなり。若き人の集りては人のうへをいひ笑ひ、そしり惡みもするを、つくづくと聞き集むる心のうちもはづかし。「おなうたてかしかまし」など御前近き人々の、物けしきばみいふを聞き入れずいひいひてのはてはう

ち解けてねぬる後もはづかし。男はうたておもふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかしたのむこそ耻かしけれ。ましてなさけありこのましき人に知られたるなどは愚なりと思ふべくもてなさずかし。心のうちにのみもあらず。又皆これが事はかれに語り、かれが事はこれにいひきかすべかめるを、我がことをば知らでかく語るをばこよなきなめりと思ひやすらむと思ふこそ耻かしけれ。いであはれ、又あはじと思ふ人に逢へば、心もなきものなめりと見えて耻かしくもあらぬ物ぞかし。いみじく哀に心苦しげに見すて難き事などをいさゝか何事とも思はぬもいかなる心ぞとこそはあさましけれ。さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮づかへの人などをかたらひて、たゞにもあらずなりたる有様などをも知らでやみぬるよ。

むとくなるもの

志ほひのかたなる大きなる舟。かみみじかき人のかづらとりおろして髪けづるほど。大きなる木の風に吹きたふされて根をさゝげてよこたはれふせる。すまひのまけているうしろ手。えせものゝずさかんがふる。翁のもとゞりはなちたる。人のめなどのすゞろなる物ゑんじ志て隠れたるを、必尋ねさわがむものをと思ひたるにさしも思ひたらず、ねたげにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば心と出できたる。こまいぬしく舞ふものゝおもしろがりはやり出でゝをどる足音。

修法は佛眼眞言など讀みたてまつりたる、なまめかしうたふとし。

はしたなきもの

ことひとを呼ぶに我がとてさし出でたるもの。まして物とらするをりは、いとゞおのづから人のうへなどうちいひそしりなどもしたるを、をさなき人の聞き取りて、その人のある前にいひ出でたる。哀なる事など人のいひてうち泣くに、げにいとあはれとは聞きながら涙のふつと出でこぬいとはしたなし。なきがほつくりけしきことになせどいとかひなし。めでたき事を聞くには又すゞろにたゞいできにこそ出でくれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院(一條院后)の御さじきのあなたに御輿をとゞめて、御せうそこ申させ給ひしなどいみじくめでたく、さばかりの御有樣にて、かしこまり申させたまふが世に知らずいみじきに誠にこぼるれば、けさうしたる顔も皆あらはれていかに見苦しかるらむ。せんじの御使にて齊信の宰相中將の御さじきに參り給ひしこそいとをかしう見えしか。唯隨身四人いみじうさうぞきたる。馬ぞひのほそうしたてたるばかりして二條の大路、廣うきよらにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ參りて少し遠くよりおりてそばのみすの前に侍ひ給ひし。院の別當ぞ申し給ひし。御返し承りて又はしらせ歸り參り給ひて御輿のもとにて奏し給ひし程、いふもおろかなりや。さてうち渡らせ給ふを見奉らせ給ふらむ女院の御心思ひやりまゐらするは、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それにはながなきをして笑はるゝぞかし。よろしききはのひとだに猶この世にはめでたきものを、かうだに思ひまゐらするもかしこしや。

關白殿(道隆)の黑戶より出でさせ給ふとて女房のらうに隙なくさぶらふを「あないみじのおもと

たちや。翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらむ」と分け出でさせ給へば戸口に人々のいろいろの袖口してみすを引き上げたるに、權大納言殿(伊周)御くつとりてはかせ奉らせ給ふ。いとものものしうきよげによそほしげに、下がさねのしりながく所せくさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人にくつをとらせ給ふよと見ゆ。山のゐの大納言(道頼)そのつぎつぎ、さらぬ人々黑きものをひきちらしたるやうに、藤壺のへいのもとより登華殿の前までゐなみたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御はかしなど引きつくろひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿(道長)の清涼殿の前にたゝせ給へれば、それは居させ給ふまじきなめりと見る程に、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ猶いかばかりの昔の御おこなひのほどならむと見奉りしこそいみじかりしか。中納言の君の忌の日とてくすしがり行ひ給ひしを、「たべそのずゞ志ばし。行ひてめでたき身にならむとか」とて集りて笑へど、猶いとこそめでたけれ。御まへにきこしめして「佛になりたらむこそこれよりはまさらめ」とてうちゑませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まゐらする。大夫殿の居させ給へるを、かへすがへす聞ゆれば「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。ましてこの後の御ありさま見奉らせ給はましかば、ことわりとおぼしめされなまし。

九月ばかり夜一夜降りあかしたる雨のけさはやみて朝日のはなやかにさしたるにせんざいの露、こぼるばかりぬれかゝりたるもいとをかし。すいがい、らもんすゝきなどのうへにかいたるくものすのこぼれ殘りて、所々に糸も絶えざまに雨のかゝりたるが白き玉をつ

らぬきたるやうなるこそいみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるに露の落つるに枝のうち動きて人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたるいみじういとをかしといひたる、こと人の心ちにはつゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。七日の若菜を人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに、見も知らぬ草を子どものもてきたるを「何とかこれをばいふ」といへど、とみにもいはず「いざ」などこれかれ見合せて「耳な草となむいふ」といふものゝあれば、「うべなりけり、聞かぬかほなるは」など笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば、

「つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり」

といはまほしけれど聞き入るべくもあらず。

二月くわんのつかさにかうぢやうといふことするは何事にかあらむ。しやくでんもいかならむ。くじなどはかけ奉りてすることなるべし。そうめいとてうへにも宮にもあやしき物などかはらけに盛りてまゐらする。「頭辨(行成)の御もとより」とてとのもづかさ、繪などやうなる物を白きしきしに包みて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもてきたる繪にやあらむと急ぎ取り入れて見れば、へいだんといふ物を二つならべて包みたるなりけり。添へたるたて文に花文のやうに書きて「進上、へいだん一つゝみ、例によりて進上如件、少納言殿に」とて月日かきて「みまなのなりゆき」とて奥に「このをのこはみづから參らむとするを、晝はかたちわろしとて參らぬなり」といみじくをかしげに書き給ひたり。御前に參りて御覽ぜさすれば

「めでたくもかゝれたるかな。をかしうしたり」など譽めさせ給ひて御文はとらせたまひつ。「返り事はいかゞすべからむ。このへいだんもてくるには物などやとらすらむ。知りたる人もがな」といふを聞しめして「これなかゞ辨したつる。呼びてとへ」とのたまはすればはしに出でゝ「左大辨（仲雄）にもの聞えむ」とさぶらひしていはすれば、いとよくうるはしうてきたり。「あらずわたくし事なり。もしこの辨少納言などのもとにかゝる物もてきたる下部などにはすることやある」と問へば「さる事も侍らず。唯とゞめてくひ侍る。何しにとはせ給ふ。もし上官のうちにてえさせ給へるか」といへば「いかゞは」といらふ。唯返しをいみじう赤きうずえふに「みづからもてまうでこぬ下部はいとれいだうなりとなむ見ゆる」とてめでたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして「下部さぶらふ」とのたまへば、出でたるに、「さやうのものぞ、歌よみしておこせ給へると思ひつるに、びゞしくもいひたりつるかな。女少し我はと思ひたるは歌詠みがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどにさる事いはむ人はかへりてむじんならむかし」とのたまふ。のりみつ、なりやすなど笑ひて止みにし事を、殿の前に人々いと多かりけるに、語り申し給ひければ「いとよく言ひたる」となむのたまはせしと人の語りし。これこそ見苦しきわれぼめどもなりかし。などてつかさえはじめたる六位しやくに、しきの御ざうしのたつみの隅のついぢの板をせしぞ。更に西東をもせよかし。又五位もせよかし」などいふことを言ひ出でゝ、あぢきなき事どもをきぬなどにすゞろなる名どもをつけゝむいとあやし。「きぬの名にほそながをばさもいひつべし。なぞかざみはし

りながといへかし。をのわらはのきるやうに、なぞからぎぬは短きぬとこそいはめ。されどそれはもろこしの人の着るものなれば。うへのきぬの袴さいふべし。下襲もよし。又大口、長さよりは口ひろければ。袴いとおぢきなし。指貫もなぞ、あしぎぬ、もしはさやうのものは足ぶくろなどもいへかし」などよろづの事をいひのゝしるを、「いでわなかしがまし。今はいはじ。ね給ひね」といふいらへに、よゐの僧の「いとわろからむ。夜ひと夜こそ猶のたまはめ」と憎しと思ひたる聲ざまにていひ出でたりしこそをかしかりしにそへて驚かれにしか。

故殿（道隆）の御ために月ごとの十日御經佛供養せさせ給ひしを、九月十日志きの御ざうしにてせさせ給ふ。上達部殿上人いとおほかり。せいはんかうじにて説く事どもいとかなしければ、殊に物の哀ふかゝるまじき若き人も皆泣くめり。はてゝ酒のみ詩ずんじなどするに、頭中將たゞのぶの君「月秋ときして身いづくにか」といふことをうち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでかは思ひいで給ひけむ。おはします所に分け參るほどに、立ち出でさせ給ひて「めでたしな。いみじうけうの事にいひたる事にこそあれ」とのたまはすれば「それをけいしにとて物も見さして參り侍りつるなり。猶いとめでたくこそ思ひ侍れ」ときこえさすれば、「ましてさおぼゆらむ」と仰せらるゝ。わざと呼びもいで、おのづからわふ所にては「などかまろをまはに近くは語らひ給はぬ。さすがにくしなど思ひたるさまにはあらずと知りたるをいとあやしくなむ。さばかり年ごろになりぬるとくいのうとくてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば何ごとをか思ひ出にせむ」とのたまへば「さらなり。かたかるべ

き事にもあらぬをさもあらむのちにはえほめ奉らざらむが口をしきなり。うへの御前などにてやくとあつまりてほめ聞ゆるにいかでか。たゞおぼせかし。かたはらいたく心の鬼出で來て、言ひにくゝ侍りなむものを」といへば笑ひて「などさる人しもよそめより外にほむるたぐひ多かり」とのたまふ。「それがにくからずはこそあらめ、男も女もけぢかき人をかたひき思ふ人のいさゝかあしき事をいへば、腹だちなどするが、わびしう覺ゆるなり」といへば、「たのもしげなの事や」とのたまふもをかし。

頭辨（行成）の職にまゐり給ひて物語など志給ふに、夜いと更けぬ。「あす御物忌なるにこもるべければうしになりなばあしかりなむ」とてまゐり給ひぬ。つとめて藏人所のかうやかみひきかさねて「後のあしたはのこり多かる心ちなむする。夜をとほして昔物語も聞え明さむとせしを、とりの聲に催されて」といといみじう清げにうらうへに事多く書きたまへるいとめでたし。御かへりに「いと夜深く侍りけるとりのこゑは、まうさうくんのにや」ときこえたれば、たちかへり「まうさうくんのにはとりは函谷關を開きて三千のかくわづかにされりといふは、あふさかのせきの事なり」とあれば、

「夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふ坂の關はゆるさじ。

心かしこき關守侍るめり」と聞ゆ。立ちかへり、

「逢坂は人こえやすきせきなれば鳥も鳴かねどあけてまつとか」

とありし文どもをはじめのは僧都の君（隆圓）のぬかをさへつきて取り給ひてき。のちのちのは御

まへにて「さて逢坂の歌はよみへされて返しもせずなりにたるいとわろし」と笑はせ給ふ。「さてその文は殿上人皆見てしは」とのたまへば、「まことに思しけりとはこれにてこそ知りぬれ。めでたき事など人のいひ傳へぬはかひなきわざぞかし。又見苦しければ御文はいみじく隱して人につゆ見せ侍らぬ。志のほどをくらぶるにひとしうこそは」といへば、「かう物思ひ志りていふこそ猶人々には似ず思へど、思ひくまなくわしうしたりなど例の女のやうにいはむとこそ思ひつるに」とていみじう笑ひ給ふ。「こはなぞ。悅びをこそ聞えめ」などいふ。「まろが文をかくし給ひける又猶うれしきことなり。いかに心うくつらからまし。今より猶賴み聞えむ」などのたまひて、後に經房の中將、「頭辨はいみじうはめ給ふとは知りたりや。一日の文のついでにありし事など語り給ふ。思ふ人々のほめらるゝはいみじく嬉しく」などまめやかにのたまふもをかし。「うれしきことも二つにてこそ。かのほめ給ふなるなむに又思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それはめづらしう今の事のやうにもよろこび給ふか」などのたまふ。

五月ばかりに月もなくいとくらき夜「女房やさぶらひ給ふ」とこゑごゑしていへば、「出でゝ見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でゝ、「こはたぞ。おどろおどろしうきはやかなるは」といふに、ものもいはでみすをもたげてそよろとさし入るゝはくれたけの枝なりけり。「おい、このきみにこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らむ」とて中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭辨はとまり給ひて、「あやしくいぬるものども

かな。おまへの竹ををりて歌よまむとしつるを、しきにまゐりて同じくは女房など呼び出でゝをと言ひてきつるを、くれ竹の名をいととくいはれていぬるこそをかしけれ。たれが教をしりて人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などのたまへば、「竹の名とも知らぬものをなまねた（イ妬か）しとや思しつらむ」といへば、「まことぞえ知らじ」などのたまふ。まめごとなど言ひ合せて居給へるに「この君と稱す」といふ詩をずして又あつまり來たれば、「殿上にていひきしつるほいもなくてはなどかへり給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれ」とのたまへば、「さる事には何のいらへをかせむ。いとなかなかならむ。殿上にても言ひのゝしりつれば、うへ（一條院）も聞しめして興せさせ給ひつる」と語る。辨もろともにかへすがへす同じ事をずんじていとをかしがれば、人々出でゝ見る。とりどりに物ども言ひかはして、かへるとて、猶同じ事をもろこゑにずんじて、左衞門の陣に入るまで聞ゆ。つとめていととく少納言の命婦といふが御文まゐらせたるに、この事をけいしたれば、しもなるを召して、「さる事やありし」と問はせ給へば「知らず。何とも思はでいひ出で侍りしを行成の朝臣のとりなしたるにや侍らむ」と申せば、「とりなすとても」とうちゑませ給へり。たれが事をも殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さ言はるゝ人をよろこばせ給ふもをかし。

ゑんゆう院の御はての年、皆人御服ぬぎなどしてあはれなる事をおほやけより始めて院の人も「花の衣に」などいひけむ、「世の御事など思ひ出づるに、雨いたう降る日藤三位（一條乳母）の局にみのむしのやうなるわらはの大きなる木の白きにたて文をつけて「これ奉らむ」といひけれ

ば、「いづこよりぞ。けふあす御物忌なれば御しとみもまゐらぬぞ」とてしもは立てたるしとみのかみより取り入れて、「さなむとはきかせ奉らず。物忌なればえ見ず」とてかみについさして置きたるを、つとめて手洗ひてその卷數とこひて伏し拜みてあけたれば、くるみいろといふしきしのあつごえたるをあやしと見てあけもてゆけば、老法師のいみじげなるが手にて、

「これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつるしひしばの袖」

とかきたり。あさましくねたかりけるわざかな、たれがしたるにかあらむ、仁和寺の僧正(寛朝)のにやと思へどよもかゝることのたまはじ、なほたれならむ、藤大納言ぞかの院の別當におはせしかば、その給へる事なめり、これをうへの御まへ、宮などにとうきこしめさせばやと思ふにいと心もとなけれど、猶おそろしう言ひたる物忌をしはてむと念じくらして、まだつとめて藤大納言の御もとにこの御返しをしてさしおかせたればすなはち又返事しておかせ給へりけり。それを二つながら取りて急ぎ參りて「かゝる事なむ侍りし」とうへもおはします御まへにて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて「藤大納言の手のさまにはあらで法師にこそあめれ」とのたまはすれば「さはこはたれがしわざにか。すきずきしき上達部、僧がうなどは誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふに、うへ「このわたりに見えしにこそはいとよく似ためれ」とうちほゝゑませ給ひて、今ひとすぢ御厨子のもとなりけるを取り出でさせたまへれば、「いであな心う。これおぼされ(四字おほせられイ)よ。あなかしらいた

や。いかで聞き侍らむ」とたゞせめにせめ申して恨み聞えて笑ひ給ふに、やうやう仰せられ出でゝ「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所のとじといふものゝ供なりけるを小兵衛が語らひ出したるにやありけむ」など仰せらるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、「などかくはからせおはします。猶うたがひもなく手をうちあらひて伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさまもいとほこりかにあいぎやうづきてをかし。さてうへのだいばん所にも笑ひのゝしりて、局におりてこのわらはたづね出でゝ文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「たれが文をたれがとらせしぞ」といへば、しれしれとうちゑみてともかくもいはで走りにけり。藤大納言後にきゝて笑ひ興じ給ひけり。

つれづれなるもの

所さりたる物いみ、うまおりぬすぐろく、ぢもくにつかさえぬ人の家。雨うち降りたるはましてつれづれなり。

つれづれなぐさむるもの

物語、碁、すぐろく。三つ四つばかりなるちごの物をかしういふ。又いとちひさきちごの物語りしたるがゑみなどしたる。くだもの。男のうちさるがひ物よくいふがきたるはに物いみなれど入れつかし。

とりどころなきもの

かたちにくげに心あしき人。みそひめのぬれたる。これいみじうわろき事言ひたるとよろづ

の人にくむなることゝて今とゞむべきにもあらず。又おとびの火ばしといふ事などてか。世になき事ならねば皆人知りたらむ。げに書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草紙を見るべきものと思はざりしかば、あやしき事をもにくき事をも、唯思はむ事のかぎりを書かむとてありしなり。

なほ世にめでたきもの

臨時の祭のおまへばかりの事は何事にかあらむ。志がくもいとをかし。春は空のけしきのどかにてうらうらとあるに、清涼殿の御まへの庭に、かもりづかさのたゝみどもを志きて使は北おもてに、まひ人は御前のかたに、これらはひが事にもあらむ。所の衆どもついがさねどもとりて、前ごとにすゑわたし、べいじゆうもその日は御前に出で入るぞかし。くぎやう殿上人はかはるがはる盃とりて、はてにはやくがひといふ物をのこなどのせむだにうたてあるを、御前に女ぞ出でゝ取りける。思ひかけず人やあらむとも知らぬに、ひたき屋よりさし出でゝ多く取らむと騒ぐものは、なかなかうちこぼしてあつかふ程に、かろらかにふと取り出でぬるものには後れて、かしこきをさめどのに火たき屋をして取り入るゝこそをかしけれ。かんもりづかさのものどもたゝみとるやおそきと、とのもりづかさの官人ども手毎にはゝきとりすなごならす。承香殿の前の程に笛を吹きたて拍子うちて遊ぶな、とく出でこなむと待つに、うどはまうたひて竹のませのもとに歩みて出でゝ、みことうちたる程など、いかにせむとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖をあはせて二人は

しり出で、西にむかひて立ちぬ。つぎつぎ出づるに足ぶみを拍子に合せては、はんびの緒つくろひ、かうぶり、きぬのくびなどつくろひて、あやもなきこま山など歌ひて舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。おほひれなど舞ふは日一日見るとも飽くまじきを、はてぬるこそいと口をしけれど、又あるべしと思ふはたのもしきに、みことかきかへしてこのたびやがて竹のうしろから舞ひ出で、ぬぎ垂れつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。かいねりの下襲など亂れあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いで更にいへばよのつねなり。このたびは又もあるまじければにや、いみじくこそはてなむ事は口をしけれ。上達部などもつゞきて出で給ひぬれば、いとさうざうしう口をしきに、賀茂の臨時の祭はかへりだちの御神樂などにこそなぐさめらるれ。庭火のけぶりの細うのぼりたるに、神樂の笛のおもしろうわなゝき、ほそう吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれにいみじくおもしろく、寒くさえ氷りてうちたるきぬもいとつめたう、扇もたる手のひゆるもおぼえず。ざえのをのこども召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は唯渡るを見るに飽かねば御社まで行きて見る折もあり。大きなる木のもとに車たてたれば、松のけぶりたなびきて、火の影にはんびの緒きぬのつやも晝よりはこよなくまさりて見ゆる。橋の板を踏みならしつゝ聲合せて舞ふ程もいとをかしきに、水の流るゝ音、笛の聲などの合ひたるはまことに神も嬉しとおぼしめすらむかし。

少將といひける人の年ごとにまひ人にて、めでたきものに思ひ志みけるに、なくなりて上の

御祉の一の橋のもとにあなるを聞けば、ゆゝしうせちに物おもひいれじと思へど、猶このめでたき事をこそ更にえ思ひすつまじけれ。

八幡の臨時の祭の名殘こそいとつれづれなれ。「などてかへりて又舞ふわざをせざりけむ。さらばをかしからまし。祿を得てうしろよりまかづるこそ口をしけれ」などいふを、うへの御まへに聞しめして、「明日かへりたらむめして舞はせむ」など仰せらるゝ。「まことにやさふらふらむ。さらばいかにめでたからむ」など申す。うれしがりて、宮の御まへにも「猶それまはせさせ給へ」と集りて申しまどひしかば、そのたびかへりて舞ひしは、嬉しかりしものかな。さしもやあらざらむとうちたゆみつるに、舞ひ人前に召すを聞きつけたる心ち物にあたるばかり騷ぐもいと物ぐるほしく、しもにある人々惑ひのぼるさまこそ、人のずさ、殿上人などの見るらむも知らず、もをかしらにうちかづきてのぼるを笑ふもことわりなり。

故殿(道隆)などおはしまさで、世の中に事出でき、物さわがしくなりて宮(定子)又うちにもいらせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御まへ渡りおぼつかなさにぞ猶えかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮に參りたればいみじく物こそ哀なりつれ。女ばうのさうぞく、裳唐ぎぬなどの折にあひ、たゆまずをかしうても侍ふかな。みすのそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て黄朽葉の唐ぎぬ、薄色の裳、紫をん、萩などをかしう居なみたるかな。御前の草のいと高きを、などか此は茂りて侍る、はらはせてこそといひつれば、露おかせて御覽ぜむとて殊

更にと宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくもおぼえつるかな。御里居いと心憂し。かゝる所にすまひせさせ給はむ程はいみじき事ありとも必侍ふべきものに思しめされたるかひもなくなどあまた言ひつる、語り聞かせ奉れとなめりかし。參りて見給へ。哀れげなる所のさまかな。ろだいの前に植ゑられたりけるぼうたんの唐めきをかしき」事などの給ふ。「いざ人のにくしと思ひたりしかば、又にくゝ侍りしかば」といらへ聞ゆ。「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。げにいかならむと思ひ參らする御氣色にはあらで侍ふ人たちの「左の大殿のかたの人しるすぢにてあり」などさゝめきさしつどひて物などいふに、しもより參るを見ては言ひ止み、はなち立てたるさまに見ならはずにくければ、參れなどあるたびの仰せをも過して、げに久しうなりにけるを、宮のへんにはたゞあなたがたになして空言なども出で來べし。例ならず仰せ事などもなくて日ごろになれば、心細くてうちながむる程に、をさめ文をもて來たり。「おまへより左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひてこゝにてさへひき忍ぶもあまりなり。人づての仰せ事にてあらぬなめりと胸つぶれてあけたれば、かみには物もかゝせ給はず、山吹の花びらを唯一つ包ませ給へり。それに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう日ごろのたえま、思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまををさめもうち守りて、「御前にはいかに物の折ごとにおぼし出で聞えさせ給ふなるものを」とて「誰もあやしき御ながゐとのみこそ侍るめれ。などか參らせ給はぬ」などいひて、「こゝなる所にあからさまにまかりて參らむ」といひていぬる後に、御返り事書きて參らせむとす

るにこの歌のもと更に忘れたり。「いとあやし。同じふる事といひながら知らぬ人やはある。こゝもとに覺えながら言ひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、ちひさき童の前に居たるが「下ゆく水のとこそ申せ」といひたる。などてかく忘れつるならむ。これに敎へらるゝもをかし。御かへり參らせて少しほど經て參りたり。いかゞと例よりはつゝましうて御几帳にはたかくれたるを「あれは今參りか」など笑はせ給ひて、「にくき歌なれど、このをりはさも言ひつべかりけりとなむ思ふを、見つけではしばしえてこそ慰むまじけれ」などのたまはせて、かはりたる御氣色もなし。童に敎へられしことばなどけいすれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ。あまりあなづるふる事はさもありぬべし」など仰せられて、ついでに「人のなぞなぞあはせしける所に、かたくなにはあらでさやうの事にらうらうしかりけるが、左の一番はおのれいはむ、さ思ひ給へなど賴むるに、さりともわろきことは言ひ出でじとえり定むるに、そのことばを聞かむ、いかになど問ふ。唯任せて物し給へ、さ申していと口惜しうはあらじといふを、げにと推しはかる。日いと近うなりぬればなほこの事のたまへ、ひざうにをかしき事もこそあれといふを、いさ知らず、さらばなたのまれそなどむつかれば、覺つかなしと思ひながらその日になりて、みな方人の男女ゐわけて殿上人などよき人々多く居なみてあはするに、左の一番にいみじう用意してもてなしたる樣のいかなる事をか言ひ出でむと見えたれば、あなたの人もこなたの人も心もとなくうちまもりて、なぞなぞといふ程いと心もとなし。天にはり弓といひ出でたり。右のかたの人はいと興ありと思ひたるに、こ

なたの方の人は物もおぼえずあさましうなりて、いとにくゝあいぎやうなくて、あなたによりて殊更にまけさせむとしけるをなど、かた時のほどに思ふに、右の人をこに思ひてうち笑ひて、やゝ更に知らずとくちひきたれてさるがうしかくるに、數させ數させとてさゝせつ。いと怪しきこと、これ知らぬもの誰かあらむ、更に數さすまじと論ずれど、知らずといひ出でむは、などてかまくるにならざらむとて、つぎつぎのもこの人に論じかたせける。いみじう人の知りたる事なれど覺えぬ事はさこそはあれ。何しかはえ知らずといひしと後に恨みられて罪さりける」事を語り出でさせ給へば、おまへなる限はさは思ふべし。「口をしく思ひけむ。こなたの人の心ち聞しめしたりけむ、いかににくかりけむ」など笑ふ。これは忘れたることかは、皆人知りたることにや。

正月十日、空いとくらう雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるにえせものゝ家のうしろ、あらばたけなどいふもの、土もうるはしうなほからぬに、桃の木わかだちていとしもとがちにさし出でたる、片つ方は青く今片枝は濃くつやゝかにて蘇枋のやうに見えたるにほそやかなる童の狩衣はかけやりなどして、髮は麗しきがのぼりたれば、又紅梅のきぬ白きなど、ひきはこえたるをのこ、はうくわはきたる、木のもとに立ちて「我によき木切りていで」など乞ふに、又髮をかしげなるわらはべの袙ども綻びがちにて袴はなえたれど、「色などよき、うち着たる三四人「卯槌の木のよからむ切りておろせ。こゝに召すぞ」などいひて、おろしたれば、はしりがひ、「とりわき我に多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴着

たるをのこ走り來て乞ふに「まて」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに危ふがりて猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折もさやうにぞあるかし。
清げなるをのこのすぐろくを日ひと日うちて、猶飽かぬにや、みじかき燈臺に火をあかくかゝげて、敵のさいをこひせめて、とみにも入れねば、どうを盤のうへにたてゝ待つ。狩衣のくびの顔にかゝれば片手しておし入れて、いとこはからぬゑばうしをふりやりて、さはいみじう呪ふともうちはづしてむやと心もとなげにうちまもりたるこそほこりかに見ゆれ。
碁をやんごとなきひとのうつとて紐うち解き、ないがしろなるけしきに、ひろひおくにおとりたる人のゐずまひもかしこまりたるけしきに、碁盤よりは少し遠くて及びつゝ、袖の下いま片手にて引きやりつゝうちたるもをかし。

おそろしきもの

つるばみのかさ、燒けたる所、水ぶき、菱、髮おほかるをのこの頭洗ひてほすほど、栗のいが。

きよしと見ゆるもの

かはらけ、新しきかなまり、疊にさすこも、水を物に入るゝ透き影、新しき細櫃。

きたなげなるもの

鼠のすみか、つとめて手おそくあらふ人、白きつきはな、すゝばなあるきくちで、油入るゝ物、雀の子。暑きほどに久しくゆあみぬ。きぬの萎えたるはいづれもいづれもきたなげなる中に、練色のきぬこそきたなげなれ。

いやしげなるもの

式部のぞうの爵、黑き髮のすぢふとき、布屏風の新しき、ふり黑みたるはさるいふかひなき物にて、なかなか何とも見えず。新しくしたてゝ櫻の花多くさかせて胡粉すさなど色どりたる繪書きたる。遣戸、厨子、何も田舍物はいやしきなり。むしろばりの車のおそひ、檢非違使の袴、伊豫すの筋ふとき、人の子にはふし子のふとりたる、まことの出雲むしろの疊。

むねつぶるゝもの

くらべうま見る。もとゆひよる。親などの心ちあしうして例ならぬけしきなる。まして世の中などさわがしきころ萬の事おぼえず。又物いはぬちごの泣き入りて乳も飮まず、いみじくめのとのいだくにもやまで久しうなきたる。例の所などにて殊に又いちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり。人などのそのうへなどいふにまづこそつぶるれ。いみじくにくき人のきたるもいみじくこそあれ。よべきたる人のけさの文のおそき、聞く人さへつぶる。思ふ人の文とりてさし出でたるもまたつぶる。

うつくしきもの

ふりに書きたるちごの顏。雀の子のねずなきするにをどりくる。又べになどつけてすゑたればおや雀の蟲などもて來てくゝむるもいとらうたし。三つばかりなるちごの急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるをめざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへておとななどに見せたる、いと美くし。あまにそぎたる兒の目に髮のおほひたるを搔き

はやらで、うちかたぶきて物など見るいとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの白うをかしげなるも見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはのさうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごのあからさまにいだきてうつくしむほどに、かいつきて寝入りたるもらうたし。ひゝなの調度。はちすのうき葉のいとちひさきを池よりとりあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。なにもなにもちひさき物はいとうつくし。いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが白ううつくしきが、二藍のうすものなど、きぬながくてたすきあげたるが這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲幼げにて文よみたるいとうつくし。鷄の雛の足だかに白うをかしげにきぬみじかなるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、又親のもとにつれだちありく見るもうつくし。かりの子、さりの壺、瑠麥の花。

ひとばえするもの

殊なる事なき人の子のかなしくしならはされたる。しはぶき、耻かしき人に物いはむとするにもまづさきにたつ。あなたこなたに住む人の子どもの四つ五つなるはあやにくだちて、物など取りちらして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまゝにもえあらぬが、親のきたる所えてゆかしかりける物を、「あれ見せよや」母など引ゆるがすに、おとなゝど物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引きさがし出でゝ見るこそいとにくけれ。それを「まさな」とばかりうち言ひて取り隱さで「さなせそ。そこなふな」とばかりゑみていふ親もにく

し。われえはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

名おそろしきもの

青淵、谷のはら、はた板、くろがね、つちぐれ。いかづちは名のみならずいみじうおそろし。はやち、ふそう雲、ほこぼし、おほかみ、牛はさめ、らう、ろうのをさ。いにすし、それも名のみならず見るもおそろし。縄筵。強盗又よろづにおそろし。ひぢかさ雨、くちなはいちご、いきすだま、おにどころ、おにわらび、うばら、からたち、いりずみ、ぼうたん。うしおに。

見るにことなることなきものゝ文字にかきてことごとしきもの

いちご、露草、みづぶき、くるみ、文章博士、皇后宮の權大夫、やまもゝ。いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顏つきを。

むつかしげなるもの

ぬひものゝうら、猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巣のうちよりあまたまろばし出したる。裏まだつかぬかはぎぬのぬひめ。殊に淸げならぬ所のくらき。ことなる事なき人の、ちひさき子など數多持ちてあつかひたる。いと深うしも志なき女の心ちあしうして久しく惱みたるも男の心の中にはむつかしげなるべし。

えせものゝ所うるをりの事

正月のおほね、行幸のをりのひめまうちぎみ、みな月、十二月のつごもりのよをりの藏人。季の御讀經のいぎし、赤袈裟きて僧の文（イ名）ども讀みあげたるいとらうらうし。御讀經佛名など

の御さうぞくの所の衆、春日祭の舎人ども、大嘗の所のあゆみ、正月のくすりこ、卯杖の法師、五せちのこゝろみのみくしあげ、節會御ばいぜんの釆女、大嘗の日の史生、七月のすまひ、雨降る日のいちめ笠、わたりするをりのかんどり。

くるしげなるもの

夜泣といふもの(わざ)するちごのめのと、思ふ人二人もちてこなたかなたに恨みふすべられたる男。こはきものゝけあづかりたる験者、げんだに早くばよかるべきを、さしもなきをさすがに人わらはれにわらじと念ずるいとくるしげなり。わりなく物疑ひする男にいみじう思はれたる女。一の所に時めく人も得やすくはあらねどそれはよかめり。心いられしたる人。

うらやましきもの

經など習ひていみじくたどたどしくて忘れがちにてかへすがへす同じ所を讀むに、法師はことわり、男も女もくるくるとやすらかに讀みたるこそ。あれがやうにいつの折とこそふと覺ゆれ。心ちなど煩ひてふしたるに、うち笑ひ物いひ思ふ事なげにて歩みありく人こそいみじくうらやましけれ。稲荷に思ひおこして參りたるに中の御社のほどわりなく苦しきを、念じてのぼる程に、いさゝか苦しげもなく後れてくと見えたるものどもの、唯ゆきにさきだちて詣づるいとうらやまし。二月午の日の曉にいそぎしかど、坂のなかばかり歩みしかば巳の時ばかりになりにけり。やうやう暑くさへなりてまことにわびしう、かゝらぬ人も世にあらむものを何しに詣でつらむとまで涙落ちてやすむに、三十餘りばかりなる女の壺さうぞく

などにはあらで、たゞ引きはこえたるが「まろは七たびまうでし侍るぞ。三たびはまうでぬ。四たびはことにもあらず。未には下向しぬべし」と道に逢ひたる人にうち言ひてくだりゆきしこそたゞなる所にては目もとまるまじきことの、かれが身に唯今ならばやとおぼえしか。男も女も法師もよき子もちたる人いみじううらやまし。髮長く麗しうさがりばなどめでたき人。やんごとなき人の、人にかしづかれ給ふもいとうらやまし。手よく書き歌よく詠みて物のをりにもまづとり出でらるゝ人。よき人の御前に女房いとあまたさぶらふに心にくき所へ遣すべき仰せがきなどを誰も鳥の跡などのやうにはなどかはあらむ。されど下などにあるをわざと召して、御硯おろしてかゝせさせ給ふうらやまし。さやうの事は所のおとなゝどになりぬれば、まことになにはわたりの遠からぬも、事に隨ひて書くを、これはさはあらで、上達部のもと、また始めてまゐらむなど申さする人のむすめなどには心ことにうへより始めてつくろはせ給へるを、集りてたはぶれにねたがりいふめり。琴笛ならふにさこそはまだしき程は、かれがやうにいつしかと覺ゆめれ。うち東宮の御めのと。うへの女房の御かたがたゆるされたる。さんまいだうたてゝよひあかつきにいのられたる人。すぐろくうつにかたきのさいきゝたる。まことに世を思ひすてたるひじり。

とくゆかしきもの

まきぞめ、むらご、くゝりものなど染めたる。人の子産みたる、男女とく聞かまほし。よき人はさらなり、えせもののげすのきはだにきかまほし。ぢもくのまだつとめて、かならずしる人

のなるべきをりもきかまほし。思ふ人のおこせたる文。

こゝろもとなきもの

人の許にとみの物ぬひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でゝ、今や今やとくるしう居入りつゝ、あなたをまもらへたる心ち。子産むべき人の、ほど過ぐるまでさるけしきのなき。遠き所より思ふ人の文を得てかたくふんじたるそくひなど放ちあくる心もとなし。物見に急ぎ出でゝ、事なりにけり徒て白きしもとなど見つけたるに、近くやりよする程わびしうおりてもいぬべき心ちこそすれ。知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いはせたる。いつしかと待ち出でたるちごのいかもゝかなどのほどになりたる、行く末いと心もとなし。とみのもの縫ふにくらきをり針に糸つくる。されど我はさるものにてありぬべき所をとらへて、人につけさするに、それも急げばにやあらむ、とみにもえさし入れぬを、「いで唯なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひがほにえさらぬは、にくささへそひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行く折、まづわがさるべき所へ行くとて、唯今おこせむとて出でぬる車待つほどこそ心もとなけれ。大路いきけるを、さなりけると喜びたれば、外ざまにいぬるいとくちをし。まして物見に出でむとてあるに「事はなりぬらむ」などいふを聞くこそわびしけれ。子うみける人ののちのこと久しき。物見にや、又御寺まうでなどに諸共にあるべき人を乗せにいきたるを車さし寄せたてるがにとみにも乗らでまたするもいと心もとなく、うちすてゝもいぬべき心ちする。とみにいりずみおこすいとひさし。人の歌の返しとくすべきをえ詠み得ぬは

どいと心ともなし。けさう人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべきをりもあり。又まして女も男もたゞに言ひかはすほどは、時のみこそはと思ふほどに、あいなくひが事も出でくるぞかし。又心ちあしく物おそろしきほど夜の明くるまつこそいみじう心もとなけれ。まつばくろめのひるほども心もとなし。

故殿の御服の頃六月三十日の御はらへといふ事に出でさせ給ふべきを、しきの御ざうしは方あしとて官のつかさのあいたん所に渡らせ給へり。その夜はさばかり暑く、わりなき闇にて何事もせばうかはらぶきにてさまことなり。例のやうに格子などもなく、唯めぐりてみすばかりをぞかけたる、なかなか珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。ぜんざいにはくわんざうといふ草を、ませゆひていと多く植ゑたりける。花きはやかに重りて咲きたる、うべうべしき所の前栽にはよし。時づかさなどは唯かたはらにて鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがりて若き人々二十餘人ばかりそなたに行きてはしり寄り、たかきやにのぼりたるをこれより見あぐれば、薄にびのも、唐ぎぬ、同じ色のひとへがさね、紅の袴どもをきてのぼり立ちたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじ若さなれどおしあげられたる人はえまじらで、うらやましげに見あげたるもをかし。日暮れてくらまぎれにぞ過したる人々皆立ちまじりて、右近の陣へ物見に出できてたはぶれ騒ぎ笑ふもあめりしを「かうはせぬ事なり。上達部のつき給ひしなどに女房どものぼり上官などのゐる障子を皆打ちとほしそこなひたり」など苦しがるものもあれどきゝも入れず。

屋のいとふるくて瓦葺なればにやあらむ、暑さの世に知らねば、みすのとによるもふしたるも、ふるき所なればむかでといふもの日ひと日おちかゝり、蜂の巣のおほきにてつき集りたるなどいとおそろしき。殿上人日ごとに參り夜もゐ明し、物言ふを聞きて「秋ばかりにや太政官の地のいまやかうのにはとならむ事を」とずし出でたりし人こそをかしかりしか。秋になりたれどかたへ涼しからぬ風の所からなめり。さすがに蟲の聲などは聞えたり。八日ぞかへらせたまへば、七夕祭などにて例より近う見ゆるは、ほどのせばければなめり。

宰相中將たゞのぶ、のぶかたの中將と參り給へるに、人々出でゝ物などいふに、ついでもなく「あすはいかなる詩をか」といふに、いさゝか思ひめぐらし、とゞこほりもなく「人間の四月をこそは」といらへ給へるいみじうをかしくこそ。過ぎたることなれど心えていふはをかしき中にも女ばうなどこそさやうの物わすれはせね。男はさもあらず、詠みたる歌をだになまおぼえなるを誠にをかし。内なる人も外なる人心えずと思ひたるぞことわりなるや。

この三月三十日ほそどのゝ一の口に、殿上人あまた立てりしを、やうやうすべりうせなどしてたゞ頭中將、源中將、六位ひとりのこりて、よろづのことをいひ、經よみ歌うたひなどするに明けはてぬなり。「歸りなむ」とて「露は別れの涙なるべし」といふことを、頭中將うち出し給へれば、源中將もろともにいとをかしうずんじたるに「いそぎたる七夕かな」といふを、いみじうねたがりて「曉の別れのすぢのふと覺えつるまゝにいひて、わびしうもあるわざかなとすべてこのわたりにてはかゝる事思ひまはさずいふは、口をしきぞかし」などいひてあまり

わかくなりにしかば、「葛城の神今ぞすぢなき」とてわけておはしにしを、七夕のをりこの事を言ひ出でばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかはその程に見つけなどもせむ。文かきてとのもづかさ玄てやらむなど思ひし程に、七日に參り給へりしかば、うれしくて、その夜の事などいひ出でば心もぞえたまふ、すゞろにふといひたらば怪しなどやうちかたぶき給はむ、さらばそれにはわりし事いはむとてあるに、つゆおぼめかでいらへ給へりしかば、まことにいみじうをかしかりき。月ごろいつしかと思ひ侍りしだに我が心ながらすきずきしと覺えしに、いかでさはた思ひまうけたるやうにのたまひけむ。もろともにねたがりいひし中將は思ひもよらで居たるに、「わりし曉の詞いましめらるゝは知らぬか」どの給ふにぞ「げにさしつ」などいひ、男はちやうけんなどいふことを人には知せず、この君と心えていふを「何事ぞ何事ぞ」と源中將はそひつきて問へどいはねば、かの君に「猶これのたまへ」と怨みられて、よき中なれば聞せてけり。いとあへなく言ふ程もなく近うなりぬるをば、おし小路のほどぞなどいふにわれも知りにけるといつしか玄られむとて、わざと呼び出でゝ、「棊盤侍りや。まろもうたむと思ふはいかゞ。手はゆるし給はむや。頭中將とひとし棊なり。なおぼしわきそ」といふに、「さのみあらば定めなくや」といらへしを、かの君に語り聞えければ「嬉しく言ひたる」とよろこび給ひし。猶過ぎたる事忘れぬ人はいとをかし。宰相になり給ひしを、うへ（一條院）のおまへにて、「詩をいとをかしうずんじ侍りしものを、蕭會稽の古廟をも過ぎにしなども誰か言ひはべらむとする。暫しならでもさふらへかし。口惜しきに」など

申しゝかば、いみじうわらはせ給ひて「さなむいふとて、なさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば誠にさうざうしかりしに、源中將劣らずと思ひてゆゑだちわりくに、宰相中將の御うへをいひ出で、「いまだ三十のごにおよばずといふ詩をこと人には似ず、をかしうずし給ふ」などいへば「などかそれに劣らむ。まさりてこそせめ」とてよむに「更にわろくもあらず」といへば「わびしの事や。いかであれがやうにずんせで」などのたまふ。「三十のごといふ所なむすべていみじうあいぎやうづきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひわりくに、陣につき給へりける折に、わきて呼び出で、「かうなむいふ。猶そこ敎へ給へ」といひければ、笑ひて敎へけるも知らぬに、局のもとにていみじくよく似せてよむに、あやしくて「こはたぞ」と問へば、ゑみごゑになりて、「いみじき事聞えむ。かうかうきのふ陣につきたりしに、問ひ來てたちにたるなめり。誰ぞとにくからぬ氣色にて問ひ給へれば」といふもわざとさ習ひ給ひけむをかしければ、これだに聞けば出で、物などいふを「宰相の中將の德見る事そなたに向ひて拜むべし」などいふ。しもにわりながらうへになどいはするに、「これをうち出づれば誠はあり」などいふ。おまへにかくなど申せば笑はせ給ふ。內の御ものいみなる日、右近のさうくわんみつなにとかやいふものして、たゝう紙に書きておこせたるを見れば「參せむとするを今日は御物忌にてなむ。三十のごにおよばずはいかゞ」といひたれば、かへりごとに、「そのごは過ぎぬらむ。朱買臣がめを敎へけむ年にはしも」と書きてやりたりしを、又ねたがりてうへの御前にも奏しければ、宮の御かたにわたらせ給ひて、「いかで

かゝる事は知りしぞ。四十九になりける年こそさは誠めけれ」とて「のぶかたはわびしういはれにたりといふめるは」と笑はせ給ひしこそ物ぐるほしかりける君かなとおぼえしか。

こき殿弘徽とは閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる。その御方にうちふしといふ者のむすめ、左京といひてさぶらひけるを、源中將かたらひて思ふなど人々笑ふころ、宮のしきにおはしましに參りて、「時々は御とのゐなど仕うまつるべけれど、さるべきさまに女房などもてなし給はねば、いと宮づかへおろかにさふらふ。殿居所をだに賜はりたらむは、いみじうまめに侍らひなむ」などいひゐ給ひつれば、人々「げに」などいふ程に、「誠に人はうちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるわたりにはしげく參り給ふなるものを」とさしいらへたりとて、「すべて物きこえず、かた人と賴み聞ゆれば人のいひふるしたるさまに取りなし給ふ」など、いみじうまめだちてうらみ給ふ。「あなあやし。如何なる事をか聞えつる。更に聞きとゞめ給ふこととなし」などいふ。かたはらなる人を引きゆるがせば、「さるべきこともなきをほとほり出で給ふさまこそあらめ」とて華やかに笑ふに、これもかのいはせ給ふならむとて、いとものしと思へり。「更にさやうの事をなむいひ侍らぬ。人のいふだににくきものを」といひて引き入りにしかば、後にもなほ「人にはぢがましき事言ひ告けたる」と恨みて、「殿上人の笑ふとて言ひ出でたるなり」とのたまへば、「さては一人を恨み給ふべくもあらざめる。あやし」などいへば、その後は絶えてやみ給ひにけり。

むかしおぼえてふようなるもの

うげんべりの疊のふりてふし出できたる。唐繪の屏風の表そこなはれたる。藤のかゝりたる松の木枯れたる。ぢずりのもの花かへりたる。衞士の目くらき。几帳のかたびらのふりぬる。もかうのなくなりぬる。七尺のかづらのわかくなりたる。えびぞめの織物の灰かへりたる。色好みの老いくづほれたる。おもしろき家の木立やけたる、池などはさながらあれど、うきくさみくさしげりて。

たのもしげなきもの

心みじかくて人忘れがちなる。むこの夜がれがちなる。六位の頭しろき。そらごとする人のさすがに人のことなしがほに大事うけたる。一番に勝つすぐろく。六七八十なる人の心ちあしうして日ごろになりぬる。風吹く（ふき）に帆あげたる船。經は不斷經。

近くてとほきもの

宮のほとりの祭、思はぬはらからしんぞくの中、鞍馬のつゞらをりといふ道、しはすの晦日正月一日のほど。

遠くてちかきもの

極樂、舟の道、男女の中。

井は

堀兼の井。走井は逢坂なるがをかしき。山の井、さしもあさきためしになりはじめけむ。飛鳥井、みもひも寒しと譽めたるこそをかしけれ。玉の井、少將井、櫻井、后町の井、千貫の井。

受領は

紀伊守、和泉。

やどりのつかさの權の守は

下野、甲斐、越後、筑後、阿波。

大夫は、

式部大夫、左衞門大夫、史大夫。六位藏人思ひかくべき事にもあらず。かうぶりえて何の大夫權の守などいふ人の、板屋せばき家もたりて、また小檜垣など新しくし、車やどりに車ひきたて、前近く木おほくして牛つながせて草などかはするこそいとにくけれ。庭いと淸げにて紫革して伊豫すかけわたしてぬのさうじはりてすまひたる。よるは門强くさせなど事行ひたる、いみじうおひさきなくこゝろづきなし。親の家しうとはさらなり、伯父兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからむはおのづからむつましううち知りたる受領、又國へ行きていたづらなる、さらずは女院宮原などの屋あまたあるに、つかさまち出でゝ後いつしかよき所尋ね出でゝ住みたるこそよけれ。女のひとり住む家などは唯いたう荒れてついぢなどもまたからず、池などのある所は水草ゐ、庭なども糸よもぎ茂りなどこそせねども、所々すなどの中より靑き草見え、寂しげなるこそあはれなれ。物かしこげになだらかにすりして門いたうかため、きはきはしきはいとうたてこそ覺ゆれ。

宮づかへ人の里なども親ども二人あるはよし。人しげく出で入り、奥のかたにあまたさまざ

まの聲多く聞え、馬の音して騷がしきまであれどかなし。されど忍びてもあらはれてもおのづから、出で給ひけるを知らでとも又いつか參り給ふなどもいひにさしのぞく。心がけたる人はいかゞはと門あけなどするを、うたて騷がしうあやふげに夜なかまでなど思ひたるけしきいとにくし。「大御門はさしつや」など問はすれば、「まだ人のおはすれば」などなまふせがしげに思ひていらふるに、「人出で給ひなばとくさせ。このごろは盜人いと多かり」などいひたるいとむつかしううち聞く人だにあり。この人の供なるものども、このかく今や出づると、絶えずさしのぞきてけしき見るものどもをわらふべかめり。まねうちするも聞きてはいかにいとゞきびしういひ咎めむ。いと色に出でゝいはぬも、思ふ心なき人は必きなどやする。されどすくよかなるかたは夜更けぬ。「御門もあやふかなる」といひてぬるもあり。誠に志ことなる人ははやなどあまたゝびやらはるれど、猶居あかせばたびたびありくに、あけぬべきけしきを珍らかに思ひて、「いみじき御門をこよひらいさう元(如)とあけひろげて」と聞えごちてあぢきなく曉にぞさすなるいかゞにくき。親そひぬるは猶こそあれ。まして誠ならぬはいかに思ふらむとさへつゝましうて、せうとの家などもげに聞くにはさぞあらむ。夜中曉ともなく門いと心がしこくもなく、何の宮、內わたりの殿ばらなる人々の出あひなどして格子などもあけながら冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も見出したるこそをかしけれ。有明などはましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを我は急ぎてもねられず、人のうへなどもいひ、歌など語り聞くまゝに寢入りぬるこそをかしけれ。

雪のいと高くはあらでうすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端ちかう同じ心なる人二三人ばかり火桶なかにすゑて、物語などするほどに暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさびて、哀なるもをかしきもいひあはするこそをかしけれ。よひも過ぎぬらむと思ふほどに、履の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひ聞えながら、なんでふ事にさはりそこに暮しつるよしなどいふ。今日來む人をなどやうのすぢをぞいふらむかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて萬の事をいひ笑ひ、わらふださし出したれど片つかたの足はしもながらあるに、鐘のおとの聞ゆるまでになりぬれど、内にもとにもいふ事どもは飽かずぞおぼゆる。あけぐれのほどにかへるとて「雪何の山に滿てる」とうちずんじたるはいとをかしきものなり。女のかぎりしてはさもえゐあかさゞらましを、たゞなるよりはいとをかしう過ぎたる有樣などを言ひ合せたる。村上の御時雪のいと高う降りたりけるを、やうきにもらせ給ひて、梅の花をさして「月いとあかきに「これに歌よめ。いかゞいふべき」と兵衞の藏人にたびたりければ「雪月花の時」と奏したりけるこそいみじうめでさせ給ひけれ。「歌などよまむにはよのつねなり。かう折にあひたる事なむ言ひ難き」とこそ仰せられけれ。おなじ人を御供にて殿上に人さぶらはざりける程たゝずませおはしますに、すびつのけぶりの立ちければ「かれは何のけぶりぞ。見てこ」と仰せられければ、見てかへり參りて、

「わたつみの沖にこがるゝ物見ればあまの釣してかへるなりけり」と奏しけるこそをかしけれ。かへるの飛び入りてこがるゝなりけり。

みあれのせんじ、五寸ばかりなる殿上わらはのいとをかしげなるをつくりて、みづらゆひ、さうぞくなどうるはしくして名かきて奉らせたりけるに、「ともあきらのおほきみ」と書きたりけるをこそいみじうせさせ給ひけれ。

宮（中宮）に始めて參りたるころ物の恥かしきことと數知らず。涙も落ちぬべければ、よるよる參りて三尺の御几帳のうしろに侍ふに、繪など取り出でゝ見せさせ給ふだに手もえさし出づまじうわりなし。「これはとありかれはかゝり」などのたまはするに、たかつきにまゐりたる大とのあぶらなれば、髮のすぢなども中々晝よりはけせうに見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなればさし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは限なくめでたしと、見知らぬさとび心ちには、いかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもりまゐらする。曉にはとくなど急がるゝ。「葛城の神も暫し」など仰せらるゝを、いかですぢかひても御覽ぜむとてふしたれば、御格子もまゐらず。「女官參りてこれはなたせ給へ」といふを、女房きてはなつを「待て」など仰せらるれば笑ひてかへりぬ。物など問はせ給ひのたまはするに「久しうなりぬればおりまほしうなりぬらむ。さらばはや」とて「よさりはとく」と仰せらるゝ。ゐざり歸るや遲きとあけちらしたるに、雪いとをかし。「今日は晝つかた參れ。雪にくもりてあらはにもあるまじ」など度々召せば、

このつぼねあるじも「さのみや籠り居給ふらむとする。いとあへなきまで御まへ許されたるは思しめすやうこそあらめ。思ふにたがふはにくきものぞ」と唯いそがしに出せば、我にもあらぬ心ちすれば參るもいとぞ苦しき。火たき屋のうへに降り積みたるも珍しうをかし。御まへ近くは例のすびつの火こちたくおこしてそれにはわざ人も居ず。宮は沉の御火桶の梨繪したるに向ひておはします。上﨟御まかなひし給ひけるまゝに近く侍ふ。次の間にながすびつにまなく居たる人々、からぎぬ着垂れたる程なり。安らかなるを見るも羨しく御文とりつぎ立ち居ふるまふさまなど、つゝましげならず物いひゑわらふ。いつの世にかさやうにまじらひならむと思ふさへぞつゝましき。あうよりて三四人集ひて繪など見るもあり。しばしありてさき高うおふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて散りたる物ども取りやりなどするに奧に引き入りて、さすがにゆかしきなめりと、御几帳のほころびより僅に見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色雪にはえてをかし。柱のもとに居給ひて、「さのふけふ物いみにて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、覺束なさに」などのたまふ。「道もなしと思ひけるにいかでか」とぞ御いらへあなる。うち笑ひ給ひて「あはれともや御覽ずるとて」などのたまふ御ありさまは、これよりは何事かまさらむ。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事どもたがはざめりと覺ゆ。宮は白き御ぞどもに紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる。御ぐしのかゝらせ給へるなど繪に書きたるをこそかゝることは見るにうつゝにはまだ知らぬを夢の心ちぞする。女房と物いひたはぶれなどし給ふを、いらへいさゝか恥か

しとも思ひたらず聞え返し、空言などの給ひかくるをあらがひ論じなど聞ゆるは、目もあやに淺ましきまでわいなく面ぞ赤むや。御くだもの參りなどして御前にも參らせ給ふ。「御几帳のうしろなるは誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。さぞと申すにこそあらめ、立ちて坐するを、外へにやわらむと思ふに、いと近う居給ひて物などのたまふ。まだ參らざりし時聞き置き給ひける事などのたまふ。「まことにさありし」などのたまふに、御几帳隔てゝよそに見やり奉るだに耻しかりつるを、いとあさましうさし向ひ聞えたる心ちうつゝともおぼえず。行幸など見るに、車のかたにいさゝか見おこせ給ふは下簾ひきつくろひ、すきかげもやと扇をさし隱す。猶いと我が心ながらもおほけなく、いかで立ち出でにしぞと汗あえていみじきに何事をか聞えむ、かしこきかげと捧げたる扇をさへ取り給へるに振りかくべき髮のあやしささへ思ふに、すべて誠にさる氣色やつきてこそ見ゆらめ。疾く立ち給へなど思へど扇を手まさぐりにして「繪は誰が書きたるぞ」などのたまひて、とみにも立ち給はねば、袖をおしあてゝうつぶし居たるも、からぎぬにしろいものうつりてまだらにならむかし。久しう居給ひたりつるをろんなう苦しと思ふらむと心得させ給へるにや、「これ見給へ。此はたが書きたるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに「賜ひて見侍らむ」と申し給へば「猶こゝへ」とのたまはすれば、「人をとらへてたて侍らぬなり」とのたまふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはらいたし。人のさうがな書きたる草紙取り出でゝ御覽ず。「誰がにかあらむ、かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らむ」と、あやしき事どもをたゞいらへさ

せむとの給ふ。一所だにあるに又さきうちおはせて同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少しはなやぎさるがうど言などどうちし、譽め笑ひ興じ、我もなにがしがとある事かゝる事など殿上人のうへなど申すを聞けば、猶いと變化の物天人などのおりきたるにやと覺えてしを、侍ひ馴れ、日ごろ過ぐれはいとさしもなき業にこそありけれ。かく見る人々も家のうち出でそめけむ程はさこそは覺えけめど、かくしもて行くにおのづからおも馴れぬべし。物など仰せられて「我をば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに「いかにかは」と啓するに合せて、臺盤所のかたに、はなをたかくひたれば、「あな心う。そらごとするなりけり。よしよし」とていらせ給ひぬ。いかでかそらごとにはあらむ。よろしうだに思ひきこえさすべき事かは。はなこそはそらごとしけれとおぼゆ。さてもたれかかくにくきわざしつらむと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折もおしひしぎかへしてあるを、ましてにくしと思へど、まだうひうひしければともかくも啓しなほさで、明けぬればおりたるすなはち淺緑なるうすえふにえんなる文をもてきたり。見れば、

「いかにしていかに知らましいつはりをそらにたゞすの神なかりせば（宮中）

となむ、御けしきは」とあるにめでたくも口をしくも思ひ亂るゝに、なほよべの人ぞたづね聞かまほしき。

「うすきこそそれにもよらぬはなゆゑにうき身のほどを知るぞわびしき。（少納言）

猶こればかりは啓しなほさせ給へ。式の神もおのづからいと畏し」とて參らせて後もうた

て折しもなどてさはたありけむ、いとをかし。

したりがほなるもの

正月一日のつとめてさいそにはなひたる人。きしろふたびの藏人にかなしうする子なしたる人のけしき。ぢもくにその年の一の國得たる人のよろこびなどいひて、「いとかしこうなり給へり」など人のいふいらへに、「何かいとことやうにほろびて侍るなれば」などいふもしたり顔なり。又人多く挑みたる中にえられて聟に取られたるも我はと思ひぬべし。こはきものゝけてうじたる驗しや。ゐふたぎのあけとうしたる。小弓射るに片つ方の人しはぶきをし紛らはして騷ぐに、念じて音高う射てあてたるこそしたり顔なるけしきなれ。碁をうつにさばかりと知らでふくつけさは、また異所にかゝぐりありくに、こと方より目もなくして多くひろひ取りたるも嬉しからじや。ほこりかに打ち笑ひ、たゞの勝よりはほこりかなり。ありありてずりやうになりたる人の氣色こそうれしげなれ。僅にあるずんざのなめげにあなづるも妬しと思ひ聞えながら、いかゞせむとて念じ過しつるに、我にもまさるものどもの、かしこまり「唯おほせ承らむ」と追しようする樣は、ありし人とやは見えたる。女房うちつかひ見えざりし調度さうぞくのわきいづる。ず領したる人の中將になりたるこそもと君達のなりあがりたるよりもけ高うしたり顔にいみじう思ひためれ。位こそ猶めでたきものにはあれ。おなじ人ながら大夫の君や侍從の君など聞ゆるをりは、いとあなづりやすきものを、中納言、大納言、大臣などになりぬるはむげにせむかたなく、やんごとなく覺え給ふ事のこよ

なさよ。ほどほどにつけてはずりやうもさこそはあめれ、あまた國に行きて大貳や四位など
になりて上達部になりぬればおもおもし。されどさりとてほど過ぎ何ばかりの事かはある。
また多くやはある。ず領の北の方にてくだるこそよろしき人のさいはひには思ひてあめれ。
たゞ人の上達部のむすめにて后になり給ふこそめでたけれ。されど猶男は我が身のなり出
づるこそめでたくうち仰ぎたるけしきよ。法師のなにがし供奉などいひてありくなどは何
とかは見ゆる。經たふとく讀み、みめ淸げなるにつけても女にあなづられてなりかゝりこそ
すれ、僧都僧正になりぬれば佛の現れ給へるにこそとおぼし惑ひて、かしこまるさまは何に
かは似たる。

風は

嵐、木枯。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風いとあはれなり。八九月ばかりに雨にま
じりて吹きたる風いとあはれなり。雨のあし横さまに騷がしう吹きたるに、夏とほしたる綿
絹の汗の香などかわき、すゞしのひとへに引き重ねて著たるもをかし。このすゞしだにいと
あつかはしう捨てまほしかりしかば、いつのまにかうなりぬらむと思ふもをかし。あかつき
格子妻戸など押しあけたるに、嵐のさと吹き渡りて顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。
九月つごもり、十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに黄なる木の葉どもの
ほろほろとこぼれ落つるいとあはれなり。櫻の葉椋の葉などこそ落つれ。十月ばかりに木立
多かる所の庭はいとめでたし。野分の又の日こそいみじうあはれにおぼゆれ。たてじとみす

いがいなどのふしなみたるに、せんざいども心ぐるしげなり。大きなる木どもたふれ枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などのうへによろぼひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつぼなどにさとさはをことさらに忘たらむやうに、こまでまと吹き入りたるこそあらかりつる風の忘わざともおぼえね。いと濃ききぬのうはぐもりたるに、朽葉の織物うすものなどの小袿きて、まことしく淸げなる人のよるは風のさわぎにねざめつれば、久しう寢おきたるまゝに、鏡うち見てもやより少しゐざり出でたる、髮は風に吹きまよはされて少しうちふくだみたるが肩にかゝりたる程、まことにめでたし。物あはれなる氣色見る程に、十七八ばかりにやあらむ、ちひさうはあらねどわざとおとなでとは見えぬが、すゞしの單衣のいみじうはころびたる。花もかへり濡れなどしたる。薄色のとのゐものを着て、髮は尾花のやうなるそぎすゑも、たけばかりはきぬの裾にはづれて、袴のみあざやかにてそばより見ゆる。わらはべの若き人の根ごめに吹き折られたるせんざいなどを、取り集め起し立てなどするを羨ましげに推し量りてつき添ひたるうしろもをかし。

こゝろにくきもの

物へだてゝ聞くに、女房とはおぼえぬ聲の忍びやかに聞えたるに、こたへわかやかにしてうちそよめきて參るけはひ。物まゐる程にや、箸かひなどのとりまぜてなりたるひさげの柄のたふれ伏すも耳こそとゞまれ。打ちたるきぬのあざやかなるに、さうがしうはあらで髮のふりやられたる。いみじう忘つらひたる所のおほとなぶらは參らで、長すびつにいと多くおこ

したる火の光に、御几帳の紐のいとつやゝかに見え、みすのもかうのあげたる、このきはやかなるもけざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪の見えたるをかし。はしのいときはやかにすぢかひたるもをかし。夜いたう更けて人の皆ねぬる後にとのかたにて、殿上人など物いふに、奥に碁石けにいる音のあまた聞えたるいと心にくし。簀子に火ともしたる。物へだてゝ聞くに人の忍ぶるが夜中などうち驚きていふ事は聞えず、男も忍びやかにうち笑ひたるこそ何事ならむとをかしけれ。

島は

浮島、八十島、たはれ島、水島、松が浦島、籬の島、豐浦の島、たと島。

濱は

そとの濱、吹上の濱、長濱、うちでの濱、もろよせの濱。千里の濱こそ廣うおもひやらるれ。

浦は

をふの浦、鹽竈の浦、志賀の浦、名高の浦、こりずまの浦、和歌の浦。

寺は

壺坂、笠置、法輪。高野は弘法大師の御すみかなるがあはれなるなり。石山、こ川、志賀。

經は

法華きやうはさらなり。千手經、普賢十願、ずゐぐ經、尊勝陀羅尼、阿彌陀の大ずゞ、せんず陀羅尼。

文は

文集、文選、博士の申し文。

佛は

如意りは人の心をおぼしわづらひてつら杖をつきておはする、世に知らずわはれにはづかし。千手、すべて六觀音、不動尊、藥師佛、釋迦、彌勒、普賢、地藏、文殊。

物語は

住吉、うつぼの類。殿うつり、月まつ女、かたのゝ少將、梅壺の少將、人め、國ゆづり、埋木、道心すゝむる松が枝。こまのゝ物語は、ふるきかはほりさし出でゝもいにしがをかしきなり。

野は

嵯峨野さらなり。いなび野、かたの、こま野、粟津野、飛火野、志めぢ野。そうけ野こそすゞろにをかしけれ。などさつけたるにかあらむ。あべ野、宮城野、春日野、むらさき野。

陀羅尼は

わかつき。

讀經は

ゆふぐれ。

わそびは

よる人の顔見えぬほど。わそびわざはさまわしけれども、鞠もをかし。小弓、ゐんふたぎ、碁。

舞は

駿河舞、もとめこ。太平樂はさまあしけれどいとをかし。太刀などうたてくあれどいとおもしろし、もろこしにかたきに具して遊びけむなど聞くに。鳥の舞。ばとうは頭の髪ふりかけたるまみなどはおそろしけれど樂もいとおもしろし。落蹲は二人して膝ふみて舞ひたる。こまがた。

ひきものは

琵琶、さうのこと。

しらべは

ふかうでう、わうしきでう、そかうのきふ、鶯のさへづりといふしらべ、さうふれん。

笛は

横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるがやうやう近うなりゆくもをかし。ちかゝりつるがはるかになりていとはのかに聞ゆるもいとをかし。車にてもかちにても馬にても、すべてふところにさし入れてもたるも何とも見えず。さばかりをかしきものはなし。まして聞き知りたる調子などいみじうめでたし。曉などに忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも猶をかし。人の許よりとりにおこせたるをおし包みて遣るも唯文のやうに見えたり。さうのふえは月のあかきに車などにて聞えたるいみじうをかし。所せくもてあつかひにくゝぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それはよこ笛もふきなしありかし。ひちりきはいとむつかしう秋の蟲をい

はゞくつわ蟲などに似て、うたてけぢかく聞かまほしからず、ましてわろう吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだおまへには出ではてゞ物のうしろにて横笛をいみじう吹き立てたる、あなおもしろと聞く程に、なからばかりよりうちそへて吹きのぼせたる程こそ、唯いみじう麗しき髮もたらむ人も皆立ちあがりぬべき心ちぞする。やうやう琴笛あはせて步み出でたるいみじうをかし。

見るものは

行幸、祭のかへさ、御賀茂詣。臨時の祭空くもりて寒げなるに雪少しうち散りてかざしの花、靑摺などにかゝりたるえもいはずをかし。太刀の鞘のきはやかに黑うまだらにて、白く廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかゝりたる、地摺袴の中より氷かと驚くばかりなるうち目など、すべていとめでたし。今少し多く渡らせまほしきに、使は必にくげなるもあるたびは目もとまらぬ。されど藤の花に隱されたる程はをかしう、猶過ぎぬるかたを見送らるゝに、べいじうのしなおくれたる、柳の下襲にかざしの山吹おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして「賀茂の社のゆふだすき」とうたひたるはいとをかし。

行幸になずらふる物は何かあらむ。御輿に奉りたるを見參らせたるは、明暮御前に侍ひ仕うまつる事もおぼえず。かうがうしういつくしう常は何ともなきつかさ、ひめまうちぎみさへぞやんごとなう珍しう覺ゆる。みつなのすけ中少將などいとをかし。

祭のかへさいみじうをかし。昨日は萬の事麗しうて、一條の大路の廣う淸らなるに日の影も

暑く車にさし入りたるもまばゆければ、扇にて隠し、居直りなどして久しう待ちつるも見苦しう汗などもあえしを、今日はいと疾く出で丶雲林院、知足院などのもとに立てる車ども葵蘰もうちなえて見ゆ。日は出でたれど空は猶うち曇りたるに、いかで聞かむと目をさまし起き居て待たる丶杜鵑のあまたさへあるにやと聞ゆるまで鳴き響かせばいみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にてかれ似せむと覺しくうち添へたるこそ憎けれど又をかし。いつしかと待つに、御社の方より赤ききぬなど着たるものどもなど連れ立ちてくるを「いかにぞ。事成りぬや」などいへば「まだむご」などいらへて御輿たごしなどもてかへる。これに奉りておはしますらむもめでたくけぢかく、いかでさるげすなどの侍ふにかとおそろし。はるかげにいふ程もなく歸らせ給ふ。葵より始めて青朽葉どものいとをかしく見ゆるに、所の衆の青色白がさねを、けしきばかり引きかけたるは卯の花垣根近う覺えて、杜鵑もかげに隠れぬべうおぼゆかし。昨日は車ひとつにあまた乘りて二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ着て、すだれ取りおろし、物ぐるほしきまで見えし君達の齋院のゑんがにて、ひのさうぞくうるはしくて今日は一人づ丶をさをさしく乘りたる尻に殿上わらはのせたるもをかし。わたりはてぬる後には、などかさしも惑ふらむ、我も我もとあやふくおそろしきまでさきに立たむと急ぐを「かうな急ぎそ。のどやかに遣れ」と扇をさし出で丶制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣き所に強ひてとゞめさせて立ちかるを、心もとなくにくしとぞ思ひたる。きほひかゝる車どもを見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしきほどにやり過して道の

山里めき哀なるに、うつ木垣根といふ物のいとあらあらしうおどろかしげにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくもひらけはてず、つぼみがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたなどにさしたるも鬘などのしぼみたるが口をしきに、をかしうおぼゆ。遠きほどは、えも通るまじう見ゆる行くさきを、ちかう行きもてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが尻に引きつゞきてくるも、たゞなるよりはをかしと見る程に、引き別るゝ所にて「峯にわかるゝ」といひたるもをかし。

五月ばかり山里にありくいみじくをかし。澤水もげに唯いと青く見えわたるに、うへはつれなく草生ひ茂りたるを、ながながとたゞさまに行けば、下はえならざりける水の深うはあらねど、人の歩むにつけてとばしりあげたるいとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて車のやかたに入るも急ぎてとらへて折らむと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるも口をし。蓬の、車に押しひしがれたるが輪のまひたちたるに近う（七字たりけるにおきあがりて上をイ）かゝへたる香もいとをかし。

いみじう暑き頃、夕すゞみといふ程の物のさまなどおぼめかしきに、男車のさきおふはいふべき事にもあらず。たゞの人も尻のすだれあげて、二人も一人も乗りて走らせていくこそいと涼しげなれ。まして琵琶ひきならし、笛のね聞ゆるは、過ぎていぬるも口惜しく、さやうなるほどに牛の鞦のかの　あやしうかぎ知らぬさまなれど、うちかゞれたるがをかしきこそ物ぐるほしけれ。いと暗う闇なるに、さきにともしたる松の煙のかの車にかゝれるもいとをかし。五日のさうぶの秋冬過ぐるまであるがいみじう白み枯れてあやしきを、引き折りあげ

たるに、その折の香のこりてかゝへたるもいみじうをかし。

よくたきしめたるたきものゝ昨日、をとゝひ、けふなどはうち忘れたるに、きぬを引きかづきたる中に、煙の殘りたるは今のよりもめでたし。

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに水晶などのわれたるやうに水のちりたるこそをかしけれ。

おほきにてよきもの

法師、くだもの、家、餌袋、硯の墨。をのこの目、あまりほそきは女めきたり。又かなまりのやうならむはおそろし。火桶、ほゝつき、松の木、山吹(桜イ)のはなびら。馬も牛もよきはおほきにこそあめれ。

みじかくてありぬべきもの

とみの物ぬふ糸、燈臺。げす女の髮、うるはしくみじかくてありぬべし。人のむすめのこゑ。

人の家につきづきしきもの

くりや、侍の曹司、はゝきのあたらしき、かけばん、わらはめ、はしたもの、ついたてさうじ、三尺の几帳、しやうぞくよくしたる餌袋、からかさ、かきいた、棚厨子、ひさげ、銚子、中のばん、わらふだ、ひぢをりたる廊、ちくあうゑかきたる火桶。

ものへいく道に清げなるをのこのたてぶみのほそやかなる持ちて急ぎ行くこそいづちならむとおぼゆれ。又清げなるわらはべなどの袙いとあざやかにはあらず、なえばみたるけいし

のつやゝかなるが革に土多くついたるをはきて、白き紙に包みたる物、もしは箱の蓋に草紙どもなど入れてもて行くこそいみじう呼び寄せて見まほしけれ。門ぢかなる所をわたるを呼び入るゝに、あいぎやうなくいらへもせでいくものはつかふらむ人こそ推しはからるれ。行幸はめでたきもの。上達部、君達、車などのなきぞ少しさうざうしき。萬の事よりもわびしげなる車にさうぞくわろくて物見る人いともどかし。說經などはいとよし、罪うしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて見苦しかるべきを、まして祭などは見でありぬべし。下簾もなくて白きひとへうち垂れなどしてあめりかし。唯その日の料にとて車も下簾もしたてゝ、いと口をしうはあらじと出でたるだにまさる車など見つけては、何しになどおぼゆるものを、ましていかばかりなる心ちにてさて見るらむ。おりのぼりありく君達の車のおし分けて近う立つ時などこそ心ときめきはすれ。よき所に立てむといそがせばとく出でゝ待つほどいと久しきに、ゐはり立ちあがりなどあつく苦しくまちこうずる程に、齋院のゑんがに參りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など七つ八つ引きつゞけて、院のかたより走らせてくるこそ事なりにけりと驚かれて嬉しけれ。殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもにすゐばんくはすとて、さじきのもとに馬ひき寄するに、覺えある人の子どもなどは雜色などおりて馬の口などしてをかし。さらぬ物の見もいれられぬなどぞいとほしげなる。御輿の渡らせ給へば、すだれもある限り取りおろし過させ給ひぬるにまどひあぐるもをかし。その前に立てる車はいみじう制するに、「などて立つまじきぞ」と强ひて立つれば、いひわづらひ

てせうそこなどするこそをかしけれ。所もなく立ち重なりたるに、よき所の御車人だまひ引きつゞきて多くくるを、いづくに立たむと見るほどに、御前ども唯おりにおりて、立てる車どもを唯のけにのけさせて人だまひつゞきて立てるこそいとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども牛かけて所あるかたにゆるがしもて行くなどいとわびしげなり。きらきらしきなどをばえさしも推しひしがずかし。いと清げなれど又ひなびあやしく、げすも絶えず呼びよせ、ちご出しすゑなどするもあるぞかし。

「ほそ殿にびんなき人なむ暁にかささゝせて出でける」といひ出でたるをよく聞けば我が上なりけり。地下などいひてもめやすく人に許されぬばかりの人にもあらざめるを、あやしの事やと思ふ程に、うへより御文もて來て「返り事唯今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大かさのかたをかきて人は見えず、唯手のかぎりかさをとらへさせて、下に

「三笠山やまのはあけしあしたより」

とかゝせ給へり。猶はかなき事にてもめでたくのみおぼえさせ給ふに、耻しく心づきなき事はいかで御覧ぜられじと思ふに、さるそらごとなどの出でくるこそ苦しけれどをかしうてこと紙に雨をいみじう降らせて、下もに、

「雨ならぬ名のふりにけるかな。

さてやぬれぎぬには侍らむ」と啓したれば、右近、内侍などにかたらせ給ひてわらはせ給ひけり。

三條の宮におはしますころ(長保二年五月)五日のさうぶの輿など持ちてまゐり、くす玉まゐらせなどわかき人々御匣殿などくす玉して、姫宮、若宮つけさせ奉り、いとをかしきくす玉ほかよりもまゐらせたるに、あをざしといふものを人のもてきたるを、青きうすえふをえんなる硯の蓋に敷きて「これませでしにさふらへば」とてまゐらせたれば、

「みな人は花やてふやといそぐ日もわがこゝろをば君ぞ知りける」

と紙の端を引きやりて書かせ給へるもいとめでたし。

十月十餘日の月いとあかきにありきて物見むとて、女房十五六人ばかり皆濃ききぬをうへに着て、引き隱しつゝありし中に、中納言の君の紅の張りたるを着て、頸より髮をかいこし給へりしかば、あたらしきそとはにいとよくも似たりしかな。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。後りに立ちて笑ふも知らずかし。

成信の中將こそ人の聲はいみじうよう聞き知り給ひしか。同じ所の人の聲などは(いも)常に聞かぬ人は更にえ聞き分かず。殊に男は人の聲をも手をも見わき聞きわかぬものを、いみじうみそかなるもかしこう聞き分き給ひしこそ。

大藏卿(藤原正光)ばかり耳とき人なし。まことに蚊の睫の落つるほども聞きつけ給ひつべくこそありしか。職の御曹司の西おもてに住みしころ、大殿の四位少將と物いふに、そばにある人この少將に「扇の繪の事いへ」とさゝめけば「今かの君立ち給ひなむにを」とみそかにいひ入るゝを、その人だにえ聞きつけで、何とか何とかと耳をかたぶくるに、手をうちて「にくし。さ

のたまはゞ今日はたゞじ」とのたまふこそいかで聞き給ひつらむとあさましかりしか。硯きたなげに塵ばみ、墨の片つかたにゑどけなくすりひらめかしらうおほきになりたるが、さゝしなどしたるこそ心もとなしと覺ゆれ。よろづの調度はさるものにて、女は鏡、硯こそ心のほど見ゆるなめれ。おきぐちのはざめに塵ゐなどうち捨てたるさま、こよなしかし。男はまして、ふ机淸げにおしのごひて、重ねならずは二つかけごの硯のいとつきづきしう、蒔繪のさまもわざとならねどをかしうて、墨筆のさまなども人の目とむばかりゑたてたるこそをかしけれ。とあれどかゝれどおなじ事とて黑箱の蓋もかたしおちたる硯、僅かに墨のゐたる塵のこの世には拂ひがたげなるに、水うち流してあをじの龜の口おちて首の限りあなのほど見えて、人わろきなどもつれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて手ならひをも文をも書くに、「その筆な使ひたまひそ」と言はれたらむこそいとわびしかるべけれ。うち置かむも人わろし、猶つかふもあやにくなり、さおぼゆることも知りたれば人のするもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かゝまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに水がちにさしぬらして、こはものややりとかなに細櫃の蓋などに書きちらして、横ざまに投げ置きたれば、水にかしらはさし入れてふせるもにくき事ぞかし。されどさいはむやは。人の前に居たるに「あなくら、あうより給へ」といひたるこそ又侘しけれ。さしのぞきたるを見つけては驚きいはれたるも、思ふ人の事にはあらずかし。めづらしといふべきことにはあらねど文こそ猶めでたきものなれ。はるかなる世界にある

人のいみじくおぼつかなくいかならむと思ふに、文を見れば唯今さし向ひたるやうにおぼゆるいみじきことなりかし。我が思ふことを書き遣りつれば、あしこまでも行きつかざるらめど、こゝろゆく心ちこそすれ。文といふ事なからましかばいかにいぶせくくれふたがる心ちせまし。萬の事思ひ思ひてその人の許へとて、こまごまと書きて置きつれば、おぼつかなさをも慰む心ちするに、まして返事見つれば命を延ぶべかめる、げにことわりにや。

うまやは

梨原、ひくれのうまや、望月の驛、野口の驛、やまの驛。あはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事のありしかば、猶取りあつめてあはれなり。

岡は

船岡、片岡。鞆岡は笹の生ひたるがをかしきなり。かたらひの岡、人見の岡。

やしろは

ふるの社、いくたの社、龍田の社、はなふちの社、みくりの社。すぎの御社志るしあらむとをかし。ことのまゝの明神いとたのもし。さのみ聞きけむとやいはれ給はむと思ふぞいとをかしき。蟻どほしの明神、貫之が馬の惱ひけるにこの明神のやませ給ふとて歌よみて奉りけむに、やめ給ひけむいとをかし。この蟻とほしとつけたるこゝろは、まことにやあらむ。昔おはしましけるみかどの唯若き人をのみおぼしめして、四十になりぬるをばうしなはせ給ひけ

れば、ひとの國の遠きにいきかくれなどして更に都のうちにさる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき、時の人にて心なども賢かりけるが、七十近き親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるにましていと恐ろしとおぢ騒ぐをいみじうけうある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一度見ではえあるまじとて、みそかによるよる家の内の土を掘りてその内に屋を建て丶それに籠めすゑていきつ丶見る。おほやけにも人にもうせ隠れたるよしを知らせてあり。などてか。家に入り居たらむ人をば知らでもおはせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけむ、中將など子にてもたりけむは。いと心かしこく萬の事知りたりければ、この中將若けれどざえありいたり賢くして時の人に思すなりけり。もろこしの御門この國のみかどをいかで謀りてこの國うち取らむとて常にこ丶ろみ、あらがひごとをしておくり給ひけるに、つやつやとまろに美くしげに削りたる木の二尺ばかりあるを「これがもと末いづ方ぞ」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうなければ、みかどおぼしめし煩ひたるに、いとほしくて親の許に行きて「かうかうの事なむある」といへば「唯はやからむ川に立ちながら、横ざまに投げ入れ見むに、かへりて流れむ方を末と記してつかはせ」と教ふ。參りて我知り顔にして、「試み侍らむ」とて人々具して投げ入れたるに、さきにして行くかたにしるしをつけて遣したれば、まことにさなりけり。又二尺ばかりなるくちなはの同じやうなるを「これはいづれか男女」とて奉れり。又更に人え知らず。例の中將行きて問へば、「二つをならべて尾のかたに細きずわえをさしよせむに、尾はたらかさむをめと知れ」

といひければ、やがてそれを内裏のうちにて、さしければ、まことに一つは動かさず、一つは動かしけるに、又しるしつけて遣しけり。ほど久しうて七わだにわだかまりたる玉の中通りて左右に口あきたるがちひさきを奉りて「これに緒通してたまはらむ。この國に皆し侍ることなり」とて奉りたるに、いみじからむ物の上手ふようならむ、そこらの上達部より始めて、ありとある人知らずといふに、又いきてかくなむといへば、「大きなる蟻を二つ捕へて腰に細き糸をつけ、又それに今少しふときをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、さ申して蟻を入れたりけるに、蜜のかをかぎてまことにいと疾う穴のあなたの口に出でにけり。さてその糸のつらぬかれたるを遣したりける後になむ「猶日本はかしこかりけり」とて後々はさる事もせざりけり。この中將をいみじき人におぼしめして「何事をし、いかなる位をか賜はるべき」と仰せられければ「更につかさ位をも賜はらじ。唯老いたる父母の隱れうせて侍るを尋ねて、都にすまする事を許させ給へ」と申しければ「いみじうやすき事」とてゆるされにければ、よろづの人の親これを聞きてよろこぶ事いみじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなむありける。さてその人の神になりたるにやあらむ、この明神の許へ詣でたりける人に、よる現れてのたまひける、

「なゝわだにまがれる玉の緒をぬきてありとほしとも知らずやあるらむ」

とのたまひけると人のかたりし。

ふるものは

雪、霰。雪はにくけれど雪の眞白にてまじりたるをかし。雪はひはだ葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いと多うは降らぬが瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたるいとをかし。時雨、霰は板屋、霜も板屋、庭。

日は

入日入りはてぬるやまぎ(のイ)はにひかりの猶とまりて赤う見ゆるに、うすきばみたる雲のたなびき(わたりイ)たるいとあはれなり。

月は

有明。東の山のはにほそうて出づるほどあはれなり。

星は

すばる、ひこぼし、明星、ゆふづゝ。よばひぼしをだになからましかばまして。

雲は

しろき、むらさき。黒き雲あはれなり(六字もなかしイ)。風吹くをりの天雲。明け離るゝほどの黒き雲のやうやう白うなりゆくもいとをかし。朝にさる色とかや文にも作りけり(二字たなりイ)。月のいとあかきおもてに薄き雲いとあはれなり。

さわがしきもの

はしり火。板屋のうへにて鳥のときのさばくふ。十八日清水に籠りあひたる。くらうなりてまだ火もともさぬほどに、ほかほかより人の來集まりたる。まして遠き所人の國などより家

のぬしののぼりたるいとさわがし。近きほどに火出で來ぬといふぞされど燃えはつかざりける。物見はてゝ車のかへりさわぐほど。

ないがしろなるもの

女官どもの髮あげたるすがた、からゑの革の帶のうしろ、ひじりのふるまひ。

ことばなめげなるもの

宮のめのさいもんよむ人、舟こぐものども、かんなりの陣の舍人、すまひ。

さかしきもの

今やうのみとせ子。ちごのいのりはらへなどする女ども、物の具こひ出でゝいのりの物どもつくるに、紙あまたおし重ねていと鈍き刀してきるさま、ひとへだに斷つべくも見えぬにさる物の具となりにければ、おのが口をさへ引きゆがめておし、切目おほかるものどもしてかけ、竹うち切りなどしていとかうがうしうしたてゝ、うちふるひ祈る事どもいとさかし。かつは何の宮のその殿の若君いみじうおはせしを、かいのごひたるやうにやめ奉りしかば、祿多く賜はりし事、その人々召したりけれど、しるしもなかりければ、今に女をなむ召す御德を見ることなど語るもをかし。げすの家の女あるじ、しれたるものそひしもをかし。まことにさかしき人をおしなどすべし。

上達部は

春宮大夫、左右の大將、權大納言、權中納言、宰相中將、三位中將、東宮權大夫、侍從宰相。

君達は

頭辨、頭中將、權中將、四位少將、藏人辨、藏人少納言、春宮のすけ、藏人のひやうゑの佐。

法師は

律師、內供。

女は

ないしのすけ、ないし。

みやづかへ所は

うち、后宮、その御腹の姫宮、一品の宮。齋院はつみふかけれどをかし。ましてこのごろはめでたし。春宮の御母女御。

身をかへたらむ人などはかくやあらむとみゆるもの

たゞの女房にて侍ふ人の御めのとになりたる。からぎぬも着ず、裳をだに用意なく、はくぎぬにて御まへに添ひふして御帳のうちを居所にして、女房どもを呼びつかひ、局に物いひやり、文とりつがせなどしてあるさまよ、言ひ盡くすべくだにあらず。雜色の藏人になりだるめでたし。こぞの霜月の臨時の祭にみこともたりし人とも見えず、君達に連れてありくはいづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。外よりなりたるなどは同じ事なれどさしもおぼえず。

雪たかう降りて今もなほふるに、五位も四位も色うるはしう若やかなるが、うへのきぬの色いと淸らにて革の帶のかたつきたるを、とのゐすがたにひきはこへて、紫の指貫も雪にはえ

て濃さまさりたるを着て、袙の紅ならずばおどろおどろしき山吹を出して、からかさをさし
たるに、風のいたく吹きて横ざまに雪を吹きかくれば、少しかたぶきて歩みくるふかぐつは
うくわなどのきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ。
ほそどのゝ遣戸いととう押しあけたれば、御湯殿のめだうよりおりてくる殿上人の萎えた
る直衣指貫のいたくほころびたれば、いろいろのきぬどものこぼれ出でたるを押し入れな
どして、北の陣のかたざまに歩み行くに、あきたる遣戸の前を過ぐとて纓をひきこして顔に
ふたぎて過ぎ徃ぬるもをかし。

　　たゞすぎにすぐるもの

帆あげたる舟、人のよはひ、春夏秋冬。

　　ことに人に忘られぬもの

人のめおやの老いたる。くゑにち。
五六月の夕かた青き草を細う麗しくきりて赤ぎぬ着たるこちごの、ちひさき笠を着て左右
にいと多くもちてゆくこそすゞろにをかしけれ。
賀茂へ詣づる道に、女どもの新しき折敷のやうなるものを笠にきて、いと多くたてりて歌を
うたひ起き伏すやうに見えて、唯何すともなくうしろざまに行くは、いかなるにかあらむ、
をかしと見る程に、杜鵑をいとなめくうたふ聲ぞ心憂き。「ほとゝぎすよ、おれよ、かやつよ、
おれなきてぞわれは田にたつ」とうたふに、聞きもはてず「いかなりし人か、いたくなきて

そ」といひけむ、なかだかわらはおひいかでおどす人と。

鶯に杜鵑は劣れるといふ人こそいとつらうにくけれ。鶯はよるなかぬいとわろし。すべてよるなくものはめでたし。ちごどもぞはめでたからぬ。

八月つごもりがたにうづまさ（廣隆寺）にまうづとて見れば、穂に出でたる田に人多くてさわぐ。稲刈るなりけり。「早苗とりしかいつのまに」とはまこと、げにさいつころ賀茂に詣づとて見しが、哀にもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手にいと赤き稲のもとは青きを刈りもちて、刀か何にかあらむ、もとを切るさまのやすげにめでたき事にいとせまほしく見ゆるや、いかでさすらむ。穂をうへにてなみをるいとをかしう見ゆ。いほりのさまことなる（イり）。

いみじくきたなきもの

なめくぢ、えせ板敷の帚、殿上のがふし。

せめておそろしきもの

よるなる神。近き隣に盗人の入りたる、我が住む所に入りたるは唯物もおぼえねば何とも知らず（つちかき火イ有）

たのもしきもの

心ちあしきころ僧あまたして修法したる。思ふ人の心ちあしきころ、まことにたのもしき人の言ひ慰めたのめたる。物おそろしき折の親どものかたはら。

いみじうしたてゝ聟取りたるに、いとほどなくすまぬ聟の、さるべき所などにて舅に逢ひた

るいとほしとや思ふらむ。ある人のいみじう時に逢ひたる人の聟になりて、一月もはかばかしうもこで止みにしかば、すべていみじう言ひ騒ぎ乳母などやうのものはまがまがしき事どもいふもあるに、そのかへる年の正月に藏人になりぬ。「あさましうかゝるなからひにいかでとこそ人は思ひためれ」など言ひあつかふは聞くらむかし。六月に人の八講志給ひし所に人々集りて聞くにこの藏人になれる聟のりようのうへの袴、蘇枋襲、黑半臂などいみじうあざやかにて、忘れにし人の車のとみのをに半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしを、いかに見るらむと車の人々も知りたる限りはいとほしがりしを、ことびとども、「つれなく居たりしものかな」など後にもいひき。猶男は物のいとほしさ人の思はむことは知らぬなめり。『世の中に猶いと心憂きものは人ににくまれむことこそあるべけれ。たれてふ物ぐるひか、我人にさおもはれむとは思はむ。されど志ぜんに宮づかへ所にも親はらからの中にても思はるゝおもはれぬがあるぞいとわびしきや。』よき人の御事は更なり、げすなどのほどにも、親などの悲しうする子は、目だち見たてられていたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるはことわり、いかゞ思はざらむと覺ゆ。ことなることなきは又これを悲しと思ふらむは、親なればぞかしとあはれなり。親にも君にもすべてうちかたらふ人にも、人に思はれむばかりめでたき事はあらじ。』男こそ猶いとありがたくあやしき心ち志たるものはあれ。いと淸げなる人をすてゝ、にくげなる人をもたるもあやしかし。おほやけ所に入りたちする男家の子などは、あるが中によからむをこそはえりて思ひ給はめ。及ぶまじからむきはをだにめでたしと

思はむを、死ぬばかりも思ひかゝれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などをもよしと聞くをこそはいかでとも思ふなれ。かつ女の目にもわろしと思ふを思ふはいかなる事にかあらむ。かたちいとよく心もをかしき人の、手もよう書き、歌をもあはれによみておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから寄りつかず、らうたげにうち泣きて居たるを、見捨てゝいきなどするは、あさましうおほやけばらだちてけんぞくの心ちも心憂く見ゆべけれど、身のうへにてはつゆ心ぐるしきを思ひ知らぬよ。』よろづの事よりも情ある事は、男はさらなり、女もこそめでたくおぼゆれ。なげの詞なれど、せちに心に深く入らねど、いとほしき事をいとほしとも、あはれなるをばけにいかに思ふらむなどいひけるを、傳へて聞きたるはさし向ひていふよりも嬉し。いかでこの人に思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそおぼゆれ。必思ふべき人とふべき人は、さるべきことなれば、取りわかれしもせず、さもあるまじき人のさしいらへをも、心易くえたるは嬉しきわざなり。いとやすき事なれど更にえあらぬ事ぞかし。大方心よき人のまことにかどなからぬは男も女もありがたき事なめり。又さる人も多かるべし。』人のうへいふを腹だつ人こそいとわりなけれ。いかでかはあらむ、我が身をさし置きてさばかりもどかしくいはまほしきものやはある。されどけしからぬやうにもあり、又おのづから聞きつけて恨みもぞする。あいなし。又思ひ放つまじきあたりはいとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや、さだになくばうち出で笑ひもえつべし。』人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れどもあなをかし珍しとこそおぼゆれ。繪などはあまたた

び見ればめでたゝずかし。近う立てる屏風の繪などはいとめでたけれども見もやられず。人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも一つよき所のまもらるゝよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

うれしきもの

まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見ていみじうゆかしうおぼゆる物語の二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり捨てたる文を見るに同じつゞきあまた見つけたる。いかならむと夢を見て恐ろしと胸つぶるゝに、ことにもあらず合せなどしたるいとうれし。よき人の御前に人々あまた侍ふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし世にいひける事にもあれ、語らせ給ふを、我に御覽じ合せての給はせ、いひきかせ給へるいと嬉し。遠き所は更なり、同じ都の内ながら、身にやんごとなく思ふ人の惱むを聞きていかにいかにと覺束なく歎くに、をこたりたるせうそこ得たるもうれし。思ふ人の、人にも譽められ、やんごとなき人などの、口をしからぬものにおぼしのたまふものゝ折、もしは人と言ひかはしたる歌の聞えてはめられ、うちぎゝなどに譽めらるゝ、みづからのうへにはまだ知らぬ事なれど猶思ひやらるゝよ。いたううち解けたらぬ人のいひたるふるき事の知らぬを聞き出でたるもうれし。後に物のなかなどにて見つけたるはをかしう「唯これにこそありけれ」とかのいひたりし人ぞをかしき。みちのくに紙、白き色紙、たゞのも白う清きは得たるもうれし。恥しき人の歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる我ながらうれし。常には、おぼゆる事も又人の問ふには清く忘れ

て止みぬる折ぞ多かる。とみに物もとむるに見出でたる。唯今見るべき文などをもとめ失ひて、よろづの物をかへすがへす見たるに捜し出でたるいとうれし。物あはせ何くれといどむことに勝ちたるいかでか嬉しからざらむ。又いみじう我はと思ひてしたりがほなる人はかり得たる、女どちなどよりも男は、まさりてうれし。これがたふは必せむずらむとつねに心づかひせらるゝもをかしきに、いとつれなくなにとも思ひたらぬやうにてたゆめ過すもをかし。にくきものゝあしきめ見るも罪は得らむと思ひながらうれし。挿櫛むすばせてをかしげなるも又うれし。思ふ人は我が身よりもまさりてうれし。御前に人々所もなく居たるに、今のぼりたれば少し遠き柱もとなどに居たるを、御覧じつけて、「こちこ」と仰せられたれば、道あけて近く召し入れたるこそ嬉しけれ。御前に人々あまた物仰せらるゝついでなどにも、世の中のはらだゝしうむつかしう片時あるべき心ちもせで、いづちもいづちもいきうせなばやと思ふに、たゞの紙のいと白う清らなる、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、かくてもしばしありぬべかりけりとなむ覺え侍る。又高麗縁の疊の筵靑うこまかに、へりの紋あざやかに黑うしろう見えたる、引き廣げて見れば、「何か猶さらにこの世はえおもひはなつまじと、命さへ惜しくなむなる」と申せば「いみじくはかなき事も慰むなるかな。姥捨山の月はいかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。さぶらふ人も「いみじくやすき息災のいのりかな」といふ。さて後にほど經て、すゞろなる事を思ひて、里にあるころめでたき紙を二十つゝみにつゝみて賜はせたり。仰せ事には「とく參れ」などのたまはせて「これは聞しめし置きた

る事ありしかばなむ、わろかめれば壽命經もえ書くまじげにこそ」と仰せられたるいとをかし。むげに思ひ忘れたりつることをおぼしおかせ給へりけるは猶たゞ人にてだにをかし。ましてをろかならぬ事にぞあるや。心も亂れて啓すべきかたもなければ、たゞ、

「かけまくもかしこきかみのしるしには鶴のよはひになりぬべきかな。

あまりにやと啓せさせ給へ」とてまゐらせつ。大盤所の雜仕ぞ御使にはきたる。靑きひとへなどぞ取らせて。まことにこの紙を草紙に作りてもて騷ぐに、むつかしき事も紛るゝ心ちしてをかしう心のうちもおぼゆ。二日ばかりありて赤ぎぬ着たる男の疊をもて來て「これ」といふ。「あれは誰ぞ。あらはなり」など物はしたなういへばさし置きていぬ。「いづこよりぞ」と問はすれば「まかりにけり」とて取り入れたれば殊更に御座といふ疊のさまにて高麗などいと淸らなり。心のうちにはさにやあらむと思へど、猶おぼつかなきに人ども出しもとめさすれどうせにけり。あやしがり笑へど使のなければいふかひなし。所たがへなどならばおのづからも又いひに來なむ、宮のほとりにあないしに參らせまほしけれど、猶たれすゞろにさるわざはせむ。仰せ事なめりといみじうをかし。二日ばかり音もせねばうたがひもなく、左京の君の許に「かゝる事なむある。さることやけしき見給ひし。忍びて有樣のたまひてさる事見えずはかく申したりともな漏し給ひそ」と言ひ遣りたるに「いみじうかくさせ給ひし事なり。ゆめゆめまろが聞えたるとなく、後にも」とあれば、さればよと思ひしもしるくをかしくて、文かきて又みそかに御前の高欄におかせしものは惑ひしほどに、やがてかきおとして

みはしのもとにおちにけり。

關白殿(道隆)二月とを日(正暦五年)のほどに、法興院の釋泉寺といふ御堂にて、一切經供養せさせたまふ。女院、宮の御まへもおはしますべければ、二月朔日のほどに二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりにしかば、何事も見入れず。つとめて日のうらゝかにさし出でたるほどに起きたれば、いと白うあたらしうをかしげに作りたるになむ、みすより始めて昨日かけたるなめり、御しつらひ獅子狛犬などいつのほどにや入り居けむとぞをかしき。櫻の一丈ばかりにていみじう咲きたるやうにてみはしのもとにあれば、いと疾う咲きたるかな、梅こそ唯今盛なめれと見ゆるは作りたるなめり。すべて花のにほひなど咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけむ。雨降らば萎みなむかしと見るぞ口惜しき。小家などいふ物の多かりける所を今作らせ給へれば木だちなどの見所あるはいまだなし。唯宮のさまぞけぢかくをかしげなる。殿渡らせ給へり。青鈍の堅紋の御指貫、櫻の直衣に紅の御ぞ三つばかり唯直衣にかさねてぞ奉りたる。御まへより始めて紅梅の濃きうすき織物、かた紋、うき紋などあるかぎり着たれば、唯ひかり滿ちてからぎぬは萠黄、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給ひて物など聞えさせ給ふ。御いらへのあらまほしきを里人に僅にのぞかせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して宮に「何事をおぼしめすらむ、こゝらめでたき人々をなべすゑて御覽ずるこそいと羨しけれ。一人わろき人なしや。これ家々のむすめぞかし。あはれなり。よくかへりみてこそさぶらはせ給はめ。さてもこの宮の御心をばいかに知り奉りて集り參りたまへるぞ。いかにいやしく

物惜みせさせ給ふ宮とて、「我は、生れさせ給ひしより、いみじう仕うまつれど、まだおろしの御ぞ一つ賜はぬぞ。何かしりうごとには聞えむ」などのたまふがをかしきに皆人々笑ひぬ。「まことぞをこなりとてかく笑ひいまするが恥かし」などのたまはする程に内より御使にて式部の丞なにがしまゐれり。御文は大納言殿取り給ひて殿に奉らせ給へば、ひき解きて「いとゆかしきふみかな。ゆるされ侍らばあけて見侍らむ」とのたまはすればあやしうとおぼいためり。「忝くもあり」と奉らせ給へば、取らせ給ひてもひろげさせ給ふやうにもあらずもてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき。すみのまより女房褥さし出でゝ、三四人御几帳のもとに居たり。「あなたにまかりて祿の事物し侍らむ」とてたゝせ給ひぬる後に御文御覽ず。御返しは、紅梅の紙に書かせ給ふが御ぞの同じ色ににはひたる、猶かうしも推し量り參らする人はなくやあらむとぞ口をしき。今日は殊更にとて殿の御方より祿は出させ給ふ。女のさうぞくに紅梅の細ながそへたり。肴などあれば醉はさまほしけれど「今日はいみじきことの行幸に。あが君許させ給へ」と大納言殿にも申して立ちぬ。君達などいみじうけさうし給ひて、紅梅の御ぞも劣らじと着給へるに、三の御前は御匣殿なり、中の姫君よりも大きに見え給うてうへなど聞えむにぞよかめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて新しく參りたる人人には見え給はねばいぶせき心ちす。さし集ひてかの日のさうぞく扇などの事をいひ合するもあり。又挑みかはして「まろは何か唯あらむにまかせてを」などいひて例の君などにくまる。夜さりまかづる人も多かり。かゝる事にまかづればえとゞめさせ給はず。上日々に渡

りよるもおはします。君達などおはすれば御前人すくなく侍はねばいとよし。内の御使日々に參る。御前の櫻色はまさらで日などにあたりて凋みわるうなるだにわびしきに、雨のよる降りたるつとめていみじうむとくなり。いと疾く起きて「泣きて別れむ顔に心おとりこそすれ」といふに聞かせ給ひて「げに雨のけはひしつるぞかし。いかならむ」とて驚かせ給ふに、殿の御方より侍の者どもげすなど來て、あまた花の本に唯よりによりて、引き倒し取りてみそかにいきて、「まだ暗からむに取れとこそ仰せられつれ。明け過ぎにけり。ふびんなるわざかな。とくとく」と倒し取るに、いとをかしくていはゞいはなむと、兼澄が事を思ひたるにやともよき人ならばいはまほしけれど「かの花盜む人はたれぞ。あしかめり」といへば、笑ひていとゞ逃げて引きもていぬ。猶殿の御心はをかしうおはすかし。くきどもにぬれまろかれつきていかに見るかひなからましと見て入りぬ。かもんづかさ參りて御格子まゐり、とのもりの女官御きよめまゐりはてゝ起きさせ給へるに花のなければ「あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。「あかつき盜人ありといふなりつるは、猶枝などを少し折るにやとこそ聞きつれ。たがしつるぞ。見つや」と仰せらる。「さも侍らず。いまだ暗くてよくも見侍らざりつるを、しろみたるものゝ侍れば、花を折るにやとうしろめたさに申し侍りつる」と申す。「さりとも、かくはいかで取らむ。殿の隱させ給へるなめり」とて笑はせ給へば「いでよも侍らじ。春風のして侍りなむ」と啓するを「かく言はむとて隱すなりけり。ぬすみにはあらでふりにこそふるなりつれ」と仰せらるゝも珍しき事ならねど、いみじうめでたき。殿おはし

ませば寐くたれの朝顔も時ならずや御覧ぜむと引き入らる。おはしますまゝに「かの花うせにけるは。いかにかくはぬすませしぞ。いぎたなかりける女房達かな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば「されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれ」と忍びやかにいふを、いと疾く聞きつけさせ給ひて「さ思ひつる事ぞ。世にこと人出でゝ見つけじ。宰相とそことの程ならむと推し量りつ」とていみじう笑はせ給ふ。「さりげなるものを、少納言は春風におほせける」と宮の御前にうちゑませ給へるめでたし。「そらごとをおほせ侍るなり。今は山田もつくるらむ」とうちずんぜさせ給へるもいとなまめきをかし。「さてもねたく見つけられにけるかな。さばかり誡めつるものを、人の所にかゝるしれものゝあるこそ」とのたまはす。「春風はそらにいとをかしうもいふかな」とずんぜさせ給ふ。「たゞことにはうるさく思ひよりて侍りつかし。今朝のさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふを、小若君「されどそれはいと疾く見て、雨にぬれたりなどおもてぶせなりといひ侍りつ」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。さて八日九日の程にまかづるを「今少し近うなして」など仰せらるれど出でぬ。いみじう常よりも長閑に照りたる晝つかた、「花のこゝろひらけたりや、いかゞいふ」とのたまはせたれば「秋はまだしく侍れど、世にこのたびなむのぼる心ちし侍る」など聞えさせつ。出でさせ給ひし夜車の次第もなくまづまづとのり騒ぐがにくければ、さるべき人三人と猶この車に乗るさまのいとさわがしく、祭のかへさなどのやうに倒れぬべく惑ふいと見ぐるし。「たゞさばれ、乗るべき車なくてえ參らずはおのづから聞しめしつけて賜はせてむ」

など笑ひ合ひて立てる前よりおしこりて惑ひ乘り果てヽ出でヽ「かうか」といふに、「まだこヽに」といらふれば、宮司寄り來て「誰々かおはする」と問ひ聞きて「いとあやしかりける事かな。今は皆のりぬらむとこそ思ひつれ。こはなどてかくは後れさせ給へる。今は得選を乘せむと志つるに、めづらかなるや」など驚きて寄せさすれば、「さばまづ、その御志ありつらむ人を乘せ給ひて、次にも」といふ聲聞きつけて「けしからず腹ぎたなくおはしけり」などいへば乘りぬ。その次には誠にみづしが車にあれば、火もいと暗きを笑ひて、二條の宮に參りつきたり。みこしは疾く入らせ給ひて皆志つらひ居させ給ひけり。「こヽに呼べ」と仰せられければ、右京小左近などいふ若き人々、參る人ごとに見れどなかりけり。おるヽに隨ひ四人づヽ御前に參り集ひて侍ふに「いかなるぞ」と仰せられけるも知らず、ある限りおりはてヽぞ、辛うじて見つけられて「かばかり仰せらるヽには、などかくおそく」とて率ゐて參るに、見ればいつのまにかうは年ごろのすまひのさまにおはしましつきたるにかとをかし。「いかなればかう何かと尋ぬばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるヽに、とかくも申さねば、諸共に乘りたる人いとわりなし。「さいはての車に侍らむ人はいかでか疾くは參り侍らむ。これもはとほとえ乘るまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりてゆづり侍りつるなり。暗う侍りつる事こそわびしう侍りつれ」と笑ふ笑ふ啓するに、「行事するものヽいとあやしきなり。又などかは、心知らざらむ者こそつヽまめ。右衛門などはいへかし」など仰せらるる。「されどいかでか走りさきだち侍らむ」などいふも、かたへの人にくしと聞くらむ」と聞ゆ。「さまあしうて

かく乘りたらむもかしこかるべき事かは。定めたらむさまのやんごとなからむこそよからめ」とものしげにおぼしめしたり。「おり侍るほどの待ち遠に苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。

御經のことに明日渡らせおはしまさむとて今宵參りたり。南の院（道隆邸）の北おもてにさしのぞきたればたかつきどもに火を燈して二人三人四人さるべきどち、屏風引き隔てつるもあり。几帳中にへだてたるもあり。又さらでも集り居てきぬどもとぢ重ね、裳の腰さしけさうずるさまは更にもいはず、髮などいふものは明日より後はありがたげにぞ見ゆる。「寅の時になむ渡らせ給へるなり。（元日）などか今まで參り給はざりつる。扇もたせて尋ね聞ゆる人ありつ」など告ぐ。まて、まことに寅の時かとさうぞきたちてあるに、明け過ぎ日もさし出でぬ。「西の對の唐廂になむさし寄せて乘るべき」とてあるかぎり渡殿へ行く程に、まだうひうひしきほどなる今參りどもはいとつゝましげなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこに坐しまして、まづ女房車にのせさせ給ふを御覽ずとて、みすのうちに宮、淑景舍、三四の君（后宮御姉妹）、殿のうへ、その御弟三所立ちなみておはします。車の左右に、大納言、三位中將二所してすだれうちあげ、下簾ひきあげてのせ給ふ。皆うち群れてだにあらば隱れ所やあらむ。四人づゝ書き立てに隨ひてそれそれと呼び立てゝのせられ奉り歩み行く心ち、いみじうまことにあさましうけ證なりともよのつねなり。みすのうちにそこらの御目どものなかに、宮の御前の見苦しと御覽ぜむは更にわびしき事かぎりなし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髮などもあ

がりやすらむと覺ゆ。からうじて過ぎたれば、車のもとにいみじう恥かしげに、淸げなる御樣どもしてうち笑みて見給ふもうつゝならず。されど倒れずそこまではい着きぬるこそ。かしこき顏もなきかと覺ゆれど、皆乘りはてぬれば、引き出でゝ二條の大路にしぢ立てゝ物見車のやうにて立ち並べたるいとをかし。人もさ見るらむかしと心ときめきせらる。四位五位六位などいみじう多う出で入り、車のもとに來てつくろひ物いひなどす。まづ院（一條院御母東三條院）の御迎へに殿を始め奉りて殿上と地下と皆參りぬ。それ渡らせ給ひて後、宮は出でさせ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼車、一の御車は唐の車なり。それに續きて尼の車、しり口よりすゐさうのずゞ、薄墨の袈裟ぎぬなどいみじくて、簾垂はあげず、下簾も薄色の裾少し濃き。次にたゞの女房の十、櫻の唐ぎぬ、薄色の裳、紅をおしわたし、かとりのうはぎどもいみじうなまめかし。日はいとうらゝかなれど空は淺緑にかすみわたるに、女房のさうぞくの匂ひあひていみじき織物のいろいろの唐衣などよりもなまめかしうをかしき事限りなし。關白殿その御次の殿ばらおはする限り、もてかしづき奉らせ給ふいみじうめでたし。これら見奉り騷ぐこの車どもの二十立ち並べたるも、又をかしと見ゆらむかし。いつしか出でさせ給はゞなど待ち聞えさするに、いかならむと心もとなく思ふに、からうじて采女八人馬にのせて引き出づめり。靑末濃の裳、くたいひれなどの風に吹きやられたるいとをかし。豐前といふ采女はくすししげまさが知る人なり。えび染の織物の指貫を着たれば「しげまさは色許されにけり」と山の井の大

納言は笑ひ給ひて、皆乘り續きて立てるに「今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたし」と見え奉りつる御有樣にこれは比ぶべからざりけり。朝日はなばなとさしあがる程に、木の葉のいとはなやかにかゞやきて、みこしの帷子の色つやなどさへぞいみじき。御綱はりて出させ給ふ。御輿のかたびらのうちゆるぎたるほどまことにかしらの毛など人のいふは更にそらごとならず。さて後に髮あしからむ人もかこちつべし。あさましういつくしう猶いかでかゝる御前に馴れ仕うまつるらむと、我が身もかしこうおぼゆる。御輿過ぎさせ給ふほど車のしぢども人だまひにかきおろしたりつる、又牛どもかけてみこしのしりにつゞきたる心ちのめでたう興あるありさまいふ方なし。おはしましつきたれば大門のもとに高麗唐土のがくして、獅子狛犬をどり舞ひ、さうの音鼓の聲に物も覺えず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらむと、空に響きのぼるやうにおぼゆ。内に入りぬればいろいろの錦のあげはりに、みすいと靑くてかけ渡しへい幔など引きたるほど、なべてたゞにこの世と覺えず。御さじきにさし寄せたれば又この殿ばら立ち給ひて「疾くおりよ」とのたまふ。乘りつる所だにありつるを今少しあかうけ證なるに、大納言殿いとものものしく淸げにて、御したがさねのしりいと長く所せげにて、すだれうちあげて「はや」とのたまふ。つくろひそへたる髮もからぎぬの中にてふくだみ、あやしうなりたらむ色の黑さ赤ささへ見わかれぬべき程なるが、いとわびしければふともえおりず。「まづしりなるこそは」などいふほどもそれも同じ心にや、「退かせ給へ。かたじけなし」などいふ。「恥ぢ給ふかな」と笑ひて立ちかへりからうじておりぬれば、

寄りおはして「むねたかなどに見せで、かくしておろせ」と宮の仰せらるればきたるに「思ひくまなき」とて引きおろしてゐて參り給ふ。さ聞えさせ給ひつらむと思ふもかたじけなし。參りたれば始おりける人どもの物い見えぬべきはしに、八人ばかり出で居にけり。一尺と二尺ばかりの高さのなげしのうへにおはします。こゝに立ち隱して「ゐて參りたり」[illegible]申し給へば「いづら」とて几帳のこなたに出でさせ給へり。まだからの御ぞも奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御ぞよろしからむや。中に唐綾の柳の御ぞ、えび染のいつへの御ぞに赤色の唐の御ぞ、地摺の唐のうすものに象眼重ねたる御裳など奉りたり。織物の色更になべて似るべきやうなし。「我をばいかゞ見る」と仰せらる。いみじうなむ候ひつるなども、ことに出でゝはよのつねにのみこそ。「久しうやありつる。それは殿の大夫長道の院の御供に來て人に見えぬる、同じ下襲ながら宮の御供にあらむ、わろしと人思ひなむとて殊に下襲ぬはせ給ひける程に遲きなりけり。いとすき給へり」などゝうち笑はせ給へる。いとあきらかに晴れたる所は今少しけざやかにめでたう、御額わげさせ給へるさいじに御わけめの御ぐしの聊よりて亥るく見えさせ給ふなどさへぞ聞えむかたなき。三尺の御几帳一よろひをさしちがへてこなたの隔てにはして、そのうしろには疊一ひらをながざまにへりをしてなげしの上に敷きて、中納言の君といふは殿の御をぢの兵衞督たゞきよと聞えけるが御むすめ。宰相の君とは富小路左大臣の御孫、それ二人ぞうへに居て見え給ふ。御覽じわたして宰相はあなたに居て「うへ人どもの居たる所いきて見よ」と仰せらるゝに、心得て「こゝに三人いとよく見

侍りぬべし」と申せば、「さば」とて召し上げさせ給へば、しもに居たる人々「殿上許さるゝうどねりなめり」と笑はせむと思へるか」といへば、「うまさへの程ぞ」などいへば、そこに入り居て見るはいとおもだゝし。かゝる事などをみづからいふはふきがたりにもあり、又君の御ためにも輕々しう、かばかりの人をさへ覺しけむなど、おのづから物しり世の中もどきなどする人は、あいなく畏き御事にかゝりてかたじけなけれど、あな忝き事などは又いかゞは。誠に身の程過ぎたる事もありぬべし。院の御さ敷所々のさ敷ども見渡したるめでたし。殿まづ院の御さ敷に參り給ひてしばしありてこゝに參り給へり。大納言二所、三位中將は陣近う參りけるまゝにて、調度を負ひていとつきづきしうをかしうておはす。殿上人、四位五位こちたううち連れて御供に侍ひなみ居たり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、女房あるかぎり裳、からぎぬ、御匣殿まで着給へり。殿のうへ（高内侍）は裳のうへに小袿をぞ着給へる。「繪に書きたるやうなる御さまどもかな。今いらへけふはと（本なし）申し給ひそ。三四の君の御裳ぬがせ給へ。このなかの主君にはおまへこそおはしませ。御さ敷の前に陣をすゑさせ給へるは、おぼろげのことか」とてうち泣かせ給ふ。げにと見る人も涙ぐましきに、赤色櫻の五重のからぎぬを着たるを御覽じて「法服ひとくだり足らざりつるを俄に惑ひしつるに、これをこそかり申すべかりけれ。さらばもし又、さやうの物を切りしらめたるに」とのたまはするに又笑ひぬ。大納言殿（伊周）少ししぞき居給へるが聞き給ひて「淸僧都のにやあらむ」との給ふ。一言としてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君赤色のうすものゝ御ころも紫の袈裟、いと薄き色の御

ぞども指貫着たまひてぼさちの御やうにて、女房にまじりありき給ふもいとをかし。僧綱の中に威儀具足してもおはしまさで、見ぐるしう女房の中になど笑ふ。父の大納言殿御まへより松君（雅道）ゐて奉る。えび染の織物の直衣、濃き綾のうちたる紅梅の織物など着給へり。例の四位五位いと多かり。御さ敷に女房の中に入れ奉る。何事のあやまりにか、泣きのゝしり給ふさへいとはえばえし。事始りて一切經をはすの花のあかきに、ひと花づゝに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位何くれまでもて渡る（三字つゞきたなし）いみじうたふとし。大行道、導師參り、回向しばし待ちて舞などする。日ぐらし見るに目もたゆく苦しう。うちの御使に五位の藏人參りたり。御さ敷のまへにあぐら立てゝ居たるなどげにぞ猶めでたき。夜さりつかた式部の丞則理參りたり。やがて夜さり入らせ給ふべし。「御供に侍へ」と宣旨侍りつ」とて歸りも參らず。宮は猶「歸りて後に」との給はすれども、又藏人の辨參りて「殿にも御消そこあれば、唯仰せのまゝ」とて入らせ給ひなどす。院の御さ敷よりちかの鹽竈などやうの御消そこをかしき物なども參り通ひたるなどもめでたし。事はてゝ院還らせ給ふ。院司上達部などこのたびはかたへぞ仕うまつり給ひける。宮は內へ入らせ給ひぬるも知らず、女房のずさどもは二條の宮にぞ坐しまさむとてそこに皆いき居て、待てどまてど見えぬ程に夜いたう更けぬ。內には殿居物もて來たらむと待つにきよく見えず。あざやかなるきぬの身にもつかぬを着て、寒きまゝににくみ腹立てどかひなし。つとめてきたるを「いかにかく心なきぞ」などいへば、となふるごともさいはれたり。又の日雨降りたるを殿は「これになむ、我が宿世は見え侍りぬる。

いかゞ御覽ずる」と聞えさせ給ふ御心おちゐることわりなり。

たふときもの

九條錫杖、念佛の回向。

うたは

杉たてる門。神樂歌もをかし。今様はながくてくせづきたる。ふぞくよくうたひたる。

指貫は

紫の濃き、萠黄、夏は二藍。いとあつきころ夏蟲の色したるもすゞしげなり。

狩衣は

香染のうすき。白きふくさの赤色。松の葉いろしたる。青葉、さくら、やなぎ、又あをき、ふぢ。

男は何色のきぬも。

單衣は

しろき。緋のさう束の紅のひとへ。袙などかりそめに着たるはよし。されど猶色きばみたる單衣など着たるはいと心づきなし。練色のきぬも着たれど、猶單衣は白うてぞ男も女もよろづの事まさりてこそ。

わろきものは

詞の文字怪しくつかひたるこそあれ、唯文字一つに怪しくも、あてにもいやしくもなるはいかなるにかあらむ。さるはかう思ふ人萬の事に勝れてもえあらじかし。いづれを善き惡しき

とは知るにかはらむ。さりとも人を知らじ。唯さうち覺ゆるもいふめり。難義の事をいひてその事させむとすといはむといふを、と文字をうしなひて「唯言はむずる、里へ出でむずる」などいへば、やがていとわろし。まして文を書きてはいふべきにもあらず。物語こそあしう書きなどすれば、いひかひなくつくり人さへいとほしけれ。「なほす、定本のまゝ」など書きつけたるいと口をし。「ひでつくるまに」などいふ人もありき。もとむといふ事を見むと皆いふめり。いと怪しき事を男などはわざとつくろはで殊更にいふはあしからず。我が詞にもてつけていふが心おとりすることなり。

下襲は

冬は躑躅、掻練襲、蘇枋襲。夏は二藍、えびら襲。

扇の骨は

青色はあかき、むらさきはみどり。

檜扇は

無紋、から繪。

神は

松の尾。八幡この國のみかどにておはしましけむこそいとめでたけれ。みゆきなどになぎの花の御輿に奉るなどいとめでたし。大原野。賀茂は更なり。稲荷。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。佐保殿(冬嗣邸)などいふ名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを「こゝは何する所ぞ」

と問ひしかば、「神輿やどり」といひしもめでたし。いがきに榊などの多くかゝりて、紅葉のいろいろありし「秋にはあへず」と貫之が歌おもひ出でられて、つくづくと久しうたゝれたりし。みこもりのかみことをかし。

崎は

唐崎、伊加が崎、三保が崎。

屋は

まろ屋、四阿屋。

時奏するいみじうをかし。いみじう寒きに、よなかばかりなどに、ではではとてはめき、沓すり來て弦うちなどして「なにがしのなにがし、時丑三つ子四つ」などあてはかなる聲にいひて、時の杭さす音などいみじうをかし。子九つ丑八つなどこそさとびたる人はいへ。すべて何も何も四つのみぞ杭はさしける。

日のうらうらとある晝つかた、いたう夜更けて、子の時など思ひ參らするほどに、をのこども召したるこそいみじうをかしけれ。夜中ばかりに又御笛の聞えたるいみじうめでたし。

成信の中將は入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもいとをかしうおはす。伊豫守兼輔が女の忘られて伊豫へ親のくだりしほど、いかに哀なりけむとこそ覺えしか。曉にいくとて、今宵おはしまして、有明の月に歸り給ひけむ直衣姿などこそ。そのかみ常に居て物かたりし人のうへなどわろきはわろしなどのたまひしに。

物忌などくすしうするものゝ、名をさうにてもたる人のあるが、ことびとの子になりて平などいへど、唯もとの志やうを若き人々ことぐさにて笑ふ有様も異なる事なし。兵部とてをかしきかたなどもかたきが、さすがに人などにさしまじり心などのあるは御前わたりに見苦しなど仰せらるれど腹ぎたなく知り告ぐる人もなし。一條院つくられたる一間の所には、つらき人をば更に寄せず、東のみかどにつと向ひてをかしき小廂に、式部のおとゞ諸共に夜も晝もあれば、上も常に物御覽じに出でさせ給ふ。「今宵は皆內に寐む」とて南の廂に二人臥しぬる後に、いみじう叩く人のあるに、「うるさし」などいひ合せて寐たるやうにてあれば、猶いみじうかしがましう呼ぶを「おれおこせ、空ねならむ」と仰せられければ、この兵部來て「起せどねたるさまなれば更に起き給はざりけり」と言ひにいきたるがやがて居つきて物いふなり。暫しかと思ふに夜いたう更けぬ。「權中將にこそあなれ。こは何事をかうはいふ」とて唯みそかに笑ふもいかでか知らむ。曉までいひ明して歸りぬ。「この君いとゆゝしかりけり。更に坐せむに物いはじ。何事をさは言ひあかすぞ」など笑ふに、遣戶をあけて女は入りぬ。つとめて例の廂に物いふを聞けば「雨のいみじう降る日きたる人なむいと哀なる。日頃おぼつかなうつらき事ありとも、さてぬれて來らば憂き事も皆忘れぬべし」とは、などていふにかあらむを。よべ昨日の夜もそれかあなたの夜もすべてこの頃はうちしきり見ゆる人の、今宵もいみじからむ雨に障らで來たらむは、一夜も隔てじと思ふなめりとあはれなるべし。さて日頃も見えずおぼつかなくて過ぐさむ人の、かゝる折にしも來むをば、更に又志あるには得

せじとこそ思へ。人の心々なればにやあらむ、物見知りたる女の心ありと見ゆるなどをば語らひて數多いく所もあり元よりのよすがなどもあれば、繁うしも得こぬを、猶さるいみじかりし折に來りし事など人にも語りつがせ、身をほめられむと思ふ人のしわざにや。それもむげに志なからむには何しにかはさもつくりごとしても見えむとも思はむ。されど雨の降る時は唯むつかしう、今朝まではれればれしかりつる空とも覺えずにくゝて、いみじきほそ殿のめでたき所とも覺えず。ましていとさらぬ家などは疾く降り止みねかしとこそ覺ゆれ。月のあかきに來らむ人はしも、十日廿日一月もしは一年にても、まして七八年になりても思ひ出でたらむはいみじうをかしと覺えて、え逢ふまじうわりなき所、人目つゝむべきやうありとも必立ちながらも物いひて返し又とまるべからむをば留めなどしつべし。『月の明き見るばかり遠く物思ひやられ、過ぎにし事憂かりしも嬉しかりしもをかしと覺えしも、唯今の樣に覺ゆる折やはある。こまのゝ物語は何ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき見所多からねど、月に昔を思ひ出でゝ、蟲ばみたるかはほりとり出でゝ、「元見し駒に」といひて立てるかど哀なり。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとにくゝぞある。やんごとなき事、おもしろかるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに降れば言ふかひなく口惜しきに、何かその濡れてかこちたらむがめでたからむ。實に交野少將もどきたる落窪の少將などはをかし。それもよべおとゝひの夜もありしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞにくく、きたなかりけむ。さらでは何か、風などの吹く荒々しき夜きたるはたのもしくて

をかしうもありなむ。雪こそいとめでたけれ。「忘れめや」など獨ごちて忍びたることは更なり。いとさわらぬ所も直衣などは更にもいはず、狩衣、うへのきぬ、藏人の靑いろなどのいとひや〻かにぬれたらむは、いみじうをかしかるべし。ろうさうなりとも雪にだにぬれなばにくかるまじ。昔の藏人はよるなど人の許などに、唯靑色を着て雨にぬれてもしぼりなどしけるが、今は晝だに着ざめり。唯ろうさうをのみこそうちかづきためれ。衞府などの着たるはましていとをかしかりしものを、かく聞きて雨にありかぬ人やはあらむずらむ。月のいとあかき夜、紅の紙のいみじう赤きに「唯あらず」とも書きたるを廂にさし入れたるを、月にあて〻見しこそをかしかりしか。雨降らむ折はさはありなむや。

常に文おこする人の「何かは、今はいふかひなし。今は」など言ひて又の日音もせねばさすがにあけたてば文の見えぬこそさうざうしけれと思ひて「さてもきはきはしかりける心かな」などいひて暮しつ。又の日雨いたう降る。晝まで音もせねば「むげに思ひ絶えにけり」などいひて端の方に居たる夕暮にかささしたる童の持てきたるを、常よりも疾くあけて見れば「水ます雨の」とある、いと多く讀み出しつる歌どもよりはをかし。唯あしたはさしもあらず、さえつる空のいと暗うかき曇りて雪のかきくらし降るにいと心細く見出す程もなく白く積りて猶いみじう降るに、隨身だちて細やかに美々しきをのこのからかささして、そばの方なる家の戸より入りて文をさし入れたるこそをかしけれ。いと白きみちのくに紙、白き色紙の結べたる上にひき渡しける墨のふと氷りにければ、裾薄になりたるを、あけたればいと細く卷

きて結びたる卷目はこまごまと窪みたるに、墨のいと黑う薄く、くだりせばに裏うへ書きみだりたるを、うち返し久しう見るこそ何事ならむとよそにて見やりたるもをかしけれ。まいてうちほゝゑむ所はいとゆかしけれど、遠う居たるは黑き文字などばかりぞ、さなめりと覺ゆるかし。額髮ながやかにおもやうよき人の、暗き程に文を得て、火ともす程も心もとなきにや、火桶の火をはさみわげて、たどたどしげに見居たるこそをかしけれ。

きらきらしきもの

大將の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人式部丞、白馬の日大路ねりたる。御齋會左右衞門佐摺衣やりたる。季の御讀經。熾盛光の御修法。神のいたく鳴るをりに神鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右の大將、中少將などのみ格子のつらに侍ひ給ふいとをかしげなり。はてぬるをり大將の仰せて「のぼりおり」とのたまふらむ。坤元錄の御屏風こそをかしう覺ゆる名なれ。漢書の御屏風はをゝしくぞ聞えたる。月次の御屏風もをかし。

方違などして夜ふかくかへる、寒きこといとわりなく、頤なども皆おちぬべきを、辛うじてきつきて火桶引き寄せたるに、火の多きにてつゆ黑みたる所なくめでたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそいみじう嬉しけれ。物などいひて火の消ゆらむも知らず居たるに、こと人の來て炭入れておこすこそいとにくけれ。されどめぐりに置きて中に火をあらせたるはよし。皆火を外ざまに搔き遣りて炭を重ね置きたるいたゞきに、火ども置きたるがいとむづかし。

雪いと高く降りたるを例ならず御格子まゐらせて、す櫃に火起して物語などして集まり侍ふに「少納言よ香爐峰の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷き上げたれば、笑はせたまふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。「なほこの宮の人にはさるべきなめり」といふ。

陰陽師の許なる童べこそいみじく物は知りたれ。はらへなどしに出でたれば、祭文など讀む事、人はなほこそ聞け。そと立ちはしりて「白き水いかけさせよ」ともいはぬに、しありくさまの例知り、聊しうに物いはせぬこそ羨しけれ。さらむ人をがなつかはむとこそおぼゆれ。

三月ばかり物忌しにとてかりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかばかしからぬ中に、柳といひて例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えてにくげなるを「あらぬものなめり」といへば「かゝるもあり」などいふに、

「さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふするやどかな」

とこそ見えしか。そのころ又同じ物忌しに、さやうの所に出でたるに二日といふ晝つかた、いとゞつれづれまさりて、唯今も參りぬべき心ちする程にしも仰せ事あれば、いとうれしくて見る。淺緑の紙に、宰相の君いとをかしく書き給へり、

「いかにして過ぎにしかたを過ぐしけむくらしわづらふ昨日けふかな

となむ」、わたくしには「今日しも千年の心ちするを曉だに疾く」とあり。この君の給はむだにをかしかるべきを、まして仰事のさまには愚ならぬ心ちすれど啓せむ事とは覺えぬこそ。

「雲のうへにくらしかねけるはるの日を所からともながめつるかな」、わたくしには「今宵のほども少將にやなり侍らむずらむ」とて、曉に參りたれば「昨日の返し暮しかねけるこそいとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるゝ、いとわびしう誠にさることも。清水に籠りたるころ蜩のいみじう鳴くを、あはれと聞くにわざと御使してのたまはせたりし、

「山ちかき入あひの鐘のこゑごとに戀ふるこゝろのかずや知るらむ。ものをこよなのながゐや」と書かせ給へる。紙などのなめげならぬも、取り忘れたるたびにて、紫なるはちすの花びらに書きてまゐらする。

十二月廿四日宮の御佛名のそやの御導師聞きて出づる人は、夜中も過ぎぬらむかし。里へも出で、もしは忍びたる所へも夜の程出づるにもあれ、あひ乘りたる道の程こそをかしけれ。日ごろ降りつる雪の今朝はやみて風などのいたう吹きつれば垂氷のいみじうしだり土などこそむらむら黑きなれ。屋のうへは唯おしなべて白きにあやしき賤の屋もおもがくして、有明の月のくまなきにいみじうをかし。かねなどおしへぎたるやうなるに、水晶の莖などいはまほしきやうにて、長く短く殊更懸け渡したると見えて、いふにもあまりてめでたき垂氷に下簾を懸けぬ車の簾垂をいと高く上げたるは奥までさし入りたる月に薄色紅梅白きなど七つ八つばかり着たる上に、濃き衣のいとあざやかなるつやなど、月に映えてをかしう見ゆる傍にえび染のかた紋の指貫、白きぬどもあまた、山吹紅など着こぼして直衣のいと白き引

きときたれば、ぬぎ垂れられていみじうこぼれいでたり。指貫の片つかたはとじきみのとにふみ出されたるなど、道に人の逢ひたらばをかしと見つべし。月かげのはしたなさに、後ざまへすべり入りたるを、引き寄せあらはになされて笑ふもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふ詩を、かへすがへすずんじておはするは、いみじうをかしうて夜一夜もありかまほしきに、いく所の近くなるもくちをし。

宮仕する人々の出で集りて君々の御事めで聞え、宮の内外の端の事どもかたみに語り合せたるを、おのが君々、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。

家廣く淸げにて親族は更なり、たゞうちかたらひなどする人には、宮づかへ人片つ方にすゑてこそあらまほしけれ。さるべき折は一所に集り居て物語し、人の詠みたる歌何くれと語りあはせ、人の文など持てくる「もろともに見、返事かき又むつましうくる人もあるは、淸げにうちしつらひて入れ、雨など降りて得かへらぬもをかしうもてなし、參らむをりはその事見入れて思はむさまにして出し立てなどせばや。善き人のおはします御有樣などいとゆかしきぞ、けしからぬ心にやあらむ。

見ならひするもの

あくび、ちごども、なまけしからぬえせもの。

うちとくまじきもの

あしと人にいはるゝ人。さるはよしと知られたるよりはうらなくぞ見ゆる。

舟の路。日のうらゝかなるに、海のおもてのいみじうのどかに淺緑のうちたるを引きわたしたるやうに見えて、聊恐しき氣色もなき若き女の袙ばかり着たる。侍の者の若やかなる諸共に、艪といふもの押して、歌をいみじううたひたるいとをかしう、やんごとなき人にも見せ奉らまほしうおもひいくに、風いたう吹き海のおもてのたゞ荒れにあしうなるに、物もおぼえず泊るべき所に漕ぎつくるほど、舟に浪のかけたるさまなどはさばかりなごかりつる海とも見えずかし。思へば舟に乘りてありく人ばかりゆゝしきものこそなけれ。よろしき深さにてだにさまではかなき物に乘りて漕ぎ往くべき物にぞあらぬや。ましてそこひも知らずちひろなどもあらむに、物いと積み入れたれば、水ぎはは唯一尺ばかりだになきにげすどもの聊恐しとも思ひたらず走りありき、つゆあらくもせば沈みやせむと思ふに、大なる松の木などの二三尺ばかりにてまろなるを、五つ六つぼうぼうと投げ入れなどするこそいみじけれ。やかたといふ物にぞおはす。されど奥なるはいさゝかたのもし。端に立てる者どもこそ目くるゝ心ちすれ。早緒つけてのどかにすげたる物の弱げさよ。絶えなば何にかはならむ、ふと落ち入りなむを。それだにいみじうふとくなどもあらず。我が乘りたるはきよげに帽額のすきかげ、妻戸格子あげなどして、されどひとしう重げになどもあらねば、唯家の小きにてあり。ことふね見やるこそいみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りてうち散したるやうにぞいとよく似たる。泊りたる所にて舟ごとに火ともしたるをかしう見ゆ。はしぶねとつけていみじうちひさきに乘りて漕ぎありく、つとめてなどいとあはれなり。あとのしら浪は誠にこ

そ消えもてゆけ。よろしき人は乗りてありくまじき事とこそ猶おぼゆれ。かちぢも又いとおそろし。されどそれはいかにもいかにもつちにつきたればいとたのもしと思ふに。海士のかづきしたるは憂きわざなり。腰につきたる物絶えなばいかゞせむとなむ。をのこだにせばさてもありぬべきを、女はおぼろけの心ならじ。男は乗りて歌などうちうたひてこの栲繩を海にうけありく。いと危くうしろべたくはあらぬにや、海士ものぼらむとてはそのなはをなむ引く。取り惑ひ繰り入るゝさまぞことわりなるや。舟のはたを抑へて放ちたる息などこそまことに唯見る人だにしほたるゝに、落し入れて漂ひありくをのこは目もあやにあさまし。更に人の思ひかくべきわざにもあらぬことにこそあめれ。

右衞門の尉なる者の、えせ親をもたりて、人の見るにおもてぶせなど見ぐるしうおもひけるが、伊豫の國よりのぼるとて海に落し入れてけるを、人の心うがりあさましがりける程に、七月十五日ぼんを奉るとていそぐを見給ひて、道命阿しや梨、

「わたつ海に親をおし入れてこのぬしのぼんする見るぞ哀なりける」

とよみ給ひけるこそいとほしけれ。

又小野殿の母うへこそは普門寺といふ所に八講しけるを聞きて、又の日小野殿に人々集まりてあそびし文つくりけるに、

「薪こることはきのふにつきにしを今日はをのゝえてゝにくたさむ」

と詠み給ひけむこそめでたけれ。こゝもとはうちきゝになりぬるなめり。

又業平が母の宮の、「いよいよ見まく」とのたまへるいみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけむこそ思ひやらるれ。

をかしと思ひし歌などを草紙に書きておきたるに、げすのうちうたひたるこそ心憂けれ。よみにもよむかし。

よろしき男をげす女などの譽めて「いみじうなつかしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるゝはなかなかよし。げすにほめらるゝは女だにわろし。又譽むるまゝに言ひそこなひつるものをば。

大納言殿參り給ひて文の事など講じ給ふに、例の夜いたう更けぬれば御前なる人々、一二人づゝうせて、御屛風几帳の後などに皆隱れふしぬれば、唯一人になりてねぶたきを念じてさぶらふに、「丑四つ」と奏するなり。「明け侍りぬなり」とひとりごつに、大納言殿今更におほとのごもりおはしますよとて、ぬべき物にもおぼしたらぬを、うたて何しにさ申しつらむとおもへども、又人のあらばこそはまぎれもせめ。上の御前の柱に寄りかゝりて少しねぶらせ給へるを「かれ見奉り給へ。今は明けぬるに、かくおほとのごもるべき事かは」と申させ給ふ。「實に」など宮のお前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬほどに、をさめが童の鷄を捕へて持ちて「明日里へいかむ」といひて隱し置きたりけるが、いかゞしけむ、犬の見つけて追ひければ廊のさきに逃げいきて恐しう鳴きのゝしるに、皆人起きなどしぬなり。上もうち驚かせ坐しまして「いかにありつるぞ」と尋ねさせ給ふに大納言殿の「聲明王のねぶりを驚かす」と

いふ詩を高うち出し給へるめでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も大きになりぬ。「いみじき折の事かな」と宮も興ぜさせ給ふ。猶かゝる事こそめでたけれ。又の日は夜のおとゞに入らせ給ひぬ。夜中ばかりに廊に出で、人呼べば「おるゝか我送らむ」とのたまへば、裳唐衣は屏風にうち懸けていくに、月のいみじうあかくて直衣のいと白う見ゆるに、指貫のなからふみくゝまれて、袖をひかへて「たふるな」といひて率ておはするまゝに「遊子なほ殘りの月に行けば」とずんじ給へる又いみじうめでたし。かやうの事めで戯ふとて笑ひ給へどいかでか猶いとをかしきものをば。

僧都の君の御乳母のまゝと御匣殿の御局に居たれば、をのこある、板敷のもと近く寄り來て「辛いめを見候ひつる。誰にかは憂へ申し候はむ」とてなんど泣きぬばかりの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、あからさまに「物へまかりたりしまにさたなく侍る所の燒け侍りにしかば、日ごろはがうなのやうに、人の家に尻をさし入れてなむ候ふ。うま寮の、み秣摘みて侍りける家より出でまうで來て侍るなり。唯垣を隔てゝ侍れば、よどのに寢て侍りける童べもほどほど燒け侍りぬべくなむ。いさゝか物もとうで侍らず」などいひをる。御匣殿も聞き給ひていみじう笑ひ給ふ。

「みまくさをもやすばかりの春の日によどのさへなど殘らざるらむ」

と書きて「これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひのゝしりて「この坐する人の家の燒けたりとて、いとほしがりて給ふめる」とて取らせたれば「何の御短冊やくにか侍らむ。物幾らば

かりにか」といへば「まづよめかし」といふ。「いかでか、片目もあき仕うまつらでは」といへば「人にも見せよ。唯今召せばとみにて上へ參るぞ。さばかりめでたき物を得ては何をか思ふ」とて皆笑ひ惑ひてのぼりぬれば「人にや見せつらむ。里にいきていかに腹立たむ」など御前に參りてまゝの啓すれば、又笑ひさわぐ。御前にも「などかく物ぐるほしからむ」と笑はせ給ふ。

男はめ親なくなりて親ひとりあるいみじく思へども、煩はしき北の方の出で來て後は、内にも入られず、さうぞくなどの事は乳母、又故上の人どもなどしてせさす。西東の對の程にまらうどにもいとをかしう、屏風さうじの繪も見所ありてすまひたり。殿上の交らひの程口惜しからず人々も思ひたり。上にも御氣色よくて常に召しつゝ、御遊などのかたきには思しめしたるに、猶常に物嘆かしう世の中心に合はぬ心ちして、好々しき心ぞかたはなるまであるべき。上達部の又なきにもてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ思ふ事をもうち語ひ慰め所なりける。』「定澄僧都に袿なし。すゐせい君に袙なし」と言ひけむ人もこそをかしけれ。

まことや、下(イ高)野にくだるといひける人に、

「おもひだにかゝらぬ山のさせも草たれかいぶきの里は告げしぞ」。

ある女房の遠江守の子なる人をかたらひてあるが、同じ宮人をかたらふと聞きて恨みければ、親などもかけて誓はせ給ふ。「いみじきそらごとなり。夢にだに見ず」となむいふ。「いかがいふべき」といふと聞きて、

「誓へきみ遠つあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや」。

びんなき所にて人に物をいひけるに、「胸のいみじうはしりける、などかくある」といひけるいらへに、

「逢坂はむねのみつねにはしり井のみつくる人やあらむとおもへば」。

唐ぎぬは

あかぎぬ、えび染、萌黄、さくら、すべて薄色のるゐ。

裳は

大海、しびら。

汗衫は

春は躑躅、櫻。夏は靑朽葉、朽葉。

織物は

むらさき、しろき。萌黄に柏葉織りたる。紅梅もよけれどもなほ見ざめこよなし。

紋は

あふひ、かたばみ。

夏うすもの片つ方のゆだけきたる人こそにくけれど、數多重ね着たればひかれて着にくし。綿など厚きは胸などもきれていと見ぐるし。まぜて着るべき物にはあらず。猶昔よりさまよく着たるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それも猶女房のさう束にては所せかめり。

男の數多かさぬるも片袴（一字つ）重くぞあらむかし。清らなるさう束の織物うすものなど今は皆さてこそあめれ。今やうに又さまよき人の著給はむいとびんなきものぞかし。かたちよき君達の彈正にておはするいと見ぐるし。宮の中將（宰相顯賴）などのくちをしかりしかな。

やまひは

胸、もの丶け、あしのけ。唯そこはかとなくものくはぬ。十八九ばかりの人の髮いと麗しくてたけばかりすそふさやかなるがいとよく肥えて、いみじう色しろう、顏あいぎやうづきよしと見ゆるが、齒をいみじくやみまどひて、額髮もしとゞに泣きぬらし、髮の亂れかゝるも知らず、面赤くて抑へ居たるこそをかしけれ。八月ばかり白きひとへ、なよらかなる袴よきほどにて、紫苑の衣のいとあざやかなるを引き懸けて胸いみじう病めば、友達の女房達などかはるがはる來つゝ「いといとほしきわざかな。例もかくや惱み給ふ」など事なしびに問ふ人もあり。心がけたる人は誠にいみじと思ひ歎き、人知れぬ中などはまして人目思ひて寄るにも、近くもえ寄らず思ひ歎きたるこそをかしけれ。

いと麗しく長き髮を引きゆひて、物つくとて起きあがりたる氣色も、いと心苦しくらうたげなり。うへにも聞しめして御讀經の僧の聲よき給はせたれば、とぶらひ人どもゝあまた見來て經聞きなどするもかくれなきに、目をくばりつゝ讀み居たるこそ罪や得らむとおぼゆれ。

こゝろづきなきもの

物へゆき寺へも詣づる日の雨。使ふ人の「我をばおぼさず、なにがしこそ唯今の人」など言ふ

をほのぎゝたる。人よりは猶少しにくしと思ふ人の推し量り事うちしすゞろなる物恨みし、我かしこげなる。心わしき人の養ひたる子。さるはそれが罪にもあらねどかゝる人にしもと覺ゆる故にやあらむ、「數多あるが中に、この君をば思ひおとし給ひてやにくまれ給ふよ」などあらゝかにいふ。ちごは思ひも知らぬにやあらむ、もとめて泣き惑ふ心づきなきなめり。おとなになりても思ひ後みもて騷ぐ程に、なかなかなる事こそおほかめれ。侘しくにくき人に思ふ人のはしたなくいへど、添ひつきてねんごろがる。「聊心わし」などいへば常よりも近く臥して物くはせいとほしがり、その事となく思ひたるにまつはれ追從しとりもちて惑ふ。思宮仕人の許にきなどする男の其所にて物くふこそいとわろけれ。くはする人もいと憎し。思はむ人のまづなど志ありていはむを、忌みたるやうに口をふたぎて、顏を持てのくべきにもあらねば、くひをるにこそあらめ。いみじう醉ひなどしてわりなく夜更けてとまりたりとも更にゆづけだにくはせじ、心もなかりけりとて來ずはさせてなむ。里にて北面より出して はいかゞせむ。其だに猶である。初瀨に詣でゝ局に居たるにあやしきげすどものうしろさしまぜつゝ、居なみたるけしきこそないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐しきにくれ階をのぼり困じていつしか佛の御顏を拜み奉らむと、局に急ぎ入りたるに蓑蟲のやうなる物のあやしききぬ着たるがいとにくき立居額づきたるは押し倒しつべき心ちこそすれ。いとやんごとなき人の局ばかりこそ前はらひあれ、よろしき人は制しわづらひぬかし。頼もし人の師を呼びて言はすれば、「そこども少し去れ」などいふ程こそあれ、

歩み出でぬればおなじやうになりぬ。

いひにくきもの

人の消そこ仰事などの多かるを、序のまゝに始より奥までいといひにくし。返り事又申しにくし。恥かしき人の物おこせたるかへりごと。おとなになりたる子の思はずなること聞きつけたる、前にてはいと言ひにくし。

四位五位は冬、六位は夏。とのゐすがたなども品こそ男も女もあらまほしきことなめれ。家の君にてあるにも誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使ひ人ゆきて、おのづから言ふべかめり。ましてまじらひする人はいとこよなし。猫の土におりたるやうにて(十二字恐脱)。たくみの物くふこそいと怪しけれ。新殿を建てゝ東の對だちたる屋を作るとて、たくみども居なみて物くふを、東面に出で居て見ればまづ持てくるや遲きと汁物取りて皆飮みて、かはらけはついすゑつゝ、次にあはせを皆くひつれば、おのは不用なめりと見るほどに、やがてこそうせにしか。二三人居たりし者皆させしかばたくみのさるなめりと思ふなり。あなもたいなの事どもや。

物がたりをもせよ。昔物語もせよ。さかしらにいらへうちして、こと人どものいひまぎらはす人(人恐脱)いとにくし。

ある所に中何の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねどもその心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人のなかつきばかりにいきて、「有明の月のいみじう照りておもし

ろきに、名殘思ひ出でられむ」と言の葉を盡していへるに、今はいぬらむと遠く見送るほどに、えも言はず艶なる程なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立蔀のいたる陰のかたに添ひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひ知らせむと思ふに「有明の月のありつゝも」とうちいひて、さしのぞきたる髮の頭にも寄りこず、五寸ばかりさがりて火ともしたるやうなる月の光、催されて驚かさるゝ心ちしければ、やをら立ち出でにけりとこそかたりしか。

女房のまゐりまかでするには、車を借る折もあるに、こゝろよくそひしたる顏にうち言ひて貸したるに、牛飼童の例の牛よりもしもざまにうち言ひて、いたう走り打つも、あなうたてと覺ゆかし。をのこどもなどの物むつかしげなる氣色にて「いかで夜更けぬさきに追ひて歸りなむ」といふは、猶主の心おしはかられてとみの事なりと、又言ひ觸れむとも覺えず、業遠の朝臣の車のみや、夜中あかつきわかず人の乘るに、聊さる事なかりけむ、よくぞ敎へ習はせたりしか。道に逢ひたりける女車の深き所におとし入れて、得引き上げで牛飼のはらだちければ、我が從者してうたせさへしければ、まして心のまゝに誡め置きたるに見えたり。

すきずきしくて獨住する人のよるはいづらにありつらむ、曉に歸りてやがて起きたる、まだねぶたげなる氣色なれど硯とり寄せ墨こまやかに押し磨りて事なしびに任せてなどはあらず、心とゞめて書くまひろげ姿をかしう見ゆ。白ききぬどもの上に山吹紅などをぞ着たる。白きひとへのいたくしぼみたるを、うちまもりつゝ書き立てゝまへなる人にも取らせず、わざとだちてこどねりわらはのつきづきしきを身近く呼び寄せて、うちさゝめきていぬる後

も久しく詠めて、經のさるべき所々など忍びやかに口ずさびに去居たり。奥のかたに御手水粥などしてぞゝのかせば歩み入りて文机に押し懸りて文をぞ見る。おもしろかりける所々はうちずんじたるもいとをかし。手洗ひて直衣ばかりうち着て錄をぞそらに讀む。まことにいとたふとき程に近き所なるべし。ありつる使うちけしきばめば、ふと讀みさして返り事に心入るゝこそいとほしけれ。

清げなるわかき人のなほしも、うへのきぬも、狩衣もいとよくて、きぬがちに袖口あつく見えたるが、馬に乗りていくまゝに供なるをのこたて文を目をそらにて取りたるこそをかしけれ。

前の木だち高う庭廣き家の、東南の格子どもあげ渡したれば、凉しげに透きて見ゆるに、毋屋に四尺の几帳立てゝ前にわらふだを置きて卅よばかりの僧のいと憎げなからぬが、薄墨の衣うすものゝ袈裟などいと鮮かにうちさうぞきて香染の扇うちつかひ千手陀羅尼讀み居たり。もののけにいたう病む人にや。うつすべき人とて大きやかなるわらはの髮など麗しきひとへあざやかなる袴長く着なしてゐざり出でゝ、横ざまに立てる三尺の几帳の前に居たれば、とざまにひねり向きていと細うにほやかなるとこを取らせて、「をゝ」と目うちひさきて讀む陀羅尼もいと尊し。け證の女房あまた居てつどひまもらへたり。久しくもあらでふるひ出でぬれば、もとの心失ひて行ふまゝに隨ひ給へる護法もげにたふとし。せうとの袿きたる細冠者どもなどのうしろに居て團扇するもあり。皆たふとがりて集りたるも、例の心なら

ばいかに耻しと惑はむ。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、つき人のしり人などはらうたく覺えて、几帳のもと近く居てきぬひきつくろひなどする程に、よろしとて御湯などきたおもてに取り次ぐ程をも、わかき人々は心もとなし。盤も引きさげながらいそいでくるや。ひとへなど淸げに薄色の裳など萎えかゝりてはあらずいと淸げなり。さるの時にぞいみじうことわり言はせなどして許しつ。几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出でにけるかな、いかなる事ありつらむと耻かしがりて髮を振りかけてすべり入りぬれば、しばしとゞめて加持少しして「いかにさわやかになり給へりや」とてうち笑みたるも耻しげなり。「暫し侍ふべきを、時のほどにもなり侍りぬべければ」とまかり申して出づるを「しばしはうちはうたうまゐらせむ」などとゞむるを、いみじう急げば、所につけたる上﨟とおぼしき人、すのもとにゐざり出で、「いと嬉しく立ちよらせ給へりつるしるしに、いと堪へ難く思ひ給へられつるを、唯今をこたるやうに侍れば、返す、返すなむ悦び聞えさする。明日も御いとまの隙には物せさせ給へ」などいひつゝ、「いとしうねき御ものゝけに侍るめるを、たゆませ給はざらむなむよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなむよろこび申し侍る」と詞ずくなにて出づるはいとたふときに、佛の現れ給へるとこそおぼゆれ。

淸げなるわらはの髮ながき。又おほきやかなるが髯生ひたれど思はずに髮麗しき。又したゝかにむくつけゞなるなど多くて、いとなげにて此所彼所にやんごとなきおぼえあるこそ法

師もあらまほしきわざなめれ。親などいかに嬉しからむとこそおしはからるれ。

見ぐるしきもの

きぬのせぬひかたよせて着たる人、又のけくびしたる人、下簾穢げなる上達部の御車。例ならぬ人の前に子をゐていきたる。袴着たる童の足駄はきたる、それは今やうのものなり。つぼさうぞくしたる者の急ぎて歩みたる。法師陰陽師の紙かうぶりして祓へしたる。又色黒う痩せ憎げなる女のかつらしたる。髯がちにやせやせなる男と晝ねしたる、何の見るかひに臥したるにかあらむ、よるなどはかたちも見えず、又おしなべてさる事となりにたれば、我にくげなりとて起きゐるべきにもあらずかし。つとめて疾く起きいぬるめやすし。夏晝ねして起きたる、いとよき人こそ今少しをかしけれ。えせがたちはつやめきねはれて、ようせずはほそゆがみもえつべし。かたみに見かはしたらむ程のいけるかひなさよ。色黒き人のすゞし單衣着たるいと見ぐるしかし。のしひとへも同じくすきたれどそれはかたはにも見えず、ほその通りたればにやあらむ。

ものくらうなりて文字もかゝれずなりたり。筆も使ひはてゝこれを書きはてばや。この草紙は目に見え心に思ふ事を人やは見むずると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなく人のためびんなきいひ過ぐしなどえつべき所々もあれば、きようかくしたりと思ふを、涙せきあへずこそなりにけれ。宮の御前にうちのおとゞの奉り給へりけるを、「これに何をかゝまし。うへの御前には史記といふ文を書かせ給へる」などのたまはせしを、「枕

にこそはし侍らめ」と申しゝかば「さば得よ」とて賜はせたりしを、あやしきをこよや何やとつきせずおほかる紙の数を書きつくさむとせしに、いと物おぼえぬことぞおほかるや。大かたこれは世の中にをかしき事を、人のめでたしなど思ふべき事、猶えり出でゝ歌などをも木草鳥蟲をもいひ出したらばこそ、思ふほどよりはわろし心見えなりともそしられめ、唯心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、「はづかしき」なども見る人はのたまふなれば、いとあやしくぞあるや。げにそれもことわり、人のにくむをも善しといひ、譽むるをも惡しといふは、心のほどこそおしはからるれ。唯人に見えけむぞねたきや。

枕草紙 終

紫式部日記

秋（寛弘五年）のけはひのたつまゝに、土御門殿（道長邸）のありさまいはむ方なくをかし。池のわたりの梢どもも遣水のほとりの草むら、おのがじゝ色づきわたりつゝ、大かたの空もえんなるにもてはやされて、不斷の御どきやうの聲々あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも例の絕えせぬ水のおとなひ夜もすがら聞きまがはさる。御まへにも、近うさぶらふ人々はかなき物語するを聞しめしつゝ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御ありさまなどのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御まへをこそ尋ねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るゝにも、かつはあやしき。『まだ夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まゐりなばや。女官はいまださぶらはじ。藏人まゐれ」などいひしろふ程に、後夜の鐘うちおどろかし、五壇の御ずほふときはじめつ。我も我もとうちあげたる伴僧の聲々、遠く近く聞きわたされたるほどおどろおどろしくたふとし。觀音院の僧正（勝算）ひんがしの對より二十人の伴僧をひきゐて御加持まゐり給ふ。足音渡殿のはしのとゞろとゞろと踏みならさるゝさへぞことことのけはひには似ぬ。法住寺の座主（[illegible]）はうまばのおとゞ、遍ち寺の僧都はふどのなどに、うちつれたる淨衣すがたまでゆゑゆゑしき唐橋どもをわたりつゝ、木のまをわけてかへり入るほども、

遙に見やらるゝ心ちしてあはれなり。さいさ阿ざ梨も大威徳をうやまひて腰をかゞめたり。人々まゐりつれば夜も明けぬ。渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだおちぬに、殿（道長）ありかせたまひてみ隨身召して遣水はらはせたまふ。『橋の南なる女郎花のいみじう盛なるを一枝をらせたまひて、几帳のかみよりさしのぞかせ給へり。御さまのいとはづかしげなるに、我が朝顔の思ひ志らるれば、「これ遲くてはわろからむ」とのたまはするにことつけて硯のもとによりぬ。

「をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそ志らるれ（紫）。

あなと」とはゝゑみて、硯めしいづ。

「志ら露はわきてもをかじをみなへしこゝろからにや色のそむらむ」（道長）。』

志めやかなる夕暮に宰相の君と二人物語して居たるに、殿の三位の君（頼通）すだれのつまひきあげて居給ふ。年のほどよりはいとおとなしく心にくきさまして、「人はなほ心ばへこそかたきものなめれ」など世の物語志め志めとしておはするけはひをさなしと、人のあなづり聞ゆるこそ惡しけれと、はづかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「おほかる野べに」とうちずんじて、たち給ひにしさまこそ物語に譽めたる男の心ち志侍りしか。かばかりのことのうち思ひ出でらるゝもあり。そのをりはをかしきことの過ぎぬれば、忘るゝもあるはいかなるぞ。』播磨守（行政）、碁のまけわざしける日、あからさまにまかでゝ後にぞ碁盤のさまなど見給へしかば、けそくなどゆゑゆゑしくして、洲濱のはとりの水にかきませたり。

「きのくにの志らゝの濱にひろふてふこの石こそはいははともなれ」。扇どものをかしきを、そのころは人々もたり。』八月二十日あまりの程よりは、上達部殿上人どもさるべきは皆とのゐがちにて、橋の上對の簀子などに皆うたゝねをしつゝ、はかなう遊びあかす。琴笛の音などには、たどたどしき若人たちのとねあらそひ、今樣歌どもゝ所につけてはをかしかりけり。宮の大夫齊信、左の宰相の中將經房、兵衞の督、美濃の少將濟政などして遊びたまふ夜もあり。わざとの御あそびは、殿おぼすやうやあらむ、せさせたまはず。年頃里居したる人々のなかたえをおもひ起しつゝ、まゐりつどふけはひさわがしうて、その頃は志めやかなることなし。』廿六日御たきものあはせはてゝ、人々にも配らせ給ふ。まろがしゐたる人々あまたつどひ居たり。うへよりおるゝ道に、辨の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、晝ねしたまへる程なりけり。萩、紫苑、いろいろのきぬに、濃きか、うちめ、心ことなるをうへにきて、顏はひき入れて硯の箱に枕してふし給へるひたひつき、いとらうたげになまめかし。繪に書きたるものゝ姬君の心ちすれば、くちおほひをひきやりて「物語の女の心ちもし給へるかな」といふに、見あげて、「ものぐるほしの御さまや。寢たる人を心なく驚かすものか」とてすこしおきあがり給へる顏のうちあかみ給へるなど、こまかにをかしうこそ侍りしか。おほかたもよき人の、をりからにまたこよなくまさるわざなりけり。』九日、菊の綿を兵衞のおもとのもてきて、「これ殿の上（倫子）のとりわきて、いとようおいのごひすてたまへとのたまはせつる」とあれば、

「菊のつゆわくるばかりに袖ぬれてはなのあるじに千代はゆづらむ」

とてかへし奉らむとするほどに、「あなたに歸りわたらせ給ひぬ」とあれば、やうなさにとゞめつ。その夜さり御まへにまゐりたれば、月をかしきほどにて、はしにみすのたより裳の裾などほころびいづる、ほどほどに小少將の君、大納君の君など侍ひたまふ。御火取にひと日のたき物とうでゝ試みさせたまふ。御まへのありさまのをかしさ、蔦の色の心もとなきなど、口々きこえさするに、例よりもなやましき御けしきにおはしませば、御加持どもゝまゐるかたなり。さわがしき心ちして入りぬ。人の呼べば局におりて志ばしと思ひしかどねにけり。夜なかばかりより騷ぎたちてのゝしる。』十日のまだほのぼのとするに、御志つらひかはる。白き御帳に移らせたまふ。殿よりはじめ奉りて公達、四位五位どもたちさわぎて御帳のかたびらかけ、おましどももてちがふほどいとさわがし。日ひとひいと心もとなげに、起き臥しくらさせ給ひつ。御ものゝけどもかりうつしかぎりなくさわぎのゝしる。月ごろそこら侍ひつる殿のうちの僧をばさらにもいはず、山々寺々をたづねて、けんざといふかぎりはのこりなく參りつどひ、三よの佛もいかにか聞き給ふらむと思ひやらる。陰陽師とて世にあるかぎり召し集めて、八百萬の神も耳振り立てぬはあらじと見え聞ゆ。みず經の使たち、さわぎくらし、その夜もあけぬ。御帳のひんがしおもては、うちの女房參り集ひてさぶらふ。西には御ものゝけうつりたる人々、御屛風ひとよろひをひき、局々口には几帳をたてつゝ、けんざあつかりあつかりのゝしり居たり。南にはやんごとなき僧正僧都かさなり居て、不動尊の

生き給へるかたちをも呼び出でわらはしつべう、頼みゝ恨みゝ聲皆かれわたりにたる、いといみじうきこゆ。北の御曹司と御帳とのはざま、いとせばきほどに、四十餘人ぞ後に算ふれば居たりける。いさゝかみじろぎもせられず、氣あがりてものぞ覺えぬや。今里よりまゐる人々は、中々かに居籠められず、裳の裾きぬの袖ゆづらむかたも知らず。さるべきおとななどは忍びて泣きまどふ。』十一日の曉に、北の御ざうし二まはなちてひさしにうつらせ給ふ。みすなどもえかけあへねば、御几帳をおし重ねておはします。僧正、きやうてふ僧都、法務僧都など侍ひて、加持まゐる。院源僧都きのふ書かせ給ひし御願書に、いみじきことゞも書き加へて讀みあげ續けたることの葉の、哀に尊くたのもしげなることかぎりなきに、殿のうちそへて佛念じ聞え給ふほどのたのもしく、さりともとは思ひながらいみじう悲しきに、人々涙をえはしあへずゆゝしうかうなどかたみにいひながらぞえせきあへざりける。「人げおほくこみてはいとゞ御心ちも苦しうおはしますらむ」とて南東おもてに出させ給うて、さるべきかぎりこの二まのもとにはさぶらふ。殿の上、讃岐と宰相の君、くらの命婦、御几帳の内に仁和寺の僧都の君[illegible]、三井寺のないぐの君も召し入れたり。殿のよろづにのゝしらせ給ふ御聲に、僧もけたれて音せぬやうなり。今一座に居たる人々、大納言の君、小少將の君、宮の內侍、辨の內侍、中務の君、大夫の命婦、大式部のおもと、殿の宣旨よ。いと年へたる人々のかぎりにて、心をまどはしたるけしきどもの、いとことわりなるに、まだ見奉り馴るゝほどなけれど、類ひなくいみじと心ひとつにおぼゆ。又このうしろのきはに立てたる几帳のとに、內侍のかみ

み(妍子)の中務のめのと、姫君(威子)の少納言のめのと、いと姫君(嬉子)の小式部のめのとなどおし入り來て御帳二つがうしろの細道を、え人も通らず。行きちがひみじろく人々はその顏なども見わかれず。殿のきん達、宰相中將(兼隆)、四位の少將まさ通などをば更にもいはず、左宰相の中將(經房)、宮の大夫(齊信)など、例はけどほき人々さへ御几帳のかみよりともすればのぞきつゝ、腫れたる目どもを見ゆるもよろづはぢわすれたり。いたゞきにはうちまきを(イの)ゆきのやうにふりかゝり、おしゑぼみたるきぬのいかに見ぐるしかりけむと、のちにぞをかしき。御いたゞきの御ぐしおろしたてまつり、御いむことうけさせたてまつり給ふほど、くれまどひたる心ちにこはいかなることゝあさましう悲しきに、たひらかにせさせたまひて、後のことまだしきほど、さばかり廣きもやの南の廂、高欄のほどまで立ちこみたる僧も俗も、今ひとりとよみてぬかをつく。ひんがしおもてなる人々は殿上人にまじりたるやうにて、二中將の君の左の頭中將(頼宗)に見合せてあきれたりしさまをのちにぞ人々いひ出でゝ笑ふ。けさうなどのたゆみなくなまめかしき人にて、曉に顏づくりしたりけるを、泣き腫れ涙にところどころぬれそこなはれてあさましうその人となむ見えざりし。宰相の君の顏かはりし給へるさまなどこそいとめづらかに侍りしか。ましていかなりけむ。されどそのきはに見し人の心ありさまのかたみに覺えざりしなむかしこかりし。『今とせさせ給ふ程御もの〻けのねたみの〻しる聲などのむくつけさよ、げんの藏人には心譽阿ざ梨、兵衞の藏人にはそうそといふ人、右近の藏人には法住寺のりし、宮の内侍の局にはちそう阿ざ梨をあづけたれば、もの〻けにひきたふ

されていとはしかりければ、ねんかく阿ざ梨を召し加へてぞのゝしる。阿ざ梨のけんの
うすきにあらず、御物のけのいみじうこはきなりけり。宰相の君、をぎ人にゑいかうをそへ
たるに、夜一夜のゝしり明して聲もかれにけり。御もの、けうつれと召しいでたる人々も、
皆うつらでさわがれけり。午のときに空晴れて、朝日さしいでたる心ちす。たひらかにおは
します嬉しさのたぐひもなきに、男にさへおはしましけるよろこび（後一條誕生）いかゞはなのめなら
む。昨日しをれくらし、今朝のほど朝霧におぼゝれつる女房など、皆たちあかれつゝやすむ。
御まへにはうちねびたる人々の、かゝる折節つきづきしきさぶらふ。殿もうへもあなたに渡
らせたまうて、月ごろみず法讀經にさぶらひ、昨日今日めしにてまゐり集ひつる僧の布施た
まひ、くすし陰陽師など、道々のしるしあらはれたる、祿たまはせ、うちには御湯殿の儀式な
どかねてまうけさせ給ふべし。人の局々には、おほきやかなる袋包どももてちかひ、唐ぎぬ
ぬひ物のも、ひきむすび、螺鈿ぬひ物けしからぬまでしてひきかくし、「扇もてこぬかな」な
どいひかはしつゝ、けさうじつくろふ。例の渡殿より見やれば、妻戸の前に、宮の大夫（齊信）春宮
の大夫（懐平）など、さらぬ上達部も侍ひたまふ。殿いでさせ給ひて、日頃うづもれつる遣水つくろ
はせ給ひ、人々の御けしきども心ちよげなり。心の中に思ふことあらむ人もたゞ今はまぎれ
ぬべき世のけはひあるうちにも、宮の大夫ことさらにもゑみほこり給はねど、人よりまさる
嬉しさの、おのづから色に出づるぞことわりなる。右の宰相中將（兼隆）は、權中納言（隆家）とたはぶれ
して、對の簀子に居たまへり。内より御はかしもてまゐれり。頭の中將賴定、今日伊勢のみて

ぐらつかひかへるほど、のぼるまじければ、たちながらぞたひらかにおはします御有樣奏せさせ給ふ。祿などもたまひける。そのことは見ず。御ほぞのをは殿のうへ、御ちつけは橘の三位つな子、御めのとはもとよりさぶらひむつましう心よいかたとて、大左衞門のおもと仕うまつる。備中守宗時の朝臣のむすめ、藏人の辨のめのと。御湯殿は酉のときとか、火ともして、宮の下部、綠のきぬのうへに白きたうじき着て御湯まゐる。その桶すゑたる臺など皆白きおほひしたり。尾張の守近光、宮のさぶらひのをさなる仲信來てみすのもとにまゐる。みづし二つ、きよいこの命婦、播磨、とりつぎてうめつゝ、女房二人、おほもく、うま汲みわたして、御ほとき十六にあまればわる。うすものゝ上着、かとりの裳、からぎぬ、さいしさして、白き元ゆひしたり。かしらつきはえてをかしく見ゆ。御湯殿は宰相の君、御迎へ湯大納言の君（源廉子）湯卷すかたどもの例ならずさまことにをかしげなり。宮は殿いだき奉り給ひて、御はかし小少將の君、虎のかしら宮の内侍とりて御さきにまゐる。からぎぬは松の實の紋、裳はかいぶをおりて、大海のすりめにかたどれり。腰はうすもの、から草をぬひたり。少將の君は秋の草村蝶鳥などをしろがねして作りかゞやかしたり。織物はかぎりありて、人の心にしくべいやうなければ、腰ばかりを例にたがへるなめり。殿の公達二ところ（賴通教通）、源少將（雅通）など、うちまきをなげのゝしり、われたかうちならさむと爭ひさわぐ。へんちじの僧都護身に侍ひたまふ。頭にも目にもあたるべければ、扇をさゝげて若き人にわらはる。文よむ博士、藏人の辨廣業高欄のもとにたちて史記の一くわんを讀む。つるうち廿人、五位十人、六位十人、二なみに

立ちわたれり。よさりの御湯殿とても、さまばかりゑさりてまゐる。ぎしきおなじ。御文の博士ばかりやかはりけむ。伊勢守致時の博士とか、例の孝經なるべし。また擧周は史記の文帝の卷をぞ讀むなるべし。七日のほどかはるがはる萬の物のくもりなくゑろきおまへに人のやうだい色あひなどさへけちえんにあらはれたるを見わたすによき墨繪に髮どもをおはしたるやうに見ゆ。いとゞものはしたなくてかゞやかしき心ちすれば、晝はをささしいでず。のどやかにて、ひんがしの對の局よりまうのぼる人々を見れば、色ゆるされたるは織物のからぎぬ、おなじ袿どもなれば、なかなかうるはしくて、こゝろでゝろも見えず。ゆるされぬ人も少しおとなびたるは、かたはらいたかるべきことはせで、たゞえならぬ三重五重の袿に、うはぎは織物、無紋のからぎぬすくよかにして、かさねにはあやうすものをしたる人もあり。扇など、みるにはおどろおどろしくかゞやかさで、よしなからぬさまに玄たり。心ばへある本文うちかきなどして、いひあはせたるやうなるも、心々と思ひしかども、齡の程おなじまちのはをかしと見かはしたり。人の心の思ひおくれぬけしきぞあらはに見えける。裳、からぎぬのぬひものをばさることにて、袖口に置口を玄。裳の縫目に玄ろがねの糸をふせてくみのやうにし、箔を飾りてあやの紋にする玄、扇どものさまなどは、たゞ雪ふかき山を月のあかきに見渡したる心ちしつゝ、きらきらとそこはかと見わたされず。鏡をかけたるやうなり。『三日にならせたまふ夜は、宮づかさの大夫よりはじめて御うぶやしなひつかうまつる。右衛門の督は御前の事、沉のかけ盤、白がねの御皿などくはしくは見ず。源中納言俊賢、藤宰相行成

は御ぞ、御むつき、衣箱のをりたて、入れかたびら、つゝみおほひ、したづくゑなど、おなじことのおなじしろきなれども、しざま人のごゝろこゝろ見えつゝし盡したり。近江の守たかまさは、大かたのことゞもや仕うまつらむ。ひんがしの對の西の廂は上達部の座、北をかみにて二行に南の廂に殿上人の座は西を上なり。白き綾の御屏風どもをもやのみすにそへて、とざまに立てわたしたり。』五日の夜は殿の御うぶやしなひ、十五日の月くもりなくおもしろきに、池の汀ちかうかゞり火どもを木の下にともしつゝ、どしきども立てわたす。あやしきしづのをの囀りありくけしきどもまで、色ふしにたちがほなり。とのもりがたち渡れるけはひも怠らず晝のやうなるに、こゝかしこの岩がくれ、木のもとごとにうち群れてをる、上達部の隨身などやうのものどもさへ、おのがじゝかたらふべかめることは、かゝる世の中の光のいでおはしましたることを、かげにいつしかと思ひしもおよびがほにこそ。そゞろにうち笑み心ちよげなるや。まして殿のうちの人は、なにばかり數にしもあらぬ五位どもなども、そこはかとなく、腰もうち屈めてゆきちがひ、いそがしげなるさまして時に逢ひがほなり。おものまゐるとて、女房八人一つ色にさうぞきて、髮あげ白きもとゆひして、白き御盤もてつゞきまゐる。今宵の御まかなひは宮の內侍、いとものものしくあざやかなるやうだいに、元結ばにえしたる髮のさがりば、常よりもあらまほしきさまして、扇にはづれたるかたはらめなど、いと淸らに侍りしかな。髮あげたる女房は、

源式部 加賀の守おほ好が女　　小左衞門 故び中の守道ときが女　　小兵衞 左京のかみあきまさが女

小うま 左衛門の佐道のぶが女
大うま 左衛門の大夫よりのぶが女
小木工 木工の丞平ののぶよしといひけむ人の女なり。
大輔 伊勢の斎主輔親が女
小兵衛 藏人なりちかが女

かたちなどをかしきわか人のかぎりにて、さしむかひつゝ居渡りたりしは、いと見るかひこそ侍りしか。例はおものまゐるとて、髪あぐることをぞするを、かゝるをりとてさりぬべき人々をえらせ給へりしを、「心うし。いみじ」と愁へ泣きなどゆゝしきまでぞ見侍りし。御帳のひんがしおもて二まばかりに、三十よ人居なみたりし人々のけはひこそ見ものなりしか。つぎのおものはうねめどもまゐる。戸口のかたに御湯殿のへだての御屏風に重ねて、また南むきにたてゝ、白きみづし一よろひに參りすゑたり。夜ふくるまゝに月の隈なきに、采女、もひとり、みくしあげども、とのもり、かんもりの女官、顏もしらぬをり。みかどつかさなどやうのものにやあらむ、おろそかにさうぞきけさうじつゝ、おどろのかんざしおほやけおほやけしきさまして、寢殿のひんがしの廊渡殿の戸口までひまもなくおしこみて居たれば、人もえとほりかよはず。おものまゐりはてゝ女房みすのもとにいで居たり。ほかげにきらきらと見えわたる中にも、大式部のおもとの、裳、からぎぬ、を鹽山の小松原をぬひたるさまいとをかし。大式部はみちのくのかみのめ、殿の宣旨よ。大夫の命婦はからぎぬは手もふれず、裳をしろがねのでいして、いとあざやかに大海にすりたるこそ、けちえんならぬものからめやすけれ。辨の内侍の裳にしろがねの洲濱、鶴をたてたるしざまめづらし。ぬひものも松が枝の

齢をわらそはせたる、心ばへかどかどし。少將のおもとのこれらには劣りなる、志ろがねの箔を人々つきしろふ。少將のおもとゝいふは、信濃の守すけみつが妹、殿のふる人なり。その夜の御前のわりさまのいと人に見せまほしければ、よゐの僧のさぶらふ御屏風をおしわけて「この世にはかうめでたきことまたえ見給はじ」といひ侍りしかば、「わなかしこわなかしこ」と本尊をばおきて手を押しすりてぞ喜び侍りし。上達部座をたちて、御はしのうへに參りたまふ。殿をはじめ奉りて攤うちたまふ、紙のわらそひいとまさなし。歌どもわり。女房盃などわるをり、いかゞはいふべきなど口々おもひこゝろみる。

「めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ」。

四條大〔中〕納言（公任）にさしいでむほど、歌をばさるものにて、こわづかひようゐひのべしなどさゝめき爭ふほどに、こと多くて夜いたう更けぬればにや、とりわき手もさゝでまかでたまふ。祿ども上達部には女のさう束に御ぞ御むつきやそひたらむ。殿上の四位はわはせ一かさね、六位は袴一具ぞ見えし。』またの夜月いとおもしろくころさへをかしきに、わかき人は舟に乘りてわそぶ。いろいろなるをりよりも、おなじさまにさうぞきたるやうだい、かみのほどくもりなく見ゆ。小大夫、源式部、宮木の侍從、五節の辨、右近、小兵衞、小衞門、うま、やすらひ、いせ人などはしちかく居たるを、左の宰相の中將（經房）、殿の中將の君（教通）いざなひいで給ひて右の宰相の中將兼隆に棹さゝせて舟にのせたまふ。かたへはすべりとゞまりて、さすがにうらやましくやわらむと見出しつゝ居たり。いと白き庭に月の光りわひたるやうだいかたち

もをかしきやうなる。「北の陣に車あまたあり」といふは、うへ人どももなりける藤三位をはじめにて、侍從の命婦、藤少將の命婦、うまの命婦、左近の命婦、筑前の命婦、近江の命婦などぞきこえ侍りし。委しく見知らぬ人々なれば、ひがことも侍らむかし。舟の人々もまどひ入りぬ。殿いで居給ひて、おぼすことなき御けしきに、もてはやしたはふれたまふ。贈物ども品々にたまふ。』七日の夜はおほやけの御うぶやしなひ、藏人の少將道雅を御つかひにて、物の數々書きたる文、やないばこに入れてまゐれり。やがてかへしし給ふ。勸學院の衆どもあゆみしてまゐれる。げざんの文どもまた啓す。かへし給ふ。祿どもたまふべし。今宵の儀式はことにまさりて、おどろおどろしくのゝしる。御帳の内をのぞきまゐりたれば、かく國の親ともてさわがれ給ひ、うるはしき御けしきにも見えさせ給はず、すこしうちなやみおもやせておほとのごもれる御ありさま、常よりもあえかにわかく美くしげなり。ちひさきとうろを御帳のうちにかけたれば隈もなきに、いとゞしき御いろあひのそこひも知らずきよらなるに、こちたき御ぐしは、ゆひてまさらせ給ふわざなりけりとおもふ。かけまくもいとさらなれば、えぞかきつゞけ侍らぬ。大かたの事どもは、一日のおなじこと。上達部の祿はみずのうちより、女さうぞくの御ぞなどそへていだす。殿上人、頭二人(道方 朝定)を始めてよりつゝとる。おほやけの祿は大袿、ふすま、腰差など、例のおほやけざまなるべし。御ちつけつかうまつりし橘の三位(繁子)のおくりもの、例の女のさうぞくに織物のほそながそへて、しろがねの衣、筥つゝみなども、やがてしろきにや。又包みたるものそへてなどぞきゝ侍りし。委しくは見侍らず。』八日、

人々いろいろさうぞきかへたり。』九日の夜は、春宮の權の大夫（道綱）つかうまつり給ふ。白き御厨子ひとよろひにまゐりすゑたり。儀式いとさまことにいまめかし。白がねの御衣筥、かいぶをうち出でゝ、蓬萊など例のことなれど、いまめかしうこまかにをかしきを、とりはなちてはまねびつくすべきにもあらぬこそわろけれ。今宵はおもて朽木形の几帳例のさまにて、人々は濃きうちものをうへに着たり。めづらしく心にくゝなまめいて見ゆ。透きたるからぎぬどもに、つやつやとおしわたして見えたるを、また人のすがたもさやかにぞ見えなされける。こまのおもとゝいふ人の耻見侍りし夜なり。』十月十よ日までも御帳いでさせ給はず。西のそばなるおましに夜も晝もさぶらふ。殿（道長）の夜中にも曉にも參り給ひつゝ、御めのとのふところをひきさがさせ給ふに、うちとけて寢たる時などは、何心もなくおぼゝれておどろくもいといとをかしく見ゆ。心もとなき御ほどを我が心をやりて、さゝげうつくしみ給ふもことわりにめでたし。ある時はわりなきわざしかけ奉り給へるを、御紐ひき解きて御几帳の後にてあぶらせ給ふ。「あはれこの宮の御しとにぬるゝはうれしきわざかな。このぬれたるあぶるこそ思ふやうなる心ちすれ」とよろこばせ給ふ。中務の宮（具平）わたりの御事を御心に入れて、「そなたの心よせある人」とおぼしてかたらはせ給ふも、まことに心の中は思ひ居たることおほかり。』行幸近くなりぬとて、殿の内をいよいよ造りみがゝせたまふ。世におもしろき菊のねを尋ねつゝ、掘りてまゐる。いろいろうつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧のたえまに見渡したるは、げに老もしぞきぬべき心ちするに、な

ぞやまして思ふことの少しもなのめなる身ならましかば、すきずきしくももてなしわかやぎて、常なき世をもすぐしてまし。めでたきことおもしろき事を見聞くにつけても、たゞ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、ものうくおもはずに、歎かしきことのまさるぞいと苦しき。いかで今はなほ物忘れしなむ、思ひがひもなし、罪もふかゝりなどあけたてはうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

「水鳥をみづのうへとやよそに見むわれもうきたる世をすぐしつゝ」。

かれもさこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかんなりと思ひよそへらる。小少將の君の文おこせたる返どかくに、時雨のさとかきくらせば、使もいそぐ。又「空の景色もうちさわぎてなむ」とてこしをれたることやかきまぜたりけむ。暗うなりにたるに、立ちかへりいたう霞めたるこせんしに、

「雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶるしぐれなるらむ」。

書きつらむこともおぼえず。

「ことわりの時雨のそらは雲間あれどながむる袖ぞかわくまもなき」。

その日新しく造られたる船どもさし寄せさせて御覽ず。龍頭鷁首の生けるかたち思ひやられてあざやかにうるはし。行幸は辰の時と、まだ曉より人々けさうじ心づかひす。上達部の御座は西の對なれば、こなたは例のやうに騷がしうもあらず。内侍のかんの殿の御かたに、中々人々のさうぞくなどもいみじうとゝのへ給ふときこゆ。曉に少將の君まゐり給へり。も

あともに頭けづりなどす。例のさいふとも日たけなむと、たゆき心どもはたゆたひて、扇のいとなほなはしきをまだ人にいひたる、もてこなむと待ち居たるに、つゞみの音を聞きつけて、急ぎまゐるさまあはしき。御輿むかへ奉るふながくいとおもしろし。寄するを見れば、駕輿丁のさる身のほどながら、はしよりのぼりていと苦しげにうつぶし臥せり。なにのことことなる高きまじらひも身のほどかぎりあるに、いと安げなしかしと見る。御帳の西おもてにおましをしつらひて、南の廂のひんがしのまに御いしをたてたる、それより一ま隔てゝ、ひんがしにあれたるきはに、北南のつまにみすをかけへだてゝ、女房の居たる南の柱もとよりすだれを少しひきあげて、内侍二人いづ。その日のかみあげうるはしきすがた、から繪ををかしげに書きたるやうなり。左衛門の内侍、みはかしとる。青色の無紋のからぎぬ、すその裳、領巾くん帶は浮線綾をはじたんに染めたり。うはぎは菊の五重、かいねりは紅、姿つきもてなし、いさゝかはづれて見ゆるかたはらめ、はなやかにきよげなり。辨の内侍はしるしの御箱、紅にえびぞめの織物の袿、裳、からぎぬはさきのにおなじごと。いとさゝやかにをかしげなる人の、つゝましげに少しつゝみたるぞ心苦しう見えける。扇より始めて好みましたりと見ゆ。領巾はあふちだん。夢のやうにもこよひのたつ程よそほひ、むかし天降りけむをとめ子のすがたもかくやありけむとまでおぼゆ。近衞司いとつきづきしきすがたして、御輿のことゞもおこなふ。いときらきらし。頭の中將御はかしなどとりて内侍につたふ。みすの中を見わたせば、色ゆるされたる人々は、例の青色、赤色のからぎぬ地摺の裳、うはぎはおしわ

たして蘇枋の織物なり。たゞ右馬の中將ぞえび染を着て侍りし。うちものどもは濃き薄き紅葉をこきまぜたるやうにて、中なるきぬども、例のくちなしの濃き薄き、紫苑色、裏あをき菊を、もしは三へなどこゝろでゝろなり。綾ゆるされぬは、例のおとなおとなしきは無紋の青色、もしは蘇枋など皆五へにて、かさねどもは皆綾なり。大海の摺裳の水の色はなやかに淺々として、腰どもはかたもんをぞおほくはしたる。袿は菊の三へ五へにて、おりものはせず。わかき人は、菊の五へのからぎぬを心々にしたり。うへは白く、青きがうへをば蘇枋、一へは青きもあり。うへ薄蘇枋、つぎつぎ濃き蘇枋、中に白きまぜたるも、すべてしざまをかしきのみぞかどかどしく見ゆる。いひしらずめづらしく、おどろおどろしき扇ども見ゆ。うちとけたる折こそまほならぬかたちもうち交りて見えわかれけれ。心を盡してつくろひけさうじ、劣らじとしたてたる、女繪のをかしきにいとよう似て、年の程のおとなび、いとわかきけぢめ、髮の少しおとろへたるけしき、また盛のこちたきが、我が前ばかり見わたさる。さては扇よりかみの額つきぞあやしく、人のかたちを品々しくもくだりてもてなす所なんめる。かゝる中に、すぐれたると見ゆるこそかぎりなきならめ。かねてよりうへの女房宮にかけて侍ふ五人は、參りつどひてさぶらふ。內侍二人、命婦二人、御まかなひの人一人。おものまゐるとて、筑前左京のおもとの髮あげて內侍のいでいるすみの柱もとよりいづ。これはよろしき天女なり。左京は青色に柳の無紋の唐衣、筑前は菊の五重の唐衣、裳は例の摺裳なり。御まかなひ橘三位青色のからぎぬからあやの黃なる菊の袿ぞ上着なんめる。（有脫字）一もとあげたり。柱が

くれにてまはにも見えず。殿、若宮いだき奉り給ひて、おまへにいで奉りたまふ。うへ抱きうつし奉らせ給ふ程、いさゝかなかせ給ふ御聲いとわかし。辨の宰相の君御はかしりとて參り給へり。母屋の中とより西に、殿のうへおはするかたにぞ若宮はおはしまさせ給ふ。うへ、とにいでさせ給ひてぞ、宰相の君はこなたに歸りて、いとけそうに、はしたなき心ちしつると、けに面うち赤みて居たまへる顏こまかにをかしげなり。衣の色も、人よりけにきはやしたまへり。暮れゆくまゝにがくどもいとおもしろし。上達部おまへに侍ひたまふ。萬歳樂、太平樂、賀殿などいふ舞ども、長慶子をまかで音聲にあそびて、山のさきのみちを舞ふ。ほどとはくなりゆくまゝに、笛の音も鼓のおとも松風も、こぶかく吹きあはせていとおもしろし。いとよく拂はれたる遣水のこゝちゆきたる氣色して、池の水波たちさわぎそゞろ寒きに、うへの御あこめ、たゞ二つ奉りたまへりたり。左京の命婦のおのが寒かめるまゝに、いとほしがりきこえさするを、人々は忍びて笑ふ。筑前の命婦は故院（圓融）のおはしまししとき、この殿の行幸はいとたびたびありしことなり。そのをりかのをりなど思ひ出でゝいふを、ゆゝしき事もありぬべかめれば、わづらはしとてことにあへしらはず。几帳隔てゝあるなめり。あはれいかなりけむなどだにいふ人あらば、うちこぼしつべかめり。御前の御あそびはじまりて、いとおもしろきに、若宮の御聲うつくしう聞えたまふ。右のおとゞ（顯光）「萬歳樂御聲にあひてなむ聞ゆる」ともてはやしきこえ給ふ。左衞門の督（公任）など「萬歳樂、千秋樂」ともろ聲にずして、あるじの大い殿（道長）「あはれさきざきの行幸をなどてめいぼくありと思ひ給へけむ。かゝりけ

るとも侍りけるものを」と醉ひ泣きしたまふ。さらなることとなれど御みづからもおぼし玄るこそいとめでたけれ。殿はあなたに出でさせたまふ。うへは入らせ給ひて、右のおとゞを御前に召して筆とりて書きたまふ。宮づかさ、殿の家司のさるべきかぎり加階す。頭の辨（道方）してあないは奏せさせ給ふめり。あたらしき宮の御よろこびに、うちの上達部ひき連れて拜し奉りたまふ。藤原ながら門分れたるは、列にもたち給はざりけり。次に別當になりたる右衞門の督、大宮の大夫よ宮のすけ、加階したる侍從の宰相（實成）つぎつぎの人舞踏す。宮の御かたに入らせ給ひて程もなきに夜いたうふけぬ。御輿よすとのゝしれば、いでさせ給ひぬ。』またのあしたに、內の御使、朝霧もはれぬに參れり。うちやすみすぐして見ずなりにけり。今日ぞ始めてそひ奉らせたまふ。ことさらに行幸の後とて、またの日宮の家司、別當、おもと人など職事さだまりけり。かねてもきかでねたきこと多かり。日頃の御玄つらひ例ならずやつれたりしを、あらたまりて御前のありさまいとあらまほし。年頃心もとなく見奉り給ひける御ことのうちあひて、あけたては殿のうへも參り給ひつゝもてかしづき聞えたまふ。にほひいと心ことなり。暮れて月いとおもしろきに、宮のすけ女房にあひて、とりわきたるよろこびも啓せさせむとにやあらむ、妻戶のわたりも御湯殿のけはひにぬれ人の音もせざりければ、この渡殿の東のつまなる宮の內侍の局に立ち寄りて、「こゝにや」とあ內したまふ。宰相は中のまによりて、まださゝぬ格子のかみおしあけて、「おはすや」などあれど、いでぬに、大夫の「こゝにや」とのたまふにさへ、聞き玄のばむもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなど

す。いと思ふとなげなる御けしきどもなり。「我が御いらへはせず、大夫を心ことにもてなしきこゆ、ことわりながらわろし。かゝる所に上﨟のけぢめ、いたうはわくものか」とあはめ給ふ。「けふのたふとさ」など聲をかしうたふ。夜ふくるまゝに月いとあかし。「格子のもととりさげよ」とせめ給へど、いとくだりて上達部の居給はむも、所といひながらかたはらいたし。わかやかなる人こそ、物のほど知らぬやうにあさへたるも罪ゆるさるれ、なにかあされがましと思へば放たず。』御いかは霜月のついたちの日、例の人々の之たてゝのぼりつどひたる御前のありさま、繪に書きたるものあはせの所にぞいとよう似て侍りし。御帳の東のおましのきはに、御几帳を奧のみ曹司より廂の柱まで、ひまもあらせず立てきりて、南面におまへのものはまゐりすゑたり。西によりて大宮のおもの、例の沈のをしき、何くれのたいなりけむかし。そなたのことは見ず。御まかなひ宰相の君、讃岐とりつぐ。女房も、さいしもとゆひなど之たり。若宮の御まかなひは大納言の君、ひんがしによりて參りすゑたり。ちひさき御だい、御皿ども、御箸の臺、洲濱なども、ひゝな遊の具と見ゆ。それよりひんがしのまの廂のみす少しあげて、辨の内侍、中務の命婦、小中將の君など、さべいかぎりぞとりつぎつゝまゐる。奧にゐて委しうは見侍らず。今宵少輔のめのと色ゆるさる。たゞしきさまうちしたり。宮抱き奉れり。御帳の内にて殿のうへ、抱きうつし奉り給ひて、ゐざりいでさせ給へり。ほ影の御さま、けはひ殊にめでたし。赤色のからの御ぞ、地摺の御裳うるはしくさうぞき給へるも、かたじけなくもあはれに見ゆ。大宮はえび染の五への御ぞ、蘇枋の御こうちき奉れり。殿

もちひはまゐり給ふ。上達部の座は、例の東の對の西おもてなり。今二所（閑院公季）の大臣はまゐり給へり。はしのうへにまゐりて、又醉ひ亂れてのゝしりたまふ。折櫃物、こものどもなど、殿の御かたよりまうち君たちとりつゞきてまゐれる、高欄につゞけてすゑわたしたり。たちあかしの光の心もとなければ、四位少將などを呼びよせて、ゑそくさゝせて人々は見る。うちの臺盤所にもてまゐるべきに、あすよりは御物忌とて今宵皆急ぎてとりはらひつゝ、宮の大夫みすのもとに參りて「上達部おまへに召さむ」と啓し給ふ。「きこしめしつ」とあれば、殿より始め奉りて皆參り給ふ。はしのひんがしの妻戸の前まで居給へり。女房二へ三へづゝ居渡されたり。みすどもをそのまにあたりて居給へる人々よりつゝ卷き上げたまふ。大納言の君、宰相の君、小少將の君、宮の內侍と居給へり。右のおとゞよりて、御几帳のほころび引き斷ちみだれ給ふ。さたすぎたりとつきしろふも知らず、扇をとりたはぶれごとのはしたなきも多かり。大夫（齊信）かはらけとりて、そなたに出で給へり。御あそびさまばかり……なれど、いとおもしろし。その次のまのひんがしの柱もとに右大將（實資）よりて、きぬのつま袖口數へ給へるけしき人よりことなり。ゑひのまぎれをあなづり聞え、又たれかとはなど思ひ侍りて、はかなきこともいふに、いみじくざれいまめくよりも、けにこそおはすべかめれ。ゑか……盃のずんのくるを大將はおぢ給へど、例のことならひの、千年萬代にてすぎぬ。左衞門の督「あなかしこ、このわたりに若紫や侍ふ」とうかゞひ給ふ。「源氏にかゝるべき人見え給はぬに、かのうへはまいていかでものし給はむ」と聞きゐたり。「三位のすけかはらけとれ」など

あるに、侍從の宰相（成行）たちて、內のおとゞのおはすれば、しもより出でたるを見ておとゞゑひなきしたまふ。權中納言（隆家）すみのまの柱もとによりて、兵部のおもとひこしろひ、聞きにくき戲ぶれ聲も殿のたまはず。恐ろしかるべき夜の御ゑひなめりと見て、事はつるまゝに宰相の君にいひあはせてかくれなむとするに、ひんがしおもてに殿の公達、宰相の中將など入りてさわがしければ、二人御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせ給ひて、二人ながらとらへすゑさせ給へり。「和歌一つづゝつかうまつれ。さらばゆるさむ」とのたまはす。いとはぢておそろしければきこゆ、

「いかにいかゞ數へやるべき八千とせのあまりひさしき君がみよをば」。

「あはれ仕うまつれるかな」と二度ばかりずせさせ給ひて、いととうのたまはせたる、

「あしたづのよはひしあれば（[illegible]）君が代の千とせのかずもかぞへとりてむ」。

さばかり醉ひ給へる御心ちにもおぼしけることのさまなれば、いとあはれにことわりなり。げにかくもてはやし聞え給ふにこそは、萬のかざりもまさらせ給ふめれ。千代もあえましく、御行く末の數ならぬ心ちにだに思ひつゞけらる。宮のおまへきこしめすや、仕うまつれりと、我ほめしたまひて、「宮の御てゝにて、まろわろからず、まろがむすめにて、宮わろく坐しまさず、母もまたさいはひありと思ひて笑ひ給ふめり。よい男はもたりかしと思ひたんめり」と戲ぶれ聞え給ふも、こよなき御醉のまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、さわがしき心ちはしながら、めでたくのみ聞き居させたまふ。殿のうへ聞きにくしとおぼすにや、渡

らせ給ひぬるけしきなれば「おくりせずとて母うらみ給はむものぞ」とて急ぎて御帳のうちをとほらせたまふ。「宮なめしとおぼすらむ、親のあればこそ子もかしこけれ」とうちつぶやき給ふを、人々わらひきこゆ。「入らせ給ふべきことも近うなりぬれど、人々はうちつぎつゝ心のどかならぬに、おまへには御草紙作りいとなませ給ふとて、わけたてはまづ迎ひさぶらひていろいろの紙えり調へて、物語の本どもぞへつゝ、所々にふみかきくばる。かつはとぢ集めしたゝむるを役にてあかしくらす。「何のこゝちかつめたきに、かゝるわざはせさせ給ふ」と聞え給ふものから、よき薄樣ども筆墨などもて參り給ひつゝ、御硯をさへもてまゐり給へれば、とらせ給へるををしみのゝしりて、「物の隈にむかひ侍ひて、「かゝるわざしいづ」とさいなむなれど、かくべき墨筆などたまはせたり。局に物語の本どもとりにやりてかくしおきたるを御前にあるほどにやをらおはしましてあさらせ給ひて、皆内侍のかんの殿に奉り給ひてけり。よろしう書きかへたりしは皆ひき失ひて、心もとなき名をぞとり侍りけむかし。若宮は御物語などせさせたまふうちに心もとなくおぼしめす。ことわりなりかし。御前の池に水鳥どもの日々に多くなりゆくを見つゝ、いらせ給はぬさきに雪降らなむ、このお前のありさまいかにをかしからむと思ふに、あからさまにまかでたるほど、二日ばかりありてしも雪は降るものか。見所もなきふる里の木だちを見るにも、ものむつかしう思ひ亂れて、年頃つれづれにながめあかしくらしつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空の氣色、月のかげ、霜雪をみて、その時來にけりとばかり思ひわきつゝ、いかにやいかにとばかり、行く

末の心ぼそさはやる方なきものから、はかなき物語などにつけてうちかたらふ人、おなじ心なるはあはれにかきかはし、少しけどほきたよりどもを尋ねてもいひけるを、唯これをさまざまにあへしらひそゞろごとにつれづれをば慰めつゝ、世にあるべき人數とはおもはずながらさしあたりてはづかしいみじとおもひ志るかたばかりのがれたりしを、さも殘せることなく思ひしる身のうさかな。試に物語をとりて見れども見しやうにもおぼえず。あさましくあはれなりし人のかたらひしあたりも、我をいかにおもなく、心淺きものと思ひおとすらむとおしはかるに、それさへいとはづかしくて、えおとづれやらず。心にくからむと思ひたる人は、大空にては文やちらすらむなど疑はる心かめれば、いかでかは我が心の中あるさまをも深う推し量らむと、ことわりにていとあいなければ、中絶ゆとなけれどおのづからあまたかき絶ゆるも、すみ定らずなりにたりとも思ひやりつゝ、音なひくる人もかたうなどしつゝ、すべてはかなき事にふれてもあらぬ世にきたる心ちぞ、こゝにてしもうちまさり物あはれなりけり沉紀。たゞえさらずうちかたらひ、すこしも心とめて思ふ、こまやかに物をいひかよふ、さしあたりておのづからむつびかたらふ人ばかり、少しなつかしく思ふぞものはかなきや。大納言の君の、よるよるは御まへにいと近うふし給ひつゝ、物がたり志給ひしけはひの戀しきも、猶世に志たがひぬるこゝろか。

「うきねせし水のうへのみこひしくてかものうはげにさへぞおとらぬ」。

かへし、

「うちはらふともなきころのねざめにはつがひしをしぞよはに戀しき」(歴子)。

かきざまなどさへいとをかしきを、まほにもおはする人かなと見る。雪を御覽じて、「折しも罷でたる事をなむいみじくにくませ給ふ」と人々ものたまへり。殿のうへの御消そこには、「まろがとゞめしたびなれば、殊更に急ぎまかでゝ疾く參らむとありしも、そらごとにて程經るなめり」とのたまはせたれば、たはぶれにてもさきこえさせ給はせしことなれば、かたじけなくて參りぬ。』入らせ給ふは十七日なり。戌の時などきゝつれど、やうやう夜ふけぬ。皆髮あげつゝ居たる人三十よ人、その外にも見えわかず。もやのひんがしおもて東の廂に、うちの女房も十よ人、南の廂の妻戸隔てゝ居たり。御輿には宮の宣旨乘る。絲毛の御車に殿のうへ、少輔の乳母、若宮いだき奉りて乘る。大納言、宰相の君こがねづくりに、次の車に小少將、宮の內侍、次にうまの中將と乘りたるをわろき人と乘りたりと思ひたりしこそあなことごとしと、いとゞかゝるありさまむつかしう思ひ侍りしか。とのもりの侍從の君、辨の內侍、次に左衞門の內侍、殿の宣旨、式部とまでは次第しりて、つぎつぎは例の心々にぞ乘りける。月の隈なきにいみじのわざやと思ひつゝ足をそらなり。うまの中將の君を先にたてたれば、行くへも知らずたどたどしきさまこそ我がうしろを見る人耻かしくも思ひしらるれ。細殿の三の口に入りて臥したれば、小少將の君もおはして、猶かゝる有樣のうきことをかたらひつゝ、すくみたる衣どもおしやりわつごえたる着重ねて火取に火をかき入れて、身もひえにけるものゝはしたなさをいふに、侍從の宰相、左の宰相の中將、公信の中將など、つぎつぎ

によりきつゝ、とぶらふもいとなかなかなり。今宵はなきものと思はれてやみなばやと思ふを、人に問ひ聞き給へるなるべし。「いとあしたにまゐり侍らむ、今宵は堪へがたく身もすくみて侍る」などことなくいひつゝ、こなたの陣のかたより出づ。おのがじゝ家路と急ぐも、なにばかりの里人ぞはと思ひおくらる。我が身によせては侍らず。大かたの世のありさま、小少將の君のいとあてにをかしげにて世をうしと思ひしみて居給へるを見侍るなり。父君より事始まりて、人のほどよりはさいはひのこよなく後れ給へるなんめりかし。よべの御贈物(道長贈物)今朝ぞこまかに御覽ずる。御ぐしのはこのうちの具どもいひつくし見やらむ方もなし。手箱ひとよろひ片つかたには白き色紙、作りたる御草紙ども、古今、後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつゝ、侍從の中納言(成行)と延幹と、おのおの草紙一つに四卷をあてつゝかゝせ給へり。表紙は、ら、紐おなじからのくみ、かけこのうへに入れたり。したには能宣、元輔やうのいにしへいまの歌よみどもの家々の集書きたり。延幹と近澄の君とかきたるは、さるものにて、これはたゞけぢかうもてつかはせ給ふべき、見知らぬものどもにしなさせ給へる。今めかしうさまことなり。

五節は廿日にまゐる。侍從の宰相(實成)に舞姬のさう束などつかはす。右の宰相の中將(兼隆)の五節にかづら申されたるつかはすついでに、箱一よろひにたきもの入れて心葉、梅の枝をしていどみ聞えたり。俄に營む常の年よりもいと見ましたるきこえあれば、ひんがしのおまへのむかひなるたて蔀にひまもなくうちわたしつゝ、ともしたる火の光晝よりもはしたなげなるに、

歩み入るさまどもあさましうつれなのわざやとのみ思へど、人のうへとのみおぼえず。たゞから殿上人のひたおもてにさしむかひ、ゑそくさゝぬばかりぞかし。へいまんひきおひやるとすれど、大かたのけしきは同じことぞ見るらむと思ひいづるも、まづ胸ふたがる。業遠の朝臣のかしづき錦の唐衣、暗の夜にもものに紛れずめづらしう見ゆ。きぬかちにみじろきもせでたをやかならずぞ見ゆる。殿上人こゝろことにもてかしづく。こなたにうへも渡らせ給ひて御覽ず。殿も忍びて遣戸よりとにおはしませば、心にまかせたらずうるさし。ながきよのは、たけどもひとしく整ひ、いとみやびかに心にくきけはひ、人に劣らずと定めらる。右の宰相の中將のあるべきかぎりは見なしたり。ひすましのふとりと、のひたるさまぞさとびたりと人はゝゑむなりし。はてに藤宰相の思ひなしに、いまめかしく心ことなり。かしづき十人あり。また廂のみすおろして、こぼれ出でたるきぬのつまどもゑたりがほに思へるさまどもよりは、見所まさりてはかゞげに見えわたさる。』寅の日のあした殿上人まゐる。常のことなれど、月頃にさとびにけるにや、わか人たちの珍しと思へるけしきなり。さるは摺れる衣も見えずかし。その夜さり春宮のすけ(侍從)召してたき物たまふ。大きやかなる箱一つに高う入れさせ給へり。尾張へは殿のうへぞつかはしける。その夜はおまへのこゝろみとか。うへに(イも)渡らせ給ひて御覽ず。若宮(餘後)「おはしませばうちまきしのゝしる。常にことなる心ちす。物うければ暫しやすらひ、ありさまに從ひて參らむと思ひて居たるに、小兵衛、小兵部などもすびつにゐて「いとせばければ、はかばかしう物も見え侍らず」などいふほどに、殿おはしま

して、「なとてからうてすぐしては居たる、いざもろともに」と責めたてさせ給ひて、心にもあらずまうのぼりたり。舞姫どものいかに苦しからむと見ゆるに、尾張守のぞ心ち惡しかりていぬる、夢のやうに見ゆるものかな。事はて丶、おりさせ給ひぬ。この頃の公達は、唯五節所のをかしきことをかたる。「すだれのはしもかうさへ心々にかはりて、出で居たる頭つき、もてなしけはひなどさへ、更に通はずさまざまになむある」と聞きにく丶かたる。』か丶らぬ年だに、御覽の日のわらはの心ちどもはおろかならざるものを、ましていかならむなど心もとなくゆかしきに、歩み並びつ丶いできたるはあいなく胸つぶれていとほしくこそあれ。さるはとりわきて深う心よすべきあたりもなしかし。われもわれもとさばかり人のおもひて、さし出でたることとなればにや、目うつりつ丶おとりまさりけざやかにも見えわかず。今めかしき人の目にこそふと物のけぢめも見とるべかめれ。たゞかくもりなき晝中に、扇もはかばかしくもたせず、そこらの公達の立ちまじりたるに、さてもありぬべき身のほど心もちゐるといひながら、人に劣らじと爭ふ心ちもいかに臆すらむと、あいなくかたはらいたきぞかたくなしきや。たばの守のわらはの、靑いえらつるばみのかざみ、をかしとおもひたるに、藤宰相のわらはは赤色を着せて、下仕のからぎぬに靑色をおしかへしきたるねたげなり。わらはのかたちも、一人はいとまほには見えず。宰相中將はわらははいとそびやかに髮どもをかし。みな濃きあこめに上着はこ丶ろごころなり。汗衫は五へなる中に、をはりはたゞえび染をきせたり。なかなかゆゑゆゑしくこ丶ろあるさまして、もの丶いろあひつやなど下仕のいとかはす

ぐれたる、扇とるとて六位の藏人どもよるに、心をなげやることそやさしきものから、女には
あらぬかと見ゆれ。我等を彼がやうにていてゐよとあらば、又さてもさまよひありくばかり
にぞかし。かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど目に見ずあさましきものは人の
心なりければ、今より後のおもなさはたゞなれに馴れ過ぎ、ひたおもてにならむも事安しか
しと、身のありさまの夢のやうに思ひつゞけられて、あるまじきことにさへ思ひかゝりてゆ
ゝしくおぼゆれば、めとまることも例のなかりけり。』侍從宰相の五節の局、宮のおまへのた
ゞ見渡すばかりなり。たて蔀のかみより音に聞くすだれのはしも見ゆ。人の物いふ聲もはの
聞ゆ。「かの女御の御かたに、左京うまといふ人なむいとなれてまじりたる」と宰相の中將む
かし見知りて語り給ふを、一夜かのかいつくろひにてゐたりしひんがしなりしなむ、左京と
源少將も見知りて語りたりしを、物のよすがありて傳へ聞きたる人々、「をかしうもありけるかな」
といひつゝ、いざ知らず顏にはあらじ。むかし心にくだちて見ならしけむうちわたりを、か
ゝるさまにてやは出で立つべき。しのぶと思ふらむをあらはさむの心にて、おまへに扇ども
あまたさぶらふ中に、「蓬萊つくりたるをしもえりたる心ばへあるべし。見知りけむやは。箱
の蓋にひろげて日かげをまろめて、そらいたる櫛ども、白きもの、いみじくつまづまをゆひ
そへたり。「少しさだすぎ給ひにたるわたりにて、くしのそりざまなむなほなほしき」と君た
ちのたまへば、今やうのさまあしきまで、つまもあはせたるそらしざまして、くろはうをお
しまろがしてふつゝかにしりさき切りて、白き紙一かさねにたてぶみにしたり。大輔のおも

としてかきつけさす、

「おほかりしとよの宮人さしわきてしるき日かげをあはれとぞ見し」。

おまへには「おなじくばをかしきさまにしなして、扇などもあまたこそ」とのたまはすれど、「おどろおどろしからむも事のさまにわはざるべし。わざとつかはすにては、しのびやかにけしきばませ給ふべきにも侍らず。これはかゝる私事にこそ」と聞えさせて、顔しるかるまじき局の人して、「これ中納言の御ふみ、御殿より左京の君に奉らむ」とたかやかにさしおきつ。引きとゞめられたらむこそ見苦しけれとおもふに、走りきたり。女の聲にて、「いづこより入り來つる」と問ふなりつるは、女御殿のと疑ひなく思ふなるべし。なにばかりの耳とゞむることもなかりつる日頃なれど、五節すぎぬと思ふ内わたりのけはひ、うちつけにさうざうしきをみの日の夜の調樂は、げにをかしかりけり。わかやかなる殿上人など、いかになでりつれづれならむ。高松の小君だちさへこたみ入らせ給ひし夜よりは女房ゆるされて、まもなくとはりありき給へば、いとはしたなげなりや。さだすぎぬるを功にてぞかくろふ。五節こひしなどもことにおもひたらず、やすらひ、小兵衞などや、その裝の裾、汗衫にまつはれてぞ小鳥のやうにさへづり、ざれおはすめる。』臨時の祭の使は、殿の權中將の君(教通)なり。その日は御物忌なれば、殿、御とのゐせさせ給へり。上達部も舞人の君達も籠りて、夜一夜細殿わたり、いとゞもの騒がしきけはひしたり。つとめてうちのおほいとの(公季)の御隨身、この殿の御隨身にさしとらせていにける。ありし箱の蓋に、しろがねのさうし箱をすゑたり。鏡おし入れ

て、沈のくし、白がねのかうがいなど、つかひの君の發かゝせ給ふべきけ志きを志たり。箱の蓋に葦手にうちいでたるは、日かげの返事なめり。文字二つ落ちてあやふし。ことの心違ひてもあるかなと見えしは、かのおとゞの宮よりと心えたまひて、かうことごとしく志なし給へるなりけりとぞ聞きはべりし。はかなかりしたはぶれわざを、いとほしうことごとしうこそ。殿の上もまうのぼりて物御らんず。つかひの君の藤かざしていとものものしくおとなび給へるを、くらの命婦は舞び人には目も見やらずうちまもりうちまもりぞ泣きける。御物忌なれば、み社より丑の時にぞ歸り參れば、御神樂などもさまばかりなり。かねときが去年まではいとつきづきしげなりしを、こよなく衰へたるふるまひぞ、志るまじき人のうへなれど、あはれに思ひよそへらるゝこと多く侍る。』志はすの廿九日にまゐる。始めてまゐりしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたちなれにけるも、うとましの身の程やとおぼゆ。夜いたうふけにけり。御物忌におはしましければ、お前にもまゐらず、心ぼそくてうち臥したるに、前なる人々の、うちわたりは猶いとけはひことなりけり。「里にては今はねなましものを、さもいざとき沓の志げさかな」と色めかしくいひ居たるを聞きて、

「年くれてわが世ふけゆく風の音にこゝろのうちのすさまじきかな」

とぞひとりごたれし。つごもりの夜、つゐなはいとくはてぬれば、はぐろめつけなどはかなきつくろひどもすとてうちとけ居たるに、辨の内侍きて物語して臥し給へり。たくみのく

ら人はなげしのしもに居て、あてきがぬふものゝかさね、ひねり敎へなど、つくづくとしゐたるに、おまへの方にいみじくのゝしる。内侍おこせどとみにも起きず。人の泣きさわぐ音の聞ゆるに、いとゆゝしくものも覺えず。火かと思へどさにはあらず。たくみの君、「いざいざ」とさきにおしたてゝ、「ともかうも宮しもにおはします、まづまゐりて見奉らむ」と内侍を荒らかに突きおどろかして、三人ふるふるふ足も空にて參りたれば、はだかなる人ぞ二人ゐたる。ゆげひ、小兵部なりけり。かくなりけりと見るに、いよいよむくつけし。みづし所の人も皆出で、宮のさぶらひも瀧口も、なやらひはてけるまゝに皆まかでゝけり。手を叩きのゝしれど、いらへする人もなし。おもののやどりのとじを呼びいでたるに、「殿上に兵部丞といふ藏人よべよべ」と耻もわすれて、口づからいひたれば、尋ねけれどまかでにけり。つらきことかぎりなし。式部の丞すけなりぞ參りて、ところどころのさし油どもたゞ一人さしいれられてありく。人々物おぼえずむかひ居たるもあり。上より御使などあり。いみじうおそろしうこそ侍りしか。をさめ殿にある御ぞとりいでさせてこの人々にたまふ。ついたちのさうぞくはとらざりければさりげもなくてあれど、はだかすがたは忘られず恐ろしきものから、をかしうともいはず、こといみもしあへず。』正月一日（寛弘六年）かん日なりければ、若宮の御いたゞきもちひのこと留まりぬ。三日ぞまうのぼらせ給ふ。ことしの御まかなひは大納言の君、さうぞく、ついたちの日は紅、えび染、からぎぬは赤色、地摺の裳。二日紅梅の織物、かいねりに濃き靑色のからぎぬ、いろずりの裳。三日はからあやの櫻がさね、からぎぬは蘇枋の織物、搔練

は、濃きをきる日は紅はなかに、紅をきる日は濃きを中になど、例のことなり。萠黄、蘇枋、山吹のこきうすき、紅梅、薄色など、常のいろいろを一たびに六つばかりとうはぎとぞいとさまよき程にさぶらふ。』宰相の君の御はかしとりて殿のいだき奉らせ給へるにつゞきてまうのぼり給ふ。紅の三へ五へ三へ五へとまぜつゝ、おなじ色のうちたる七へに、一へをぬひかさねぬひかさねまぜつゝ、うへに同じ色のかたもんの五へ、袿、えび染のうきもんのかたきの紋を織りたる、縫ひざまさへかどかどし。三へがさねの裳、あか色のからぎぬ、一への紋を織りて、しざまもいとからめいたり。いとをかしげに髪なども常よりつくろひ、まして、やうだいもてなしらうらうしくをかし。たけだちよき程にふくらかなるひとの、顔いとこまかににほひをかしげなり。大納言の君は、いとさゝやかにちひさしといふべきかたなる人の、白ううつくしげにつぶつぶと肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髪たけに三寸ばかりあまりたるすそつき、かんざしなどぞすべて似るものなくこまかにうつくしき。顔もいとらうらうしく、もてなしなどらうたげになよびかなり。宣旨の君は、さゝやけ人のいとほそやかにそびえて、髪の筋こまやかに淸らにて、おひさがりのすゑより、一尺ばかりあまり給へり。いと心恥かしげに、きはもなくあてなるさましたまへり。ものよりさし歩みて出でおはしたるもわづらはしう心づかひせらるゝこゝちす。あてなる人はかうこそあらめと、心ざまものうちのたまへるも覺ゆ。この次に人のかたちを語り聞えさせば、物いひさがなくや侍るべき。たゞいまをや。さしあたりたる人の事はわづらはし。いかにぞやなど、すこしもかたはなるは

いひ侍らじ。宰相の君はきたの三位のよ。ふくらかにいとやうだいこまめかしう、かどかどしきかたちしたる人の、うちゐたるよりも見もてゆくに、こよなくうちまさりらうらうしくて、口つきに、はづかしげさも匂ひやかなることもそひたり。もてなしなど、いと美々しくはなやかにぞ見えたまへる。心ざまもいとめやすく心うつくしきものから、またいとはづかしき所そひたり。小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。やうだいいと美くしげに、もてなし心にくゝ、心ばへなども我が心とは思ひとる方もなきやうに、ものつゝみをし、いと世をはぢらひ、あまり見ぐるしきまでこめい給へり。はらぎたなき人、あしざまにもてなしいひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて身をもうしなひつべく、あえかにわりなきところつい給へるぞ、あまりうしろめたげなる。』宮の內侍ぞまたいと淸げなる人、たけたちいとよきほどなるが、ゐたるさますがたつきいとものものしく、「今めいたるやうだいにて、こまかにとりたてをかしげとも見えぬものから、いと物淸げにうひうひしく、なか高き顏して、色のあはひ白きなど、人にすぐれたり。頭つきかんざし額つきなどぞ、あなものきよげと見えて、はなやかにあいきやうづきたる。たゞありにもてなして、心ざまなどもめやすく、露ばかりいづかたざまにも後めたいかたなく、すべてさこそあらめと人のためしにしつべき人がらなり。えんがりよしめく方はなし。式部のおもとは弟なり。いとふくらけさすぎて肥えたる人の色いと白くにほひて、顏ぞいとこまかによしばめる髮もいみじくうるはしくて長くはあらざるべし。つくろひたるわざして宮に

はまゐる。ふとりたるやうだいの、いとをかしげにも侍りしかな。まみひたひつきなど、まことにきよげなり。うちゑみたるあいきやうもおほかり。わかうどの中にかたちよしと思へるは小大夫、源式部。小大夫は(四字など いよはイさ)ゝやかなる人のやうだい、いと今めかしきさまして、髪うるはしく、もとはいとこちたくて、たけに(イは)一尺にあまりたりけるを、おちはそりてはべり。顏もかどかどしう、あなをかしの人やとぞ見えて侍る。かたちはなほすべき所なし。源式部はたけよきほどにそびやかなるほどにて、顏こまやかに見るまゝに、いとをかしくらうたげなるけはひ、ものきよくかはらかに、人のむすめとおぼゆるさましたり。小兵衞の丞なども、いときよげに侍り。それらは殿上人の見のこすすくなかり。たれもとりはづしてはかくれなけれど、人ぐまをもようゐするに、かくれてぞはべるかし。宮木の侍從こそ、いとこまかにをかしげなりし人。いとちひさくほそくなほわらはにてあらせまほしきさまを、心とおひつきやつしてやみ侍りにし。かみの袿に少しあまりて、末をいとはなやかにそぎてまゐり侍りしぞはてのたびなりける。顏もいとよかりき。五節の辨といふ人はべり。平中納言(信説)のむすめにしてかしづくと聞えしが、繪にかいたるかほして、額いたうはれたる人の、まじりいたうひきく、顏もこゝはと見ゆる所なくいとゑろう、手つきかひなつきいとをかしげに、髪は見はじめ侍りし春は、たけに一尺ばかりあまりてこちたく多かりげなりしが、あさましう分けたるやうにおちて、すそもさすがに細らず、長さは少しあまりて侍るめり。こまといふ人、髪いと長くはべりし。むかしはよき若人、今はことぢにかはさすやうにてこそさとゐして侍る

なれ。かういひいひて、心ばせぞかたう侍るかし。それもとりどりにいとわろきもなし。又すぐれてをかしう心重く、かどゆゑもよしもうしろやすさも、みな具することはかたし。さまざまいづれをかとるべきと覺ゆるぞ多く侍る。さもけしからずも侍ることゞもかな。齋院〔選子〕に中將の君といふ人侍るなり。聞きはべるたよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。いとこそえんに、我のみ世には物のゆゑしり、心深きたぐひはあらじ、すべて世の人は心も肝もなきやうに思ひて侍るべかめる。見侍りしにすゞろに心やましう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくゝこそ思ひ給へられしか。文かきにもあれ、歌などのをかしからむは我が院よりほかに誰か見知り給ふ人のあらむ、世にをかしき人のおひいでば、わが院こそ御らんじ知るべけれなどぞ侍る。げにことわりなれど、わが方ざまのことをさしもいはゞ、齋院よりいできたる歌のすぐれてよしと見ゆるも殊に侍らず、たゞいとをかしうよしよしゝうはおはすべかめる所のやうなり。さぶらふ人を比べていどまむには、この見たまふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを、つねに入りたちて見る人もなし。をかしき夕月夜ゆゑあるありあけ、花のたより郭公のたづね所にまゐりたれば、院はいと御心のゆゑおはしてそのさまはいと世ばなれ神さびたり。またまぎるることもなし。うへにまうのぼらせ給ふ、もしは殿なむまゐりたまふ、御とのゐなるなど、ものさわがしきをりもまじらず、もてつけ、おのづから知り好む所となりぬれば、えんなる事どもをつくさむ中に、何のあうなきいひすぐしをかはえ侍らむ。かういとうもれ木ををりいれ

たる心ばせにてかの院に交らひ侍らば、そこにて恋らぬ男にいであひ物いふとも、人のあふなき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがして、おのづからなまめきならひ侍りなむをや。まして若き人のかたちにつけて、年の齢につゝましきとなきが、おのが心に入れてけさうだち、物をもいはむと好みたちたらむはこよなう人に劣るも侍るまじ。されどうちわたりにて明暮見ならしきしろひ給ふ女御きさいおはせず、その御方、かのほそ殿といひならぶる御あたりもなく、男も女もいどましきこともなきにうちとけ、宮のやうとして色めかしきをば、いとあはあはしとおぼしめいたれば、少しよろしからむとおもふ人は、おぼろげにていでゐ侍らず。心やすく物耻せず、とあらむかゝらむの名をもをしまぬ人、はた殊なる心ばせのぶるもなくやは。たゞさやうの人のやすきまゝに、立ちよりてうちかたらへば、中宮の人、うもれたり、もしは用意なしなどもいひ侍るなるべし。上﨟中﨟のほどぞあまりひきいりそうそめきてのみ侍るめり。さのみにして、宮の御ため物の飾にはあらず、見ぐるしとも見はべり。これらをかくえりて侍るやうなれど、人は皆とりどりにて、こよなうおとりまさるとも侍らず、その事よければかの事おくれなとぞ侍るめるかし。されどわかうどだにおもりかならむと、まめだち侍るめる世に、見苦しう、ざれ侍らむもいとかたはならむ。たゞ大かたをいとかくなさけなからずもがなと見侍る。されば宮の御心わかぬ所なく、らうらうしく心にくゝおはしますものを、あまりものづゝみせさせ給へる御心に、なにともいひいでじ、いひいでたらむもうしろやすくはぢなき人は、世にかたはものとおぼしならひたり。げに物の

をりなどなかなかなることしいでたる、後れたるには劣りたるわざなりかし。ことに深き用意なき人の、所につけて我はがほなるが、なまひがひがしき事も、物のをりにいひいだしたりけるを、まだいとをさなき程におはしまして、世になうかたはなりと聞しめしおぼししみにければ、たゞことなる咎なくてすぐすを、たゞめやすき事におぼしたる御けしきに、うちこめいたる人のむすめどもは、皆いとようかなひ聞えさせたる程に、かくならひにけるとぞ心えて侍る。『今はやうやうおとなびさせ給ふまゝに、世のあべきさま、人の心のよきもあしきも、過ぎたるもおくれたるも皆御覧じ知りて、この宮わたりの事を殿上人もなにも目なれて、ことにをかしき事なしと思ひいふべかめりと、みなしろしめいたり。さりとて心にくゝもありはてず、とりはづせば、いとあはつけい事もいでくるものから、なさけなくひき入れたる、かうしてもあらなむとおぼしのたまはすれど、そのならひなほりがたく、又今やうの公達といふもの倒るゝかたにて、あるかぎりみなまめ人なり。齋院などやうの所にて月をも見花をもめづるひたぶるのえんなることは、おのづから求め思ひてもいふらむ。朝夕たちまじりゆかしげなきわたりに、たゞごとをもきゝよせうちいひ、もしはをかしき事をもいひかけられて、いらへはぢなからず、すべき人なむ世にかたくなりにたるとぞ人々はいひ侍るめる。みづからえ見侍らぬことなれば、えしらずかし。かならず人の立ちより、はかなきいらへをせむからに、にくいことをひき出でむぞあやしき。いとようさてもありぬべき事なり。これを人の心ありがたしとはいふに侍るめり。などか必ずしもおもにくゝひき入りたらむが

かしこからむ。又などてひたゝけてさまよひさしいづべきぞ。よき程にをりをりのありさまに從ひて用ゐむことのいとかたきなるべし。まづは宮の大夫參り給ひて啓せさせ給ふべき事ありけるをりに、いとあえかにこめい給ふ上臈たちは對面したまふこともかたし。又あひても何事をか、はかばかしくのたまふべくも見えず。詞の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにも侍らねど、つゝましはづかしと思ふに、ひがごともせらるゝを、あいなしすべてきかれじとほのかなるけはひをも見えじ。外の人は、さぞ侍らざるか。かゝるまじらひなりぬれば、こよなきあて人も皆世に從ふなるを、唯姫君ながらのもてなしにぞ皆ものしたまふ。下臈のいであふを、大納言(道綱)心よからずと思ひたまふなれば、さるべき人々さとにまかで、局なるもわりなきいとまに障るをりをりは、對面する人なくてまかで給ふときも侍るなり。その外の上達部、宮の御方にまゐりなれ、物をも啓せさせ給ふは、おのおの心よせの人、おのづからとりどりにほの知りつゝ、その人ないをりはすさまじげに思ひて立ちいづる人々の、事にふれつゝ「この宮わたりのことうもれたり」などいふべかめるもことわりに侍る。齋院わたりの人もこれをおとしめ思ふなるべし。さりとて我が方の見どころあり、ほかの人は目も見知らじ、ものをも聞きとゞめじと思ひあなづらむぞまたわりなき。すべて人をもどくかたはやすく、我が心をもちゐむことは難かべいわざを、さはおもはでまづわれさかしに人をなきになし世を謗るほどに、心のきはみこそ見えあらはるめれ。いと御覽せさせまほしう侍りしふみかきかな。人の隱しおきたりけるを盜みて、みそかに見せてとりかへし侍りにしかば、

ねたうこそ。』和泉式部といふ人こそおもしろうかきかはしける（元如）。されど和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしりがきたるに、そのかたのざえある人、はかない詞のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと、物おぼえ、歌のことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ。口にまかせたる事どもに、必ずをかしき一ふしの目にとまるよみそへはべり。それだに人のよみたらむ歌なんじことわりゐたらむは、いでや、さまで心はえじ、口にいとうたのよまるゝなめりとぞ、見えたるすぢに侍るかし。はづかしげの歌よみやとは覺え侍らず。丹波守の北の方（從許侍）をば、宮、殿などのわたりには匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやんごとなき程ならねど、まことにゆゑゆゑしく歌よみとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞えたるかぎりははかなき折節のこともそれこそはづかしき口つきに侍れ。やゝもせば腰はなれぬばかりをれかゝりたるうたをよみいで、えもいはぬよしばみごとしても、われかしこに思ひたる人、にくゝもいとほしくも覺え侍るわざなり。淸少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだちまな書きちらして侍るほども、よく見ればまだいと堪へぬことおほかり。かく人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見おとりし行く末うたてのみはべれば、えんになりぬる人は、いとすごうすゞろなるをりも、もの、哀れにすゝみ、をかしき事も見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。かくかたかたにつけて一ふしのおもひいでとるべき事なくて過ぐし侍りぬる人の、殊にゆくすゑのたのみもなきこそ慰めおも

ふ方だに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ。その心なほ失せぬにや、物おもひまさる秋の夜も、はしにいでゐてながめば、いとゞ月やいにしへをめでけむと見えたるありさまを催すやうに侍るべし。世の人の忌むといひ侍るとがをも必ずわたり侍りなむと憚られて、すこし奥にひき入りてぞさすがに心のうちには盡きせず思ひつゞけられ侍る。風の涼しき夕暮、きゝよからぬひとりことをかきならしては、嘆きくはゝると聞き知る人やあらむと、ゆゝしくなど覺え侍るこそをこにもあはれにも侍りけれ。さるはあやしう黑みすゝけたる曹司に、さうの琴、和琴しらべながら心に入れて雨ふる日琴柱たふせなどもいひ侍らぬまゝに、ちり積りて、よせたてたりしづしと柱のはざまに、くびさし入れつゝ、琵琶もひだり右にたて侍り。おほきなる厨子一よろひにひまもなく積みて侍るもの、一つにはふる歌物かたりのえもいはず蟲の巣になりわたる、むつかしくはひちればあけてみる人も侍らず。かたつ方にふみども、わざとおきかさねし人[illegible]も侍らずなりにしのち手觸るゝ人も殊になし。それらをつれづれせめてあまりぬるとき、一つ二つひきいでゝ見侍るを、女房集りて、「おまへはかくおはすれど御さいはひは少きなり。なでふ女がまんなふみはよむ。昔は經よむをだに人は制しき」としりうごちいふを聞きはべるにも、物忌みける人の行く末命ながゝるめるよしともみえぬためしなりといはまほしく侍れば、思ひくまなきやうなり。ことはたさもあり、「萬の事人」によりてことごとなり。ほこりかにきらきらしく心ちよげに見ゆる人あり。よろづつれづれなる人の紛るゝことなきまゝに、ふるきはんでひきさがし、おこなひがちに口

ひゞらかし、ずゞの音たかきなどいと心づきなく見ゆるわざなりと思ひ給へて、心にまかせつべき事をさへ我が使ふ人のめにはゞかり心につゝむ。まして人の中にまじりてはいはまほしき事も侍れど、いでやと思ほえ、心うまじき人にはいひてやくなかるべし。ものもどきうちし、我はと思へる人の前にてはうるさければ、物いふこともものうく侍る。ことにいとしも物のかたがたえたる人はかたし。たゞ我が心のたてつるすぢをとらへて、人をばなきになすなめり。それ心よりほかの我が面影をはづと見れど、えさらずさしむかひまじり居たることだにあり。ゑかじかさへもどかれかなしと、はづかしきにはあらねど、むつかしと思ひて、ぼけられたる人に、いとゞなりはてゝはべれば、かうはおしはからざりき。いとえんにはづかしく、人に見えにくげにそはそは(ひいひやう)しきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人ともおもはず、ねたげに見落さむものとなむ、みな人々いひおもひつゝ憎みしを見るにはあやしきまでおいらかに、ことひととなむ覺ゆるとぞ皆いひ侍るに、はづかしく人にかうおいそけものと見おとされにけるとは思ひ侍れど、たゞこれぞ我が心とならひもてなし侍るありさま、宮のおまへも、いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、「人よりけにむつましうなりにたるこそ」とのたまはするをりをりはべり。くせぐせしくやさしだちはぢられ奉る人にも、そばめだてられで侍らまし。さまよう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどやかにおちゐぬるをもとゝしてこそ、ゆゑもよしもをかしくうしろやすけれ。もしは色めかしくあだあだしけれど、本性の人がらくせなく、かたはらのため見えにくきさませずだに

なりぬれば、にくうは侍るまじ。我はとくすしく、くちもち、けしきことごとしくなりぬる人はたちゐにつけてわれようい せらる丶ほどにその人にはめとゞまる。めをしとゞめつれば、必ずものをいふ詞のうちにも、きてゐるふるまひ、立ちていくうしろでにも必ずくせは見つけらる丶わざに侍り。物いひ少しうちあはずなりぬる人と、人のうへうちおとしめつる人とは、まして耳も目もたてらる丶わざにこそ侍るべけれ。人の癖なきかぎりは、いかではかなき言の葉をもきこえじとつ丶み、なげのなさけつくらまほしう侍り。人すゝみてにくい事しいでつるは、わろき事をあやまちたらむも、いひ笑はむに憚りなうおぼえ侍り。いと心よからむ人は、我をにくむとも、我はなほ人を思ひうしろむべけれど、いとさしもえあらず、慈悲ふかうおはする佛だに、三寶をそしるつみはあさしとやは說き給ふなる。まいてかばかりに濁ふかき世の人は、なほつらき人はつらかりぬべし。それを我まさりていはむと、いみじき言の葉をいひつけ、むかひゐて氣色あしうまもりかはすとも、さはあらずもてかくし、うはべはなだらかなるとのけぢめぞ、心のほどは見え侍るかし。左衞もの內侍といふ人はべり。あやしうすゞろによからず思ひけるも、え知り侍らぬ、心憂きしりうごとのおほうきこえ侍りし。『うちのうへ(一條)の源氏の物語人によませ給ひつ丶聞しめしけるに「この人は日本紀をこそよみ給へけれ。誠にざえあるべし」とのたまはせけるを、ふとおしはかりに「いみじうなむざえかある」と殿上人などにいひちらして日本紀の御局とぞつけたりける。いとをかしくぞ侍る。この故里の女のまへにてだにつ丶み侍るものを、さる所にてざえさがしいで侍らむ

よ。この式部の丞といふ人のわらはにて、史記といふふみ讀み侍りし時きゝならひつゝ、かの人は遲うよみとり忘るゝ所をも怪しきまでぞさとし侍りしかば、ふみに心入りたる親は「口をしう、をのこ子にてもたらぬこそさいはひなかりけれ」とぞ常に歎かれ侍りし。「それを男だにざえがりぬる人はいかにぞや。華やかならずのみ侍るめるよ」とやうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづゝにあさましく侍り。讀みしふみなどいひけむもの、目にもとゞめずなりて侍りしに、いよいよかゝる事聞き侍りしかば、いかに人も傳へ聞きてにくむらむと、はづかしさに、御屛風のかみにかきたる事をだによまぬ顏をし侍りしを、宮のおまへにて文集の所々よませ給ひなどして、さるさまのことしろしめさせまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬものゝひまひまに、をとゝしの夏ごろより樂府といふふみ二くわんをぞしどけなくかうをしへ、たへ聞えさせて侍るも隱しはべり。宮も忍びさせ給ひしかど、殿もうちもけしきをしらせ給ひて、御ふみどもをめでたう書かせ給ひてぞ殿は奉らせ給ふ。まことにかうよませ給ひなどすることと、はたかの物いひの内侍はえ聞かざるべし。しりたらばいかに謗り侍らむものと、すべて世の中事わざしげくうきものに侍りけり。いかに今はことといみし侍らじ。人といふともかくいふとも、唯阿彌陀佛にたゆみなく經をならひ侍らむ。世のいとはしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、ひじりにならむにけたいすべうも侍らず、たゞひたみちに背きても、雲にのぼらぬ程のたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るな

り、年もはたよき程になりもてまかる。いたうこれよりおいぼれて、はためづらとぞ經よま
す。心もいとゞたゆさまさり侍らむものを、心深き人まねのやうに侍れど、今はたゞかゝる
かたの事をぞ思ひ給ふる。それ罪ふかき人は又必ずしもかなひ侍らじ。さきの世志らるゝこ
とのみ多く侍れば、よろづにつけてぞかなしう侍る。御文にえかきつゞけ侍らぬことを、よ
きもわしきも、世にある事身の上のうれへにても、殘らずきこえさせおかまほしう侍るぞか
し。けしからぬ人を思ひ聞えさすとても、かゝるべきことやは侍る。されどつれづれにおは
しますらむ。またつれづれの心を御らんぜよ。又おぼさむことのいとかうやくなしことおほ
からずともかゝせたまへ。見給へむ夢にてもちり侍らばいといみじからむ。またまたもおほ
くぞ侍る。この頃ほんでども皆やりやきうしなひ、ひゝななどのやつくりに、この春志はべ
りにし後、人のふみも侍らず。かみにわざとかゝじとおもひ侍るぞいとやつれたる。事わろ
きかたには侍らず。ことさらに御覽じては疾うたまはらむ、えよみ侍らぬ所々、文字おとし
ぞ侍らむ。それは何かは御覽じももらさせ給へかし。かく世の人ことのうへを思ひ思ひ、は
てにとぢめ侍れば、身を思ひすてぬ心のさもふかう侍るべきかな。何せむとにか侍らむ。』十
一日の曉御堂（法成寺）へわたらせ給ふ。御車には殿のうへ、人々は舟にのりてさしわたりけり。そ
れにはおくれてようさりまゐる。敎化行ふところ、山寺の作法うつして大懺悔す。志らい塔
などおほう繪にかいて興じあそび給ふ。上達部多くはまかでたまひて少しぞとまり給へる。
後夜の御導師、敎化とも、說相、みな心々二十人ながら、宮のかくておはしますよしを、こぢ

かひきしなことは、たえて笑はるゝ事もあまたあり。事はてゝ殿上人舟にのりて、皆漕ぎつゞきてあそぶ。御堂のひんがしのつま、北むきにおしあけたる戸のまへ、いけにつくりおろしたる橋の高欄をおさへて宮の大夫は居給へり。殿あからさまにまゐらせ給へるほど、宰相の君など物語して、お前なればうちとけぬ用意、内もとをもをかしきほどなり。月おぼろにさしいでゝ、若やかなる君達今様歌うたふも舟にのりおほせたるを、若うをかしく聞ゆるに、大藏卿正光のおふなおふなまじりて、さすがに聲うちそへむもつゝましきにや、忍びやかにて居たるうしろでのをかしう見ゆれば、みすのうちの人もみそかに笑ふ。「舟のうちにや、老をばかこつらむ」といひたるを、きゝつけ給へるにや、大夫、「徐福文成誑誕おはし」とうちずし給ふ。聲もさまもこよなういまめかしく見ゆ。「池のうき草」とうたひて、笛など吹きあはせたる曉がたの風のけはひさへぞ心ことなる。はかないことも所からをりからなりけり。源氏の物語おまへにあるを、殿の御覽じて、例のすゞろごとゞも出できたるついでに、梅のえだ(した)に志かれたる紙にかゝせ給へる、

「すきものと名にしたてれば見る人のをらですぐるはあらじとぞおもふ」。

たまはせたれば、

「人にまだをられぬものを誰かこのすきものぞとはくちならしけむ。

めざましう」ときこゆ。渡殿にねたる夜、戸をたゝく人ありときけど、おそろしさに音もせでわかしたるつとめて、

「よもすがら水鷄よりけになくなくぞまきの戸口にたゝきわびつる」。

かへし、

「たゞならじとばかりたゝく水鷄ゆゑあけてはいかに悔しからまし」。

ことし正月三日(寛弘七年)まで、宮(後一條)たちの御いたゞきもちひに日々にまうのぼらせ給ふ。御供に皆上﨟も參る。左衞門の督いだき奉り給ひて、殿もちひはとりつぎてうへに奉らせ給ふ。ふたまの東のとに向ひて、うへの戴かせ奉らせ給ふなり。おりのぼらせたまふ儀式見ものなり。大宮(後三條院)はのぼらせ給はず。今年のついたち、御まかなひ宰相の君、例の物の色あひなど殊にいとをかし。藏人はたゝにみやうぶつかうまつる。髮上げたるかたちなどこそ御まかなひはいとことに見え給へ。わりなしや、くすりの女官にて、ふやの博士、さかしだちさいらぎゐたり。たうやくくばれる例の事どもなり。二日、宮の大饗はとまりて、臨時客ひんがしおもてとりはらひて、例のことしたり。上達部は傅の大納言(道綱)右大將(實資)中宮大夫(齊信)四條大納言(公任)權中納言(隆家)侍從の中納言(行成)左衞門督(賴通)有國の宰相　大藏卿(正光)左兵衞督(實成)源宰相(賴定)むかひむかひ居給へり。源中納言(俊賢)、左兵衞督　左右宰相中將(經房兼隆)はなげしのしもに殿上人の座の上につき給へり。若宮(後朱雀)いだきいでて奉り給ひて、例のことゞもいはせ奉り、うつくしみ聞えさせ給ふ。うへに「いとみやいだき奉らむ」と殿のたまふをいとねたきことにし給ひて「あゝ」とさいなむを、うつくしがりきこえ給ひて申し給へば、右大將など興じきこえたまふ。うへにまゐり給ひて、うへ殿上にいでさせ給ひて御あそびありけり。殿例の醉はせ給へり。わづらはしとおもひてかく

ろへ居たるに、「など御てゝの御まへの御あそびにめしつるに、さぶらはで急ぎまかでにける。ひがみたり」などむつからせたまへる。「さるは歌一つ仕うまつれ。親のかはりには、常の日なり。よめよめ」とせめさせたまふ。うちいでむにいとかたはならむ、こよなからぬ御醉なめれば、いとゞ御色あひきよげに、ほかげはなやかにあらまほしくて「年ごろ宮（彰子）のすさましげにて一ところおはしますをさうざうしく見奉りしに、かくむつかしきまでひだり右に見奉るこそうれしけれ」と大殿でもりたる宮たちを、ひきわけつゝ見奉りたまふ。「野邊に小松のなかりせば」とうちずしたまふ。あたらしからむことよりも、をりふしの人のありさまめでたく覺えさせ給ふ。』またの日夕つかた、いつしかと霞みたる空をつくりつゞけたる軒のひまなきにて、たゞ渡殿のうへのほどをほのかに見て、中務のめのとゝよべの御口ずさみをめできこゆ。この命婦ぞ、ものゝこゝろえてかどかどしくは侍る人なれ（如元）。あからさまにまかでゝ、二の宮の御いかは正月十五日、その曉まゐるに、小少將の君、明けはてゝはしたなくなりたるに參り給へり。例のおなじ所に居たり。二人の局をひとつにあはせて、かたみに里なるほどもすむ。一たびにまゐりては几帳ばかりへだてにてあり。殿ぞわたらせ給ふ。かたみに知らぬ人もかたらはるゝなど、聞きにくゝ、されどたれもさるうとうとしきことなければ、心やすくてなむ。日たけてまうのぼる。かの君は櫻の織物のうちき、赤色のからぎぬ、例の摺裳着給へり。紅梅に萠黄、柳のからぎぬ、ものすりめなど今めかしければ、とりもかへつべくぞわかやかなる。うへ人ども十七人ぞ宮の御方にまゐりたる。いと宮の御まかなひは橘の三

位。とりつぐ人、はしには小大夫、式部、うちには小少將。みかどきさい、み帳の内に二ところながらおはします。朝日のひかりあひてまばゆきまで耻しげなる御まへなり。うへは御なほし、こぐち奉り、宮は例の紅の御ぞ、紅梅、もえぎ、柳、山吹の御ぞ、上にはえび染の織物の御ぞ、柳のうへしろの御こうちき、もんも色もめづらしく今めかしき奉れり。あなたはいとけそうなれば、この奥にやならすべりとゞまりて居たり。中務の乳母、宮いだき奉りて、御帳のはざまより南ざまにいで奉る。こまかにそはそはしくなどはあらぬかたちの、たゞゆるらかにものものしきさまうちして、さるかたに人をしつべく、かどかどしきけはひぞしたる。えび染の織物の小袿、無紋の青色に櫻のからぎぬ着たり。その日の人のさうぞく、いづれとなくつくしたるを、袖口のあはひわろう重ねたる人しも、御まへのものとりいるとて、そこらの上達部殿上人にさしいでゝ、まぼられつることこそ、後に宰相の君など口をしがり給ふめりし(か脫歟)。さるは惡しくも侍らざりき。たゞあはひのさめたるなり。小大夫は、くれなゐ一かさね、うへに紅梅の濃き薄き五つを重ねたり。からぎぬ櫻、源式部は、濃きにまた紅梅の綾ぞ着て侍るめりし。織物ならぬをわろしとにや、それあながちのことけそうなるにしもこそ、とりあやまちのほの見えたらむ、そばめをもえらせ給ふべけれ。きぬのおとりまさりはいふべきことならず。もちひ參らせ給ふことゞもはてゝ、御だいなどまかでゝ、廂のみすあぐるきはに、うへの女房は御帳の西面のひのおましにおし重ねたるやうにて、なみゐたる。三位をはじめて內侍のすけたちもあまた參れり。宮の人々は、わかうどはなげしのしも、東の廂の

南のさうじ放ちてみすかけたるに上臈は居たり。御帳のひんがしのはざま唯すこしあるに、大納言の君、小少將の君居たまへる所に尋ね行きて見る。うへはひらきの御座に御膳參りすゑたり。おまへのものしたるさまいひつくさむかたなし。すのこに北むきに西をかみにて、上達部、左右内のおほいとの、春宮の大夫、四條の大納言、それよりしもはえ見侍らざりき。御あそびあり。殿上人はこの對の辰巳にあたりたる廊にさぶらふ。地下はさだまれり。かげまさの朝臣、これかぜの朝臣、ゆきよし、ともまさなどやうの人々、うへに四條の大納言はうしとり、頭の辨琵琶、ことは左の宰相、中將さうの笛とぞ。雙調の聲にてあなたふと、次にむしろだ、この殿などうたふ。かく(イく)のものは鳥の破急をあそぶ。との座にもてうしなどをふく。歌にはうしうちたがへて咎めらる。伊勢の海にぞありし(五字イ無)。右のおとゞ「和琴いとおもしろし」など聞きはやしたまひ、ざれたまふめりし。はてには、いみじきあやまちのいとほしきこそ見る人の身さへひえはべりしか。御贈物笛二箱に入れてとぞ見え侍りし。

紫式部日記 終

和泉式部日記（一本作物語）

夢よりもはかなき世の中を歎き侘び（二字イ無）つゝ、あかしくらす程に、はかなくて四月十日（長保五年）あまりにもなりぬればこの下暗がりもていく。はしのかたを眺むれば、ついひぢの上の草の青やかなるも人は殊に（時に人はイ）目とゞめぬをあはれにながむる程に、近きすいがいのもとに人のけはひのすれば誰にかと思ふほどに、さし出でたるを見れば故宮（爲尊）に侍ひしこどねりわらはなりけり。哀れに物を思ふほどに來たれば、「などかいと久しう見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにはと思ふを」などいはすれば「その事とさぶらはでは馴れ馴れしきやうにやとつゝましうさぶらふうちに、日ごろ山なにまかりありき侍りて（なにイ）なむ。いとたよりなくつれづれに候へしかば、御かはりに見參らせむとて、帥の宮（敦道）になむ參りて侍りし」と語れば、「いとよきことにこそあなれ。その宮はいとあてにけぢかうおはしますなるは、昔のやうにはえしもあらじ」などいへば「しかおはしませど、いとけぢかうおはしまして參るや」と問はせ給ふ。「參り侍り」と申し侍りつれば「これ持て參りていかゞ見給ふとて奉らせよ（これ以下十九字これまゐらせよいかゞ見給ふイ）」とて橘の花（二字イ無）を取り出でたれば、「むかしの人の」といはれて（みるイ行）まゐりなむ。いかゞ聞えさせむ」といへば、ことばに聞えさせむもかたはら痛うて、何かはあだあだしくも聞えさせ給はざるを、はかなきことをもと思ひて、

「かをる香によそふるよりは郭公聞かばやおなじ聲やまさ（異作しだ）ると」（泉和）。

さし出でたり。まだはしにおはしましける程に、かの童かくれの方にけしきばみありけば、かくれの方にて御覽じつけて「いかにぞ」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば御覽じて、

「おなじえに鳴きつゝをりし郭公聲はかはらぬものと知らなむ（ナヤ新千）」（道敦）。

と書かせ給ひて童に賜はすとて「斯る事人にいふな。すきがましき事のやうなり」とて入らせ給ひぬ。もて行きたれば、をかしと見れど、常にはとて御文は聞えず、給はせそめて又の日、

「うちいでゞもありにしものをなかなかに苦しきまでも歎く今日かな」

との給はせたり。もとの心深からぬ人の、ならはぬつれづれのわりなくおもはゆるに、はかなき事なれど目とまることなれば御返し聞ゆ、

「けふのまのこゝろにかへて思ひやれながめつゝのみすぐす月日を」。

かく云ば云ばのたまはするに、御返しもときどき聞ゆ。又つれづれと少し慰む心ちしてあるほどに又御文あり。ことばなどこまやかにて、

「かたらはゞ慰むかたもありやせむいふかひなくば思はざらなむ。

あはれなる御物語も聞えばや。忍びてくれにはいかゞ」との給はせたれば、

「慰むと聞けばかたらまほしけれど身のうき事にいふかひぞなき」。

おひたる足にてはかひなくや」と聞えつくれば、思ひかけぬに忍びていかむとおぼして、晝よりさる御心ちして日頃も御文とりつぎて奉る右近のぞうなる人召して忍びて召して、「物

へいかむ」との給はすれば、さなめりと思ひてさぶらふ。「あやしき車にてかくなむ」といはせ給へれば、女いとびなき心地すれどなしと聞ゆべきにもあらず。昔も御返し聞えさせつれば、ありながらはさながら返し奉らむもなさけなし。ものばかりは聞えさせむと思ひて、西の妻戸にわらふださし出で、入れ奉るに、世の人のいへばにやあらむ。誠になべての御さまにはあらずいとなまめかし。これも心づかひせられて、ものなどきこゆるほどに月さし出でぬ。いとあかし。「ふるめかしうおくまりたる身なればかゝる所などには居ならはぬを、いとはしたなき心地もするかな。そのおはする所にすゑ給へ。よもさきざき見給ふらむ人のやうにはあらじ」との給へば、「あやし。今宵のみこそ聞えさすなど思ひ侍れ。さきざきはいかでかは」とはかなき事聞ゆるほどに、夜もやうやう更けぬ。かくてあかしつべきにやとて、

「はかもなき夢をだに見であかしてばなにをか夏の夜がたりにせむ」

との給へばかくなむ、

「よと共にぬるとは袖を思ふみものどかに夢を見るよひぞなき。

まいて」ときこゆ。「かろがろしきありきなどすべきにもあらず。なさけなきやうにおぼすとも、誠に物悲し二字恐あいイきまでこそおぼゆれ」との給ひて、やをらすべり入り給ひぬ。いとわりなき心地すれどいふかひなきに事どもをいひ契りて、明けぬれば歸り給ひぬ。「今のまはいかゞ怪しくこそ」とて、

「戀といへば世のつねのとや思ふらむ今朝の心はたぐひだになし」。

御かへし、
「世の常のことゝもさらにおもほえずはじめて物を思ふ身なれば」
と聞えても猶怪しかりける身かな。こはいかなる事ぞとわはれに、こ宮(爲尊)のさばかりの給ひしものをと悲しう思ひ亂るゝほどに例の童來たり。御文の(語のイ)わらむと思ふほどにさもわらねば、心變しと思ふ程もすぎすぎしや。かへり參るに聞ゆ、
「またまし(つごてイ)もかばかりこそはわらましを(後)思ひもかけぬ今日の夕ぐれ。」
宮御覽じて、げにいとほしうもわるかなとおぼせど、かゝる御わりき更にせさせ給はず。北の方と例の人の中のやうにこそおはしまさねど、夜毎に出でむは怪しとおぼしぬべし。故宮の御はて(六月十三日)まではいたうそしられじとつゝむもいとねんごろに思されぬなるべし(四字缺。ぞイ)。晴きほどにぞ御返しわりける。
「ひたすらに待つともいはゞやすらはで行くべきものを妹が家路に。
おろかにおぼしめすらむと思ふこそ苦しけれ」とわれば、「唯何かこゝには」とて、
「かゝれともおぼつかなくもおもほえずこれも昔のえにこそあるらめ」
と思ひ給ふれば「慰めずば堪へむやは、露を」と聞えたり。おはしまさむと思しめせど日ごろになりぬ。つごもりの日、女、
「郭公世にかくれたる忍びねをいつかは聞かむけふし過ぎなば」
と聞えさせたれど、人々數多さぶらふ程なれば御覽ぜさせで、つとめて(五月一日)もて參りたるを見

給ひて、

「しのび音はくるしきものを郭公こだかき聲を今日よりは聞け」

とて二三日ありて忍びて渡らせ給ひたり。女はものへ參らむとてさうじなどしたるうちに、いとまどほなる御志のなきなめりかしと、なさけなからじとばかりにこそと見れば、殊にものなども聞えで、佛にことつけ奉りてあかしつ。つとめて「いとめづらかにあかしつる」などの給はせて、

「いざやまたかゝる思を知らぬかな逢ひても逢はであくるものとは。

あさまし」とあり。さぞあさましきさまに思しつらむといとほしくて、

「世とともに物思ふ人はよるとてもうちとけて目のあふときもなし。

珍らかにもおぼえ侍らず」と聞えつ。またの日「今日や物に出で給ふ。さて(侍從)いつか歸り給ふべからむ。いかにましておぼつかなからむ」とあれば、

「をり過ぎばさてもこそやめ五月雨の今宵あやめの根をやひかまし

とこそ思ひ給へ、歸りぬべけれ」ときこえて、まうでゝ二三日ばかりありて歸りたれば宮(敦道)より、「いとおぼつかなくなりにければ、參りてと思ふをいと心うかりしにこそ、物うく耻かしう覺えていとおろかにこそはおぼされぬべけれ。日ごろは

つらけれど忘れやはする程ふればいと戀しきに今日はまけなむ。

淺からぬ心のほどをさりとも」とあれば、

「まくるとも見えぬものから玉葛とふ人すらも絶えまがちにて」

と聞えたり。宮例の忍びて渡らせたまへり（おはしましたりイ）。女さしもやはと思ふうちに、日ごろのおこなひに苦しうてうちまどろみたる程に、かど叩くを聞き咎むる人もなし。きこしめす事もあれば人などのあるにやとおぼしめして、やをら歸らせ給ひぬ。つとめて、

「あけざりしまきの戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し。

うきはこれにやと思ふにも哀になむ」とあり。よべおはしましたりけるなめりかし、心もなく寢入りにけるかなと思ひて、

「いかでかはまきの板戸もさしながらつらき心のありなしを見む。

推し量らせ給ふべかめるこそ見せたらば」とあり。今宵もおはしまさまほしけれど、かゝる御ありきを人々もせいし聞ゆるを、うちの大臣（公季）東宮（居貞）などのきこし召さむこともかろがろしきやうなりなどおぼしつゝむ程にいとはるかなり。雨うち降りていとつれづれなるころ、女はいとゞ雲間なきながめに、世の中はいかになりぬるならむとつきせずながめて、すきごとする人々は數多あめれど、唯今はともかくも思はぬを、世の人はさまざまいふべかめれど、身のあらばこそとのみ思ひてすぐす。宮より「雨のつれづれはいかゞ」とて、

「大かたにさみだるゝとや思ふらむ君戀ひわたる今日のながめを」

とあれば、をりすぐい給はぬををかしと見る。あはれなる折しもと思ひて、

「忍ぶらむものとも知らでおのがたゞ身を志る雨と思ひけるかな」

と書きて、紙のひとへを引きかへして、
「ふれば世のいとゞうきみの知らるゝを今日のながめに水まさらなむ。
まちどほにや」と書きすさびたるを御覽じて立ちかへり、
「何せむに身をさへ棄てむと思ふらむ天の下には君のみやふる。
誰もうき世を」とあり。五月六日になりぬ。雨猶やまず。ひとひの御返り事の常よりも物思ひたりしさまなりしを、あはれとおぼし出でゝ、いたく降りあかしゝつとめて、「今宵の雨の音はいとおどろおどろしかりつるを」などまめやかにの給はせたるを、
「夜もすがら何事をかは思ひつる窓打つあめの音を聞きつゝ。
かげに居ながら怪しきまでなむ」と聞えさせたれば、猶いふかひなくはあらずかしと思して御かへし、
「我もさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと」。
晝つかた川の水まさりたりと聞きて人々見るに、宮も御覽じて「今の程いかゞ。水見になむ出でゝ侍りつる。
大水のきしつきたるにくらぶれど深きこゝろはなほぞまされる。
さは知り給へりや」とある、御返し、
「今はよもきしもせじかし大水のふかきこゝろは川と見せつゝ。
かひなしや」と聞えさせたり。おはしまさむとおぼして御火とりなど召すほどに、侍從うの

めのとまうのぼりて「出でさせおはしますはいづちぞ。この事いみじう人々申すなるは。何のやんごとなき人にもあらず。召し使はせおはしまさむと思しめさば（イ御）限は召してこそ使はせおはしまさめ。かろがろしき御みありきは猶いと見苦しき事なり（二字イ無）。そが中にも人々數多いみじく通ふ所なり。びなき事も出でまうできなむ。すべてすべてよからぬことはこの右近のぞうなにがしが始むるなり。故宮もこれこそはゐてありき奉りしか。よる夜中とありかせ給うてはよき事やはある。かゝる御ありきの御供にありかむ人々は大殿（[illegible]）に申さむ。世の中はけふあすとも知らず變りぬべかめり。殿のおぼしおきてし事どももあるものを、世の有樣御覽じはつるまではかゝる御ありきなくてこそおはしまさめ」など聞え給へば、いづちかいかむ、つれづれなればはかなきすさび事なんどするにこそあれ、ことごとしう人のいふべきにもあらずとばかりの給はせむには、怪しくすげなきものにこそあれ、さるはいと口惜しからぬものにこそあれ、呼びてやおきたらましと思せど（イさても）まして聞きにくき事ぞあらむなど思し亂るゝ程におぼつかなくなりぬ。辛うじておはして「あさましう心より外に覺束なくなるをおろかになおぼしそ。御あやまりとなむ思ふ。かく參りくるをびなしと思ふ人々數多あるやうに聞けばいとほしくなむ。大かたもつゝましきうちにいとゞほど經ぬる」とまめやかに物語し給ひて「いざ給へ。今宵ばかり人も見ぬ所あり。心のどかにものも聞えむ」とて車をさし寄せ給ひてたゞのせにのせ給へば、われにもあらず乘りても、人もこそ聞けと思ふ思ふいけば、いたう夜も更けにければ知る人もなし。やをら人もなきらうのあるにさし寄せてお

りさせ給ひぬ。「月もいとわかければおりぬ」と忍びての給へば、わさましきやうなればおりぬ。「さりや人も見ぬ所ぞかし。今よりもかやうにきこえさせむ。人などもある折にやと思へばつゝましうてなむ」など物語わはれにし給ひ、明けぬれば車よせ給ひてのせ給ひて、「御おくりにも參るべけれどわかうなりぬべければ、ほかにありけると人の見むもわいなし」とてとまらせ給ひぬ。女かへる道すがら、あやしのありさやいかに人思ふらむと思へど、あけぼのゝ御すがたのなべてにはあらざりつる御さまも思ひ出でられて、

「よひごとに返しはすれどいかでなほ曉おきは君になさせじ。

苦しかりけり」とあれば、

「朝露のおくるおもひにくらぶればたゞに歸らむよひはまされり。

さらさらにかゝること聞かじ。夜さりは方ふたがりなり。御迎へに參らむ」とあれば、わな苦し常にはなど思へど例の車にておはしたり。さし寄せて「はやはや」とあれば、さも見苦しき事かなと思ふ思ふゐざりいでゝ乘りぬれば、よべの處にて物語など忘たまふうへは院（冷泉）の御方に渡らせ給はむとおぼす。明けぬれば「鳥のねつらき」との給はせて、やをらうちのせておはしましぬれば、道すがら「かやうならむ折は必ず必ず」との給はすれば、「つねにはいかでか」ときこゆ。おはしまして歸らせ給ひぬ。忘ばしわりて御文わり。「けさはうかりつる鳥の音に驚かされてつらかりつれば殺しつ。見給へ」とて鳥のはねにかきて、

「ころしても猶わかぬかなねぬ鳥のをりふし知らぬ今朝の初聲」。

御かへし、

「いかゞとは我こそ思へあさなあさな鳴き聞かせつる鳥を殺せば

と思ひ給ふるを鳥のとがならぬにや」とあり。二三日ほどありて月いみじうあかき夜、はしに出でゐて見るほどに「いかにぞや月は見給ふや」とて、

「わがごとく思ひはいづや山のはの月にかけつゝなげくこゝろを」。

例の折よりはをかしきうちにも、宮にて月のあかゝりしに、人や見るらむと忍びたりし、思ひ出でらるゝほどに、ふと、

「一夜見し月ぞと思へどながむればこゝろもゆかず目はそらにして」

と聞えても猶獨ながめ居たる程にはかなくて明けぬ。またの夜おはしましたりける、こなたには聞かず。かたがたに人の住む處なりければ、そなたに人の來りたる車を御覽じて、「人の侍るにこそ。車はべり」ときこゆれば「よし歸りなむ」とておはしましぬ。人のいふは誠にこそとおぼすもむつかしけれど、さすがに絶えはてむものとはおぼさゞりければ文つかはす、

「よべ參りたりとばかりは聞き給ひけむや。それもえ知り給はざりしにやと思ふこそいみじけれ。

松山に浪たかしとは見てしかど今日のながめはたゞならぬかな」

とあり。雨うち降るほどなり。あやしかりける事かな、人のそらごとを聞えたりけるにやと思ひて、

「吾をこそ末の松とはおもひつれひとしなみには誰かこゆべき」
と聞えつ。宮は一夜の事をなま心うくおぼして、久しうのたまはせで、かく、
「つらしとも又戀しともさまざまに思ふことこそひまなかりけれ」。
御返しは聞ゆべき事なきにしもあらねど、わざとおぼされむも恥かしくて、かくぞ、
「あふ事はとまれかくまれ歎かじをうらみ絶えせぬ中となりせば」
と聞えさする。さて後もまどほになむ。月のあかき夜うち伏して、「うらやましくも」など詠めらるれば、宮にかうぞ聞えける、
「月を見て荒れたる宿にながむとは見にこぬまでも誰につげよと」。
ひすましわらはして「右近のぞうにさし取らせてきね」とてやる。宮はお前に人々して物語しておはしますほどなりけり。人まかでなどして入らせ給ふに右近のぞうさし出でたれば、「例の車にさうぞくせさせよ」とておはします。をんなはしに月ながめて居たるほどに人の入りくれば簾垂うちおろして居たれば、誠に目なれたる御さまにはあらで、御直衣などのいたうなれたるしもぞをかしう見ゆ。物ものたまはで唯御扇に文をさし入れさせ給ひて、「御使のとくまかりにければ」とてさし入れさせ給ひて、物聞えむにはど遠くてびなければ、女扇をさし出して取りつ。宮ものぼりなむとおぼしたり。前栽のをかしき中をありかせ給ひて「人は草葉の露なれや」などの給はす、いとなまめかし。近う寄らせ給ひて「今宵は罷り出でなむとよ。誰に忍びつるも見あらはしになむ。あすは物忌といふなりつるに、なくば怪しと

思ひなむ」とてかへらせ給へば、

「こゝろみに雨も降らなむ宿過ぎて空ゆく月のかげやとまると」。

人のいふほどよりもこめきてあはれにおぼさる。「あが君や」とてしばしのぼらせ給ひて出で給ふとて、

「あぢきなく雲ゐの月にさそはれて影こそ出づれこゝろやはゆく」

とておはしましぬる後簾をあげて、ありつる御文見れば、

「我ゆゑに月をながむとつげつればまことかと見に出でゝ來にけり」

とぞある。猶をかしく（なうれしくイ）おはしますかな、いかにいと怪しきものにきこしめしたるべかめるに、きこしめしなほされにしかなと思ふ。宮もいふかひなからずつれづれの慰みにはと思さるゝほどに、ある人々の聞ゆるやう「この頃は源少將などいますなり。晝ものし給ふなり」といへばある人ありて「兵部卿もおはすなるは」など口々に聞ゆるにいとあはあはしう覺されて久しう御文もなし。小舍人童來たり、ひすまし童例にも（語もイ）語らへば物などいひて「御文やある」といへば「さもあらず。一夜（日イ）おはしましたりしかどみかどに車のありしを御覽じて御せうそこもなきにこそあめれ。人おはしましかよふやうにこそきこしめしたりけれ」などいひていぬ。かくなむいふと聞きていとはしく、何やかやとわざと聞えさせわざと賴み聞えさする事こそなけれど、時々もかうおぼし出でむほどは、聞えさせかよはしてあらむとこそ思ひつれ、事しもこそあれ、けしからぬ事につけてもかうおぼされぬると思ふもいと心

憂くて、なぞもかくと歎く程に御文あり。「日ごろは怪しうみだりごゝちの惱ましさになむ。いつぞやも參りて侍りしかど、をりふし惡しうてのみかへれば、いとひとげなき心地してなむ」とて、

「よしやよし今はうらみじ磯に出でゝ漕ぎ離れゆく海士の小舟を」

とあれど、「あさましき事をきこしめしたなれば、耻かしければ、きこえさせむもつれなけれど、このたびばかりは」とて、

「袖の浦にたゞわがやくとしほたれて舟流したる海士とこそなれ」

と聞えさせつ。さいふ程に七月にもなりぬ。七日にすきごとどもする人々のもとより、七夕彥星などいふ事ども數多見ゆれど目もたゞず。かゝる折など宮のすぐさずのたまはせしものを、むげに忘れさせ給ひにけるかなと思ふほどにぞ御文ある、見ればたゞ、

「おもひきや七夕つめに身をなして天の河原をながむべしとは」

とあれば、さはいへど猶えすぐし給はざめりと思ふもをかしうて、

「ながむらむ空をだに見ず七夕にあまるばかりの我が身と思へば」

とあるを御覽じても猶えおぼし捨つまじとおぼすべし。つごもりがたになりていとおぼつかなくなりにけるを、「などか、時々は人數におぼしめされぬなめりかし」とのたまはせたれば、女、

「ねざめねばきかぬなるらむ荻風は吹かざらめやは秋のよなよな」

と聞えたれば立ちかへり「わが君やねざめねばな物思ふ時はこそおろかにも」とて、
「荻風はふかばいも寢で今よりぞおどろかすかと聞くべかりける」。
かくて二三日ありて夕まぐれに思ひもかけぬに、俄に御車を引き入れておりさせ給ふ。昔はまだ見えまゐらせねばいと恥かしう思へど、せむかたなうなる事などの給はせて歸らせ給ひぬ。その後日ごろになりぬるに、いとおぼつかなきまで音もし給はねば、女、
「つれづれと秋の日ごろのふるまゝに思ひ知らせぬ怪しかりしも。
うべ人は」と聞えたりければ、この程におぼつかなくなりにけれど、されど、
「人はいさ我は忘れず日をふれど秋のゆふぐれありしあふこと」
との給はせたり。哀にはかなく賴む人もあらず。かやうのはかなしごとにて世の中を慰めてあるもうち思へばあさましう。かゝるほどに八月にもなりぬれば、つれづれ慰めむとて石山に詣でゝ、「七日ばかりあらむと思ひてまうでぬ。宮久しうもなりぬるかなと思して御文つかはすに、「わらは「一日まかりてさふらひしかど、石山になむこのごろはおはしますなる」と申さすれば、「さば今日は暮れぬ。つとめてまかれ」とて御ふみ書かせ、賜はりて、石やまにきたり。佛の御前にはあらで故里のみ戀しくて、かゝるありきもひきかへたる身の有樣と思ふにいと物悲しうて、まめやかに佛を念じ奉りてある程に、かうらの志もの方に人のけはひのすれば怪しうて見おろしたればこの童なりけり。あはれに思ひかけぬ所に來たれば「なぞ」と問はすれば、御文をさし出でたるも例よりもふと引きあけられて見れば「いと心深く入り給

うにけるをなむ。などかかくとものし給はざらむ。ほだしまでこそおぼされざらめ。おくらし給ふに心うき」とて、

「關越えて今日ぞとふとや人は忘る思ひ絶えせぬこゝろづかひを。

いつか出で給はむとする」とあり。近うてだにおぼつかなくものし給ふに、かくわざと尋ね給ひつらむよとをかしう覺えて、

「近江路はわすれぬめりと見しほど〔もの なイ〕に關うち越えてとふ人はたれ。

いつかはとの給はせたるは、おぼろげに思ひ給へていりしかば」とて、

「山ながら海は漕ぐとも都へはなにか打出の濱を見るべき」

と聞えたる。御覧じて「苦しうとも又いけ」とて賜はせたり。「とふ人とがあればあさましの御物いひや」とて、

「尋ねゆく逢坂山のかひもなくおぼめくばかりわするべしやは」。

「まことや、

うきによりひたやごもりと思ふとも近江の海はうち出でゝ見よ〔いでゝ見の よかしイ〕

うきたびごとにこそいふなれ」との給はせたれば、たゞかく、

「關山のせきとめられぬなみだこそ近江の海とながれ出づらめ」

とてはしに、

「こゝろみに〔イよ〕おの〔イきみ〕が心もこゝろみむいざ都へときてさそひ見む〔イよ〕」

とあり。思ひもかけぬに、いくものにもがなとおぼせどいかゞは。かゝるほどに出でにけり。

「さそひ見よとありしかど急ぎ出で給ひにければなむ」とて、

「あさましやのりの山路に入りそめて都へいざとたれさそひけむ」。

御かへりにはたゞ、

「山を出でゝくらき道にぞたどりにし今一たびの逢ふことにより」。

つごもりがたに風いたう吹きて、のわき立ちて雨など降るに、常よりも物心ぼそうながむるに、例の御文あり。折ありがほにの給はせたるに、日ごろの罪も許し聞えつべし。

「なげきつゝ秋のみ空をながむれば雲うちさわぎ風ぞはげしき」。

かへり事、

「秋風はけしき吹くだに戀しきにかきくもる日はいふかたぞなき」。

實にさぞあらむかしとおぼせど例の程經ぬ。』九月十よ日ばかりの有明の月に御目さましていみじく久しうもなりにけるかな、あはれこの月は見るらむかしとおぼせば、例の童ばかりを御供にておはしましてかどを叩かせ給ふに、目をさまして、よろづを思ひつゞけ臥したるほどなりけり。すべてこのごろは折からにや、物心ぼそう哀れに常よりも覺えてながめける。怪し、誰ならむと思ひて前なる人を引き起して事問はせむとすれどもとみにも起きず。辛うじて驚かして又人おこせども起きず十八字イ無。からうじて起きてもこゝかしこものにあたり騒ぐ程に叩きやみぬ。歸りぬるにやあらむ。いぎたなしと思しぬらむこそ物思はぬさまなれ

ば、同じ心にまだ寢ざりける人(誰人イ)かな、誰ならむと思ふ。辛うじて出でゝ人も(はイ)なかりけるに徒そら耳きゝおはさうじて、夜の程だに何とかまどはさるゝ、さわがしの殿のおもとだちやと腹立ちてまた寢ぬ。女はやがて起きていみじうきりたる空をながめつゝ、あかくなりぬれば、この曉おきのほどの心に覺ゆる事どもを、はかなきものに書きつくる程にぞ宮より(信字イ)例の御文ある。たゞ、

「秋の夜のありあけの月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな」。

いでやげにいかに口惜しきものにおぼされつらむと思ふよりも、猶をりふしすぐし給はずかしと、誠にあはれなる空の氣色を見給ひけると思ふにいとをかしうて、この手ならひのやうに書きたるものをぞ御返しのやうに引き結びて奉る。風の音木の葉の殘りあるまじげに吹きみだる、常よりも物あはれに覺ゆる。ことごとしうかき曇るものから唯けしきばかり雨うち降るはせむかたなく哀に覺えて、

「秋のうちに朽ちはてぬべしことわりの時雨にたれか袖をからまし」

と歎かしう思へど知る人もなし。草木の色さへ見しまゝにもあらずなりもて行く。しぐれむ程の久しさもまだきに覺ゆるに、風に心苦しげにうち靡きたるには、唯今も消えぬべき露の我が身ぞあやしう草葉につけて悲しきまゝに、奥にも入らで頓て端に臥したれば、つゆ年ふべくもあらず。人の皆うちとけて寢たるにその事と思ひわくべくもあらねば、つくづくと目をのみ覺して何心ならうらめしうのみ思ひ臥したる程に、雁のはつかにうち鳴きたる、人は

かうしも思はずやあらむ、いみじう堪へがたき心ちして、
「まどろまであはれいく夜になりぬらむ唯かりがねを聞くわざにして。
かくてのみあかさむよりは」とてつまど押し明けたれば、おほぞらに西にかたぶきたる月のかげ遠くすみわたりて見ゆるにきりわたりたる空の氣色、鐘のおと、とりの聲ひとつに響きあひて、更に過ぎにし方いま行く末のこともかゝる折はあらじと、袖の色さへあはれにめづらかなり。
「我ならぬ人もさぞ見む長月の有明の月にしかじあはれは」。
唯今このかどをうち叩かする人のあらむにいかに覺えむ。いでや誰かかくて明す人はあらむ。
「よそにても同じこゝろに有明の月を見るやとたれにとはまし」。
宮わたりにや聞えさせましと思ふに、おはしましたりけるよと思ふまゝに奉りたれば、うち見給ひて、かひなくは思されねどながめ居たらむに、ふとやらむとおぼして遣すに、女やがてながめ出して居たるにもてきたれば、あへなき心地してひきあけて見れば、
「秋のうちはくちけるものを人もさは我が袖とのみ思ひけるかな。
消えぬべき露のいのちと思はずば久しききくにかゝりやはせむ佊。
まどろまで雲ゐの雁の音を聞けは心づからのわざにぞありける。
われならぬ人もありあけの空をのみおなじ心にながめけるかな。

よそにても君ばかりこそ月は見めと思ひてゆきし今朝ぞ苦しき。

いとあけがたかりつる門をこそ」とあるも、物聞えさせたるかひもある心地すかし。かくて晦日がたにぞ御文ある。日ごろのおぼつかなさなどいひて「怪しき事なれど忍びて物いひつる人なむ遠くいくなるを、哀といひつべからむ事ひとついはむとなむ思ふ。それよりの給ふ事のみなむさは覺ゆるをひとつ」との給へり。あなしたりがほと思へど、さはえ聞えじと申さむもいとさかしければ、「の給はせむ事はいかでか」とばかりにて、

「をしまるゝ涙にかげはとまらなむ心もしらず秋はゆくとも。

まめやかには傍いたきことになむ侍る」とてはしに、「さても、

君をおきていづち行くらむ我だにもうき世の中にしひてこそ經れ」

とあれば、いと思ふやうなりと聞えさせむも見しり顔なりあまりぞ推し量り給へる世の中と侍るめるは。

「うちすてゝ旅ゆく人はさもあらばあれ又なきものに君し思はゞ。

ありぬべくなむ」との給はせたり。かくいふ程に十月にもなりぬ。十よ日のほどにおはしましたり。奥は暗うておそろしければはし近うち臥させ給ひて、哀なる事の限をの給はするにかひなくはあらず。見れば月の曇りてしぐるゝ程なり。わざと哀なるさまを作り出でたるやうなり。思ひ亂るゝ程の心地はいとそゞろさむきや。宮御覽じて、人のびなきにのみいふめる、怪しきわざかな、こゝにかくてあるよと哀におぼされて、女の寢たるやうにて思ひ亂

れふしたるを、やゝ驚かし給ひて、

「時雨にも露にもあらで寢たる夜はあやしくぬるゝ手枕のそで」

との給はすれど、よろづに物のみわりなくおぼゆるに御いらへ聞ゆべき心ちもせねば、ものも聞えさせで唯月の影に涙の落つるを哀と御覽じて、「などいらへはし給はぬ。はかなき事申し侍るも心づきなしとおぼしけるにこそ」とあれば、「いかに侍るにか心地のかきみだるやうにし侍る。耳にはとまらぬにも侍らず」とて「よし試みさせ給へ。手枕の袖といふ事忘るゝ折や侍りける」とたはぶれごとにいひなして、あはれなりつるよの氣色もかくのみいふほどに、殊にたのもしき人などもなきなめりかしと心苦しうおぼえて、今のまいかゞとのたまはせたる返事、

「今朝のまに今はひぬらむ夢ばかりぬると見えつる手まくらの袖」

と聞えたり。忘れじといひつるに、事をもいひたればをかしうおぼして、

「夢ばかりなみだにぬると見つらめどほしぞかねつる手枕のそで」。

よべの空の氣色のあはれに見えしは所がらにや。それより後心苦しうおぼされてしばしばおはしまして有樣など御覽じもていくに、世に馴れたる人にもあらず。唯いと物はかなげに見ゆるもいと心苦しうおぼされてあはれに語らはせ給ふに、いとかくつれづれに詠めさせ給ふらむを思ひ忘る事なけれど、「唯おはせかし。世の中の人もいとびなげにいふなり。時々參りくればにや、見ぬる事もなけれど、それも人のいと聞きにくゝいふに、又たびたびかへ

るほどの心地のわりなかりしも、ひとげなうおぼえなどせしかば、いかにせましなど思ひなる折々もあれど、ふるめかしき心なればにや、聞えたらむ事のいと哀におぼえてなむ。さりとてかくのみえ參りくまじきを、誠に聞く事ありて制する事などあらば空ゆく月にもあらむ。もしの給ふやうなるつれづれならば彼所にもおはしなむや。人はあれどびなかるべきにもあらず。もとよりかゝるすぢにつきたよりなき身なればにや。人げなき所につい居などもせず、おこなひなどする事だに唯ひとりあれば、同じ心に物語なども聞えてあらば慰む事もやあると思ふなり」との給ひ思ふにも、げに今更にさやうにびなき有樣はいかゞはせむと思ひて、「一の宮の事も聞えさかであるを、さりとて山のあなたにゑるべする人もなき程に、かくてすぐすは明けぬよの心ちのみすれば、はかなきたはぶれごともいふ人あまたありしかば怪しきさまにのみぞいふべかめる、さりとてことざまのたのもしき方もなし、何かはさても試みむ、よし北の方（嫡）はおはすれど唯ことと御方にて御乳母こそは萬の事をすなれ、又けさうに色めかばこそあらめ、さるべきかくれなどにあらむには、なでふ事かはあらむなど思ひて「このぬれぎぬはさりとも著やみなむをと思ひて、「何事も唯われより外のとのみぞ思ひ給へつゝ、過ぐし侍る程のまぎらはしには、かやうなる折たまさかにも待ちつけ聞えさするより外の事もなければ、唯いかにも侍れ、の給はせむまゝにと思ひ給へれば、よそにても見苦しきものに聞えさすらむ。まして誠なりと見侍らむぞ傍いたうはべらむ」と聞ゆれど、「それはこゝにこそとてもかくてもいはれめ。見苦しうは誰か見む。いとよう隠れたる所作り出

で、今聞えむ」などたのもしうの給はせて夜深う出で給ひぬ。格子もあけながらあり。よのつねは唯ひとりぶしにていかゞせまし、さても人笑はれなる事やあらむとさまざまに思ひ亂れて臥したるほどに、御文あり、

「露むすぶ道のまにまにあさぼらけ濡れてぞきつる手まくらの袖」。

この袖の事をはかなき事なれど、思し忘れでの給はせたるをかしうおぼゆ。

「道芝のつゆとおきぬる人よりも我が手まくらのそではかわかず」。

その夜の月もいみじう明う澄みて見ゆるを、こゝよりもかしこにてもながめあかして、またつとめて御文賜はせむとて「例の童參りたりや」と問はせ給ふほどに、女も霜のいと白きに驚かされてにや、

「手枕のそでにも霜はおきけるを今朝うち見れば白妙にして」

と聞えさせたり。ねたうせんせられぬるなどおぼして、

「妻戀ふとおきあかしつる霜なれば」

とぞうちの給はせたる。「唯今ぞ人參りたればうたてあべきものかな。疾くと思ひつるに」とて御氣色あしうて賜はせたればもていきて、「又これより聞えさせ給はざりける時よりめし侍りけるを、今まで參らずとてさいなむなり」とて御文を取り出でたり。「よべの月はいみじうあかゝりしものかな」とて、

「寢ぬる夜の月は見るやと今朝はしも起き居て待てどとふ人もなし」。

げにかれよりの給はせけると見ゆるも、同じ心にをかしうて、
「まどろまで一夜ながめし月見れどおきながらしも明かしがはなる」
と聞えさせて、この童のいかにさいなむらむとおくれば、をかしうてはしに、
「霜の上に朝日さすめり今ははやうちとけにけるけしき見せなむ」
いたうわびはべめり」とあり。見給ひて「今朝したり顔におぼしたりつるもいとにくし。この
童殺してばやとまでなむ」とて、
「朝日さし今は消ゆべき玄もなれどうち解けがたき空のけしきぞ」
とあれば「殺させ給へるこそ」とて、
「君は來ずたまたま見ゆるわらはをばいけとも今はいはじと思ふか」
と聞えさせ給へれば、うち笑はせ給ひて、
「ことわりや今はころさじこの童玄のびのつまのいふことにより」
まことか手枕の袖は忘れ給ひにける」とあれば、
「人知れぬこゝろにかけて忍ぶをば忘るとやおもふ手まくらのそで」
と聞えたれば、
「物もいはでやみなましかばかけてだに思ひ出ましや手枕のそで」
猶かくはおぼしつ」とぞある。かくて二三日音もせさせ給はず。たのもしげにの給はせし事
どもゝいかになりぬるにかと思ひつゞくるにいもねられず。目を覺して臥したるに、やうや

う明けぬらむかしと思ふに門を打ち叩く。あなおぼえなと思へど問はすれば、宮の御文なりけり。思ひかけぬ程なるを心や行きてと哀に覺えて、妻戸を押し明けて見れば、

「見るやきみさ夜うちふけて山の端にくまなく澄める秋の夜の月」。

かけはしうちながめられて常よりも哀におぼゆ。「門をあけねばおぼつかなう、使まちどほに覺ゆらむ」とて、

「更けぬらむと思ふものから寢られねどなかなかなれば月はしも見ず」

とあるを、おしたがへたるくちつきを書くにしもあらずかしとおぼす。いかでか近うてかゝるはかなし事もいはせて聞かむとおぼしたつ。二日ばかりありて、女車のやうにてやをらおはしましぬ。晝などはまだ御覽ぜられねば耻しけれど、さま惡しうはひかくるべきにもあらず。又の給はするやうもあらず。耻ぢ聞えさせてやあらむずるとてゐざり出でたり。日ごろの覺束なさなど語らはせ給ひて暫しうち臥させ給ひて、「この聞えさせしやうにはやおぼしたて。かゝるありきの常にうひうひしく覺ゆるを、さりとて參り來ぬはいとおぼつかなければ、はかなき世の中に苦しう」との給はすれば「ともかくもの給はせむにと思ひ給ふるに、見ても歎くといふ事にこそ思ひ給へ。わづらひぬれ」と聞ゆれば、「よし試み給へ。鹽やき衣にぞあらむ」との給ひて出でさせ給ふ。まへ近きすいがいのもとにをかしげなるまゆみのあるが、少しもみぢたるを御らんじて、かうらんに押しかゝらせ給ひて、

「ことのは深くなりにけるかな」

との給はすれば、

「志ら露のはかなくおくと見しほどに」

と聞えさするほど、猶なさけなからずとをかしうおぼさる。宮の御さまなどいとめでたし。御直衣にてえならずめでたき御ぞいだしうちきも志給へる、いとあらまほしげに見ゆる、目さへあだあだしきにやとまで覺ゆ。又の日「きのふの御氣色のいとあさましとおぼいたりしこそいと心憂きもの丶あはれなりしか」との給はせたれば、

「葛城の神もさこそはおもひけめ久米路にわたすはしたなきまで。

わりなくこそは思ひ給へしか」と聞えさせたれば、立ちかへり、

「おこなひの志るしもあらば葛城のはしたなしとてさてや止みなむ」

などいひて、ありしよりは時々おはしましなどすればこよなくつれづれも慰む心地す。かくてあるほどによからぬ人々の文などおこする、又みづからも立ちさまよふにつけても、よしなき事の出でくるに、とく參りや志なましと思へど、猶つ丶ましくてすがすがしうも思ひたゞず。霜のいと白きつとめて、

「我がうへは千鳥もつけじおほとりのはねにも霜はさやは置きける」

と聞えさせたれば、

「月も見でねにきといひし人のうへにおきしもせじを大とりのごと」

との給はせてやがて暮におはしましたり。「この頃の山の紅葉いかにをかしからむ。いざさ

せ給へ。見む」との給はすれば、「いとよく侍るなり」と聞えて、その日になりて、「今日は物忌
にとぢ籠められてゐればなむいと口惜しう。これすぐしてはかならず」との給はせたるに、
其の夜しぐれ常よりも木々の木の葉殘りありげもなく聞ゆるに目をさまして「風の前なる」
とひとりごちて皆散りぬらむかし、昨日見でと口をしう思ひ明したるつとめて、かれより、
「神無月世にふりにたるしぐれとや今日のながめをわかず見るらむ。
さては口惜しうこそ」との給はせたれば、
「時雨かも何にぬれたるたもとぞとさだめかねてぞわれもながむる」
とて「まことや、
もみぢ葉はよはのしぐれにあらじかし昨日山邊を見たらましかば」
とありけるを御覽じて、
「そよやそよなどて山邊を見ざりけむ今朝はくゆれど何のかひなし」
とてはしに、
「あらじとは思ふものからもみぢ葉の散りや殘れるいざたづね見む」
との給はせたれば、
「うつろはぬときはの山も紅葉せばいざかし行きてのどのどと見む。
をこならむ方にぞ侍らむ」とて、一日おはしたりしに、障る事ありて聞えさせぬぞと申し、
を思し出でゝ、

「高瀬舟はや漕ぎ出でよさはることさしかへりにし蘆間わけたり」

と聞えさせたるをおぼし忘れたるにや、

「山邊には車に乘りて行くべきをたかせの舟はいかゞよるべき」

とあれば、

「紅葉ばの見にくるまでも散らざらば高瀬の舟のいかゞこがれむ」

とてその日も暮れぬ。おはしましたるにてなたのふたがりたれば、例のいと忍びてゐておはしします。「この頃は四十五日の御方たがへさせ給ふ」とて御いとこの三位中將隆家の家におはします。「例ならぬ所にさへあれば見苦し」と聞ゆれど强ひておはしまして、御車ながら人も見ぬ車やどりに引き立てゝ入らせ給ひぬれば、恐しう思ふに、人しづめてぞおはしまして、御車に奉りて萬の事をの給はせける。心得ぬとのゐびとのをのこどもぞめぐりありく。例の右近のじようこの童などぞ近くさぶらふ。哀れにものゝおぼさるゝまゝに、おろかなるさまは過ぎにしかたさへ悔しうおぼしめさるゝもあながちなり。明けぬれば、やがてゐておはしまして、「人の起きぬさきに」と急ぎ歸らせ給ふ。つとめて、

「ねぬる夜の寢覺の夢にならひてぞ伏見の里を今朝は起きつる」。

御かへし、

「その世より我が身の上は知られねばすゞろにあらぬ旅寢をぞする」

など聞ゆる。何かは、かくねんごろに忝き御志を見知らず、心こはきさまにもてなすべき事

はさしもあらでなど思へば、參りなむと思ひ立つ。まめやかなる事とていふ人あれど耳にもたゝず。心憂き身なればすくせに任せてあらむと思ふにも、その宮仕よ、今更にはいにもあらず、嚴はの中こそ住まゝほしけれ、又憂き事もあらばいかゞせむ、いと心なきさまにこそ思ひいはめ、猶かくてや過ぎなまし、近くてだにおやはらからの御有樣も見聞えむ、又はだしのやうなる人々のうへも見定めむと思ひ立ちにたればあいなし。參らむ程までだにひなびにいらへ聞しめされじ、近くてはさりとも御覽じてむと思ひて、「すきごとせし人々の文もなし」とのみいはせて、更に返事もせずのみある程に御文あり。見れば「さりともと頼みけるがをこなり」など多くの事の給はせで「よし唯石見潟」とばかりあるに胸うちつぶれてあさましう覺ゆ。珍らかなるそらごとどもなどいと多く出でくれど、さばれなからむ事はいかゞせむなど覺えて過しきぬるを、これはまめやかにの給はせたれば、思ひ立ちける事はの聞きける人もあべかめるに、をこなる目をも見るべかめるかなと思ふに、悲しくて御返し聞ゆべき事も覺えず。又いかなる事をきこしめしたるにかと思ふに恥しうて御返事も聞えねば、ありつる事を恥しと思ふなめりとおぼして、「などか御返しも侍らぬ。さればよとこそおもほゆれ。いとゞしくも變る御心かな。人のいふ事ありしかば、よもと思ひながら思はましかばとばかり聞えしぞ」とあるに、胸少しあきて御氣色もゆかしくて、何事にかと聞かまほしくて「誠にかくもおぼされば」とて、

「今の間に君きまさなむこひしとて名もあるものを我ゆかむやは」

と聞えたれば、
「君いまは名の立つことを思ひける人からかゝるこゝろとぞ見る。
これにさへ腹さへ立ちぬれ」とぞある。かくわぶる氣色を御覽じて、戯ぶれせさせ給ふとは
見れど猶苦しうて、「猶いと怪しうこそ侍れ。いかにもありて御覽ぜさせまほしうこそ」と聞
えさせたれば、
「うたがはじ又うらみじと思へども心にこゝろかなはざりけり」。
御かへし、
「うらむらむ心は絶ゆるかぎりなくたのむ君をぞ我もうたがふ」
など聞えてある程に、暮れぬればおはしましたり。「猶人のいふ事あればよもとは思ひなが
ら聞えしに、かゝる事いはれじと思ひ給はゞいざ」と聞ゆるに、「いざ給へかし」などの給は
せて、明けぬれば出でさせ給ひぬ。かくのみ絶えずの給はすれど、おはします事はかたし。雨
風などいたう降り吹く日しも音づれさせ給はねば、人ずくなる所の風の音おぼしやらぬ
なめりかしと思ひて、暮つかた聞ゆ、
「霜枯はわびしかりけり秋かせの吹くには荻のおとづれもしき」
と聞えたれば、かれよりの給はせたりける御文を見れば、「いと恐しげなる風をいかゞとな
むあはれに、
枯れはてゝ我よりほかにとふ人もあらしの風をいかゞ聞くらむ

と思ひやり聞ゆるこそいみじけれ」とぞある。の給はせけるを見るもをかしうて所違へたる御物忌にて、忍びたる所におはしますとて例の御車あれば、今は唯ともかくもの給はむに從ひてと思へば參りぬ。心のどかに御物語おき臥し聞えてつれづれもまぎるればぞ、まして參りなまほしきに、御物忌過ぎぬれば、例の處に歸りて、今日は常よりも名殘戀しう思ひ出でられわりなう覺ゆれば聞ゆ、

「つれづれと今日かぞふれば年月にきのふぞものは思はざりける」。

御覽じて哀とおぼして「こゝにも、

思ふ事なくてすぐしゝをとゝひを昨日と今日になすよしもがな

と思へどかひなくなむ、猶おぼし立て」とあれど、いとつゝましくてするするとも思ひたゆぬ程は唯うちながめてのみあかしくらす。いろいろ見えし木の葉ものこりなく、空もあかう晴れたるに、やうやう入りはつる日の影心ぼそう見ゆれば、例の聞え侍り、

「なぐさむる君もありとは思へどもなほ夕ぐれはものぞかなしき」

とあれば、

「ゆふぐれは誰もさのみぞおもほゆる待ちわぶ君は人にまされり

と思ふこそあはれなれ。唯今參り來ばや」とあり。又の日のまたつとめて霜のいと白きに、

「さて今のまはいかゞ」とあれば、

「起きながらあかせる霜のあしたこそまされるものは世になかりけれ」

など聞えかはす。例のあはれなる事など書かせ給ひて、

「われひとり思ふはおもふかひもなしおなじこゝろに君もあらなむ」。

御返し、

「君はきみわれはわれともへだてねばこゝろごゝろにあらむものかは」。

かくて女、風にや、おどろおどろしうはあらねど惱ましうすれば「いかにいかに」と問はせ給ふ。よろしうなりてある程に「いかにぞ」と問はせ給ひたれば「少しよろしうなりにて侍れば、志ばしいきて侍らばやと思ひ給へつるにぞ罪深う。さるは、

　絶えしころ絶えねと思ひし玉の緒を君によりまた惜まるゝかな」

とあれば、「いといとうれしき事かな」とて、

「玉の緒は絶えむものかは契りてし長きこゝろにむすびこめてき」。

かくいふ程に年も殘りなければ、春立つかたと思ふ十一月ついたちごろ、雪のうち降るつとめて、

「神代よりふりはてにける雪なれど今日は殊にもめづらしきかな」。

御かへし、

「初雪といはれの冬も見しまゝにめづらしげなき身のみ降りつゝ」

など、かゝるよしなしごとにあかしくらす。御文あり。「おぼつかなくなりにければ參りてと思ひつるを、人々文作るめれば」となむの給はせたれば、

「いとまなみ君さまさずば我行かむふみつくるらむ道を知らばや」。

をかしうおぼして、

「我が宿にたづねて來ませふみつくる道も敎へむあひも見るべく」。

又常よりも霜のいと白きに「いかゞ見る」との給はせたれば、

「さゆる夜のかずかく鳴は我なれやいく朝霜をおきて見つらむ」。

そのころ雨などのはげしければ、

「雪もふり雨も降りぬるこのごろを朝いもとのみ起きゐては見る」。

その夜おはしまいて、例の物はかなき御物語せさせ給ひて、「もしかしこにゐて奉りて後、まろが外にも行き、法師にもなりなどして見え奉らずば、本意なきやうにや思されずる」と心細うのたまはするに、又いかに思しなりぬるにかあらむ、又さやうなる事の出で來ぬべきにやあらむと思ふに、いと哀にてうち泣かれぬ。みぞれだちたる雨のどやかに降る程になり、聊まどろまで、哀なる事どもを、この世のみならずの給はせける。思ひかけぬすぢのまじらひなりと哀に何事もきこしめしうとまぬ御心ざまなれば、心の程も御覽ぜられむとて思ひ立つ。唯かくては本意のさまにもなりぬばかりぞかしと思ふ。いと悲しうて物も聞えでつくづくと歎く氣色を御覽じて、

「なほざりのあらましごとに夜もすがら」

との給はせたれば、

「落つるなみだは雨とこそふれ」。

御氣色の例よりもうかびたる事どもをの給はせて、明けぬればおはしましぬ。何のたのもしげなき事なれど、つれづれも慰めに思ひ立ちつる事を、さらばいかにせましなど思ひみだれて聞ゆ。

「うつゝにて思へばいはむかたもなし今宵のことを夢になさばや

と思ひ給ふれど、いかでかは」とて、はしに、

「しかばかり契りしものを定めなきさは世のつねに思ひなせとや。

口惜しくもや」とあれば、御覽じて「これよりこそまづと思ひつれど、

うつゝとは思はざらなむ寢ぬる夜の夢に見えつるうき事どもを。

思ひなさなむ。あな心みしかや。

ほど知らぬ命ばかりぞさだめなきちぎりしことは住の江のまつ。

あが君や、更にあらまし事に聞えじ。人やりならぬ物わびし」とぞある。女はその後も哀に聞えて歎きのみせらるる。とくとていそぎ立ちたゝましかばと思ふ晝つ方ある御文を見れば、

「あなこひし今も見てしが山賤のかきほに生ふるやまとなでしこ(古今)」

とぞある。「あな物苦し」とうちいはれて、御返し、

「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに(伊勢物語)」

と申したればうちほゝゑませ給ひて御覽ず。この頃は御經習はせ給ひければ、

「おふみちは神のいさめにおらねども法のむしろにをればたゝぬぞ」。
御かへし、
「我さらばすゝみてゆかむ君はたゞ法のむしろをひろむばかりぞ」
など聞こえさせつゝ過ぐす。雪いたう降る日、ものゝ枝に降りかゝりたるにつけて、
「雪降れば木々の木の葉も春ならでおしなべ梅の花ぞ咲きける」
などの給はせたるに、驚きながら、
「梅ははや咲きにけりとて折れば散る花とぞ雪の降るは見えける」。
又の日、またつとめて、
「冬の夜はこひしきことに目もあはで衣かたしき明けぞしにける」。
御返事「いでや、
冬の夜は目さへ氷にとぢられてあかしがたきをあかしけるかな」
などいふ程に、例のつれづれ慰めて暮すぞはかなきや。いかにおぼしめさるゝにかあらむ。
心細き事どもをの給はせて、「猶世の中にありはつまじきにや」との給はせたれば、
「くれ竹のよゝのふる事おもほゆるむかしがたりは我のみぞせむ」
と聞えたれば、
「呉竹のうきふし繁き世の中にあらじとぞ思ふしばしばかりも」
などの給はせて、人知れずすゑさせ給ふべき所なども、おきてならはぬ人なればはしたなく

思ふなめり、こゝにも唯聞きにくゝぞいはむ、唯我いきてゐてこむと思して、十二月十八日の月のよきほどになりにたる程におはしましたり。例の「いでさせ給へ」とのたまはすれば、「今宵ばかりにこそあめ(脫れ歟)」とて一人乘れば「人ゐて坐せかし。さりぬべくばあすあさてものどやかに物語聞えむ」とあれば、例はかくもの給はせぬを、もしやかくと覺すべきにやとて、さりぬべき人一人ゐていく。例の所にはあらでいとよくして忍びて人ども具して居よと、せられたり。さればよと思ひて、何事かはわざとしたてむ、いかでかは參らまし、いつ參りしぞとなかなか人も思へかしと思ひて、明けぬれば櫛のはこなどとりにやる。宮參らせ給ふとてしばしこなたの格子などあげず。恐しき事にはあらねどむつかし。「今かの北の方に渡し參らせむ。こゝには近ければゆるしげなし」などの給はすれば、おろし籠めてひそかに聞けば、「晝は人々院(冷泉)の殿上人など參り集まりて、いかにぞかくてはありぬべしや。ちかおとりいかにせむと思ふこそ苦しけれ」との給はすれば、「それをなむ思ひ給へる」と聞ゆる。笑はせ給ひて「まめやかにはよなどあなたにあらむをりは用意し給へ。けしからぬものどもはのぞきもぞする。今しばしになりなば、晝などはあのせしのあるかたにおはしておはせ。まろが晝あるかたは人も寄らずぞ」などのたまはせて、二三日ありて北の方の對に渡らせ給へりければ、人々驚きてうへに申し參らすれば、「かゝる事なくてだに怪しかりつるを、何の高き人にもあらず。かく」などの給はせて、わざと仰せばこそ忍びてゐておはしたらめとおぼすに、いと心づきなうておはすれば、例よりも物むつかしげに思ひておはすれば、いとほしうおぼし

て、しばしばうちに入らせ給ひて、「人のいふ事も聞きにくし。人の氣色もいとはしうてこなたにおはします。しかじかの事あるなるはなどかの給はせぬ。制し聞ゆべきにもあらず。いとかう身の人げなく人わらはれに恥かしかるべき事」となくなく聞え給ふれば「人つかはむからに御おぼえのなかるべき事かは。御氣色に隨ひて中將などもにくげに思ひたるがむつかしきに、かしらなどもけづらせむとて呼びたるなり。こなたなどにも召しつかはせたまへかし」とあれば、いと心づきなくあれど物ものたまはせず。かくて日ごろふれば、やうやう侍らひつきて、晝もうへに侍ひみぐしなど參りよろづにつかはせ給ふ。更におまへもさげさせ給はぬ程に、うへなども御方に渡らせ給ふ事もたまさかになりもていく。思し歎く事限なし。年かへりて正月一日(寛弘元年)に院のはいらいに、をのこばら數をつくして參り給へるに宮も坐しますを見れば、いと若う美しげにて多くの人に優れ給へり。これにつけても我が身恥しう覺ゆるに、上の御前にも女房たち出で居て物見るに、先其をば見でこの人を見むこの人を見むと穴をあけて見騷くぞいとさま惡しきや。暮れぬれば事はてゝ宮も入らせ給ひぬ。御送りに上達べ數を盡して御遊などあり。いとをかしきにもつれづれなりし故郷まづ思ひ出でらる。かくてさぶらふ程に、げすなどの中にもむつかしき事をいふべかめるをきこしめして、かく人の思しのたまふべきにも侍らず、うたてもあるかなと心づきなければ、うちに入らせ給ふ事、いとゞまどはなり。かゝるもいとかたはらいたう覺ゆれど、いかゞはせむ、唯ともかくも知らでもてなさせおはしまさむまゝに隨ひてとてさぶらふ。御北の方の御姉は、東宮(註三)の女

御にてさぶらひ給ふが、更にものし給ふほどにて御文あり。「いかにぞこの頃人のいふこと
あり。まことか。我さへなむ人げなうおぼゆる。夜のまにも渡り給へかし」とあるにか丶らぬ
事をだに人はいふをましてとおぼすに、いと心憂くて御返り「承りぬ。いつも思ふさまなら
ぬ世の中の、この頃は見ぐるしき事さへ侍りてなむ。あからさまに参り侍りて宮たちをも見
参らせて、心も慰め侍らむとなむ思ひ給ふるを、むかへに給はせよ。これよりはよも耳にみ
聞き入れ侍らじと思ひ給へてなむ」と聞え給ひて、さるべき物などとりした丶め給ひて、お
づかしき所などとりはらはせ給ふ。「しばしかしこにあらむ。かくてあればあぢきなくこ
たにもえさし出で給はぬも、苦しう覺え給ふらむに」とのたまふに、人々「いであさましき世
の中の人のあざみ聞えさする事よ。まゐりけるもおはしましてこそは迎へさせおはしまし
けれ。すべていと目もあやにこそ侍るなる𪜈。かの局に侍るなるべし。晝も三たび四たびおは
しますなり。いとよし。しばしこらし聞え給へ。あまり物聞えさせおはしまさず」などにく
あへるに、御心にもいとむづかしう思しめす。さばれ苦しうもなし、近うだにも見聞えじ
て「御むかへに」と聞え給へれば、御せうとの君達女御殿の御むかへにまゐらせたれば、さ
ぼしたり。御めのとの曹司なるものども、むづかしきものどもなどはらはするはと聞きて
「せんじがうかうして渡らせおはしますなり。春宮の聞かせおはしまさむ事も侍り。おは
まいて申し慰め参らせおはしませ」と騒ぐを見るもいとほしう苦しけれども、ともか
もいふべき事にしあらねば唯聞き居たり。かく聞きにくき所しばしまかでばやと思へど、

れもうたてあるべければ、唯侍ふも猶物思ひたゆまじき身かなと思ふ。宮おはしませばさりげなくておはす。「まことにや女御殿にわたり給ふと聞くは、など車の事ものたまはせぬ」との給へば、「なにかわれよりとわれば」とてものものたまはず。宮のうへ御文書き、女御殿の御言葉ざしもわらわら書きなしなめり。

和泉式部日記 終

更科日記

あづまぢの道のはてよりもなほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもの丶あんなるをいかで見ばやと思ひつ丶、つれづれなるひるまよひゐなどに、姉繼母などやうの人々の、その物語かの物語、光源氏のあるやうなどところどころ語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、我が思ふま丶にそらにいかでか覺え語らむ。いみじく心もとなきま丶に等身に藥師佛を作りて、手洗ひなどしてひとまにみそかに入りつ丶、「京に疾くのぼせ給ひて物語の多く候ふなるある限見せ給へ」と身を捨て丶額をつきいのり申すほどに、十三になる年のぼらむとて九月三日（長元九年）門出して今たちといふ所にうつる。年頃遊びなれつる所を（あらはにイ本）毀ちちらして立ち騒ぎて日の入り際のいとすごく霧り渡りたるに、車に乘るとてうち見やりたれば、人まには參りつ丶額をつきし藥師佛の立ち給へるを見捨て奉るかなしくて、人知れずうちなかれぬ。門出したる所はめぐりなどもなくてかりそめの萱屋の蔀などもなし。簾垂かけ幕など引きたり。南は遙に野の方見やらる。ひんがし西は海近くていとおもしろし。夕霧たち渡りていみじうをかしければあさいなどもせず。かたがた見つ丶こ丶を立ちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日雨かきくらし降るに、境を出で丶下野の國のいかたといふ所にとまりぬ。庵などもうきぬ

ばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていもねられず。野中におりたちたる所に唯木ぞ三つたてる。その日は雨にぬれたる物どもほし、國に立ちおくれたる人々待つとてそこに日を暮しつ。十七日のつとめて立つ。昔下つさの國に眞野のちやうといふ人住みけり。引布を千むら万（かイ）むら織らせさらさせけるが家の跡とて深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ殘りたるとて、大きなる柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きてこゝろのうちに、

「くちもせぬこの川柱のこらずばむかしのあとをいかで知らまし」。

その夜は黒戸の濱といふ所に泊る。片つ方は廣やかなる所のすなごはるばると白きに、松原茂りて月のいみじうあかきに、風の音もいみじう心ぼそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

「まどろまじこよひならではいつか見むくろどの濱の秋の夜の月」。

そのつとめてそこを立ちて下つさの國と武藏の境にてあるふと（よかイ）（ひさイ）ゐ川といふ、かゝみのせまつざとのわたりの津に泊りて、夜一夜舟にてかずかず物など渡す。めのとなる人は男などもなくなして、さかひにて子産みたりしかば離れてべちにのぼる。いと戀しければいかまほしく思ふにせうとなる人（定之（義イ）大學頭女菅博士令宗號和泉殿）抱きてゐていきたり。皆人は假初の假屋などいへど風すさまじくひき綿なども茂などしたるに、これは男なども添はねば、いと手はなちにあらあらしげに、苫といふものを一重うち葺きたれば月のこりなくさし入りたるに、紅のきぬ上に着てうちなやみて臥したる、月影さやうの人にはこよなく透きていと白く淸げにて珍しと思

ひてかき撫でつゝうち泣くを、いと哀れに見捨てがたく思へど、急ぎいでわいてかるゝ心地いと佗かずわりなし。傍に覺えつゝてう悲しければ月の興も覺えずくんじ臥しぬ。つとめて舟に車かきすゑて渡して、あなたの岸に車ひき立てゝおくりに來つる人々これより皆歸りぬ。のぼるはとまりなどしていき別るゝ程、行くもとまるも皆泣きなどす。をさな心地にも哀に見ゆ。今は武藏の國になりぬ。殊にをかしき所も見えず。濱もすなご白くなどもなくこひぢのやうにて紫おふと聞く野も葦荻のみ高く生ひて、馬に乘りて弓もたる末見えぬまで、高く生ひ茂りて中を分け行くに、竹しばといふ寺あり。遙には、さうふといふ所の廊のあとの礎などあり。「いかなる所ぞ」と問へば「これはいにしへ竹芝といふさかいうなり。國の人のありけるを火たき屋の火たく衞士にさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとて、などや苦しき目を見るらむ、わが國に七つ三つ作りすゑたる酒壺にさし渡したるひたえの瓢の、南風吹けば北に靡き、北風吹けば南になびき、西吹けば東に靡き、東吹けば西になびくを見て、かくてあるよとひとりごちつぶやきけるを、その時帝の御女いみじうかしづかれ給ふ唯一人御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかゝりて御覽ずるに、このをのこのかくひとりごつをいと哀に、いかなる瓢のいかに靡くらむといみじうゆかしくおぼされければ、御簾を押しあげて、あのをのこ子こち寄れと召しければ、畏まりて高欄のつらに參りたりければ、言ひつる事今一かへり我にいひて聞かせよと仰せられければ、酒壺のことを今一かへり申しければ、我率ていきて見せよ、さいふやうありと仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれどさるべきに

やありけむ、負ひ奉りて下るに、便なく人追ひてくらむと思ひてその夜勢多の橋のもとにこの宮をすゑ奉り、勢多の橋を一まばかり毀ちてそれを飛びこえて、この宮をかき負ひ奉りて七日七夜といふに武藏の國にいきつきけり。帝后、み子うせ給ひぬと思し惑ひ求め給ふに、武藏の國の衞士のをのこなむいとかうばしき物を頸に引きかけて飛ぶやうににげゝると申しいでゝ、このをのこを尋ぬるになかりけり。論なく元の國にこそ行くらめと公より使くだりて追ふに、勢多の橋のこぼれてえ行きやらず。三月といふに武藏の國にいきつきてこのをのこを尋ぬるに、このみこ公づかひを召して、我さるべきにやありけむこのをのこの家ゆかしくて率て行けといひしかば率てきたり、いみじくこゝありよく覺ゆ、このをのこ罪にきうせられば我はいかにあれど、此も先の世にこの國に跡をたるべき宿世こそありけめ、はやかへりて公にこの由を奏せよと仰せられければ、言はむかたなくて、のぼりて帝にかくなむありつると奏しければ、いふかひなし、そのをのこを罪しても今はこの宮を取り返し都に返し奉るべきにもあらず、竹芝のをのこに、生けらむ世の限武藏の國をあづけ取らせて公どもなさせじ、たゞ宮にその國を預け奉らせ給ふよしの宣旨下りにければ、この家を内裏の如く造りてすませ奉りける家を、宮などうせ給ひにければ寺になしたるを竹芝寺といふなり。その宮のうみ給へる子どもはやがて武藏といふ姓を得てなむありける。それよりのち火たき屋に女はゐるなり」と語る。野山蘆荻の中を分くるより外の事なくて武藏と相摸の中にゐてあすた川といふ、在五中將の「いざこととはむ」と詠みけるわたりなり。中將の集には隅田川と

あり（三十四字脱文歟）。舟にて渡りぬれば相摸の國になりぬ。にしとみといふ所の山繪よく書きたらむ屏風を立て並べたらむやうなり。片つ方は海濱のさまも、よせ返る浪の氣色もいみじうおもしろし。もろこし河原といふ所もすなどのいみじう白きを二三日ゆく。夏は倭瞿麥の濃く薄く錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬといふに、猶所々はうちこぼれつゝ哀げに咲きわたれり。「唐土河原に倭瞿麥の咲きけむこそ」など人々をかしがる。足柄山といふは四五日かねて恐しげにくらがり渡れり。やうやう入りたつ麓のほどだに空の氣色はかばかしくも見えず、えもいはず茂りわたりていとおそろしげなり。麓にやどりたるに月もなく暗き夜の闇に惑ふやうなるに、遊び三人いづくよりとなく出できたり。五十ばかりなる一人、廿ばかりなる十四五なるとあり。庵の前にからかさをさゝせてすゑたり。をのこども火を燈して見れば、昔こはたといひけむが孫といふ、髮いと長く額いとよくかゝりて色白くきたなげなくて「さてもありぬべき下仕などにてもありぬべし」など人々哀がるに、聲すべて似るものなく空にすみのぼりてめでたく歌をうたふ。人々いみじうあはれがりてけぢかくて人々もて興ずるに「西國のあそびは、えかゝらじ」などいふを聞きて「難波わたりにくらぶれば」とめでたく歌ひたり。見る目のいときたなげなきに聲さへ似る物なく歌ひてさばかり恐しげなる山中にたちて行くを、人々飽かず思ひて皆泣くを、幼き心地にはましてこの宿りをたゝむことさへ飽かずおぼゆ。まだ曉より足柄を越ゆ。まいて山の中の恐しげなる事いはむかたなし。雲は足のしたにふまる。山のなからばかりの木のもとの僅なるに葵の唯三

筋ばかりあるを「世はなれてかゝる山中にしも生ひけむよ」と人々あはれがる。水はその山に三所に流れたる辛うじて越え出でゝ關山にとゞまりぬ。これよりは駿河なり。よこばしりの關の傍に岩壺といふ所あり。えもいはず大きなる石のよはうなる中に穴のあきたる中より出づる水の清くつめたき事かぎりなし。富士の山はこの國なり。わが生ひ出でし國にては西面に見えし山なり。その山のさまいと世に見えぬさまなり。さまことなる山のすがたのこんじやうを塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃ききぬに白き袙きたらむやうに見えて、山の嶺のすこし平ぎたるより烟は立ちのぼる。夕暮は火の燃え立つも見ゆ。清見が關は片つ方は海なるに關屋ども數多ありて海までくぎぬきしたり。烟りあふにやあらむ清見が關の浪も高くなりぬべし。おもしろき事かぎりなし。田子の浦は浪高くて舟にて漕ぎめぐる。大井川といふわたりあり。みづの世の常ならずすりこなどをこくて流したらむやうに白き水早く流れたり。富士川といふは富士の山より落ちくる水なり。その國の人の出でゝ語るやう「一歳ごろ物にまかりたりしにいとあつかりしかば、この水のつらに休みつゝ見れば、川上の方より黄なるもの流れきて物につきてとゞまりたるを見ればほぐなり。取りあげて見れば黄なる紙にしてこく麗しくかゝれたり。怪しくて見れば、（來年なるべき國どもを除目の事皆かきてイ有）來年あくべきに（非イ）もかみなく（いみなしイ）て、またそへて二人をなしたり。あやしあさましと思ひてとり上げてほしてをさめたりしを、かへる年の司召に、この文にかゝれたりし一つたがはず、この國の守とありしまゝなるを、三月のうちになくなりて、又なりかはりたるもこの傍に書きつ

けられし人なり。かゝることなむありし。來年の司召などは、今年この山にそこばくの神々集りてない給ふなりけりと見給へし。めづらかなることにさふらふ」とかたる。沼尻といふところもすがすがと過ぎていみじくわづらひ出で、遠江にかゝる。小夜の中山など越えけむ程も覺えず。いみじく苦しければ天龍といふ川のつらに假屋造り設けたりければ、そこにて日ごろ過ぐる程にぞやうやうをこたる。冬深くなりたれば河風烈しく吹き上げて堪へがたく覺えけり。そのわたりしつゝ濱名の橋についたり[十七字イ缺]。濱名の橋下りし時は黒木を渡したりし。この度は跡だに見えねば舟にて渡る。入江に渡せ[カし]し橋なり。との海はいといみじく荒く浪高くて、入江のいたづらなる洲どもに異ものもなく松原の茂れる中より浪のよせかへるもいろいろの玉のやうに見え、誠に松の末より浪は越ゆるやうに見えていみじくおもしろし。それよりかみはゐの鼻といふ坂のえもいはずわびしきをのぼりぬれば、三河の國の高師の濱といふ。八橋は名のみして橋のかたもなく何の見所もなし。二村の山の中にとまりたる夜、大きなる柿の木のもとにいほりをつくりたれば、夜一夜庵の上に柿の落ちかゝりたるを人々拾ひなどす。宮路の山といふ所越ゆる程十月晦日なるに紅葉ちらでさかりなり。

「嵐こそ吹きこざりけれみやぢ山まだもみぢ葉の散らでのこれる」。

三河と尾張となるしかすがの渡り、げに思ひ煩ひぬべくをかし。尾張の國鳴海の浦を過ぐるに、夕汐たゞみちにみちて今宵宿からむもちうげんに潮みちきなばこゝをも過ぎじと、ある限走り惑ひすぎぬ。美濃の國なる境にすのまたといふわたりして野上といふ所につきぬ。そ

こにあそびども出で來て夜一夜歌うたふに、足柄なりし思ひ出でられて、哀に戀しきことかぎりなし。雪ふり荒れ惑ふに物の興もなくて、不破の關あつみの山など越えて近江の國おきなかといふ人の家にやどりて四五日あり。みつさか山の麓に、夜晝、時雨、霰ふり亂れて日の光もさやかならず。いみじうものむづかし。そこを立ちて犬上、神崎、やす、くるもとなどいふ所々何となく過ぎぬ。湖のおもてはるばるとしてなでしま、竹生島などいふ所々見えたるいとおもしろし。勢多の橋皆くづれて渡りわづらふ。粟津にとゞまりてしはすの二日京に入る。くらくいき着くべし。申の時ばかりに立ちて行けば、關(逢坂)近くなりて山づらにかりそめなるきりかけといふ物したるかみより、丈六の佛のいまだ荒作りにおはするが、顏ばかり見やられたり。哀に人ばなれていづこともなくおはする佛かなとうち見やりて過ぎぬ。こゝらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見が關と逢坂の關とばかりはなかりけり。いと暗くなりて三條の宮(脩子)の西なる所につきぬ(長元九年十月)。』ひろびろとあれたる所の過ぎ來つる山々にもおとらず大きにおそろしげなる深山木どものやうにて、母なくなりにしめひどもゝ生れしよりひとつにてよるは左右に臥し起きするもあはれに思ひ出でられなどして、心もそらにながめ暮さる。たち聞きかいまむ人のけはひしていといみじく物つゝまし。十日ばかりありてまかでたればてゝはゝすびつに火など興して待ち居たりけり。車よりおりたるをうち見て「おはする時こそ、人めも見えさぶらひなどもありけれ、この日頃は人聲もせず前に人かげも見えず、いと心ぼそくわびしかりつる。かうてのみもまろが身をばいかゞせむとかする」とうち泣くを

見るもいと悲し。つとめても「今日はかくておはすれば、内と人おほくてよなくにぎはゝしくもなりたるかな」とうちいひて對ひ居たるもいとあはれに、何のにはひのあるにかと涙ぐましう聞ゆ。「ひじりなどすら先の世のこと夢に見るはいとかたかなるを、いとかうあとはかないやうにはかばかしからぬ心地に見るやう、淸水のらい堂に居たれば、別當とおぼしき人出で來て、そこはさきの生にこの御寺の僧にてなむありし、佛師にて佛をいと多く作り奉りし功德によりて、ありしすざうまさりて人と生れたるなり、これは御堂のひんがしにおはする丈六の佛はそこの作りたりしなり、はくをおしさしてなくなりにしぞと。あないみじ。さはあれにはくおし奉らむといへばなくなりにしかば、こと人はくおし奉りてこと供養もしてしと見て、後淸水にねんごろに參り仕うまつらましかば、さきの世にその御寺に佛念じ申しけむ力におのづからやうもをこがましく見えしかば、我はかくてとぢ籠りぬべきぞ」とのみ殘りなげに世を思ひいふめるに心ぼそさ堪へず。東は野のはるばるとあるに、ひんがしの山際は比叡の山よりして稻荷などいふ山まであらはに見え渡り、西は雙の岡の松風いと耳近う心細く聞えて、内にはいたゞきのもとまで田といふもの丶ひたひきならす音など、田舍の心ちしていとをかしきに、月のあかき夜などはいとおもしろきを詠め明し暮すに、知りたりし人、里遠くなりて音もせず。便につけて、何事かあらむとつたふる人に驚きて、

「おもひいで丶人こそ訪はね山ざとのまがきの荻にあき風ぞふく」

といひてやる。十月（長曆元年）になりて京にうつろふ。母尼になりて同じ家の内なれどかたことに住

み離れてあり。てゝは唯我をおとなにしすゑて我は世にもいでまじらはず、蔭にかくれたらむやうにて居たるを見るも頼もしげなく心細く覺ゆるに、聞しめすゆかりある所（祐子內親王今第三皇女後中宮娘子同後也御集手附白河院一宮）に「何となく徒然に心細くてあらむよりは」と召すを「こだいのおやは宮仕人はいと憂きことなりと思ひてすぐさするを、今の世の人はさのみこそはいでたて。さてもおのづからよきためしもあり。さても試みよ」といふ人々ありて、しぶしぶにいだしたてらる。まづ一夜まゐる。菊の濃く薄き八つばかりに濃き掻練を上に着たり。さこそ物語にのみ心を入れてそれを見るより外に行き通ふるゐしぞくなどだにことになく、こだいの親どものかげばかりにて、月をも花をも見るより外の事はなきならひに立ちいづる程のこゝち、あれにもあらず現とも覺えで曉にはまかでぬ。里びたる心ちには、なかなか定まりたらむ里ずみよりはをかしきをも見聞きて心も慰みやせむと思ふをりをりありしを、いとはしたなく悲しかるべき事にこそあべかめれと思へどいかゞせむ。しはすになりて又參る。局してこの度は日ごろ侍ふ。うへには時々夜々ものぼりて知らぬ人の中にうち臥してつゆまどろまれず。恥かしう物のつゝましきまゝに忍びてうちなかれつゝ、曉には夜ぶかくおりて日くらして、この老い衰へてわれを子としもたのもしからむかげのやうに、思ひ頼み向ひ居たるに、戀しく覺束なくのみ覺ゆ。口をし（四字ゆるゝイ引はしイ）。いかによしなかりける心なりと思ひしみはてゝまめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず。參りそめし所にもかくかき籠りぬるを、まことゝも思しめしたらぬさまに人々もつゆ絶えず、めしなどする中にもわざと召して、「わかい人參らせよ」

と仰せくだれば、えさらず出したつるにひかされて又時々出でたてど、過ぎにし方のやうなるあいなだのみの心おごりをだにすべきやうもなくて、さすがに若い人にひかれて、をりをり馴れたる人は、こよなく何事につけてもありつき顔に、我はいとわかうどにあるべきにもあらず、又おとなにせらるべき覚えもなく、時々のまらうどにさしはなたれてすゞろなるやうなれど、ひとへにそなた一つを頼むべきならねば我よりまさる人あるも羨しくもあらず。なかなか心易く覚えてさるべきをりふしまゐりて、徒然慰むべき人と物語などしてめでたきことども、をかしくおもしろきをりをりも、我が身はかやうに立ちまじりいたく人にも見知られむにもはゞかりあるべければ、唯大かたの事にのみ聞きつゝすぐすに、内の御供に參りたるをり（長久三年四月十三日宮故入内給藤原嫄子　寛十四日主上崩御廿日内宮内令出給）有明の月いとあかきに我が念じ申す天てる御神は内にぞおはしますなるかし。かゝる折に參りて拜み奉らむと思ひて、四月ばかりの月のあかきにいと忍びて參りたれば、はかせの命婦はしるたよりあれば、燈ろの火のいとほのかなるにあさましくおい神さびて、さすがにいとよう物など言ひ居たるが、人ともおぼえず、神のあらはれ給へるかとおぼゆ。又の夜も月のいとあかきに藤壺のひんがしの戸を押しあけて、さるべき人々物がたりしつゝ月を詠むるに、梅壺の女御（女御藤生子長暦三年十二月廿一日入内内大臣教通女）のぼらせ給ふなるおとなひいみじう心にくゝ優なるにも、「故宮（中宮嫄子長暦元年正月七日入内廿九日女御　三月立后同三年八月廿八日崩御）のおはします世ならましかば、かやうにのぼらせ給はまし」など、人々言ひいづる、げにいとあはれなりかし。

「天の戸を雲ゐながらもよそに見てむかしのあとを戀ふる月かな」。

冬になりて、月なく雪も降らずながら、星の光に空さすがに隈なくさえわたりたる夜のかぎり。殿の御かたにさぶらふ人々と物語しつゝ、あくればたちやあらまし元如。いといふかひなくまうで仕うまつることもなくて止みにき。』十二月廿の五日、宮の御佛名に召しあればその夜ばかりと思ひて參りぬ。白ききぬどもに濃きかいねりを皆着て四十餘人ばかり出で居たり。しるべし出でし人のかげに隱れてあるがうちにうちほのめいて曉にはまかづ。雪うち散りていみじう烈しくさえこほる曉がたの月の、ほのかに濃きかいねりの袖にうつれるもげにぬるゝがほなり。道すがら、

「年はくれ夜はあけがたの月かげの袖にうつれるほどぞはかなき」。

かう立ち出でぬとならば、さても宮づかへの方にもたち馴れ、世にまぎれたるもねぢけがましきおぼえもなき程は、おのづから人のやうにもおぼしもてなさせ給ふやうもあらまし。親たちもいと心得ず、ほどもなくこめすゑつ。さりとてその有樣のたちまちにきらきらしきいきほひなどあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすゞろ心にても殊の外にたがひぬるありさまなりかし。

「いく千たび水の田芹をつみしかど思ひしことのつゆもかなはぬ」。

とばかりひとりごたれて止みぬ。その後は何となくまぎらはしきに、物語のこともうち絶え忘られて、物まめやかなるさまに心もなりはてゝぞ。などて多くの年月をいたづらにて臥し起きしに、行をも物詣をもせざりけむ。このあらまし事とても思ひし事どもはこの世にあん

べかりけることゞもなりや。』光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薫大將の宇治に隱しすゑ給ふべくもなき世なり。あな物くるはしや。國にて物語を儀にしてもはかばかしく人のやうならむとも念ぜられず。この頃の世の人は十七八よりこそ經よみ行をもすれ。さることと思ひかけられず。辛うじて思ひよる事は、いみじくやんごとなくかたちありさま物語にある光源氏などやうにおはせむ人を、年に一度にても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに山里にかくしすゑられて花紅葉月雪をながめて、いと心細げにてめでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめとばかり思ひつゞけ、あらましごとにも覺えけり。親となりなばいみじうやんごとなく我が身もなりなむと、唯行くへなき事をうち思ひ過ぐすに、親からうじて遙に遠きあづまになりて「年頃はいつしか思ふやうに近き所になりたらば、まづ胸あくばかりかしづきたてゝゐてくだりて海山の氣色も見せ、それをばさるものにて我が身よりも高うもてなしかしづきて見むとこそ思ひつれ。われも人も宿世のつたなかりければ、ありありてかく遙なる國になりにたり。幼かりし時あづまの國にゐて下りてだに心ちも聊あしければ、これをや此の國に見捨てゝ惑はむとすらむと思ふ。人の國のおそろしきにつけても我が身ひとつならばやすらかならましを、所せうひき具して、いはまほしき事もえ言はずせまほしき事もえせずなどあるが侘しうもあるかなと心を碎きしに、今はまいておとなになりにたるを、ゐて下りて我が命も知らず京の中にてさすらへむは例のこと、あづまの國田舍人になりて惑はむはいみじかるべし。京にても賴もしう迎へ取りてむと思ふ類ゑ族もなし。さり

とてわづかになりたる國を辭し申すべきにあらねば京にとゞめて永き別にて止みぬべきなり。京にもさるべきさまにもてなしてとゞめむとは思ひよる事にもあらず」と夜毎なげかるゝを聞く心ち、花紅葉のおもひも皆忘れて悲しくいみじく思ひ嘆かるれどいかゞはせむ。』七月十三日にくだる。五日かねては見むもなかなかなるべければうちにも參らず。まいてその日は立ちさわぎて時なりぬればとて簾垂をひきあげてうち見合せて涙をほろほろと落して、やがて出でぬるを見送る心ち目もくれ惑ひてやがてふされぬるに、とまるをのこのおくりしてかへるに、ふところがみに、

「思ふことこゝろにかなふ身なりせば秋のわかれをふかく知らまし」

とばかりかゝれたるを、え見やられず、ことよろしき時こそ腰をれかゝりたることも思ひつゞけらるれ、ともかくも言ふべきかたもおぼえぬまゝに、

「かけてこそ思はざりしかこの世にてしばしも君にわかるべしとは」

とやかゝれにけむ。いとゞ人目も見えず寂しく心ぼそくうちながめつゝ、いづこばかりと明暮思ひやる。道の程も知りにしかば遙に戀しく心ぼそき事かぎりなし。明くるよりくるゝまでひんがしの山際を詠めて過ぐす。八月ばかりにうづまさに籠るに、一條より詣づる道に、男車二つばかり引き立てゝ物へ行くに、諸共にくべき人待つなるべし、過ぎて行くに隨身だつものをおこせて、

「花見にゆくときみを見るかな」

といはせたれば、「かゝるほどのことはいらへぬもびんなし」などあれば、
「千種なるこゝろならひに秋の野の」
とばかりいはせていき過ぎぬ。七日侍ふほども「唯東路のみ思ひやられてよしなし。とかくしてはなれてたひらかにあひ見せ給へ」と申せば、佛もあはれと聞き入れさせ給ひけむかし。冬になりて日くらし雨ふりくらいたる夜、雲かへる風烈しううち吹きて空晴れて月いみじうあかうなりて軒近き荻のいみじく風にふかれてくだけまどふがいとあはれにて、
「秋をいかにおもひ出づらむ冬ふかみあらしにまどふ荻のかれ葉も」。
あづまより人きたる。神拜といふことして國の內ありきしに、水をかしく流れたる野のはるばるとあるに森のある、をかしき所かな、みせてとまづ思ひいでゝ「こゝはいづことかいふ」と問へば、「こしのびの森となむ申す」と答へたりしが、身によそへられていみじく悲しかりしかば、馬よりおりて、そこにふた時なむながめられし。
「とゞめおきて我がごと物や思ひけむみるにかなしきこしのびのもり」
となむおぼえしとあるを見る心地いへば更なり。かへりごとに、
「こしのびを聞くにつけてもとゞめおきしちゝぶの山のつらきあづまぢ」。
かうてつれづれとながむるに、などかものまうでもせざりけむ。母いみじかりし古代の人にて、「初瀬にはあなおそろし、奈良坂にて人にとられなばいかゞせむ、石山關山越えていと恐ろし、鞍馬はさる山ゐて出でむいとおそろしや、親のぼりてともかくもとさしはなちたる人

のやうに煩はしがりて、僅に淸水にゐて籠りたり。それにも例のくせはまことしかべいこととも思ひ申されず。彼岸のほどにていみじう騷がしう怖ろしきまで覺えてうちまどろみ入りたるに、御帳のかたの犬ふせぎのうちに、靑き織物の衣を着て錦を頭にもかづき足にもはいたる僧の別當とおぼしきが寄り來て、ゆくさきの哀ならむも知らず、さもよしなし事をのみとうちむつがりて御帳の內に入りぬと見ても、うち驚きてもかくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひ留めで罷でぬ。母一尺の鏡を鑄させて「えゐて參らせぬかはりに」とて僧を出したてゝ初瀨に詣でさすめり。「三日侍ひてこの人のあべからむさま夢に見せ給へ」などいひて詣でさするなめり。その程は精進せさす。この僧歸りて「夢をだに見で詣でなむがはいなきと、いかゞ歸りても申すべきといみじうぬかづき行ひてねたりしかば、御帳のかたよりいみじうけだかう淸げにおはする女の麗しくさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげて、この鏡は文やそひたりしと問ひ給へば、かしこまりて、文もさふらはざりき、此の鏡をなむ奉れとはべりしと答へたてまつれば、あやしかりける事かな、文そふべきものをとて、この鏡を、こなたに映れる影を見よ、これを見れば哀に悲しきぞとて、さめざめと泣き給ふを見ればふしまろび泣き歎きたる影うつれり、この影を見ればいみじうかなしな、これ見よとて、今片つ方に映れる影を見せ給へば、御簾ども靑やかに几帳おし出でたる下よりいろいろの衣こぼれ出で、梅櫻さきたるに鶯木づたひ鳴きたるを見せてこれを見るは嬉しなどのたまふとなむ見えし」と語るなり。いかに見えけるぞとだに耳もとゞめず。「ものはかなき心にも常

に天てる御神を念じ申せ」といふ人あり。いづくにおはします神佛にかはなど、さはいへど
やうやう思ひわかれて人に問へば「神におはします。伊勢に坐します。紀の國にきのこくざ
うと申すはこのおん神なり。さては内侍所にすべら神となむ坐します」といふ。伊勢の國ま
では思ひかくべきにもあらざなり。内侍所にもいかでかは參り拜み奉らむ。空の光を念じ申
すべきにこそはなどうきておぼゆ。』おなじ族なる人尼になりて、す學院に入りぬるに冬の頃、

「なみださへふりはへつゝぞ思ひやるあらし吹くらむふゆの山里」。

かへし、

「わけてとふ心のほどの見ゆるかな木かげをぐらき夏のしげりを」。

あづまに下りし親、辛じてのぼりて西山なる所に落ちつきたれば、そこに皆渡りて見るに、
いみじううれしきに月のあかき夜ひと夜物語などして、

「かゝるよもありけるものをかぎりとて君に別れし秋はいかにぞ」

といひたれば、いみじくなきて、

「思ふこととかなはずなぞといとひこし命のほども今ぞうれしき」。

これぞ別の門出と言ひ知らせし程の悲しさよりは平かに待ちつけたる嬉しさも(元知)限なけ
れど、人の上にても見しに老い衰へて世にいで交らひしは、都のうちとも見えぬ所のさまな
り。』ありもつかずいみじう物騷がしけれどもいつしか(寛仁四年冬閏十二月)と思ひし事なれば(物語求めて見せよ見せ、よと母をせむれば在)
三條の殿の宮(長和二年正月廿七日敍一品宮自櫻狭之家遷給三條宮)になぞくなる人の衛門の命婦とて侍ひける尋ねて文やりたれば

珍しがりてよろこびて御前のをおろしたるとて、わざとめでたき草紙ども、硯の箱の蓋に入れておこせたりし嬉しくいみじくて、夜晝これを見るよりうち始め、またまたも見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに誰かは物語もとめ見する人のあらむ。繼母なりし人（上總大輔後拾遺作者中宮大進從五位）は宮仕せしが下りしなれば、思ひしにあらぬ事どもなどありて、世の中うらめしげにてほかに渡るとて、五つばかりなるちごどもなどして「哀なりつる心のほどなむ忘れむ世あるまじき」などいひて梅の木のつま近くていと大きなるを、「これが花の咲かむをりは來むよ」と言ひおきて渡りぬるを、心のうちに戀しくあはれなりと思ひつゝ、忍びねをのみ泣きてその年も歸りぬ。いつしか（治安元年）梅咲かなむ、來むとありしをさやあると目をかけて待ちわたるに、花も皆咲きぬれど音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

「たのめしをなほや待つべき霜がれし梅をも春はわすれざりけり」

といひやりたれば、あはれなる事ども書きて、

「なほたのめ梅の立枝はちぎりおかぬおもひの外の人もとふなり」。

その春世の中いみじうさわがしうて、まつざと（郡田河）のわたりの月かげあはれに見し乳母も、三月朔日になくなりぬ。せむかたなく思ひなげくに物語のゆかしさも覺えずなりぬ。いみじく泣きくらして見いだしたれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花のこりなく散りみだる。

「散る花もまたこむ春はみもやせむやがてわかれし人ぞこひしき」。

また聞けば、侍従の大納言の御女なくなり給ひぬなり。殿の中將殿のおぼしなげくなるさま、我が物の悲しき折なればいみじく哀なりと聞く。のぼりつきたりし時「これ手本にせよ」とてこの姫君の御手を取らせたりしを、「小夜ふけてねざめざりせば」など書きて「鳥部山谷にけぶりの燃えたゝばはかなく見えし我と知らなむ」といひ志らずをかしげに、めでたく書き給へるを見ていとゞ涙をそへまさる。かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと心ぐるしがりて母物語などもとめて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見てつゞきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。されどいまだ都なれぬ程にてえ見つけずいみじく心もとなくゆかしく覺ゆるまゝに「この源氏の物語一のまきよりして皆見せ給へ」と心のうちに祈る。親のうづまさに籠り給へるにも、こと事なくこの事を申していでむまゝにこの物語見はてむと思へど見えず。いと口をしく思ひなげかるゝに、叔母なる人の田舍よりのぼりたる所にわたいたれば「いとうつくしうおひなりにけり」などあはれがり珍しがりて、歸るに「何をか奉らむ。まめまめしきものはまたなかりなむ。ゆかしくし給ふなるものを奉らむ」とて源氏の五十よまき櫃に入れながら在中將、とほぎみ、芹川、志らゝ、あさうづなどいふ物語ども一袋とり入れて得て歸る心ちの嬉しさぞいみじきや。走る走る僅に見つゝ心もえず、心もとなく思ひ、源氏を一のまきよりして人もまじらず几帳の内にうち臥してひき出でつゝ見るこゝち、后の位も何にかはせむ。晝は日ぐらしよるは目の覺めたるかぎり火を近くともしてこれを見るより外の事なければ、おのづからなどはそらにおぼえ浮ぶを、い

みじき事に思ふに、夢に、いと淸げなる僧の黃なる地の袈裟着たるが來て、法華經五卷を疾く習へといふと見れど、人にもかたらず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて我はこのごろわろきぞかし。さかりにならばかたちもかぎりなくよく、髮もいみじう長くなりなむ。光源氏の夕顏、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひけるこゝろまづいとはかなくあさまし。』五月朔日ごろつま近き花橘のいと白く散りたるをながめて、

「時ならずふるゆきかとぞながめまし花たちばなのかをらざりせば」。

足柄といひし山の麓にくらがりわたりし木のやうに茂れる所なれば、十月ばかりの紅葉四方の山邊よりもげにいみじくおもしろく錦をひけるやうなるに、ほかよりきたる人の、「今參りつる道に、紅葉のいとおもしろき所のありつる」といふに、ふと、

「いづこにもおとらじものを我が宿の世をあきはつるけしきばかりは」。』

物語のことを晝は日ぐらし思ひつゞけ、夜も目のさめたるかぎりはこれをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、このごろ皇太后宮（妍子枇杷殿）の一品の宮（禎子陽明門院）の御料に六角堂にやり水をなむつくるといふ人あるをそはいかにと問へば、天てる御神を念じませといふと見て、人にもかたらず何ともおもはでやみぬる、いといふかひなし。春ごとにこの一品の宮をながめやりつゝ、

「咲くとまち散りぬとなげく春はたゞわがやどがほに花を見るかな。

三月（治安元年）晦日がたつちいみに人のもとに渡りたるに、櫻の盛におもしろく今まで散らぬもあ

り。かへりて又の日、

「あかざりし宿のさくらを春くれて散りがたにしもひとり見しかな」

といひやる。花の咲きちるをりごとに乳母なくなりし折ぞかしとのみあはれなるに、同じをりなくなり給ひし侍從の大納言の御女の、ふみを見つゝすゞろにあはれなるに、五月ばかり夜更くるまで物語を讀みて起き居たれば、來つらむ方も見えぬに猫のいと長うないたるを驚きて見ればいみじうをかしげなる猫あり。いづくより來つる猫ぞと見るに姉なる人「あなかま、人に聞かすな。いとをかしげなる猫なり。かはむ」とあるに、いみじう人馴れつゝ傍にうちふしたり。尋ぬる人やあるとこれを隱してかふに、凡て下すのあたりにも寄らずつと前にのみありて、物もきたなげなるはほかざまに顔をむけてくはず。姉おとゝの中につとまとはれてをかしがりらうたがる程に、姉の惱む事あるに物騷がしくて、この猫を北面にのみあらせて呼ばねばかしがましくなきのゝしれども、猶さるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉驚きて「いづら、猫はこちゐてこ」とあるを「など」と問へば「夢に猫の傍に來て己は侍從の大納言殿の御むすめのかくなりたるなり、さるべきえんのいさゝかありてこの中の君のすゞろに哀と思ひ出で給へば、唯暫しこゝにあるを、このごろ下すのなかにありていみじうわびしき事といひていみじう泣くさまは、あてにをかしげなる人と見えてうち驚きたれば、この猫の聲にてありつるがいみじくあはれなるなり」とかたり給ふを聞くに、いみじくあはれなり。その後はこの猫を北面にも出さず思ひかしづく。唯ひとり居たる所にこの猫が對ひ

居たれば、搔い撫でつゝ「侍從大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせ奉らばや」と言ひかくれば顔をうちまもりつゝ長うなくも、心の思ひなし目のうちつけに、例の猫にはあらず聞き志り顔に哀なり。世の中に長恨歌といふ文を物語にかきてある所あんなりと聞くに、いみじくゆかしけれどえ言ひよらぬに、さるべきたよりをたづねて七月七日いひやる、

「ちぎりけむむかしの今日のゆかしさに天の川浪うち出づるかな」。

かへし、

「たちいづる天の河邊のゆかしさに常はゆゝしきこともわすれぬ」。

その十三日の夜、月いみじく隈なくあかきに、皆人も寢たる夜中ばかりに椽に出で居て、姉なる人空をつくづくながめて「唯今ゆくへなく飛び失せなばいかゞ思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へる氣色を見て、こと事にいひなして笑ひなどしてきけば、かたはらなる所にさきおふ車とまりて「荻の葉荻の葉」と呼ばすれど、答へざなり。呼びわづらひて笛ををかしく吹きすまして過ぎぬなり。

「笛の音のたゞ秋かぜときこゆるになど荻の葉のそよとこたへぬ」

といひたれば「げに」とて、

「荻の葉の答ふるまでも吹きよらでたゞに過ぎぬる笛の音ぞうき」。

かやうに明くるまで詠めあひて夜明けてぞ皆人寢ぬる。そのかへる年（治安三年）四月の夜中ばかりに火の事ありて、大納言殿の姫君と思ひかしづきし猫も燒けぬ。「大納言殿の姫君」と呼びし

かば、聞き知り顔に泣きて歩み來などせしかば、てゝなりし人も「めづらかにあはれなるとなり。大納言に申さむ」などありし程にいみじうあはれに口惜しく覺ゆ。』ひろびろと物深き深山のやうにはありながら、花紅葉の折は四方の山邊も何ならぬを見ならひたるに、たとしへなくせばき所の、庭のほどもなく木などもなきに、いと心憂きに、向ひなる所に、梅紅梅など咲き亂れて風につけてかをり來るにつけても住み馴れし古鄕かぎりなく思ひ出でらる。

「にほひくるとなりの風を身にしめてありし軒端の梅ぞこひしき」。

その五月のついたちに姉なる人子產みてなくなりぬ。よその事だにをさなくよりいみじく哀れと思ひ渡るに、ましていはむかたなくあはれ悲しと思ひなげかる。母などは皆なくなりたるかたにあるに、かたみにとまりたる幼き人々を左右にふせたるに、荒れたる板屋のひまより月のもりきてちごの顏にあたりたるが、いとゆゝしく覺ゆれば、袖をうちおほひて今一人をもかきよせて思ふぞいみじきや。そのほど過ぎて親族なる人のもとより、「昔の人の必もとめておこせよとありしかばもとめしに、その折は見出でずなりにしを、今しも人のおこせたるがあはれに悲しき事」とて、かばねたづぬるみやといふ物語をおこせたり。まことにあはれなるや。かへりごとに、

「うづもれぬかばねを何にたづねけむ苔の下には身こそなりぬれ」。

乳母なりし人今は何につけてかなど、なくなくも、とある所にかへりわたるに、

「故鄕にかくこそ人はかへりけれあはれいかなるわかれなりけむ」。

昔のかたみにはいかでとなむ思ふ」など書きて、「硯の水のこほれば皆とぢられてとゞめつ」

といひたるに、

「かき流すあとはつらゝにとぢてけり何を忘れぬかたみとか見む」

といひやりたる返り事に、

「なぐさむるかたもなぎさの濱千鳥何かうき世にあともとゞめむ」。

この乳母墓所見てなくなくかへりたりし、

「のぼりけむ野邊は煙もなかりけりいづこをはかとたづねてか見し」。

これを聞きて繼母なりし人、

「そこはかと知りてゆかねどさきにたつ涙ぞ道のしるべなりける」。

かばねたづぬるみやおこせたりし人、

「住み馴れぬ野邊の笹原あとはかもなくなくいかに尋ねわびけむ」。

これを見てせうと（從兄）は、その夜おくりにいきたりしかば、

「見しまゝに燃えしけぶりはつきにしをいかゞ尋ねし野邊の笹原」。

雪の日を經て降るころ、吉野山に住む尼君を思ひやる、

「ゆきふりてまれの人めも絶えぬらむよし野の山のみねのかけ道」。』

かへる年（寛治元年）む月の司召に親のよろこびすべき事ありしにかひなきつとめて、同じ心に思ふべき人の許より「さりともと思ひつゝ明くるを待ちうる心もとなさ」などいひて、

「おくるまつ鐘のこゑにも夢さめて秋のもゝ夜のこゝちせしかな」

といひたる返り事に、

「あかつきを何にまちけむ思ふことなるとも聞かぬかねの音ゆゑ」。

四月つごもりがた、さるべき故ありて東山なる所へうつろふ。道のほど田の苗代水まかせたるも植ゑたるも何となく青み、をかしく見えわたりたる山のかげくらう前ちかく見えて、心ぼそくぞあはれなる。ゆふぐれ水鷄いみじくなく。

「たゝくともたれか水鷄のくれぬるに山路を深くたづねてはこむ」。

靈山近き所なれば詣でゝ拜み奉るにいとくるしければ、山寺なる石井によりて、手にむすびつゝ飲みて、この水の飽かずおぼゆるかなといふ人のあるに、

「おく山の石間の水をむすびあげて飽かぬものとは今のみやしる」

といひたれば、水のむ人、

「山の井のしづくににごる水よりもこはなほあかぬ心ちこそすれ」。

歸りて夕日さやかにさしたるに、都のかたものこりなく見やらるゝに、この雫に濁る人は京にかへるとて、心苦しげに思ひて、又つとめて、

「山の端に入る日のかげは入りはてゝ心ぼそくぞながめやられし」。

念佛する僧の曉にぬかづく音の尊く聞ゆれば、戸を押しあけたれば、ほのぼの明けゆくやまぎは、こぐらき梢どもきりわたりて、花紅葉のさかりよりも何となく茂りわたれば、空のけ

しきもらはしくをかしきに、杜鵑さへいと近き梢にあまたたびないたり。

「誰に見せたれにきかせむ山里のこのあかつきもをちかへる音も」。

この晦日の日、「谷のかたなる木のうへに杜鵑かしがましくないたり。

「都には待つらむものをほとゝぎす今日ひねもすに鳴きくらすかな」

などのみ詠めつゝもろともにある人「唯今京にも聞きたらむ人あらむや。かくてながむらむと思ひおこす人あらむや」などいひて、

「山ふかくたれかおもひはおこすべき月見る人はおほからめども」

といへば、

「ふかき夜に月見るをりは知らねどもまづ山里ぞおもひやらるゝ」。

曉になりやしぬらむと思ふほどに、山のかたより人あまた來るおとす。驚きて見やりたれば、鹿の椽のもとまで來てうち鳴いたる、近うはなつかしからぬものゝ聲なり。

「秋の夜のつまこひかぬる鹿のねはとほ山にこそきくべかりけれ」。

しりたる人の近きほどに來てかへりぬと聞くに、

「まだ人めしらぬ山べのまつかせに音してかへるものとこそ聞け」。

八月になりて廿餘日のあかつきがたの月、いみじくあはれに山のかたはこぐらく、瀧の音どもも似るものなくのみ詠められて、

「おもひしる人に見せばや山ざとのあきの夜ふかきありあけの月」。

京にかへり出づるにわたりし時は水ばかり見えし田ども、皆苅りはてゝけり。

「苗代の水かげばかり見えし田のかりはつるまでなが居しにけり」。

十月つごもりがたにわからさまに來て見れば、こぐらうしげりし木の葉どものこりなく散りみだれて、いみじくあはれげに見え渡りて心ちよげにさゞらぎ流れし水も、木の葉にうづもれて跡ばかり見ゆ。

「水さへにすみ絶えにけり木の葉ちるあらしの山のこゝろぼそさに」。

そこなる尼に「春まで命あらば必こむ。花ざかりはまづつげよ」などいひて歸りにしを、年かへりて[illegible]三月十餘日になるまで音もせねば、

「ちぎりおきし花のさかりをつげぬかな春やまだこぬ花やにほはぬ」。

旅なる所にきて月のころ竹のもと近くて、風の音に目の覺めてうちとけてねられぬころ、

「竹の葉のそよぐ夜ごとにねざめして何ともなきにものぞかなしき」。

秋のころそこを立ちてほかへうつろひてそのあるじに、

「いづことも露のあはれはわかれじをあさぢがはらの秋ぞこひしき」。

繼母なりし人の、くだりし國の名を宮にも言はるゝに、こと人かよはしてのちも猶その名をいはるゝと聞きて、親の今はあいなきよしいひにやらむとあるに、

「あさくらや今は雲ゐに聞くものをなほ木のまろが名のりをやする」。

かやうにそこはかとなき事を思ひつゞく。わかれわかれしつゝまかでしを思ひ出でければ、

「月もなく花もみざりしふゆの夜のこゝろにしみてこひしきやなぞ」。

我もさ思ふことなるを、同じ心なるもをかしうて、

「さえし夜のこほりは袖にまだとけで冬の夜ながら音をこそはなけ」。

御前にふしてきけば、池の鳥どものよもすがら聲々はふきさわぐ音のするに目もさめて、

「わがことを(をとこ のイ)水のうきねにあかしつゝうは毛の霜をはらひわぶなる」

とひとりごちたるを、傍に臥し給へる人聞きつけて、

「まして思へ水のかりねのほどだにもうはげの霜をはらひわびける」。

かたらふ人どち局のへだてなる遣戸をあけ合せて、物語など暮らす日、又かたらふ人のうへに物し給ふをたびたびよびおろすに、「せちに事あらばいかむ」とあるに、枯れたる薄のあるにつけて、

「冬がれのしのゝをすゝき袖たゆみまねきもよせじかぜにまかせむ」。

上達部殿上人などに對面する人は定まりたるやうなればうひうひしき里人はありなしをだに知るべきにもあらぬに、十月朔日ごろのいと暗き夜、ふだん經に聲よき人々讀むほどなりとて、そなた近き戸口に二人ばかり立ち出でゝ、聞きつゝ物語してよりふしてあるに、まゐりたる人のあるを、にげ入りて局なる人々、呼びあげなどせむも見ぐるし、さばれ唯をりからこそかくてただにといふ。いま一人のあれば、傍にて聞き居たるに、おとなしくしづやかなるけはひにてものなどいふ。「口をしからざなり、今一人は」など問ひて世の常のうちつ

けのけさうびてなどもいひなさず。世の中の哀なる事どもなどまめやかにいひ出で丶、さすがにきびしう引き入りかたはふしぶしありて、我も人も答へなどするを「まだ知らぬ人のありける」などめづらしがりて、とみにたつべくもあらぬほど、星の光だに見えず暗きに、うちしぐれつ丶木の葉にかゝる音のをかしきを、なかなかに艶にをかしき夜かな。月のくまなくあかからむもはしたなくまばゆかりぬべかりけり。春秋の事などいひて時にしたがひ見ることには春霞おもしろく空ものどかにかすみ、月のおもてもいとあかうもあらず、遠うながる丶やうに見たるに、琵琶のふが元如うてうゆるやかに弾きならしたる、いといみじく聞ゆるに、また秋になりて月いみじうあかきに空は霧り渡りたれど、手にとるばかりさやかにすみわたりたるに、風の音蟲のこゑとりあつめたる心地するに、箏の琴かきならされたる平調の吹きすまされたるは何の春とおぼゆかし。又さるかと思へば冬の夜の空さへさえわたり、いみじきに雪の降り積りひかりあひたるに、篳篥のわなゝき出でたるは春秋も皆忘れぬかしといひつゞけて「いづれにか御心とゞまる」と問ふに、秋の夜に心をよせて答へ給ふを、さのみ同じさまにはいはじとて、

「あさみどり花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春の夜の月」

と答へたれば、かへすがへすうちずんじて「さは秋の夜はおぼし捨てつるななりな。

こよひより後の命のもしもあらばさは春の夜をかたみと思はむ」

といふに、秋にこゝろよせたる人、

「人はみな春にこゝろをよせつめりわれのみや見むあきの夜の月」

とあるにいみじう興じ思ひ煩ひたるけしきにて「唐土などにも昔より春秋のさだめはえ志侍らざなるを、このかうおぼしわかせ給ひけむ御心ども思ふにゆゑ侍らむかし。我が心のなびきそのをりのあはれともをかしとも思ふ事のある時、やがてそのをりの空のけしきも月も花も心にそめらるゝにこそあべかめれ。春秋を知らせ給ひけむことのふしなむいみじう承らまほしき。冬の夜の月は昔よりすさまじき物の例にひかれて侍りけるに、又いと寒くなどしてことに見られざりしを、齋宮の御裳着の勅使にてくだりしに、曉にのぼらむとて日ごろ降り積みたる雪に月のいとあかきに旅の空とさへ思へば心ぼそくおぼゆるに、まかり申しに參りたればよの所にも似ず、思ひなしさへけおそろしきに、さべき所に召して圓融院の御代より參りたりける人の、いといみじく神さびふるめいたるけはひの、いとよし深く昔の古ことゞも言ひいでうち泣きなどして、よう調べたる琵琶の御琴をさし出でられたりしは、この世の事とも覺えず、夜の明けなむもをしう京のことも思ひ絶えぬばかりおぼえ侍りしよりなむ、冬の夜の雪ふれる夜は思ひ志られて、火桶などをいだきても必出で居てなむ見られ侍る。おまへたちも必さおぼすゆゑ侍らむかし。さらば今宵よりはくらき闇の夜のしぐれうちせむは又心にしみ侍りなむかし。齋宮の雪の夜におとるべき心地もせずなむ」などいひて別れにし（長久三年十二月八日亥時大內燒亡）後は誰と志られじと思ひしを、又の年の八月に內へいらせ給ふに、夜もすがら殿上にて（八月以下二十字イ無）御遊ありけるに、この人の侍ひけるも志らず。その夜はしもにあかし

て細殿の遣戸を押しあけて見出したれば曉がたの月のあるかなきかにをかしきを見るに、履の聲聞えてど經などする人もあり。讀經の人は（五字イ無）この遣戸口に立ちとまりて物などいふに答へたれば、ふと思ひ出で、「時雨の夜こそ片時忘れず戀しく侍れ」といふに、こと長う答ふべきほどならねば、

「なにさまでおもひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを」

ともいひやらぬを、人々又來あへばやがてすべり入りてその夜さりまかでにしかば、もろともなりし人尋ねて返し忘たりしなども後にぞ聞く（長久四年十二月一日一條院燒亡十二日遷御高陽院廿一日自高陽院遷御京極三條）。ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶のねのおぼゆるかぎり彈きて聞かせむとなむあると聞くに、ゆかしくてわれもさるべき折を待つに更になし。春ごろのどかなる夕つかたまゐりたな（イ）りと聞きて、その夜もろともなりし人とゐざり出づるに外に人々まゐり內にも例の人々あればいでまかでいりぬ。あの人もさや思ひけむ、忘めやかなる夕ぐれを推し量りて參りたりけるに、騷がしかりければまかづめり。

「かしまみてなるとの浦にこがれ出づるこゝろはへ（元如）きさや磯のあま人」

とばかりにてやみにけり。あの人がらもいとすくよかに世のつねならぬ人にて、その人はかの人になどもたづね問はで過ぎぬ。』今はむかしのよしなし心もくやしかりけりとのみおもひ知りはて親のものへ率てまゐりなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへにゆたかなるいきほひになりて、二葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、我が

身もみくらの山に積みあまるばかりにて、後の世までのことをもおもはむとおもひはげみて、玄も月の二十餘日石山にまゐる。雪うちふりつゝ道のほどさへをかしきに、逢坂の關を見るにもむかし越えしも冬ぞかしとおもひいでらるゝに、そのほどしもいとあらう吹いたり。

「逢坂の關のやま（せき）かせ吹くこゑはむかし聞きしにかはらざりけり」。

關寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり、あらづくりの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり。打出の濱のほどなど、見しにもかはらず暮れかゝる程にまうでつきて、ゆやにおりて御堂に昇るに人聲もせず。山風おそろしう覺えて行ひさしてうちまどろみたる夢に、中堂より御かう賜はりぬ。「疾くかしこへ告げよ」といふ人あるに、うち驚きたれば夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて行ひあかす。又の日もいみじく雪ふり荒れて宮にかたらひ聞ゆる人のぐし給へると物語して心ぼそさを慰む。三日侍ひてまかでぬ。そのかへる年十月廿五日大嘗會の御禊とのゝしるに、初瀬の精進始めてその日京を出づるに、さるべき人々「一代に一度の見物にて田舍世界の人だに見る物を、月日多かり、その日しも京をふり出でゝいかむもいと物狂はしく、流れての物語ともなりぬべき事なり」などはらからなる人はいひ腹立てどちごどもの親なる人は「いかにもいかにも心にこそあらめ」といふに隨ひて出したつる心ばへも哀なり。ともに行く人々もいといみじく物ゆかしげなるは いとほしけれど物見て何にかはせむ、かゝるをりに詣でむ

志をさりとも思しなむかならず佛の御驗を見むと思ひ立ちてその曉に京をいづるに、二條の大路をしも渡りていくに、さきにみあかしもたせ供の人々淨衣姿なるをそこらさじきどもに移るとていきちがふ馬も車もかち人もあれはなでふとやすからず言ひ驚きあざみ笑ひあざけるものども丶あり。良賴の兵衞督と申し丶人の家の前を過ぐれば、それさじきへわたり給ふなるべし、門ひろうおし前けて人々たてるが「あれは物詣で人なめりな。月日しもこそ世に多かれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじく思し立ちて佛の御德かならず見給ふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見でかうこそ思ひたつべかりけれ」とまめやかにいふ人ひとりぞある。道けんそうならぬさきにと夜ふかう出でしかば、立ち後れたる人々も待ちいとおそろしう深き霧をも少しはるけむとて、法性寺の大門にたちとまりたるに田舍より物見にのぼる者どもの水の流る丶やうにぞ見ゆるや。すべて道もさりあへず。物の心知りげもなきあやしの童べまでひきよせて行き過ぐるを車を驚きあざみたること限なし。これらを見るにげにいかに出で立ちし道なりとも覺ゆれど、ひたぶるに佛を念じ奉りて宇治のわたりにいき着きぬ。そこにも猶しも此方ざまにわたりする者ども立ちこみたれば、舟の楫取りたるをのこども舟をまつ人の數も知らぬに、心驕りしたる氣色にて袖をかいまくりて、顏にあて丶竿に押しかゝりてとみに舟もよせず、嘯いて見まはし、いといみじうすみたるさまなり。むごにえ渡らでつくづくと見るに紫の物語に宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なればそこにしも住ませたるならむと、ゆか

しく思ひし所ぞかし、げにをかしき所かなと思ひつゝ、辛うじて渡りて殿のさぶらふ所のうぢ殿を入りて見るにも、浮舟の女君のかゝる所にやありけむなどまづ思ひ出でらる。夜深く出でしかば人々困じてやひろうちといふ所にとゞまりて物くひなどするほどにしも供なるものども「かうみやうの栗駒山にはあらずや、日も暮方になりぬめり。ぬしたち調度とりおはさうぜよや」といふをいと物恐しう聞く。その山越えはてゝにへのゝ池のほとりへいき着きたる程、日は山の端にかゝりにたり。今は宿とれとて人々あかれて宿求むる、「所はしたにていとあやしげなる下すの小家なむある」といふにいかゞはせむとてそこに宿りぬ。皆人々京に罷りぬとてあやしのをのこ二人ぞ居たる。その夜もいもねず。このをのこいで入りしありくを奥の方なる女ども「などかくしありかるゝぞ」と問ふなれば「否や、心も知らぬ人を宿し奉りてかまはしもひきぬかれなばいかにすべきぞと思ひてえねでまはりありくぞかし」と寝たると思ひていふ。聞くにいとむくむくしくをかし。つとめてそこを立ちて東大寺によりて拝み奉る。いそのかみも誠にふりにける事思ひやられてむげに荒れはてにけり。その夜山のへといふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど經すこし讀み奉りてうち休みたる夢に、いみじくやんごとなく淸らなる女のおはするにまゐりたれば、風いみじう吹く、見つけてうち笑みて、何しにおはしつるぞと問ひたまへば、いかでかはまゐらざらむと申せば、そこはうちにこそあらむとすれ、はかせの命婦をこそよくかたらはめとのたまふと思ひて、嬉しくたのもしくていよいよ念じ奉りて、初瀬川などうち過ぎてその夜御寺にまうでつきぬ、祓な

どしてのぼる、三日さぶらひて曉まかでむとてうちねぶりたるよさり、御だうのかたより、すは稻荷より賜はるしるしの杉よとて物を投げ出づるやうにするに、うち驚きたれば、夢なりけり。曉夜ふかく出で丶えとまらねば奈良坂のこなたなる家を尋ねて宿りぬ。これもいみじげなる小家なり。「こ丶はけしきある所なめり。ゆめいぬな、れうかいの事あらむに。あなかしこ、おびえさわがせ給ふな。息もせでふさせ給へ」といふを聞くにも、いといみじう佗しくおそろしうて、夜を明すほど千歲を過ぐすこ丶ちす。辛うじて明けたつほどに見れば盜人の家なり。あるじの女、「けしきある事をしてなむありける」といふ。いみじう風の吹く日宇治のわたりをするに、網代いと近うこぎよりたり。

「音にのみき丶わたりこし宇治川のあじろの浪もけふぞかぞふる」。

二三年四五年へだてたる事を次第もなく書きつゞくれば、やがてつゞきたちたる修行者めきたれどさにはあらず。年月へだ丶れる事なり。日ごろ鞍馬に籠りたり。山際かすみわたりのど(やイ)かなるに、山のかたよりわづかにところなど掘りもてくるもをかし。いづる道は花も皆散りはてにければ何ともなきを、十月ばかりにまうづるに道のほど山のけしき、このごろはいみじうぞまさるものなりける。山のは錦をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶をちらすやうにわきかへるなどいづれにも勝れたり。まうでつきて僧坊にいき着きたるほど、かきしぐれたる紅葉のたぐひなくぞ見ゆるや。

「おく山のもみぢのにしきほかよりもいかにすぐれてふかくそむら(めけイ)む」

とぞ見やらるゝ。二年ばかりありて又石山に籠りたれば、夜もすがら雨ぞいみじく降る。旅ゐはいとむつかしきものと聞きて、蔀押しあけて見れば、有明の（無のイ）谷の底さへ曇りなくすみわたり、雨と聞えつるは、木の根より水の流るゝ音なり。

「谷川のながれは雨ときこゆれどほかよりけなるありあけの月」。

又初瀬にまうづれば、はじめにこよなく物たのもし。所々にまうけなどしていきもやらず。山城の國柞の杜などに紅葉いとをかしきほどなり。初瀬川わたるに、

「初瀬川立ちかへりつゝたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む」。

と思ふもいとたのもし。三日さぶらひてまかでぬれば、例の奈良坂のこなたに小家などにこのたびはいとるゐ廣ければ、えやどるまじうて野中にかりそめにいほ作りてすゑたれば、人はたゞ野に居て夜をあかす。草のうへにむかばきなどをうち敷きて、うへに席をしきていとはかなくて夜を明す。頭もしとゞに露おく。曉がたの月のいといみじく澄みわたりてよに知らずを（無をイ）かし。

「ゆくへなき旅の空にもおくれぬはみやこにて見しありあけの月」。

何事も心にかなはぬ事もなきまゝに、かやうに立ち離れたる物まうでをしても道のほどををかしとも苦しとも見るに、おのづから心も慰め、さりともたのもしうさしあたりてなげかしなど覺ゆる事どもないまゝに、唯をさなき人々をいつしか思ふさまにしたてゝ見むと思ふに、年月の過ぎ行くを心もとなく、たのむ人だにひとのやうなるよろこびしてはとのみ思

ひ渡る心ちたのもしかし。いにしへいみじうかたらひ夜晝歌などよみかはしさむらふ人の、ありありてもいと昔のやうにこそあらね、絶えずいひわたる。越前の守のよめにてくだりしが、かき絶え音もせぬに、辛うじてたより尋ねて、これより、

「たえざりし思ひも今は絶えにけりこしのわたりの雪のふかさに」。

といひたるかへりごとに、

「白山の雪のしたなるさゞれいしの中のおもひは消えむものかは」。

やよひのついたちごろに西山の奥なる所にいきたる、人目も見えずのどのどとかすみわたりたるに、あはれに心ぼそく花ばかり咲きみだれたり。

「里とほみあまりおくなるやま路には花見にとても人こざりけり」。

世の中むつかしう覺ゆるころ、うづまさにこもりたるに、宮にかたらひ聞ゆる人の御許より文ある、返り事聞ゆるほどに鐘のおとの聞ゆれば、

「しげかりしうき世のことも忘られず入相の鐘のこゝろぼそさに」

と書きてやりつ。うらうらとのどかなる宮にて、同じこゝろなる人三人ばかり、物語などしてまかでゝ、又の日つれづれなるまゝに、こひしう思ひ出でらるれば、二人が中に、

「袖ぬるゝあらいそ浪と知りながらともにかづきをせしぞこひしき」

と聞えたれば、

「あら磯はあされど何のかひなくてうしほにぬるゝあまのそでかな」。

いま一人、

「みるめ生ふる浦にあらずば荒磯のなみまかぞふるあまもあらじを」。

同じ心にかやうにいひかはし、世の中の憂きもつらきもをかしきもかたみに言ひかたらふ人、筑前にくだりて後、月のいみじう明きに、かやうなりし夜、宮にまゐりて(てイ無)あひては露まどろまずながめあかしゝものを、戀しく思ひつゝ寢入りにけり。宮にまゐりあひて現にありしやうにてありと見て、うち驚きたれば夢なりけり。月も山の端近うなりにけり。「さめざらましを」といとゞながめられて、

「夢さめてねざめのとこのうくばかり戀ひきとつげよ西へゆく月。

さるべきようありて秋ごろ和泉にくだるに、淀といふよりして道のほどの(三字イ無)をかしうあはれなること言ひ盡くすべうもあらず。高濱といふ所にとゞまりたる夜、いとくらきに夜いたう更けて舟の楫の音聞ゆとふなれば、あそびのきたるなりけり。人々興じて舟にさしつけさせたり。遠き火の光に單衣の袖ながやかに扇さしかくして歌うたひたるいとあはれに見ゆ。又の日山の端に日のかゝるほど住吉の浦をすぐ。空もひとつに霧り渡れる、松の梢も海のおもても浪のよせくる渚のほども、繪に書きても(もイ無)およぶべきかたなうおもしろし。

「いかにいひ何にたとへてかたらまし秋のゆふべのすみよしの浦」

と見つゝ綱手ひき過ぐるほど、顧みのみせられて飽かずおぼゆ。冬になりて上るに大江といふ浦に舟に乘りたるに、その夜雨風岩も動くばかりふりふゞきて神さへなりて轟くに、浪の

立ちくる音なひ、風の吹き惑ひたるさま、おそろしげなること命かぎりと思ひ惑はる。岡のうへに舟をひきわげて夜をあかす。雨はやみたれど風猶吹きて舟いだざず。ゆくへもなき岡のうへに五六日を過ぐす。辛うじて風いさゝかやみたる程、舟のすだれまきわげて見渡せば、夕潮たゞみちに滿ちくるさまとりもあへず。入江のたづの聲をしまぬもをかしく見ゆ。國の人々あつまりきて「その夜この浦を出でさせ給ひて石津につかせ給へらましかば、やがてこの御舟なごりなくなりなまし」などいふ。心ぼそう聞ゆ。

「荒るゝ海に風よりさきに舟出していしづの浪ときえなましかば」。

世の中にとにかくに心のみ盡すに、宮仕とてもことはひとすぢに仕うまつりつかばや。いかゞあらむ。時々立ちいでば何なるべくもなかめり。年はやゝは(イさ)た過ぎ行くにわかわかしきやうなるもつきなうおぼえなげかるゝうちに、身の病いと重くなりて、心にまかせて物詣などせし事も、得せずなりたれば、わくらはの立ち出でも絶えてながらふべき心ちもせぬまゝに、幼き人々をいかにもいかにも我があらむ世に、見おく事もがなとふしおき思ひなげき頼む。人のよろこびの程を、心もとなく待ち嘆かるゝに(天喜五年七月三十日從五位上橘俊通任信濃守得替公文)、秋になりて待ちいでたるやうなれど、思ひしにはあらずいとほいなく口をし。親のをりより立ち歸りつゝ見し東路よりは近きやうに聞ゆればいかゞはせむにて、程もなくくだるべき事ども急ぐに、門出はむすめなる人の新しく渡りたる所に八月十餘日にす。後の事は志らず。そのほどのありさまは物騷がしきまで人多くいきほひたり。廿七日にくだるに男なるはそひてくだる。紅のうち

たるに萩のあをを紫苑の織物の指貫着て太刀はきてしりに立ちてあゆみ出づるを（仲俊長暦元年閏十二月廿七日式部丞西治元年正、木工允文章生同三年正月七日五位廿五日紀伊權守）、それも織物のあをにびいろの指貫狩衣着て廊のほどにて馬にのりぬ。のゝしりみちてくだりぬる後こよなうつれづれなれど、いといたう遠きほどならずと聞けば、さきざきのやうに心細くなどは覺えであるに、送りの人々又の日歸りて「いみじうきらきらしうて下りぬ」などいひて「この曉にいみじく大きなる人だまの立ちて京ざまへなむ來ぬる」と語れど供の人などのにこそはと思ふ。ゆゝしきさまに思ひだによらむやは。今はいかでこのわかき人々おとなびさせむと思ふより外の事なきに、かへる年の四月にのぼり來て夏秋も過ぎぬ。九月廿五日よりわづらひ出でゝ十月五日（康平元年十月五日作五十一）に、夢のやうに皆いで思ふ心地、世の中に又類ひある事とも覺えず。初瀨に鏡奉りしに、伏しまろび泣きたる影の見えけむはこれにこそはありけれ。嬉しげなりけむ影はきしかたもなかりき。今行くすゑはあべいやうもなし。廿三日、はかなくも煙になすに、去年の秋いみじくしたてかしづかれて、うちそひて下りしを見やりしを、いと黑きぬのうへにゆゝしげなる物を着て、車のともになくなく步み出で行くを見いだして思ひ出づる心ち、すべてたとへかたなきまゝに、やがて夢路に惑ひてぞ思ふにその人やみにけむかし。昔よりよしなき物語歌の事をのみ心にしめて、夜晝思ひて行ひをせましかば、いとかゝる夢の世を見ずもやあらまし。初瀨にてまへのたびは稻荷より賜ふしるしの杉よとてなげ出でられしを、いでしまゝに稻荷に詣でたらましかばかゝらずやあらまし。年ごろ天てる御神を念じ奉れと見ゆる夢は人の御乳母とて內わたりにあり。帝

后の御かげに隠るべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、その事はひとつかなはで止みぬ。唯悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬあはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふかたなうて止みぬる人なれば、功徳もつくらずなどしてたゞよふ。さすがに命は憂きにも絶えずながらふめれど、後の世もおもふにかなはずぞあらむかしとぞうしろめたきに、たのむことひとつぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、居たる所の屋のつまの庭に阿彌陀佛たち給へり、さだかには見え給はず、霧一重へだゝれるやうに透きて見え給ふを、せめてたえまに見奉れば、蓮華の座のつちをあがりたる高さ三四尺、佛の御たけ六尺ばかりにて金色にひかりかゞやき給ひて、御手片つ方をばひろげたるやうに、いま片つ方にはゐんを作り給ひたるを、こと人の目には見つけ奉らず、我一人見奉るに、さすがにいみじくけおそろしければ簾垂のもと近くよりてもえ見奉らねば、佛、さはこのたびは歸りて(てイ)のちに迎へに來むとのたまふ聲、我が耳ひとつに聞き居て人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば十四日なり。この夢ばかりぞ後のたのみとしけるを、いもとなどひと所にて朝夕見るにかうあはれに悲しきことの後は、所々になりなどして、誰も見ゆることかたうあるに、いとくらい夜六はらにあなる甥のきたるに、めづらしうおぼえて、

「月も出でゝやみにくれたる姨捨に何とてこよひたづね來つらむ」

とぞいはれにける。ねんごろにかたらふ人の、かうて後おとづれぬに、

「今は世にあらじものとや思ふらむあはれなくなく猶こそはふれ」。

十月ばかり月のいみじうあかきを、なくなくながめて、

「ひまもなきなみだにくもる心にもあかしと見ゆる月のかげかな」。

年月は過ぎかはり行けど夢のやうなりしほどを思ひ出づれば、心地もまどひ目もかきくらすやうなれば、そのほどのことはまたさだかにもおぼえず。人々は皆ほかにすみわかれて、故里にひとりいみじう心ぼそくかなしくて、ながめわびて久しうおとづれぬ人に、

「茂りゆくよもぎが露にそぼちつゝ人にとはれぬねをのみぞなく」。

尼なる人なり、

「世のつねの宿のよもぎにおもひやれそむきはてたる庭のくさむら」。

更科日記 終

讃岐典侍日記

讃岐典侍日記上

五月[霖雨]の空もくもらはしく、田子の裳すそも干し侘ぶらむとことわりも見え、さらぬだに物むつかしき頃しも、心長閑なる里居に常よりもむかし今の事思ひ續けられて物哀れなれば、はしを見出して見れば、雲のたゝずまひ空の氣色思ひ知り顔に村雲がちなるを見るにも、雲居の空といひけむ人もとわりと見えて、かきくらさるゝ心地ぞする。軒のあやめの雫に異ならず山郭公も諸共に音をうち語らひて、はかなく明くる夏の夜な夜な過ぎもて、いそのかみふりにし昔の事を思ひ出でられて泪とゞまらず。思ひ出づれば、我が君[堀河]に仕うまつる事、春の花秋の紅葉を見ても、月の曇らぬ空をながめ、雪のあした御供に侍らひて諸共に八年の春秋仕うまつりしほど、常はめでたき御事多く、あしたの御おこなひ、夕べの御笛の音、忘れ難さに、慰むやと玄出づる事ども書き續くれば筆のたちども見えず。きりふたがりて硯の水に涙落ち添ひて、水莖の跡も流れあふ心ちして涙ぞいとゞ增るやうに、書きなどせむに紛れなどやするとて書きたる事なれば、姨捨山に慰めかねられて堪へがたくぞ。六月廿日のことぞかし。內[堀河]は例ざまにもおぼしめされざりし御けしき、ともすればうち臥しがちにて、「これを人は惱むとはいふ。など人々は目も見たてぬ」と仰せられて、世をうらめしげに、おぼした

りしものを、事重らせさせ給はざりしをり御祈をし、遂にありける御事をも讓り參らせらるゝと、我がさたにも及ばぬ事さへぞ覺ゆる。』かくて七月六日より、御心ち大事に重らせ給ひぬれば、誰も月頃とても例ざまにおぼしめしたりつることは難きやうなりつれども、これかやうに苦しげに見參らする事はなくて過させ給ひつる。かくおはしませばいかならむずるにかと、胸潰れて思ひあひたり。その頃しも、上﨟たちさはりありてさぶらはれず。あるは子產み、あるは母の暇、今一人はとうよりも籠り居てこの二三年參られず。御乳母だち藤三位ぬるみ心ち煩ひてまゐらず。辨三位は、東宮（堀河）の、母もおはしまさで生ひ立たせ給へば心のまゝに侍はるべくもなきに、あはせてそれもこの頃おこり心ちに煩ひて、たゞ大貳三位われ具して三人ぞ侍ふ。さればたゞあやしの人の煩ふだに人のいと參りしたしく扱ふ人おほくはしきに、これはましてほじ。日の暮るゝまゝに堪へがたげにおぼしめしたれば、院（白河）にかくと案內申さする。「驚かせ給ひて、近くて御ありさま聞かむとて、俄に北の陣に御幸ありて」と奏す。かく苦しうおぼしめしたれば、おほとなぶら例よりも近く參らせなどするほどに、たゞ消えに消え入らせ給ひぬ。あないみじと泣きあひて、內大臣（雅實）、關白殿（忠實）まゐりて、つと侍はせ給ふ。大かたのゝしりあひたり。增譽僧正、賴基律師、增賢律師など召しにやりつゝ、賴基律師即ち參りて經讀み佛くどきまゐらせらるゝほどに、しばしばかりありて打ち身じろきせさせ給ふに、今少しのゝしりあひぬ。經讀まるゝを聞かせ給ひて、「今はやくあらじ。唯かりうつせよ」と仰せられ出でたれば物つく者などめしてゐて參り移さるゝ。おびたゞしさは

推し量るべし。移りてその事とはいはでかはめきのゝしるさまいと恐ろし。少し御粥など參らすればめしなどすれば、嬉しさは何にかは似たる。「大臣はあるか」と問はせ給へば大殿入らせ給ひて、「候ふよし申し給へば「御幸はなりぬるか」と問はせ給へば「しかなり候ひぬ」と申させ給へば、「參りて申せ。今は何事もやく候はじ。立てさせ給ふ尊勝寺にて、九壇の護摩と懺法とさふらふべきなり。又さぶらはむずらむ事はなに事も今宵さぶらふべきぞ。明日あさてさぶらふべき心地し侍らず」と仰せらるれば「あまり護摩こそ夥しく候へ」と申し給へば、「こはいかにいふぞ。かばかりになりたる事をば」と仰せらるれば、御直衣の袖を顏におしあてゝ立ち給ひぬ。それを聞かむ御乳母だちも、いかばかり覺えむ。大殿歸りまゐらせ給ひて、「されば去年をとゝしの御事にも、さるさたはさふらひしかど、宮の御年の、幼くおはしますによりて、今日までさふらふにてこそとなむ侍る」と奏せらるゝにぞ、「何事も唯今宵定め候ふべきぞ」と仰せらるれば、さばこの御事にてこそありけれと今ぞ心うる。誰もいも寢ずまもり參らせたれば、御氣色いと苦しげにて御足をうちかけて仰せらるゝやう「我ばかりの人の今日明日死なむとするを、かく目も見立てぬやうあらむや。いかゞ見る」と問はせ給ふ。聞く心ち唯むせかへりて、御いらへもせられず。堪へがたげにまもりゐるけはひのしるきにや、とひやませ給ひて、大貳三位長押のもとに侍ひ給ふを、見つけおはして「おのれはゆゝしくたゆみたるものかな。我は今日明日死なむずるは知らぬか」と仰せらるれば、「いかでたゆみ候はむずるぞ。たゆみ侍らねど、力の及び候ふ事に侍らばこそ」と申さるれば、「何か今たゆ

みたるぞ。今試みむ」と仰せられていみじう苦しげにおはしたりければ、片時、御傍離れ參らせず。唯我が乳母などのやうに添ひ臥し參らせて泣く。あないみじ、かくてはかなくならせ給ひなむ、ゆゝしさこそ有り難く、仕うまつりよかりつる御心のめでたさなど思ひ續けられて、目も心にかなふもののなければ、露も寢られずまもり參らせて、程さへ堪へがたく暑き頃にて、御さうじとふさせ給へるとにつめられて、寄り添ひまゐらせて寢入らせ給へる御顏をまもらへ參らせて、泣くより外の事ぞなき。いとかう何しに、なれ仕うまつりけむと悔しく覺ゆ。參りし夜より今日までの事、思ひつゞくる心ち唯おし量るべし。こは如何にしつる事ぞと悲し。驚かせ給へる御まみなど、日頃の經るまゝに弱げに見えさせ給ふ。御殿籠りぬる御氣色なれど、我は唯まもりまゐらせて、驚かせ給ふらむに皆寐入りてと思しめさば、物おそろしくぞ思しめす、ありつる同じさまにて、ありけるとも御覽ぜられむと思ひて見まゐらすれば、御目弱げにて御覽じ合せて、「いかにかくは寢ぬぞ」と仰せらるれば、御覽じ志るなめりと思ふも堪へがたく哀にて、「三位のおもとより、さきざきの御心ちの折も、御傍に常に侍ふ人の見參らするがよきによく見參らせよ、折惡しき心ちをやみて參らぬが佗しきなり」と申せど、えぞ續けやらぬ。「せめて苦しく覺ゆるに、かくして試みむ。やすまりやする」と仰せられて、枕上なる、志るしの箱を、御胸の上に置かせ給ひたれば、誠に如何に堪へさせ給ふらむと見ゆるまで、御胸のゆるぐさまぞことの外に見えさせ給ふ。御息も絶え絶えなるさまにて聞ゆ。顏も見ぐるしからむと思へど、かく驚かせ給へる折にだに物參らせ試みむとて顏

に手を紛はしながら、御枕上に置きたる御粥やひるなどを若しやとく丶めまゐらすれば、少しめし又大殿籠りぬ。明け方になりぬるに、鐘の音聞ゆ。明けなむとするにやと思ふに、いと嬉しくやうやう鴉の聲など聞ゆ。朝ぎよめの音など聞くに「明けはてぬ」と聞ゆれば、よし例の人だち驚きあはれなば、かはりて少し寢入らむと思ふに、御格子まゐり、おほとなぶらまかでなどすれば休まむと思ひてひとへを引きかづくを御覽じて、引きのけさせ給へば、猶な寢そと思はせ給ふなめりと思へば起きあがりぬ。大い殿の三位「晝は御前をばたばからむ。休ませ給へ」とあればおりぬ。待ちつけて「我も強くてこそ扱ひ參らせ給はめ」といふ。中々かくいふからに堪へがたき心ちぞする。』日の經るまゝに、いと弱げにのみならせ給へば、この度はさなめりと見まゐらする悲しさ、唯思ひやるべし。をとゝし(長治二年)の御心ちのやうに、あつかひやめ參らせたらむ、何心ちしなむとぞ覺ゆる。又人「のぼらせ給へ」とよびに來たればまゐりぬ。物まゐらせ試みむとてなりけり。大貳三位御うしろに抱き參らせて「物まいらせよ」とあれば、小さき御盤にたゞ露ばかりおきあがらせ給へるを見まゐらすれば、今日などはいみじう苦しげに世にならせ給ひたると見ゆ。殿のうしろの方より參らせ給ひけるも、例のやうになどしてまゐらせ給ふこそしるけれ。この頃は誰もをり惡しければ、打ちしめりならひておはしませば、いかでかはしるからむ。「おとゞく」といみじう苦しげに覺しめしながら、つげさせ給ふ御心のありがたさは、いかで思ひ知られざらむ。かく苦しげなる御心ちに、たゆまずつげさせ給ふ御心の哀に思ひしられて涙浮くをあやしげに御覽じて、はかばかし

くもめさで臥させ給ひぬれば、又添ひ臥しまゐらせぬ。かくおはしませば、殿も夜晝たゆまず參らせ給へば、いとはれにはしたなき心ちすれば、三位殿も「折にこそしたがへ。かばかりになりにたる事に、なんでふもの憚りはする」とあれば、いかゞはせむとて過ぐす。大殿近くまゐらせ給へば、御膝高くなしてかげにかくさせ給へば、我も單衣を引きかづきて臥して聞けば、「御うらには」とぞ申したる。かくぞ申したる御祈は、それぞれなむ始まりぬる。又「十九日よりよき日なれば、御佛御修法のべさせ給ふ」と申させ給へば、「それまでの御命やはあらむずる」と仰せらるゝ。悲しさせきかねて覺ゆ。大殿立たせ給ひぬれば、引きかづきたる單衣ひきのけて、打ち仰ぎまゐらせなどするほどに、宮の御方より、宣旨仰書にて「三位などの侍はるゝをりこそ、こまかに御ありさまも聞きまゐらすれ。大かたの御返りのみ聞くなむおぼつかなき。昔の御ゆかりにはそこをなむ同じう身に思しめす。今の御ありさま細かに申させ給へ」とあり。「たが文ぞ」と問はせ給へば「何の御かたより」と申せば、「晝つ方、上らせ給へ」と仰事あれば、さ書きてまゐらせ給へば、晝つ方になる程に「道具などとりのけて皆人々うち休め」とておりぬ。されども召すこともやと思へば、御障子のもとに侍らふ。いかなる事どもをか申させ給ふらむ。いかでかは知らむ。しばしばかりありて、御扇打ち鳴らして召す。それとりてと仰せらるべき事ありければ、めして「猶障子立てゝよ」と仰せらる。よくぞおりてさふらひけるとおもふ。猶仰せらるゝ事ありと見えたり。立ちのく。「御さうじ立てゝ、御扇ならさせ給へ」と申させ給ひければ、御障子あくこともむごになりぬ。夕つかた歸らせ

給ひぬれば、誰も誰も參りあひぬ。御氣色、うちつけにや、かはりてぞ見えさせ給ふ。「今日しもすこし夜の明けたる心ちして覺ゆれ」と仰せらるゝ。聞く心ちの嬉しさ、何にかは似たる。御前にかなまりにひのおほらかに入りたるを御覽じて「われ見れば心ちのさわやかに覺ゆる。ひの大きならむ、ひさげに入れて人ども集めて食はせて見む」と仰せらるれば、女房たち皆立ちのきぬ。大殿ばかりぞ侍はせ給ふ。大貳三位大殿の三位殿ぐして夜のおとゞに入りて、戸口に御几帳立てゝほころびより見れば、大殿長押のもとに侍らせ給ひて御隨ぎはのもとになかなかと右衛門督（雅俊）、源中納言（國信）、大臣殿（雅實）の權中納言（顯通）、宰相中將（能俊）、左大辨（重資）など召し入れて大臣殿ひ取りて各にたぶ。我もせむと思したる、もてはやさむとなめりと見えて一つ取り給ひぬ。御几帳の内なる人かやうにて一年のやうに病ませ給へかし、いかばかり嬉しからむと思ふ。暮れはてぬれば、人々大となぶらなどまゐらするほどに、いみじう苦しげに思しめされたれば、殿たちいそぎまゐらせ給うて、增譽僧正など召し騷ぐ。參り給へれば、御几帳立てゝ、われらはすべりのきて聞けば、加持まゐり給ふ。經讀みなどするけにや、靜まらせ給ひておほとのでもらせ給ふけしきなり。かくいふは十五日の事とぞ覺ゆる。かやうにて今宵もあけぬれど、猶弱げに見えさせ給ふ。今日も暮れぬ。』十七日の曉に、大貳三位、あからさまにまかでゝ「この胸の堪へがたく覺ゆれば湯すこし試みて立ちかへりまゐらむ」とて出で給ひぬ。暮るゝとひとしくまゐり給ひてうち見まゐらせて、「あないみじ。晝見まゐらせざりつる程に腫れさせ給ひにけり」などいひ合せらるゝを聞かせ給うて「何事いふぞ」と仰せらる

れば「豈の程に、匿れさせおはしましにけるとを申しさふらふなり」と申さるれば「今は耳もはかばかしく聞えず」と仰せられて、いとゞ弱げに見えさせ給ふ。志ばしばかりありて「この度はさるべき旅と覺ゆるぞ」と仰せらるれば、つゝましけれど「などさは思しめすぞ」と申せば、「僧正のさしも頭より黑けぶりを立てゝ祈れど、その志るしと覺えて、心ちの休まずまさる心ちのすれば」と仰せらるゝを聞くは何にかは似たる。明けぬれば大い殿參り給ひて院の御使にて事どもありげなる氣色なれば、心なき心ち志ぬべければ寐たり。何事にか、こまやかに申させ給ふ。御位ゆづりのとにやとぞ心得らるゝ。申しはてゝ臥したる所にさしよりて「御傍にまゐらせ給へ」といひかけて立ち給ひぬ。昨日より山のくだ志さども召したれば、十二人の供從者まゐりて加持まゐりのゝしるさまいと夥し。せめて、思しめしたる方のなきにや「大臣殿を召し、院に申せ、一年の心ちにも、さもと仰せられし、行尊召してたべ」と申させ給へれば、やがて即ちまゐりたれば、やがて枕上近くめして祈らせ給ふ。三井寺の人々は、千手經を保ちたれは、それをぞいと尊く讀まるゝ。「御惱消除して壽命長からむ」とゆるゝかにずせらるゝ聞くぞたのもしき心ちする。かやうにいみじき人だちあまた侍ひて、我も劣らじと祈りまゐらせらるゝけにや、御ものゝけあらはれて、りう僧正、賴豪など名のりのゝしる人あらはれさせ給うて「一年の行幸の後又見まゐらせばやとゆかしく思ひまゐらするに、そのとくなければおどろかしまゐらするぞ」といふを聞かせ給ひて、「いかにもこの二三年、例ざまに覺ゆる事のあらばこそ行幸もあらめ。近きはどだになし。この心ち止みたらばこそは

年のうちにもあらめ」と仰せらるゝほどより苦しげにならせ給ひにたり。例の御かたより、人遣したり。「さる心などなき人と聞けど、せめて思ひやるかたのなければいふなり。こなたへ唯今のぼり參りなむや。道などぞふたがりて、かたはらいたく思しめせ」と仰せられたれば、「いかでかはまゐらじと申さむ。承りぬ」と申したれば、「さらば今のほどに」と仰せられたればまゐりぬ。はなれぬ人なれば宣旨をぞあそばさせ給ひて「御心ちのありさま問はせ給ふ。又まゐらするまゝに、申さむと夥しく申し散らしけりなど漏れ聞えて惡しき事もやなど覺ゆればさもえまうさず。又わざと召して問はせ給ふに、申さゞらむも惡しかりぬべければ「唯上りて見まゐらせ給へ。さはいみじう苦しげに見えさせ給ふ」と申せば、「さはもしや、とはりよからむひまに」と申してとく返し遣しつ。參りて見れば、「殿や大臣殿、院より戒受けさせ給ふべきなりと、奏せさせ給うけり」とてせんせい法印召すべきさたせられ、その御設けどもせらるゝ程なりけり。かやうの後ならば夜も明けぬべければ、宮の御方よりめしつればる參りたりつれば、「かうかうこそ仰せられつれ」と申す。「道の所せばきぞ」と弱けに仰せらるゝ、苦しげに思しめしたり。「殿にも上りて見せまゐらせばや」と申させ給ひければ今の程宮上らせまゐらせむ、物騷がしからぬさきにと思ふに上らせ給ひぬれば「御傍に人のなきが惡しきぞ」と沙汰せられて、そのよしを申されけるなめり。「返りまゐらせ給ひて、たゞすけばかりは侍へ」と仰せらるゝ。さて三位殿、おはして、殿たち、皆障子の外に出でさせ給ひぬ。長押のきはに、四尺の御几帳立てられたり。御枕がみに、おほとなぶら近く參らせて、あかあ

かとありけるに、添ひ臥しまゐらせたり。はしたなき心ちすれどえのかず。「宮上らせ給ひたる」とおない申せば、「いづら、いづく」など仰せらるゝは、むげに御耳も聞かせ給はぬにやと思ふに心憂く覺ゆ。「その御几帳のもとに」と申せば、「いづら」と御几帳のつまを引きあけさせ給へば「こゝに」と申させ給ふ。ものなど申させ給はむとぞ思しめすらむと思へば、御あとの方にすべりおりぬ。ちがひて長押の上に宮のぼらせ給ひ、しばしばかり何事にか申させ給ふ。殿の御聲にて「久しうこそなりぬれ。御粥などはや參らせむや」と仰せらるゝに宮聞かせ給ひて、「今はさば歸りなむ。明日の夜も」と仰せられて歸らせ給ひぬ。例の傍に參りて、水などまゐらす。殿たち參らせ給うて、「今は法印召し入れよ」とてふたまなるけいなどまゐらせて、戒の沙汰せさせ給ふ。法印まゐらせ給ひぬれば、御几帳ばかり隔てゝ「御直衣取りてまゐれ」と仰せらるれば取りてまゐりたり。御手水まゐらすべけれど起き上らせ給ふべきやうなければ、紙をぬらして御手などのごはせまゐらせなどする程ぞ悲しき。御かうぶりなど持ちてまゐりたれば、するかせ、ぬかのほどにおし入れて御直衣引きかけてまゐらせたる、御紐さゝむと、思しめしたるなめり。さゝむとせさせ給へど、御手も腫れにたれば、えさゝせ給はぬ、見る心ちぞ目もくれてはかばかしう見えぬ。鐘うち鳴らして、事の趣申しあきらめ給ふ。「十戒を先の世に受けさせ給ひて、敗らせ給はざりければこそ、この世にて十善の位長く保ち、佛法をあがめ、一切衆生を憐みさせ給ふ心、いまだ、昔より今に至るまでかばかりの帝王おはしまさず。いとゞ今宵の御戒のしるしに、速に御なやみ消除消散して百年の御命長く保

たしめ給へ」と申さるゝ、聞くに唯今やませ給ひぬると聞えてめでたき。』さて御戒受けさせまゐらすれば、いとよく「たもつたもつ」と仰せらるゝ。殿[illegible]「たもつと仰せらるゝや」と申させ給へば、うなづかせ給ふ。受けさせまゐらせば、たゞ法印出でさせ給へば、故右大臣[illegible]の子に、定海阿ざ梨といふ人の、もとより侍はるゝ、御枕上に近く召しよせ仰せらるゝ、やう「經誦して聞かせよ。定海が聲聞かむも、今宵ばかりこそ聞かめ」と仰せられて、いみじう苦しげに思しめされたれど、御涙もえ出でず。それを聞かむ心ち、誰かはなのめなる心ちせむ。誰も堪へがたき心地ぞする。阿ざ梨やゝもいらへなし。「經の聲も聞えぬはあれもためらはるゝなめり」と聞ゆ。えばしばかりわりて少し出されたるを聞けば方便品の比丘偈にかゝるほどの長行をぞよまるゝ。つくづくと聞かせ給うて、「衆中之糟糠佛威徳故去」といふ所より御聲うちつけさせたまひて、露ばかりがほど滯るところなく、ゆうゆうと讀ませ給ふ御聲、尊き阿ざ梨の御聲おしけたれて聞ゆ。阿ざ梨もとりわきてそこをしも讀み聞かせ參らせらる。明暮一二の卷をうかめさせ給ふと聞きおき給へる事なればなめり。かゝる程に、三位のもとより、むげに重くおはしますよし聞きて、女房おこせて、こまかの事聞くに威(元如)にけり。「いませ給ふとも參りて、局ながらも聞き參らせむ。よそにてえからせ給ふ。上らせ給へ」といへばやがてぐして參りぬ。見れば、大貳三位うしろの方抱きまゐらせて、大殿の三位、ありつるまゝに添ひ臥しまゐらせられたり。御わとの方につい居たれば、大貳三位「苦しうせさせ給へば、申しつるぞ。その足捕へ參らせ給へ」とあれば執へ參らせ給ひたり。御汗のでひなどせさせ

給ふ。大殿の三位「かく靜まらせ給へる程に、せまほしき事のあり、さて參らむ」とて「まゐらせ給へ」とあれば添ひ臥しまゐらせぬ。さばしばかりありて、例の定海阿ざ梨、御几帳のそばに召し入れて「觀音品讀みて聞かせよ」と仰せらるればいと尊く讀み給ふ。いかに思しめすにか、「偈をよめ」と仰せらるゝ。思しめすやうあるなめりと、心えがたし。大臣殿の三位、歸り參られたれば御足打ちかけて御手を頸に打ちかけさせ給へば、えはたらかねば、三位殿、我が居たるやうに御あとの方に侍はる。例の「水など參らせ御汗などのごへ」と仰せらるれば、御枕上なるみちのくに紙して、御びんのわたりなどのごひまゐらする程に、「いみじく苦しくこそ泣かるれ。我は死なむずるなりけり」と仰せられて、「南無阿彌陀佛」とぞ仰せらるゝを聞くに、唯におはします折にかやうの事は□元御くの下人までいまいましき事にこそいふを、御口よりさはさは仰せられ出すときくは夢かなとまであさましければ涙もせきあへず。殿御顔にあてゝ「佛を念ぜさせ給へ。書かせ給ふと聞きまゐらせし御筆の大般若はいづこにかおはしますぞ。それをよく念じ參らせ給へ」と申し給へば「ふたまにこそあらめ」と仰せらるれば、殿聞きて取りてまゐらせ給ふ。これにやなど見せまゐらせ給へば「これなり」と仰せらるゝ。「なほ苦しうこそなり増るなれ」とて唯せきあげにせきあげさせ給ふ御けしきにて、「唯今死なむずるなりけり。大神宮助けさせ給へ。南無平等大會講明法華」など誠に尊き事ども仰せられつゝ「苦しう堪へがたく覺ゆる。抱きおこせ」と仰せらるれば、起きあがりて抱き起し參らするに、日頃はかやうに起しまゐらするに、いと所せく抱きにくゝ覺えさせ給へる

なりけり。いと安らかに起されさせ給ひぬ。大貳三位、御うしろに居給ひたり。御せなかを寄せかけまゐらせて、御手をとらへまゐらせなどする。御かひな冷やかに探られさせ給ふ。かばかり暑き頃かくさぐられ給ふはと、あやし、あさまし、譬へむ方なし。僧正召し十二人の供從者召しよせて、大かた物も聞えずなりにたり。大臣殿の三位、御口に手を濡してぬりなどゑ參らせ給ふ。念佛いみじく申させ給ふさまこそとの外なれ。ともすれば「太神宮助けさせ給へ」と申させ給ふも、そのゑるしなくむげに御目などかはり行く。僧正とみにまゐらせ給はず。やゝ久しくありて參らせ給へれば、日頃へだつれど何の物覺えむにか物の恥かしとも覺えむ、たゞ一つにまとはれて、僧正、三位殿二人、御前、我が身、五人の人々一つにまとはれあひたり。聲ををしまず、かしらより誠、黑けぶり立つばかり目も見あけず、念じ入りて佛を恨みくどき申さるゝ、さまいと賴もし。例ならぬをりは、あやしの僧だにも物祈るは賴もしくこそなる心ちすれ。かばかりの人の一心に心に入れて、「年頃佛に仕うまつりて六十餘年になりぬるに、まだされども佛法つきず、速にこの御目直させ給へ」と人などをいふやうに、おそしおそしとあれど、何のゑるしもなくて、御口の限なむ念佛申させ給へるもはたらかせ給はずならせ給ひぬ。との御覽じ知りて、「今はさは院に案内申さむ」と申させ給へば、民部卿殿こなたに召して殿御簾おしあげ物忍びやかに、いかに仰せらるゝにか仰せらるれば、立たれぬ。大臣殿よりて「今は何のかひなし」とて御枕直して抱き臥させまゐらせつ。殿たち皆立たせ給ひぬ。僧正猶御傍に添ひ居給ひて、何の事にか、忍びやかにつぶつぶと申し聞かせ給ふ。

かゝる程に、日はなばなとさし出でたり。日のたくるまゝに、御色の月頃よりも白く腫れさせ給へる、御顔の淸らかにて御びんのわたりなど御削り櫛にしたらむやうに見えて、唯おは殿籠りたるやうに違ふことなし。僧正今はと見はて奉りて、やをら立ちて御かたはらの御障子を忍びやかに引きあけて出で給ふに、大貳三位、「あな悲しや。いかにしなし出でさせ給ひぬる」と「助けさせ給へ」と聲も惜まず泣き給ふを聞きて、さながら泣きとよみあひたり。右衞門督、源中納言、大臣殿の權中納言、中將の御乳母子の君だち、十餘人、女房の侍らふかぎり聲をとゝのへて、せめて覺ゆるまゝに、御障子を、なゐなどのやうに、かはかはと引きならして泣きあひたる夥しさ、ものおぢせむ人は聞くべくもなし。今一度見參らせむとて親しき上達部、殿上人、我も我もまゐれど、うときは呼びも入れず。大貳三位、大殿籠りたるやうなる人を「我が君や、いかにして方々をば捨ておはしましぬるぞ。生れさせ給ひしより片時離れまゐらせず、あやしのきぬの中よりおぼしまゐらせて、いづれの行幸にも離れずしりに立ちさきに立ち、病の心ならぬ里居十日ばかりするにも、戀しくゆかしく思ひまゐらせつるに、片時見まゐらせでいかでか侍らはむ。たゞ具しておはしましね。今一度驚かせ給ひて、見えさせ給へ。あな悲しや。戀しさをいかにしてか侍らはむ。唯召してぞ」と御手をとらへてをめきさけび給ふ、聞くぞ堪へがたき。この聲を聞きて、そこらのゝしりつるくじうさどもひしとやみぬ。山の座主今ぞまゐりて僧正の出で給ひぬる障子引きあけ給へば、三位「山の座主(仁源)をも今は何にせむずるぞ」といひつゞけて泣き給ふ。御さうじよりなげ入るゝものを何ぞと

見れば、我が局に置きたる二藍の唐衣かづきたるものなげ入れて、人のいるを見れば藤三位殿の、かくと聞きて參り給へるなりけり。「あな心憂や、例ざまにうち見あげ給ひつらむを、今一度えまゐらせずなりぬる心うさを、何の物忌をしてよび給はざりつるぞ。年頃の御病をだにはづる丶事なく扱ひ參らせて、限のたびしもかく心ちをやみてける、身の宿世の心憂き事」といひつゞけて泣き給ふ。我は御汗をのごひ參らせつるみちのくに紙を顏におしあて丶そへゐられたる。あの人たち思ひまゐらせらるらむにも劣らず思ひまゐらすと、年ごろは思ひつれど猶劣りけるにや、われらのやうに聲立てられぬはとぞ思ひ知らる丶。大臣殿參らせ給ひてうち見參らせて、いかにおぼしとくにか、持ち給へる扇の骨をた丶みながらはらはらとうちすりて泣きて出で給ひぬと思ふほどに、今は御格子參れとありけるにやと見えて、即ちしたしき殿上人なめり、源中納言の四位少將顯國、右大臣殿の加賀介家さだ、あかあかと、日のさし入りてあかきに、はらはらとおろしていぬ。あなあさまし、こは如何にしつるよと、えさらぬ心にまかせぬ日の暮る丶だに大となぶらをとくさし出でよかしとまだおろさぬ先に心もとなく覺えしものを、はなばなとさし出でたる日におろしこめてわざと暗うなすよと覺ゆるにものぞおぼえぬ。藤三位「あないみじ。かくはいかにおろしつるぞや。かひなき御顏ながらもあかりて守り參らせてあらむとこそ思ひつれ」と聲もをしまず泣き給ふ。大臣殿又まゐりて、御ぞ今はぬぎかへさせまゐらせて、「御帖今は薄くなさむ」とえもいひやり給はずのたまうて、御ひとへ取りよせ給うて引きかづけ參らせなどせられぬ。長押の下にまかり

出でさせ給ひぬと見まゐらするまゝに、大臣殿の三位まろびおりてやがてそこに同じさまにて、息も絶えたるさまして臥し給ひたる、大臣殿見給ひて、子の中納言(道綱)召して「あれゐてのけよ」とあれば、その方の女房、中納言として、いとたのもしくめでたげにてかき抱きていぬ。さるほどに、大貳三位も御子播磨守、出雲守などいふ人々かきすくひて率ていぬ。藤三位殿は例ならぬ弱げに見えつる人のなげ入れられつるよりとくて躁だにもせずいひつゞけてなきたまふさま、ことわりと見ゆれど、すき入られぬるにやと見ゆれば、子の加賀守を見おこせて「それ抱きのけ奉らせ給へ」といと弱げに見えさせ給ふさまをば、「物のおぼえ侍らぬぞ。たすけ給へ」とあれどいふかひなし。「しもにおりさせ給へ」とひきのくれど「何事の給ふぞ。うるはしくておはしましつる御顔を今一度見せさせ給はずなりぬるがうらめしさは、いふ方なし」とわぢきなく人の罪のやうに恨み泣き給ふもことわりにぞ聞ゆる。御かひなを探ればいまだひえながら例の人のやうにたをやかにさぐらるれば、試みがてらしばしもさらばたがへ参らせて、物の給へかしと思へば、いたくも勸めて諸ともに御かひなを執へて居たれば、いつの程にかはるにか唯すくみにすくみはてさせ給ひぬ。今はかひなしと思ひて、「いざさせ給へ。さぶらはせ給ふとも今はかひなし。一言もこそもしやと思ひつる程こそありつれ」と引きのくれど、大かた取りつきまゐらせて「いかで一所沿きまゐらせて行かむずるぞ」との給ふ。加賀守のさばかりわるはいだきのくべき心ちもせねば、加賀守に「我はえ抱き給ふまじくば局の人を呼び給へ」といへば、さばかりの物も覺えずげなる人のとりわへず、「い

かで我が君のおはします所にげすをばよせむ」とていみじう泣かる。參りざまに抱かれたりつれば、せめて物のおぼえてかとぞ覺ゆる。されば我が方の女房ども呼びよせて、ひだうに引きのするやうに人の背中におはせてやりつ。御乳母だち立たれぬれば、因幡內侍とて明暮あまたの內侍の中にとりわき仕うまつりつきたりし人と二人御かたはらにむごに近くさぶらふ。「あはれ多く侍らひつれど契深くも仕うまつりはてさせ給へる」などいひつゞけて、いみじう泣かるゝさまぞ、いとゞ催さるゝ心ちして堪へがたき。局より、いそぎたるけしきにて、さとおはしませ、三位殿、絕え入らせたまひぬといひて、引きさげて率ていぬ。誠になきひとのやうにて大かた息もせず。暮れかゝるほどに集まりてかきのせて率ていぬ。御まへのかたかいすみて、いつの間にかはるにか、日頃夥しくものも聞えずのゝしりつるけしきどもしめじめと火をうち消ちたるとはこれをいふべきにやと覺えて音もせず。大貳三位の局、壁を一重隔てたる、泣くけはひどもして聲どものやうに泣きあひたる中に、三位の御聲にて「哀れかやうに日の暮るゝに御格子とくまゐれかしと心もとなく覺えしにいふべき事もなくしなし參らせつるはいかにしつる事ぞや。これ助けよや。唯おはしますらむ所へ我を召せや。をいをい」とくどき立てゝ、泣かるゝ音す。聞くぞいとゞ堪へがたき。日のおましの方にこほこほと物とりはなす音して人々の聲あまたすなり。何事にかと聞くほどに、お前より同じ局に我が方ざまにて侍ひつる人うちきていみじう物もいはず泣く。見るにいとゞその事と聞かぬに泣き臥さるゝ心ちぞする。しばしためらひていふやう「あな心憂や。たゞ今神

璽寶劍の渡らせ給ふとて、の丶しり候ふぞ。日の御座の、御物の具のわたり、御帳のひき、御鏡など、取り出でさふらふ。御帳毀つ音なりけり」といふに悲しさぞ堪へがたき。昔より美濃内侍をやがて殿のはかしにつけさせ給ひつれば、つきまゐらせておはしつるやうなど語る。我は朝かれひのおましの事は知らざりつれば、この人の方を聞きて、何にかはせむ。

讃岐典侍日記下

かくいふほどに十月（嘉承二年）になりぬ。「辨三位殿より御文」といへば、取り入れて見れば、「年頃宮仕へせさせ給ふさま御心のありがたさなどよく聞きおかせ給ひたりしかばにや、院（白河）よりこそ、このうち（鳥羽）にさやうなる人のたいせちなり、どうしまゐるべきよし仰せごとあれば、さる心ちせさせ給へ」とある。見るにぞあさましくひが目かと思ふまであきれられける。おはしまし丶をりよりかくは聞えしかど、いかにも御いらへのなかりしにぞさらでもと思しめすにや。それをいつしかといひ顔に參らむ事あさましき。周防内侍後冷泉院におくれまゐらせて、後三條院より七月七日まゐるべきよし仰せられたりけるに、

「天の河おなじながれと聞きながらわたらむ事はなほぞかなしき」

とよみけむこそげにと覺ゆれ。故院（堀河）の御形見にはゆかしく思ひ參らすれどさし出でむ事猶あるべき事ならず。そのかみ立ち出でしだにはればれしさは思ひあつかひしかど、親たち、

三位殿などして責められむ事をとなむ思ひて、いふべき事ならざりしかば、心の中ばかりにこそ海士の刈る藻に思ひ亂れしかど、げにこれも我が心には任せずともいひつべきことなれど、又世を思ひ捨てつと聞かせ給はゞさまで大せちにも思しめさじと思ひ亂れて、今すこし月頃よりも物思ひ添ひぬる心ちして、いかなるついでを取り出でむ、さすがに我とそぎ捨てむも昔物語にもかやうに立たる人をば人も疎ましの心やなどこそいふめれ。我が心にもげにと覺ゆる事なれば、さすがにまめやかにも思ひ立たず。かやうにて心づから弱り行けかし、さらば事つけてもと思ひ續けられて、日頃經るに「御乳母だち又六位にて五位にならぬ限は物參らぬ事なり。この二十三日、六日、八日ぞよき日。とくとく」とある文たびたび見ゆれど、思ひ立つべき心ちもせず。過ぎにし年月だに私の物思ひの後は人などに立ちまじるべきありさまにもなく見苦しくやせ衰へにしかば、いかにせましとのみ思ひあつかはれしかど、御心のなつかしさに人だちなどの御心も、三位のさて物し給へばその御心に違はじとかや、はかなき事につけても、用意せられてのみ過ぎしに、今さらに立ち出でゝ見し世のやうにあらむ事もかたし、君達はいはけなくおはします、さて習ひにしものぞと思しめす事もあらじ、さらむまゝには昔のみ戀しくて恨みむ人はよしとやはあらむなど思ひ續くるに、袖のひまなくぬるれば、

「かわくまもなき墨染のたもとかなあはれむかしのかたみと思ふに」。

かやうにてのみ明け暮るゝに、かく里にのどかなる事かたし。五六日なれば内侍のもとより

「人なし。參れ」といふ文のこしなど思ひ續けられて過す程に、御即位など世にのゝしりあひたり。大納言の乳母とばりあげ玄給ふべしとて「安藝の前司の三位殿こそ故院の御時とばりあげはせさせ給ひければその例をまねばむ」など尋ねらるゝと聞く程に「大納言日頃例ならで俄に重りてうせ給ひて」と聞ゆ。いと心細き世かなと思ひ嘲ちぬ。夕暮に三位殿の許よりとばりあげすべき由あれば、いと淺ましくて、日頃は聞き過ぐしてのみ過ぎつるを參らじと思ふなめりと心得させ給うて、おしあてさせ給ふなめりと思ふにすべき方なし。頼みたるまゝに例の人喚びて「かうかうなむ院より仰せられたるをいかゞはせむとする」といへば、「いかゞせさせ給はむ。世の中煩しく候ふめり。唯とく思しめし立つべきなめり。參らじと候はゞ我が爲にこそ由なき事出で詣でこめ。我が君さるべきと思しめさせ給ふべきに」など沙汰しあひたる程に藏のかうの殿より人參らせたり。「院宣は攝政殿^(忠實)の承りにて候ふ。堀河院の御素服たまはりたらばとくぬぐべきなりと宣旨下りぬ。とくぬがせ給へ」といひにおこせたり。かばかりの事だに心に任せず道理にぬぐべき折も待たずぬぎてむ事心うきに、芹摘みしといひけむ古事を身に思ひよそへらるゝ。かく沙汰するを聞きて、せうとなる人、「哀男の身にてかくいはれ參らせばや。羨しくも覺えさせ給ふかな。女の御身にてさらでもありなむ。故院の御時に、年頃の人だち御乳母子だちなどの賜はりあはれし素服を、何ばかりの年頃侍らはせ給はざりしかと賜はらせ給ふ。今の御時に、又なほ大せちにいるべき人にて、月も待たずぬげと宣旨下るもあやし」などいひつゞくるを聞くほどにあぢきなくはづかし。花山院

の折に惟しげの辨を、入道殿（道長）「一條院にわたりて本の如く六座にて使はむ」と仰せられける
をだに我が君に仕うまつりし事の、それに付けても思ひ出でられぬべければ、つかさ位を捨
てゝ法師になりにけむ我が身の何の思ひ出にて、古の址かしさに思ひ凝りずさし出づべき。
數多の女房の中になど我しも二代まではかくは有るまじきめを見るべからむと思ふに、先の
世の契も心憂けれど、さるべきにこそはと思ひなして、流の水をむすび、さやかになり、親し
くなれ仕うまつるしうとならせ給へば、おぼろげならぬ契にこそと思ひなぐさむれど、藻に
住む蟲のわれからとのみ、世にありてかゝる目を見る事悲しけれど、さてあるべき事ならね
ばいそぎ立ちぬ。しもの人などは、年ごろ百敷の中に遊びならひたる心ちにつくづくと思ひ
絶えたり。里居は口をしう思ひけるに、かゝる事出できたるを嬉しう思ひたるけしきにて、
心ちよげに思ひけるを見るは、つれなく恨めしきに霜月にもなりぬ。』十九日に例の參らむ
と思ふに、雪よるより高く積りてこちたく降るいそがしさ。今幾程なく殘り少なくなりにた
れば、大かたの人もよるを晝になして物も聞えぬまでいそぐめれば、我はこの日ならむから
に、いそがしとて參らざらむが口惜しさに出で立つを、一人うけ引く人なし。「さばかりいそ
がしくしちらさせ給うてよかし。今日參らせ給ひたらむに、院も大臣殿（頼通）も世にいみじとも
あらじ。參らせ給はずとも惡しき事もあらじ。かばかり雪は道も見えず降るめり。我が御身
こそ車の内なればさてもおはしまさめ、御供の人はいかでか堪えむずるぞ」など侘びわひて
とゞめつれど、人たちによしと思はれむとて參ることとならばこそあらめ、この月ならむから

に、いそがしとてかくべき事かは。勇ましく嬉しき急ぎにてあらむだにそれに障るべき事かは。我を少しも哀とおもはむ人は、今日ぞ參らせよ」といふまゝに氣色もかはるがしるきにや、いはれぬる人ども、「さばかり思しめしたゝむ事妨げまゐらすべき事ならず。車寄せよ」、供の人呼ばせなどするほどに、例はじまる程と思ふほど、やうやう日たくるに參らで止みなむずるなめりと思ふ、口をしくわりなき人ども來ぬれば、「疾く疾く」といへば、嬉しくて乘りぬ。道のほど誠に堪へがたげに雪降る。車のうちに降り入りて、雜色牛飼みな頭白くなりにたり。うしのせなかも白き牛になりたり。二條の大路には大宮の道もなきまで降る。まゐりたれば人々「あないみじ。例よりも日たけつれば今日はえ參らせたまはぬなめり、ことわりぞかし、いそがしくおはしつらむと申しあひたりけるに、おぼろげならぬ御志かな。今日は」とあはれがりあひたり。十一月もはかなく過ぎぬ。』十二月朔日、まだ夜をこめて、大極殿に參りぬ。西の陣に車を寄せて、筵道敷きて入るべき所とてしつらひたるにまゐりぬ。ほのぼのと明け放るゝ程に、瓦屋どものむね霞みわたりてあるを見るに、むかしうちへまゐりしに過ぎざまに見えし程など思ひ出でられて、つくづくと眺むるに、北の門より長槅にちはや着たるものども、蘇枋の濃きうたるくはうこゝのいだしきぬ入れて持て續きたる、べちにもおもしろく見ゆべき事ならねど、所がらにやめでたし。人ども見さわぎいみじく心ことに思ひあひたるけしきともにて見さわげども、なほ我は何事にも目も立たずのみ覺えて、南の方を見れば、例の八咫烏見も知らぬものども、太がしらなど立て渡したる、見るも夢の心ちぞす

る。かやうの事は世繼など見るにもその事かゝれたる所はいかにぞや覺えて、ひきこそかへされしか。うつゝにけざけざと見るこゝち唯おしはかるべし。日高くなるほどに「行幸なりぬ」とてのゝしりあひたり。殿ばら里人など玉のかうぶりし、あるは錦のうちかけ、近衞司など鎧とかやいふべきもの着たりしこそ見もならはず、もろこしのかた書きたるさうしの、畫の御座に立ちたる見る心ちよと哀れに、かくて事なりぬ。「おそしおそし」とて衞門の佐いと夥しげに、毘さ門などを見る心ちして我にもあらぬ心ちしながら上りしこそ我ながら日暮れて覺えしか。手をかけさするまねしてかみあげよりとばりさしつ。我が身出でずともありぬべかりける事のさまかなとかくし置きたる事にかと覺ゆ。御前のいと美しげに志たてられて、御も屋の中に居させ給ひたりけるを見參らするも胸つぶれてぞ覺ゆる。大かた目も見えず恥ぢがましさのみ世に心憂く覺ゆれば、はかばかしく見えさせ給はず。事はてぬれば元の所にすべり入りぬ。夜に入りてぞ歸りぬる。あるかなきかにて歸りたれば、顏をあやしげに思ひてまもりあひて「御顏の色の違ひておはしますはいかに」などいひあへるはまだ直らぬにこそと志はしほと泣かれぬる。』志はすも漸つごもりになりて「辨のすけ殿の文」といへば取り入れて見れば、「院より、三位殿大納言のすけなど侍はぬ朔日なり。さやうのなりはさるべき人あまた侍ふこそよけれ、參るべきよし仰せられたる」とぞある。いかゞせむ疾く參らむとぞ急ぎ立つ。朔日の日の夕さりぞ。參りつきて陣入るゝより昔思ひ出でられてかきぞくらさるゝ。局にいきつきて見れば、こと所に渡らせ給ひたる心ちしてその夜は何となくて

明けぬ。つとめて起きて見れば、雪いみじく降りたり。今もうち散る御前を見れば、べちに違ひたる事なき心ちして、おはしますらむありさまことことに思ひなされてゐたるほどに「降れ降れこ雪」といはけなき御けはひにて仰せらるゝ聞ゆる。こはたぞたが子にかと思ふほどに、誠にさぞかし思ふにあさましく、これをしうとうち頼み參らせてさぶらはむずるかと、たのもしげなきぞ哀なる。昔ははしたなき心ちして暮れてぞのぼる。「今宵よきに物參らせそめよ」といひにきたれば、おまへの大となぶら暗らかにしなして「こち」とあれば、すべり出でゝ參らする。むかしにたがはず御だいのいと黑らかなる、できなくてかはらけにてあるぞ見ならはぬ心ちする。走りおはしまして顔のもとにさしよりて、「たれぞ、こは」と仰せらるれば、人々「堀河院の御乳母でぞかし」と申せば、まことゝ思したり。ことの外に見參らせしほどより、おとなしくならせ給ひにけりと見ゆ。をゝとしの事ぞかし、參らせ給ひて弘徽殿におはしまいしに、この御方にわたらせ給ひしかば、しばしばかりありて、「今はさは歸らせ給ひね。日の暮れぬ先にかしらけづらむ」とそゝのかしまゐらせ給ひしかば、「今しばし侍らはゞや」と仰せられたりしぞいみじうをかしげに思ひまゐらせ給へりしなど、唯今の心ちしてかきくらす心ちす。その夜も御かたはらに侍ひたれば、いといはけなげに御ぞかちに臥させ給へる見るぞ哀れなる。明けぬれば皆人々起きなどして見れば、御まへの御簾いとおびたゞしげなる蔵とかいふ物かけられたり。へりはにび色なり。御さうしの御几帳、同じ色の御几帳の手白きなり。御けづり櫛の大床子もなし。かゝるをりにはなきにや。をさなくおは

しませばかとぞ。物など參らすれ（元如）らけくにしてめすぞ哀なる。壺つけて殿（堀河）參らせ給ひて人々居直りなどすれば、物を參らせさして立たむもおとなにおはしまいしにぞ、さやうのをりも分かず立ちしか、又おとなしくなどもつけさせ給ひしか、これはうち捨てゝ立たばよき事やいはれむずると思へば、猶ゐたるもかく〳〵こそありがたかりける事を心に任せて過ぐしけむ年月をいかで思ひ知らざらむ。はしたなく思へばうちうつぶしてゐたれば、御さうじの外に居たる人だちに「あれはたぞ」と問はせ給ふ御聲聞ゆ。「それ」といらふるなめり、御さうじの内に近やかについゐて「いつより侍はせ給ふぞ。今よりはかよふ（かやう）にてこそはそも昔の思ひ出でられ給ひて戀しきにそのかみの物語して慰めむ」などあるいと悲し。我も人も同じやうにてこそものせさせ給ふめれ。はかなりし世に、「陪膳は誰ぞ」と問ひて、「それがし」と聞かせ給うては、御舌さしいださせ給ひてさしぬき高く引き上げて逃げさせ給ふとて、人々笑ひ興じまゐらせしは、ひと所の御勸盃にてありけると思ふに、「何の御かへりかは申さむ。物申されねば思ひかけざりし事かな。かやうに近やかに參りて物など申しゝ事とは思はざりしかな。例ならで、おはしまいしをりなど、御かたはらに添ひ臥させ給へりしをりに參りたりしかば、御膝高くなさせ給ひて蔭にかくさせ給ひし折、かやうならむ事どもとこそ思はざりしか。げに蔭にも隱れさせ給ひしかな。世はかくもありけるかな」といひかけて、立たせ給ひぬる聞くぞげにと心うき。かやうにてはえなき御にて過ぎぬ。人だちのきぬの色ども思ひ思ひにうすらぎたり。正月になりぬれば、この月ならむからに、かくして參りて堀河院に

まゐりたれば、人々「いかでまゐり給へるぞ。內にと聞えまゐらせつるは、この月はよもと思ひまゐらせしに」といひあはれたり。「いかでか參らざらむ。仕うまつりはてむと思へば、いみじういそがしかりしにだにも參りしを」といへば、「誠にかくかゝず參らせ給ふ事のありがたさ」などいひあひつゝ、徒然のなぐさめに法華經に花たてまつり給ふにとていとなみあはれたるぞいと哀に見ゆる。』二月になりて、私の忌日にわたりあひたり。講聞く。さうじのもとにて見れば、ひと年の正月に、すじやう行ふとて內に侍ひしを、迎ひにおこせられたりしかば、おもしろき所なるに、我とぐしておはしませ」とて大夫のすけや內侍などぐしておはしたりしに、このさうじのもとにゐるおとなひを聞きて「おはしましにけりな。たれたれぐして」といへば、「內侍殿に逢ひ參らせむ、いと嬉しきことかな」といひてあはれたり。この御前おぼしあつかふるさまの、ことの外にくなげに悅もえまうさせず。今は、籠り居たる身にてまかりありきなども、かしらつきの見ぐるしうなりたる見れば、さと殿などへもえまゐらず、さらでのけさうはえなければこの月にとけてやまかせかくれむずらむと、しうになりぬべき心ちのしつるに、今宵は佛の御しるしと覺えて、いみじうなむ嬉しきは今に心やすくよしあきらめつれば、後の世もやすくとありし、聞きしか、さまで思すらむとありしか、まづ思ひ出でらる。かくて二月も過ぎぬ。』三月になりぬれば、例の月にまゐりければ堀河院の花いとおもしろく、かねかた三條院に、後れ參らせて、

「いにしへに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ」

とよみけむ、げにとおぼえて、花は誠に色もかはらぬけしきなり。むかしの清涼殿をば、御堂になさせ給ひて、七月までは宵曉の例時絶えず、とも人の臟うどまち左近の陣など僧坊になりたり。內裏にてありし所ども、さびしげなる見るにもうせさせ給へりけむ院の中のひきかへかいすみさびしげなる御覽じて、

「かげだにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれかいひけむ」

とよませ給ひけむ、げにとぞ覺ゆる。宮の御方に三十講を行はせ給ふ見て、法華經を日に一品づゝ講ぜさせ給ふ。それ聞くに、三位殿のまゐらせ給ふにぐして參りて講などはてゝ、御前近く三位殿をめせばさぶらはる。宰相とて侍らはる人「三位殿は今少し近くまゐらせ給へ。すけ殿は今は耻かし」といふを聞かせ給ひて「それしもこそ志見ゆる。見たてなく思ひ出もなげに、見ゆる所を忘れず見ゆる」と仰せられもはてず、むせかへらせ給へる音の聞ゆるに、我も堪へ難し。暮れぬればまかでぬ。晦日に內へ參りぬ。四月の衣がへにも女官ども例の事なれば我も我もと身のならむやうもしらず几帳ども取りあへる。人見あへれど、我は見まほしからず。これををかしと思しめしたりしが思ひ出でられて、灌佛の日になりぬれば我も我もと取り出だされたり。事始まりぬれば、日の御座の御前の御簾おろして人々出でゝ見る。殿を初めまゐらせて廣廂の高欄に、例の作法違はず下がさねのしりうちかけつゝ上達部たち居ならびたり。御導師事のみさま申して、みづから山の座主こしきのわたる昔にたがはで、御だうし水かけて、殿まゐらせ給ひてかけさせ給へれば、次第によりてつぎつぎの上達

部かく何事かは違ひて見ゆる。左衞門督、源中納言よりてかくとて、いと堪へがたげに物思ひ出でたるけしきなり。顏も違ふさまに見ゆる、わぢきなし。我もせきかねられて、大かた例はとの方も見じと思ひて御几帳引き寄せて見れば、御几帳のかみより御覽ぜむと思しめす。御たけの足らねばいだかれて御覽ずる哀なり。おとなにおはしますには、引直衣にて念ずしてこそ御帳の前におはしまし丶か。まづめだちて中納言にも劣らず覺ゆれば、人目も見ぐるしうて御前ことはてぬにおりぬ。』五月四日夕つ方にありぬれば、さうぶいとなみあひたるを見れば、「去年の今日何事思ひけむ。さうぶの輿、あさがれひのつぼに昇き立て丶、殿ごとに人々のぼりてひまなくふきしてそみつ野のあやめも今はつきぬらむと見えしか。又の日も空はさみだれたるに、軒のあやめ雫もひまなく見えけるに、

「五月雨の軒のあやめもつくづくとたもとにねのみかゝる空かな」

とのみ覺ゆ。やうやう十日あまりになりぬれば、最そう講、營みあひまゐらせてと聞きしかば、はて丶の十餘日ばかりの徒然、物語にはその日の論議といひ出でしいみじさなど沙汰させ給ひし、思ひ出でらるる。』六月になりぬ。暑き所せきにも、まづ去年のこの頃は事となく御心ちよげに遊ばせたまひて、堀河の泉、人々見むとありしを、何とおぼしめし丶にか、あながちにす丶めつかはし丶かば、思しめす事なれば「まづわす」とて我は出で丶人たち待ちしに、二車ばかり乘りつれて日暮し遊びて歸りしに見れば、今宵とまりて心安きところにてうち休まむと思ひてとゞまりしを、常陸殿といふ女房「あなゆかし。唯參らせ給へ。扇ひきなど

人々にせさせむ」などありし、御扇子ども設けて待ち參らさせ給ふあとあればこの人だちに具して參りぬ。待ちつけて泉のありさまうちうちに問ひなどして、「扇ひき今宵はさは」と仰せられしかば、「あけむが心げなさよ。今宵と思ふに人だちの氣色の苦しくて見えざらむこそ口をしく候へ」と申しゝかば、つとめて明くるや遲きと始めさせ給ひて、人たちめしすゑて、「大貳三位殿をば靜めて、あはれたりしに「まづ引け」と仰せられしかば、引きしに、うつくしと見しをえ引きあてゞ中にわろかりしをうへになげ置きしかば、「かゝる心う（元如）やある」とて笑はせ給ひたりし事を、但馬殿といふ人の家の子の心なるや。こと人は「えせじ」など興じあはれしに、そのをりは何とも覺えざりし事さへ、いかでさはゑまゐらせけるにかと、なめげにけふはありがたくおぼせる。』七月にもなりぬ。御はてとてのゝしりあふ。その日になりぬればこその御法事おなじと、百僧、なり有樣、同じ事なればとゞめつ。去年より後女房六人をとゞめつ。宮の御方に扱はせ給へるが今はまかでなむずる。「哀にかなしき事、かやうに候ひつればこそ月などに參らせ給ひしを、日立ちては疾くその日になれかしと數へくらされて侍りまゐらすれば、「今はさは見まゐらするが心うき」と誰も誰もいひあひて泣くこと限なし。泣きあふ事はてぬれば、三位殿たちて出でぬ。　　の出雲といふ女房の、詠みて北面のつぼにすゝきに結びつく、

「今はとてわかるゝ秋のゆふぐれは尾花がすゑもつゆけかりけり」

とよみたりつれど、聞くも哀れなり。萬はてぬれば二十五日世の中の諒闇ぬきあはる。御前

のしつらひ、日頃影しげなりつるみす几帳のかたびら、御さうじなど取り拂はれて、日頃は花のおとゞの御帳もなかりつれど、ありしやうに立てられなどして、たゞいにしへの御しつらひにてたがふ事なくめでたくなりにたり。とのをはじめて、殿上人、藏人さうぞくかへ、纓おろし、女房たちのすがた、我も我もといろいろとつくしあはれたるさまぞたゞおりけむ心ちしてぞなえ居られたる。『水無月ごろに引きかへてめづらしき心ちする。さいし、元結はしろかりつる。例のやうにむらごになされむとていとなみあはれたり。殿うるはしくさうぞきて參らせ給うて「とく參らせ給へ」と召せば參りたれば、御前もろともにさう束せさせ參らせ給ふ。美くしげにしたてられ引直衣にておはします。御しり作り參らするにも昔まづ思ひ出でたる。かやうにみぞせさせ參らせて日每に石灰の御はひのをりは、いかゞさせ給ひしとまづ思ひ出でらる。「くわんし參りたるや、時よくなりにたりや」と、「とくとく」と申させ給ふに、我ひとりぬぎかへでさふらふべきならねばぬぎかへつ。局におりても、まづ着かへむとも覺えず。これをさへぬぎ更ふるこそ院の御形見と思ひつれ。これをさへぬぎつれば、いと心細し。一天の人御志あるもなきも皆したりつるに、親しく仕うまつりつるさへ一度にぬぎてむずる。思ふによからぬ事なれど、ぬぎかへまじき心地する。かぎりある事なれば、いかゞとぞぬぎつ。遍照僧正の深草の帝におくれまゐらせて法師になりてこそうせけるが。又の年御服人々ぬぎけるに、

「みな人は花のたもとになりぬなり苔のころもよかわきだにせよ」

ど詠みけむ。』かくて八月になりぬれば、二十一日御わたりと定まりぬ。人々いとなみあひたり。されば我は、かはらぬ九重のうちのありさまを見むに、はじめたる御わたりにえ念ずまじき心ちのすれば參らむとも思はぬ。「院より、さるべき人々みな參るべきよし、まゐらせ給へ」と三位殿よりあれば、「その沙汰あらはさで、あてたらむ火とり水とりばかり參らせて我は參らじとなむ思ふ」といへば、「げにさぞ思しめすべき事にこそあれと仰せらるゝに、參らせ給はざらむもひがひがしきやうなり。思ひ念じて猶參らせ給ふべき」とて出したてらるれば、かばかりの事だに心に任せぬ事と思ひながら出で立つ。その日もなりて内大臣殿(雅實)、御びんづらに參らせ給ひて、朝がれひの御簾卷きあげて、御鬢づら結ひまゐらせらるゝ見れば、かはらぬ顏して見えさせ給ふも哀れなり。暮れはてぬれば行幸なりぬ。御輿にやがて引き續けて參りぬ。中御門の門いるより思ひしにしるくかきくらさる。廣隆寺にまゐるとて見入れしに我がわけくれ出で入りし門ぞかし。をとゝしのしはすの二十餘日こそ堀河院にうつろはせ給ひしか。それに、出でけむまゝにこそはありけめ。限の日とも思はでぞ出でけむかし。今は何事にてかは、この世にて又入らむずると思ひしを、我が身も同じ身ながら又立ちかへり入るぞ心うく悲しくも覺ゆる。參りつきて見れば、局は大貳三位殿おはせし所とぞ。「ひる三位殿ありつれば御物の具を持てまゐりつる」とてそなたへ出でむ、からくらへやをあゆみ過ぎて、今も少しのぼる。その夜も御そばに臥して見れば、夜のおとゞ見るに見し世にかはらぬさましたるにぞ、みのところ此(元如)かなとだにこそなし始めたる御わたりなれば、火とり

水とりなどの童もちたりつる御枕がみに左右におかれたるぞ、たがひたる事にてはある。御傍に臥したるも、かやうにてこそ宮のぼらせ給はぬ夜などは侍ひしかと覺えて、哀にのみぞみな人はよげにぬれども、我は物のみ思ひつゞけられて、目もあはず。瀧口の名對面、御湯殿のはざま、殿上の口にて申す聲ぞ聞ゆるほどに覺えたりしかど耳に立ちて聞ゆる。うけせう時奏して尋ぬべし、試みねばといひて時のふだにくひさす音す。右近の陣の夜行、てんめきたるわりくも、昔にもかはる事なし。御帳のかたびら見るにもまづ仰せられし事ども思ひ出でらる。昔を忍ぶ、いづれの時にか露乾く時あらむと覺えて、片敷の袖もぬれまさり枕の下に釣しつばかり、萬の事に目のみ立ちて違ふ事なく覺ゆるに、たゞ一所の姿の見えさせ給はぬと思ふぞ悲しき。御前鳥羽の臥させ給ひたる御方を見れば、いはけなきにておは殿でもりたるぞ變らせおはせまし丶と覺ゆる。一昨年の頃にかやうにて、夜晝御かたはらに侍ひしに、御心ち病ませ給ひたりしかども院より「あなかしこ。よく愼みて、夜のおとゞを出でさせ給はで、玄ばし」と申させ給ひしかば、つれづれのまゝによしなし物語、昔今の事語り聞かせ給ひしをり、殿のあとかたにより奉らせ給ひしかば、そのまゝにて侍はむはなめげに見ぐるしく覺えしかば、起きあがりての給はむとせし、みえ參らせしと思ふなめりと思して、たゞあれ几帳作り出でむとて、御膝を高くなして陰にかくさせ給へりし御心のあり難さ、今の心ちす。いつのまに變りける世の氣色ぞと、萬の人だちのそのかみの人ならぬ中に我ばかりありし昔ながらの人いかに結び置きける先の世の契にかと、物のみ思ひつゞけられて、哀れ忍び

難き心ちす。明けぬれば、いつしかと起きて、人々「珍しき所々見む」とあれど、具してありかばいかゞ物のみ思ひ出でられぬべければ、唯ほれて居たるに、御前のおはしまして、「いざいざ黑戸の道をおれら知らぬに敎へよ」と仰せられて引き立てさせ給ふ。參りて見るに、淸涼殿、しじう殿いにしへにかはらず、臺盤所、昆明池の御さうじ今見れば、見し人に逢ひたる心ちす。弘徽殿に、皇后宮おはしまし、を殿の御とのゐ所になりにたり。黑戸のこはじとみの前に、植ゑ置かせ給ひし前栽、心のまゝにゆゝゆゝと生ひてみはるのありすけが、

「君が植ゑし一むらすゝき蟲のねの繁きのべともなりにけるかな」

といひけむも思ひ出でたる。御溝水の流になみ立てる色々の花ども、いとめでたき中にも、萩の色濃き咲き亂れて、朝の露玉を貫き、夕の風靡くけしき殊に見ゆ。これを見るにつけても、御覽ぜましかばいかにめでさせ給はましと思ふに、

「萩の戸におもかはりせぬ花見てもむかしを忍ぶぞでぞつゆけき」

と思ひゐたるを、人にいはむも同じ心なる人もなきにあはせて、事の初めに、漏り聞えむよしなければ、承香殿を見やるにつけても思ひ出でらるれば、里につくづくと思ひ續け給はむと、推し量りてこれを奉りしかば、

「思ひやれ心ぞまどふもろともに見しはぎの戸のはなと聞くにも」。

思へば、さて同じさまにてしありかせ給ふだにさ思すなり。まして、つくづくと紛るゝ方なく續けむは、推し量られてぞありし。かくてあるじ、昔今少し思ひ出でらるゝ。』かくて長月

になりぬ。九日御せく參らせなどして十餘日にもなりぬ。つれづれなる晝つ方、藏部屋の方を見やれば、御經敎へさせ給ふとて、「よみし經をよくしたゝめてとらせむ」と仰せられて、御おこなひのついでに、ふたまにて立ちておはしまして、したゝめさせ給ひて、局におりたりしに、御經したゝめてもて參りて笑はれむとぞ思しめして、あまりなるまでかしづかせ給ひし御事は、思ひ出でらるゝに、御前におはしまして、「我抱きて、さうじの繪見せよ」と仰せらるれば、萬さむる心ちすれど、朝がれひの御障子の繪御覽ぜさせありくに、夜のおとゞの壁に、明暮目なれて覺えむとおぼしたりし樂を書きて、おしつけさせ給へりし笛のふの、おされたるあとの壁にあるを見つけたるぞあはれなる。

「笛の音のおされしかべの跡みれば過ぎにしことは夢とおぼゆる」。

悲しくて、袖を顏におしあつるをあやしげに御覽ずれば、心えさせまゐらせじとて、さりげなくもてなしつゝ、あくびをせられて、「かく目に涙の浮きたる」と申せば、「皆知りてさふらふ」と仰せらるゝに、哀にも忝くも覺えさせ給へば、「いかに知らせ給へるぞ」と申せば、は文字のり文字の事、思ひ出でたるなめり」と仰せらるゝは、堀河院の御事とよく心得させ給へると思ふも、美しくて、哀もさめぬる心ちしてぞゐまるゝ。かくて、九月もはかなく過ぎぬ。』

十月十一日、大嘗會の御禊とて、天の下の人營みあひたり。その日になりて、播磨守なりざね御びんづらに參りたり。內の大い殿、朝がれひの御簾卷きあげて、長押の上に殿侍はせ給ふ。椽に左衞門佐、いとあからかなるうへのきぬ着て、ことおきてゝ、したばしありて、御びんづら

果てがたになりて、藏人參り「女御對面にまゐらせたまへり」と奏すれば聞かせ給ひぬ。事どもすゝめよといそがせ給ふ事なりて、皇后宮などめでたくえたてさせ給へり。かやうに世の營みやうやう過ぎて、今は五節臨時の祭營みあひたり。今年の五節は大嘗會の年なれば、例にも似ず上達部數添ひて「いとめでたかるべき年」といひあひたり。女房たち、我も我もと御覽の日の童とて、ゆかしき事寅の日のよ既に例の事なれば殿上人肩ぬぎあるべければ「いづれよりかのぼるべき」と問ひあはれたれば、いらへせむとも覺えず。一とせ限のたびなりければにや、常より心に入りてもて興じて、參の夜より騒ぎありかせ給ひて、その夜帳臺の試などに夜更けにしかば、つとめて御朝いの例よりもありしに、「雪降りたりと聞かせ給うて大殿籠りおきて、皇后宮もそのをりにおはしましゝかば、御方々に御文奉らせ給ふとて御前に侍ひしかば、日影を諸共に作りて結びゐさせ給ひたりし事など、上の御局にてむかし思ひ出でられて、物ゆかしうもなき心ちして、まてなどわらは上らむずる長橋例の事なれば、うちつくりまゐりてつくるをそきやう殿のきざはしより清涼殿の丑寅のすみなる中橋とのつまして渡すさまむかしながらなり。御前珍らしう思して御覽すれば、暮るゝまで御かたはらに侍ふにも、「雪の降りたるつとめて、またおほとのごもりたりしに、雪高く降りたるよしを聞しめして、その夜御かたはらに侍ひしかば、諸共に具しまゐらせて見しつとめてぞかし、いつも、「雪をめでたしと思ふ中にことにめでたかりしかば、あやしの賤が家だにそれにつけて見所こそはあるに、まいて玉鏡よと作りみがゝれたる百敷のうちにて、諸ともに御覽ぜしあ

りさまなど、繪かく身ならましかば露違へず書きて人にも見せまほしかりしかど、おしわけさせ給へりしかば、誠に降りつもりたりしさま、梢わらむ所はいづれを梅と分きがたげなりし。玄ゞら殿の前なる竹の葉折れぬと見ゆるまでたわみたり。御前の火たき屋もうづもれたるさまして今もかきくらし降るさまこちたげなり。瀧口のほんぞのまへのすい垣などに降り置きたる、見所ある心ちして、をりからなればにや、ごぜんのたちし、せめての我が心の見なしにや、「輝きしまでに見るに、我がねくたれの姿まばゆく覺えしかば、「常より見まほしきつとめてかな」と申したりしを、をかしげに思しめして「いつもさぞ見ゆる」と仰せられてはは、ゑませ給ひたりし御口つき、むかひ參らせたる心ちするに、五節のをり着たりし黄なるより紅までにほひたりし紅葉どもに、えび染の唐衣とかや着たりし、我が着たる物の色あひ雪の匂ひふさふさとこそめでたさに、とみにもえ參らせ給はで御覽ぜしよ。瀧口の本所の曹司なめり、女の聲にてすいがいのもと近くさし出でゝ見るけはひして「あなゆゝしの雪の高さや。いかゞせむずる。棹もえ取り行くまじきはとよ」といひしを聞かせ給ひて、「これ聞け。いみじき大事出で來にたりとこそ思ひあつかひたれ。雪のめでたさ、醒めぬる心ちする」とて笑はせ給ひしなど思ひ出だされてつくづくと思ひ結ぼるゝもたゞも御覽じ知らず、「なのうちへくもやりもちたる物こはせで、いでいで出で行かぬさきにこはせよ。それいへいへ」と引き向けさせ給へば、美しさに萬さめぬる心地す。御返事申しなどするに、「紛れぬればまかでなむ」といへば、「あなゆゝし」など物も御覽ぜでといひあひたり。皇后宮の御方、常よ

りは心ことに、細殿の几帳などにも織物の三重の几帳に菊を結びなどして、「袖口菊紅葉色々にこぼし出されたりしかば、過ぎにし方例はさやうに亂れさせ給ふ事もなかりしが、一昨年も「上の御局に、人々の衣どもの中によしと御覽ぜむを、上臈下臈ともいはず、それかれをいださむ。わざといだしたるとはなくては、づれて居合ひたるやうにせよ」とて御手づから人だち引き居ゑて、「一のまに出せ」と仰せられしかば、皆人の袖口もりうたんなるに、我が唐衣の赤色にてさへありしかば一人まじりたらむがけしき覺えて「これこそ見ぐるしくや」と申しゝかば、遠くては何か見えむあへなどその人といふ。書きつけてもなし。よも見えじ、あながちにせむと思しめしたりし事なれば、とがなきやうにいひなさせ給ひて、すべて黑戸の傍に緻きたることはじとみより御覽じて、「あの袖今少しさし出せ。これ少し引き入れよ」などもて興ぜさせ給ひしありさま、いかで思ひ出でざるべきをなど覺えて月とゞめらるれ、とまりてなど思ふ程に、院より「清そ堂のみ神樂には、すけ二人さきざきも參る」と仰せられたるに一人ぞ辨のすけまゐる。「今一人はまゐらせ給ひなむや」と殿仰せらるれば、その出立に事づけて出でなむと思ひて、「迎へに人をおこせよ」といはせたれば、來るゝまゝにおこせたり。道すがら心やすく夜の更けぬさきに出づるにつけても物のみぞ哀なる。こと人何事か仕うまつりなれし、御心にさぶらひしをり、ふけしさまにところせかりし心ちせしものをまして出で悅びすとて、わびさせむと思しめしたりしをりは、あやにくがりて、とみに御手も觸れさせ給はざりしものを、いそぎてまかでむと思ひしよの事ぞかし。宮の御方に渡らせ給ひ

て、夜の更くるまで、歸らせ給はざりしに、辛うじて待ちつけ參らせてすゝめ參らせしを、いかで心得させ給ひたりしにか、まかづる事仰せられしかば、「さに候ふ」と申したりしを聞かせ給ふまゝに、うち臥させ給ひて「今宵は明方に何事もせむ。ねむたし。寐なむ」と仰せられて「いかにつきならぞ見かへるものかなと思ふ人あらむ」とはゝゑませ給ひて仰せられしかば、我は「何の心にかさまでは思ひ給はむ。待ちゐたりとも人侮るとこそわびしからめ」と申せば「泉もわびよ。池もわびよ。我くるしからず」と仰せられれて、御疊の上にうちふさせ給ひて、みつかはしてわはれゆゝしににくげに思ひたるさまこそゑるけれ。「いかゞせむ苦しければうち臥して休むぞかしとゑばし念ぜよかし。わなわびし」など仰せられて、さまでもなき事をこちたげに仰せられなして笑はせ給ひし事など思ひ出でられながらまかでぬ。』つとめてかたぬぎまたしからむと思ひ居たるほどに、かみつかひ美くしげなる文、「これまゐらせむ。内に持ちてまゐりて候ひつれば、出でさせ給ひにければ、こちまゐり候ひつるなり」とてさしいれたり。思ひかけずと思ふに、「大和殿より」といふ。取りて見れば、

「そのかみのをとめのすがた思ひ出でゝいとゞ戀しきくものうへ人」

とぞ書きたる。

「そのかみの忘れがたさに雲の上もいづる日高くおどろかすかな」

とぞかゝれぬるに、小安殿の行幸とてのゝしりわひたり。里よりやがてまゐる。大嘗會の事書かずとも思ひやるべし。みな人知りたる事なればこまかにかゝず。御神樂の夜になりぬれ

ば、事のさま、内侍所のみ神樂に違ふ事なし。これは今すこしいまめかしく見ゆる。皆人たちをみの姿にて赤紐かけ、日陰の絲などなまめかしく見ゆるに、かざしの花のありさま見る、臨時の祭見る心ちする。皆座につきて、おのおのすべき事どもとりどりにせらるゝに、殿も本末の拍子とり給ふぞうるはしき。緋のさうぞくなる殿は今すこし人だちの座よりはあがりて御さじきなれば、それに居させ給ひたり。使のかざしの花、さゝせ給ひたる見るに、さま變りてめでたき。もとの拍子あせちの中納言(宗通)の子の、中將のぶみち、ことそのおとゝのびちうの守これみち、篳篥安藝の前司つねたゞ、數多居たりしを事長ければかゝず。かくて御神樂はじまりぬれば、本末の拍子の音さばかり多きに高き所に響きあひたり。聲聞きえらぬ耳にもめでたし。み神樂やうやうはてがたになると聞ゆ。「千歳千歳、萬歳萬歳」と謠ふこそ天てる神の岩戸に籠らせ給はざりけむも、ことわりと聞ゆ。わが君のかくいはけなき御齢に世を保たせ給ふ伊勢御神も、守りはぐゝみ奉らせ給ふらむと、位保たせ給はむ年の齢添ひ末は長井の浦のはるばると、濱の眞砂のかずも盡きぬべく、みもすそ川の流いよいよ久しく、位の山の年へさせ給はむ。誠に白玉椿八千世に千世を添ふる春秋まで、四方の海の浪の音靜に見えたり。かくてみ遊びはてがたになりぬれば、殿御琴、治部卿もとつな琵琶、はうしもとの如く宗忠の中納言、玄やうの笛内大臣(雅實)の御子の少將まさたゞ、笛、篳篥もとの人々御つかひにて、殿の御聲にて、「萬歳樂出せ」とて我打ちそひさせ給ひ、ふたかへりばかりにて、あなたふと、伊勢の海などみだれあそばせ給ふ。宗忠の中納言拍子とりて出す。事はてぬれば各さ

うぞくぬぎかへさせ給ふ。殿の御琴の音つまおとなべてならずめでたし。皆々人々祿肩にかけて立つに、殿は人には、今一きは増り參らせて、御ぞかたにいだかせ給ひたるを見參らすれば、三笠の山にさしいづる望月の世々を經て澄みのぼるらむやうに見ゆ。御年のほどなど、誠に盛なる櫻の花の咲きと丶のほりたらむを見る心ちす。御よそほひ天りん左やう王かくやと覺えさせ給ふ。た丶せ給ふとて、「賜はりたる物なり。おきて立つべからず。なめげなり」とて御肩にかけながらおはしまして、大床子の前にて、御子の中將殿を「まゐれ。これ給はれ」とて讓りまゐらせ給ふ。見まゐらすれば二葉の松の千世に榮えむ御ゆくさき、雲を分けてなりのぼらせ給はむ程たのもしく見えたり。事はてぬれば車をたて丶やがてまかでぬ。又の日よべの名殘めづらしく心にか丶りておぼゆるにも、まづ昔の御名殘思ひ出でられさせ給へば、周防內侍の許へ、たびたび覺えてげにと思ひあはせらるらむとていひやる。

「めづらしき豐のあかりの日かげにもなれにしくものうへぞこひしき」。

かへし、

「思ひやるとよのあかりのくまなきもよそなる人の袖ぞそぼつる」。

つごもりになりぬれば、朔日の御まかなひすべきよし仰せられたれば、いそぎあひたるにも我はたゞ別れやいざとのみ覺えて、つごもりの夜、內へまゐるとて、堀河院過ぐるに二條の大路、堀河など、かいすみ物騷がしげに人の出で入りたるけしき見えず。目のみまづとゞま

りて、

「ぬしなしと答ふる人もなけれども宿のけしきぞいふにまされる」

とよみけむふるごとさへ思ひ出でらる。うち見む人、女房の身にてあまり物知り顔に、にくしなど誹りあはむずらむ。かやうの法問の道などさへ朝夕のよしなし物語につねに仰せられ聞えさせ給ひしかば、ことのありさま思ひ出でらるゝまゝに書きたるなり。もどくべからず。忍びまゐらせざらむ人は何とかは見む。我は唯一所の御心のありがたくなつかしう、女房ざうなどこそかくはおはしまさめと覺え給ひしか。忘らるゝ世なく覺ゆるまゝに書きつけられてぞ、

「なげきつゝ年の暮れなばなき人のわかれやいとゞ遠くなりなむ」。』

十月十餘日のほどに里に居て、萬の事につけても、おはしまさましかばと常よりも忍ばれさせ給へば、「御姿にこそ見えさせ給はねど、おはします所ぞかし」といへば、香隆寺に參るとて見れば、木々の梢ももみぢにけり。外のよりは色深く見ゆれば、

「いにしへを戀ふる涙の染むればや紅葉のいろもことに見ゆらむ」。

御墓にまゐりたるに、尾花のうす白くなりて招き立ちて見ゆるが、所からさかりなるよりもかゝるしも哀なり。さばかり我も我もと男女の仕うまつりしに、かく遙なる山の麓に馴れ仕うまつりし人も、一人だになくたゞ一所招き立たせ給ひたれども、とまる人もなくてと思ふに、大かた涙せきかねて、かひなき御跡ばかりだに、霧ふたがりて、見えさせ給はず。

「花ず丶き招くにとまる人ぞなきけぶりとなりしあとばかりして。
　尋ね入る心のうちを知りがほにまねく尾ばなを見るぞくるしき。
　花すゞき開くだにあはれつきせぬによそに涙をおもひこそやれ」。

これをある人いひおこせたり。

「いかでかく書きとゞめけむ見る人の涙にむせてせきもやらぬに」。

かへし、

「思ひやれ慰むやとて書き催しことのはさへぞ見ればかなしき」。

我、おなじ心に忍び參らせむ人とこれを諸共に見ばやと思ひまはずに、忍び參らせぬ人は誰かはある、されど我を相思はざらむ人に見せたらば、世に煩はしく漏れ聞えむもよしなし。又相思ひたらむ人も、かたうどなどなからむ人ははえなき心ちすれば、この帝にあひたらむ人もがなと思ふに、常陸殿ばかりぞこの帝にあひたる人はあなれと思ひむかへたれば、思ふも忘るく哀に心安くあたられたり。日ぐらしにかきらひ暮して。

讃岐典侍日記 終

方丈記

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉しきの都の中にむねをならべいらかをあらそへる、たかきいやしき人のすまひは、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。或はこぞ破れ(やけ)てことしは造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。所もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづかたより來りて、いづかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと、無常をあらそひ去るさま、いはゞ朝顔の露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへども朝日に枯れぬ。或は花はしぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、ゆふべを待つことなし。』およそ物の心を知れりしよりこのかた、四十あまりの春秋をおくれる間に、世のふしぎを見ることやゝたびたびになりぬ。いにし安元三年四月廿八日かとよ、風烈しく吹きて志づかならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來りていぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移り

て、ひとよがほどに、塵灰となりにき。火本は樋口富の小路とかや、病人を宿せるかりやより出で來けるとなむ。吹きまよふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如くすゑひろになりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすらほのほを地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じてあまねくくれなゐなる中に、風に堪へず吹き切られたるほのほ、飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ移り行く。その中の人うつゝ心ならむや。あるひは煙にむせびてたふれ伏し、或は炎にまぐれてたちまちに死しぬ。或は又わづかに身一つからくして逃れたれども、資財を取り出づるに及ばず。七珍萬寶、さながら灰燼となりにき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち、三分が二に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人のいとなみみなおろかなる中に、さしも危き京中の家を作るとて寶をつひやし心をなやますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。』また治承四年卯月廿九日のころ、中の御門京極のほどより、大なるつじかぜ起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中にこもれる家ども、大なるもちひさきも、一つとしてやぶれざるはなし。さながらひらにたふれたるもあり。けたはしらばかり殘れるもあり。又門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、又垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。いはむや家の内のたから、數をつくして空にあがり、ひはだぶき板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝがごとし。塵を煙のごとく吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびたゞしくなりとよ

む音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりにとぞ覺ゆる。家の損亡する
のみならず、これをとり繕ふ間に、身をそこなひて、かたはづけるもの數を知らず。この風ひ
つじさるのかたに移り行きて、多くの人のなげきをなせり。つじかせはつねに吹くものなれ
ど、かゝることやはある。たゞごとにあらず。さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。』又
おなじ年の六月の頃、にはかに都うつり侍りき。いと思ひの外なりし事なり。大かたこの京
のはじめを聞けば、嵯峨の天皇の御時、都とさだまりにけるより後、既に數百歳を經たり。異
なるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人、たやすからずうれへあへ
るさま、ことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、みかどよりはじめ奉りて、大
臣公卿ことごとく攝津國難波の京に（八字イ無）うつり給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰かひとりふる
さとに殘り居らむ。官位に思ひをかけ、主君のかげを賴むほどの人は、一日なりとも、とくう
つらむとはげみあへり。時を失ひ世にあまされて、ごする所なきものは、愁へながらとまり
居れり。軒を爭ひし人のすまひ、日を經つゝあれ行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の
前に畠となる。人の心皆あらたまりて、たゞ馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南
海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。その時、おのづから事のたよりありて、津の
國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地ほどせまくて、條里をわるにたらず。北は
山にそひて高く、南は海に近くてくだれり。なみの音つねにかまびすしくて、潮風殊にはげ
しく、內裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、いうなるかた

も侍りき。日々にこぼちて川もせきあへずはこびくだす家はいづくにつくれるにかあらむ。なほむなしき地は多く、作れる屋はすくなし。ふるさとは既にあれて、新都はいまだならず。ありとしある人、みな浮雲のおもひをなせり。元より此處に居れるものは、地を失ひてうれへ、今うつり住む人は、土木のわづらひあることをなげく。道のほとりを見れば、車に乘るべきはうまに乘り、衣冠布衣なるべきはひたゝれを着たり。都のてふりたちまちにあらたまりて、唯ひなびたる武士にことならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民のうれへつひにむなしからざりければ、おなじ年の冬、猶この京に歸り給ひにき。されどこぼちわたせりし家どもはいかになりにけるにか、ことごとく元のやうにも作らず。ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、あはれみをもて國ををさめ給ふ。則ち御殿に茅をふきて軒をだにとゝのへず。煙のともしきを見給ふ時は、かぎりあるみつぎものをさへゆるされき。これ民をめぐみ、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。』又養和のころかとよ、久しくなりてたしかにも覺えず、二年が間、世の中飢渇して、あさましきこと侍りき。或は春夏日でり、或は秋冬大風、大水などよからぬ事どもうちつゞきて、五穀ことごとくみのらず。むなしく春耕し、夏植うるいとなみありて、秋かり冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、或は地を捨てゝ堺を出で、或は家をわすれて山にすむ。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、さらにそのしるしなし。京のならひなに事につけても、み

なもとは田舎をこそたのめるに、絶えてのぼるものなければ、さのみやはみさをも作りあへむ。念じわびつゝ、さまざまの寶もの、かたはしより捨つるがごとくすれども、さらに目みたつる人もなし。たまたま易ふるものは、金をかろくし、粟を重くす。乞食道の邊におほく、うれへ悲しむ聲耳にみてり。さきの年かくの如くからくして暮れぬ。明くる年は立ちなほるべきかと思ふに、あまさへえやみうちそひて、まさるやうにあとかたなし。世の人みな飢ゑ死にければ、日を經つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠うちき、足ひきつゝみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたるものどもありくかと見れば則ち斃れふしぬ。ついひぢのつら、路頭に飢ゑ死ぬるたぐひは數もしらず。取り捨つるわざもなければ、くさき香世界にみちみちて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。いはむや河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。しづ、山がつも、力つきて、薪にさへともしくなりゆけば、たのむかたなき人は、みづから家をこぼちて市に出でゝこれを賣るに、一人がもち出でたるあたひ、猶一日が命をさゝふるにだに及ばずとぞ。あやしき事は、かゝる薪の中に、につき、しろがねこがねのはくなど所々につきて見ゆる木のわれあひまじれり。これを尋ぬればすべき方なきもの、古寺に至りて佛をぬすみ、堂の物の具をやぶりとりて、わりくだけるなりけり。濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをなむ見侍りし。』又あはれなること侍りき。さりがたき女男など持ちたるものは、その思ひまさりて、心ざし深きはかならずさきだちて死しぬ。そのゆゑは、我が身をば次

になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たまたま乞ひ得たる物を、まづゆづるによりてなり。されば父子あるものはさだまれる事にて、親ぞさきだちて死にける。又は母が命つきて臥せるをもしらずして、いとけなき子のその乳房に吸ひつきつゝ、ふせるなどもありけり。仁和寺に、慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人、かくしつゝ、かずしらず死ぬることをかなしみて、ひじりをあまたかたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、緣をむすばしむるわざをなむせられける。その人數を知らむとて、四五兩月がほどかぞへたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百あまりなむありける。いはむやその前後に死ぬるもの多く、河原、白河、にしの京、もろもろの邊地などをくはへていはゞ際限もあるべからず。いかにいはむや、諸國七道をや。近くは崇德院の御位のとき、長承のころかとよ、かゝるためしはありけると聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたりいとめづらかに、かなしかりしことなり。』

また元暦二年のころ、おほなゐふること侍りき。そのさまよのつねならず。山くづれて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水わきあがり、いはほわれて谷にまろび入り、なぎさこぐふねは浪にたゞよひ、道ゆく駒は足のたちどをまどはせり。いはむや都のほとりには、在々所々堂舍廟塔、一つとして全からず。或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ちあがりて盛なる煙のごとし。地のふるひ家のやぶるゝ音、いかづちにことならず。家の中に居れば忽にうちひしげなむとす。はしり出づればまた地われさく。羽なければ空へもあがるべか

らず。龍ならねば雲にのぼらむこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけるとぞ覺え侍りし。その中に、あるものゝふのひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、ついぢのおほひの下に小家をつくり、はかなげなるあとなしごとをして遊び侍りしが、俄にくづれうめられて、あとかたなくひらにうちひさがれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲もをしまずかなしみあひて侍りしこそあはれにかなしく見はべりしか。子のかなしみにはたけきものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしくことわりかなとぞ見はべりし。かくおびたゞしくふることはしばしにて止みにしかども、そのなごりしばしば絶えず。よのつねにおどろくほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やうやうまどほになりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種の中に、水火風はつねに害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。むかし齊衡のころかとよ。おほなゐふりて、東大寺の佛のみぐし落ちなどして、いみじきことゞも侍りけれど、猶このたびにはしかずとぞ。すなはち人皆あぢきなきことを述べて、いさゝか心のにごりもうすらぐと見えしほどに、月日かさなり年越えしかば、後は言の葉にかけて、いひ出づる人だになし。』すべて世のありにくきこと、わが身とすみかとの、はかなくあだなるさまかくのごとし。いはむや所により、身のほどにしたがひて、心をなやますこと、あげてかぞふべからず。もしおのづから身かずならずして、權門のかたはらに居るものは深く悦ぶことあれども、大にたのしぶにあたはず。なげきある時も聲

をあげて泣くことなし。進退やすからず、たちゐにつけて恐れをのゝくさまたとへば、雀の鷹の巣に近づけるがごとし。もし貧しくして富める家の隣にをるものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出で入る妻子、僮僕のうらやめるさまを見るにも、富める家のひとのないがしろなるけしきを聞くにも、心念々にうごきて時としてやすからず。もしせばき地に居れば、近く炎上する時、その害をのがるゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。いきほひあるものは貪欲ふかく、ひとり身なるものは人にかろしめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり、人を頼めば身他のやつことなり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世にしたがへば身くるし。またしたがはねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし玉ゆらも心をなぐさむべき。』我が身、父の方の祖母の家をつたへて、久しく彼所に住む。そののち緣かけ、身おとろへて、しのぶかたがたしげかりしかば、つひにあととむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一つの庵をむすぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はかばかしくは屋を造るにおよばず。わづかについひぢをつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり風吹くごとに、危ふからずしもあらず。所は河原近ければ、水の難も深く、白波のおそれもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過ぐしつゝ、心をなやませることは、三十餘年なり。その間をりをりのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家をいで世をそむけり。も

とより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめむ。むなしく大原山の雲にふして、いくそばくの春秋をかへぬる。』こゝに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人のひとよの宿をつくり、老いたるかひこのまゆをいとなむがごとし。これを中ごろのすみかになずらふれば、また百分が一にだもおよばず。とかくいふ程に、よはひは年々にかたぶき、すみかはをりをりにせばし。その家のありさまよのつねにも似ず、廣さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。所をおもひ定めざるがゆゑに、地をしめて造らず。土居をくみ、うちおほひをふきて、つぎめごとにかけがねをかけたり。もし心にかなはぬことあらば、やすく外にうつさむがためなり。そのあらため造るとき、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二輛なり。車の力をむくゆるほかは、更に他の用途いらず。いま日野山の奥にあとをかくして後、南にかりの日がくしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置したてまつりて、落日をうけて、眉間のひかりとす。かの帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上に、ちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍にこと、琵琶、おのおの一張をたつ。いはゆるをりごと、つぎ琵琶これなり。東にそへて、わらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝにふづくゑを出せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなるひめ垣をかこひて園

とす。すなはちもろもろの藥草をうゑたり。かりの庵のありさまかくのごとし。その所のさまをいはゞ、南にかけひあり、岩をたゝみて水をためたり。林軒近ければ、つま木を拾ふにともしからず。名を外山といふ。まさきのかづらあとをうづめり。谷しげゝれど、にしは晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤なみを見る、紫雲のごとくして西のかたに匂ふ。夏は郭公をきく、かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳に充てり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもりきゆるさま、罪障にたとへつべし。もしねんぶつものうく、どきやうまめならざる時は、みづから休み、みづからをこたるにさまたぐる人もなく、また耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居ればくごふをさめつべし。必ず禁戒をまもるとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もしあとの白波に身をよするあしたには、岡のやに行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならすゆふべには、潯陽の江をおもひやりて、源都督[illegible]のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しばしば松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。』また麓に、一つの柴の庵あり。すなはちこの山もりが居る所なり。かしこに小童あり、時々來りてあひとぶらふ。もしつれづれなる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歳、われは六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれおなじ。あるはつばなをぬき、いはなしをとる(イり)。またぬかごをもり、芹をつむ。

或はすそわの田井に至りて、おちぼを拾ひてほぐみをつくる。もし日うらゝかなれば、嶺によぢのぼりて、はるかにふるさとの空を望み。木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地はぬしなければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより峯つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、或は石山ををがむ。もしは粟津の原を分けて、蟬丸翁が迹をとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸大夫が墓をたづぬ。歸るさには、をりにつけつゝ櫻をかり、紅葉をもとめ、わらびを折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉りかつは家づとにす。もし夜しづかなれば、窓の月に故人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。くさむらの螢は、遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨は、おのづから木の葉吹くあらしに似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、みねのかせきの近くなれたるにつけても、世にとほざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の寐覺の友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけてつくることなし。いはむや深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしもかぎるべからず。大かた此所に住みそめし時は、あからさまとおもひしかど、今までに五とせを經たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒にはくちばふかく、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山にこもり居て後、やごとなき人の、かくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たびたびの炎上にほろびたる家、またいくそばくぞ。たゞかりの庵のみ、のどけくしておそれなし。ほどせばしといへども、夜臥す床あり、ひる居る座あ

り。一身をやどすに不足なし。がうなはちひさき貝をこのむ、これよく身を志るによりてなり。みさごは荒磯に居る、則ち人をおそるゝが故なり。我またかくのごとし。身を知り世を知れらば、願はずまじらはず、たゞ志づかなるをのぞみとし、うれへなきをたのしみとす。すべて世の人の、すみかを作るならひ、かならずしも身のためにはせず。或は妻子眷屬のために作り、或は親昵朋友のために作る。或は主君、師匠および財寶、馬牛のためにさへこれをつくる。我今、身のためにむすべり、人のために作らず。ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣く作れりとも、誰をかやどし、誰をかすゑむ。』それ人の友たるものは富めるをたふとみ、ねんごろなるを先とす。かならずしも情あると、すぐなるとをば愛せず、たゞ絲竹花月を友とせむには志かじ。人のやつこたるものは賞罰のはなはだしきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく閑なるをばねがはず、たゞ我が身を奴婢とするには志かず。もしなすべきことあれば、すなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人を志たがへ、人をかへりみるよりはやすし。もしありくべきことあれば、みづから歩む。くるしといへども、馬鞍牛車と心をなやますには志かず。今ひと身をわかちて。二つの用をなす。手のやつこ、足ののり物、よくわが心にかなへり。心また身のくるしみを知れゝば、くるしむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたびたび過さず、ものうしとても心をうごかすことなし。いかにいはむや、常にありき、常に働くは、これ養生なるべし。なんぞいたづらにや

すみ居らむ。人を苦しめ人を惱ますはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。』衣食のたぐひまたおなじ。藤のころも、麻のふすま、得るに隨ひてはだへをかくし。野邊のつばな、嶺の木の實、わづかに命をつぐばかりなり。人にまじらはざれば、姿を耻づる悔もなし。かてともしければおろそかなれども、なほ味をあまくす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず、たゞわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。大かた世をのがれ、身を捨てしより、うらみもなくおそれもなし。命は天運にまかせて、をしまずいとはず、身をば浮雲になずらへて、たのまずまだしとせず。一期のたのしみは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をりをりの美景にのこれり。』それ三界は、たゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしきすまひ、ひとまの庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でゝは、乞食となれることをはづといへども、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへることをうたがはゞ、魚と鳥との分野を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心をいかでか知らむ。鳥は林をねがふ、鳥にあらざればその心を志らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずしてたれかさとらむ。』そもそも一期の月影かたぶきて餘算山のはに近し。忽に三途のやみにむかはむ時、何のわざをかかこたむとする。佛の人を敎へ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するもとがとす、閑寂に着するもさはりなるべし。いかゞ用なきたのしみをのべて、むなしくあたら時を過さむ。』志づかなる曉、このことわりを思ひつゞけ

て、みづから心に問ひていはく、世をのがれて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はむがためなり。然るを汝が姿はひじりに似て、心はにごりに志めり。すみかは則ち淨名居士のあとをけがせりといへども、たもつ所はわづかに周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はた亦妄心のいたりてくるはせるか、その時こゝろ更に答ふることなし。たゞかたはらに舌根をやとひて不請の念佛、兩三返を申してやみぬ。時に建暦の二とせ、彌生の晦日比、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれを志るす。

「月かげは入る山の端もつらかりきたえぬひかりをみるよしもがな」。

方 丈 記 終

四季物語

正月〔第一〕

あめとすみつちと定まり、五つの道、おのがじゝ所を得しより、いもせのなか〔イか〕らひ絶えず、君と人〔臣〕との掟たゞしく、かぞいろのいさをしるくして、春行き秋來りても、ちはやぶる神代よりも、あすか川けふとめぐり來ぬれど、何か世の中に一つとして常ある事をきかずしもあらぬにや〔元如〕。花さきみのりもみぢに過ぎ雪をつけたる冬の梢のあはれさ、かう行きめぐるならはしに、をぐるまのとゞまる事なく、たまきのはしなきためしは、そのはらやふせやに生ふるはゝきゞのあるにもあらず、なきたまの行きかふ夢のうき橋をたどりなれぬる浮世の中、法の師の三つの道說けらむやうに、あかつきおきのそでをこそするすみの身にもぬるゝのみなる。山里のかやぶきの戸ざしにも、さすがに行き通ひし大うちのさまは、かりねの夢にも忘れず。廬山の雨の夜もむかし覺え、月にはかこつ庭のたゝずまひに、かをり來る風のなごり涼しう吹きすぎ、時雨めきたる雲のゆきゝも跡なくなりて、小野のすみがま、煙も濃く濃くもやと思ひたどるにも、はや世の中、けふあすの年のをはりに、何かはと思へど、足ふみ立てぬ九重の、かしがましさなど聞えわたるに、こゆるぎの急ぐとしもあらぬ、まきの戸ぼそもはやくらうなり行きて、一年に十あまり、漸ふたゝびのけふの日數なれど、としのと

ぢめには、かう神も見そなはしおき給ふには、今宵の空のくしきゆくへ、墨をすりてぬりたらむやうに見えて、神の代のいはとの庭かせも、かうはかうがうしからじかし。星のみかげはかゞやきて、あまのやすのかはらのかみつどひとをかしきものから、つくづくとひとゝせの名殘、指をものし袖をしぼりて、思ひぬるよのなど、夢のことゝ「山ざとの雪にとぢられし老が心も、草木よりさきに春ならむとやする」とうちずしひとりごちて、又來る年のけふの日數もはかりがたく、年ごろの事はたさで、くいのやちたびこゝのしなのさはりにもやと思ひて、「昔ありける九重のけしき、けふも見そなはさなむ、大うちの有樣を、よしや難波のあし手をたきしに、ほとはるばかり仕うまつりて、おどろおどろしき松風、谷のひゞきに、目うちすりて琴もよそならぬなど、枕はかげに添へて、それかかれかと思ひたどるに、鳥も聞えぬ山里なれど、家を守る犬のこゑごゑも、春めきたるやうに覺えて、東の戸ざししばしばかりあけ、ものすれば、空のけしきよべ見しにはかはりて、「はなだの紙におしろいつけたるやうに、所々白う見なされて、かゞやく星かげも、見るがうちに薄う覺えて、ひんがしのかた、おほん神の立たせ給ふべきたつみのわたりに、よこほれる雲のひとすぢは、もと細う末ふとし。一つはにじのかけ橋と覺えて、こむらさきのひらをの長うつゞきたるがごとし。そのひらをだつ物も、いつのほどにか、うすずみのかんや紙の色になりもて行くに、又いづちよりかは、しばしがほど暗うなりて、山かげのものあひつやゝかならぬに、そともの鳥の聲、花待つばかりにや、心からのどやかにさへづり出でゝ、谷の水も音添へて聞ゆるに、三明六通の佛の御

耳には、かけまくもかしこくもうらやみ奉るに、このたびは星の八十川原に、いづちいさけむ、一つ二つ、それにわらねど殘るやうに見えて、山の端にはひ出づる朝彦の御かげも、唯わけの玉垣、いかなるたくみの塗りみそなはせしとか。常のながめもかうわるものから、ひときはたふとくもいみじうも覺えたるに、九重の御わざ、我が神垣のくらづかさの御もの申しも、今ばかりおぼえたり。この御わざはさる事にて、四方拜の神さびたる御事よ。まだゑののめもわいためわらぬより、ありがたくも、すべらぎの五つの御印相なしおはして、御軟障引きめぐらし給ひ、そのおはんうちにして、そくさうをとなへおはしまし、天つ神國つ神、なべてのみさゝぎ、雨のかみ風のかみ、五つのたなつものらまで祈り物し給へば、天が下ゆたかに國久しかれとの御うけびにて、千早振神のみ心をとらせ給ふことなるべし。おほばおほぼのわたりのいらかたゝずまひかにもりのつかさのはゝきとりどりにつかうまつり、けがれをやらひやるに、さゝやかなる童のとし立つわさよろこぼひてそこらちりふて、御このみのわまりうち遣りたるをのりにもあらでは、ゝき又つかうまつり、はしたなのうへわらはなど、はなにかけて守るに、御ゑらすのかた、すないものまうしの御かくとものすれば、うたまひのつかさ、なれたるうへのきぬひきかけて、とのもりのきよめたかはしなど、腰ゆがみ老いだつ、つかさこゝら行きかふに、とかくして御わざこと終り、御幸ならせおはしませば、御くすりのつかさの、とうしわげ仕うまつりたる、とそ、びやくさん、とさうさんたうやくなど、宮の内のかんづかさ、藏人に傳へて奉れり。この藏人はゑんどりのつかさなるべし。そ

れより小朝拜の御事いそがれ、又こよひのせちにおふべき三つの星の位、上達部、なべての殿上のをのこたち、又擬侍從のなにくれことのさだめ書、それかれ仕うまつりて日くれにたれば、春としもなく寒う覺え、衞士のつかさ火たくわたりにのみ、人多くゆすりよりて、内辨もこのわたりゆかしくもやと、誰も誰もうちはゝゑむべし。そのかうがうしさいはむかたなし。九重のかくうづたかくつゞかせ給ひ、百代千世とさかゆく春にあはせ給ふも、かゝるよはひのたゞならぬにこそ。三日の日は、我が御社にやくらのぬさ、御前よりみそなはせおはせば、かんづかさのかみ、おほいすけ、くらのかみ、所のすつなふなど、さかきにゆふささかけてまうのぼれば、こゝらあるかんなぎも、かゝるおくなだつも、白きざうえに烏帽子ゆがみつきて、御廣庭に出でゝのみ奉れば、ほどなく今日も暮れて、五日のそゐにつどへて、かみのそのふの御札、あけ所々の法師ら、又神人など、さかきの枝のもとすゑ切りて、ふづゑなどおほひて、御札さしはさみ、宮のうちのかみして奉れり。とかくして、このそゐにかゝづらふことにや、その六日におれば、又六日にある事とこそ、かへさに、法師かんなぎたち、四條京極少將、井の水にて手すゝぎ口うがふゐて、すぐに宮にもつかうまつりて、その事のかしこまりを申す事とこそ。程なく七日の御會も夢路のうちに過ぎぬれば、きのふまでいみはゞかりしおざり法師だつも、けふはみはしによろぼひ、若きかぎりは足をそらに、何くれとその事を仕うまつれり。みしほの御わざは、高野の大師眞言院を宮のうちに立てられ、承和五とせの頃よりか行はるゝ事にこそ。これもはらもろこしの内道場をなぞらへこゝろみらる

ゝことなれば、神の御國もひとの國も同じやからめきて、をかしうもかしこうも思う給へられたり。大治ふたとせのみしはに、ぬす人おほくむれ入りて、よゐの僃、あざりなどの衣、或は佛の具うばひとりしより、みしはのたびには、宮のうちに六衞府のつかさ人、けびゐしのしもうどなど、弓やなぐひをそなへ、篝あかりともして守れるに、さかしきやうのえせものはくまじ。かゝるをりにことよせて、若き殿上のをなでら、うねめうへわらはの若きかぎり、みそか事ものすに、とかくしては見つけあらはされて、耻とるも多かりけり。十あまりよかの夜かたばかりもなく法師ゆきあかれ、つとめては、御づし所の御かゆ奉れるなゝくさの御あつものも、けふまでとゞめ置きて、ひとつ御かまにて、とうしなして奉れば、しるしばかり御いきふれさせ給へり。この事推古の御代よりある事にて、赤きは陽の色を假らせ給ふ御事にて、あづきの御かゆたまはらせ給ふとぞ、冬の陰の餘氣を、陽德にて消させ給ふ御心なるべし。山の上のおくらといふ人の奉れる歌に、

「春くれば赤きおものゝあつものもめぐみにもれぬ御世に逢ふらし」

とよめるも、赤きおものは、あづきの御かゆなるべし。又松尾の神人、けふのひるつかた、大内にまうでゝ、かんづかさの伯にものして、札奉れば、我がみ山のあふひの根をねこじて、そのねこぜるをそくいひのうちに入れて、御札を御もやの柱に、伯してはらせ申せば、またつかさつかさのたよりあるべき方にもはらせ給ひ、なべて公卿の家々にも、このためしまねぶべし。そのそくいひは、七くさのあつもののこれる、またけふの御かゆをひとつにすりませ

て、御札おさるゝなり。さだまれる御例は、御いきふれさせ給へる、御ましすべりたるにて、おすことゝこそ。これもはらいかづちいなづまのたゝりをやらせ給はむとの、松の尾の御ちかひおはしますとの御事なるべし。かくして日もやうやう立ち行くに、さぎちやうの具も、見だつ人の、ざればみたゝもてあそびものとなり、やけ殘りたる扇に、赤きふさつけたる、腰にさし添へたるふるでたちの、かたへにちでかゝへてたゞずむはいかばかりのよはひにや。このやしなひ君の行く末かしづくらむと、身の上の老のさち、鼻のあたりおでめきけふ。十日あまり九日、八はたの御弓のいはじめ、これ又つはもののつかさつかうまつれり。廿一日は、おむろ東寺のみのりはじめ、伊勢のとくしの御告拜の奏、いづれか常の御わざならむかし。とほ山まゆの雪も暮きにけりと、黑髮をつけ、ゆきかひ玄げき都は更にて、人目まれなる山里も事だつことゝて、あるはたきゞのやうのものによねのふたつかゞをそへ、或は小きうつはにみきを盛り、白き布にべにといふもののさしてかづきつれたる賤の女もわげまきも、うぶすなの神に仕うまつり、何事にかはのみ心え奉れば、神の御かはのほども、ゑみをふくませ給はむとわらはしきものから、二十五六日も過ぎ、有明の空またさえかへりて、冬の空のけしきにはいやまされば、「いや年のはも立ち歸りぬる」とふるき言の葉つぶやきわたるにも、かゝる山ずみのほいならずば、この有明は立ち向はじと　いとゞのがるゝ志のいやそひぬれば、雲に乘るべき山里戀しうおぼえ、月にそむける佛のおまし所、うちそゝぎ、はゝき手づから仕うまつりて、かゝる方丈の、わが佛が京へ出で給はじと深く信じ、都のうちは住までま

されりと、心にねにし、けふもつとめ暮れぬ。

二月（仮二）

きさらぎの空のけしきはたゞならぬに、のこんの雪にさきまじる梅の匂、なつかしう、里にはまた事ぞともなきあけぼのに、山の櫻は早う花をつけぬれど、霞のふかう立ちへだて丶、外山の空のうらみすくなからず。過ぎし氷のためしはさらにて、けふもとりのつかさ氷を奉れるいくの丶道の遠き心ばへなど、所につけ國にふれたることぐさ言ひ去ろふをのこども丶、春のひかりに心ひかれて、あらぬ野山に心をやり、ゆかしう見ならせども、御ぞうしにこめたるをりの內のけもの、この內の鳥は春とも知らず、花にすくふいもせのちぎりもものせで、みかきが原のあけくれ、心ぐるしう、遠き海山を去たひ、八重たつ雲のよそをも戀ひ悲しむをなむ、あはれと聞き知るべきひじりものせねば、そいんたくもうてうてをのこゑは、言ひ知らず、をかしきふしに聞えなせど、さぞな悲しみわまりなるべきを思へば、いみじきおましのわたりやんごとなきわたりには、忌みはゞかるべきにこそ。れけんの日は、公卿少納言、その外なべてのつかさびとつどひて、ふみのつかさ、つはもの丶つかさ二省より奉る、さうせんのたにざくを撰び心みて、すぐれたるを擧げ用ゐ、劣れるをこらしてなほす丶めらる丶。六の位より下のつかさ人のねがひを、ものせらる丶日なるべし。白馬、めをのたうかは雪又ふりつゞき、ねりの公卿の裾のすそも露けく、さらぬ宮づかへのころものすそもたふげなるに、「今日のたん（元如）をば、春めきたるとやものせむ」などいへるに、かりがねの十、みそ、四

十、はたあまり飛びつれて、とこよを急ぐに、花を見捨てゝとはいへども、はやき櫻はかりの
ながめにももれずとや、をかしうはゝゐむわかうどゞもありて、御こゝろひろ庭のあたりは
（人のいき他のかなりに、てゆずりこめたりイ有）、文武の二つはすて給はぬ道なれど、かくはげむことのはいありがたうこそ。ね
はんぐゐの御法はきさらぎのわかれと、かの家持のなかのものまうしの、「言ひ定めなき身
を人に知らせてし」と延喜のすべらぎのよませ給ひにし事、あはれなる限なるべし。かゝる
御うへにては、生死といふ事は唯かりそめの相にてこそおはせめども、心なきたぐひは、身
の上になぞへて、そのきはならねど、今ある事のやうに悲しかるべきに、まいて宇治の寶藏、
山のみくらなどの、御給のねはんぐゐおがみ奉れば、うばい、うばそく、びく、びくにの四つ
の行者はさる事にて、わらぬけもの、とりら、むしらまでもなきしみかなしみ、くるしう名殘
惜み奉るにも、佛のみ國にも、ねこまといふけものは、形は虎によそひて心はねぢけまがり
て、虎といへどもおそろしうばかりもあらで、いときなき子を守り、老いたる母を惠みした
めしもありて、やさしきかたちもあるに、このねこまは佛の御わかれをも悲しう思はでこそ
ねはんぐゐの御ましへ仕うまつらぬおどろおどろしさ。この國にてもともすれば、老いたる
ねこま（有のイ）野らに住むなどは、人の子をうばひ、あるは人の妻をかどは（有かイ）して、むくつけきも
のなり。さるを御まへ近う、ひざの上にも置かせ給ふことよ。長きつなも引き出でつべきも
のならむかし。十日あまり七日八日の日は、夜すがらひんがし山のほとり鳥部山のあたり人
たちゆすり、清水の觀世音に行きまうづる人あしたとへてもさらなり、花はやうやう散るも

あり。おくれたる枝は、心きたなきは折りとりて、何心なきわらは人の心をとり、へつらひぐさに家づとめきて歸りぬ。けふ過ぎては、いとゞ春めきて、北野の御社のかんわざ、秀才の告文など、やんごとなき氏の本意ならむかし。延喜三年二月末のけふになむ、心づくしの旅のつかれ、さすらふるうきに浮世をよそに見なし給うしに、けふに至るまで人のたふとむ御ことよ。わらびとがみはさることにて、白たいふ延勝とか物せしは、伊勢の神人たりしが、これをさへおなじ筋にたふとめり。この御神の作文は、もろこしよりこひもとめて、延喜四年五月二十日あまり一日のころ、二卷となしてもろこしへ渡し給ふとなむ、後の世のからうたにもはめ弄して、渡せかししこともありとこそ。

三月 篠三

春風もやゝ深う吹きわたりて、青柳の枝にやどれるもゝちどりのこゝをせにとうちさへづり、薗生に遊ぶ胡蝶の、垣根の露を命とや。夢ばかりの浮世のすさみ、昔の夢も、かうやうの身にはうらやましからで、いとゆふにさへつながるべき、老かほそきあしに、芝生のなよ竹を杖に切りて、こゝらの野をあさるに、桃のうちわらふばかり、艶に咲きほこりて、道のかたへは春の草生ひ茂りて、「春いくばくか暮れなむ」とつゝしりうたうて、谷におりて、携へし物をかきならせば、「流るゝ水も調べたりて、及ばぬひこくも、みづからとかたはらいたう、つくづくと、昔ありける貞敏公のおもかげも通ふばかり、「涙も水も」などいひすてぬ。けふなむめぐり水の御宴、今ばかり始まるべきにこそ。もとよりかはらけもたらぬ谷のとざし、なかは

いてこのもしすかぬ身なれば、巴の字の文字も書き流すべきにあらず。つかさめしのぢもくこの日のころにやと、百しきの御わざも、久しういひ入れたへすまぬ身は、思ひ(もイ)よらで、玄ばしありてはなはは思ひ出づる所もあれば、それかかれかと、その官々心あてしなう、みくしのやうに覺えたり。御燈などいふことは、六神相應のかたへともしたむけらるゝ事にて、この事いとくすべらぎより起りて、これなむ三日の夜にあるべし、十日あまり五日のころは、やはたの御齋會、さゝ竹の大宮人に、くらづかさそひて參りぬべし。紫野の根の國のかんの社に花を奉る。その日は、すないものまうし、ならびにすれいなど參りて、疫の神に封を奉りかどのをさゆきを懸けなむなど、神の司を徵しものす。「やすらにはてよ。やすらにはてよ」と玄ば玄ばうたうて、花を手折りて、友のものこたちに傳ふことなり。この事、後一條院のころほひより始められしとなむ。「やすらにはてよ」とは春の氣に、上一人より下すゑずゑまであたらせ給へば、玄もにもわづらはで、安らかにはてよとの事なるべし。つかさびとかへれば、もゝしきの內を行きかふ人、わりきみこしの內より「その花たうべむ。ものらかはりに奉らむ」などいとなきは官人のそでにとりつき、うばひとりぬ。にくしともいはで、やらひ遣りぬるも、さすがに岩木ならぬ人の心あはれにやさしきや。かゝる山里のえせたるけだものはさはあるまじ。あづまの人の心は、大方はけだものゝやうにおぼえたり。さはいへど、かへりては悲しき志を盡し、命にも身にもかへて、人をすくひ、あまたけんぞくひき隨へて、あだをもたすけたんめりし事など人も言ひ傳へ、近う目には見そなはしぬれば、都とてもゐなかは

づかしうこそ。たゞ花もみぢにつけ、月雪の庭にたゝずみて心とく折に合ひたることぐさ、いひもゑ、よみいだすことなむ都の人はまさりぬ。ともかくも語らふべきはゐなかうどなるべし。されど鬚むくつけく、昔物語めきたる大將の、口のわたりむつかしかりぬべし。ゑらぬ遠つ國、かゝみの神のわり所思ふ娘姫たつなどのそひねゆるさむは、はかなかるべきにや、女などはわきて、九重のうちにて、ともかうも尼になりて、さそふ水ありて、ひとのくににて空しうなりしかど、小野の小町は、世にしさすらひて、世を過ぐすこそはいならめ。男といふものは、君につかへ朝な夕なと妻子をはぐゝみ、うゑをすくひ、夜さむの風を淩ぐ身を、今は九重のすまひ、あすは遠き國をも治めむはさもあらばあれ。世をはかなみかしらおろして、草のたもと苔のむしろのうきふしはいかにぞや。都の内はとかくらうがはしきに、まいて知れる友などの行きかよひ、昔ありけむ事言はむは、口をしかりぬべし。たゞ安らかに稻葉の露をしたてゝイひて一鉢をかしき落葉をひろひて、みあかしのたづきともせまほしうこそ。我もゑか思へど、又捨てやらぬほだしには、このひとつの樂器なるべし。佛は狂言きごと、かゝるうつはの音には、なほさら心もきよらなるべきを、おきながはかなき心よならすことにいひ知らぬ涙そゞろにうかびて、ぼんなうの種をまかなくとかや。ゑかしうち遣らむもなさけなし。「あるもうければ」とひとめかりでちたるねざめには、「知らぬみ山の、きつね、たぬき、ふくろふやうのものら、これをとうでよ。あればさすがに」などいひすて、草にのみなりて、忘れてのちまたかきならせば、藤の波をたゝへてこの日野山のきしイみねにさき匂へる北の藤な

み千代かけて、こゝをふだらくの岸にもと思うためるに、山ほとゝぎすのねてか覺めてかと思ふばかり、やまびこにこたへて、二聲のやうにおとづれたり。かゝるみ山がくれにも、かへさをすゝむるにやと、をかしう思ふに、やよひも暮れて、けふをなむ三月のしんの日とか。

四月（イ傳四）

しばしなれにし花のころものみかは、御簾のたゝれ、御調度までもひとへにかへみそなはしすさまじかりける。扇などたまふな（二字ばかり）れば、おのづから夏山のかげも、すゞみ取るべくおぼえたり。九重の内は人の家居はしげゝれど、さこそあらね、このわたりの山かげは、青葉にまじるうの花の、雪はづかしう咲きものし、若楓のみどりは六位過ぐさぬうへのきぬかけぬれど、御さくたうばりし松の緑にはおとりぬ。時鳥の聲々も、都の内よりは、山里はしたしう行きかよひ、朝な夕なに、しでのたをさにさ（かい）さめがはなるもをかし。みくさ清きあせの夕暮は秋ならねどもあはれ多かれと、蛙といふものはえせたるむしにて、人の足にもなれ來て、ともすればくつの下にしかれて、うでをひしがれ身をあやぶむ。律だつひじりなどは、このごろは足をとゞむるも、むつかしき身なるべし。その外さらぬむしおほく集まりて、かしがましき山里なり。こゝも又いつかはとうとみぬかし。祭のころ近うなり行くに、まづ佛生會のいそぎもゝしきは更にて、あるとあらゆる寺のいとなみやんごとなき御事なり。佛は人つ國の御神なれど、かくたふとまれさせ給ふいみじさよ。我が國の神、いくらかおはしませども神生會ともいはぬなるを思へば、ありがたきならはしなり。きさらぎのわかれは、このごろ

のやうに覺えたるに、月日の早うゝつることよ。かゝるいきしにの近う行きかふこと、佛の御身すらしかり。かずならぬ人の身のほど思ひしらぬにはあらねど、たゞのどかに思ひ過ぐしぬ。うぢのわかいらこの御祭も、けふに思ひやりぬ。近うあるべきにや。當社は、昔、やまあとの國高鴨にものし給ふを、天武のすべらぎのむとせに當るきさらぎのころ、この都に遷されさだんみづがき、いかめしう立たせおはしましぬ。仁和のはじめの年になむ、もろもろの國に一の宮を定め給うし時、この御瑞籬をも、山城の國の一の宮に定められ、かけまくもかしこき御事よ。一人の御まがき御國をまもらせ給ふにこそ。みあれのお御いそぎは、中の酉の日にて、關白の御詣、いみじう見えわたりぬ。あるじは、五つ緒のひさしさし鬘の御車に奉られ、地下殿上のをのこつかうまつり、前驅もありて、つかさ人はみてぐらからびつなどもて、大路のさまは、何くれの見ものの數つどひて、大かたは夜の明けぬ頃より、夕さりは星をいたゞきてきぬ。おもへば、たゞならぬ神垣なり、はなつみのわらはの出たち、さいのほこもちのことやうの姿、はうべんの下人の、袖たもとにつけたるまりづくし、秋の花垣、もゝなりひやうのすゝきになりたるなど、けしからぬ見ものなるに、かどのをさの出立、その外使廳の下部のをとこをとこしきよそひ、又くらづかさのかんみその箱、しりくめ縄ひき渡して捧げ來ぬ。この藏づかさ、紅の紙してうじたる宣命を、內侍のかんに傳へ侍れば、主上御ゆするをへさせ給うて、御手づからひらかせよみおはして、可の字を御手づからそへさせ給へば、內侍うけつぎて上卿にわたせば、上卿これを奉りて、御つぼの前にくらづかひを召して賜ふ事

になむ。小夜に及んで、おのおのみあれ山にて、神拜やんごとなくなし奉るに、曲のほどにつけたるあふひも、桂の枝も多くは玄ぼみぬ。桂の枝は、松の尾の御詫おはして、けふにさしそへ給ひたり。ひめ葵はもろは草とて、こゝになむ二葉の葵ありて、よその里にはなきとかや。むかしより松尾の宮居に、このみ社深き御うけびおはして、なべてのなる神のわざはひ、なゐふるふ御わざはひ、やらはせむとの御事にて、もろかんなぎも、これを烏帽子淨衣の腰にもかけ、又御内を始め奉り、何くれの宮、公卿の御家にもたうばりて、あるは御簾のもかうにもはさみ、あるはもや中殿のかもゐなどに懸け置かれぬ。五月のあやめ、くす玉のありかにもまじへ置きて、ながつきの菊のをりにもあふことなり。枯れたる葵かつらも、新しきよりはかうがうしく覺えたり。小六帖の歌に、和泉小野の大將に忘られまゐらせて、又ことかたのうへ宮人になれものし給ふをうち腹立ちて、みなづきの中の七日の夕さりがた、御はしの上の高欄に、わらはべの御簾にありしをとうでゝ、ふてたりしあふひの枯葉にそへて、少將内侍のがり行くにことづけて、言ひ遣りけるとなむ。

「玉だれにのちの葵はとまりけり枯れてもかよへ人のおもかげ」

といへるぞかし。在原棟梁の歌に、

「枯れのこるみすの葵をかごとにてたなばたつめに誰いのるらむ」

とも侍るかし。つとめては後宴とて、御社もさしてきのふ〔歟に脱〕おとらず。ひきつゞけたる車のかず、かちよりまうづる若宮人、さらぬ京家のふるごたち、ちごの袖ひきつらねてまうづる

に、この世の中のかりのいとなみとは思へども、二世を祈らせ給はむの、當社の御ちかひもましまして、げにげにしき信ともおぼえたれど、いづれか一人として、生き殘るもなければ、この人かずの古塚、いかなるは山しげやまを切りつくして大かたは野にもふて、水にもながすこそ、うきには漏れぬ翁が身のつたなさよ。はやうも物せぬうらみいひしらず胸いたうなりぬ。さいつころ、父みまかんし頃、思ふ事ありてよめる歌に、

「今よりはしでの山路ぞいそがるゝせめては親のあとをつくやと」

やうにおぼめきしも、あとさき忘れためしやうなりかし。たれもたれも殘らぬ世に、佛の御心ときには、かゝるすくせさそひとり給へてよ。月はいつとても晴れたるはえんなれど、くまなきも行きつまりたれば、この日野の山里の月の夕、有明のたゞずまひ、まれなるたびねさへあはれ深かるべきに、まいて年ごろの住家に、見なれむかひ侍りしゆふべあかつき、身にしむばかりのこのごろの空、秋はさらなることわりなるを、青葉しひしらかしの木の間がくれは、心しらぬ都のてぶりに、かういひつゞくるもはしたなかるべしとなり。

五月廿五

むかしの人の袖のうつりがは、花たちばなにかこちがはなるも、なれが心にとくはおはぬぬれぎぬにむつかしかし。それならねども、このごろのけしき、何心なき山がつも田子も、おりたつ水にもすそをぬらし、晴間なき空にあくがるゝ山人は、袖さへ朽ちてほさぬ恨は、おなじたぐひなるべし。さはいへど大内のさま、きのふは紙屋川のはらへ、又けふは我がみ社の

くらべ馬などに、こゝら立ちゐる籠みたる[illegible]との足見るもまばゆし。あやめよもぎをもゝしきよりはじめ、さらぬ民の戸にもさしはさみてながねに添へたる君がちとせ、松のよはひはさることにて、改まりたることぶきぐさ、けうある事なるべし。とのもりづかさ、それぞれの御庭やらひきよむれば、かにもりのかみ御まししつらひ、宮の内のかみ、くすりのつかさ、おりのかみなどつどひ、くすだま奉るなど、いみじ事のかぎりなるべし。いとなきは、その日を過ぐさずもてろうし清所より侍やのもて行きかふを、三四の宮たつは、「それこゝに奉れ。さなくばうへにきこえ奉りて、なれに罪たまふらむ。きのふの暮つ方、右衛門のおもとに文つけし、「これをも聞えものせむ。いみじき恥見せてむ。たてまつられ」とむつがらせおはせば、しかわらば、かみのつかさすけらに、のらるべき侍やの心づかひにて、からうじて、花のりん三つ四つ奉りすてゝ往きぬ。八日の日は、稲荷の神拝、祇園のかんわざはじめとて、つかさづかさ行きかふに、宇治のりくうの宮居に、さゝ竹の宮人四つがひ、擬侍從など、かどのをさをはじめて、あるは馬、あるは車などてうじて、宇治の大路のまだ朝戸も開けぬに、霧にきそひて行くぞや。しかれば平等院のべたうの御房にて、装束しつらひ、ねりの具つかさに仰せて渡し奉りぬ。寛平二年の八幡のみことのりに、「宇治のかんの社は、ちゝみこの御ゆづりうけさせ給ひて、あまつひつぎにまうのぼらせ給はむを、かしこき御心ばへにて、おほさゝぎの宮に傳へものし給ふことよ。思へばかしこうもいみじうもおはす事ぞ。たゞ祭の日ばかり、一年の行事のつとめ奉れ」とてことしより、さつきけふの日にわたりて、年中にもゝしきに行は

る丶公事を、こ丶にまねび渡さる丶なりかし。されど今はたゞ、そのこと過ぎ行きて、たゞめたうかをたうかのまねび、ついなめしの節のおもかげ、さぎちやうの神泉苑の御わざ、住吉の御田の葵（祭脱）、けいはぢの神わざ、左右の近衞のまねつかひ、左右のみうまやの司のくらべ馬などばかりのこれり。はし姫におはぬさ奉られ、それさへけふにつどひて渡しぬ。これはかんづかさのかみの、いとなみ奉る事なるべし。あやめのぢもくは、あやめのをりにあふ夜、勸めらるれども、公ごとつどへば、十日あまりにもある事にて、短夜の月にきそひて行はれたり。石山寺の御卷數めし（二字納めらカ）る丶事は二十日あまりになむあるべし。つとめては治部のかみ、圖書、こうろくわんの人をして、そのかへり申しに石山に詣でぬ。かへさには螢いくそばく、さぬのうつはにつ丶み入れて宮の内に奉れば、こ丶らの御簾、あるはそこらにあまたはなされて、晴る丶夜の星とものせしも、いひしらず思ひたどりぬ。されどこの蟲も夜こそあれ、晝は色こともやうに、夜の光にはけおされておとれる蟲なり。まいて手にふれ身に添へては、惡しき香うつり來ぬ。手にはらにをちぎり、身には百歩の香をぬるわからうど、君前にては、心あるべき蟲の香ならし。廿四日の夕さり方、おなじく二十三日のさよかけて、あたでの峰の火影、ついまつともし立て、おどろおどろしう參り集ふに、山はと丶ぎすも聲を忘れてや、おともたてず、たゞ鳥のねぐらしめかねて、夜ひとよなきあかすなるべし。

六月（イ本六）

さみだれのはれまなき空も、いつしか名殘なくなりて、雲の峰々たちかさなり、いみじき金

閫が手にも、かうやうにはたくみえがたう、梢の蟬の聲々はかしましと、まくらがみうるさけれど、げに里のかたへのほこほことなるからうすの音はやうかはりたり。垣根に咲ける夏草の花よりも、猶もさゝやかなる池といへば、にでりにそまぬはちすの花いけたるばかり心もきよまる事はあらじかし。おなじ花紅葉も、人により心によりて、かずまへられものすれど、わきて佛の御あしひざのもとに仕うまつり、あるはいきとし生ける人草も、皆このやどりねがはぬものやはあらぬ。昔ありける菅原のおとゞは、「清蓮のはな入夢拜佛座金蓮」とは作り給ふぞかし。夕ばえ猶ありがたう、はしゐ涼しく思ひ取りて、やうやく短夜といへど、夜の更くるまは程久しきに、くひなのけしからずたゝくに、たが門さしてと、よその戸ざし思ひやり深う、枕とて草ひき結びうちぬるに、はや夜も明けぬ。閼伽奉り花たうべむと、目すりうち向へば、きのふの空にはけしきかはり、雲うちおほひ、大かたは藤の色めきたり。心なき空といへど、かゝる色はいみじう覺ゆるに、神ことごとしうなり、おどろおどろしうはためきて、ひかる君の西の海にさすらひしを、こゝのためしおぼえて、昔物語なつかしう思ふに、程なく神二つ三つおちぬべし。かくして雨のきそひ降ること、たゞすらだうの矢さけびも、かうやうにやは。かゝる山里は、ひとしほ雨のおともなる神の音も、こだまにひゞきてすさまじかりけり。十四日の日なむ、かみのそのふの御祭、いとなみわたさるゝ事なるべし。検非違使の廳より、別當宣を蒙りて、玄だい申し沙汰し、かどのをさのこらず仕うまつれり。六十あまり六つ國の守より、さいのほこ奉り、ぬささゝげ奉るなり。この神民くさのゐや

みをつかさどらしめ、又いやし給はむの御ちかひ志るければ、よにもあだに志給はで、十五日のつとめての時は、すないものまうし、ある時はうちの志るすつかさなど參りて仕うまつれり。いさゝか執柄の御車やどりなど志つらひて、こゝにてけしきして、ねりをつとめらるゝとぞ。執行の坊の三綱など、ぬさを勅使にかづけぬれば、拜して、感神院の塔婆のかたへに志ぞきて、神供のあがるうち、樂人をめして樂器を奏せしむる事なり。十八日城南の御祓とて、やがて勅使を立てられ、つかさのかみ參りて、中臣のはらへ讀み奉りけり。院のわたりはこのごろのうちつゞきたる日なみとも見えで、水かさかはらず、たかきにさしくだす船、筏しの笠の上もあつらう見えたり。金龍寺伊勢寺も、このわたり近う思ひなされ、櫻のみとりて、この頃の照り添ひたる水無月の空、いかなる入相の鐘の音も志らべやはかはり、古曾部の入道の、あまくだります神とか物せしも、今は民はそのわたりゆかしかりぬべし。伏見の里に流るゝばかり、もゝちかへりなくほとゝぎすたれ初音とか、心ふとそ思ひわたりけむ翁も、むかし大内にたゝずみて、まれにも社に詣でざりしころ、室町の末あるはみあれ山のあたりにて、おとづれたる音は、身もそゞろ寒くをかしがりて、「あはれ一ふしあるもあれ、いかなるあつめにか入らまし。二たびの集には、いかでもれさし」などさがなきねぎごとに月日を暮せしことよ。今はこのわたり志げからぬとも、行き過ぎがての笠やどりには、むらさめのはれま待つほど、深月庵みじかよのほど、宇治のわたり、小倉の沼のかたへよりは、かしがましくも鳴き過ぎぬ。か志やうのまつりは、ならのみかどの大内のころほひより、年々にも、又

は隔年にもなし給ひぬ。陽氣さげう、人のたましひも沈むばかり暑き折からなれば、すくなひこな、そのからかみはゑやみをつかさどらせ給へば、これにみき奉らせ、もちひ手づからそなへさせ給うて、天長地久四民安樂を祈らせ給ふ事なりかし。さかるに仁明天皇の承和十四年の頃、二神の御告おはして、「六月十六日は、疫氣人の肌膚に入りて、なやみをなすべし。十六日の數によそへて、もちひ十六、あるはこのみもその數にとゝのへ、もゝとりのつくゑものをいとなみ祭らるべし。さらずば主上の御身の上、まいてさもつかたは重きなやみあるべし」ともの給うしより、めでたき御事とて改元あり。嘉祥と改めさせおはして、六月十六日になむ、その事いとなませたまふに、その年民安く國ゆたかなれば、この事をつとめての年も、猶又行はせ給ふ事なるべし。大かた後には嘉祥の祭といへり。かやうの祭は、そさのをの眷屬の神を祭らるゝ御事、むくつけき御眷屬、かゝる山里はとはれずとも、門さして老いらくを過さむには。

七月文月

せこがころもゝうらさびしきに、秋風吹きそめ、荻の葉もそよさらにをり知り顏にうちなびきて、ゆふべゆふべは螢みだれ飛び、思ひさうせむと悲しう思ひなされぬる同じはゝきなれど、とのもりの朝ぎよめもけさよりは露けくなり行けば、玉はゝきと物せし昔の言の葉も、折ならぬねざしいとあはれ深し。七夕の祭はさせることならねど、京家の女の童のこしらへものする事を、今は上にも見そなはさせ給ひぬ。されど相撲の言ひ入れ、たゞずまむよりは、

つきなくもあらぬにや。廣き御庭に何くれのつくゑもの奉り、いろいろのねがひいと奉るにも、若きめのわらはなどは、後れさきだちてさうぞき集ふに、あるは高樓にてもすそをひきやり、あるはかんざしにかゝりて、袂をほころばせなど、きぬの行くへきたなし。かくねがひの絲よりは、まづこのきぬのねがひをと、絲のみだれ覺束なし。姫蜘蛛とてさゝやかなるくもの、その机物、あるはねがひの絲に、いをひきぬるを圖として、私の願かなへりとすることあるべし。大かたははかなき心ばへにや。七夕といへど、身のうへのねがひかなはぬためしには、一年にたゞ一夜あふをさへ、雨行き雲ほどこし、あるは日はれて逢ふことまれに傳へものせしに、今宵の星の御心づかひ、人のねがひはよも聞き入れ給はじと、ほゝゑむ方もあるべし。なきたま祭ることは、一とせあまたたびあるものから、わきてこの月の祭は、年の終よりもいや添ひて、悲しう思ひなさるゝに、百味のおんじきとや、いろいろのこのみ、あつもの調じて、梶はちすにのせて手向け奉るに、秋風の名殘悲しう吹きさそひたる夕暮のよゐの僧のつとめの聲など、折からあはれ深かるべし。都のよしかと聞えし人の古墓記にも、「凡情の愚なるは、雞牛犬馬よりもおとれり。たゞ世路につかはれて、まどひの上に醉をなし、ゐひのうちに夢をなし、夢のうちに死をなす」とか物せし如く、誰も誰もやがてたまになるべきを、我は人を祭り、又祭らるゝことわり知らぬ人情のあさましさいふも更なり。北斗に火を手向けらるゝなど、都のうち山々、ことやうの見ものなりしか。年々に行はるゝ事なれど、わきて珍らしく思ひなされぬ。こゝの山里にても、猶このことわざはまねびて、里のあげまき

いとみなすもをかしかりけり。かやりふすぶる賤の女も、すゝけたるはだへこぞりつどひて暮れわたる頃に、あかしといふものもなくて、暗きかたに松のはしともしなどして、かれいひくひちらし、いひしらぬおどろおどろしき、鹽をくひものにすることよ。思へばかゝる山里のすまひは、これをも玉のうてなとやは思ふ。このすくせだつものゝ、ゐなかはかうやうにこそいづちもあらめ。我が衣手は露になど、悲しうおぼしやらせ給ひ、寒き夜に御衣をぬがせ給うけむも、ありがたき御心ばへなりしか。大かたは、さやうのとぢめまれなる世にしあれば、やんごとなきあたりに、見せまほしうこそ。さなればこそ、しゆんすうとて、から國の帝、しばしば國のかぎり、めぐり見そなはせ給ふなり。今のみかどまさにさあらむや。たゞ鑾輿屬車に國の粟をつひやし、宮殿樓閣のちりをなむ民のあせにて洗はせ給ふ。あさましき世の中、松の思はむこともはづかしうこそ。

八月（イ卅八）

くさむらの蟲の聲々も、枕いざときよるよる、月は有明までくまなき空なるに、はしゐのこすたゝみあげ「香爐峯の雪ならねど、月にも」などひとりごちて、松風の色吹きおくる、夜半のなか空いはむ方なし。おもて白う思ひなさるゝに、後れしかりの飛びちがひたる、思ひ盡きせぬ世の中など、これをさへいとふかき身のたねにとりまきたり。白妙のきぬたうつべきなにがしのわたりならねど、こゝには杣のよ籠めて、うつよきの音も、丁々として悲しう思ひたるに、いけるを放つ御神わざも、このごろにおもひなされ、氏の公卿の家の内、思ひやる

もむつかしかりぬべし。このいけるをはなつといふ事、昔この御神（神宮）のいろはのみこと、いみじうめの神（功后）なれど、心ざしおもおもしうて、あまたのえびす、三つのから國のうちに、あるとあらゆるを平げおはして、その國にてきりとり給ふえびすの耳を、ことごとくこの國に持たせおはして、八幡の神にもみそなはせ給うて、筑紫の前田といふ所に大なる墓をきづかせ給うて、きり耳といへり。今はあやまりてきりみたといふなるべし。さるによりて、その功徳など思しめしけるにや、後に御託宣ありて、いけるをはなつ神わざは始まりけるよし。それはさる事にて、宮のわかうどたち、きさいの宮あるは内つ宮の仰言にて、内野、鳥邊野、みくるし野などくさぐさの蟲えりとうでゝ、それかかれかと奉るに、なかはおどろおどろしきも聲の限をつくして、をかしきもあり。又なりは美しく、玉蟲などいひていみじけれど、きりぎりす、はたおり、こほろぎにさへ劣りて、聲たてぬもあれど、この蟲はやんごとなきさちあるものにて、宮のさうにて、何くれの御局にも、御くしげの中白ふんのなかにまろびて、からは人をさへ野邊にふてためるならひなるに、十とせはたとせの後までも、御ものゝなかにつゝませ置かせ給ふことよ。かうやうのものら雲ゐにまうのぼる、昔の賢き人は草を耕へして位にのぼりしをさへめづらしうありがたき事にものするに、これはやうかはれり。又淺茅が原の露深きわたり、妹が門さしこめて語らふ頃、すゝきなど生ふべきくまになき出でたる、昔物語めきて、あはれ限なかるべし。いつはあれど、この月の隈なき空には、あるは南西のみかうしとりやらはせ、御酒奉る限は、醉の中に秋を忘れ、嵯峨野、廣澤、大井河のなぎさ、志賀の

山越うちたどりつゝ、さゞ浪にきそふ影を汲んで、漢家二千里の外のいつゝのうみを思ひやり、くらぶの山もとぼしなくしてなど、心々のながめすさみはあるものから、わきてさすらふるも一つのさちにや。須磨、明石、難波、有馬の山住、ゐな野笹原さらさらに、都の内よりも遙けくまさ(行ウイ)ぬべき秋の夕暮なり。淡路島山の月のいろは、「金をして北斗をさそ(かさ)ふるが如し」と屋房(恐居易)のぬしの物せしもさる事なるべし。今宵の空をめで遊ぶ事、孝元のすべらみこと、もろもろのかんだちめ、ふみのつかさ召して、歌よませおはしましゝよし、國史に見えたり。しか後は、くれたけの葉にたえず、にひくはまゆのいとのつゞけるがごと、すべらぎより始め奉り、わらぐつをつくり、笠を手して捧ぐる下人までも、歌をいふことになり、山のましら、海の底のはげしきうろくづも、今宵の月にあくがれぬる事になりぬ。しかあれど、今の世の中、「三十一もじのかずまへ、あさかやまの跡をたどり、「出雲八重垣のへだてなきどちも、たゞよき歌をつらね、一ふしにかどだちをも、我が歌のみ善きと思ひよりて、よそのはまれはいひけち、書きけしぬる世になりもて行けば、たまたましきしまの家に生れ、心の外の感應をよみても、やがて事もなきなど評しあひて、あまさへそのおもむきをとりて、みづからの枕ごとゝすることよ。大かた世の中も末になりたるにや。この道の神おはす事ならば、さはあらめといへども、むかしも紀の友則が、ふけゐの浦の友鶴を、宮のごにとられ、小式部のかんの君は、いく野の道をたどるやうに、なかのものまうしにうたがはれしかし。たゞ世を安らかにかきこもり、人とはぬ草ふかき明暮に、目に見、心におもふことを、岩が根にかたり、

山の鳥のさへづりにこたふるばかり、心慰むことはあらじかし。

九月（傍九 イ）

錦色どる野邊の萩原も、つゞりのきぬの名殘つれなきまでむらがれゆき、蟲の聲々かすかなるやうに聞えなし、外面の鹿のこゑも、妻とふにはかれがれなり。嵐にきそふ峰の葉の雨、枕になるゝなること、そほづの音、又玄の丶めもはがらはがらともせぬ窓に、からすの世をすてにたる衣のすさうさ、むれゐる雀はこゑのかしがましきさる事にて、かゝるかたはへの軒をも朝げの（以下十行イ無）空より月はそりて、塵などうち亂して、うるさき鳥なめり。されど心とき鳥にて姿ひいて山里のあそびがたきには興あるものぞかし。菊はその名くさぐさあれど、そがひに立てる曾我菊など、そこらけき色あはひは、帝の御目にとまる御事よ。櫻はならの帝の御惠・に物せしかども、ことやうの花の中には、後れて咲き出でぬれば、をとうとだつものから、草の名も神さびて、おくなぐさとか、濱成のおもとはもてあそばしき。八日の夕つ方より、くすりのつかさ露をつけて、みやのうちのかんづかさに傳へて奉れば、藏人頭かめにもりて、露ながら奉り、つとめての宴に、めでたう逢ひぬるもやうかはりたり。れきけんのためし、やんごとなき花なれば、ひともと一つの花のふさにさへいはとせの齡あるべきに、數多の御園生には、限なき御齡たもてれば、やはとせを保てりし翁草、遼東のゐのこの子はづかしかりぬべし。ぐみの實はもろこしにても藥の（公より以下十行イ無）御みきに仕うまつる事なるを、こゝにもあるためしにて、多くはやまあとの添のかみの山より奉れるを、國の守の奏にて、くすりつかさお

もどくすしゑてなりぬ。この頃は、小一條の御さうぶんの里より奉り給ふ。ふだらくの寺よりも奉りぬ。やけのなどもあるべきにや。菊の錦つくることは、くらづかさのいうそく知れることなれど、さやうの事今は知れる人なければ、かたばかりありぬべし。菊のみきは、よべつけたる露を雫ばかりませさせ給うて、きこしめし給ふめる。仙境の藥酒をませさせ給ふなるべし。好まぬかたは、皆やくしの印相を結んで、雫ばかりいたゞき、こゝろむるに上戶はまがりして、いくたびもかたぶければ、後はいつか千とせを、我は經にけむやうに、あとさき知らで、その日は高欄のかくれなどにうちふして、はてはあさましう醉ひなきひとりごちぬ。酒はうれへをのがるゝものなれど、罪の深さいはむかたなし。十日あまり一日の日は、伊勢の御遙拜のかうがうしさ、涙もこぼるゝばかりかしこまりふかし。御一人の御こり奉らしめ・給うて、いみじきみまし、かにもりのつかさてうじて、きよらなる御神わざぞかし。もゝとりのつくゑもの、御ぬさなどとりどり奉らるゝに、つくゑものはくらづかさ織部のかみ奉る事なるべし。十五日のゆふべは、祇園より紅葉のぬさ奉れば、三綱の僧、ほふしまらうどのつかさのかんにつきて、くらづかさの祿たまふ事、ごうれいのことなるにや。そのぬさは、大かたは內侍のあづかり奉ることゝなむ。二十日あまりになれば、こゝかしこの峯の濃き薄き紅葉なにくれの色草、わかでたちのさとざとよりとうでゝ、宮々の御さうじに奉らるゝことにてさしくみにこそ、心づからもやさしういうにも覺ゆれば、はてはみかはみづにながれかゝりて、おほくはたちぐちのあたり、むぐつけう見えなされて、つもれば水もせき入れて、をかし

からぬ龍田川なるべし。すり么きのはら悪しきかぎりうちふゞきて、「そのなにがしのおとのやかよう奉る事よ」などつぶやき草にのみのゝしりぬれど、きこえむとも思はず、おほやけに仕うまつる人は、高きもさはれ、賤しきは心ぐるしきこと、あらましの外の心づかひもあれば、大かたはたゞ知らぬ國にさすらひ、やまがつのちりに身をなすこそ、世をいとふはいなるべしと、言ひけむ人もありぬるかは。

十月

岩根ふみかさなる山も時雨にかくれ、外山のまがかさき色になりゆくより、うきを思ひの草むらはなはいや添ひつゝ、歎きおひそふ老曾のもりも、枕の山にはたゞよそならぬにこそ。まいて櫻、梨、楓の青葉の梢を、ねたうもかこち、からくれなゐに水くゝる秋の夕暮、言ひ知らず千々に悲しき秋なりけるも、いかに心なき木がらしも、さはいへど名ごりなく、今年は例よりも、蜘蛛のゐをだに殘さで、よし時もこそあれ、さし給ふとや、いかめしう、唯松のみ千年のみさをあらはし、色は六位の袖に思ひたどられて、秦のゆるし色とはいへども、さもなきつらだましひ、かへりては、佛の御心にもたがひつべく思しなされ、もろこしにありけむ、よはひ千とせを保つならはし、人のみものおぼえぬ。はかなき草の種、花の露は、世にながらへはてぬ人にあはれと思ひなされ、そのものにおけるめいぼくもあるべきに、鶴といふ鳥は梢もおほかるに、この千とせをふる枝になれて、やんごとなきためしにもてかしづかれ、子を思ふ夜のあはれなる聲々、いへばいみじうあさましきものから、ことぶくやうかはりたる

つばさなるべし。ほとゝぎすは夏のみ飛びものすれば、やまともろこしにももて興ずれば、鶯はのどやかなる軒端になれ來て、高きにうつるいきほひもやんごとなし。雁はとこよを知りて行き通ふ、いづれもいづれも、哀にをかしきふしを添へたるものゝ、世ないとふ老いらくのねざめ、鳴かずとはずともとむくつけし。ましらといふものは、常はさることにて、けうとき山路に、いくらこゝらもすたきゆすりて、法の師のおもひの珠をつらぬきたるが如し。まいて雨なんどうち降りたる夕暮の聲、何心なきやまがつも、はらわたをたうべきぞかし。心ときものにて、いほりにはいつもなれ來て、經なども讀みつべし。物のたづさふべきは、手にかなふまゝに、花ざら、わか桶などはもてきぬ。えせたるけものぞかし。聲々志きるうしみつ頃ほひ、木の葉まれなる梢に高くさしのぼる月のかほ、まことに今も守られ、古人を見るこゝちして、はだへも毛立つばかりかなしうイきわけぼの、心あらむ都の友なつかしうおぼえぬ。さるにありわけの影の、つれなき松にかゝりてよし。さは詠めすてゝも行かで、わかつきおきのゆく手なれば、いつも例にせねど、この長月はなど木枯のきびしう吹き、おもてもうつばかりわてたる名殘に、かのみさをの枝も吹きさそひて、月ははれやかにまゆずみ細うさえたる空、菅三品の「殘月一弓懸」といひし昔のねやのうちゆかしかりぬべし。月こそあれ、神無月とか、淋しげなる社のあけの玉垣いかにぞや。この頃の荒れたる風の心ばへ、千はやふる神代もかくしありぬべし。古き文には、「風立つ我が神山のふるきねぎくさは、いつもものせしは、神は陽の精神、鬼は陰の精魂なり。この月は一陽もあらで、つとめての月より一陽

來復の徳をあらはせば、陽神のおはしみそなはし給はぬといふ心ばへ、神無月といへるなるべし」となむ。深く神秘にせしことよ。思へば我が神つ國の道は、くらぶの山に宿りとるばかり心のおくに籠めぬるならはし、言へば更なれど、思へば思へばあさましき神垣なり。神明は、日の神のみさを顯はし給へば、その神の御けんぞく、いづれか私照おはしまさむ。大明の御心は、やんごとなきは更にて、賤のをだまきいやしき民草、有情非情ももれぬめぐみをもてこそ、神明の志ろしめすを、我が神つ國豐葦原ともいひつべし。志きなみよするかたくにのうまし伊勢の神風はさは吹き傳へおはせしを、さばなす惡しき神、螢火の如くかゞやく影に、かくろふとしもなき翁すら、このことわりは志りくめなはの、すゑとはらぬまでも傳へものせしぞかし。たらちねの親、うき世にものせし時、藤大納言の御すゝめにて、神の代の卷、そこはかなることはあらねど、志ばしがほどよみためりしにも、おほやうはその心ばへと聞き奉りしかど、今はなき數にものすれば、たゞすがたは春の草にあらなれ、面かげはさゝやかなるそとばに立ちそひ、朝な夕なの涙のたねに、讀みかはれることよ。我もたが涙のたねとか。

十一月

ふくろふの聲すさまじかりける、松楓の枝も霧にわつこえ、きつね、やまびこの遊びかけりし、らんぎくのくさむらも霜白うおきわたして、所々の山里のたきびも、見る目さへあたゝかげなり。澤田の面はいつしかに、大路のやうに行き通ひ、池の水鳥うきねの枕、いたづらに

見なされ、宇治のあじろに時を得てなむ小野の山人もいとまなきころはひなり。このごろはおほやけにてもをこたらせおはしたためる折ながら、さはいへど、伊勢の大ぬさの告文、すはのとしみの祭など、このごろのやんごとなき御公事ぞかし。御たましづめの祭はかんづかさ岩かみの御門まうでゝ、すけより下つ方の神人をひきぐし參れば、すないものまうし宣命奉り、くらづかさどころのしやうなふ、大外記、官務も仕うまつり、大ものまうし、中のものまうしたち、おとゞはさることにて、着座そなはり、いみじき御神わざあさましきまで、日の本の道のかうがうしさいはむかたなし。七百あまり三十もじ、七くらの御神にも、行く手のぬさ（二字缺）奉らせ給へり。この御神たちは、八神殿ともの申し奉りて、かんみむすびの神、たかみむすびの神、足產靈神、生產靈神（八字缺）、大みや姫、みけつの神、ことしろぬしの神、たかむすびの神など申し奉りて、やんごとなくもいやしくも、祭りみそなはさるゝことなり。とよのあかりの御せちには御神樂とて、めでたきおほやけごとなるに、才のをのこのかうがうしき出たち儀式官のひちもちのいかめしきものから、さくら人あさくら歌ふ聲も、雪をふくみたる舞人のよそほひ、さゆるよはの空は、さらでも神わざはあはれ深かるべきに、いみじうあさましきまで神さびたり。明けゆくまゝに、みあかしらかのともしも日のにほひにとられ、たきすさびたる衞士のたく火、さびしう見ゆるものから、ひんがし山、西山物の隈なきはづれはづれより見えて、山は鏡をかけたるやうに、雪も朝日に光りわたりて、そゞろ寒き朝けの空なり。こゝら行きかふ人のかほも、よべの事にたづさはり（二字缺）限思ひやられ、目まみもはれて、しばら

しうちかたむきたる、かぶしかたちをかしきものから、いひしらぬ柴のあみ戸の明けくれはいぬべうおもはゆれば、いく夜のかぎりなうぬるよがちに、又えんなる夕暮はうそぶきわたり、あるはたきびにこし方のうさ忘れぬべし。清少納言のおもとの、木のはしなど思ひくたせしさもんのあけくれは、おほむね國をまつりでち、家を治めぬべき材木のうつはにも、たのしみはまさりぬべうこそ。ひぢをまげても、枕の夢のたのしみはありぬべし。まいて後の世のありがたきすぐせ、たれかたのしみをあまなはむや。なかなかいろ深うもゆりぬうへのきぬ、さしぬきの腰かろげなるきんだちも、佛につかうまつらば、墨のころもはかずかずに、心はやくだりぬ。たれて（元如）もあさましからず。さいへども若き時はつかさのぞみ、高き位はねがひつべし。唯よはひをかさねてのみ、たふとかるべきわざはあらじかし。人はさらなり、はなたる馬は雪にもまどはずと（無）さい、年ふる宿の犬も家まもる事は、ゑのこにまさりぬべし。若き時は心淺く、血氣さかんなれば色深く思ひとり、さらぬにはひにもうつりやすく、女の色にめづるはさるものにして、のちはをゝしかるものから、いとなきちでにもふかう心をやりぬ。ひえの山ずみ、さうの岩屋のひじりたつものは、女にうとければ、むろの戸のすさみともなるを、おほやけに仕うまつり、さえもつべきわかうど、ふるき人もすきずきしきは、この色にまよひぬ。妹背の道は神のいさむるならず、千早振天の浮橋のもとにてものしたまふことよ。いへばさりぬべし。このひとつの外の色は、唯ざかりも久しからず、契の深かるべうもあらぬ事なるを、いひしらずもすけるあいなさ、いはむかたなし。かへりては、佛の御つみおひ

ぬべし。いときなき心づからは何かは思はむ。かたみに色にそみなさけにめでゝこそこの道の迷は重くも深くもあるべし。たゞ何となきちですがた、さこそいへ、心はたゞなほにこそ思はめ。こゝはさることにて、心なきあづま人のならはし、ものゝふの住めるくまぞ、八島の外までも、この道を知れることのあさましさ。いかなる風の廣めけむとをかしきものから、思へば思へばおもはむ子を、さやうのけしきばめるあたりに仕うまつらぬぞよき。唯となりをかへ雪をあつむるなむまことの教、いとほしたつ子にはをこたらじかしとぞ。志かいへども、親の心ばへ、はゝたるはなほ髮めでたう眉みどりに、めにて見まほしうおふし立てゝ、志がくなどにもこしらへ出し、あることとぞともなき大とのゝあたり、高欄になみ居たるを、あが神とまもり居たらむべき、やみのうつゝはにくからぬもことわりなるべし。とにまれかくまれ、世をのどやかに思ふあたりは、喜びかなしみも、早うゆきかふを、さは志らで、唯にはかなる世のつねなきなど、さだかなることわりを、心ねたう恨みかこつべきは、罪いとゞ重くこそ。岩がねを志とねにして、志づかならむには。

十二月評

あやしう色も香もなき山里の冬のけしき、春は花に身をなしてさまよふ人もこそあれ。それならでも、青葉に春の面影を志たひ、ほとゝぎすの志のび音をたづぬるとて岩のかけぢを踏みならしても、秋は千さとの外もと、月にあくがれ紅葉にめづるもあり。山路の菊を、かごとにみきあたゝめて「鹿の鳴く音を何よけむ」と一つ聞しめしたるなど、折につけたる所の、い

ともこのごろはなかなか絶えて、まどをうつ嵐のひまには、里の童のよこなまれるさうかの聲は、耳ならはしの、つまぎこる賤のめの折ならぬゑみの聲、臼のほどむくつけう思ひわたさるゝのみ、山里のほだしなりけり。さいへども、都の内は年のいそぎも、こゆるぎのえにしあらねど、この日ごろは、もゝしきもかずまふべき人はいとまなうこそ、さこそいへど、御佛名經よみたつる、所せきまで法師のゆすりて、三ヶ日の内の御はふはふ（元如）しき御公事、いへばいみじき御事ぞかし。心あるかぎりは、百しきの内を、さらでも心に世をのがるゝを、さは侍らぬぞあさましきや。このおくなとあらむに、ささにのがれてむやと、思う給へられ侍る。けふこの頃は、こゝかしこのせさうもとゞめられて、宇治のひをも心よく水にゆするゝ。船岡のむら鳥、きんや、かた野、さがの野、うだ野のきゞす、たづ、もろ鳥もつばさかろかに思ひなされ、よど鯉の波のうきねも、いひしらぬ寢覺やすかりぬべし。世はとことはにかくこそあり（脱た歟）けれ。やがて御佛名の終には、法界のために、御うへにも、みづから御口に御名をのべさせ給ふありがたさ、かゝる佛の御國にあるべきぞとは、本意あるものから、さばれこぞまで、このみのりに逢ふとものせし法の師さへ、今年はその數にとなへ入れられぬるはかなさ、唯水の上のあは、石の火の光に似たり。かしらの火やらはぬ世の中、はやつとめては、又荷前の御事とて、かなたこなたにおはきさんつかひだち仕うまつらしめ、その人がらえらせ給ふに、まづ上達部より非參議の四位までも、とゝのへこゝろみ給ふなるべし。十陵八墓にぬさ奉らしめ給ひ、もゝとりの机物仕うまつらせ給ふ。御みづからの御しろづかさ、定めさせ給ふ御

ことなるべし。やうやうみたまのふゆも深うなりゆけば、何くれ御つかさ、ついなめしの除目にあひぬべき家々は、申しぶんと丶のへ、草書外記史たのみこしらへわたりぬ。八幡松の尾よりかざり竹奉りぬれば、やせ大原の民草、しりくめなはこしらへてつかうまつれば、とのもづかさ、をさめどの丶つかさなどは、「今年はあらあらしうつとめぬなぢらが身あさましかりぬべし」などいひの丶しることよ。松はいつものがみあれ山より奉れり。松竹を立てらるる事は、欽明の御世より始めさせ給へり。松は千年のよはひを保ち、竹は緑の操をあらはし、節文をそなへて禮にかなへれば、年のはじめに立てつかうまつらせ給へりとぞ。それはさることにて、はかなき草といへど、それが中に、ゆづり葉、しだ、はながせりなどいふ草は、御いきふれさせ給ふ。御はがためのもちひにもかずまへられ、中にもせりは御かいもちひの中までつかうまつりぬ。しだ、ゆづり葉といつかへども更なり、まめ、かどのうを、おこ丶ろふとの御まはりの下にしかれて、うへはさらにて、しもうつ方あやしき民の戸も、このことぶきをこふる事、からがらしき春なるべし。ひとの國にはか丶るためしもなきにや。ついなの夜は、をけらのもちひ、つぐみの鳥など焼きて奉り、御かれいひの御まはりに奉れば、これももの丶け、えやみやらひぬべき本文侍るとなむ。いわしのはさみ物、ひらぎのはこは、なやらふ家には百數ならでもある事なれども、殊に大内にはかにもりいつかさ例としてつかうまつれり。このなやらふ事はもろこしにも侍れど、別きて我が御國は、かみたけのすべらぎの、六とせの春よりものし給ふ御事にて、いみじき御ためしなり。ひ丶らぎは我が神の社のあるが、み

そろの池のあたりより奉る事、定まれる故實となれり。大年の夜は、をかみ草摘むとて、高き屋にのぼりて、みのかささかさまに着なして、明けの年の運見る事とかや、諺語抄に見えたり。長々しければもらしつ。つとめての年は、かりそめに唯いふひとふしも、やんごとなくことぶきて、伊勢、加茂山、野の宮など思ひやり、深うたどられて、いねておくをもいねをつむといひ、又ぬるをもたはらかさぬるといひ、もちひをかゞみといひ、泣くを若水あぐるといひ、打たるゝをこゆるといひ、かれいひをあしはらなどその外何となきそゞろけきことぐさは、やゝ跡なき御局のうちより、まかなひとうでしてことなるべし。一夜の[闕一字]からとはいへど、おなじ天つちもかはり行き、朝日のにはひさらぬてうど、身のうへのきぬらまで、春のにはひにうつろひ、心は唯二十ばかりも若やかに、我も我も思ひなされ、人もさ思ひぬべし。されど一時は更なり、一せつなともうつろふほど、死のちかめる事を知らで、かへりて又冬のあさきころより、春の行くへを待ち侘び、梢の雪を花と見まがひ、軒のすゞめを谷の戸出づるうぐひすかと思ひたどりて、ひとゝせをいそぎ、急ぐべき死のいんえん、一大事のつとめはいひしらず、となりのかたのてうどのうちのやうに、思ひもよらぬ人の心ゝ根ざしあさましさもさこそいへど、神佛はこれをあはれともおぼしてむかし。翁がかく手ならしたるしらべも、言へば一つのくせなれど、これをろうしては、志はそはざるべきもあらず。たゞ悲しき事も嬉しきもこし方ゆく末も思ひ忘れて、一とせの名殘も思ひわかで、窓然たる一曲のおもだゝしう、心にまかせぬ事のみにて、つひにはこの琵琶にのみ、身をはふらすこととよしとやい

はむ。わしがきのへだてなきも、この山里に、物せねばいかゞは侍らむと、こたふるものもなし。神代には、草木もものしいふを、治まる御代にそれもなければ、谷のながれ、山のわらしはとへどもこたへず。まいて身にそふばかりの我がはかなきかげ何とかゝ怨たむ。壁にそむけるばかりを、明暮の友とこそ。

四季物語 終

艶詞

あらたまのとし月をおくりむかふるにつけて、おもふことなきにしもあらぬ身の、人しれぬこひぢにさへ思ひ入りぬるよしなさを、こはなにごとのありさまぞと思ひあまりのなぐさめに、昔のあとをたづぬれば、ちはやぶる神の御代よりみとのまぐはひして、妹せを忍ぶこと絶えずぞ有りけらし。それより此のかた、もゝ世をへて、鳴のはねがきをかぞへ、千束まで錦木をたて、ふじの煙を我が思ひより立つかとおどろき、清見が關の白波は袖しの浦より立ちにけるかとぞさわぎける。芹つむ人も、つりするあまも、わぎも子がために心をつくすといへり。業平の中將は「我が身一つをもとの身にして」と悲しみ、敏行の兵衛のかみは「夢の通ひぢ人めよくらむ」と恨みたり。「みわの山本いかにまち見む」はいせのことばなり。「色見えでうつろふものは」元如小町が思ひなるべし。さぞな昔の人だにも、かゝる思はわりわけと思ひとれどもとられねば、過ぎにしかたよりけふまでに、つきぬおもひのかずかずを、もしは草かき集め、さゝがにのいとはしともやいふとてなるべし。

「人しれずうき身にしげる思ひ草おもへば君ぞたねはまきける」。

ぬれにし袖はかわくまもなく、またの春秋ゆきかへるぞかし。さゞ浪やあふみの海のみるめなぎさにたどり、又月日のかずはつもれども、いや年のはにおき所なく、せきがたくて、忍び

もはてずなりにしを、袖に涙のかゝりけるちぎりのほどを忘らずして、わりしその夜のわりわけに思ひしことのはかなさを、

「きのふまで恨みしそでにけふよりはわふられしさをつゝみけるかな」。

その曉ともだちにぐして逢坂の關よりほかへ行きたりしに、これのみ心にかゝりて、急ぎかへるとて、

「都へとはやむるこまのわしごとに其のひまもなく人ぞこひしき」。

關ぢのには、鳥もなくほどに、逢坂山をうちこゆれば、近くなりゆくはうれしけれども、さしも人めをつゝむ中なれば、あひ見むことはいとかたからむとかねてなげきしに、

「いそぎてもかならず人に逢坂の關にしわらばうれしからまし」。

わふまでこそ思ひもよらざらめ。ひとこと葉のひまだになければ、せむかたなくて、

「えぞいはぬ思ふ心は忘げゝれど夏野のすゝき忍びやかにも」。

さすがにわさ夕は見ることはひまなけれどもそれしも中々なる。忘らずがはなる忘たの心、思ひやるかたなくて、

「夜とともにわれにはものを思はせてさのみや人の忘らずがはなる」。

わながちに恨むれば、こよひはさらばたちながらとちぎりて、暮をまつ久しさは千世ふる心ちしてまちえたる心のうちのやるかたなさはいひ忘らず。夜ふけ人忘づまりてのちなれば、月西にかたぶくを見るにつけても、かきくらす心ちしていとたへがたし。ぐしたる人いかに

や、あけすぎぬるよしつぐるに、いそぎかへるあさましさ。
「まよひぬる心の内のくらければあくるも志らずけさのかへるさ」。
かくて月日も過ぐるまゝに、せむ方なくて、
「さもこそは身にあまりぬる戀ならめ志のぶ心のおきどころなき」。
おもひのあまりに、なにとなく口ずさむを、あはれとやきゝけむ、手ならひに志たゝめけるを、人とりて見せしかば、さすがに思ひけるとうれしくて、
「なにとなくいひし心をかき流すそのみづぐきのあとぞうれしき」。
見ることとてそなけれども、おもかげはたちはなれねば、
「たちかへる君のおもかげやがてさはのちの世までも我にはなるな」。
ひるとてもわするゝ事はなけれども、おのづからなぐさむることもあり。くるれば世の中も志づまり、又まどろまむとうちふすをりは、さまざまに思ひつゞけられて、かくてはいかで世にもながらへむとおぼえて、
「君がこと思ひふするの床なれや戀しかりもにかくはこひしき」。
ひとかたならずところせき人のありさまかなと思ひつゞけられて、
「いつとなく君にこゝろを筑波山このもかのもにものをこそ思へ」。
いつとなきくるしさを、あぢきなくあんぜられて、
「あづまぢのすがのあら野の初を花いつまでものを思ひみだれむ」。

ひまもなく戀しきまゝに、涙のおつることやむ時なければ、

「みさごゐるとしまが磯のなみだにもかけぬ折々ありとこそきけ」。

かりそめにまどろみたりし夢に、たゞあれいかにもしてあひみむといふと思ひて、うちおどろくまゝに、いとかなしきことかずまさりて、日ごろよりげに戀しくて、

「うたゝねにみしよの夢やひだりなはうちはへてのみ人のこひしき」。

人あまたある中にても、めかれせずまもらるれば、人あやしとや思ふらむと思ひしことを、

「つくづくと見るに心はくれはどりあやしと人のめにやたつらむ」。

たまたましづかなりしひるつ方、たちながらものいひし所へ、人の來りしかば、あやしとやみつらむとわりなくて、

「よそながらふれつる袖のうつり香をかさねてけりと人なとがめそ」。

若き人々集りて、よそなるやうにて物語などずる程に、忍びかねたる心の中、色にや出で、見えけむ。硯をひきよせて、ちかの鹽竈とかきてなげおこせたりしことの思ひいでられて、

「思ひかね心はそらにみちのくのちかの鹽がま近きかひなし」。

四月みあれの日、人の使にてたちながらあひたりしに、「今はこの世を思ひすてゝ、いかならむ山の中にも行きてもろともにあらむ」とかたらひし時、髮につけたりし葵をとりて、「これはなにぞ」ととひしもわすれがたくて、

「しるらめやせめて葵のかたければなほだにたどるけふのかざしを」。

みづからとらせたりしかへりごとを、もとゆひのやうにひき結びて、「これはたがぞ」となげおこせたりしは、うれしながら胸うちさわぎしことを、

「うれしさをいつかわすれむ年ふりて我がもとゆひに霜はおくとも」。

さしも忍べども、いかでかもりけむ、人きゝてけるを、あながちに歎くもことわりにおぼえて、心ぐるしさいふばかりなくて、

「おぼつかないかなる風にちりにけむたれも忍ぶの杜のことのは。

かくて忍ぶもなほもり聞ゆるはよしなし。心のうちのしるべにてあらむといひしも、今は思ひたえなむ」ときこゆれば、

「いかにせむこゝろ一つのかよひぢもはてはなこその關となるらむ。

今は文をだにかよはすまじければ、此のたびばかりぞ」とてこまかにかきたるをみるにつけても涙とゞまらず。

「このまゝにたえてもいはぬ色なりとそめにし心おもひかへすな。

かく苦しきことになりぬるは、我やはあやまちたる。みのとがにてこそあれ」といひしかば、

「なさけなき人の心ははかなくてさのみはいかゞ身をうらむべき」。

あながちになげくをあはれとや思ひけむ、「さらば月に一たびふみばかりをとらせむ」とたのめしも、空しくてすぎゆけば、

「たのめこしその月なみも過ぎにけりかきたえぬるかみづぐきのあと」。

うちやすむ間もなく、たちまどりたるくるしさに、かゝるもの思ひをさへうちそへて、かなしさおぢきなさ、

「つきもせぬ身のくるしさにうちそへていとかくものを思はするかな」。

かゝるものおもひに、身もかげのやうになりたるも、をしからぬみなれども、思ひつゞくればながらへてこそまれのひまも見めと思ふをりは、命もをしからずしもなけれども、くすしに見せでやかむとするが、さすがにおそろしければ、

「いまさらにやくとも何かをしからむつねは思にもゆる身なれば」。

かくてかきこもりたる心の中は、きしかた行く末思ひつゞけられて、まぎるゝかたなくわびしければ、夜もすがら目もあはぬまゝにつまどおしあけたれば、二十日あまりの月くまなくさし入りたるにつけても、なぐさむ方なし。をりしも文などもて行きしも、人もなければ、いづくにあるとだにきかでかへる心ぼそさやるかたなく、月の光はゆかぬ所なければ、こひしき人のゆくへもしるらむと覺えて、

「我がおもふ君があたりは月やしるかげのいたらぬくまもなければ」。

しづかなりし夜、つくづくと思ひし心の中は、

「人しれぬ戀のすみかをたづぬれば我が臥す床の上にぞありける」。

白き鳥のとびかふる、そなたの梢をとぶにつけても、とひけむ人の心の中おしはかられて、

「君が宿こずゑにかよふ鳥ならばおもふこゝろを行きてさへづれ」。

しづかなる日、とを見いだしても庭にたま水のあるをみて、
「君こひておつる涙のたま水の行くかたもなき心とをしれ」。
わすれ草といふものゝ、心ちよげにおひたるを見るにも、
「君がこと思ふもくるしわすれ草わするゝことを我にをしへよ」。
豊のあかりの宵、俄にもえ出でゝ内わたりもまぢかきほどなれば、人々あつまりてのゝしる
中にも、此のことのみ忘れがたく心にをこたらねば、われながらあさましくて、
「もえまさる煙の中の心こそ時をもわかず身をこがしけれ」。
そのしたしき人をみれば、哀にむつましくて、
「むさしのゝ草のはむけぞむつましき若紫のゆかりとおもへば」。
八月十六日のこうまびきの夜、ひきわけに院へまゐりしかば、月いとあかくて、さらぬだに
なぐさめがたきをりから、いとせむかたなくて、あとにひかせたる駒をみて、
「けふやさはうらやましくも逢坂の關をこえけるもち月の駒」。
かくてすごすほどに、おひみし月日にもなりぬれば、この日しもよそながらおひたりしかた
はらなる人に、「けふはいくかぞ」ととひしかば、こぞをおもひいづるにやといとあはれに
て、
「そのさきはいとかくばかりなかりしをまさるおもひはこぞのけふより」。
そのよいとふくる程に、おひたりし所へ行きてうつぶしたりしに、五條わたりにて、なげき

けむもかぎりあれば、これはどはあらじと覺えて、

「なげきつゝ春やむかしにかはらじといひけむ人をよそにやはきく」。

又其の所に行きて、心をなぐさむるもつねよりものゝ悲しくて、なきふしたるに、袖のつめたくてかほにさはれば、さくらのうはぎ、色かへりて去るからむと思ひわづらふ程に、ある人、こゝをすぐとて「袖にみなとのさわぐかなもろこし舟もよせつばかりに」と何心なくながめてすぎしが、をりから耳にとまりて、

「なにとなくぬるゝ袂におどろかむ袖にみなとのさわぐなるよに」。

すぎにしかたのこと、思ひつゞけられて、

「そのまゝに人も結ばむ草枕いくらかちりの積(如元)はつらむ」。

あまりに歎くを、いとほしとや思ひけむ、「去るべきにてこそあるらめ。たちながらものいはむ。そこにてまちてよ」といひしかば、いとうれしくて、待ちゐたりしかども、ありあけも入りがたになりにしかば、なくなくかへるとて、

「待ちかねてあはれとともにかへりけり涙はそでに月はまくらに」。

神ほとけの御あはれみにやありけむ、思のほかに、ゆきあひたりしかども、あまりのうれしさのあまりに、心さわぎして、日ごろのことも、思ふばかりもいはれぬほどに、夜も明けがたになりしかば、ありあけのくまなくたちのぼるかげを、いとまばゆげに行きすぎし姿の、いついかならむ世にわすれなむといふかたなくて、

「たまさかに我が待ちえたる月なればおぼろげならぬありあけの影」。
あまりめづらしかりしまゝに、むげにあさましきまでうちとけたりしことの、いかゞ思ひけむとさまざま恥かしくて、こと人にもかゝるありさまは、いまだ見えぬものを、いかばかりわりなきぞと我ながらあさましくて、
「おしなべてかゝると君や思ふらむあまりなるまでむつれにしこそ」。
あはれこのまゝにて思ひはなちてばやと思ひしかば、
「このまゝに君にこゝろをつくさずてあすよりものを思はずもがな」。
里に出でゝ後、まれにひまありしに、わりなくしてたち入りたりしこそなかなかなりしか。さ夜ふけて人しづまりて後なれば、ほどなくかへるなごりのおほさ心まよひつ。そなたの梢のかくるゝまで、かへり見つゝすぎゆく道すがら、とりのなきしかば、
「うらめしやいつしか鳥のなきつらむいとふはこよひ一夜ばかりか」。
かへるあしたしも、又いつを待つべしともかぎりは中々、宵よりもなほなげかれければ、
「今宵さへしのぶこゝろのなぐさめにけさしもいとゞものぞ悲しき」。
あまりにあさましきまで覺ゆれば、とりあへずものにものらで、かちより行きたれば、例のあはぬものゆゑ、むなしくかへるさのくるしければ、
「たどりつゝかへるたもとにかけてけり行きもならはぬ道芝のつゆ」。
「久しく世にあるまじき夢を見る」といひしことの忘れがたくて、

「後の世を哀と君がいふならば志なむ命も何かをしまむ」。
その後またひまなくて、あひみるべくもなければ、せむかたなきやうにて、そのへんに夜な夜な行きて、かたはらなるふるきいへに立ちかくれてのみ空をながむれば、軒の志のぶの志げりたるを、
「いたづらにたゞずむ軒の志のぶ草なれさへ袖に露なこぼしそ」。
かくは夜な夜なたゞずめども、今はひまもあるまじきに、思ひはなちてよ」といへば、まことに人めの志げさはことわりなれども、又なぐさむばかりのなさけをもかけよかしと、いとうらめしくて、
「もろともに心はかよへあし垣のさこそひまなきすまひなりとも」。
かゝるたゝずまひ、よをかさねてすでせど、ありとだに志られでかへれば、
「いくよへぬあはぬものゆゑ行きかへり道芝のつゆうちはらひつゝ」。
歎きつゝ、「すぐす月日をかぞふれば、ことしもすでに暮れぬ。
「戀ひわびてすぐす月日をかぞふればことしもはやく暮れにけるかな」。
年もかへりぬれば、ことしより思ひすてゝ、身をこがさじと思へども、つきせずかなしければ、
「あたらしき春かへり來ることしもやこぞにかはらずものをおもはむ」。
おもひこめてのみすぐるあぢきなさを、

「いたづらに年ふる中のたぐひかなむすぼゝれたる岩代の松」。
ものへまゐるとて、そのかどをすぐれば、胸うちさわぎて「見てすぎがたき」といひけむ人もことわりにて、
「かどのうちへ思ひ入りぬるこゝろこそ我すぎゆくと妹につぐらむ」。
うつゝになさけなきゆゑにや、夢にもさてのみ見ゆれば、
「などやこの戀し戀しと思ひねの夢にも君がなさけなるらむ」。
かく思ふけにや、此のたびは思ふまゝにて見ゆれば、
「ぬぬる夜の夢に心のかはらずばさむるうつゝもうれしからまし」。
年月つもればやうやう忘るゝこともやと思へども、日にそへて深くのみなれば、悲しくて、
「ともすれば身にそふ君がおもかげをいかにもえてこそ思ひはなれね」。
ある所にて、人のふみをもちたるを見れば、心にはなれぬ人の手にわたるを、つくづくと思へば、おなじ所にすむ人、「それはそなり」といへば、いとあはれにて、うちもおかずまもらるれば、
「一すぢにおなじ流と見つるよりこの水ぐきの袖ぬらすかな」。
ものをへだてゝものいひたはぶれなどするにつけても、うらめしきものから忍びがたくて、
「こゑをだにもの思ふわれにきかせずばおどろくほどになげかましやは」。
なにのまひとかやに入りて、はなやかなるふるまひにつけても、あはれ思ふことなくてかゝ

るまじらひをもせば、いかにまめならましと覺えて、又さしもうらめしくあだなれば、見ることつゝましく、
「ふる袖は涙にぬれてくちにしをいかに立ちまふ我がみなるらむ」。
さてもかゝるなさけなきことは、我ならざらむ人にはよもそれほどあらじをと覺えて、
「なぞもかく我から人のつらからむあまの苅もに宿りせねども」。
思はぬこともなく、思ひつゞけゝるまゝに、かくてすぎむほどに、あらぬさまにやきゝなさむと思ふ悲しさはいふばかりなし。「あらましごとに波やこさむ」といひしも思ひいでられて、もしさもあらばいかゞせむと思ふも、むげにいまいましければ、
「波こさぬさきより袖はぬれにけり思ひつゞくるすゑの松山」。
すぎにしかたのことは忘れず、あんぜらるゝ中にも夢のやうにうちとけにし夜、あさましかりしふし所にしも月なき空のけしきいと覺束なくて、かへるさの道にまよひたりしも、思ひいでられて、
「かねてよりありしまよひに玄るかりきかゝる戀ぢにたどるべしとは」。
いかなることにか、おのづからあひてもめをだに見あはせじとすれば、あやしきものから、むげに心うくて、
「あまのかるみるをあふにてありしだに今はなぎさによせぬ波かな」。
わりなきひまもあらば、いはむといひしほどに、それになぐさみてもすぎしを、

「おのづからひまだにあらば逢ひみむとたのめしほどはなぐさみもしき」。
心よかりし其のかみも、思ひのみ玄げかりしに、今の心にくらぶれば、むかしはものをも覺えで、
「人忘れぬおもひをかけし其のかみもかくやはぬれし袖の涙に」。
わりなくして文をとらせしを、土になげおとしてとらざりしかば、
「玉づさを今はてにだにとらじとやさてこそ心におもひすつとも」。
我よりほかはもの思ふ人は又もあらじとおぼえて、
「つきもせずもゆるおもひや我ばかりふじの高ねも煙のみこそ」。
神のやしろに詣でゝ、みてぐら奉りにしをりも此のこと思ひいでられて、よにむつましかりしかば、神の御玄るしに、これを忘ればやと思ひし心も、いやまさりなりしかば、
「これもまた神はうけずぞなりにける御手洗川の御祓のみかは」。
今は姿をだに見せじとせしあさましさを、
「箒木のありとばかりは見せよかしさこそ伏屋のよそになるとも」。
まめやかに、この思ひのみつもれば、後の世のせめとならむとうたがひなきあさましさを、
「さもこそはいけらむかぎりつらからめ後の世をだにあはれとはとへ」。
もし世の末にひまもありぬべきたよりいでくると、まづ心見るべきを、それも我が身の久しかるべきならねば、

「行くすゑをえこそちぎらね定めなき世に永らへむ我が身ならねば」。

あながちに我になさけをすてゝも、人のためなにかはとおぼえて、

「かくばかり我にこゝろをつくさせて思へば君が何にかはせむ」。

手習したりしはうぐどものおちゝりしかば、なにとなくめにたちて、とりてもちたるにつけても、「返り事などせしこと思ひいでられて、

「いたづらにおちゝる君が言のはもなどか我が身になびかざるらむ」。

そこにありともしらず、姿をも見ず、聲をだにきかずば、中々おもひをこたふる事はありもやせむと覺えて、

「かきたえて行くへもしらぬ君ならばおもひわするゝ時もあらまし」。

此のまゝにはかなくなりなば、行く末あらむこともかたく覺えて、

「たれときみ此の世の中にとまりゐむ我はよみぢにさきだちぬべし」。

あひみぬ事の後まで、心にかゝらむことのかへすがへすあぢきなくて、

「こひしなばうかれむ玉よしばしだに我が思ふ人のつまにとゞまれ」。

さてもわれ　きみにつかへて　こしかたは　はるはみやまの
はなになれ　いまはくもゐの　つきかげの　のどかにてらす
御代にあひて　こゝろゆくこと　おほけれど　かすがのやまの
ふぢなみの　こだかきいろに　ひとしれぬ　こゝろをつくし

そめしより　ねてもさめても　わすられぬ　おもひなるかな
よしなさは　かつみるうちも　むねさわぎ　見ぬまはまして
けふいくか　いつかいつかと　またれつゝ　さるはまたみる
たびごとに　ひとにことなる　ふししばは　はかなきことも
きもぞたゞ　ためしもなきと　おもひしむ　ことのおほさは
なかがはの　まさごのかずに　たとへても　わかずおぼえて
なにとして　かへしもひとに　ことなると　おもひにつけて
なかなかに　つらくさへこそ　おぼえけれ　けふまた見ても
またでひし　見るかひおほき　たまづさは　さらにもいはず
てにふれし　物としなければ　はかもなき　ちりのはしまで
なつかしみ　とりつみておく　かくまでに　たゞあぢきなく
おぼゆるに　みかさのやまの　さかき葉の　みやこのたびに
うつるとか　あめのしたみな　さわぎつゝ　わきていかにと
おもふにも　さわぐこゝろは　おほかぜに　くだくるなみに
ことならず　おもふもくるし　雲のうへに　かよひしみちは
たえま多み　たまたまかゝぐ　ともしびの　かげはのかなる
よひのまの　なごりはさらに　さてしもぞ　せむかたもなき

こゝちなる　としたちかへる
ひかりをも　たれをかまたむ
たちきても　きこえぬいろは
なみだこそ　たもとにかゝれ
やゝふけし　夜半におひみし
いへばえに　たとへていはむ
こひしさの　いろをそへぬる
たましひは　そでの中にや
つくづくと　ながむるこゝろ
さりとては　かみはとけにぞ
みだらしの　みづのながれを
あぢきなさ　さてもかたへの
ちはやぶる　かみのきたのに
志りがはに　そらさへくれし
おくるまを　かれとばかりに
めにかけて　さてだに志ばし
やりすぐる　なごりよいかに

いそぎにも　なにゝかはるの
すさましや　はなのにしきを
ものうくて　ことにもあらぬ
かくしつゝ　むつきとへぬる
そのほどの　こゝろのまよひ
かたもなし　そのゝちさらに
こゝち志て　やがてうかれし
いりにけむ　身にはかへらず
いとゞしく　あられぬまゝに
いのらめと　たのみなれにし
たづねても　みそぎかひなき
もろびとに　またさそはれて
おもむけば　はれぬこゝろを
あめのうち　あまやどり志て
見やられも　たけのひとむら
あらばやと　おもふかひなく
そよさらに　志のびがたきを

まはなくて　そのくるかずに　あかずとも　ひまもとめてむ
あやにくに　とほざかり行く　こずえさへ　ほのかになりし
ほどよげに　そゞろにすゝむ　なみだこそ　せきもとまらず
おちまされ　さてもかゝらぬ　をりをりの　てうはいせちゑ
叙位ぢもく　これらをたより　さならでも　見ましなれまし
いはましと　たゞおもかげの　たちぞそふ　はるになりても
けふははや　はつかになりぬ　わかざりし　たゞひとたびの
ときのまの　それはかりなる　うきよげに　いかにせむせむ
いかにせむせむ。
ふりかすむ雨も涙にたちそひてかきくらさるゝみちのそらかな。
ためしなき心の中をことのはのいはゞあだにもなりぬべきかな」。

艷詞

終

野守鏡

野守鏡上

過ぎにし頃、播磨の書寫にまうでゝ侍りし折しも、人多く參りあつまりて、寶藏の戸ぼそを開きつゝ、性空上人のふるき調度ども取り出でゝ拜み見侍りしかば、ついでもいと嬉しくていそぎ傍にたちよりて見侍りしに、田舍びたる聲のひがひがしきけはひどもして、あれよこれよと騷ぐに、なにのあやめもわきがたかりしを、いそぢあまりばかりなる僧のなまめきたりし、寶藏の中へ分け入りつゝ、彼の聖人の御足駄を取り出でゝ、「かれ見給へ。これこそまさしく佛の道に入り給ひけるあなうらをうけたりしものなりけれ」といふに、そこらの人もげにやと思ひけむ、皆なりをゑづめてとりわけこれをなむ拜み見侍りき。まことしくとりなしいへる心の至りいみじく覺えて、「いづくよりまうで給へるぞ」と尋ぬるに、「この國よりは猶西ざまより」と答へしかば、「入道はこの國にすみ侍りつれど、けふこそ初めてまうでゝ侍るに、國をへだてゝ思ひたち給ひけるゆかしき御志なりや」と申せば、かの僧うちほゝゑみて、「舍衞の三億の家は、佛の世に出で給へることを猶知らざりき。同じ國といへども緣のもよさるゝほどは、さのみこそ侍りけれ」とあざむける氣色、心あるさまなれば、なほかたらはまほしきに、寶藏すでにたてをさむれば、各ちりぢり行きわかれつゝ、ひとり如意輪堂にま

うでゝはるかに見おろせば、山高くかけつくれるかまへ、天にさしはさみ、谷深くおひのぼれる梢、手にたづさはりて、海の面、眼の前につきぬる心ちしつゝ、泪もこぼるばかりたふとくて、つゞらをりの道わけのぼりつる苦しさもおぼえず禮拜恭敬するに、程なく暮れ行く入相の鐘、松風にひゞきあへるおと、いとゞ信を催し顔なり。太山の秋は猶こそあはれ深きくれなりけれと思ひ志らるゝ時しもあれ、「山路に日暮れぬ」と志めやかにうち誦して、御堂の中へ入のあゆみまゐる音すれば誰ならむとあやしくて、正面の柱によりそひてゐたりしを、近くゐざりよりて見侍れば、かの上人の御足駄もてはやしつる僧なりけり。「今は下向志給はむとこそ思ひ侍りつるに、ふたゝび参りあひぬるも、佛の御志るべにや」とかたらへば「げにあひがたきは伴にてこそ侍るなるに、かくまゐりあひぬるは然るべき事にこそ。今夜は通夜の志侍れば念誦の後、心静に」とて陀羅尼よみつるこわづかひすこしかれいろにて、くゆぼりたるほど、いとたふとく聞ゆ。念誦はてしかば、ずゞおしすりて「いかなる願をか求めむと思ふ。一切汝にほどこさむ」といふ文をとなへつゝやゝ久しくぬかづきて後、ひたひの汗おしのごひ袖ひきつくろひていきづき居たる有樣、物を深く思ひ入りたるけしきなれば、いといとあやしくて、「何の願おはしてか、身をくるしめ、心を摧きて祈り申し給へる」と問ひ侍りしかば、「誠にさぞ見え侍らむ。これよしなき妄念にて侍り。いまだいとけなくして、艸をたゝかひ塵をもてあそびしより、うたかたのはかなき跡に心をとゞめて、すでにいそぢにあまるまでよみおける歌、林の木の葉のごとく積りぬれど、つらぬべき花の袂にもあらぬ身

を顧みて、撰集のありし時にも、望まざりしゆゑに、いまだ勅撰にもいらず侍り。しかはあれど代々の集にも先には入らざる人も、又もれたる詞も、後には撰び入れられたるためし多く侍れば、おのづから又撰集もあらばなど、心一つになぐさめ侍りつるを、今の世となりて、柹の下のこだち皆あらたまりぬれば、品がくれのもくづ、いとゞ尋ぬべきあまもなくなりぬべきことの歎かしく覺え侍るあまり祈り申す』よしをなむ語りしかば、『おなじ心に歌のことをしも、祈り申し給ひけるにこそいと不思議におぼえ侍れ。入道もみそぢあまりのとし世をそむきしより、むそぢの今にいたるまで、官途はながく心に忘れ、世事は口にものいはずして穢土をいとひ、淨土をねがふといへども、なほ言のはのしげきさはりいでやらざるによりて、一筋に念佛の數返をつむ事をえず。これもし往生のさはりとなりぬべきわざにて侍らばその旨を示し給へ。源氏の物語も、紫式部祈り申しけるによりて、石山の觀音、その風情を示し給ひけるとなむ申し傳へて侍り。この寺もまた同じ觀音にておはしませば、などかりの敎もなかるべきなど思ひつゞけてまうでゝ侍りつるに、難波津のよしあしをもて惱み給ひける人にしもあひ奉りぬる、唯この菩薩の變化し給へるにこそ。願はくはおろかなる疑をはるけ給へ』といひしかば、『紫式部はあらたなる色につきて祈り申しけむ。猶人の願をみて給ふ御誓さりがたきによりて、しめし給ひけるにこそ。ましてこれは實の道にて侍ればいかでかその敎もなくて侍るべき。但し迷深き心にて佛の御心をはかりがたく侍り。しかはあれどそのためしを思ふに、清水寺はさせもぐさに我が世の頼みをかけ、六角堂はあし火たくやの

ま近き事をつげ、大山寺は山深くとしふることをかこち、大神宮はさかづきにさやけき影を浮べ、宇佐はいさぎよき心を忘れず、加茂は雲わけてのぼる誓をたて、春日は南の岸に北の藤波をよせ、三輪は我が庵に杉たてるしるしを敎へ、住吉はかたそぎのゆきあひのまに霜をおき、北野は菅原のあはぬ板間をあらはし、稻荷はながきよの苦しきことをしめし、貴船は瀧つ瀨に玉ちる思をなぐさめ、熊野は、思ひおこせよ我も忘れじと契り給へり。又聖德太子は片岡の旅人をあはれみ、行基菩薩は眞如くちせず逢ひ見つる事をよろこび、傳敎大師は我が立つ杣の冥加を祈り、弘法大師はたかき山に至れることをこたへ、慈覺大師は猶大かたにすぐる月日をながめ、慈惠僧正はいもひの庭に艸のむしろをしき給ひしより初めて、あらたなる佛神、かしこき權化、いづれか歌をよみ給はざりし。そのとがあらばかゝらむやとこそ覺え侍れ。思へば近き頃の事なるうへ、新古今にしるされて侍れば人皆知りたることにて侍るぞかし。百首の歌をすゝめける念佛のつとめにさしあひて西行よまざりければ、何事も衰へゆく世の末までも、歌ばかりこそかはらぬ情にてあるよしをなむ熊野の權現、夢の中に示し給ひけるより、いとゞ歌のみよみつゝ、そのもち月のきさらぎの頃、つひに西のむかへにあづかりにき」といひしかば、「今こそ日頃のうたがひはとけ侍りぬれ。この春昔の友にて侍りし人尋ねまうできて、昔今のことゞも語りしついでに、この頃爲兼卿といへる人先祖代々の風をそむき、累葉家々の義を破りてよめる歌ども、すべてやまと言の葉にもあらずと申し侍りしかど、かの卿は和歌の浦風絶えず傳はりたる家にて侍れば、定めてやうこそあらめと

思ひ侍りしほどに、くはしく思ふ事もなくてやみにき。今又これをうれへ給へるにこそまことのあやまりとは思ひしり侍りぬれ」といふに、かの僧わざ笑ひて「堯舜の子、栁下惠がおとゝ皆おろかなりしうへは、その家なればとてかならずしもかしこかるべきにあらず。又佛すでに我が法をば我が弟子うしなふべしとて、獅子の中の蟲の獅子をはむにたとへさせ給へり。その旨にたがはず、内外の法みなその道を傳ふる人その義をあやまるよりすたれ行くことにて侍れば、歌の道も訶の家よりうせむこと力なき事にて侍る。かの卿は御門の御惠深き人にて侍るなるに、これをそしりてみつしほのからきつみに申ししづめられむことも、よしなかるべきわざにて侍れば、くはしくそのあやまりを申しがたし。たゞこの略頌にて心得給へ。それ歌は、心を種として心を種とせず、心すなほにして心すなほにせず、言葉を離れて言葉を離れず、風情をもとめて風情をもとめず、姿をならひて姿をならはず、古風をうつして古風をうつさゞる事にてなむ侍る」と申すに、いとゞおぼつかなくおぼえつゝ、「誠に我をそしるを悅び、おのれを罪せしばかりのためしは又も有るべき事ならねば、おそり給ふもことわりにて侍れど、道をたつるならひ、義をあらそふにとがなきことにて侍り。たとひまた、龍逢比干におなじ事ありとも、やまと言の葉に身をかへ給ひなば、集に入り給ひて侍らむよりもはるかにやさしき名を世々にとゞめ給ふべし。聞き傳へてもらし侍るべきにもあらず、唯入道が心一つにこそ納め侍らめ。かつはこの六義、觀音の御手の數にしもあたりて侍り。その心をもつて御手毎に奉り給へ」とすゝむれば「かくあながちにのたまふも觀音の御きゝめ

すにやと覺え侍ればあらあら申すべし」とて語りし事どもをなむ記しおけるなるべし。

「一、心を種として心を種とせざる事。それ心に善惡の二あり。故に佛敎にも心を師として心を師とせざれといへるが如く、歌もまたよき心を種としてあしき心を種とせず。先よき心といふは、おもしろくやさしうして俗に近からず、きく人皆感じ思ふべし。これを古今の序には、「感こゝろざしになり、詠ことにあらはる」といへり。惡しき心といふは我ひとり義をなしてよき風情と思へどもなべて人の心にかなはず。これを同じ序には「歌とのみ思ひてそのさましらぬなるべし」といへり。然るを爲兼卿の「歌は心を種とするぞとなれば、ともかくも唯思はむやうにその心をたゞちによむべし」とて詞をも飾らず、物語をするやうによめる今樣姿の歌ども、げに玉津島の明神もわかの浦浪に御耳をや洗ひ給ふらむと覺え侍り。古今の序に「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」といへる。世の中色につき花になる人の心の種なり。又しげき言の葉とは、水に住む蛙のその曲なきものまでやさしき歌の言葉ある義なり。全く今のごとく花なく匂なき心言葉にはあらず。齊の桓公に車つくりがいひけむがごとく、言葉は傳はるといへども心は傳はらざりけるにや。かつはその心を得てかの序にかきたりし。貫之より初めて代々の歌仙ども皆それをしる所なれども、今の歌のやうによまざるにてしるべし、かの卿はあやまりなるといふ事を。又一遍房といひし僧念佛義をあやまりて踊躍歡喜といふはをどるべき心なりとて、頭をふり足をあげて踊るをもて念佛の行義としつ。又「直心即淨土なり」といふ文につきて「よろづいつはりてすべから

ず」とてはだかになれども見苦しき所をもかくさず、偏に狂人のごとくにして、にくしと思ふ人をばはゞかる所なく放言して、これをゆかしくたふとき正直のいたりなりとて貴賤こぞりあつまりし事、さかりなる市にもなほこえたりしかども、三つの難を申し侍りて終にその砌へはのぞまざりき。一には踊躍歡喜の詞は、諸經論にありといへども諸宗の祖師一人としてをどる義をたてず、殊更善導和尙は身心を動かさずして至誠心を表し給ひける上は、さらにをどるべきにあらず。二には、人を放言して見苦しきところをかくさゞるは放逸の至りなり。またた正直の義にあらず。三には、その姿を見るに、如來解脱のたふとき法衣を改めて、畜生愚癡のつたなき馬きぬをき、たまたま衣の姿なる裟を畧してきたるありさま、ひとへに外道のごとし。この三つの難を加へて、すべて信をさりしおもむきを一遍房に語りて侍りければ、陳答はなくてよめりける詞、

「はねばはねをどらばをどれ春駒の法の道をば知る人ぞ知る」

とよめるよし聞き侍りしかば、

「春駒の法の道をばしらねばやをどる心をとゞめざるらむ。
濁り江の蓮のうき葉にゐる蛙をどれば落ちて沈みこそすれ」。

この難の如く、阿彌陀佛も思しめしけるにや、かねては紫雲たち、蓮花ふるなど、おどろおどろしくいひたてしが、誠のきはには、來迎の儀式も見えず、あまり正體なかりければ、弟子往生とかやの風情だにもかなはずして、人の見ねさきにいそぎ陷てまじへ侍りける。その時しも

湊河に侍りし程に、かの最後の有樣よく聞き侍りて、三つの難のあやまりなかりける事をさとりにき。しかあるにかの歌の義、又今の難に少しもたがはず侍り、まづ心を種とする詞につきてたゞしからぬ心をくるひよめる事、踊躍のよみにまかせてをどるに同じ。次にたゞこと歌のすなほなることを思ひて、かざる所なくひたくちによめる事、正直の義をあやまりて人を放言し、見苦しき所を隱さゞるに同じ。次にふるき姿のやさしき心言葉を學びずして俗に近き姿をよめる事、法衣を改めて馬きぬをきたるにおなじ、これを思ふに、かのあやまりいよいよ疑なくおぼえ侍り。すべて歌の趣をそむけるうへはわきて申すべきにはあらねど、殊にかの卿の秀歌なりといへる二首の歌をこれかれにかよはしてその難を申し侍るべし。

「なけとなる有明がたの月影よ郭公なる夜のけしきかな。

荻の葉をよくよく見れば今ぞしる唯おほきなる薄なりけり」。

まづ、郭公なるといへる、なるの字は、いかなる義ともおぼえず。駿河なる富士のたかね、しなのなる淺間のたけなどいへる、なるの字は、その所にある義にてはべり。しかあらば、郭公のある所によの氣色のみゆべきにや、もしまた郭公のなきぬべきけしきになる義にて侍らば、すでに上句に、なけとなる氣色、有明がたの月影にくもりなく見え侍るうへは、下句にさのみかさねて、郭公なるといはずとも、その氣色見えざるべきにあらず。いづれの義につきても耳にたちたる時鳥なるにや。爲家卿は、すべてけしきといふ事をばよむべからずと申し侍りしかども、昔よりよめるうへはなにか苦しかるべきなど、日頃は思ひ侍りつるに、この

歌にこそげにおしき氣色とは思ひしり侍りぬれ。郭公のなきぬべきけしきをよめる、
家隆卿の歌、
「いかにせむこぬよあまたの時鳥待たじと思へば村雨の空」。
又、行家卿、
「やよやなけ有明がたの郭公聲をしむべき月の影かは」。
かくてこその氣色もおもしろく見ゆる事にて侍るに、「なけとなる郭公」とは、「やよやなけ」に、ことの外におとりてこそ聞え侍るに、わろき姿をいはゞ人と猿とのかたちのごとし。
つぎに古き狂歌にいはく、
「十五夜の山の端出づる月みればたゞ大きなるもちひなりけり」。
このもちひの姿に、大きなるすゝきはたちまがひて侍れば、をかしからぬ狂歌にてこそ侍るめれ。俊成卿は顯輔の歌をば、
「難波江の蘆間に宿る月見れば我が身一つは沈まざりけり」
とよめりし心まではやさしく侍りしを、その後すこし俳諧にかゝりて歌の姿やつれたる」よしをなむしるしおきて侍り。すでに俳諧にかよへる、猶これをそしれり。いはむや狂歌におなじからむをや。俊成卿は、和歌に長せしこと神に通じたりしかば、他家の人なりとも後生としてたやすくその義をやぶりがたし。いはむや子孫たらむをや。春日に奉りける歌、
「春日野のおどろがしたのうもれ水末だに神のしるしあらはせ」。

參社のたびごとに、この歌をのみ詠じ侍りて、法樂たてまつりつゝ、子孫のことを祈り申しけるとかや。又夢のつげありけるとき奉りける。

「春日山谷の松とは朽ちぬとも梢にかへれ北のふぢなみ」。

これに大明神めでさせ給ひけるにや、定家卿、中納言になりしより次第に子孫榮えて皆大納言をきはめ、次男の家まで中納言にいたりぬる、ひとへにかの歌の德なるべし。然るときはたとひ人丸、赤人來て今の如くよむべきよしなむ敎へはべるとも、かの卿の身とたては及ばざらむまでも、藤なみの末をこそ思ふべきにて侍るに、かけはなれたる姿のみ好みよめること、家におきても不孝なり。道におきても不義なり。心あらむ人はこの一義にてもかのあやまりは知りぬべきにて侍る。又あらぬ姿なりとも歌だにもおもしろく侍らば、さる一姿もやと思ひ侍るべきを、歌とだにも聞えぬやうなればかたがたたえかるべしともおぼえ侍らず。もし又我が心のおよばざるゆゑにやと案じ侍れば、よき詞はおろかなる耳にもおもしろく聞ゆる事にてなむ侍るなるゆゑに、秀歌は常に人の口ずさむ事にてなむ侍り。道因法師、

「山のはに雲のよこぎる宵のまは出でゝも月ぞ猶またれける」。

とよめる歌をめくら法師の口ずさみて通りけるを聞きて、「秀歌よみたりけり」とて悦びつゝ、かの目くらをよび入れて、やうやうに引出物をなむたびたりける。又、源雅光も、

「逢ふまでは思ひもよらず夏引のいとほしとだにいふと聞かばや」

とよめる歌を、めなわらはの辻に立ちてうたひけるを聞きつゝ、「我が秀歌はこの歌なりけ

り」と申し侍りけるにたがはず、金葉集に入りて侍り。又慈鎮和尚も「歌はよしあしをしらぬ人の耳にもおもしろく聞ゆる、秀歌にて有るよし定家卿申し侍りける」とて歌をよみ出してはかならず歌心もなき人にもとはれけるとかや。げにさることにて侍るやらむ。かく歌の姿やつれざりしまでは上つかたの御會、もしは家々の會の歌までも、手毎に書きうつして知るもしらぬもこれをもてあそび、口ずさみき。今は御會あれども、この道をたしなむ人よりほかあまねくしる事なし。古今の序には「たまたま後世の爲に知らるゝものは和歌の人のみなり。いかにとなれば、語る、人の耳に近く、義、神明に通ずればなり」といへり。しかあるに、今樣姿の歌は語る人の耳に近からず、義、神明に通ぜざる故に、當時なほ知る人まれなれば、末の世まで傳はり難くや侍るべき。たとひこれをえらびおかるゝとも、撰集のつたなき名をとゞめ作者のおろかなる心をあらはすべし。この篇はあしき心をいましむるがゆゑに煩惱のにごりを清めむがため、持ち給へる蓮花の御手に奉るべし。

「思ひわく心のなどかなかるらむよきもあしきもしらぬ人かは」。

一、心をすなほにして、心をすなほにせざる事。それ歌の心は屏風をたつるにおなじ。みなひきはへて一をりする所なければたつ事をえざるごとく、たゞすなほなるばかりにて、ひとをりの節なきは、かの大ずゝきその難をまねき侍るにや。薄は、しのゝをずゝき、糸薄などいひて、細くちひさき名をこそ得て侍るに、たゞ大きなる薄、そのふしもなく見え侍り。又身にしむ色の秋風をぞなによはる薄にしもむすびかへたる荻の葉何故ともきこえ侍らず。おなじ

くこの風情なるとも、かうよみて侍らば、いま少しは荻の一ふしも見えぬべくや、

「秋風のおとせざりせば荻原や末はのたかき薄とぞ見む」。

ひとり古今の間にわゆみて、和歌道を始めてあきらむるばかりの宗匠の歌を、假にもよみ直し侍ること、かへすがへす人のわざけりとなりぬべけれど、たゞ一節の義をあらはさむがためなり。俊賴抄に、「心をさきとしてふしをもとめ、詞をかざりよむべきなり。心あれども言葉かざらねば歌おもてめでたしとも見えず。詞かざりたれども、させる節なければよしとも聞えず。めでたき節あれども優なる心詞なきは又わろし。けだかくおもしろきをひとつのことゝすべし」といへり。玄かあるをかの卿は「歌の心にもあらぬ、心ばかりをさきとして詞をもかざらず、節をもさぐらず、姿をもつくろはず、たゞ實正をよむべし」とて俗に近く賤しきを一つの事とするがゆゑに皆歌の義をうしなへり。すべていつはりかざれる事なれども、そのいはれをよくよめば、實正にきこえ、實正なれどもそのせむなくよめば實正ならず聞ゆる事にて侍れば、あながち實正をもとむべきにもあらず。かつは有爲の法は皆假體なるべきによりて實わらざるを實とすべし。殊に歌は又はかなき言の葉、あだなる思なるが故に、かりの事をのみよめり。又みざる事をも見、きかざる事をもきゝ、思はざる事をも思ひ、なき事をもあるやうによむをもて歌の義とす。これによりて常のたとへにもまことなき事をば歌そらごとゝこそ申し侍るめれ。又、眞實中道一如の法、猶以空假の二法を具足して三諦の義をあらはす。いはむや和歌の風情をや。かの卿の申し侍るなるおもむき、たゞ事の義をわやま

れるなるべし。六義にはことのとゝのほりたゞしきをもてたゞ歌の義とす。玄かあるにかの卿はことのとゝのほる所をば玄らず、たゞひとへに正しき事をのみよまむとするが故に、一返房が正直の義の如くして、六義をはなれたり。この篇はたゞしき心は迷へる事をいへる故に癡暗の心をみがゝむが爲、もち給へる念珠の御手に奉る。

「うきことの葉のみ茂りて呉竹のうき一節のたえやはつべし」。

一、詞をはなれて、詞をはなれざる事。それ世俗のことばをはなれて、やまとことばをはなるべからず。玄かあれば、口傳にも「ことばは古へを慕ひ心はあたらしきを求めよ」といへり。世俗のことばといふは、かの狹の歌のごとく、「よくよくみればたゞおほきなる」などいへるやうなる詞なり。やまとことばによくよく見る心をいはゞ「つくづくながむれば」ともいひ、また「つくづく見れば」「あくまで見れば」などいふべきにや。またおほきなるすゝきをよまむには、さきにいふがごとく、「すゑばの高き」ともいひ、また「葉末のひろき」ともいふべきにこそ。寢覺は、「歌程いみじき事なし。猪のむくつけくおそろしげなるものまで、かるもかくふすゐの床などよみぬればやさしくなれり」と申しけるやうに、やさしからぬことをもやさしくやはらげよめばこそやまとことばのおもしろき事にて侍るに、かの卿の歌のおもむきの如くならばゐのしゝのふしたる床などよむべきにや。人木石にあらざればみな思ふ心はありといへども言葉よく和らぐる事のかなはざるによりてこそ、よみよまずおとりまさる人もある事にてぞ侍る。世俗にいふがごとく大きなるものをやがておほきなりといひ、ち

ひさきものをやがてちひさきといはむには、誰か歌をよまざるべき。また心をあらはす事はいづれもおなじ事にて侍れども、經論、外典、解狀、消息、眞名、假名、世俗物語、詩歌の言葉ども、皆その文體ことなり。なんぞ今和歌と世俗おなじくせむや。藤原保昌歌をうらやみて「早朝におきてぞみつる梅花を夜陰大風不審不審よ」とよみたりける。和泉式部きゝて「歌詞にはかくこそよめ」とて、

「朝まだきおきてぞ見つる梅の花よのまの風のうしろめたさに」

とやはらげたりける。同じ心とも覺えず、おもしろく聞ゆるをもても玄るべし。その詞たがへば、その心うするものなり。たゞ保昌が詠のごとし。但し世俗の詞もよくよめば歌詞になり、歌言葉もわしくよめば世俗の詞になることにて侍り。詞はそれ心のつかひなるが故に、詞おろそかなれば心もおろそかに聞ゆ。詞切なれば心も切にきこゆるなり。玄かあるに詞の中には、また詞肝心たるによりて百偏にかきたる文よりも、わづかに三十一字にいへる心は切におぼゆる故にこそ。天地を動かし、目に見ぬ鬼神、たけきものゝふ、をとこ女の中をもやはらぐることにて侍るに、かの歌は詞つたなきがゆゑに、ふみにもことなくおとりて見え侍り。これひとり思ふにあらず。いまだかの歌を感ずる人を聞かず。たゞかゝる風情、詞をもよむべきにやと疑ふ人多し。かつはかく山がつのそしりをおひぬるも、あまねく人の心にかなはざる故なるべし。また上古の歌もさのみこそ侍るめれとて、やまひ禁忌をも除かざる事ゆゝしきあやまちにて侍り。歌末ださだまらざりし時は申すにおよばず、古今集よりこのかた

は、病をのぞかざることなし。但し、おのづから病ある歌をえらび入れたる事あり、それも皆ゆゑあるべし。あるは心めづらしく、あるは詞やさしきにつきてこそ。老が身に大節ある時はすこしきあやまりをいはざる義なり。然るに今そのとがゆるさるばかりの心詞もなくして。いかでかこれをゆるさるべきにや。和歌は善惡の心に通へるゆゑに、殊に禁忌の詞をいましめ侍り。經信卿承曆の歌合に、

「君が代はつきじと思ふ神風やみもすそ川のすまむかぎりは」

とよめりけるによりて御門の御寶算のびさせおはしますよし夢のつげなむありける。かくよむまでこそかなはずとも、歌のひじりのいふばかりにては、そのはゞかりありぬべき事をも心うべきにてこそ侍るに、しでの山路の鳥とかや申し傳へたる郭公の歌にしも初めに「なけとなる」といひて、をはりに「よのけしきかな」ともてあはせたるいかゞとおぼえ侍りしにたがはず、かの歌よみ出したりし年は蓮臺野ばかりへまかりける人だにも、萬人に餘りたりなど聞え侍りき。すでに世の爲、道の爲よろしからずといへども、あるひはこの道にくらき人々ことぢにかはする義にまよはされて、その黨をむすび、或は鹿をさして馬といひけるがごとくたゞその旨に從ふゆゑに、和歌こゝに絕えなむとす。思ふべし思ふべし。蛟龍は水を得てのち、その神をたて、和歌は詞を得て後その心をあらはすものなり。この篇は言葉の亂れたる事をいへるゆゑに、さはりをのぞかむがためにもち給へる持輪の御手に奉るべし。

「言の葉のなほざりにいふ心をば思ふばかりにいかゞ知るべき」で

一、風情を求めて風情を求めざる事。それ風情は錦を織るに同じ。ひとつはたもの〻上にして、色々樣々なる文をわかつごとく、ふるき風情のうちにしてあたらしき風情を求むべし。故に求めてもとめずといへり。ふるき風情といふは、たとへば、花に風をいたみ、月に雲をいとふやうにその物につけてよみならはせる事どもなり。これを離れていまめかしきことをよまむとすれば、かの狄の歌のやうにかへりてめづらしき思ひもうせて風情もなくなる事にて侍り。常の人のことぐさにも、事過ぎてわろきをば「風情すぎたる」と申し侍るは歌より申し始めたる事にてなむ侍り。八雲の御抄にも今めかしきをよめるをば「風情のいりほか詞のいりほか」とぞか〻せおはしましたる。但しすべてふるき風情をはなれてよむまじきにはあらず、これは大方の義にて侍り。孔子の「造次顚沛にものりをこえず」とのたまへる如く、和歌の大體を得つる後は、いかなる事をよめども六義を越えざるゆゑに、そのあやまりなきものなり。しかあれば明匠どものおのづから思ひがけぬ事をよみたるは、みなさる事もありとおぼえて見所も侍り。それもわざとよめるにはあらず、風情の至れるあまり自然によりきたるなるべし。なにをもてしるとならば、わざともとめたる風情はいかにもことづくりたるやうに見えて、あるは心得がたく、あるは詞くだけて面白からず。りうでをまはすと風情をめぐらすとは、その義おなじき事にて侍り。りうではよくまはせば心と繩のうへにうかれたちて、なげあぐれどもおちず。いまだよくもまはらぬさきになげあぐればぶりぶりとしておつるがごとく、歌もいまだいたらざる心をまはさむとすれば、詞の花にか〻らずして、風情

のりうでおつることにて侍り。即ちその趣、又かの猿のはによくよく見えたるにや。花を雲にまがへ、紅葉を錦におやまつやうなるにせものは、いまださだかに見えわかぬ、それかあらぬかと思ふことにてこそ侍るに、猿の葉をよくよくみながら、猶すゝきと思へる事、ゆかしきひがめにこそ見え侍れ。かやうに歌は餘りめづらしき風情をもこめむとすれば、ばればれとなりて題の心をも忘れ、その難もおぼえぬことまで侍り。ことに初心不堪い人は心うべきことなり。白河院の御時、公定は、月の題に月をおとして、無月の宰相といはれ、能俊は「月の中なる月を見るかな」とよみて、天變の少將となむいはれけることを思ふに、むかしなりせばかの卿をも、大納中納言とて申し侍らまし。今は歌の心を忘れる人もなきにや、笑ふべきことをも笑はず。たゞ事に出でゝ爭ふ人は、爲世卿よりほかは聞え侍らず。たゞしき歌仙だにもあまたありて、あざけりをなさむには、これに憚りて、かの卿はかくをかしき歌どもをば、よもよみ侍らじ。たとひよむとも、又これをまなべる人あるべからず。歌の家に人なくなりにける程もかなしくこそおぼえ侍れ。大方歌の風情の面白きこと、代々好士潜のまさでの數をつくしてよみ殘せる心言葉もありがたくなりつゝ、ふりぬる身をながらの橋によすれば、さらに心の渡るべき道もなく、もゆるおもひを富士のねにくらぶれば、おのづから言葉の及ぶべき煙もたえぬれどなほその跡を尋ねてよむべきなり。殘りたるを案じ出して侍ればこそ、いかにしてこの風情今まで殘りたりけむと、かしこくもめづらしくも聞えておもしろくおぼゆることにて侍るをたゞ、かの卿は俗に近くして歌の風情にもあらぬ今めかしきこ

とどもをめづらしき風情と思へり。むかしよりよむべからざるによりてよまざる心詞をよめる、更にめづらしきにあらず。この篇は、風情をめぐらすことをいへるゆゑに、衆生を渡さむ事を案じ給へる思惟の御手に奉るべし。

「吹きまよふ波ぢは出づる舟もなし風は使のゑるべなれども」。

一、姿をならひて姿をならはざる事。その大方の姿といふは六義の趣、みづからが姿といふは我が得たる姿なり。これをたがへて人の歌をまなべるは我がふりにあらざるがゆゑに、秀歌はいできがたし。たゞ大方の姿をだによくならひぬれば、我が心に任せてよめども六義をはなれず。たとへば手をよく習ひたる後は我が筆のいきほひに系たがひてわらぬふりにかけどもよき手に見ゆるが如し。信實朝臣は「この頃たれがやうかれがやうとてよみもおほせぬ姿を學ぶ事、その心をえざる事なり。おのが姿をさまざまによめばこそ人の心を種とする義にも叶ふことにては侍れ」と申しき。もしかの卿はこの義などをわしく心得て、大方の姿をさへ心に任せてわらため侍るにや。代々の集を見るにも、時に從ひ人によりて歌の姿は同じからずといへども、みな六義のうちにしてやまと言葉をみだらず。たとへば春の草木のひとつみどりにして、おのが青葉をまちまちにわかてるがごとし。系かあるにたゞ大きなる海は緑の青葉かれはてゝやけのゝ原となれり。すべて歌にも限らず、よろづの事をみな姿によりて其の義をあらはせる故に、諸尊は本誓に系たがひて形像をあらため、先王は貴賤によりて法服を定む。即たかきが賤しき衣をき、賤しきが高き衣をきる事をいましめて、不忠失位

とす。これを思ふにかりそめの衣、なほその姿をたかぶれば其の失あり。いはむや心詞をたがへて歌の姿やつさむをや。口傳にいふ、「近き世の人はたゞ思ひたる風情を三十一字にいひつゞけむ事を先として更に姿詞のおもむきを知らず」といへり。今の歌、即もつばら思ひえたる事を先とせり。何ぞ先賢のいましむる所を思はざらむや。又かの卿の説には、おのおのともかくも心にまかせて思ひ思ひによむべきにて侍る上は、當世樣といふ事あるべからずと申すよしある人語り侍りき。もし誠にて侍らば、みづから知る事のかたきゆゑに當世ざまあるべからずと思へるなるべし。かの卿のふるき歌の姿によめるをば、例の風情といひてめをそばむるがゆゑに、おのおのいまめかしき事どもを心に任せてよめり。これにつきていかでか今めかしくみだりがはしき姿なからむや。たとひ心かたくなにして、めしひたる人なりとも、よく今樣姿をば見忘り侍りぬべし。すべて古今集より續古今集に至るまで十一代の集の中に今の如くなる歌はあるべからず。たとひ又ありといふとも、百丈の木のなかに一のふしあらむことを思ひて、これを學ぶべきにあらず。つらつら事の心を案ずるに、和漢の博才あつまりたりし延喜の聖代に古今集をえらばれて、歌の六義を定められしよりこのかた、皆そのおもむきにしたがひて六義をやぶらず、なんぞ今かしこき上古の風をあらためて末學のおろかなる俗をうつさむや。この篇は姿をよくすべき事をいへり。故にはどこし給ふらむがため、もち給へる寶珠の御手に奉るべし。

「さまざまに見ゆる姿も増鏡ひとつ思のかげにぞありける」。

一、古風をうつして古風をうつさゞる事。それ古今の古風をば寫して萬葉集の古風をばうつすべからず。それ故に萬葉はあまねく由緒ある心詞をききとして歌いまだやはらがざりし風にて今の世のきゝをとほくせり。古今序には「上古の歌を見るに多く古質の語を存していまだ耳目のもてあそびとせず」といへり。よく歌をやはらげて人の聞きを近くして六義をわかちて、かれこれ得たる所得ぬ所をあらはしつゝ、事の心を教へし事古今集より始まれり。これによりて萬葉は集の源なれども古今をもて本とすべきよし明匠ども皆申し侍り。たとへば一返ひらき見給ひて、大小乘を分ちて序正流通を定めつゝ委しく釋をつくり給ひし故に、顯教には大師を祖師と崇奉るごとし。又大嘗會の三代集の御手箱にも拾遺集出できて後よりは、萬葉をのぞかれけるも、耳目のもてあそびとせざる義なるべし。然るにかの卿、およばざる萬葉の風を願へるにや、たゞ大海のおほやうなる歌ども多く聞え侍り。爲家卿はかの集の歌を本歌にとる事をだにもいましめ侍りき。その子孫として、などや鶯のかひこの中の時鳥にてしもは侍りける。上古の歌は世あがり人かしこくして、その心その時にかなへる故に、心詞ともにたゞしくしておほやけしき姿あり。たとへば不動愛染王などの降魔のかたちにておそろしげなる御姿なれども、内に慈悲の御心あるによりてむかひ奉れば、尊くおぼゆるがごとし。今世くだり人おろかにしてその風時に崇たがはず、その姿身におよばざるをかへりみず。これを學ばむに、あに上古のごとくならむや。たとへば、をさなき子に鬼の面をきせるがごとし。たゞおそろしげなるかたちばかりは見えてまことによわよわしく、その勢な

きものなり。これによりて殊に末の世には上古の風を誡むべき事にて侍り。但萬葉の中にも今の風に叶ひておもしろき歌どもあり。これをば學ぶべし。又古風の中にも學ぶべからざる風あるべし。唯大體の義なり。又古今を本歌にとりとらざる事、近頃の明匠ども爭ひ申し侍りき。その兩義を案ずるに、先本歌をとる義は、手跡も人のよき手を習ひて能書になり、又水をとり火をとる玉も月日の光をたよりとし、又詩も古詩をとりたる事のみこそ多く侍れば、これを思ふべしといふ義も然るべし。次に本歌をとるべからざる義は、人丸、赤人も本歌をとりたりし事やはある。又人の心はおもての如く同じからざる事にて侍れば、人の歌をとるべからずといふ義も然るべし。いづれもそのいはれなきにあらざれば、一偏に定めがたし。但とるべしといへる人もさのみとりたる事もなし。とるべからずといへる人もすべてとらざる事もなければ、たゞ大方の義にて侍るべし。その肝心はわざと本歌をもとむべからず。又自然によりきたるをも、のぞくべからざるにや。光俊朝臣の義につきて、中務卿宗尊親王專本歌をとらせ給ひしことを、爲家卿難じ申しけるも、あまりこれを旨ととりすごさせ給ふとをなむ申しけるにこそ。當時は又一向本歌のさたまでもおよばず。今案の風體をさきとするゆゑに、風情を凝すと覺しきは心得がたく、すなほによむと覺しきは俗に近く侍り。これを思ふに、本歌をへつらふ心なくしては歌の趣たがふべき事にてなむ侍りけり。大方は人丸、赤人も本歌をとらざりし義はさる事にて侍れど、内外の道皆さのみこそ侍れ。釋尊は經教なかりしさきに正覺をとり給ひしかども、さとりをひらかむと思ふには經教を學し、又孔子、

老子もみづからこそ仁義の道をばさとり給ひしかどもその道をたづぬる人をばかの曲をうかゞふよりはじめて、いづれのわざかそのみなもとをまもらざる。これについて本歌を思はむにあながちにそのとがあるべからざるにや。この篇は、古今最初の風を改むべからざることをいへるが故に法性の金山をおして動き給はざる。按山の御手に奉るべし。

「枯れてゆく秋の古枝の立ちかへりもとの心に花の咲けかし」。

すべてかの卿の今様姿の歌多しといへども、たゞ二首を六義に通はしていへる事は、兩首の中にだにもあやまりの多き事をあらはさむ爲なるべし。

野守鏡下

すでに法樂の爲に略頌の心をばかたはし申し侍りぬ。たゞし心せばく、ことばみじかくしてそのことわりあらはれざるべし。和歌はたゞ花鳥のたよりのみにもあらず、内外の法をかねたる子細もついでに侍れど、はやうし三つにもなり侍りぬ。今少し念誦し侍るべし」といひしを、「内外の法に過ぎたる念誦やはあるべき。かつは眞實の義をしも殘し給はむ事、口惜しく覺え侍れば、靈山童子のためしをもひき出づべし」など申し侍りしかば、「さばかりの御心ざしならば」とて語り侍りしは、「それ恩をすてゝ無爲に入りしより、あしたには花藏世界の花を尋ね、夕に本有常住の月をまち、音律浮世の曲を傳へて、聲塵得道の業をなし侍りしか

ども、ふたそぢあまりの年より、山がつとなりにし後は、ひとへに歌にのみ心を慰めて、いそぢあまりの年月を送り侍りつるに、今かくこの道のすたれゆくこと、唯我が身ひとつの歎きのやうにおぼえ侍り。まづ外典につきていはゞ、和歌は仁義禮智信の五德をかねて、よく禮樂をたすけつゝ、國を治め民を和ぐるなかだちたり。かるが故に、古今の序にも「天地を動かし鬼神を感じ人倫を化し夫婦を和ぐる事和歌よりも宜しきはなし」といひ、又「君臣の情これによりて賢愚の性をみつべし」といへり。その心をいふに、聞く人皆感じ思ふはこれ仁なり。ひとふしをとゝのへよむはこれ義なり。和國の風にやさしくことば和らぐるはこれ禮なり。珍らしき風情をめぐらすはこれ智なり。切なる心をあらはすはこれ信なり。然かるを今の風體は聞く人皆感ぜざれば仁にあらず。ひとふしなければ義にあらず。やさしく言葉やはらげざれば禮にあらず。よき風情をよまざれば智にあらず。切なる心あらはさゞれば信にあらざるものなり。又樂をかねたることをいはゞ、上五文字に絲竹金石革の樂器をとゝのへ、下五文字に陰陽五時を分ち、中の七文字に七調子をこめ、終りの七々に呂の七聲律の七聲をふくめり。おのづから一字二字あまるとも樂にのふけむあやまりある故なり。又長歌の數定らざるも調子に從ひて呂律の聲の輪轉する事、無窮なる義を現はすなるべし。風情をもては調子とし、詞をもては聲とするものなり。思ふべし、同じ人の聲なれども調子たがへばあしく聞え、調子たがはざればよくきこゆる如く、同じ三十一字なれども風情の調子それ、詞の音曲たがひぬれば、そのきゝ宜しからず、但樂をかねたりといふこと、樂の聲聞えざるにつ

きて人皆信ずべからずといへども、魏徴古人の說をひきていはく、禮といひ禮といふ、何ぞ玉帛をしもいはむ。人のとゝのふるによりて禮のよそほひをなす。樂といひ樂といふ何ぞ鐘鼓をしもいはむ。人和するによりて曲をなすといへり。又波斯匿王、敵國の戰に樂を鼓にぬりてうちければ、その聲にひかれて毒の箭ぬけて害をなさゞりける。これもまさしくその藥をつけざりけれども樂を鼓にぬりたりける義ばかりにてその徳を施しけるうへはなにの疑かあるべき。何ぞあながち樂を歌に和するとならば、國家の治亂、佛法の興廢ひとへに禮樂によるゆゑなり。弘決云ふ、「禮を制し樂をおこして五徳を世に行ふ。佛敎の流化まことにこれによれり。禮樂さきにはせ、眞道のちに久し」といへり。また詩序に、「治まれる世の聲はやすくして樂めり。亂れる世の聲はうらみて怒れり」。又文選に、「關雎麟趾には正治の道あらはれ、桑間濮上には亡國の聲あらはる」。又、孝經に云ふ、「國を治め民をなつくるには禮より宜しきはなし、風をうつし俗をかふるには、樂より宜しきはなし」。又弘決に云ふ、「民の徳ありて五穀さかりに、疾疫おこらず、妖祥なし」といへり。これによりて釋尊、震旦國に三聖を遣して仁義の道を敎へ給ひしはじめ、樂をおこしけるよりして三百六十律をたて、聲をたゞしくせられけれども、世衰へゆくに隨ひてきゝわくる人なかりければ役刑法といひける人、六十律になしたりける後、猶又わきまへ難くなりゆきければ、則天皇后の時、十二律に定められにけり。今はこれをだにもあきらかに聞きわかず、たゞ口にまかせて吹手に從ひてあやつるばかりにて、轉輪聖王より、乃至第六天の妓樂の音聲、おひすぐれたる事千億萬億な

り。第六天上の萬秭樂の聲は無量壽國の七寶樹の一種の音聲に及かずといへり。然かあれば小國は大國をとり、末代は上古におよぶべからざる事をかゞみつゝ素盞烏尊五章の義なかね、音律のかずを別ちて、三十一字に定め給へり。然かあれば、和歌よく禮樂をとゝのふるが故に國治まりて異敵の爲にも破られず。佛法の流布する事も大國にすぐれたるはこれひとへに和歌の徳なり。宋朝には和歌なくして禮樂をたすけざるによりて、八宗みなうせつゝ異賊の爲に國を奪はれたり。これを思ふに、法を崇め國を守り謌をわいし給ふ神たち、定めて今の風體をにくみつゝその御とがめもあるべし。しかし。かの卿つゝがなくして勅撰を承り、今様姿のみだりがはしき歌どもをえらびおきなば、和歌こゝに絶えぬべきものなり。かつは後鳥羽院の御時、有心無心の連歌とてみだりがはしくをかしき事どもを乖ひ詠じけるを、時の歌仙ども、行く末にはやすきにつきて、無心の風をのみ好みて有心の姿を忘るべき事をなむ歎き侍りて、各無心をとゞめらるべきよしをうたへ申しける。いはむや今の歌をや。又內典につきて樂の徳をいはゞ、般若には一切諸法は聲におもむくととき、止觀には聲法界たり。一切法を具といふより初めて、諸經論にわかす所、聲の徳には然らず。然則、釋迦善逝微妙法の聲をのべて、法をときつゝ衆生を教化し、法照禪師は、五會の典をとゝのへて現身に無生忍をえしよりこのかた、月氏、日域同じく音律聲明の道をたしなまずといふ事なし。いはゆる法道和尚は、即身に極樂世界にゆきて、寶池の浪の音を引聲の念佛につたへ、慈覺大師は獨行に如法法花を修して懺悔のなじみの聲を懺法の妙典にとゞめ、また玄奘三藏は梵網戒

品に流砂のおぼれ聲を誦せしかば、出家の人はこれを學し、在家の人はかれをたとびて佛事を行ふには、この道をぞ先とし侍りける。源氏物語に、「こゑすぐれたるかぎり侍はせ給ふ念佛の曉がたなど忍びがたし」といへるも、唯その聲のよきにはあらず、聲明にすぐれたる僧をえらばれたるよし、念佛といへるは阿彌陀經の典なるべし。又おなじき物語に、「法華三昧おこなふ堂の懺法の聲、山おろしにつきて聞えくるいとたふとく瀧の音にひゞきあひたり」といへるも、大方の景氣ばかりをいへるにあらず。懺法の典に「山風のおろしぶし、瀧のつたひぶし」といふ口傳のあるを思ひよそへてかきたり。昔はかく女房だにも心え侍りけるに、今はこの名目をだに聞きたる僧もなきにや。娑婆世界は聲塵得道の國なるがゆゑに、音律たゞしければ内外の法おのづから成ずるものなり。淨藏貴所は大峰の仙人にあひてこの道を傳へしより、法驗ならびなかりけり。又いふ「公任大納言も聲明の徳によりて才能人にすぐれたりける」とかや。大原の良忍上人は卅の年もすぐすべからざるよし、まさしき宿曜相人ども勘へ申しければ、廿五の年ながら山をいでゝ大原のおくにうつり居つゝ、來迎院を建立して聲明法則をたゞしくして出離を祈りけるに、夢のつげありて稻荷社へ詣でたりける時、命婦いでさせ給ひて、水精の錫杖をくはへて上人の前におかせ給ひければ、やがて七ケ日こもりて九條錫杖を誦せられけるに、金の五古を尾にたれたりける命婦出でさせ給ひて、御聽聞ありける。これによりて上人の壽命たちまちにのびてなゝそぢあまりに至れり。又かの上人入滅の後、家寛法印、先師の跡を尋ねていなりの社にこもりつゝ、この水精の錫杖を持

して九條錫杖を誦しけるに、上人の時の如くなる命婦出でさせ給ひて御聽聞ありければ、錫杖の靈驗いまだうせざる事をたとび、聲明の秘典あやまりなかりける事を悦びけるとかや。後白河法皇はこの法印に聲明を傳へさせましまして、つねにかの水精の錫杖をめされつゝ、九條錫杖を誦せさせおはしましけるによりて、久しくたもたせましますよし御夢想ありける。また祖師蓮界上人は宜秋門院の御惱の時まゐりて法華懺法をよみけるに、懺法の聲に驚きて、六根をなやまし奉りつる鬼六人、なくなくまかりいづなど、女院の御夢に御覽ぜられたりける。曉より御心ちさわさわとならせ給ひけるとなむ申し傳へて侍り。慈鎭和尙はこの上人を先達として聲明を興行せられき。ある經に佛法滅せむとする時は聲明并まづかへるといへり。もしこの道すたれば佛法もおとろへ門跡もすたるべしとて、朝夕音律の曲をのみたしなまれければ、法驗もことにあらたに門跡も誠にさかえたりける。愚僧はかの上人の嫡家をうけて水精錫杖をば傳へて侍れど、今はやみのにしきにてそのかひなければ、

「いかにせむ磨きし玉のおのづから曇らぬ影も光なき身を。

ひと節のたえゆく末を思ふにも筧の竹のみづからぞうき」。

但かの錫杖は長壽のまもりなるゆゑに、良忍上人より先師にいたるまで五代はすでに七そぢにあまり、やそぢにあまらずといふ事なし。愚僧もはや六そぢにちかづきて侍ればその擧なしといへども、その德なきにあらず。たゞつゞりきて玉をいだけるなるべし。後嵯峨法皇わらはやみに久しくわづらはせましましけるに、さまざまの御祈かずをつくされしかども、

そのしるしなかりしかば、成源僧正をめされて冥道供おこなはれしに、僧正先師を招きよせていはく、「冥道供は九條錫杖を肝要とする上、かの水精錫杖靈驗新なり。まげてこれを持して秘曲を法樂し給へ。賴むところはたゞこれにあり」と申し侍りしによりて、參懃したりしに、やがて御おこりなかりしかば、これ我が法驗にあらず、ひとへに錫杖の効驗なるよし、僧正の許より申しおくりて侍りし狀に、かきそへたりし哥、

「いかにして神の心をうつさましさやけき玉の影なかりせば」。

先師にかはりて、かへし、

「うつしおく法の鏡の影にわひていとゞ光や玉にそひけむ」。

聲明の曲の改まりしはじめを尋ぬれば、蓮入房といひし人くはしく良忍上人の口傳をうけざりし流にて、たゞはかせに任せて大原の聲明を興行せしよりして上人の妙曲を失へり。その子細今の歌の如く、はかせにまかせ聲にまかせて思ふさまに曲をなすによりて、呂の曲は律になり、律の曲は呂になりて陰陽たがひ侍りし程に、專修念佛の曲流布して男女これにこぞりしかば人皆聲明の聞きを遠くし侍りけるに、嫡々相承の妙曲を改めし故なるべし、それよりして今に至るまで專修念佛の曲さかりなれば、正道の佛事を行ふ人まれなり。たびたびかみつ方に修せらるゝも、顯密の僧をのみめされて音律の道を尋ねられざれば、思ひ思ひの聲々みだりがはしくしてその感を催すことなければ、又これを賞せられず。賞なければまたこれを學せざるによりて、この道はやがてすたれ侍り。かの念佛は後鳥羽院の御代の末つ方

に住蓮安樂などいひしその長として弘め侍りけり。これ亡國の聲たるが故に承久(之頃)の御亂いできて王法衰へたりとは、古老の人は申しはべりし。すべて世間はことに佛法の肝心にて侍り。その故は、人の心を種とするによりて心外無別の義をあらはす。又あだなる思ひをいひ、はかなきことを語りてまことの心をのぶるはこれ權實の二教、空假中の三諦なり。密教につきていはゞ、萬のものにつけて心ざしあらはすは事理倶密の心なるべし。又六義の體をわきまへ、やさしきことをとゝのへ、深き心をあらはすは、これ身口意の三密を成ずるなり。又近きを遠くよみ、遠きを近くいひ、いまだ見ざる名所をも見たる樣によむごとくなる風情はこれ密教不思議の秘術「無所不至」の體なり。また心なき物にも心をつけ、ものいはざる物にも、ものいはするやうなる事は有情非情みな即身成佛のさとりなり。しかあるをかの卿いつはりかざる事をば實正にあらずとて、いましめ侍りてかへりては誠の心を失へるなるべし。しかのみならず、眞言は諸佛所說の肝心の言葉を撰び衆生化度の速疾の理をきはむるが故に、章句すくなしといへども功能もとも多し。哥もまたそのことば多しといへども、これを撰びすぐりて、卅一字につゞむる事眞言に同じくして、その心ざしのまことをあらはすことは、やまと言の葉にすぎたる物なく侍るに、かの卿ことばをも撰ばず、心をもすぐらずして唯思ふさまによむべしといふ義をたて侍る事、歌の道を失ふのみにもあらず、法理を破するものなり。三寶の御照覽もともおそるべきことにて侍り。凡密宗もその義理を談ずる時は、身分の動く所密印にあらずといふ事なく、言音のいへる所眞言にあらずといふことなしと

習ひ侍りしかど、まさしく行ずる時は佛菩薩の印眞言をむすび誦するごとく、歌の義をいふ時は、心を種とする事なれば我が心にまかせてよむべしといへども、げによむ時は六義の姿をやぶらず、ふるきことばをおもはえて愼みよむものなり。かつは諸法のならひ文につきて義をたつると、行にのぞみて法を修するとは、その心ざし同じからず。しかるを今愚學の禪定は僅に頌文のことばをきゝて、早く得法の思をなし、僻案の專修はたゞ一稱の文をもてたやすく往生の業をなす、これ釋迦彌陀同じく國をすて家を出でゝ難行苦行し給ひしかども、禪念兩宗の人さとりやすく行じやすきをたてゝ、學を煩はしくせざるによりて、人皆これに歸して顯密の法學する人も稀になれり。これを思ふに、今の哥は古詞をも窺はず、病をも除かず、辭をも飾らず、禁忌をも戒めず、たゞ心に任せてよむ事易き義にて侍れば、もし撰集などもありて、今樣の姿の歌どもを撰びおかれなば、行く末には皆かの義にしたがはむ事疑なき事にて侍り。古の明德は禪定といへども雪をつみ霜をかさねて座禪のゆかをしりぞかず、專修すとはいへども世をそむき身をすてゝ、唱念のまことをいたし侍りけれども、今の愚學のともがら速疾の文をひき權化の證をいひつゝ、凡身を權化にひとしくし、愚鈍を智德になずらへて行學を易くして人をも懈怠ならしめ、みづからも懈怠ならしむ。あまさへ禪宗は敎外別傳と號して諸敎をないがしろに思へるによりてこの宗盛りに流布してより後宋朝には八宗皆うせて侍るとかや。たとひ諸敎にすぐれたりといふとも、たかきはひきゝをもとゐとし、實敎は權敎よりさとる義を思ふべきにて侍るを、末學のあやまりによりて諸敎のあだと

なれり。別傳の義をいはゞ密宗にすぐべからず。いかにとならば釋尊自受法樂のため、一切經の外にこれをとき給ひて在世のあひだつひにかくして南天の鐵塔にこめおき給ひし故に秘密となづく。しかあれば金剛頂經の疏にいはく、「三密法要は諸經になき所、五智奥源はたゞこの敎にあり」といへり。又禪宗より諸宗にいふ所、その義おなじからずといへども、さとる所はたゞ是心是佛必作佛の義をはなれず。これ皆理の成佛を期する所なり。眞言は事の成佛を期するが故に即身成佛といふ。則ち釋尊成道の時、一指をあげて魔を降し、龍女成佛の時、甚深の陀羅尼を得し、みなこれ事の成佛なるべし。しかあれば現身にあらはれて成佛すべき別傳は、眞言にすぐべからず。たゞいふといはざると、しるとしらざるとなり。たゞし別傳の義に思ひて、佛神を敬ひたてまつる心ざし深からず。それ賤しき民も最初の本種姓を尋ぬれば君臣の末なりといへども、そのふるまひひとしからざるがごとく、本源清淨の佛性は同じけれど、まどひの凡夫となれるによりて、猶人身たる上はいかでか佛におなじき事をえむや。これそのあやまりの二なり。次に文字にかゝはらずとて釋尊の敎文をば信ぜずして祖師の語錄をば信ず。いかにゆゝしき祖師といふとも、佛の御言葉だにおよばぬ法をばいかでか頌文にあらはすべきや。言語不可得の義はことに眞言に談ずる所なり。大日如來不可得の因果を攝して、遮那の果德をあらはし、不可得の言語をのべて毗盧の極理をしめす。しかあれば言語をはなれずして言語をはなるといへども、いまの愚學の禪宗は、言語にかゝはらずといふことばにかゝはりてやがて言語を絕するが故に、かへりて言語をはなれず。これその

あやまりの三なり。次に他宗を破する時は敎文を用ゐず、自宗をたつる時は心外無別法とも
いひ、唯有一乘法ともいひて經文をひく所、すでに事と心と違へり。これそのあやまりの四
なり。次に心すなはち佛なりといへども、心みづから忢らず、心みづから忢らず、もし心想おこ
れば無智となる。忢らむ事をおもひていたづらに座禪の床にねぶりて妄想妄念をのみおこ
せり。これそのあやまりの五なり。次に自宗の心をもさとらず、他宗の義をもきはめずして、
たゞ別傳といふ名目ばかりをきゝて諸經にすぐれたりと思へり。これそのあやまりの六な
り。次に禪宗のともがらはみな我が身佛なりとのみ思へる故に、未得已證のとがを招く。こ
れそのあやまりの七なり。次に得法の人、意樂の門におもむきて酒肉五辛等を食せし事を例
にひきて、いまだいたらざるともがらこれをはゞからず。わに鵜鴨のよく水に浮ぶことを思
ひて庭鳥を水にいれむに、よくうくことをえむや。かつは釋迦々葉忢からざりし上は、これ
を學ばざるべきにあらず。これそのあやまりの八なり。次に宋朝は忢らず、我が朝の禪宗の
僻世の頌をきくに、大略平生の時これをつくりておきて、最後につくりたるといへり。且は
妄語なり。且は名聞なり。出離のさまたげとなるべきにや。これそのあやまりの九なり。次に
ごかひに入りて風をとふは、古賢のをしふるところなり。忢かるを禪宗のともがら、神國に
入りながら死生をいまざるが故に、垂跡のちかひを失ひて神威皆衰へてその罸あらたなら
ず。これにつきていよいよ憚らざるがゆゑに鬼病常におこり、風雨をさまらずして人民のわ
づらひをなす。これそのあやまりの十なり。すべて經論の文をひきて宗の大意を申さばたゞ

一二夜に申し盡すべきにても侍らねば、まづ大方のいはれにつきて十ケのあやまりを申し侍り。もし禪宗の人これをつたへ聞くことあらば、言葉の會釋はさまざまなりといへども心の趣はこの難を離るべからず。これも今の歌のごとくたゞ心をさきとする義を思ひて、その難をかへり見ざる故なり。宇佐宮御詫宣に云ふ、「穢浪宮にとゞまらむと思ふ、佛法を勸修して天下國土を祈らむが爲なり」。末世に及びて佛法の威衰へたり。こゝに禪宗盛にして諸國に流布する所、邪教にあひわたれるにや。すべて邪正は、法によらず心によるが故に、禪宗も正法なりといへども、あやまれる心あるによりて邪法となれるなるべし。これも今の歌の義のごとくたゞ我が心に任せてさとらむとするほどにおろかなる心にひかれてまよひ侍り。たとひ迷なしといふとも、神明の護持し給ふ所は顯密の法なり。我が國に於てはこれを學ぶべし。大照太神と申すは、遍照如來秘密の神力をもて王法を守り國土を治めむがために伊勢にて跡をたれ給へり。內宮はこれ胎藏界、外宮はこれ金剛界兩部の大日なり。五瓶の水をたゝゆるがゆゑに五鈴河といふ。五智如來に五瓶五鈴あることを表す。河のなかに鏡あり。五智の中の大圓鏡智の鏡なり。凡日吉春日の天臺法相をまもり給ふよりはじめて、諸社靈神護持し給ふ所は、皆八宗なり。就中眞言天臺は大乘無上の法にて、佛德をあらはし神威をますこと餘宗にすぐれたり。住吉の御詫宣に云ふ、「昔新羅をせめし時は、我大將軍として日吉副將軍たり。將門をうちし時は日吉大將軍としてわれ副將軍たり。これ天臺の法施によりて威光倍增の故なり」といへり。又北野天滿、大自在を得給ひて威勢を施し給ひし時、尊意僧正を

語らひ仰せられしも、秘密の神力には及ぶ事なき故なり。この教に諸佛のいたゞきにおきつゝ、うへなきによりて金剛頂經となづけられたる事、天滿大自在の、猶恐れ給ひけるにて思ひしられ侍り。すべて三世の諸佛の正覺をなし給ひしことも、一切衆生の成佛すべき事も皆眞言の功力なるべし。いはゆる第六天の魔王、成道をさまたげし時も、釋尊一指をあげて魔を降し、龍女、成佛せし時も陀羅尼をえつゝ、甚深の秘藏を悟りて後正覺を成しき。又仁王經に、「五千女人現前成佛」と說きたるも秘密の成佛なり。天臺の一生入妙覺、花嚴の三生成佛、禪宗の見性成佛、皆理によりて速疾の義をたつれども、密宗の事の成佛にくらぶれば天地懸隔なり。かるが故に、理の成佛の義をば、十住心論には徒に年刧をつみて心身を勞すといへり。たとへば理の成佛は高き山にのぼりて遙に見渡す所はへだてなしといへども、その見ゆる所へげにゆくにはおそきがごとし。然るに釋尊龍女などのやうに、現身に成佛せず。事の成佛は、たとへば一間のうちに隔てたる障子をあくればやがてひとつ所になるがごとし。しかあれば、速疾成佛の要道は密宗にすぎずといへども、眞言は人の祈りばかりをして得脫の義なきやうにのみ人皆思へり。即ち行ずる人と又身をたて驗を施さむ事を思ふ故に、この宗の人やゝもすれば慢心にひかれて天狗道におもむく、然して佛道近きが故に慢心の業をつぐのひぬれば、成佛すること程なく侍り。餘宗はみづから佛にならむとのみ勤行する程に、やがて自調自度の二乘心になりて佛意におもむきがたし。眞言は衆生の願を見てむと行ずる故に利他の力にて行法の時三摩地に入りぬれば、成佛する義あり。成佛する故に他の願を

成す。かつは東寺天台大師、先徳の驗あらたなりしにてあるべし。佛にならずしてはいかでか他を救ふべきや。名聞を思はずしては眞言に過ぎたる速疾成佛の法あるべからず。また宇佐御詫宣に云ふ、「昔我天下國土を鎭護せしはじめ、戒定惠の筥をかの松原にうづみおけり。かるがゆゑにその地を箱崎と稱す。早く穗浪宮をすてゝ箱崎に移すべし。我まさに戒定惠の力を靈鏡として朝野の人を照し、神劔としては隣國のかたきを拂はむ」といへり。この戒定惠の箱は、顯密律義の箱なるべし。戒は律、定は顯、慧は密なり。さきの御詫宣のごとく末法に及びて佛法の威衰ふるが故に、世のをさまらむことを願ふ時は、神の敎に從ふ義をもて異國の難もおこらば、この御詫宣のむねをあふぎて佛法の威をまさむがため、神明の方便にて異敵の難をおこし給ひて、神劔を振ひましましけるにや。然してそのさたなき事を驚かし給はむが爲に、又關東大地震動して神堂はたふれ燒けたりしに、律院は恙なかりけるこそふしぎにおぼえはべれ。禪宗の諸國に流布する事は、關東に建長寺を建てられし故なり。これまことに神慮にかなはざりけるやらむ。建長、正嘉、正元うち續き人のやみうせ飢饉せし事おびたゞしかりしことぞかし。これをも亦思ひ咎むる人なかりしかば、文永に彗星いで、また箱崎宮燒けしにも、御詫宣の旨をさとる人なかりし程に、異國の難きたり侍りき。それよりして今に至るまで國のさわぎとなり、また後鳥羽院の御時建仁寺いできてのち王法衰へ、かの寺禪院の洛陽にたてし初なり。聖德太子の御記文に、建の字の年號の時世の中あらたまるべきよし見えて侍り。かの御時、建の字の年號のみ多かりしにあはせてまづ王法衰へにき。

すでに鄰部建の字の年號の時、禪院みなたちはじめて後より、佛法末になれり。恐るべきはこの建の字、つゝしむべきはまた禪の法なり。たゞしいづれも佛法なればその咎あるべからずといへども、かの宗の趣は、自然智證の義をたてつゝ扇をあげ木を動かして得法をゑるやうになるによりて人皆迷へり。まことに上根上智、もしは廣學多聞の人より外はその心をさとるべからず。ゑかあるに學もなく智もなき下根のともがらおろかなる心を師として之れを傳へ習はむに豈邪見にいらざらむや。かつ達摩和尙のすゝめによりて、かの法を弘めむが爲に聖德太子この國に誕生ゑ給ひたりけれども、神明この法を愛し給はず。又小國にして機根叶ふべからざりけるゆゑにこれを弘められず、かへりて佛法うせぬべきことをおぼしめされて弘めさせ給はざりければ、達摩和尙かたをか山に化現してその心ざしを見せたてまつりける時、太子これをひろめがたきよし仰せられける御詞、

「ゑなてるや片岡山にいひにうゑてふせる旅人あはれ親なし」。

かたをか山にいひにうゑてとは、小國邊土の機根よわきこと、たゞうゑたるもゝの力なきにことならぬ義なり。ふせる旅人あはれ親なしとは親なき子のそだちがたきがごとく、うけとるべき人もなく護持すべき神もなければ、ひろめがたき義なり。この御歌によりて和尙化現ありけれども力なくてや。返歌にいはく、

「斑鳩やとみの小川のたえばこそ我が大君の御名は忘れめ」。

とみのを川のたえばこそとは、たえたる機根のあるにひろめられずばこそ君をうらみめと

いふ心なるべし。これを思ふに、權化なほ敎へがたくして弘められず。凡夫いかでか敎へ傳ふべきや。又上代の機根なほしかり、いはむや末世の我等をや。すべて至りてかしこきと至りておろかなるとは、ものにいたく不審をなさるゝが故に、今この宗の心得がたきをも心得易く思ひ、さとりがたきをもさとりやすく思へり。至りておろかなる所なり。しからば則末世の下根になりてこの宗盛りに流布せるなるべし。又專修のあやまりを聞くに、まづ難行は專修にも限らず、諸家にもきらふ所なり。その心は廣く學せむとて一法をもきはめずして一生空しくはせ過ぎばその益おろかなるべきによりてなり。專修の心これに同じ。然して難行のものは、かの國にうまれがたしといふ義につきて諸敎をばいたづら事にのみ思ひいへるがゆゑに、謗法の咎をも諸宗のあだをなす。かつは、諸論大乘の行より初めて諸行の果位を九品にわかたるゝ上は何ぞ餘行のものは生れずと思ふべきや。これそのあやまりの一なり。念佛の行は正法の機にかなはざる衆生の爲と說きて侍るを、正法にすぐれたるおもひをなすが故に、十念成就する事なし。第十八の願文のをはり、乃至五逆誹謗正法の句にてしるべしといへども、乃至十念の句をば信じて誹謗正法をばかへりみずこれその誤の二なり。次に正道專修の同じからざる義は、この生にて正道は證をえむと思ひ、淨土にて專修はさとらむと思ふ。然るにこの頃、もはら即得往生とかやの義をたてゝ即身に成佛すといへり。既に宗の大意をやぶりて正道門に入るにあらずや。そのあやまりの三なり。次に因果をわきまへざる十德五逆の罪人、善知識の敎化をきゝて驚きつゝ、日頃の罪を懺悔すれば往生する義につ

きて、惡をつくるとも苦しかるべからずとて、罪を恐れつゝしまざる事、たゞあみだ佛の罪を作れとすゝめさせ給ふに似たり。七佛みな諸善奉行、諸惡莫作と說き給へる上は、いかでかこの義を存ずべきや。十惡の往生は日頃罪とも志らず作りつるゆゑにこそゆるさるゝことにて侍るに、知りながら罪をかさむことそのことわりあるべからず。善導和尚の遺言にいはく「十惡五逆の衆生も生るといふなれば、懺悔して今なより後はつくらじと思へ」といへり。念佛の五祖の中には、三昧發得して生身のあみだ佛に對したてまつりて、三部經の釋を作り給ひたりけるとて、善導の說をさきと志ながら、かの遺言をそむきたり。そのあやまりの四なり。次に正道門は難行なれば生じ難く、淨土門は易行なれば生じ易しと思へり。易行にたつる所ぞたゞ愚なる衆生、やすき義につきて、この敎に歸する方便なり。誠に行ずる時はさらに易行にあらず。善導は三十年ねぶらずして每日に念佛十萬遍、あみだ經十卷讀誦すといへり。正道の難行もこれに及ぶべからず。又道綽四修をたてゝ「長時修無間修」といひつゝ、「唱念間斷なかりけり。然るに易行と號してねんごろに行せず、あまさへ正法にすぐれたりといふ、これその誤の五なり。次に惡をきらはざること、正道門には「煩惱卽菩提生死卽涅槃」ともいひ、又「惡性は善生の法なり、故に斷ずべからず」といふ。又父母所生の穢惡の身たちまちに卽身成佛し、五逆の達多記別にあづかる所、皆惡をゆるせりといへども、正道は行學あるによりて、その心をさとりつゝ惡をゆるさず、こゝに愚學の專修四重五逆、諸衆生一聞名號必引攝などいふ文につきて、やがて惡をきらはざる事は、專修の德正道にすぐれたり

とす。これそのあやまりの六なり。次に稱名の功能のこと、法華に一稱南無佛、皆已成佛道といふよりはじめて、諸佛菩薩の名號多羅尼いづれもみな一反三反乃至七反の證據あり。しかあるに、一念十聲の誓願はたゞみだに限れりとのみ心得り元和。これそのあやまりの七なり。次に彌陀如來、九品建立して衆生引攝し給ふ事は極樂におきてこれを敎化しつゝ、一實妙道をさとらしめむが爲なり、今の專修どもこの心をしらずして念佛のひまに遊び戲れをすとも法華經よむべからずなどいふこと、愚癡の至極なり。惠心先德は、念佛往生の衆生十三大劫をへて、蓮花の中より出生といふ事妙法蓮花經の結緣なき往生の義なり。かの經に値遇したてまつりなば、速疾に妙蓮花より出生して須臾のあひだに開悟すべしとて、廿五人の智德を撰びて、廿五三昧をはじめおこなはれし次第、晝は法花を講じ、夜は念佛を行じき。これよりかの法衆おのおの皆順次の往生をとげられ、叡山の峰に紫雲常にたなびく。蓮臺野の定覺上人これをうらやみて又おこなひ侍りけるに、蓮花化生したりければ、結界してこゝにて墓をしめむ人をばかならず引攝せむと發願をしたりけるより、蓮臺野となづけて、一切の人の墓所となれり。然るにこの頃の專修の廿五三昧には、觀經をよみて法華經をよまざるあり。本願の意樂にたがひ、眞實の利益を失ふ、これそのあやまりの八なり。次に念佛の行者、戒を保つべからずといふ事、大きなる僻案なり。まづ九品のうち中品は、持戒のもの生じ侍り。したがひて觀經には、「孝養父母、具足衆戒、菩提心等い三種の業は、三世諸佛の淨業の正因」と見えたり。彌陀如來豈三世諸佛のうちにあらずや。既に末世の一切衆生の爲之をとき給へりと

いへる上は更に異義あるべからず。然れば善導等の師祖おのおの持戒して念佛を行じき。かの遺言の旨も戒を保ちて念佛を行ずるは、少石を大船に入れて順風に行くが如し。戒を保たずして念佛を行ずるは、大石を小船に入れて惡風にはしるが如しとこそ侍るめれ。近代念佛者指南とする所の撰擇集にも、「一佛の制し給ふ所をば、一切佛同制して前佛の殺生十惡等の罪を制斷し給ふが如し」といへり。この上は釋迦の敎へ給ふ所の戒をみだ敎へ給はずと思ふべからず。これ誤の九なり。專修も禪宗のごとく死生をいまざるが故に、皆神國の風を失ふ。神明のこれをいみ給ふ事、唯世間の義にあらず。この時生死をいみて永く衆生輪廻の業をもとゞめむがためなり。去かれば我が身はたとひこれによるべからざる義をさとるといふとも、化度衆生のため、心ざしを神明におなじくしてこれをいみ侍らば、いよいよ生死を離れむ事そのさはりあるべからずといへども、一向專修と號して神慮を憚らず、濟度を思はず、これそのあやまりの十なり。この十ケの外もそのあやまりのみありといへども事おほければ略し侍りぬ。凡禪念兩宗は誠に末世流布の法なる故に、おろかなる學者のみあり。偏執の思を深くして邪見のそしりをさきとし、諸敎にすぐれたりといへり。これにつきて人皆かの兩宗におもむく所なり。すべて人の心は法を信ずるも善をつくるもたゞ名聞を思ひ、憍慢をおこすによりて法の正邪をば去らねども、諸敎にすぐれたりといふには去たがひ、佛の誓願は同じけれども、諸人の集まる堂へはあゆみを運ぶがごとし。今の歌もその心をばわきまへず、黨を結ぶ人々も多くなれり」と申し侍りし程に、鷄籠の山すでにあけなむとせしかば、

かの僧急ぎ下向し侍るとてよめりし謌、

「舟よする入江に靡く亂れ芦のさはりがちなる法の道かな。

あはれとは誰か見るべきうたかたの消えゆく跡をかきとゞむとも」。

これを記さむこと、かたがたはゞかりありぬべきによりて思ひわづらひて侍りし夜、住吉の堂の別當が許に、隆願といふ僧、御とのゐの爲に參りたるよしを申すと夢に見侍りしかば、住吉の明神の御心にかなひたるにやと思ひ侍りて永仁三の年長月のころしるしおき侍り。もし夢に見ざるを見たりと申し侍らば、大明神あらたにかゞみ給ひて、その御とがめあるべきものなり。これを野守鏡となづくる事は、はし鷹のそれたる事とも思はず、よそにみてしるす義、又守の如くいやしき身にこれをかゞみたる心、またはいにしへの野中のしみづをかゞみとして、もとの心をあらはす義なるべし。

見ぬ夢をみたりといはゞ住吉の岸による波松の末こせ。

野守鏡 終

十六夜日記

むかし、かべのなかよりもとめ出でたりけむふみの名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身のうへの事とは知らざりけりな。みづぐきの岡のくづ葉、かへすがへすも、かきおくあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。又賢王の人をすて給はぬまつりごとにももれ、忠臣の世を思ふなさけにもすてらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてしもあらで、猶このうれへこそやるかたなく悲しけれ。さらに思ひつゞくれば、やまとうたの道は、唯まことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。ひのもとの國に、あまのいはとひらけし時、よもの神だちのかぐらのことばを始めて、世を治め、物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりだちはしるし置かれたりける。さてもまた集を撰ぶ人はためしおほかれど、二たび勅をうけて、世々に聞えあげたるは、たぐひ猶ありがたくやありけむ。そのあとにしもたづさはりて、みたりのをのこゞ（爲國爲相爲守）ども、もゝちのうたのふるほぐどもを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、「道を助けよ、子をはぐゝめ、後の世をとへ」とて深きちぎりをむすびおかれし細川のながれも、ゆゑなくせきとめられしかば、あととふのりのともしびも、道をまもり、家を助けむ親子の命ももろともに、きえをあらそふ年月を經て、あやふく心ぼそきものから、何としてつれ

なくけふまでながらふらむ。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほ忍びがたく、道をかへりみるうらみはやらむかたなく、さてもなほあづま(關東)の龜のかゞみにうつさば、くもらぬ影もやあらはるゝと、せめておもひあまりて、よろづのはゞかりを忘れ、身をえうなきものになしはてゝ、ゆくりもなく　いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。さりとて、文屋康秀がさそふにもあらず、住むべき國もとむるにもあらず、ころはみふゆたつはじめの、さだめなき空なれば、ふりみふらずみ時雨もたえず、あらしにきほふこの葉さへなみだともに亂れ散りつゝ、事にふれて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとてもとゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。めかれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍從(爲相)、大夫(爲守)などのあながちにうちくつしたるさまいと心ぐるしければ、さまざま言ひこしらへ、ねやのうちを見れば、むかしの枕の(爲家)さへ、さながらかはらぬを見るにも、今更かなしくて、かたはらに書きつく、

「とゞめおくふるき枕のちりをだにわが立ちさらばたれかはらはむ」。

よゝにかきおかれける歌のさうしどもの奥書して、あだならぬかぎりをえりしたゝめて、侍從のかたへ送るとて、書きそへたるうた、

「和歌の浦にかきとゞめたるもしほぐさこれをむかしのかたみとも見よ。

あなかしこよこ浪かくなはま千鳥ひとかたならぬあとをおもはゞ」。

これを見て、侍從のかへりごといととくあり。

「つひによもあだにはならじもしほぐさかたみをみよの跡にのこせば。

まよはまし敎へざりせばはま千鳥ひとかたならぬあとをそれとも」。

このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人にきかせ奉りたくて、又うちしほたれぬ。大夫のかたはら去らずなれ來つるを、振りすてられなむなごり、あながちに思ひ知りて、手ならひしたるを見れば、

「はるばるとゆくさき遠く暮はれていかにそなたの空をながめむ」

と書きつけたる、ものより殊にあはれにて、おなじ紙に書きそへつ、

「つくづくと空なながめそこひしくば道とほくともはやかへりこむ」

とぞ慰むる。山より侍從の兄のりし(定覺)も、出でたち見むとておはしたり。それもいと心ぼそしと思ひたるを、この手ならひどもを見て、又書きそへたり、

「あだにのみ涙はかけじ旅ごろもこゝろのゆきて立ちかへるほど」

とはこといみしながら、涙のこぼるゝを荒らかに物言ひまぎらはすも、さまざまあはれなるを、あざりの君(隱慶)はやまぶしにて、この人々よりは兄なり。このたびの道のしるべにおくり奉らむとて、いでたゝるめるを、この手ならひに又まじらはざらむやはとて書きつく、

「立ちそふぞうれしかりける旅衣かたみにたのむおやのまもりは」。

をんなではあまたもなし。唯ひとりにて、この近きほどの女院(新陽明門院)に侍ひ給ふ。院のひめ宮ひ

と所うまれ給ふばかりにて、心づかひもまことしきさまにて、おとなしくおはすれば、宮の御かたの戀しさもかねて申しおくついでに、侍從大夫などのこと、はぐゝみおはすべきよしも（紙もイ）、こまかに書きつけて、奥に、

「君をこそ朝日とたのめふるさとにのこるなでしこ霜にからすな」

ときこえたれば、御かへりもこまやかに、いとあはれに書きて、歌のかへしには、

「思ひおく心とゞめはふるさとの霜にも枯れじやまとなでしこ」

とぞある。いつゝの子（[illegible]）どもの歌、のこりなく書きつゞけぬるも、かつはいとをこがましけれど、親の心には、哀におぼゆるまゝに書き集めたり。さのみ心よわくてはいかゞとて、つれなく振りすてつ。粟田口といふ所より車はかへしつ。ほどなく逢坂の關こゆるほどに、

「さだめなき命は知らぬたびなれどまたあふ坂とたのめてぞゆく」。

野路といふ所は、こしかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝりて、いと物かなしと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

「うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれてゆくさきとほき野路の篠の原」。

こよひは、鏡といふ所につくべしとさだめつれど、暮れはてゝ行きつかず、もり山（近江）といふ所にとゞまりぬ。こゝにも時雨なほしたひ來にけり、

「いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけむまなくしぐれのもる山にしも」。

今日は十六日の夜なりけり。いとくるしくて臥しぬ。いまだ月の光は、かすかに殘りたるあ

けぼのに、守山を出でゝ行く。やす川わたるほどさきだちて行くたび人の、こまのあしのおとばかりさやかにて、霧いとふかし。

「たび人はみなもろともに朝立ちてこまうちわたす野洲の川ぎり」。

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとゞまる。月出でゝ、山の峯に立ちつゞきたる松の木のま、けぢめ見えていとおもしろし。こゝは夜ぶかき霧のまよひにたどり出でつ。さめがゐといふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かちびとは、猶立ちよりて汲むめり。

「むすぶ手ににごるこゝろをすゝぎなばうき世の夢やさめが井の水」

とぞおぼゆる。

十八日（三字イ無）、美濃のくに関の藤川わたるほどに、まづ思ひつゞけゝる、

「わが子ども君につかへむためならでわたらましやは関のふぢ川」。

不破の関屋のいたびさしは、今もかはらざりけり。

「ひまおほき不破の関屋はこのほどの時雨も月もいかにもるらむ」。

関よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎてふりくらせば、道もいとわしくて、心より外に、笠縫のうまやといふ所に、暮れはてねどとゞまる。

「たび人はみのうちはらふゆふぐれの雨にやどかるかさぬひの里」。

十九日、又こゝを出でゝ行く。よもすがらふりける雨に、平野とかやいふほど、道いとわろくて、人かよふべくもあらねば、水田の面をぞさしながらわたり行く。明くるまゝに、雨はふらず

なりぬ。ひるつかた過ぎ行く道に、目に立つ社あり。人にとへば、「むすぶの神ときこゆる」といへば、

「まもれたゞちぎりむすぶの神ならばとけぬうらみに我まよはさで」。

すのまたとかやいふ川には、舟をならべて、まさきのつなにやあらむ、かけとゞめたる浮橋あり。いとあやふけれど渡る。この川つゝみのかたはいと深くて、かたかたは淺ければ、

「かたぶちのふかき心はありながら人めづゝみにさぞせかるらむ。

かりの世のゆきゝと見るもはかなしや身をうき舟を浮橋にして」

とぞ思ひつゞけゝる。また一の宮といふ社を過ぐとて、

「一の宮名さへなつかしふたつなくみつなきのりをまもるなるべし」。

二十日、尾張の國おりとといふうまやを行く、よきぬ道なれば、熱田の宮へまゐりて、硯とり出でゝ、書きつけて奉るうた、

「いのるぞよ我がおもふことなるみがたかたひくしほも神のまにまに。

鳴海がた和歌のうら風へだてずばおなじこゝろに神もうくらむ。

みつしほのさしてぞ來つるなるみがた神やあはれとみるめたづねて。

雨かぜも神のこゝろにまかすらむ我がゆくさきのさはりあらすな」。

なるみのかたを過ぐるに、しほひのほどなれば、さはりなくひかたを行く。をりしも、濱千鳥いと多くさき立ちて行くも、しるべがほなるこゝちして、

「濱千鳥なきてぞさそふ世の中にあととめむとはおもはざりしを」。
隅田川のわたりにこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、はしとあしと赤きは、この浦にもありけり。
「こととはむはしと足とはあかざりしわが住むかたのみやこ鳥かと」。
二村山を越えて行くに、山も野もいと遠くて、日も暮れはてぬ。
「はるばると二村山をゆき過ぎてなほすゑたどる野べのゆふやみ」。
やつはしにとゞまらむといふ。暗きに橋も見えずなりぬ。
「さゝがにのくもであやふき八橋をゆふぐれかけて渡りぬるかな」。
廿一日、八橋を出でゝ行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。ひるつ方になりて、もみぢいとおほき山にむかひて行く。風につれなきところどころ、くちばにそめかへてけり。ときは木ども、立ちまじりて、あをぢの錦を見るこゝちす。人にとへば、みやぢ山といふ。
「しぐれけり染むるちしほのはてはまた紅葉の錦いろかへるまで」。
この山までは、むかし見しこゝちするに、ころさへかはらねば、
「待ちけりなむかしもこえし宮路山おなじ時雨のめぐりあふ世を」。
山のすそのに竹のある所に、かやのひとつ見ゆる、いかにして、何のたよりにかくて住むらむと見ゆ。

「ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてわたりさびしき竹のひとむら」。
日は入りはてゝ、なほものゝあやめもわかぬほどに、わたうどとかやいふ所にとゞまりぬ。
廿二日のあかつき、夜ふかく有明のかげに出でゝ行く。いつよりもものかなし。
「住みわびて月の都をいでしかどうき身はなれぬありあけのかげ」
とぞ思ひつゞくる。供なる人、有明の月さへ笠きたりといふを聞きて、
「たび人のおなじみちにや出でつらむ笠うちきたるありあけの月」。
たかしの山もこえつ。海見ゆるほど、いとおもしろし。浦風あれて、松のひゞきすごく、浪いとたかし。
「わがためや浪もたかしの濱ならむ袖のみなとのなみはやすまで」。
いとしろき洲崎に、くろき鳥のむれ居たるは、うといふ鳥なりけり。
「しら濱にすみの色なるしまつ鳥ふでもおよばゞゑにかきてまし」。
濱名の橋より見わたせば、かもめといふ鳥、いとおほく飛びちがひて、水のそこへも入る。岩のうへにもゐたり。
「かもめゐる洲崎の岩もよそならず浪のかけこすそでにみなれて」。
こよひは、ひくまのしゆくといふ所にとゞまる。こゝのおほかたの名をば、濱松とぞいひし。したしといひしばかりの人々なども住む所なり。住みこし人のおもかげも、さまざま思ひ出でられて、又めぐり逢ひて見つるいのちのほども、かへすがへすあはれなり。

「濱松のかはらぬかげをたづねきて見し人なみにむかしをぞとふ」。
その世に見し人のこうまでなど、よび出でゝあひ志らふ。
廿三日、てんりうのわたりといふ舟に乗るに、西行がむかしも思ひ出でられて、いと心ぼそし。くみあはせたる舟たゞひとつにて、おほくの人のゆきゝに、さしかへるひまもなし。
「水のあわのうき世にわたるほどを見よはや瀬の小舟竿もやすめず」。
こよひは、とほつあふみ見つけのこふといふ所にとゞまる。里あれて物おそろし。傍に水の井あり。
「たれか來てみつけの里と聞くからにいとゞたびねの空おそろしき」。
廿四日、ひるになりて、さやの中山こゆ。ことのまゝとかやいふ社のほど、紅葉いとさかりにおもしろし。山かげにてあらしもおよばぬなめり。深く入るまゝに、をちこちの峯つゞき、こと山に似ず、心ぼそくあはれなり。ふもとの里に、菊川といふ所にとゞまる。
「こえくらすふもとの里のゆふやみにまつかせおくるさやの中山」。
あかつきおきて見れば、月もいでにけり。
「雲かゝるさやのなか山こえぬとはみやこに告げよありあけの月」。
川音いとすごし。
「渡らむとおもひやかけしあづま路にありとばかりはきく川の水」。
廿五日、菊川を出でゝ、けふは大井河といふ河をわたる。水いとあせて、聞きしにはたがひて

わづらひなし。河原いくりとかや、いとはるかなり。みづの出でたらむおもかげおしはからる。

「思ひいづるみやこのことはおほゐ河いく瀬の石のかずもおよばじ」。

うつの山こゆるほどにしも、あざりの見知りたる山ぶし行き逢ひたり。夢にも人をなど、昔をわざとまねびたらむこゝちして、いとめづらかに、をかしくもあはれにもやさしくもおぼゆ。いそぐ道なりといへば、文もあまたはえかゝず、唯やんごとなき所、ひとつにぞおとづれきこゆる。

「我がこゝろうつゝともなしうつの山ゆめにも遠きむかしこふとて。

つたかへでしぐれぬひまもうつの山なみだに袖の色ぞこがるゝ」。

こよひは、手越といふ所にとゞまる。なにがしの僧正とかやのぼり給ふとて、いと人しげし。やどかりかねたりつれど、さすがに人のなき宿もありけり。

廿六日、わらしな河とかや渡りて、息津の濱にうち出づ。「なくなく出でしあとの月かげ」など、まづ思ひ出でらる。ひるたち入りたる所に、あやしき黄楊のこまくらあり。いとくるしければ、うちふしたるに、硯も見ゆれば、まくらの障子に、ふしながら書きつけつ、

「なほざりにみるめばかりをかり枕むすびおきつと人にかたるな」。

暮れかゝるほど清見が關を過ぐ。岩こす浪の、白きぬをうちきつるやうに見ゆるいとをかし。

「きよみがた年ふる岩にことゝはむ浪のぬれぎぬいくかさねきつ」。

ほどなく暮れて、そのわたりの海近き里にとゞまりぬ。浦人のしわざにや、となりよりくゆりかゝる煙、いとむつかしきにほひなれば、「よるのやどなまぐさし」といひける人の詞も思ひ出でらる。よもすがら風いとあれて、浪たゞ枕のうへに立ちさわぐ。

「ならはずよよそにきゝこし清見潟あらいそ浪のかゝるねざめは」。

富士の山を見れば煙もたゝず。むかし父の朝臣にさそはれて、「いかになるみの浦なれば」などよみしころ、とほつあふみの國までは見しかば、「富士のけぶりの末も、あさゆふたしかに見えしものを、いつの年よりか絶えし」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

「たが方になびきはてゝか富士のねの煙のすゑの見えずなるらむ」。

古今の序のことばまで思ひ出でられて、

「いつの世のふもとの塵か富士のねを雪さへたかき山となしけむ。

くちはてしながらの橋をつくらばや富士の煙もたゝずなりなば」。

今宵は、浪の上といふ所にやどりて、あれたる音、更に目もあはず。

廿七日、明けはなれて、後富士川わたる。朝川いとさむし。かぞふれば十五瀬をぞ渡りぬる。

「さえわびぬ雪よりおろす富士川のかは風こほるふゆのころも手」。

けふは、日いとうらゝかにて、田子の浦にうち出づ。あまどものいさりするを見ても、

「心からおりたつ田子のあまごろもほさぬうらみと人にかたるな」

とぞ言はまほしき。伊豆の國府といふ所にとゞまる。いまだ夕日のこるほど、みしまの明神へ參るとて、よみて奉る、

「あはれとや三島の神の宮ばしらたゞこゝにしもめぐりきにけり。

おのづからつたへしあともあるものを神は知るらむしき島の道。

尋ねきてわが越えかゝる箱根路を山のかひあるしるべとぞ思ふ」。

廿八日、伊豆のこふを出でゝ、はこねぢにかゝる。いまだ夜深かりければ、

「たまくしげはこねの山をいそげどもなほ明けがたきよこ雲のそら」。

あしがら山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり。

「ゆかしさよそなたの雲をそばたてゝよそになしぬるあしがらの山」。

いとさかしき山をくだる。人の足もとゞまりがたし。湯坂とぞいふなるから、うじてこえはてたれば、又ふもとにはやかはといふ河あり、まことにはやし。木のおほく流るゝを、「いかに」ととへば、「あまのもしほ木を、浦へ出さむとて流すなり」といふ。

「あづまぢの湯坂を越えて見わたせばしほ木ながるゝ早川のみづ」。

湯坂より浦にいでゝ、日暮れかゝるにとまるべきところ遠し。伊豆の大島まで見渡さるゝうみづらを、「いづことかいふ」ととへど、知りたる人もなし。あまの家のみぞある。

「あまの住むその里の名もしらなみのよするなぎさにやどやからまし」。

まりこ河といふ河を、いと暗くてたどり渡る。こよひはさかはといふ所にとゞまる。あすは

鎌倉へ入るべしといふなり。

廿九日、さかはを出でゝ、はまぢをはるばると行く。明けはなるゝ海づらを、いとほそく月出でたり。

「浦路ゆくこゝろぼそさを浪間よりいでゝ知らするありあけの月」。

なぎさによせかへる浪のうへにきりたちて、あまたありつる釣舟見えずなりぬ。

「あま小舟こぎ行くかたを見せじとや浪にたちそふ浦のあさぎり」。

都遠くへだゝりはてぬるも、なほ夢のこゝちして、

「立ちはなれ世もうき浪はかけもせじむかしの人のおなじ世ならば」。

あづまにて住む所は、月影のやつ(極樂寺地内)とぞいふなる。浦ちかき山もとにて風いとあらし。山でら(極樂寺)のかたはらなれば、のどかにすごくて、浪の音、松の風絶えず。都のおとづれいつしかにおぼつかなきほどにしも、うつの山にて行き逢ひたりしやまぶしのたよりに、ことづけまうしたりし人の御もとより、たしかなるたよりにつけて、ありし御返しとおぼしくて、

「たびごろもなみだをそへてうつの山しぐれぬひまもさぞしぐるらむ」。

ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの月やおくれぬかたみなるべき」。

都を出でしことは、神無月十六日なりしかば、いざよふ月をおぼしめしわすれざりけるにやと、いとやさしくあはれにて、唯この返り事ばかりをぞ又きこゆる、

「めぐりあふ末をぞたのむゆくりなく空にうかれしいざよひの月」。

さきのうひやうゑのかみ(教定)の御むすめ、哥よむ人にて、勅撰にもたびたび入りたまへり。大宮院(姞子)の權中納言と聞ゆる人、歌の事ゆゑ朝夕まうしなれしかばにや、道のほどのおぼつかなさなどおとづれ給へる文に、

「はるばると思ひこそやれたび衣なみだしぐるゝほどやいかにと」。

かへりごとに、

「おもひやれ露もしぐれもひとつにて山路わけこし袖のしづくを」。

このせうとのためかぬの君も、おなじさまに、おぼつかなさなど書きて、

「ふるさとはしぐれに立ちしたびごろも雪にやいとゞさえまさるらむ」。

かへし、

「たびごろもうら風さえてかみな月しぐるゝ雲(イ袖)にゆきぞ降りそふ」。

式乾門院(利子)のみくしげどのと聞ゆるは、こがの太政大臣(通光)の御むすめ、これも續後撰よりうちつゞき、二たび三たびの家々のうちぎゝにも、歌あまた入り給へる人なれば、御名もかくれなくこそ。今は安嘉門院(邦子)に御かたとてさぶらひ給ふ。あづまぢおもひ立ちしあすとて、まかりまうしのよしに、北白河どのへ參りしかど、見えさせ給はざりしかば、「こよひばかりのいでたち、物さわがしくて、かくとだに聞えあへず、いそぎ出でしにも心にかゝり給ひ(二字イ無)て、おとづれきこゆ。草の枕ながら年さへくれぬる心ぼそさ、雪のひまなさ」などかきあつめて、

「消えかへりながむる空もかきくれてほどは雲ゐぞ雪になりゆく」

など聞えたりしを、立ちかへりその御返り事たよりあらばとこゝろがけ參らせつるを、けふは忘はすの廿二日、ふみ待ちえてめづらしくうれしさ、「まづ何事も、こまかに申したくさふらふに、こよひは御かたたがへの行幸の御うへとて、まぎるゝほどにて、思ふばかりも、いかゞとはいならこそ。御たびおすとて、御まゐりありける日しも、茶殿のもみぢ見にとて、わかき人々さそひにしほどに、後にこそかゝる事ども聞え候ひしか。などや、かくとも御たづね候はざりし。

ひとかたに袖やぬれましたび衣たつ日をきかぬうらみなりせば」。

さてもそれより雪になりゆくと、おしはかりの御返り事は、

「かきくらし雪ふる空のながめにもほどは雲ゐのあはれをぞ知る」

とあれば、このたびは又、立つ日を忘らぬとある、御返しばかりをぞ聞ゆる。

「心からなにうらむらむたびごろもたつ日をだにも知らずがはにて」。

あかつきたよりありと聞きて、よもすがら起きゐて、都の文ども書く中に、ことにへだてなく、あはれにたのみかはしたるあね君に、をさなき人々のこと、さまざまに書きやるほど、いの浪風はげしく聞ゆれば、たゞ今あるまゝの事をぞ書きつけゝる。

「夜もすがらなみだも文もかきあへずいそこす風にひとりおきゐて」。

又おなじさまにて、ふるさとには戀ひ忘のぶおとうとの尼うへにも、文たてまつるとて、いそものなどのはしばしも、いさゝかつゝみ集めて、

「いたづらにめかり玄はやくすさびにも戀しやなれし里のあま人」。

ほど經て、このおとゞひふたりのかへりごと、いとあはれにて見れば、姉君、

「たまづさを見るに涙のかゝるかないそこす風はきくこゝちして」。

この姉君は、中のゐんの中將ときこえし人のうへなり。今は三位入道とか。おなじ世ながら遠ざかりはてゝ、おこなひゐたる人なり。そのおとうとの君も、「めかり玄はやく」とある返り事、さまざまにかきつけて、「人こふる涙のうみはみやこにも枕の下にたゝへて」などやさしく書きて、

「もろともにめかり鹽やく浦ならばなかなか袖になみはかけじを」。

この人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくすることゞもを、思ひつらねて書きたるも、いとあはれにもをかし。ほどなく年くれて、春にもなりにけり。かすみこめたるながめのたどたどしさ、谷の戸はとなりなれども鶯のはつねだにもおとづれこず。思ひなれにし都の空は忍びがたく、昔の戀しきほどにしも、又都のたよりありとつげたる人あれば、れいのところどころへの文かく中に、いざよふ月とおとづれ給へりし人の御もとへ、

「おぼろなる月はみやこの空ながらまだ聞かざりしなみのよるよる（なよなよ）」

などそこはかとなき事どもをかきこえたりしを、たしかなる所よりつたはりて、御かへりごとをいたうほども經ず、待ち見たてまつる。

「ねられじな都の月を身にそへてなれぬまくらのなみのよるよる（なよなよ）」。

權中納言（以敘女）の君は、まぎるゝことなく歌をよみたまふ人なれば、このほど手ならひにしたる歌ども、かき集めてたてまつる。海近き所なれば、貝などひろふ折も、「なぐさの濱ならねば、猶なき心ちして」など書きて、

「いかにしてしばし都をわすれ貝なみのひまなくわれぞくだくる。
知らざりしうらやま風も梅が香はみやこに似たる春のあけぼの。
はなぐもりながめてわたる浦風にかすみたゞよふはるの夜の月。
あづまぢの磯やま風のたえまよりなみさへ花のおもかげにたつ。
みやこ人おもひも出でばあづまぢの花やいかにと音づれてまし」

など、たゞふでにまかせて思ふまゝに、いそぎたるつかひとて、書きさすやうなりしを、又はどへず返り事し給へり。「日ごろのおぼつかなさも、この文にかすみはれぬる心ちして」などあり。

「頼むぞよしはひにひろふうつせ貝かひある浪の立ちかへる世を。
くらべ見よ霞のうちのはるの月晴れぬこゝろはおなじながめを。
しら浪のいろもひとつにちる花を思ひやるさへおもかげにたつ。
あづまぢのさくらを見ても忘れずばみやこの花を人やとはまし」。

やよひの末つかた、わかわかしきわらはやみにや、日まぜにおこること、二たびになりぬ。あやしうしをれはてたるこゝちしながら、三たびになるべきあかつきより起きゐて、佛のおま

へにて、心をひとつにして、法華經をよみつ。そのしるしにや、なごりもなくおちたる、折しも都のたよりあれば、かゝる事こそなど、古郷へもつげやるついでに、れいの權中納言の御もとへ、「旅の空にて、あやふきほどの心ぼそさも、さすが御法のしるしにや、けふまではかけとゞめて」とかきて、

「いたづらにあまの鹽やくけぶりとも誰かは見まし風に消えなば」

と聞えたりしを、おどろきてかへりごととく給へり、

「消えもせじ和歌の浦ぢに年をへて光をそふるあまのもしほ火」。

御經のしるし、いとたふとくて、

「たのもしな身にそふ友となりにけりたへなるのりの花のちぎりは」。

うづきのはじめつ方たよりあれば、又おなじ人の御もとへ、「こぞの春夏のこひしき」など書きて、

「見し世こそかはらざるらめ暮れはてゝ春よりなつにうつる梢も。

夏ごろもはやたちかへてみやこ人いまや待つらむ山ほとゝぎす」。

そのかへりごと又あり、

「草も木もこぞ見しまゝにかはらねどありしにも似ぬ心ちのみして。

さてほとゝぎすの御たづねこそ、

人よりも心つくしてほとゝぎすたゞひとこゑをけふぞ聞きつる。

さねかたの中將の、五月まで時鳥きかで、みちのくにより、都にはきゝふるすらむほとゝぎす聞のこなたの身こそつらけれとかや申されたることの候ふなる。そのためしと思ひ出でられて、この文こそことにやさしく」など書きておこせ給へり。さるほどに、卯月の末になりければ、郭公のはつねはのかにもおもひ絶えたり。人づてにきけば、「ひきのやつといふ所に、あまた聲鳴きけるを、人聞きたり」などいふをきゝて、

「しのびねはひきのやつなるほとゝぎす雲ゐに高くいつかなのらむ」

などひとり思へどもそのかひもなし。もとよりあづまぢは、みちのおくまで昔よりほとゝぎすまれなるならひにやありけむ。ひとすぢに又鳴かずばよし。まれにも聞く人ありけるこそ人わきしけるよと心づくしにうらめしけれ。又くわとく門院（子為）の新中納言ときこゆるは、京極の中納言定家の御むすめ、深草のさきの齋宮ときこえしに、父の中納言のまゐらせおき給へるまゝにて、年へ給ひにける。この女院は、齋宮（子熈）の御子にしたてまつり給へりしかば、つたはりてさふらひ給ふなり。「うき身こがるゝもかり舟」などよみ給へりし民部卿のすけのせうとにてぞおはす（一存し）る。さる人の子にて、怪しき哥よみて、「人には聞かれじ」とあながちにつゝみたまひしかど、はるかなる旅の空おぼつかなさに、あはれなる事どもをかきつゞけて、

「いかばかり子を思ふつるのとびわかれならはぬ旅の空になくらむ」

と文のことばにつゞけて哥のやうにもあらず書きなし給へるも、人よりはなほざりならず

おぼゆ。御かへりごとは、

「それゆゑにとび別れてもあしたづの子を思ふかたはなほぞ悲しき」

ときこゆ。そのついでに、故入道大納言殿、草のまくらにも立ちそひて、夢に見えさせたまふよしなど、この人ばかりやあはれともおぼさむとて書きつけて奉る、

「都までかたるもとほしおもひねに忍ぶむかしのゆめのなごりを。

はかなしやたびねの夢にまよひ來てさむれば見えぬ人のおもかげ」。

など書きて奉りしを、又あながちにたより尋ねて、かへりごと給へり。さしも忍び給へりしも、をりからなりけり。

「あづまぢの草のまくらはとほけれどかたれば近きいにしへの夢。

いづくより旅ねのゆかにかよふらむ思ひおきつる露をたづねて」

などのたまへり。夏のほどは、あやしきまでおとづれもたえて、おぼつかなさも一かたならず。都のかたは、志賀のうらなみたち、山三井寺のさわぎなどきこゆるも、いとゞおぼつかなし。からうじて、八月二日ぞつかひまちえ、日ごろよりおきたりける人々の、文どもとり集めて見つる。侍從のさいしやうの君のもとより、「五十首の和歌をよみたりける」とてきよがきもゑあへずくだされたり。哥もいとをかしくなりにけり。五十首に、十八首てんあひぬるもあやしく、心のやみのひがめにこそあるらめ。その中に、

「こゝろのみへだてずとても旅ごろも山ぢかさなるをちのしら雲」

とある哥を見るに、旅のそらを思ひおこせてよまれたるにこそはと、心をやりてあはれなれば、その歌のかたはらに、もじちひさく返り事をぞかきそへてやる。

「戀ひ玄のぶこゝろやたぐふあさ夕にゆきてはかへるをちの白雲」。

又おなじたびの題にて、

「かりそめの草のまくらのよなよなを思ひやるにも袖ぞつゆけき」

とある所にも、又かへりごとをぞかきそへたる、

「秋ふかき草のまくらに我ぞなくふりすてゝこしすゞむしのねを」。

又この五十首の歌のおくに、ことばをかきそふ。おほかた歌のさまなど玄るしつけて、おくに昔の人（爲家）の歌、

「これを見ばいかばかりかと思ひつる人にかはりてねこそなかるれ」

と書きつく。侍從の弟爲守の君のもとよりも、三十首の歌をおくりて、「これにてんあひて、わろからむ事をこまかに玄るしたべ」といはれたり。ことしは十六ぞかし。歌のくちなれば、やさしくおぼゆるも、かへすがへす心のやみと、かたはらいたくなむ。これも旅の歌には、こなたを思ひてよみたりけりと見ゆ。下りしほどの日記を、この人々のもとへつかはしたりしを、よまれたりけるなめり。

「立ち別れ富士のけぶりを見てもなほ心ぼそさのいかにそひけむ」。

又これも返しをかきつく、

「かりそめに立ちわかれても子を思ふおもひを富士の煙とぞ見し」。
また權中納言の君、こまやかに文かきて、「くだり給ひし後は、歌よむ友もなくて、秋になりてはいとゞ思ひいで聞ゆるまゝに、ひとり月をのみながめあかして」など書きて、
「あづまぢの空なつかしきかたみだに忍ぶなみだにくもる月かげ」。
この御返り事「これもふるさとの戀しさ」などかきて、
「かよふらしみやこの外の月見ても空なつかしきおなじながめは」。
都の歌どもこののち多くつもりたり。又かきつくべし。

「しきしまや　やまとのくには　あめつちの　ひらけはじめし
むかしより　いはとをあけて　おもしろき　かぐらのことば
うたひてし　さればかしこき　ためしとて　ひじりの御世の
みちしるく　ひとのこゝろを　たねとして　よろづのわざを
ことのはに　おにがみまでも　あはれとて　八しまのほかの
よつのうみ　なみもしづかに　をさまりて　そらふくかぜも
やはらかに　えだもならさず　ふるあめも　ときさだまれば
きみぎみの　みことのまゝに　したがひて　わかのうらぢの
もしほぐさ　かきあつめたる　跡おほく　それがなかにも
名をとめて　三代までつぎし　ひとの子の　おやのとりわき

ゆづりてし
しなのなる
とがとてや
ちぎりおく
やまがはの
みなかみも
いをのごと
わびはつる
出でしかど
しげゝれば
うめのはな
なかぞらの
さゝがにの
たまづさも
いかならむ
世のためも
さまざまに

そのまことさへ
そのはゝき木の
世にもつかへよ
須磨とあかしの
わづかにいのち
せきとめられて
かぢを絶えたる
子をおもふとて
身はかずならず
きこえあげてし
四とせのはるに
かぜにまかする
いかさまにかは
さてくちはてば
これをおもへば
つらきためしと
書きのこされし

ありながら
そのはらに
生ける世の
つゞきなる
かけひとて
いまはたゞ
ふねのごと
よるのつる
かまくらの
ことのはも
なりにけり
ふるさとは
なりぬらむ
あしはらの
わたくしの
なりぬべし
ふでのあと

おもへばいやし
たねをまきたる
身をたすけよと
ほそかはやまの
つたひしみづの
くがにあがれる
寄るかたもなく
なくなくみやこ
世のまつりごと
えだにこもりて
ゆくへも知らぬ
のきばもあれて
世々のあとある
みちもすたれて
なげきのみかは
ゆくさきかけて
かへすがへすも

いつはりと　おもはましかば　ことわりを　たゞすのもりの
ゆふしでに　やよやいさゝか　かけてとへ　みだりがはしき
すゑの世に　あさはあとなく　なりぬとか　いさめ置きしを
わすれずば　ゆがめることを　またたれか　ひきなほすべき
とばかりに　身をかへりみず　たのむぞよ　そのよを聞けば
さてもさは　のこるよもぎと　かこちてし　ひとのなさけも
かゝりけり　おなじはりまの　さかひとて　ひとつながれを
汲みしかば　野なかのしみづ　よどむとも　もとのこゝろに
まかせつゝ　とゞこほりなき　みづぐきの　あとさへあらば
いとゞしく　つるがをかべの　あさひかげ　八千代のひかり
さしそへて　あきらけき世の　なほもさかえむ。
ながゝれとあさゆふいのる君が代をやまとことばにけふぞのべつる」。

十六夜日記　終

轉寢記

もの思ふことの慰むにはあらねど、ねぬ夜の友とならひにける月の光待ち出でぬれば、例の妻戸おしあけて唯一人み出したる。あれたる庭の秋の露かこち顔なる蟲のねも物ごとに心をいたましむるつまとなりければ、心に亂れおつる泪をおさへて、とばかりこし方ゆくさきを思ひつゞくるに、さもあさましくはかなかりける契の程を、などかくしも思ひいれけむと我が心のみぞかへすがへす怨めしかりける。夢現ともわきがたかりし宵のまより、關守のうちぬる程をだにいたくもたどらずなりにしや。うちぬる夢のかよひ路は、一夜ばかりのとだえもあるまじき樣に習ひにけるを、さるは月草のあだなる色を、かねてしらぬにしもあらざりしかど、いかにうつり、いかに染めける心にか、さもうちつけに生憎なりし心迷ひには、ふし柴のとたに思ひしらざりける。やうやう色づきぬ秋の風のうきみにしらるゝ心ぞうたてく悲しきものなりけるを、おのづから頼むる宵はありしにもあらず。うち過ぐる鐘の響をつくづくと聞きふしたるも、いける心ちだにもせねば、げに今更に鳥はものかはとぞ思ひしられける。さすがにたえぬ夢の心ちは、ありしにかはるけぢめも見えぬものから、とにかくに障りがちなる蘆分船にて、神無月にもなりぬ。降りみふらずみ定めなき頃の空のけしきはいとゞ袖の暇なき心ちして、おきふしながめわぶれど、絶えて程ふる覺束なさの、ならはぬ

日數の隔つるも、今はかくにこそと思ひなりぬるよの心細さなどなにゝ譬へてもわかず悲しかりけるを。いとせめてわくかるゝ心催すにや、遂にうづまさに詣でむと思ひ立ちぬるも、かつうはいと怪しく、佛の御心の中はづかしけれど、二葉より參りなれにしかばすぐれて賴もしき心ちして、心づからのなやましさも愁ひ聞えむとにやあらむ。しばしは御前に、ともなる人々「時雨しぬべし。はやかへり給ひね」などいへば心にもあらず急ぎ出づるに、はふこんかう院の紅葉此の頃ぞさかりと見えて、いとおもしろかりければすぎかてにりおりぬ。高欄のつまの若いうへにおりゐて、山の方をみやれば、木々の紅葉色々に見えて、松にかゝれる蔦の心の色も、ほかにもことなる心ちしていと見所多かるに、うき古郷はいとゞ忘られぬるにや、とみにもたゝれず。なりしも風さへ吹きて、物騷かしくなりければみさすやうにてたつ程、

「人しれず契りし中のことの葉を嵐ふけとは思はざりしを」

と思ひつゞくるにも、すべて思ひさまさることなき心のうちならむかし。歸りてもいとくるしければ、うち休みたる程、御ふみとて取り入れたるも、むねうち騷きてひきひろげたれば、たゞ今の空の哀に、日比の怠りをとりそへて、細やかにかきなされたる墨つきの筆のながれもいとみ所ありと、例の中々かきみだす心まよひにことの葉の續きもみえずなりぬれば、御かへりもいかゞ聞えけむ。名殘もいと心ぼそくて、この御文をつくづくと見るにも、日比のつらさはみな忘られぬるも、人わろき心の程やとまたうちおかれて、

「これやさはとふもつらさのかずかずに涙をそふる水莖の跡」

れいの人忘れずなかみち近きそらにだに、たどたどしきゆふやみに、契たがへぬ忘るべばかりにて歸きせず、夢のこゝちするにも、いできこえむ方なければ、たゞいひしゝらぬ泪のみむせかへりたる、あかつきにもなりぬ。枕に近き鐘の音も唯今の命を限る心ちして、我にもあらずおき別れにし袖の露、いとゞかこちがましくて、昔やこしともおもひわかれぬなかみちに例の頼もし人にてすべりいでぬるも、かへすかへす夢のこゝちなむおぼえける。彼處にはうめきたの方わづらひ給ひけるが、つひに消え果て給ひにければ、その程のまぎれにや、またはどふるもことわりながら、いひしにたがふつらさはしも、ありしにまさる心ちするは、いかに思し惑ふらむと、とりわきたりける御思の名殘もいと苦しく推し量り聞ゆれど、あはれ忘る心の程、中々聞えむ方なくて、日數ふるいぶせさをかれかれぞ燃かし給ひつる、つれなさ、よのあはれさも、みづからきこえあはせたくなどあれば、例のうちぬる程の鐘の響に人忘れずたのみをかくるも、おもへばあさましくよの常ならずあだなる身のゆくへ、つひにいかに成り果てむとすらむとこゝろぼそくおもひつゞくるにも、ありしながらの心ならましかば、うきたる身のとがもかうまでは思ひ忘らずぞ過ぎなましなど思ひつゞくるに、今さら身のうさもやる方なく悲しければ、今宵はつれなくてやみなましなど思ひ亂るゝに、例のまつほど過ぎぬるはいかなるにかと、さすがめも合はず、みじろき臥したるに、かのちひさき童にや、忍びやかに打ち敲くを聞きつけたるには、賢く思ひ靜むる心もいかなりぬるにか、やを

ちして、すいがいのうち殘りたるひまに立ち隱るゝも、彼のひだちのみやの御すまひ思ひ出でらるゝに、いるかたえたふ人の御さまぞ、ことたがひておはしけれど、立ちよる人の御おもかげはしもさとわかぬ光にも並びぬべき心ちするは、あながちに思ひ出でられて、さすがにおぼし出づるをりもやと、心をやりて思ひつゞくるに愧かしきことも多かり。ゑはすにもなりぬ。雫かきくらして風もいとすさまじき日、いとゞくおはしまはして人二三人ばかりして物語などするに、「夜もいたく更けぬ」とてひとはみな寢ぬれど、露まどろまれぬに、やをら起き出でゝみるに、宵には雲がくれたりつる月の、浮雲まがはずなりながら、山のは近き光の朗かにみゆるは七日の月なりけり。みし夜のかぎりも今宵ぞかしと思ひいづるに、たゞそのをりの心ちして、さだかにもおぼえずなりぬる御おもかげさへ、さし向ひたる心ちするに、まづ掻きくらす涙に月の影もみえずとて、佛などの見え給ひつるにやと思ふに、はづかしくも賴もしくも成りぬ。さるは月日にそへてたへ忍ぶべき心ちもせず、心細しなることのみまされば、よしや思へばやすきと、ことわりに思ひ立ちぬる心のつきぬるぞわりし夢のゑるしにやと嬉しかりける。「今はと物を思ひなりにしも」といへばえに悲しきこと多かりける。春ののどやかなるに、何となく積りにける手習のほんどなどやり返す序に、かの御文どもをとりいでゝみれば、梅がえの色づきそめし初より、冬草かれはつるまで、折々の哀忍びがたきふしぶしを、うちとけて聞えかはしけることの積りける程も、今はとみるは哀れ淺からぬなかに、いつぞや常よりも目留まりぬらむかしと覺ゆる程に、こなたのあるじ「今宵は

いと寂しく物おそろしき心ちするに、爰にふし給へ」とて我がかたへも歸らず成りぬ。あなむつかしと覺ゆれど、せめて心の鬼もおそろしければ、かへりなむとも云はでふしぬ。人はみな何心なくねいりぬる程に、やをらすべりいづれば、ともし火の殘りて心細き光なるに、人や驚かむとゆゝしくおそろしけれど、たゞ障子ひとへをへだてたる居どころなれば、ひるより用意しつるはさみばこの蓋などの、程なく手にさはるもいと嬉しくて、かみを引分くるほどぞさすがおそろしかりける。そぎおとしぬれば、この蓋にうち入れて、かき置きつる文なども取り具しておかむとする程、いでつる障子口より火の光のなほほのかにみゆるに、かきつくる硯の、ふたもせでありけるが傍にみゆるを引きよせて、そぎおとしたる髮を押しつゝみたるみちのくに紙のかたはらに、たゞうち思ふことを書きつれど、外なるともし火の光なれば、筆のたちどもみえず。

「歎きつゝわが身を早きせのそことだに忘らず迷はむ跡ぞ悲しき」と

身をもなげてむと思ひけるにや、たゞ今も出でぬべき心ちして、やをらはしをあけたれば、つごもりごろの月なき空に、天雲さへ立ちかさなりて、いと物おそろしう暗きに、夜もまだふかきに、とのゐ人さへ折しもうちこわづくろふもむつかしと聞きゐたるに、かくても人にやみつけられむとそらおそろしければ、もとのやうに入りてふしぬれど、傍なる人うちみじろぎだにせず。さきざきもとのゐ人の夜深くかどをあけて出づるならひなりければ、その程を人忘れずまつに、今宵しもとくあけて出でぬるおとすれば、さるは心ざす道もはかばかし

くも覺えず。こゝも都にはあらず、北山の麓といふ處なれば人目しげからず。木の葉の蔭につきて夢のやうに見置きし山ぢをたゞ獨行くこゝち、いといたくおそろしかりける。山びとの目にも咎めぬまゝに、奇しく物ぐるはしき姿したるも、すべて現のことゝも覺えず。さてもかの處、西山の麓なればいと遙なるに、夜中より降りいでつる雨の、明くるまゝにしほしほとぬゝる程になりぬ。故里よりさがのわたりまでは、すこしも隔たらず見渡さるゝほどの道なれば、さはりなく行き着きぬ。夜もやうやうほのぼのとする程に成りぬれば、みちゆき人もこゝもとはいとあやしと咎むる人もあれば、物むつかしくおそろしき事、このよにはいつかは覺えむ。たゞ一すぢに亡きになしはてつる身なれば、あしのゆくに任せてはや山深く入りなむとうちも休まぬまゝに、苦しくたへがたきことしぬばかりなり。いるあらしの山の麓に近づく程、雨ゆゝしく降りまさりて、むかへの山をみれば、雲の幾重ともなく折り重なりて、行く先もみえず。からうじてはふりんの前過ぎぬれば、はては山路に迷ひぬるぞすべき方なきや。をしからぬ命もたゞ今ぞ心ぼそく悲しき。いとゞ掻き暮す泪の雨さへふりそへて、こし方ゆくさきもみえず、思ふにもいふにもたらず。今とぢめはてつる命なれば、身のぬれとほりたること伊勢の白水郎にもこえたり。いたくまはりはてにければ、松風のあらあらしきを頼もし人にて、これも都の方よりと覺えて、簑笠などきてさへづりくる女あり。小童のおなじ聲なると物語するなりけり。これや桂の里のひとならむとみゆるに、唯歩みよりて「これは何人ぞあな心う、御前は人のてを逃げ出で給ふか、又くちろんなどをし給ひた

りけるにか。何故かゝるおほ雨に降られてこの山中へ出で給ひぬるぞ。いづくより何國をさしておはするぞ。あやしあやし」とさへづる。なにといふ心にか、舌をたびたびならして「あないとほしあないとほし」とくり返しいふぞ嬉しかりける。志きりに身のありさまを尋ぬれば、「これは人を恨むるにもあらず、また口ろんとかやをもせず、たゞ思ふことありてこの山のおくに尋ぬべきことありて、夜ふかく出でつれど、雨もおびたゞしく山路さへ惑ひて、こし方もおぼえず、行く先も見え志らず、志ぬべき心ちさへすれば、こゝによりゐたるなり。同じくばそのわたりまでみちびき給ひてむや」といへば、いよいよいとほしがりて、手をひかへて導く情のふかさぞ佛の御志るべにやとまで嬉しくありがたかりける。程なく送りつけてかへりぬ。まちとる處にも「怪しく物ぐるほしきものゝさまかな」と見驚く人おほからめなれども、かつらの里のひとの情におとらめやは。さまざまに助けあつかはるゝほど、山路はなほ人のこゝちなりけるが、今はとうち休むほど、すべてこゝちも失せて、露ばかり起きもあがられず、いたづらものにてふしたりしを、都人さへ思ひの外に尋ね志る便ありて、三日ばかりはとにかくにさはりしかども、ひとひに本意とげしかば、一すぢにうちも嬉しく思ひなりぬ。さてこの所をみるに、うき世ながらかゝる所もありけりと凄く思ふさまなるに、行ひなれたるあま君たちの、よひ曉のわか志らず、こゝかしこにせぬれいのおとなどを聞くにつけても、そゞろに積りけむ年月のつみも、かゝらぬ所にてやみなましかば、いかにせましと思ひ出づるにぞみもゆる心ち志ける。故里の庭もせに愛き志らせし秋風は、ほけ三まいの

峰の松風に吹きかよひ、ながむる門におもかげと見し月影は、りやうじゆせんの雲ゐはるかに心を送るしるべとぞなりにける。

「捨てゝ出でしわしのみ山の月ならで誰をよなよな戀ひ渡りけむ」。

ゆたのたゆたに物をのみ思ひくちにし果は、うつゝ心もあらずあくがれそめにければ、さまざま世のためしにもなりぬべく、思の外にさすらふる身のゆくへを、おのづから思ひしづむる時なきにしもあらねば、かりのよの夢の中なるなげきばかりにもあらず。くらきより暗きにたどらむ長きよの惑を思ふにも、いとせめて悲しけれど、心は心として猶おもひなれにし夕暮のながめにうちそひて、ひと方ならぬ恨もなげきもせきやるかたなき胸のうちを、はかなき水莖のおのづから心のゆく使もやとて、人しれず書きながせど、いとゞしき泪の催しになむ。いでやおのづから大かたのよの情をすてぬなげの哀ばかりを折々にちりくる言の葉もありしにこそ。露の命をもかけて、今日までもながらへてけるを、うきよの人のつらきいつはりにさへならひはてにけることもあるにや。おなじ世とも覺えぬまでにへだゝり加てにければ、ちかの鹽がまもいとかひなき心ちして、

「陸奥のつぼのいしぶみかき絶えてはるけき中と成りにけるかな」。

日ごろ降りつる雨のなごりに、たちまふ雲まの夕づく夜のかげはのかなるに、おしあけがたならねど、うき人しもと生憎なる心ちすれば、妻戸は引き立てつれど、かど近く細き川の流れたる水のまさるにや、常よりもおとする心ちするにも、いつの年にかわらむ、此の川の水

の出でたりしに人忘れず、波をわけしことなど、たゞ今のやうにおぼえて、

「思ひ出づる程にも波はさわぎけりうきよをわけて中川の水」。

あれたる庭に呉竹のたゞすこしうちなびきたるさへ、そゞろに恨めしきつまとなるにや、

「よとともに思ひいづれば呉竹の怨めしからぬ其のふしもなし。

おのづからことの序になど、はかり騒かし聞えたるにも、よの煩はしさに、思ひながらのみなむ。さるべき序もなくて、みづから聞えさせず」など、なほざりに書きすてられたるもいと心うくて、

「消えはてむ煙ののちの雲をだによも眺めじな人めもるとて」

とおぼゆれど、心のうちばかりにてくたしはてぬるはいとかひなしや、そのころ心ち例ならぬことありて、命も危き程なるを、こゝながらともかくもなりなば煩はしかるべければ、思ひかけぬたよりにて、おたぎの近き所にてはかなきやどりもとめいでゝうつろひなむとす。かくとだに聞えさせまほしけれど、とはず語りもあやしくて、なくなくかどを引きいづる折しも、先にたちたる車あり。さき華やかにおひて、こせんなどことごとしくみゆるを、たればかりにかと目留めたりければ、彼のひと忘れず恨みきこゆる人なりけり。かは忘るさ随身などまがふべうもあらねば、かくとは思し寄らざらめど、そゞろに車の中はづかしく、はしたなき心ちながら、今一たびそれとばかりもみ送り聞ゆるはいと嬉しくも哀にも、さまざま胸静ならず、つひにこなたかなたへ行き別れ給ふ程、いといたう顧みがちに彼處にゆきつきた

れば、曾て聞きつるよりもあやしくはかなげなる所のさまなれば、いかにして堪へ忍ぶべくもあらず。暮れはつる谷のけしきも、日頃にこえて心ぼそくもかなし。街ゐすべき友もなければ、あやしくしきも定めぬとふの菅薦に、たゞひとりうちふしたれど、とけてしも寝られず。

「はかなしな短き夜はの草枕結ぶともなきうたゝねの夢」。

日頃ふれどとひくる人もなし。心ぼそきまゝに、きやうづと手に持ちたるばかりぞたのもしき友なりける。せかいふらうことも有る處をしひて思ひつゞけてぞ、うき世のゆめも自ら思ひさますたよりなりける。けふか明日かと心細き命ながら卯月にもなりぬ。いざよひの光まち出でゝ、程なき窻の玄とみだつものもおろさず、つくづくと眺めいでたるに、はかなげなる垣ねの草に、まどかなる月影に、ところがらあはれ少からず。

「おく露の命まつまのかりの庵に心細くも宿る月影」。

いづくにかあらむ、幽かに笛の音のきこえくる。かの御わたりなりしねに迷ひたる心ちするにも、きと胸ふたがるこゝちするを、

「待ちなれし故里をだにとはざりし人はこゝまで思ひやはよる」。

さても猶うきにたへたる命のかぎり有りければ、やうやう心ちもをこたりざまになりたるを、かくてしもやとてまた故郷にたちかへるにも、松ならぬ梢だにそゞろにはづかしくみまはされて、

「消えかへり又はくべしと思ひきや露の命の庭の淺ぢふ」。

歎きながら、はかなく過ぎて秋にもなりぬ。ながき思ひの終宵やむともなき砧の音、寢屋ちかき蛬のこゑの亂れも、ひと方ならぬねざめの催しなれば、壁にそむける灯火のかげばかり友として、あくるをまつもしづ心なく、盡きせぬなみだのしづくは窓うつ雨よりもなり。いとせめてわびはつる慰に、「さそふ水だにあらば」と朝夕のこと草に成りぬるを、そのころ後の親とかたのむべきことわりも淺からぬひとしも、遠つあふみとかや、聞くもはるけき道を分けて都の物詣せむとて登りきたるに、何となく細やかなる物語などする序に、「かくてつくづくとおはせむよりは、ゐなかのすまひもみつゝ、なぐさみたまへかし。かしこも物騷がしくもあらず。心すまさむ人はすみぬべきさまなる」などなほざりなく誘へど、さすがひたみちにふりはなれなむ都のなごりもいづくを忍ぶ心にか、心ぼそくおもひわづらはるれど、あらぬすまひに身をかへたると思ひないしてとだに、憂きを忘るゝたよりもやと、あやなく思ひたちぬ。下るべき日に成りぬ。夜ふかく都を出でなむとするに、ころは神無月の廿日あまりなれば、有明の光もいと心細く、風の音もすさまじく身にしみとほる心ちするに、人はみな起きさわげど、人しれぬ心ばかりには、さてもいかにさすらふるみのゆくへにかと、たゞ今になりては心ぼそきことのみおほかれど、さりとて留るべきにもあらねば、出でぬるみちすがら、先かきくらす涙の先に立ちて心細く悲しきことぞなにゝ譬ふべしとも覺えぬ程なく逢坂山になりぬ。おとに聞きし關の淸水も、たえぬ涙とのみ思ひなされて、

「越えわぶるあふさか山の山水はわかれにたえぬ涙とぞ見る」。

あふみの國野路といふ處より、雨かきくらしふり出で、都の山をかへりみれば、霞にそれとだにみえず。隔たりゆくもそゞろに心細く、何とて思ひ立ちけむと悔しきこと數しらず。とてもかくてもねのみ泣きがちなり。

「すみわびて立ち別れぬる故里もきてはくやしき旅衣かな」。

道のほど目留まる所々多かれど、こゝはいづくいづくともけぢかくとふべき人もなければ、いづくの野も山もはるばるとゆくを、とまりもしらず、人のゆくにまかせてゆめぢをたどるやうにて、日數ふるまゝにさすがならはぬひなのなが路におとろへはつる身も、われかのこゝちのみして、みのをはりの堺にもなりぬ。すのまたとかや、ひろびろとおびたゞしき河あり。ゆきゝの人集りて舟をやすめずさしかへるほど、いと所狹うかしがましく怖ろしきまで罵りあひたり。からくしてさるべき人みな渡りはてぬれど、人々もこしや馬とまちいづるほど、河のはたにおりゐて、つくづくとこし方をみれば、あさましげなる賤の男ども、むつかしげなるものどもを舟にとりいれなどする程、何事にかゆゝしく爭ひて、あるひは水にたふれいりなどするにも、見なれず物おそろしきに、かゝるわたりをさへ隔てはてぬれば、いとゞ都の方ははるかにこそ成り行くらめと思ふには、いとゞ涙おちまさりて忍びがたく、歸らむ程をだにしらぬ心元なさよ。過ぎ來つる日數の程なきに、とまる人々の行く末を覺束なく戀しきこともさまざまなれど、隅田がはらならねばこと〻ふべきみやこ鳥もみえず、

「思ひいでゝ名をのみ慕ふ都鳥あとなき浪にねをやなかまし」。

此の國になりては、おほきなる川いとおほし。なるみのうらのしほひ潟、音にきゝけるよりも面白く、濱千鳥むらむらにとび渡りて海士のしわざに年ふりにける鹽がまどもの、おもひおもひにゆがみたてる姿ども、みなれず珍らしきこゝちするにも、思ふことなくて都のともに、うちぐしたる身ならましかばと、人しれぬ心のうちのみ樣々くるしくて、

「これやさはいかになるみの浦なれば思ふ方には遠ざかるらむ」。

みかはの國八はしといふ所をみれば、これも昔にはあらずなりぬるにや、橋もたゞひとつぞみゆる。杜若おほかる所と聞きしかども、あたりの草もみな枯れたるころなればにや、それかと見ゆる草木もなし。業平のあそんの「はるばるきぬる」と歎きけむも、思ひ出でらるれどつましあればにや、さればさらむと少しをかしくなりぬ。都いでゝ遙になりぬれば、かの國の中にもなりぬ。はまなの浦ぞおもしろき所なりける。波あらきしほの海路長閑なる水うみのおちいたるけぢめに、はるばると生ひつゞきたる松のこだちなど、繪にかゝまほしくぞみゆる。おちつき所のさまをみれば、こゝかしこに少しおろかなる家ゐどものなかには、おなじ茅屋どもなどさすがに狹からねど、はかなげなるあしばかりにて結びおけるへだてどもゝ、かげとまるべくもあらず、かりそめなれど、げに宮も藁やもと思ふには、かくてしもなかなかにしもあらぬさまなり。うしろは松原にて前はおほきなる河長閑に流れたり。海いと近ければ、湊の浪こゝもとにきこえて、鹽のさすときはこの河の水さかさまに流るゝやうに見

ゆるなど、さまかはりていとをかしきさまなれど、いかなるにか心とまらず。日數ふるまゝに都のかたのみ戀しく、ひるはひめもすに眺め、よるは夜すがらものをのみ思ひつゞくる。荒磯の波のおとも、枕のもとにおちくるひゞきには、心ならずも夢の通路たえ果てぬべし。

「心からかゝる旅ねに歎くとも夢だにゆるせ沖つ白波」。

富士の山はたゞこゝもとにぞみゆる。雪いと白くてこゝろぼそし。風になびく煙の末もゆめの前に哀なれど、うへなきものはと思ひけつこゝろのたけぞ物おそろしかりける。かひの左らねもいと白くみわたされたり。かくてしも月の末つ方にもなりぬ。都の方より文どものあまたあるをみれば、いとをさなくよりはぐゝみし人、はかなくも見すてられて心ぼそかりし思に、病になりてかぎりになりたるよしを、鳥のあとのやうに書きつゞけておこせたるをみるに、哀に悲しくて、齒をわすれていそぎのぼりなむとするは、人の思ふらむ事どものさわがしくかたはらいたければ、とにかくにさはるべき心ちもせねば、遽にいそぎたつを、「道もいと氷とぢてさはりがちに侍かるべきを、たゞ今はかばかしきうちそふ人もなくて」などさまざま止むる人も多かりければ、思ひわびてねのみ啼かるゝを、みる人も心ぐるしくとて、ともすべきものどもなど、たれかれと定めて登るべきになりぬ。いとうれしけれど、とにかくに思ひわけにしことなく、なにと又都へかへらむとあぢきなくものうし。こゝとても又立ち歸らむ事もかたければ、ものごとになごり多かる心ちするにも、うちつけにものむつかしき心のくせになむ。常より居つる柱のおもあらしきが、なつかしからざりつるも、立ち離れ

なむはさすがに心ぼそくて、人みわくべくもあらず、ちひさく書きつくれど、目早き山賤もやとつゝましながら、

「忘るなよあさぎの柱かはらずばまたきてなるゝ折もこそあれ」。

この度はいと人ずくなに心ぼそけれど、都をうしろにてこしをりの心ちには、此の上なく日數のすぐるも戀しき心ちするぞ。あやにくに我が心より思ひたちていでぬれど、我ながら定めなく、旅の程も思ひしられざれど、いとはずに日數もうらゝかにとゞこほる所もなかりけるを、ふはの關になりて雪たゞふりに降りくるに、風さへまじりて吹雪もかきくれぬれば、關屋ちかく立ち休らひたるに、關守の懷かしからぬ面もちとりにくゝ、なにをがな留めむとみいだしたる氣色もいと怖ろしくて、

「かきくらす雪まをしばしまつ程にやがて留むるふはの關守」。

京に入る日しも雨降りいでゝ、鏡の山も曇りてみゆるを、くだりしをりもこの程にて雨降り出でたりしぞかしと思ひいでゝ、

「このたびは曇らば曇れ鏡山ひとを都のはるかならねば」。

かく思ひつゞくれど、まことにかの人を都はちかき心のみばかりにて、いつを限にと思ひ返すぞ又かきくらす心ちしける。日たくるまゝに、雨ゆゝしく晴れて、しろき雲おほかる山多かれば、「いづくにか」と尋ぬれば、「ひらの高根やひえの山などに侍る」といふを聞くに、はかなき雲さへなつかしくなりぬ。

「きみもさはよそのながめや通ふらむ都の山にかゝる白雲」。

暮れはつる程にゆきつきたれば、思ひなしにや、こゝもかしこもなほ荒れまさりたる心ちして、所々もりぬれたるさまなど、なにゝ心のとゞまるべくもあらぬを見やるも、いとはなれまうきあばらやの軒ならむと、そゞろにみるもあはれなり。おい人はうちみえてこよなく怠りざまにみゆるも、うき身をたればかりかうまで慕はむと哀も淺からず。その後は身をうき草にあくがれし。こゝろもこりはてぬるにや、つくづくとかゝる遂がそまに朽ちはつべき契こそはと、身をも世をも思ひ忘づむれど、忘たはぬこゝちなれば、又成り行かむはていかゞ。

「我よりは久しかるべき跡なれど忍ばぬ人はあはれとも見じ」。

轉寢記　終

東關紀行

齡は百年の半に近づきて、鬢の霜漸く冷しといへども、なすことなくして徒にあかしくらすのみにあらず。さしていづこに住みはつべしとも思ひ定めぬ有樣なれば、彼の白樂天の「身は浮雲に似たり、首は霜に似たり」と書き給へる、哀に思ひ合せらる。元より金帳（張晏、金張忠 金日磾張安世）七葉のさかえを好まず、たゞ陶潛五柳（陶潜号五柳先生傳）のすみかをもとむ。然かはあれども、深山の奥の柴の庵までも、しばらく思ひやすらふ程なれば、憖に都のほとりに住まひつゝ、人なみに世にふる道になむ列れり（況知）。これ即身は朝市にありて心は隱遁にあるいはれなり。かゝる程に、思はぬ外に仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でゝ東へ赴く事あり。まだ知らぬ道の空、山重なり江重なりて、はるばる遠き旅なれども、雲をしのぎ霧を分けつゝ、屢前途の極なきに進む。終に十餘の日數をへて、鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽なる砌にいたる每に、目にたつ所々、心とまる節々をかき置きて、忘れず忍ぶ人もあらば、後のかたみにもなれとてなり。『東山の邊なるすみかを出でゝ、相坂の關うち過ぐる程に、駒ひきわたる望月の比も、漸近き空なれば、秋霧立ちわたりて、ふかき夜の月影かすかなり。木綿付鳥幽かに音づれて、遊子（孟嘗君之故事）猶殘月に行きけむ、幽谷の有樣思ひ合せらる。むかし蟬丸といひける世捨人、此の關の邊にわらやの床をむすびて、常は琵琶をひきて心をす

まし、大和歌を詠じて、おもひを述べけり。嵐の風はげしきをわびつゝぞ過しける。ある人の云ふ「蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆゑに、この關のあたりを四の宮河原と名づけたり」といへり。

「いにしへのわらやのとこのあたりまで心をとむる相坂の關」。

東三條院(詮子一條御母)石山に詣でゝ、還御ありけるに、關の淸水を過ぎさせ給ふとて、よませ給ひける御歌、「あまたゝびゆきあふ坂の關水にけふをかぎりのかげぞかなしき」と聞ゆるこそいかなりける御心のうちにかと、哀に心ぼそけれ。關山を過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原なんどきけども、いまだ夜のうちなれば、さだかにも見わからず。昔天智天皇の御代、大和國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られたりときくにも、此の程はふるき皇居の跡ぞかしとおぼえて哀なり。

「さゞ波や大津の宮のあれしより名のみ殘れるしがの故鄕」。

曙の空になりて、せたの長橋うち渡すほどに、湖はるかにあらはれて、かの滿誓沙彌が、比叡山にて此の海を望みつゝよめりけむ歌(萬葉卷三拾遺哀傷)おもひ出でられて、漕ぎゆくふねのあとの白波、まことにはかなく心ぼそし。

「世の中をこぎゆく舟によそへつゝながめし跡を又ぞ眺むる」。

此の程をも行き過ぎて、野路といふ所に至りぬ。草の原露しげくして旅衣いつしか袖の雫所せし。

「東路の野路の朝露けふやさは袂にかゝるはじめなるらむ」。

志の原といふ所をみれば、西東へ遙に長き堤なり。北には里人すみかを志め、南には池のおもてとほく見えわたる。むかひの汀、緑ふかき松のむらだち、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども青くして洗濺たり（白氏文集）。洲崎所々に入りちがひて、蘆かつみなど生ひわたれる中に、をし鴨のうちむれて飛びちがふさま、あしでをかけるやうなり。都を立つ旅人、この宿にこそとまりけるか。今はうちすぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなどきくこそかはりゆく世のならひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめとおぼゆ。

「行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさるのぢの篠原」。

鏡の宿に至りぬれば、昔なゝの翁のよりあひつゝ、老をいとひて詠みける歌の中に、「鏡山いざ立ちよりてみてゆかむ年へぬる身は老いや志ぬると」（古今）といへるは、この山の事にやとおぼえて、宿もからまほしくおぼえけれども、猶おくざまにとふべき所ありてうちすぎぬ。

「立ちよらで今日はすぎなむ鏡山志らぬ翁のかげは見ずとも」。

ゆき暮れぬれば、むさ寺といふ山寺のあたりにとまりぬ。まばらなるとこの秋風、夜ふくるまゝに身に志みて、都にはいつしかひきかへたる心ちす。枕にちかき鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺（引白氏文集）の邊の草の庵の寢覺も、かくやありけむと哀なり。行くすゑとほき旅の空、思ひつゞけられていといたう物悲し。

「都いでゝいくかもあらぬ今夜だに片しきわびぬ床の秋風」。

この宿を出でゝ、笠原の野原うちとはる程に、おいその杜といふ杉むらあり。下草深き朝露の、霜にかはらむ行くすゑも、はかなく移る月日なれば、遠からずおぼゆ。

「かはらじなわがもとゆひにおく霜も名にしおいその杜の下草」。

音にきゝし醒が井を見れば、蔭くらき木の下の岩根より流れいづる清水、あまり涼しきまで澄みわたりて、實に身にしむばかりなり。餘熱いまだつきざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて涼みあへり。斑婕妤が團雪の扇、秋風にかくて暫し忘れぬれば、末遠き道なれども、立ち去らむ事はものうくて、更に急がれず。かの西行が「道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」（新古）と詠めるも、かやうの所にや。

「道のべの木陰の淸水むすぶとてしばし涼まぬ旅人ぞなき」。

かしは原といふ所を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影もみえぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇、年へにけりとみゆるにも、後京極攝政殿（良經）の、「荒れにし後はたゞ秋の風」（新古雜中）とよませ給へる歌思ひいでられて、この上は風情もめぐらしがたければ、賤しき言の葉をのこさむも中々に覺えて、これをば空しくうち過ぎぬ。くひぜ川といふ所にとまりて、夜更くる程に、川端に立ちいでゝみれば、秋の最中の晴天、淸き河瀨にうつろひて、照る月なみも數見ゆばかりすみ渡れり。二千里の外の古人の心（白氏文集）遠く思ひやられて、旅の思ひいとゞおさへがたく覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ「花洛を出でゝ三日、株瀨川に宿して一宵、屢幽吟

を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつがつ遠情を先途一千里の雲に送る」など、ある家の障子にかきつくる序に、

「知らざりき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月をみむとは」。

かやつの東宿の前を過ぐれば、そこらの人集まりて里も響くばかりに罵りあへり。「けふは市の日になむ當りたる」とぞいふなる。手毎に空しからぬ家づとも、かの「見てのみや人に語らむ」（古今春上素性）とよめる花のかたみには、やうかはりておぼゆ。

「花ならぬ色香もしらぬ市人のいたづらならでかへる家づと」。

尾張國熱田の宮に至りぬ。神垣のあたり近ければ、やがて參りてをがみ奉るに、木立年ふりたるもりの木の間より、夕日の影たえだえさし入りて、あけの玉垣色をかへたるに、木綿しでで風に亂れたる、ことがら物にふれて神さびたる中にも、ねぐら爭ふ鷺むらの、數も知らずこずゑに來ゐるさま雪のつもれるやうに見えて遠く白きものから暮れゆくまゝに靜まりゆく聲々も心すごく聞ゆ。ある人のいはく、「此の宮は素盞嗚尊なり。初は出雲國に宮造ありけり。八雲たつといへる大和言葉も、これよりはじまりけり。其の後景行天皇の御代に、この砌に迹を垂れ給へり」といへり。又いはく「此の宮の本體は、草薙と號し奉る神劍なり。景行の御子日本武尊と申す、夷を平げて歸り給ふ時、尊は白鳥となりて去り給ふ。劍は熱田にとまり給ふ」ともいへり。一條院の御時、大江匡衡といふ博士ありけり。長保の末に當りて、當國の守にて下りけるに、大般若を書きて、此の宮にて供養を遂げゝる願文に、「吾が願已にみち

ぬ。任限又滿ちたり。古郷に歸らむとする期、いまだいくばくならず」とかきたるこそ哀に心ぼそく聞ゆれ。

「思ひ出のなくてや人の歸らまし法の形見をたむけおかずば」。

この宮を立ちいで、濱路に趣く程、有明の月かげふけて、友なし千鳥時々おとづれわたれる、旅の空のうれへそゞろに催して、哀かたがた深し。

「古郷は日を經て遠くなるみがた急ぐ汐干の道ぞ苦しき」。

やがて夜の中に、二村山にかゝりて、山中などを越え過ぐる程に、東漸白みて、海の面遙にあらはれたり。波も空も一つにて、山路につゞきたるやうに見ゆ。

「玉くしげ二村山のほのぼのと明けゆく末は波路なりけり」。

ゆきゆきて、三河國八橋のわたりを見れば、在原業平、杜若の歌よみたりけるに、皆人かれいひのうへに涙落しける所よと思ひ出でられて、そのわたりを見れども、かの草とおぼしき物はなくて、いねのみぞ多く見ゆる。

「花ゆゑに落ちし涙のかたみとや稻葉の露をのこしおくらむ」。

源義種が、此の國の守にて下りける時、とまりける女のもとにつかはしける歌に、「もろともに行かぬ三河の八はしを戀しとのみや思ひわたらむ」とよめりけるこそ思ひ出でられてあはれなれ。やはぎといふ所を出でゝ、みやぢ山こえ過ぐる程に、赤坂と云ふ宿あり。こゝにありける女ゆゑに、大江定基が家をいでけるも、哀に思ひいでられて、過ぎがたし。人の發心

する道、その緣一にあらねども、あかぬ別を惜みし迷の心をしもゑるべとし、誠の道に趣きけむ、ありがたくおぼゆ。

「別れぢに茂りもはてゞ葛のはのいかでかあらぬ方にかへりし」。

ほんの川原にうち出でたれば、よもの望かすかにして、山なく岡なし。秦甸の一千餘里を見わたしたらむ(朗詠)心ちして、草土ともに蒼茫たり。月の夜の望いかならむと、ゆかしくおぼゆ。茂れるさゝ原の中に、あまたふみわけたる道ありて、行く末もまよひぬべきに、故武藏の前司(北條泰時)、道のたよりの輩に仰せて、植ゑおかれたる柳も、いまだ陰とたのむまではなけれども、かつがつまづ道のゑるべとなれるも哀なり。もろこしの召公奭は、周の武王の弟なり。成王の三公として、燕といふ國をつかさどりき。陝の西の方を治めし時、ひとつの甘棠のもとをゑめて政を行ふ時、つかさ人より初めて、諸の民に至るまで、そのもとを失はず。あまねく又人の患をことわり、重き罪をも宥めけり。國民擧りて其の德政を忍ぶ。故に召公去にし跡までも、彼の木を敬ひて敢へてきらず。うたをなむ作りけり(如元)。後三條天皇、東宮にておはしましけるに、學士實政任國に赴く時、「州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝ事勿れ。多くの年の風月の遊」といふ御製を給はせたりけるも、此のこゝろにやありけむ。いみじくかたじけなし。かの前の司も、此の召公のあとを追うて、人をはぐゝみ物を憐むあまり、道のほとりの往還の類までも、思ひよりて植ゑおかれたる柳なれば、これを見む輩、皆かの召公を忍びけむ國の民の如くにをしみ育てゝ、行く末のかげとたのまむこと、その本意は定めて違は

じとこそおぼゆれ。

「植ゑおきし主なき跡の柳原猶そのかげを人やたのまむ」。

豐河といふ宿の前をうち過ぐるに、あるもの丶いふをきけば、「此の道をば昔よりよくる方なかりし程に、「近比より、俄にわたふ津の今道といふ方に、旅人多くか丶る間、今はその宿は人の家居をさへ外にのみうつす」などぞいふなる。ふるきをすて丶新しきにつく習、定まれること丶いひながら、いかなる故ならむと覺束なし。昔より住みつきたる里人の、今更ゐうかれむこそかの伏見の里ならねども、われまく惜しくおぼゆれ。

「覺束ないざ豐河のかはるせをいかなる人の渡りそめけむ」。

參河遠江のさかひに、高師の山と聞ゆるあり。山中に越えか丶る程に、谷川の流れ落ちて、岩瀨の波ことごとしくきこゆ。境川とぞいふ。

「岩づたひ駒うちわたす谷川の音もたかしの山に來にけり」。

橋本といふ所に行きつきぬれば、き丶わたりしかひありて、氣色いと心すごし。南には潮海あり。漁舟波に浮ぶ。北には湖水あり。人家岸に列なれり。其の間に洲崎遠くさし出で丶、松きびしく生ひつゞき、嵐ゑきりにむせぶ。松の響、波の音いづれと聞きわきがたし。行く人心をいたましめ、とまるたぐひ夢をさまさずといふことなし。みづうみに渡せる橋を濱名と名づく。ふるき名所なり。朝立つ雲の名殘、いづくよりも心細し。

「行きとまる旅ねはいつもかはらねどわきて濱名の橋ぞすぎうき」。

さても此の宿に、一夜とまりたりしやどあり。軒ふりたる蓬家の所々まばらなるひまより、月のかげくまなくさし入りたるをりしも、君どもあまた見えし中に、すこしおとなびたるけはひにて「夜もすがら床の下に晴天を見る」（朗詠）と忍びやかにうち詠じたりしこそ心にくゝ覺えしか。

「言のはの深き情は軒ばもる月の桂の色に見えにき」。

なごり多く覺えながら、此の宿をもうち出で、行き過ぐる程に、まひざはの原といふ所に來にけり。北南は渺々と遙にして、西は海の渚近し。錦花繡草のたぐひはいとも見えず。白き眞砂のみありて、雪の積れるに似たり。其の間に松たえだえ生ひ渡りて、鹽風梢に音づれ、又あやしの草の庵、所々みゆる、漁人釣客などの栖にやあるらむ。末遠き野原なれば、つくづくと詠め行く程に、うちつれたる旅人の語るをきけば、「いつの頃よりとはしらず、此の原に木像の觀音おはします。御堂など朽ちあれにけるにや、かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまらず、年月を送る程に、一年望むことありて、鎌倉へ下る筑紫人ありけり。此の觀音の御前にまゐりたりけるが、もしこの本意をとげて、古郷へむかはゞ、御堂を造るべきよし、心の中に申し置きて侍りけり。鎌倉にて望む事かなひけるによりて、御堂を造りけるより、人多く參るなむ」とぞいふなる。聞きあへずその御堂へ參りたれば、不斷香の煙、風にさそはれうち薫り、あかの花も露鮮かなり。願書とおぼしきものばかり、帳の紐に結びつけたれば、「弘誓のふかき事海の如し」といへるも賴もしくおぼえて、

「たのもしな入江に立てるみをつくし深きしるしのありと聞くにも」。

天龍と名づけたるわたりあり。川ふかく流激しくみゆ。秋の水みなぎり來て、舟の去る事速なれば、往還の旅人たやすくむかひの岸につき難し。此の河水まされる時、舟などもおのづから覆りて、底の水屑となるたぐひ多かりと聞くこそ彼の巫峽の水の流(引白氏文集)おもひよせられていと危き心ちすれ。しかはあれども、人の心に比ぶれば、靜なる流ぞかしと思ふにも、たとふべき方なきは、世にふる道のけはしき習なり。

「この河の早き流も世の中の人の心のたぐひとは見ず」。

遠江の國府いまの浦につきぬ。爰に宿かりて、一日二日留まりたる程、あまの小舟に棹さしつゝ、浦の有樣見巡れば、しほ海、湖の間に、洲崎遠く隔たりて、南には極浦の波袖を濕し、北には長松の嵐心をいたましむ(引朗詠)。名殘多かりし橋本の宿にぞ相似たる。昨日のめうつりなからずば、これも心とまらずしもあらざらましなどはおぼえて、

「浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名殘をぞきく」。

ことのまゝときこゆる社おはします。その御前をすぐとて、聊おもひつゞけられし。

「ゆふだすきかけてぞたのむ今思ふことのまゝなる神のしるしを」。

小夜の中山は、古今集の歌に「よこほりふせる」とよまれたれば、名高き名所なりと聞きおきたれどもみるにいよいよ心細し。北は深山にて、松杉嵐烈しく、南は野山にて、秋の花露しげし。谷より嶺に移る道、雲に分け入る心ちして、鹿のね涙を催し、蟲の恨あはれふかし。

「踏みかよふ峰の梯とだえして雲に跡とふ佐夜の中山」。

此の山をも越えつゝ、猶過ぎ行く程に、菊川といふ所あり。去にし承久三年の秋の比、中御門中納言宗行と聞えし人の、罪ありて東へ下られけるに、此の宿にとまりけるが「昔は南陽縣の菊水、下流を汲んで齢をのぶ。今は東海道の菊川、西岸に宿して命を失ふ」とある家の柱にかゝれたりけりと聞きおきたれば、いと哀にて、其の家を尋ぬるに、火の爲にやけて、かの言のはものこらずと申すものあり。今は限とてのこし置きけむ形見さへ、跡なくなりにけるこそ果敢なき世のならひ、いとゞあはれにかなしけれ。

「かきつくる形みも今はなかりけり跡は千年と誰かいひけむ」。

菊川をわたりて幾程もなく一村の里あり。こはまとぞいふなる。此の里の東のはてに、すこしうち登るやうなる奥より、大井川を見渡しければ、遙々と廣き河原の中に、一すぢならず流れ分れたる川せども、とかく入りちがひたる樣にて、すながしといふものをしたるに似たり。中々渡りて見むよりも、よそめ面白くおぼゆれば、かの紅葉みだれて流れけむ、龍田川ならねども、しばしやすらはる。

「日數ふる旅の哀は大井川渡らぬ水も深き色かな」。

まへ島の宿を立ちて、岡部のいまずくをうち過ぐる程、かた山の松のかげに立ちよりて、かれいひなど取り出でたるに、嵐冷しく梢にひゞき渡りて、夏のまゝなる旅衣、うすき袂もさむくおぼゆ。

「これぞこのたのむ木のもと岡べなる松の嵐よ心して吹け」。

宇都の山を越ゆれば蔦かへでは茂りて昔の跡たえず。かの業平が、す行者にことづてしけむ程も、いづくなるらむと見ゆく程に、道のほとりに札を立てたるをみれば、無縁の世すて人あるよしをかけり。道より近きわたりなれば、少しうち入りてみるに、僅なる草の庵のうちに一人の僧あり。壽像の阿彌陀佛をかけ奉りて淨土の法もんなどをかけり。其の外にさらに見ゆるものなし。發心のはじめを尋ねきけば、「身はもとこの國のものなり。さして思ひ入りたる道心も侍らぬ上、其の身堪へたる方なければ、理を觀ずるに心くらく、佛を念ずるに性ものうし。難行苦行の二道ともにかけたりといへども、山の中に眠れるは、里にありて勤めたるにまされるよし、ある人の敎につきて、此の山に庵を結びつゝ、數多の年月を送る」よしをこたふ。むかし叔齊が首陽の雲に入りて、猶三春の蕨をとり、許由が潁水の月にすみし、おのづから一瓢の器をかけたりといへり。此の庵のわたりには、殊更煙立てたるよすがもみえず。柴折りくぶる慰めまでも、思ひたえたるさまなり。身を孤山の嵐の底にやどして、心を淨域の雲の外にすませる、いはねどしるくみえて、中々にあはれに心にくし。

「世を厭ふ心の奥やにごらましかゝる山邊のすまひならでは」。

此の庵のわたり幾程遠からず、峠といふ所に至りて、おほきなる卒塔婆の年經にけると見ゆるに、歌どもあまた書きつけたる中に、「東路はこゝをせにせむ宇都の山哀もふかし蔦の下路」とよめる、心とまりておぼゆれば、その傍にかきつけし、

「我もまたこゝをせにせむうつの山分けて色ある蔦の下露」。

猶うちすぐる程に、ある木陰に、石を高く積み上げて、めにたつさまなる塚あり。人に尋ぬれば「梶原が墓」となむ答ふ。道の傍の土になりけりと見ゆるにも、「顯基中納言の口ずさみ給へりけむ、「年々に春の草のみ生ひたり」といへる詩思ひいでられて、これも亦ふるき塚となりなば、名だにも殘らじとあはれなり。羊太傅(晉)が跡にはあらねども、心ある旅人は、こゝにも涙をやおとすらむ。かの梶原は、將軍二代の恩に憍り、武勇三略の名を得たり。傍に人なくぞ見えける。いかなる事にかありけむ、かたへの憤ふかくして、忽に身をほろぼすべきになりにければ、ひとまとものびんとや思ひけむ、都の方へ馳せのぼりける程に、駿河國きかはといふ所にて、うたれにけりと聞きしが、さは爰にてありけるよと哀に思ひあはせらる。讃岐の法皇(崇德)配所へ赴かせ給ひて、かの志戸と云ふ所にて、隱れさせ御座しける御跡を、西行修行のついでにみまゐらせて、「よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ」とよめりけるなど承はるに、まして下ざまのものゝ事は、申すに及ばねども、さしあたりてみるには、いと哀におぼゆ。

「哀にも空にうかれし玉鉾の道のべにしも名をとゞめけり」。

淸見が關も過ぎうくて、しばしやすらへば、沖の石、村々潮干にあらはれて、波に咽び、磯の鹽屋、所々風に誘はれて、煙たなびけり。東路の思ひ出ともなりぬべきわたりなり。むかし朱雀天皇の御時、將門と云ふもの、東にて謀反起したりけり、これを平げむ爲に、民部卿忠文を

遣しける、此の關に至りてとゞまりけるが、清原滋藤といふ者、民部卿に伴ひて、軍監と云ふつかさにて行きけるが、「漁舟の火のかげは寒くして浪を燒き、驛路の鈴の聲はよる山を過ぐ」といふ唐の歌を詠じければ、民部卿泪を流しけると聞くにもあはれなり。

「清見潟關とはしらでゆく人も心ばかりはとゞめおくらむ」。

この關とはからぬ程に、興津といふ浦あり。海に向ひたる家に宿りて侍れば、いそべによする波の音も、身の上にかゝるやうにおぼえて、夜もすがらいねられず。

「おきつ（イきよみ）潟いそべに近きいは（イたび）枕かけぬ浪にも袖はぬれけり」。

こよひは更にまどろむ間だになかりつる、草の枕のまろぶしなれば、寢覺ともなき曉の空に出でぬ。くきが崎と云ふなるあら磯の、岩のはざまをゆき過ぐる程に、沖つ風烈しきに打ちよする波もひまなければ、いそぐ鹽干のつたひ道、かひなき心ちして、「はすまもなき袖の雫までは、かけても思はざりし旅の空ぞかし」などうち詠められつゝ、いと心ぼそし。

「沖つ風けさあら磯の岩づたひ浪わけ衣ぬれぬれぞゆく」。

神原といふ宿の前をうちとほる程に、おくれたる者まちつけむとて、ある家に立ち入りたるに、障子に物を書きたるをみれば、「旅衣すその、ゝ庵のさむしろにつもるもしるきふじの白雪」といふ歌なり。心ありける旅人のしわざにやあるらむ。昔香爐峯の麓に庵をしむる隱士あり（白樂天之故事）。冬の朝簾をあげて、峯の雪を望みけり。今富士の山のあたりに、宿をかる行客あり。さゆる夜衣をかたしきて、山の雪を思へる、彼も是もともに心すみておぼゆ。

「さゆる夜に誰こゝにしもふしわびて高ねの雪を思ひやりけむ」。

田子の浦にうち出でゝ、ふじの高ねを見れば、時わかぬ雪ならねども、なべていまだ白妙にはおらず。靑うして天によれる姿、絵の山よりもこよなうみゆ。「貞觀十七年冬の頃、白衣の美女二人ありて、山の頂にならび舞ふ」と都良香が富士の山の記（本朝文粋）にかきたり。いかなる故にかと覺束なし。

「ふじのねの風に漂ふ白雲を天つ少女の袖かとぞみる」。

浮島が原はいづくよりもまさりてみゆ。北はふじの麓にて、西東へはるばると長き沼あり。布をひけるが如し。山の綠影をひたして空も水もひとつなり。芦かり小舟所々に棹さして、むれたる鳥多くさわぎたりける。南は海のおもて遠く見わたされて、雲の浪煙の浪いとふかきながめなり。すべて孤島の眼に遮るなし。わづかに遠帆の空に連なれるを望む。こなたかなたの眺望、いづれもとりどりに心細し。原には鹽屋の煙たえだえ立ちわたりて、浦風松の梢にむせぶ。此の原昔は海の上に浮びて、蓬萊の三つの島（[illegible]）の如くにありけるによりて、浮島となむ名づけたりと聞くにも、自ら神仙のすみかにもやあらむ、いとゞ奥ゆかしくみゆ。

「影ひたす沼の入江にふじのねの煙も雲も浮島が原」。

やがて此の原につきて、千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず。松はるかに生ひわたりて、みどりの影きはもなし。沖には舟どもゆきちがひて、木のはのうけるやうにみゆ。かの「千株の松下雙峰の寺、一葉の舟中萬里の身」（謠曲）とつくれるに、彼も是もはづれず。眺望いづく

にもまさりたり。

「見渡せば千本の松の末とほみみどりにつゞく波の上かな」。

車返しと云ふ里あり。或る家に宿りたれば、網つりなどいとなむ賤しきもの丶すみかにや。夜のやどりわりかことにして、床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜はの旅ね𩜙も、かくやありけむとおぼゆ。

「これぞこの釣するあまの苫庇いとふありかや袖に殘らむ」。

伊豆の國府に至りぬれば、三島の社の御しめうちをがみ奉るに、松の嵐木ぐらく音づれて、庭の景色も神さびわたれり。此の社は、伊豫の國三島大明神をうつし奉るときくにも、能因入道伊豫守實綱が命によりて、歌よみ奉りけるに、炎旱の天より、あめにはかにふりて枯れたる稲葉も忽に緑にかへりける、あら人神の御名でりなれば、ゆふだすきかけまくも畏くおぼゆ。

「せきかけし苗代水の流れきて又天下る神ぞこの神」。

かぎりわる道なれば、この砌をも立ち出で丶、猶ゆきすぐる程に、筥根の山にもつきにけり。岩がねに高く重なりて、駒もなづむばかりなり。山の中に至りて水うみ廣くたゞへり。箱根の湖となづく。又の蘆の海といふもあり。權現垂跡のもとゐ、氣高く尊し。朱樓紫殿の雲に重れる粧、唐家驪山宮かと驚かれ、巖室石龕の波にのぞめる影、錢塘の水心寺ともいひつべし。うれしき便なれば、「うき身のゆくへ玄るべせさせ給へ」など祈りて、法施奉るついでに、

「今よりは思ひ亂れし蘆の海の深き惠を神にまかせて」。

此の山もこえおりて湯本といふ所にとまりたれば、大山おろし烈しくうちしぐれて、谷川漲りまさり、岩せの波高くむせぶ。暢臥（[illegible]）房のよるのきゝにも過ぎたり。かの源氏物語（[illegible]）の歌に、「淚もよほす瀧の音かな」といへるも思ひよられて哀なり。

「それならぬ賴みはなきを古鄕の夢路ゆるさぬ瀧の音かな」。

此の宿をも立ちて、鎌倉につく。日の夕つ方雨俄に降りて、みかさもとりあへぬほどなり。いそぐ心にのみすゝめられて、大磯、江の島、もろこしが原など、きこゆる所々をも見とゞむる暇もなくて、うち過ぎぬるこそいと心ならず覺ゆれ。暮るゝ程に下りつきぬれば、なにがしのいりとかやいふ所に、いやしの賤が庵をかりて留まりぬ。前は道にむかひて門なし。行人征馬すだれのもとに行き違ひ、うしろは山近くして窓に臨む。鹿の音、蟲の聲垣の上に忙はし。旅店の都にことなる、狀かはりて心すごし。かくしつゝわかしくらす程に、つれづれも慰むやとて和賀江のつき島、三浦のみさきなどいふ浦々を行きて見れば、海上の眺望哀を催してこし方に名高く面白き所々にも劣らずおぼゆ。

「さびしさはすぎこし方の浦々もひとつ眺めの沖のつり舟」。

玉よする三浦が崎の波間より出でたる月の影のさやけさ」。

抑鎌倉のはじめを申せば、故右大將家（賴朝）ときこえ給ふ、水の尾の御門（清和）の九つの世のはつえを武き人にうけたり。さりにし治承のすゑ（[illegible]）にあたりて、義兵をあげて朝敵をなびかすより、恩

賞玄きりに瀧山のあとをつぎて、將軍のめしをえたり。營館をその所に玄め、佛神をその砌にあがめ奉るよりこの方、今繁昌の地となれり。中にも鶴岡の若宮は、松栢の緑愈玄げく、蘋蘩のそなへかくることなし。陪從をさだめて、四季の御かぐら怠らず。職掌に仰せて、八月の放生會を行はる。崇神のいつくしみ、本社にかはらずと聞ゆ。二階堂(永福寺)はことにすぐれたる寺なり。鳳の甍日にかゞやき、鳧の鐘霜にひゞき、樓臺の莊嚴よりはじめて、林池のあとに至るまで、ことに心とまりてみゆ。大御堂ときこゆるは、石巖のきびしきをきりて、道場のあらたなるを開きしより、禪僧庵をならぶ。月おのづから祇宗の觀をとぶらひ、行法座を重ね、風とこしなへに金磬の響をさそふ。玄かのみならず、代々の將軍以下、つくりそへられたる松の社、蓬の寺町々にこれおはし。その外由比の浦と云ふ所に、阿彌陀佛の大佛をつくり奉るよし、語る人あり。やがて誘ひて參りたれば、尊く有難し。事の起りを尋ぬるに、本は遠江の國の人、定(淨阿)光上人といふものあり。過ぎにし延應の頃より、關東の高き卑しきを勸めて、佛像を造り、堂舍を建てたり。その功すでに三が二に及ぶ。烏瑟たかくあらはれて、半天の雲に入り、白毫あらたにみがきて、滿月の光を耀かす。佛はすなはち兩三年の功すみやかになり、堂は又十二樓のかまへ望むにたかし。彼の東大寺の本尊は、聖武天皇の製作金銅十丈餘の盧舍那佛なり。天竺震旦にもたぐひなき佛像とこそきこゆれ。此の阿彌陀は、八丈の御長なればかの大佛の半よりもすゝめり。金銅木像のかはりめこそあれども、末代にとりては是も不思議といひつべし。佛法東漸の砌にあたりて、權化力を加ふるかと有難くおぼゆ。かやうの

事どもを見きくにも、心とまらずしもは無けれども、文にもくらく武にもかけて、つひにすみはつべきよすがもなき數ならぬ身なれば、日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき。歸るべき程と思ひしも、空しく過ぎゆきて、秋より冬にもなりぬ。蘇武が漢を別れし十九年の旅の愁、李陵が胡に入りし三千里の道の思ひ、身に志らるゝ心ちす。聞きなれし蟲の音も、やゝよわりはてゝ、松吹く峰の嵐のみぞいとゞはげしくなりまされる。懐古のこゝろに催されてつくづくと都の方をながめやる折しも、一行の雁がね空に消え行くも哀なり。

「歸るべき春をたのむの雁がねもなきてや旅の空にいでにし」。

かゝる程に、神無月の二十日あまりの頃、はからざるにとみの事ありて、都へかへるべきになりぬ。其の心の中、水莖のあとにもかきながしがたし。錦をきる境は、もとより望む處にあらねども、故郷にかへる喜は、朱買臣にあひにたる心ちす。

「故鄕にかへる山ぢの木がらしに思はぬ外の錦をやきむ」。

十月二十三日の曉、すでに鎌倉を立ちて、都へ赴くに、宿の障子にかきつく。

「なれぬれば都を急ぐ今朝なれどさすが名殘のをしき宿かな」。

東關紀行

終

中務内侍日記

いたづらに明し暮す春秋は、たゞ羊の歩みなる心地して、末の露本の雫に後れ先だつためしのはかなき世をかつ思ひながらも、得達のえんには進まず、皆生々世々に迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。唯かゝる世のそゞろごとのみ心にしみて忘れがたき中にも、弘安三年、伏見殿の御懺法とて、院(後深草)の御方はかなくなりしに、十五夜の月も雲うち散りて風も冷かなる枯野の庭のけしき物あはれなれど、同じ心に見る人もなし。獨眺めむもすさずきしかりぬべければ、入りて臥しぬるに、春宮(伏見)の御方釣殿に出でさせおはします。御供左衛門のかうの殿、内侍殿、男には左中將ばかりまゐる。宰相殿宮内三人ねぬるを、御所になりぬるとてあれば、皆起きて參る。すさまじき物とかやいふるすなる、しはすの月夜なれど、宮の中は皆白妙に見えわたりて、木々の梢は花と見ゆ。池の鏡もされたるに、枯蘆のはかなくしをれ伏したるほどよろづに見所あり。音なくしづまりたるに、絶え絶え岩に漏るゝ水の音ばかりして、軒端の松のみぞつれなく見ゆる。權大夫(守具)伺候したるほどなるに御使あり。「常磐井殿の御參り」とばかり答へて、局には、小さき童ばかりぞある。いと念なくはつ雪の心地してなど申す。女院の御方も御るすなり。御壺御覽ぜらる。軒近く一むら生ひたる呉竹の雪折したたるもなべて枯れぬる草よりもはかなく、よろづにけぢかきさまに見所添ひてぞ侍る。又女房

の局どもいまだ寢ぬ所もあり。いと艶だちてをかしき事ども多し。猶立ち還りありつる方を御覽ぜらるれば、すこし晴れつる空も又かきくらし風もはげしくさえたるに、やもめがらすの一聲もあはれをそへて覺ゆる。

「ながめ侘び心もそらにかきくれて降る白ゆきにすむつきのかげ。

うきふしを思ひみだれてはかなきはみぎはの蘆の雪のしたをれ」。

かくて入らせ給ひぬれば、御留守の御所に寢ぬれども、しばしは猶はしを明けて晴れ曇る空を眺めて何となく物語どもするに、時移りとりもしばしば鳴くに、又あはれを添ふる鐘のおとも枕に近き心ちして、いと哀に物悲し。

「我ならでとりもなきけりねをそへて明け行く鐘のさゆるひゞきに」。

たゞ心の中ばかりつゞかぬ事のみ案ぜらるゝも我ながらをかし。

又弘安三年のとし、御さかき出でさせ給ひしかば、廂の御所なりしに、四年の八月十六日、たそがれの程よりかきくれて降る雨の、更くるまゝに名殘なく晴れて、同じ空とも見えぬ月影面白ければ、春宮の御方入らせおはしまして御月見あり。霧降りてをかしきに、猶曇らぬ露の光、聲々に鳴く蟲の音も取り集めたるこゝちして、吹き迷ひたる風に亂れまさる露の玉も心苦しきに、松にかゝる光はことなるも、如意寶珠の玉かと見えけむ嵯峨野もこれには過ぎじと覺えて、

「おのづからしばしも消えぬたのみかは軒端の松にかゝるしら露」。

御方々に入らせ給ひぬ。曉近くなるほどに院の御方はまた南殿の月を御覽ぜらる。宵よりはことなう霧もふりまさりて、木々の梢も見え分かず。霞める空に雁鳴き渡りておはれも添へて面白ければ、

「きりこめて哀もふかき秋の夜にくもゐのかりも鳴きわたるかな」。

御よるの後も、とみに寢られず。

「よなよなはねぬよの友とながむるに霧なへだてそあきの夜の月」。

又弘安五年四月十七日、嵯峨殿の御留守なりしに、雨もを止まず空さへ閉ぢて日數積る頃、おほやけわたくしはつねを待つ慰めばかりに、雨夜の空を御らんぜらるゝ、御供に三位殿御局、大納言殿、別當殿、男には、綾の小路の三位、土御門の少將、そゞろ事ども申してをかしく興わる事どもなり。心盡しに待ちわかしつる郭公は、それかとおぼめくほどの一聲に、花橘のかをりなつかしきも、よそふる人もわり顏のこゝちして、光なき夜のやみのうつゝも思ひなす方は、いづれも淺からねば、なかなかなる忘れ形見に今も盡きさせざりけり。

「時鳥おぼめくほどのひとこゑになごりのそらもむつましきかな」。

世に經れば、何となく忘れぬふしぶしも多く、袖もぬれぬべきことわりも知らるゝこそかはゆく覺ゆれど、ことに弘安六年四月十九日、れいの嵯峨殿の御かうなりて還御なる御よるの後、春宮の御方、土御門の少將ばかり御供にて、院の御方ざまに忍びて御覽ぜらるゝ。南殿の花橘盛なる頃なれば、香をなつかしむ時鳥もやと待たせおはしますに、心盡しの一聲も飽か

ず恨めし。そのころ左中將何事にかありけむ籠りて久しく參らざりけるに、有明の空に鳴きぬる一聲を、寢覺にや聽くらむなど、かたじけなくもおぼし出づるは、夢の中にも通ふらむをと思ひ遣らるゝに、

「思ひやるねざめやいかにほとゝぎす鳴きて過ぎぬるありあけの空」

と御氣色あれば、内侍殿、たどたどしきほどの有明の光に書きて、花橘に付けられたり。さるべき御使もなくて明けぬべければ、土御門少將、人もぐせず、たゞ一人馬にて行きぬ。手づから馬の口を引きて門を叩くにとみにもあけず。空は明け方になるもあさましくをかし。門をあけぬるに、思ひ寄らずあきれ立ちけむもことわりなり。さらぬなさけだにをりから物は嬉しきに、かしこき御なさけも深く、色をも香をもとおぼしめし出づるも、御使の嬉しさはげにいかなりけむ。同じたぐひならむ身は、げにいかでか羨しからざらむ。ありがたき面目生ける身の思ひ出とぞよそに思ひ知られて侍りし。ほのぼのと明くるほどにぞ還り參りたる。

「宮のうち鳴きて過ぎけるほとゝぎす待つ宿からは今もつれなし」。

この日土御門少將に、

「あしびきの　やまほとゝぎす　しひてなほ　待つはつれなく
更くる夜に　とばかりたゝく　眞木の戶は　あらぬくひなと
まがへても　さすがにあけて　たづぬれば　しげきくさ葉の
つゆはらひ　分け入るひとの　すがたさへ　おもひもよらぬ

をりにしも　いともかしこき　なさけとて　つたへ述べつる
ことの葉を　我が身にあまる　こゝちして　げに世にしらぬ
ありあけの　つきにとゞむる　おもかげの　なごりまでこそ
忘れかねぬれ。
言の葉にいかにいひてもかひぞなきあらはれぬべき心ならねば」。

返事に少將、

「ひさかたの　つきのかつらの　かげにしも　ときしもあれど
ほとゝぎす　ひとこゑなのる　ありあけの　つき毛のこまに
まかせつゝ　いともかしこき　たまづさを　ひとりあるる庭の
しるべにて　たづねしやどの　くさふかみ　ふかきなさけを
つたへしに　たもとにあまる　うれしさは　よそまでもげに
しらくもの　絶えまにひかげ　ほのめきて　あさおくつゆの
たまはこの　みちゆくひとの　くれはとり　あやしきまでに
いそぎつる　そのかひありて　ちはやぶる　かみしもともに
おきゐつゝ　待つにつけても　すみよしの　きしにおふなる
くさの名の　わすれがたみの　おもひでや　これあらはれば
此句缺文　なかなかいかに　うらみまし　こゝろにこむる

わすれがたみを」。
内侍殿、少將にことつけ、
「ときしもあれ御垣にゝほふ橘のかぜにつけてもひとのとへかし」。
返りごと、
「めづらしきそのことの葉も身にしむはありあけの空に匂ふ立花」。
二十日內侍殿に、左中將、
「いかならむ世にか忘れむたちばなの匂もふかきけさのなさけを」。
返りごとに、
「たちばなのにほひにたぐふなさけにもことゝふ今ぞ思ひしらるゝ」。
弘安七年三月十七日、これも嵯峨殿の御留守なりしに御遊びあり。御供に女房四人男三人ぞ侍りし。たいの御方、大納言殿、れんぜい殿、御てうづの間の御簾まきあげて、御所御琵琶、綾の小路の三位朗詠、伯の少將笛、土御門の少將こと、夜もすがら御遊どもあるに、いつもといひながら帳の屋の花の梢おもしろく、秋ならねども身にしむばかり風もはげしき花のあたりは、げに行きても恨みまほしきこゝちして、おぼつかなきほどに霞める月は、しく物なく覺えて、をりからは物のねも澄みのぼり面白きに後も又忍ぶばかりの言の葉を御尋ねありしに、めんめんにあらはすもをかし。定めなく晴れ曇る村雨の空も、つくり出でたらむやうなり。かこち顏なるともいひぬべう眺めたるに、三位、

「はれくもり花のひまもるむらさめに」
とわれど、うちまぎれつゝ、つくる人もなければ、心の中に、
「あやなく袖のぬるゝものかは」
とぞおぼえし。今宵はげに春の宮居もかひあるこゝちして、
「月かげにいく春經てか花も見しこよひばかりのおもひ出ぞなき」。
八月十三日、晝より雨ふりてしめやかなるに暮れぬれば、月はなやかにさし出でゝ、小倉の山もたどるまじげなり。夜も更け靜まりたるに、人たゞ二人ばかり立ち出でゝ見れば、御所になりてしばし御覽ぜられて、入らせおはしましぬれども、二人は猶殘りて昔今を泣きみ笑ひみ、轉法輪の契、長生殿のこゝちして、曉近くなれば、入方の月、山のはに傾ぶきたるは、入日ならねど後るゝこゝちして、古の小野の山さへゆかしきまで覺ゆるも、入りなむあとの心細さを思ふに臥しぬ。
「ながめつる月も入るさの山のはにこゝろばかりや猶したふらむ」。
八年三月十七日、夢にいくらもまさらぬ春の夜も、わかし兼ねぬる寢覺に、まことやこぞの今宵月と花とによをあかし侍りしも戀しく唯今のやうなるに、程なくもめぐり合ひぬる、「さだめなき世にながらへにけるかなとおもひつゞくるを、いまだ御所は御よるのほどに、すべりて人知れず、外には知らぬ心の中をと思ひて、大納言殿の御局へ花につけて、
「我ならぬ人もや去年のこよひ上にてつき見しことを思ひ出づらむ」。

かくまで御所に御人ずくなゝりつれば、御聲より先にと急ぎ參りたれば、女官、「土御門の少將殿參らせよとて候ふ」といふ。取りて見れば、散りたる花につけて、去年の今宵、おほやけわたくしの言葉をこめて歌どもあまた書きたり。めんめん皆披ろうせよとてある中に「三位は同じ限ならぬ歎きに堪へで、都の雛だになく、かやうにまうで侍ると聞けど、人しもこそあれ、などかゝりけむと必ず逢ひぬる言ぐさの末も哀れに悲しきに、有りし夜のむらさめ今日又袖にしぐれぬる心ちしてぞ侍る。

　忘れずよ死なばともにといひおきし去年の軒端のはるの夜の月」。

この歌の初めはあはれなりしことなり。末はかしこき御言の葉を、一つによみこめたると見えたり。御返事に、

「月影をのちしのぶべきものぞとはなはなべてにもながめけるかな」。

「侘びぬればうつろふ人はつらけれど心のそこに逢はむとぞ思ふ」。

これもはじめは、さそふ人あらばと身を木がらしのとありしことと見えたり。心のそこといふ事は、咎むべきふしなり。逢はむと思ふといふは我が言の葉の末なり。かへりごとに、

「瀧川のながれてあはむゆくすゑをこゝろのそこに忘れやはする。

　めぐりあふ今日待ちえてもおもかげの霞める月はものぞ悲しき」。

これは言葉にてひとへにこめたる御返りごとなり。かゝる世のそゞろごとゞも聞くにつけてもあるからましかばと思ふ例も悲しくて、まして都の外を思ひやるは、哀も深く悲しければ、

「今日と忘られず申せ」といはせて散りたる花につけて、
「歎きこしそのかねごとのすゑならば諸共にとや身はいとふらむ。
よそにだにたへぬなげきの花ざくら散りにしあとを思ひこそやれ」。
都にかへりて後、三位、
「今こそは思ひ知らるれかねごとのなげきによらぬ思ひありとは。
花ならで散りにしあとのおもかげは絶えぬ歎きの殘るばかりぞ」。
又、大納言殿の御局へ、三位、
「忘れじと契りおきてしことの葉やみやこにのこるかたみなりけむ。
むらさめの空にはあらで見し月のわが袖からとかげぞやつれし。
思ひいでゝまづ袖ぬれしむら雨や憂き身一つのなみだなりけむ」。
又三月三十日、へだゝる日數の名殘も、あはれに思ひやられて、
「いかばかり哀そふらむ隔て行く日かずも今日の春をなごりに」。
返りごと、三位、
「かくばかりなげきやはせし大方の年經てなれしはるのなごりを」。
少將、てゝにて侍りし人におくれて、こもり侍るに、おくれさきだつも、これに限る世のため
しとのみ歎くに、ほどなく月日も隔たりぬれば、秋も更けゆく山里のすまひは、袖も一つの
時雨のみ峰の嵐やことゝふらむ。都だに降りみ降らずみ定めなき頃は、たゞ大方のながめに

侍るをと、哀も深く思ひやるばかりにて、久しくとはぬにつけて、

「物思ふ袖のなみだもくれなゐのおなじ千ゑはに染むるもみぢば」。

かへりごとに、

「千ゑはまで染むる紅葉を見るよりも袖のなみだや色まさるらし」。

又弘安七年の歳、遠き所に、忍びて物に籠り侍るに、年頃淺からず申しかはしたる人なくなりて、年もあまたへだゝりぬるに、これに參りて常に籠りし宿に侍るといふ所を見れば、いたう荒れなどはせねど、人なくあはれげなり。かけつくりなるに、柴垣遣り水などはかなきものから、思ひ入りぬるばかりにや、みどころあるこゝちしてあはれになつかしければ尋ね行きて見れども、如何にと咎むる人もなし。影澄みはてぬと見る池水にも、宿もる月だになき頃なれば、音するものは山より落ちくる瀧の響ばかりぞおどろかしがほなる。哀も同じかぎりに深き涙ばかりは、袖に浮べても猶ところせき。岩波高く谷に流るゝ水の音までも取り添へ物悲し。

「袖の上におちくる瀧のすゑなれやおとたてゝゆくやまがはの水。

世にすまば又見むとこそ思ひしかおもかげ馴れし山の井のみづ。

流れあふ涙のすゑもかひぞなきかげすみはてぬやどのいけみづ」。

たゞかひなき獨ごとのみぞあはれなる。

七月五日、北山殿に行啓なる。御かうもなりしかば、はえばえしき御遊どもなり。昔は山瀧な

どところどころ御らんせられて、暮るれば御舟に召す。夕づく夜より有明になるまでかゝる夜もなし。

九日、月さし出づる程に例の御舟に召す。「大夫(實香)ち參し侍りぬ」と「遊びくたびれ侍る」と申す。去ばしは釣殿に休らはせおはしましゝかど御舟さしいださる。御樂あり。殿上人ども小さき舟に乘りて、中島を隔てゝ吹き合せたる物のねたとへむ方なくおもしろし。遙に漕ぎ出でぬるに、かすかに鞨鼓をうつ音聞ゆるを、人々あきれて、「いづくならむ」と申すに、大夫にやあらむとて、迎への小舟に、樂し朗詠などしてさし寄せたれば、火を燒きてぞ參り給ふを、いみじく興せさせ給ふ。春宮の御方、十三日は御くたびれにやありけむ、御舟にも召さず無量光院の廂にて月御覽ぜらる。すのこに花山院大納言(敎家)、大夫殿侍ひ給ふ。さまざまをかしき御物語どもあり。ひんがしの妻戸の口に、大納言殿、權大納言殿侍ひたまふ。やがてそのひんがしのまのすみ高欄に、宮內宰相殿三人侍ふ。なにとなき物語どもして、更け行くまゝに殊に近き西の山もといりがた近く傾ぶきたる月の、池にうつろひて面白きを「所がらはげに見所あるよゝの月影、いかなる世にも忘れじや」などいひあはせつゝ、廿五の菩薩來向の御かた、見るよりはじめて賴もしく哀なる方も添ひて、名殘多げに「ながらへば又來む年の今宵、思ひ出でなるべしや」などいふ心のうちに、

「山かげにながむる月よめぐりあはむみやこの空におもがはりすな」。

更けぬれば入らせ給ひぬ。

十六日も、この御かたは御舟もなし。わさがれひのみす巻きあげて、月御覧ぜらる。御えんに人々さぶらひ給ふ。はくの新少將、衞門の藏人召し出で丶まゐらせらる。花山院大納言笛、大夫殿たいこ、さらぬ殿上人ども、りちには月の光もことなるに、ばとうの舞出でたるほどは、まことにおもしろし。名殘多くてはてぬ。宮内のおもとに、おやのおやともいひぬべき人の許より、月のたよりにと賴め侍るに、人々ぐしてまへわたりして見え侍るを恨みて、

「いつはりと思ひながらも待ちかねつ寢ぬ夜の月に影あくるまで」

といひおこせたる返り事を、あまりひたやごもりならむもさすがなれば、忍びて返りごとつかはし侍るが、「さるべきつかひもなきを、いかゞし侍るべきと、いひあはするかひなからむもと思ひて、あらぬさまなる姿をして、夜も半に過ぎて、曉近くなるほどに、行きて御まやを局にしつらひたるしとみを、忍びやかにうちたゝけど、みな人ねたる氣色にてこたふる人もなければ、あまりことごとしからむもいかゞなりと思ひ煩ひて休らふ程に、東のつま戸のかたに「たゝくひなの」とうちながむる聲すれば、それにやわらむとことわりも過ぎて、やさしくもおもしろくもおぼえて、聲につきてやりどに立ち添ひて、月を眺むるなりけりと聞くに、まことに月を待つにはあらで、人待つほどのすさみにやと思ひやられて、うちたゝけば、たぞともいひあへぬばかりにあけたれば、なにとはいはず、文をさし置くに、袖をひかへて放たず。おそろしくあきれたるこゝちしてあさましけれど、騷がぬさまにもてなして、さりげなく、やをらすべり逃ぐるに、隈なき月に見ゆらむうしろでも恥かしく、我ながら心淺か

りけるふるまひもそらおそろしく案ぜられて、くやしく覺えて、心のうちに、

「くひなかとうたがはれつる眞木の戸をおくるまでとはなにたゝきけむ」。

人にはいはぬ事なれば、よろづはかいなき心一つなり。

十八日、野上の御かう、行啓なる。えんだうに殿上びとども、わらふだをわまたして敷きたるを、又ひろひおとらじと、はしりなどするもをかし。野上の氣色、まことにおもしろし。かけひの水の氣色、はかなき木草までも、見どころあり。廣き野に、われもかうを、まじるものなく植ゑわたしたるに、若き女房たち、山ぎはまで分け入りて見れど、道なくて歸へりぬ。暮るゝまで、御あそびありて、入らせ給ひぬれば、れいの御舟(もイ)はてぬ。

十九日は、妙音堂の御幸なり。おもしろくめでたし。

二十日、夜は殊に引きつくろひたる御ふながくあり。春宮御琵琶、花山院大納言笛、琴はれん中なり。徳大寺の大納言(公孝)らうえい、大夫殿は二位入道が御ものやどりのとじといふものと乘りたる舟にて、入江の松の下にかくろへて、琵琶をしらべておとづれ給ふ。いづくならむ、いだしたれば、御舟さし寄せてまゐり給ふ。「けいせいの舟に乘りたがり侍りつるほどに」など申したまふいとをかし。廿日の月はすこし心もとなく待たるゝほど、御堂の御あかしの光かすかに水にうつろひたるなど、おもしろく見ゆ。月さし出でぬれば、まばゆきほどなるに、漕ぎまはす舟のかぢの音に、立ちさわぐ水鳥のけしき、中島の松の梢、物ごとにおもしろきことかぎりなきにも、又かゝる事いかなる世にかと、なごり悲しうこそ。あそびはてぬれば、

また田むきの月、御覧ぜらるゝに、春宮の御かたは、道遠くことはなれたるやうなれば、ならず。野上へぞいらせ給ふ。田むきのかた、ことに草深く分け入りたるに、名に負ふもげにと覺えて、はてはいづくと見えぬまではるばるとひろきに、稲葉におきわたす露の光は、玉をならべたらむやうなり。とりどりさまざまなる所々のけしきいひつくすべうもあらず。還御なりて、入らせ給ひぬれば、女ばうたちは、猶大御堂のひろびさしに出で、横雲のひま見えゆくに、すさきに立てる松の木だち、釣殿近き松に、舟浮きたりし、中島に羽うちかはしたる鳥どもの、むれ居たるまでも、よろづに見すてがたけれど、心々にさしきの野上分け行くに、あるかなきかの月の名殘なほ慕ひけむ。さしきは、西の山もとゆかしくて行きぬ。松山に分けておひたる眞木の梢露けき山田のいはまでも、はかなく稲葉の風にみだれたるほど、山のは近く雲に消え行く有明の影、とりわつめたる朝ぼらけ、ものかなしくて、心細くながめつるさへ入りぬれば、

「横雲の空にきえゆくわりあけをこゝろぼそくもながめつるかな。

玄のゝめの明けゆく空の秋風になびくいなばもつゆぞこぼるゝ」。

かやうにつゞかぬ事のみぞ心の中に多き。また野上より還御なりて、あけぼのに御舟めされて、明けはてぬれば、入らせ給ひて、やがてそのまゝながら御くわいあり。數玄らぬ末々までも、心々にうちぬる時もなくぞ遊びあひぬる。

二十一日は還御なり。院の御かたは暮るゝほどになりぬれば、御名殘あかず、月待つほど、御

舟にめす。月出でぬれば、野上へ入らせおはします。さきには引きかへのどかにて、更けぬれば、還御なる。そののち御心ちれいならず、わらはやみにてわたらせおはしませば、おもしろくわすれがたかりしなごりも、この御事のあさましさに、よろづものうくて、日数つもるに、八月にもなりぬ。ありし野上ふと思しめし出でらるゝに、大夫殿の御歌あり、

「いまかゝる心にもなほわすられず野上のみちのけさのあけぼの」。

御返り事、

「今思へばまことやけふは一とせにありしかな野上の松の夜のあけし色」。

あさましき中にも、おほやけわたくし忘れがたく戀しきに、若き女房たち、「今日はいかに」などいふにつけても、思ひ出でらるゝ事多し。更に露おきたるが、ありしながらぞかしと思ふに、我から衣の戀しさも悲しくて、

「わすれずよ野上に志げるわれもかうわけし袂のつゆもまだひず」。

かくて日数つもらせ給ふ御こと、あさましかりしに、めでたくおちさせおはしましぬ。晦日に里に出でゝ、九月四五日のほどに、尼崎といふ所に行くに、京を夜深く出でゝ、鳥羽殿近き程にて、夜やうやう明け行くそらに、木々の梢も、色づきそむるころなれば、艶なるほどにて、中々おもしろし。舟に乘らむとするに、數志らずさりあへぬまで舟多きに、聞き志らぬさまに、おそろしげなる聲志たるものどもひしめくを聞くにつけても、引きかへたる志きもあはれにて、北山殿思ひ出でられて、いかにとだにいひ合はする人もなし。はるばる漕ぎ行

くに、河霧立ちてこしかた行くさきも見えず。さんや、かた野といふ所過ぐるに、音にのみ聞きわたるを思ひて、しばし見るに、遠ければさだかにはあらねど、芝野のなかより鳥の立つを「きゞすにやあらむ」などいへば、

「いにしへもありとばかりは音に聞くかた野のきゞすけふ見つるかな」。

又橋多く過ぎぬるなかに、「これなむあまの川に侍る」といふを見れば、橋やぶれて、そのかたばかりぞはつかに殘れる。

「これやこの七夕つめのこひわたるあまの河原のかさゝぎのはし」。

かくて日の入るほどに行き着きぬ。日は水の下に入るとのみ見えて、河よりうみになるけぢめ、波あらく立ち、はるかなる沖に漕ぐ舟は、繪にかきたらむやうなり。うしとらの方を見やれば、住吉の松むら立ち、絶え絶えにかすみて見ゆ。立ちかへる波風も、うらならねども、いたうはげしき心ちぞする。ひるきぶねの浦といふかたに出でゝ見れば、浦の松風、波にかよひて、入海心すごく、神さびていとたふとし。濱にあまどもの貝ひろひ、また沖につりするもあり。たく繩、網などいふほし置きたるを見れば、ほすひまもありけるをと、

「うちはへてくるしきものと思ひしにあまのたく繩ほすひまもあり」。

夕日の影、おもしろきに、沖よりあまの釣舟ども、多く歸るもあはれなり。暮るれば、遊女が舟ども、歌うたひ、物かずへなどするもをかし。一かたならず都のみ心とまりしに、海山へだゝりぬる心ぼそさを思ふに、おも影ばかりかたみとて、波路遙かに月をながむるさへよそに

隈なき影も、我からは猶くもらぬ夜半もなし。かくて心もとなくかずへられつる日數も、程なくてのぼるは又立ち歸りあかぬ心ちして、さすがなれぬる浦風に、心はなびくからと、我ながらあやにくにて思ひ忘らるゝ。こし方も遙かになりぬるも心細く、梢をかへり見れどもへだゝりかすむ雲ゐばかりをながめて、

「こし方をかへり見れどもはるばると霞へだてゝそこはかとなし」。

おそく出でゝ、「あすも日暮れぬべし」といへば、夜もすがら舟を漕ぐに、二十日の月なれば、更くるまゝに澄みまさりておもしろきに、みな人ねぬれば、一人起きゐて見るに、影も流るゝと見ゆる月は、猶こそおくれざりけりかし。よろづを思ひつゞくるに、はては物おそろしき心ちして心ぼそし。「むしあけのせとに」といひけむむかし物がたりさへぞあはれにおもひ出でらるゝ。人おどろきて「遙にも來にけるかな」と、「みちもおそろしかんなるを、いづくにかとまるべき」などいふ。橋本といふ所につきぬ。あさまし、をかしげなる家ども、川のつらに作りつゞけたる所にとまりぬ。かくするすまひは、いかならむなど思ふもあはれなり。「明けぬ」といへば、又舟に乘る。よもすがら一人ながめし月はあけ行く霧に光もさえにけり。ほのかに消え殘りたるけしきに、心つくしげなる秋の空なるは、もの悲しき心ちするに、あまり夜深く出でゝ、あふ舟もなきに、霧にかすみてほのかにくるを、近くなるまゝに見れば、はかなき木をくみて乘りて行くものあり。「なにぞ」と問へば「いかだと申すものに侍る」といふ。あだなるさまもはかなくあはれなり。

「朝霧もはれぬ川せにうきながら過ぎゆくものはいかだなりけり」。みなせといふ所を過ぐるに、「これなむむかし御所にていみじかりしも、今かくなりぬる、あはれに侍る」と古めかしき物語するものあれば、

「あさからぬむかしのゆゑを思ふにもみなせの川に袖ぞぬれぬる」。かへりてのち、あはれなりしすさびも、戀しくも忘れがたく、御所より人々、御ふみあり。取りたて〻はなけれど、心ちなやましくて日かずつもるに、さらでもはかなくもはかなきに、いつからき世のかせにさそはれむなど思ふも、心ぼそく覺ゆるころなめれば、めづらしさもうれしさも一かたならず、いつしか御所さまのさしきもゆかしく悲しきに、枯れゆくはなもおなじわかれの秋の色に、あはれもふかき御ふみはいつよりありがたかりぬべしと、心一つにはかなく賴まる〻ぞあはれなる。

「花鳥の色にもねにもゑのぶやとありのすさびもあらばあらまし」。さりともと、おなじ心のたのみにも、またる〻人の、久しく絶えてか〻るを、などかと思ふも恨めしくて、

「身のうさも命もかぎるこのあきをあはれとばかり人のとへかし」。かくて、ほどなく年もかへりぬれば、また三月十七日もめぐり逢ひぬ。さだめなき世にながらへにけるもうれしながら、ゑめの外なるふせやにうづもれ過しぬるも、おなじ浮世にめぐれども、なほかひなき身なりけりとくちをしく覺ゆるに、道のたよりこずゑばかりをよそに

みるも、なかなかなる心ちして、大納言殿花につけて、
「月もすむ雲ゐの花をよそに見てなれしむかしのけふぞこひしき」。
御返りごとに、
「おしなべてやよひのけふを忘れぬを花ゆゑにこそ思ひ出けれ」。
花ゆゑとかや見ゆるもうらめしく、その世の事も、唯今の心ちして、今宵は入るまで、月をみるもかはゆく、われながらをかしく興ざめて、覺えながら、
「雲の上の月にこゝろはすむものをゑめの外にや思ひなすらむ」。
猶はかなく、大かたのかずにはもれぬこともやと覺ゆるぞをかしき。
又四月二十五日、祭なれば御けいなどひしめく。めんめんに、葵つけなどするも、年に一たびもいくめぐり逢ひぬらむとおもふに、こぞのこの頃も、たゞ今の心ちして、侍るほどなさもあはれにて、その名につけて、いにしへを忘れず、忍ぶ人もあるらむ。まちまち、心々に見るらむけふのかざしをと思ふに、まことや、新宰相殿の、ことしは引きかへて、あらぬさまにやよそに見て、かひなきそのかみの事も、いかにとかずかず思ひやられて、葵につけて、
「そのかみのことやはかなき葵草なにゆゑよそに名のみ聞くらむ」。
かへりごと、程へて後、
「さまざまに思ふ心をおしこめてとふにぞいとゞなみだ落ちける」。
五月六日、御かうのびて、六條殿へ十三日御幸なる。御るすもいつしか人なくさびて、雨ゑめ

やかなる夕ぐれに、まつむきどの丶みすまきあげて、御らんじいだされたり。御まへに、大納言殿ばかりさぶらひたまふ。すのこに立ち出で丶見れば、池には分くべきひまもなくしげりたるあしまに見ゆるふねの、ありかさだめず浮きたるさまもはかなきに、さはりおほく見ゆれば、

「はかなくて蘆まに見ゆる浮舟のよるべさだめずものぞかなしき」。

暮れぬれば入らせ給ひぬ。今宵は御よるもとし、おそろしきまで人おほく、のどかなる釣殿に出で丶見れば、雨もすこしをやむけしきなり。雲の絶えまに、時々もり出で丶、かすめる月の光もめづらしき心ちして、大納言殿、

「あま雲にしばしやすらふ夜半の月ながむる人のこ丶ろをや知る」。

と覺え侍りて、いたく心づくしげなる影もうらめしく、なにとなくもの哀なり。南殿の橘も、さかりなるに、枯れたる軒のあやめも、一つになつかしくて、

「かれがれに殘るあやめもなつかしく花たちばなも一つかをりに」。

七月二日、御くわいあり。夕づく夜のころなれば、更けゆくま丶の空は星の光ばかりなるに、しづまりたるよの氣色、のどかにおもしろし。まつむき殿に、みす卷きあげて、御ひきなほしにていでさせ給ふ。ひろびさしに三條の三位、頭の辨、すのこに殿上人どもはさぶらふ。かうしためざねなり。

あら玉の年を重ぬれば、春のみ山の木がくれより、花郭公、月雪につけて、心をのぶるなぐさ

みも、さすがにありといへども、おほやけわたくしうちまぎれて、物まゐりなどのひま、いつを限となければ、なら、はつせの方へ思ひ立ちて、いまだ見ぬかたの梢もゆかしくて、いとま申し入れむとて、玄輝門院の御所衣笠殿へ九月十三日にまゐりたれば、人々おほくせうほう院の山にて、まつとらむとて行くに、時雨うちそゝぎ風すこしふきて、やうやうこずゑも色づく頃の氣色なにとなくものあはれに見えたるに、おなじふせやのなかに、すこしよしあるさまにゑなして、軒近く植ゑたる荻の檜垣の上より見えて、垣ほに植ゑたる夕顔のつる、枯れ殘りたる枯葉ども、月に亂れて、そよそよとなる。耳も目もとまる心ちして、「いかなる人の住むならむ」といへば、「むかしのぬしは、世をいとふ人にて、今はなし。そのふるきすみかと聞く」といへば、哀もまさりて、

「枯れのこるゑづがかきほの夕顔にこゝろをそめてすぎぞやられぬ。

荻の葉もおなじふせやのかきなればたゞには過ぎぬ風のおとかな」。

おなじき十三日、播磨の中將、日頃のわづらひおもくなりて、今はたのみなくなむと聞く。あはれに悲しきを思ひながら、今まではとはぬをこたりもうたてくて、

「いかにしてゑばしこの世に影とめむ別れむ事の悲しくもあるかな。

限りなく哀とのみはなげくともいはねば人の知らずてあるらむ。

あるか、なきかのやうにて、うき身世に影とゞむべき心ちせぬ心ぼそさは、たゞ思ひやれ」といへば、

「いざやげにあはれ悲しと思ひけるこゝろのほども今こそは知れ」。

ことわりもげにと悲しくあはれなり。今宵は十三夜ぞかし。御會あれども、まじらねば、あはれにいつしか、この世ながらあらましかばの悲しさも、やうやう、人々あはれがる。暮れぬれば、春宮は院の御所へ入らせおはしまして御舟にめして月御覽ぜらる。空はくもりむら雲たちて、なかなか見どころあるさまなり。心の中に、

「晴れくもる月ぞなかなかめづらしき空もこゝろのある夜なるかな」。

御舟どもはてぬ。御湯殿のうへのすのこに立ち出でゝ見れば、月のあたりなる雲も晴れて、庭のおさぢも、露の光も見えわくに、更けにける夜のけしき、釣殿のかたへ出でゝ見れば、とうろのともしびかすかにて、やり水のいしまにもるゝ音のみあはれに聞ゆ。

「岩間もるいしまの水のおと澄みて秋はあはれと聞きぞなさるゝ」。

十月十日ごろ、はつせに參り侍れば、河原の程にて、ほのぼのとあくるに、川霧立ちて、行くさきも見えず。よこ雲の空ばかり、けぢめ見えていとおもしろし。

「川霧に道こそ見えね小ぐるまのまはりていづくわたせなるらむ」。

宇治なるをちといふ所を見れば、いづれむかしの跡ならむと、色々の紅葉ども見えたるに、知る人あらまほしく覺ゆ。

「おぼつかないづれむかしのあとならむをちかた人にことやとはまし」。

眞木の島といふ所、洲崎に鷺のゐたる、おほきなる水車に紅葉の色々、錦をかけ渡したらむ

やうなり。しばつむ舟どもあり。積みはてゝいそぎ、岸を離れむとするもあり。

「こゝろぼそやゐぐひにつなぐしば舟の岸をはなれていづち行きなむ」。

平等院を見れば、極楽のしやうでん、ゆかしく見るとかや聞ゆるもことわりに、紅葉の色さへことなるも、時雨もこの里ばかりわきて染めける。都のつとに折らまほしく、歸らむたびと思ひなして過ぐるに、又ゐの丶池といふ池のはたを過ぐれば、鳥の多くみづにおりゐてあそぶ。「なにぞ」と問へば、「かもめといふ鳥なり」といへば、

「池水もあさげの風もさむけきにおりゐてあそぶかもめどりかな」。

春日にまゐり着きて、宮めぐりすれば、春日野はるばると入りて、鹿のふす萩も霜枯れて見えず。

「春日野はしかのみぞふす霜がれて萩のふるえもいづれなるらむ」。

御まへにまゐりたれば、かり殿の御ほどにて、やうやう作りたてまゐらするいとたふとし。心のうちに、

「たのもしや三笠の山をあふぎつゝかげにかくれむ身をし思へば」。

さて、さる澤の池を見れば、にごりなく澄みて、采女が身を投げゝむ昔の影も、いま浮びたる心ちして、今はと見けむ面影を、我ながらいかに鏡のかげの悲しと見けむ。御幸ありけむ帝の御心ちもかたじけなく哀なり。

「思ひやる今ぞこ悲しわぎも子がかぎりのかげをいかゞ見つらむ」

とあはれなり。はつせにまゐりたれば、あさぼらけ霧立ちて、かり田のおもさびしきに、つるのむれゐて鳴きあひたる聲いとすごし。

「秋はつる山田の庵のさびしきにあはれにもなくつるのこゑかな」。

三輪の山といふ所を見るに、音に聞くばかりなりしを、ゆかしく心もとなけれど、かへらむ旅と思ひて過ぎぬ。はつせにまゐりつきて登りらうを入るよりたふとくおもしろきことの世にあるべしとも覺えず。らんしゆのけしきもなべてならずたふとし。かひがひしく、心にしむるおもかげ、しんおこりて、年月のあらましけふこそと嬉しきことかぎりなくて、御帳もあきて拜まれさせ給ふ。おりなむ後、いかゞと覺ゆ。

「へだゝらむのちを思へば戀しさのいまよりかねてなみだこぼれぬ」

かねては、のどかに思ひしかども、めでたき御世のひしめきて、京より使あれば、心も心ならず。曉はいそぎ下かうするに、都もいそぎながら、又これもなごりおほし。このたびぞみわに參る。おとに聞きしよりはたふとく、杉の木に、輪を三つつけたるもおもしろし。

「年月はゆくへもしらで過ぎしかどけふ尋ね見るみわのやまもと」。

三つなりなる杉の實の落ちたるをとりひろひて、しゆく願ありてまたまゐらむをり、かへしおかむと思ふに、

「しるしみむしるしの杉のかたみとて神世わすれず行くさきをまて」。

又玉の井といふ所過ぐる。「いでやあらむ、水は」といへば、汲みて來たり。

「くみ見れば戀さめにこそなかりけれおとに聞きこしたまの井の水」。

あくる日京へかへりぬ。里にしやうぞくしたゝめまうけたれば、やがて御所へまゐりぬ。御しやうゐ。

二十一日、節會はてぬれば、けんし入らせおはします。たゞ行幸の儀式のやうなり。えんだうしきて、御劍は左近中將むねさだ、璽をば右近中將信基、さきに公卿供奉、左右大將道甚、公卿のすけは、けんしのさうの御うしろに供奉す。左右近衞つかさ、中門のとにとゞまりて、れちに立ちたり。けんしのはしのまより入御なれば、左右大將さうこんの木の下に立つ。母屋のみすすべらかして、御帳の前に、御ひきなほしにて渡らせ給ふ。こうたう左より、御けんをうけとる。次に璽を渡す。右より少將内侍璽をうけとる。ありさまゆゝしくめでたし。とかく儀式久しくて、あくるほどにぞ内侍所は入らせ給ふ。明けはてぬれば、御ぜんもしんしやくはなし。內じゆ時を奏す。

三日はをのこども、殿上につきて、大はん行ふ。年中行事のしやうじのもとに、出御なりて、ないない御らんぜらる。やがてこん夜けいぢんなり。中門に出御なる。

十一月九日、播磨の中將ともあきなくなりぬ。雲のうへに心をかけて、今一たびとぐわんども立て、なにかしけれども、限ある世のならひなりければかなはず。まうねんのみあはれに、かはゆきこともいまはのきは、思ひさだめてといひしにと、悲し。

九日は、春日祭に內侍勾當たつ。

十五日、まつりごとはじめ。
十七日、けさいの御てうづ。
十二月五日、りんじの祭なり。使は花山院宰相中將（定教）。淸凉殿に出御なる。さくちんの御はう、つゝじの御衣たがさね、御簾に殿下（師忠）御まゐりあり。御神馬引きたてゝ、使まゐりて、御へいとれば、御拜ありて入らせ給ひて、御いしに御衣りかけさせ給ふ。使舞人ども座につく。中門の下に、公卿つきたり。けんばい三こんはてぬ。かざしの公卿、内大臣（家經）左大將（兼忠）、權大納言、花山院中納言、大炊の御門の中納言（良宗）、久我の中納言（通雄）、皇后宮權大夫（公衡）、さじきに衣さいありて、殿上ばかりにて着座なし。洞院の宰相中將（實泰）、左大辨宰相、巳の時に催されて舞ひ人もとくまゐりたれども、儀式とうも（傍く）久しくて日も暮る。けんばいはてぬれば、内大臣殿、使のかざし藤をとりてかうぶりにさゝせ給ふ。つらにまがはぬかざしの色もおもしろく世の初にて、公卿の使よろづはえばえしきにも、雨雪のさはりだになくて、のどかにめでたし。神もめづらしとやうけ給ふらむと覺えて、

「色ふかき雲ゐの藤をかざしにて神もうけみるつかひなるらむ」。

かざしはてぬれば、すのこに着座、まひ人ども、さうに立ちて行きちがふあをずりの袖口をかし。とのもんれうの立ち明しの光に見えたる、いひつくすべうもなし。笛のおと、わごんのねもをかしう聞ゆ。北の陣わたさるゝに、なかはしのつまに行幸なる。はてぬれば、やがて御拜あり。かくて更けぬるに、やがて還たちなれば、このたびは御ひきなほしにて、出でさせ給

ふ。庭火のかげに、舞ひ人の櫻かざして、にんぢやうが拍子にあはせたる足ぶみ、わごんのねすごく、やうやうわけ行く空の光かきあひて、いひ盡すべうもなくおもしろし。

八日九日は、ぢもくなり。

十二月十二日、しんでんじきの使立つ。しやうけい權大納言、辨には右大辨宰相、もんより筵道敷きて、おりて役に從ふことゞも、をさなきあそびのやうに、をかしきことゞもなり。

十五日、内侍所御神樂、雪、宮の中におびたゞしく降りたるに、わごんに、れんぜいの侍從よりなり、本拍子二條中將すけかた、末の拍子綾小路少將信有、篳篥山本の中將かね行、笛伯の新少將やすなか。月は更け行くまゝにさえたるに、日數經てふり積みたる雪に、かつ降り添ふけしき、池の中島、松の梢、木々の梢、かゞやきたるも、庭火のかげに束帶の黑きが上に降りかゝる雪は、うちはらふもをりから殊にすみ、神さびたるけしき限なし。雪おびたゞしくて、そさの人、たふべくもなければ、はしをとりて中門の下にてあり。

二十五日は、北山殿（實氏）へ御かたたがへの行幸はじめなり。又雪降りて、月だにあらばとおぼえし。けんしの役、花山院宰相中將、やくの内侍、勾當内侍、新内侍となり。すけに權大納言のすけ、あぜちどの、少將内侍、伯耆殿、まうけの御所へまゐりて、むかひて、勾當といそぎかみあげて、もやの御すのうちにて、御こし待ち參らせて侍らふ。入御なりぬれば、御裝束、御ひきなほしめしかへて、月もなきころなれば、殿上人ども、しそくさして御らんぜらる。入らせ給うて御くわいあり。男には、左中將ためかぬばかりなり。けいごのすがたにてまゐりたる、

いとやさしく見ゆ。權大納言のすけ殿、新宰相殿、女房三人、男三人、かずにもれぬ身我ながら嬉しうこそ覺ゆれ。還御はほのぼのと明くるほどになりぬれば、雪うちはらふけいごの姿ども、やさしくおもしろく見えたり。

二十六日、皇后宮職の御方へなる。人なくて、御供も唯一人まゐりたれば、還御待ちまゐらせて、池のかた見いだして、つくづくとながむるに、かりの鳴きて過ぐるが、きのふよりこそ春も立ちしに、いつしか越路にやかへるらむ、今は秋こそたのみなるらめと思ふに、

「春きぬとかりは越路にいそぐなりこゝろに秋をたのめてぞ行く」。

弘安十一年二月五日、春日祭に立つ。しやうけい一條大納言、辨には兼仲なり。雨すこし降りて、かすみたるに、こづ川のはたを行けば、橋わり。柴をくみてわたしたる橋と申す。

十日、そのからかみの祭。しやうけい大ゐの御門の大納言、辨には爲俊。

十二日、大原野の祭なり。雨うちそゝぎかすめるに、まだ見ぬ里とめづらしく見ゆれば、桂川などいふ所も過ぎて、「西山とこそ申せ」といふ。

「こゝろぼそくつねにしたひてながめせしこれや日の入る西の山本」。

みやにまゐり着きぬれば、辨しやうけいつきてことども行ふ。几帳さして御まへにまゐりて見れば、四所の御戸ひらきて、錦の御ちやうに、たちをよこざまに、すぢかへたるやうにつけて、とびらのわきにはこたてたり。日暮るれば、いとめづらかにたふとし。はてぬればかへるに、雨もときどき猶そゝぐものから、夕日のかげに、影もすこし見えつるに、又わりつる桂川

にもなりぬ。う船も二つ三つあり。橋の下行くやうにて、さしとゞめたるに、つなで引くやうに、人二人ばかりつなを引きて、さきにあり。車のとほればつなを水に沈めて、

「かつら川くだす鵜船のつなでなはしづむるはてよいかになりなむ」。

今宵北山どのへ行幸にかへり参らむといそぐに、亥の初めにぞまゐりつきたる。やがてかみあげてまゐる。あくる日御ふねにめされむとて、筵道しかせて、りやうくわんず、皇后宮大夫殿、しきしども、さらぬ殿上人、六位など御供にてあり。御堂のつり殿より御船にめす。こぎわたせば、中島の松のしづえに、鳥の巣くひたる、「うきす」と申し侍れば、「これよな」とて御覧ず。かゝるすみかとて、今よりうきたるはかなさもあはれなり。

「はかなげの鳥の浮巣のあはれさや池のこじまのまつのしづえに」。

今日十三日なれば、嵯峨どのゝ御八講とて御幸なれば、いそぎ還御なる。その後暮るゝほどに、野上へ行幸なる。人々さきにまゐりて、ありつるやうに筵道しきて、殿上人六位、しりなりつるをいそぎとりて、さきにおとらじとして、少藏人の衞門のすけ、せき衣のすがた、ことごとしきに、ときはる青色きてまじりたり。野なかにはしりちりたる女郎花の中に、くわんざうの咲きたるあきの野を見るにて、こたまの目もや立つらむとおもしろくぞ見ゆる。春宮の御時もなりたりしが思ひ出でられて、松山の中なれば、たゞむかしの秋にかはらず。かけひのおと、みぬの松のけしき、かはるけぢめなし。いよ簾かけわたして涼しげなるに、月はやうやうさし出でゝ、このもとにて御みきまゐる。りやうくわんず、殿上人どもは、心とけて遊

びわひたり。御せんと忘れたる氣色わらはせおはします。

「思ひ出のむかしの秋もほどふればこの夕暮にまさりしもせじ」。

心の中に、おのおのよみかへる歌ども、あくる日ぞけざんに入れける。やがて北山どのへまゐらせらる。

二月二十七日、くわんのちやうの行幸。かみあげの内侍勾當と少内侍なり。

三月八日は、ぢもくなれば、曉近く御よるなれど、そうしよをもちて、あくるまでねず。ほのぼのとするに、「あけぼの丶花見む」といひて、大納言、權大納言、すけどの、新少將殿、四人釣殿に出で丶、池の花を見れば、盛りなるもあり、すこしちるもあり。「ことしは風や吹かぬ、花や盛と見えて久しくなりぬ」といへば、

「九重は風もよきてや吹き過ぐるさかりひさしく見ゆるはなかな」。

八日は、御うま御らん。

九日、りんじの祭なり。使にまゐる。花もさかりなるに、風すこし吹きて、ちりまがふ花の下に、まひ人ども繪に書きたらむやうなり。立ち舞ふ袖の氣色、神垣も思ひやられて、

「待ちえたる御世の初にさきにほふ花のかざしをいかゞ見るらむ」。

三月廿一日、禮服御覽、日の御座に出御ならせ給ふ。御ひきなほし、母屋の御すを垂れたるはしのみすをあげて、すのこに圓座をしく。關白、大臣のはあつゑんざ、その外の公卿のはうすゑんざなり。奉行五位の職事顯世、六位なかかた。公卿に關白殿、内大臣殿、こがの右大殿

殿北廻、おほゐの御門の大納言、皇后宮權大夫殿なり。御覽はてヽ入らせ給ふ。鬼のまにて御覽あり。殿下、大ゐの御門の大納言、皇后宮權大夫殿召し入れらる。よくよく御覽ありて、このたび用ゐられむずるは、めしとゞめられぬ。その外は、らいぐざうへかへし納められぬ。うち次の日より、玉の御かうぶりめして御覽あり。ながつね召して、御覽したヽめすべき御かうぶりなど、御やういあり。御ものそんじたる所、御めのとの沙汰にて、直さる。
三月十五日、御即位、行幸のぎしき、關白殿、左大將以下、供奉の人々めづらしくおもしろし。かみあげの內侍、この御所より、少將內侍、せうの內侍なり。御所御しやうぞくめされぬ。殿いらせ給ふ。めし仰せはてぬるよし奉行しきじ申せば、南殿へならせたまふ。御こしにめされぬれば、くわんのちやうへいそぎ、勾當もまゐる。かみあげのとくせんまうけたれば、車のしりにのせてくわんのちやうの北むきよりまゐりて、かみあげしたヽめて、あしたどころの南むきに、勾當もさぶらへば、「やうやう行幸ちかづかせおはします」とて供奉の公卿、次第にれちに立ちたり。御こしよらせ給ひぬ。關白殿、御下がさねひきなはしまゐらせらる。公卿のすけまゐりて、劔璽とりて、內侍に傳へて後、御こしにつきて、みつなのすけさうぞきぬ。奏はてヽ、主上いらせ給へば、殿御れんにまゐらせ給ふ。ひさしのみす、あらはより、しきしあきよたれたれは、御母屋の御れんあげられて、主上大しやうじにわたらせ給ふ。劔璽も大しやうじにおき奉りて、內侍わしたる所の北むきに出でヽ侍ふ。その後、大しやうじのひんがしに、ひらしきの御ざに、うけん二帖の上に、御しとねよそひて、この上にて、わきの御せん

などまゐらす。御ばいせんは女房、やくさうの女ばうは小上﨟、わした所の北むきにきたに侍ふ。奉行の玄きじをめして「たかみくらの事はぐしたるか」と仰せくださるれば、玄きじかへりまゐりて、具したるよし奏す。ひらしきの御ざにて御束帶ときくつろげさせおはしまして、たまの御かうぶりめさる。らいふくめされて、大玄やうじに主上わたらせおはします。玉の御かうぶりにおけの緒をつく。おけの御はうに、左右の御かたは月と日とをいだし、御直衣には、北斗七星をあらはしたてまつる。御むね御袖には、たつののぼりたるを縫ひたり。おられぢの御うへの袴のうへに、らいふくの御裳をめす。その上に、御大袖の御はうをめす。御くびかみ、御まひもなり。その上に高くびの御小袖の御ばうをめす。このいろいろの御もんは、御小袖の御はうにあらはして、うへにめしたり。おかぢの錦の御玄たうづ、花がたのからの御くつ、おかぢの錦にてつゝみたり。御腰には、御じゆとてひらをの白きを引かせ給ひたり。左右の御うしろの御わきのとほりに、たんじゆとて二筋、御よほろのほどにさせられたり。御まへの左右の御わきに、ぎよくはいとて、玉をつらぬきてつけられたり。御すそに、ひうちがたのからかねをつけられたれば、ふげんの如くに、りやらめきならせ給ふ。御ちかへには大じゆを結びさせられたり。たちのひらをの如く結び垂れたり。たかみくらのこと、具したるよし、玄きじ申せば、やがて行幸あり。御劔は、勾當給はる。璽はこれの役なり。右の御脇にまゐる。殿下の仰せに「そい玄るしの御はこのうへにかけたる網をゆびにかけつれば、取りはづして、おやまちはせぬぞ」とおはせあるに、御なさけのありがたく心もつよつよし

くおぼえて、あやまちなし。たかみくらへ、ことゆゑなくまゐりつきぬ。とばりあげの役は、はくの三位のむすめなり。みやうぶ藏人四人、やくの内侍六にん、うらこきそはう、こきものゝぐ、行幸たかみくらへなれば、御さきの命婦四人、御さきに立つ。その後かみあげの内侍二人、二行にならびてまゐる。たかみくらの御はしの左右に、内侍立ちとまれば、殿下御れんのやくにまゐり給ひぬ。左の内侍まづのぼりて左の御わきより御劍をまゐらせおく。御はしをしりぞきて、右のしもに内侍のざにつきぬ。女王のしやうぞく、二色くれなゐのひとへ、そはうの上着、わかいろのからぎぬ。

かみあげの内侍は、勾當とこれ新内侍なり。御ぜんの命婦、

　みあれの、　いつぬき、　宮人、　いしかは。

威儀の命婦、

　はゝ木、　さぬき、　ひぜん、　たまがき。

これみなうらこきそはう、柳の唐衣なり。

こしようの命婦、

　右衞門督殿、　柳にくれなゐのひとへ、紅梅の上衣。

　新左衞門督殿、　もえぎに、くれなゐのひとへ、山吹の上衣。

　新宰相殿、　紫のうすえふに白きひとへ、山吹の上衣もえぎの唐衣。

宮内卿殿、新宰相におなじ。

治部卿殿、紫のうすえふにもえぎの上衣、えびぞめの唐衣。

少將内侍少輔内侍、まつがさねにくれなゐのひとへ、柳の唐衣おなじ。

つねの衣の上にかいぶにからぎぬ、からけつの衣、ひらびたひなり。

ぎやうれつのわひだの事、

みさきに、ゐぎの命婦四人、えんだうの左右につくなり。

しやうちやうの左につく。

次に、劍璽の内侍二人、左こうたう、右はこれなり。

しようの女房御うしろに歩みつゞきてまゐる。事しづまりて南を遙に見やれば、せちげの旗とて、風にひらめきて立ちたり。大きなるからばんに、みやうかうや匂ふらむと見えたり。こがねのたがらすとて足の三つある烏見ゆ。しんこんたぎやうのなかには、日の中にさんそくのからすあり、月の中には、ろくそくのうさぎありと聞きしも、はんせちあることなりけりと、しん起りて覺えて、から人の姿どもなみ立ちて、拜し奉るに、身の毛も立ち、涙がましくめでたく嬉し。右大臣殿、からめかしき御姿にて、幕のうちよりねり出で給へば、ぎよくはいのおとかや、道にりやらめきてひさしく、御たけの高さ、御てんの高さにもたち劣り給はず。高御座に向きて、拜し給ふを見るにも、めでたく侍る。

「ためしなきこゝちこそすれ君が世のかゝるみゆきにけふ仕へつる」

と思ひつゞけたれどもうちまぎれぬ。やうやう大殿のぎども〻果てぬれば、殿高御座へのぼり給ふ。あした所へかへり入らせおはします。御けんしるしの御筥などもとの如くつとむ。主上御裝束めしあらためて、還御の儀になるほどに、この御やすまくへ入らせ給ひぬ。花山院、西園寺殿侍はせ給ふ。還御の御儀式、ぐせらるゝほど、大しやうじひんがし、ひらしきにてはくでまゐる。御はい膳は女房もとの如し。又大しやうじの西に唐衣の御屏風を立てられたり。その西にて、兩大納言殿、御わりご開き給ふにや。そのやくさうには、五位のしきじ、よりふぢ、あきよなど見え侍りつ。御ぜんはてぬれば還御なる。公卿のれち、御輿よりてめされぬれば、ずさどもよせて又かへりまゐりぬ。出車には、一の車には、

左衞門督殿、　新左衞門督殿、　はゝき、　さぬき。

二の車に、

宮內、　新さ、　ひせん、　たまがき。

三の車、

新兵衞、　ちぶ、　みおれ、　いつぬき。

四の車、

少將、　少、　宮人、　いつぬき。

十六日、夜更けしづまりたるに、清りやう殿へ月にさそはれて花見に出でければ、大納言殿、

「池の花のおも影、月にさだかに覺えて戀し。九重になる花の色、おかでむかしや戀しかるらむと覺ゆれど、それにつけても、ふりにし昔は思ひ出でらるゝを、忘れじといひし、その世のともは、なきもあるにとぞ引きかへたる雲の上、草のかげにや思ひやるらむ。かゝるなさけのついでにはわすれぬ。おほく忍ばれむとやいひおきつらむ」などいふに、舟に乘らむとて、池の汀なる花の下に、月のかはのみまぼられて玄ばしあるに、大納言殿、「哀にこの世ならでも思ひ出づらむや」とてあれば、

「月にとひ花にかたりて忍ぶるをまたあはれなるひともありけり」。

つとめて、大納言殿、

「年をへてけふをかならず契りこし人しもなどかとまらざるらむ」。

御かへし、

「春をへてかはらぬ花の色なればさこそ見し世のともと戀ふらめ」。

いつとても哀は絶えてありながら忘るなといひしけふぞ悲しき」。

三月二十六日、雲ゐの花みなちりはてたるに、春日殿へ御ふみのまゐりたる、御かへりごとに、花を參らせらるゝに、少將殿、ちひさき枝を折り具して、ことづけはべるに、世にありがたきころなれば、初花よりもめづらしと思ふに、をりぐしぬればとてやらむ、めされぬ。やつれぬ花の契はいみじけれど、ころはしもと覺えて、花のかへりごと、

「思ひきやまれなるころのさくら花君がなさけをそへて見るほど。

いたづらに散りなむ花をあはれあはれ今ひと枝と見るよしもがな」。

又返り事、

「なべて咲くころにしあらば櫻花かゝることばのいろもそへじな。

雨風にはなはあとなく散りはてぬむなしき枝をかたみとは見よ」。

四月十九日、祭なり。使一條中將さねつぐの朝臣。皇后宮のつかひはなるべし。

五月五日、軒のあやめも今年はめづらしきさまにふきたり。ゐやうぶの御輿かきたてゝ、ことにおもしろし。もとへの女官ども、くすだまのゐやうぶもちて行きかふ。御くす玉の花どもまゐらす。

五月八日、紫野の若宮より、松の緑にしつけて參らせたり。御拜まだしきほどなるに、御所へまゐりたるに、なにとなく聞くもやさしく、「これを題にて歌をよみはべらばや」と沙汰あれば、

「むらさきにみどりかへたる姫小松あだし色とやきみに見すらむ」。

九日は、小五月の御幸なり。

五月十五日、御拜の御ともに、淸涼殿のすのこに侍へば、花はあとなくて、木ぐらき靑葉の梢もおもしろし。

六月二日、女御まゐり。

五日、ろけんなり。御使に、一條中將さねつぐ、紅のうすえふの御ふみあさがれひより參らせ

て、女御の御方のだいばんどころよりろく給へる。

六月六日、御とのあぶら參らせて後、常の御所の御椽を、新宰相殿ととほるに、むしの鳴きそむるを聞きて、新宰相殿、

「鳴きそむるむしの聲をし聞きつれば」

とて下の句もなければ、

「すでに秋なる心ちこそすれ」

とつけたるを、新宰相殿の、心ちさへするに、いひたきになんせさせ給ふ、いかゞ。おなじき七日、人の許より、女御御まゐりのめでたく、仁治(御四)のれいのまゝに雨さへたがはぬもめでたくて、

「いにしへを今につたふる雲の上は雨さへふるきためしをぞ見る」。

返りごとに、

「そのまゝをつたふる雲のうへなれば雨さへぞけに時をたがへぬ」。

六月十六日、月さし出でゝ空はむら雲立ちて、はれくもりするしも、心ある顔なるに、花山院中納言御ともにて、清涼殿に出でさせ給ひてつき御覧ぜらるる。皇后宮權大夫參り給ひて、「舟に乘り侍らむ」と申し給ふほどにしも、大ばん所のものどもめしいでゝ舟に乘せらるる。洞院の宰相中將もまゐりて、やがて御舟に參りて、藏人左衞門のりなは篳篥、權大夫ふやうの笛、花山院よこぶえ、いとおもしろし。

おなじき廿七日、新王の宣旨なり。その日、常磐井どのゝ和泉殿へ御わたましに、女房たち御まゐりども有り。いと御ひとずくなにて長閑やかなるに、御はいの御てうづ持ちてまゐりて見いだしたるに、女御のたて志とみに、青やかに藤の繁りたるを、「ことしは花咲かで過ぎぬる」と申せば、「このほど咲きたるをいまだ見ずや、うたて」と仰せでとあれば、「さも侍らず」と申せば、さてそれはこなたより見えざりけり。五ふさばかり咲きたりき。いつもの頃にはあらで、ことしもをり知りて咲きける花の心もありがたし。

「をり知りてかく咲きあへる藤の花なほなべてには思ふべきかは」。

れいのまゝならば、今はさかりも過ぎまし。

七月七日、院の御所より、露の御さうしとて、めんめんに給へりて、歌よみ侍る。權大納言のすけ殿にたづねまゐらすれば「御志もに」とあり。御局を引きあけたれば、この御さうし書けば、北山殿どのゝ、けふ戀しく思ひ出だされてとて、

「たきものゝふけしけぶりの末までも四年の秋はあはれなりしを」

とやがてかへらせ給へば、思ひいでの戀しさも、かくなればいとゞ色そひて、

「げにやげにいつも星合の空なれど四とせの秋はあはれなりしを。

待ちえたるけふもけふこそ嬉しけれ七夕つめやけふもけふなる」。

暮れぬれば、きかうてんの火のひかり、水にうつろひて氣色ことにおもしろし。ことぢたてよ、洞院の宰相中將なり、くわいの志るしと珍らしくや、七夕つめも思ひやられて、

「手向けおくたまのを琴もこのあきは七夕つめのいかに聞くらむ。
　この秋はたなばたつめに手向けおく玉のを琴に音もやそふらむ。
　たむけするそらだきものにいかばかり天の羽衣そでかをるらむ」。

權大納言、參らせ給うて御かたりあり。前大納言殿琵琶、琴は女御の御方の權大納言殿、洞院の宰相中將、笛花山院中納言殿、伯の少將やすなか、拍子綾の小路の少將。御樂はてぬ。心の中玄づまりはてゝ、「月見む」といひて女御の御方に、忍びて御琵琶ひかせ給ふ。

七月十九日、くわんのちやうの行幸なり。

二十一日、御けいの行幸。出御の内侍、少將、少輔、内侍なり。女御所の内侍、「馬には乘るべし」とて勾當とこれと、命婦四人、はゝき、かはち、備前、肥前、藏人にみあれのすむつる陰陽寮にて出で立つ。裏濃きそはうの三衣、靑きひとへ、かうけちのも、こきはかま、紫の指貫のもゝだちよりつまを出して、くわんのくつとてはきて髮あげて馬に乘りてくだる。すかりやにまんを引きて、女御代の御車立てられたり。出し車色々に見えて、ひんてうさうし車のまへに立つ。そらだきものゝ匂ひ、心にくゝくゆりみちてなむ。

閑院どのゝあとに御さじき七けん、中のまは院の御かた、左は皇后宮の御方なり。紅葉がさねのおしいだし見ゆ。御所の西に、ひら板敷に紫べり敷きて、さうじ二人ていしたり。御はしのまに、西園寺の大納言殿つかせ給ふ。右の方のかり屋に、殿上人ども着座したり。その玄もに、北おもて御隨身居たり。菊紅葉植ゑて、御さじきの儀式、いひつくすべくもなし。過ぎぬ

れば、道よりおりて車にて之とみやにまゐる。石たて松植ゑたり。主上えうよにめして、はらへどのへなる。還御なりてのち十三日、そのたびにそのをりつらつら久しからむをりなどあり。御わきまへは、そのをりにてあり。

十一月は大嘗會とて、之も月八日、女工所はじめとて、ゆうき之ゆきにてつくるが、いまだいでこねばゆうきには神祇官を用ゐらるとかや。之ゆきには陰陽寮なり。

八日、月さし出づるほどに、勾當と一つ車にて行く。夕づく夜のさびしきかげ、内野のはるばると霜枯の野べにさはるものなく見えたるも、なかなかをかしきに、

「霜がれの野邊にしわればはるばると所えがほにつきのみぞ澄む」。

さて月入りて後かへる。女工所に、かねて十二日とてありしかど、おそく作り出すに、十七日より入るに、雪うち散りて、冬籠りたる空のけしきのすごきに、陰陽寮のなかなるに、社のみぞ一つに見いだしたる。勾當は、神祇官のつかさの東に、女工所の屋立てたるに侍る。これには陰陽寮のうちにいぬゐのすみなり。とくせんおとらぬおとゝひ、女官にはつかさとて代々のくわんと名のりて、れいども引き、ぎやうじくわんにたゝみせめいだして之く。里より屛風、ぢを、づしやうの調度どもめしよせて之つらひつる。さるほどに日暮れぬ。さとより人まゐりて、厨子立てさはつらせなどす。おもひもよらぬほどに御幸ありと聞き、勾當の所より、これへ入らせおはします。晴れがましくなる女房だちいくらもいくらもおし入りて「いかにいかに」など仰せらるゝ。さをなる袴引きおとして着つ。やがて入らせおはしまして、「衣の

かけやう思ひ所あり。幸にこそかけたれ」とおほせごとありて、「すつらひやさし」などぎよかんにわづかる。今宵おとなしき人まゐらずば、いかにいかにはぢがましからましと覺ゆ。几帳なども立てめぐらしつ。よくよく御覽ありて「還御なりぬ。めんぼくもはぢがましさもおとる方なくこそ覺え侍れ。さても夜も明けぬれば、くわんよりぎやうじくわんとて、入りさふらはむ事うけ給はらむと申す。大嘗會のいなのみのおきな、いんこや女とかや、いろいろのものゝすやうぞくの衣、色々の染草、花くれなゐなどまゐらせたり。かたの如くなれば、女官このちやうにては、道行きがたき次第ども奉行の辨なかかぬにふれ申せば、「國々へ下知す侍れども、いまださたせず。せめふせ侍らむ」など申す。ぎやうじくわんと女官と、いさかふ。おそろしながらをかし。

十八日には行幸なる。

十九日、權大納言御局へ、くるゝほどに、

「きのふより近きたのみはなぐさむに覺束なくてけふも暮れぬる」

と申せば、御返り事、

「いましかくかきかよはせばなさけこそ逢ひにあひぬる近きすゑるしには」。

今は心強く覺ゆるにつけて、

「つれづれはみる心ちせよこゝに今おほうち山のくれのけしきを」。

二十一日は、まゐりの夜、ちやうだいの出御に、御つまいだしてなる。女房だち、御すゐりにつ

きてまゐる。女工所はてぬほどは、夜をこさぬことにて、おからさまにまゐりて、鐘うたぬさきに、女工所へかへる。つぎの日新宰相殿のもとより、事のまぎれなるにかく、

「人知れずやさしくぞ見しつきかげもおはみやびとのそでのけしきも。
よそに見むものとはかねて知らざりきとよのあかりのわりわけの月。
夜もすがらおはうち山のつきかげにたちまふそでをおもひこそやれ。
せめてたゞもしやこゝろのなぐさむとはこやの山のつきをこそ見れ。
おのづからなれしなごりを忘れずば見せばやともやおもひ出づらむ」。

返し、

「わりしにもあらずや人のうらむらむ思ひながらに日數へぬれば。
よそに見てさこそきのふは思ひけめおはみや人の袖のけしきを。
まぎれつゝ忘るらむとや思ふらむこゝろの中にとはぬ日はなし。
あはれにも心よわくぞながめけるとよのあかりのありわけの月。
さこそげにとよのあかりのもろ人のたち舞ふ袖も思ひやりけめ」。

さるほどに、ぎやうじくわん、色々の染草まゐらせたれば、女官つかさに受け取らす。さるしふみに任せて、御帳のかたびらいなのみの翁、いんこや女の裝束の衣、うけとらするに、そめくさども、りやうのこくしのもとへつみかはす。又奉行の辨仲兼とさまの催しもさきりかけて、御けうそつかはす。行事官、「ぢきにうけとらせ給へ」とて出で來たれば、侍どもをいだし

て、おひしらはするに、心えぬことゞもあれば、女工所の女ばうをはしに出して みすのきはへ、かの行事官をめしよせて、きぬのすんばふなどこまかにおひしらはせたれば、心えてよろこぶといへども、染草のいろいろ見えずして、御所の御りきしやを申して、ところどころへつけて、かたの如くせめ出しつ。ころもをとり重ねて、花のいろいろ、くれなゐのいろいろを、ひとへによせて、調ぜさせて、のちにそのいろいろ品々に分ち縫はせて、ほどなくさたし出でたれば、行事の辨よりはじめて悦ぶ。いまだ夜の中に、行事官ならびに、奉行の辨、めんめんに裝束うけとらす。そのきもつき、ぬしぬし女工所にいできて、しやうぞくもあり。いなのみの翁とて、びん白く、髭は帶のもとまで長くて、年もゝとせにもやと見ゆるに束帶せさす。これを見て心の中に、

「いなのみの翁さびたるびんしろしきみがちとせもかねて知られて」。

かやうのともがらしやうぞきつれだちて出でぬれば、だいりより出車賜はりぬ。局どもせばくて、殿の御やすまくの西の、らうにあつまりぞ侍ふ。

二十二日ひさの山引く、ひしめく、しやうぞくどもしてわたしつれば、心やすくて、暮るれば、くわいりう殿の行事に、勾當はまゐらせ給はず。少將内侍殿とぞ參り侍る。黑木の屋にまゐる。行事なりて、山陰の氏の藏人またせて、御ゆまゐりて、はくの御しやうぞくにて、筵道しき、神殿になる。御儀式まうすもおろかなり。殿いけしよしのなみどもきて、神殿に内侍もまゐるべかりしかども、かたてかはりて、女工所のならではまゐらぬことなれば、一人して

二つのことをつとむべきにもあらずとて、これにとゞまりて還御なりて、又御湯をめして又なる。殿はたびたび御まゐりありて、されども又御歸ありて、還御のほどに、御むかへに御まゐりあり。ほのぼのと明け行くに見れば、小柴あちこち多くゆひまはして、黒木の鳥居あまた立てたる、めづらかにおもしろきに、「かゝる公事の御けいきを見殘したらましかば」とさはりなく、今日までの事見つるも嬉しくてありがたく、ことはてゝあふべきにもあらず。

「君にかく契りありけりかしこくて今朝のみゆきにかくてあふ身よ」。

還御なれば、夜は明けはてゝ日さしいづるほどに、風もしづかにさしいづる日影ものどやかなれば、

「御幸なるけさとやみねに出づる日も常よりことに影ものどけき」。

ゆうきしゆきのせちゑ、豐の明のせちゑことになごり多く覺えて、ゐたいのらんぶ、ほのぼのとするほどに、隙ばかり聞く。ゆうきしゆきもよみしにかはるがはるかみあぐ。豐の明の節會はてがたに、まひ姫のほか大歌所うたふを奏す。まひ人樂を奏す。まひことのもとはてゝ、よごとの奏とてさいしゆたてあかしの光に見れば、をみのしやうぞく殊にうるはしく、こはごはしげにしやうぞきて、拜し奉るを見るにも、

「すべらぎのやはよろづ世と祈るらしあまつひるめのかみぞしるらむ」

と思ひつゞけらる。事はてゝ、高御座よりおはした所へなりぬ。せいしよ堂の御神樂は、御代のはじめの御祈なれば、ことに君もしんも御神事にてもてはやし給ふとなれば、そさの人かね

てよりその人々と定められて、みなまゐりぬ。御神樂の御しやうぞくはて〻、出御なりて、はじまりぬ。物のね澄みのぼりて、げんじやうの御ばちおとことにひゞきのぼりて、わごんのしらべ、もとすゑの拍子に合せてかきならす。おもしろくやさしきに、ふるめかしなど、申すもおろかなり。やそぢにあまりたるさねたかの二位の聲の色、むかしゆかしく覺ゆ。時々きえかへりて、年のしるしもかすかなるをりにも、げんじやうの御ばちおとにまぎれて、おもしろくやさしく聞ゆ。やうやう御神樂もはつれば、空もわけぬ。神祇官もことに近ければ、なふしやうし給ふらむと覺えて心のうちに、

「君が世を千世のはじめと祈るかな神のつかさのちかきたよりに」。

御神樂はてぬれば、人々ろく給はりて出でぬ。をみの姿、あくる日影にかゞやきて、やさしく見ゆ。

「やまあゐの色やこはりに亂るらむ日影うつろふをみのころもで」。

その後、御せんのめし、わした所の南おもての廣廂に、殿上人參りて、舞ひの〻しるもの〻まねなどするに、なにをもよくさうする今まゐり召し出したれば、馬をよくさうして、「この御馬はかさおどろきやし侍らむ」と申せば、「いしくさうしたり」とてしう人「わが身さうせよ」といふに、「かみは何事もめでたくわたらせ給ひて、常に御からかさ驚きやさふらふらむ」とさうしたりしもをかしう、そのふもとの中將、久しくだいりざまへもまゐらず。いかにとなりたるやらむ、いとほし。

正月元日の御儀式、常の如し。

二月五日、大原野へたつ。桂川を渡るに、見ればみの時になりぬ。今いくたびか、かくこれをとはらむと思ひて、

「久しからむ君が世なれば我もかくて今いくたびかこの瀬わたらむ」。

西山といふ所になれば、「おはれにいとほしくおぼし出づらむ」といひしわまの住みし所、今はなくなりぬ。むかひの明神、近きほどにて、常にまゐるといひしが、思ひ出づるよりあはれになつかしくて、

「なつかしむ心を知らばゆくさきをむかひの神のいかゞ見るらむ」。

さて、大原野にまゐりつきぬ。辨としみつ、えやうけいおそくて、かへさ暮れはてゝ、道たどたどしきに、夕づく夜かすかなるに、暮るゝまゝにすこし光もさしゆけば、

「夕づくようすきひかりを待ち出でゝ道のしるべもながめてぞ行く」。

二月十日、春日の臨時の祭に立つ。このぎはじめたることなれば、おもしろく嬉しくて、とりのはじめに梨原につきぬ。ねにもやなりぬらむの程にぞ宮にまゐる。更けたる月の木のまより見えて、庭火のかげ、神さびたる笛のね、拍子のおともすごく、舞ひ人の立ち舞ふけしき、光を神もいかにとおもしろくめでたし。

「君が世にかゝるひかりの色そふる神のこゝろもおもひしられて」。

ことはてぬれば、梨原へかへりぬ。ついでにちと入たうなどして、京へまゐりつきぬ。

三月九日、夜、淸涼殿にむしやまゐりて、つねの御所へまゐらむ道を、藏人やすよに問ひける程に、「逃げてかゝること」と申せば、御所は中宮の御方にぞわたらせおはします程に、常の御所へ、中宮ぐしまゐらせて、にげさせおはしましぬ。女つとひしめきのゝしりて、「とく女じゆ火をけちて、げん忿やうとりて、これ」と申せば、手さぐりにうけとりて、御所におきつ。夜のおとゞへ、劍璽とりに參れば、人の取り出しまゐらせて、道にわひたり。世間そのゝちひしめき、大はんのぶしひしめく。おそろしきことゞも出できぬ。淸涼殿けがれて、御所もわくれば、春日どのへなる。取りわへぬ事なれば、御引直衣にてえうよにてなる。供奉の人々ちよくいなるすがたにて、めづらしくことごとしき、常よりもおもしろくて。

十九日、富の小路殿へ御具足とりぐして、花山吹折りぐしてまゐりたるに、權大納言のすけ殿、

「ながめこしたゞ人づての一枝に花もわはれやそへて見ゆらむ」。

返しに、

「おもて見るこの一枝のわはれよりのこるみぎはのはなぞ戀しき。

君しかく殘るこずゑをとへとこそつねより花のいろもふかきは」。

藤の花にさして、

「人忘れずこゝろになれて見し藤のたれまたねども時を知りけり」。

皆人の折りてこずゑの殘りなくと聞けば、

「君待ちて散らじと花や思ふらむたれなさけなくをりやつすらむ」。

大納言殿、櫻木につけて、

「をりて見る人のこゝろのなさけよりみぎはの花の色ぞそひぬる」。

又、中務、

「思ひきや待ちし軒ばのさくら花たゞひとえだをつてに見むとは。

いかにまた見るにあはれのいろそひて咲きのこりける花の心よ。

一枝も折りて見せずばさくら花たゞいたづらにちりぞ過ぎまし」。

この花を、一ふさあづまへ行きたる人のもとへ、文の中に入れて、おなじくやるとて、

「東路のみちのおくにも花しあらばくもゐのはるや思ひ出づらむ」。

返し、

「今さらにあはれぞまさるこの花の同じこずゑをながめてしかば」。

三月二十日、夜雨ふる。中宮大夫殿神樂をうそぶき給ひて、「せうせうたる暗き雨の窓を打つ聲」とくちずさみ給ふ。ゐ物語に書きたらむことを聞くやうにておもしろし。雨風もともにはげしければ、

「物ごとにあはれすゝむるけしきにて秋とおぼゆる雨のおとかな」。

あくる日、淸涼殿の方に、大納言殿へ御ともに、三人出でゝ見れば、雨風に花はあとかたなくちりて、すのこに白く散りたり。

「よとゝもの雨と風とに忘られて軒ばのさくら散りはてにけり」。

大納言殿、

「をりしもあれ花散るころの雨風ようたてもはるの末にふりぬる」。

四月十四日、松尾へ立つ。おはぬさに葵をぐして車に入る。加茂ならで、又あふひはありけりと今日初めてめづらしう覺えて、

「待ちわびしその神山のあふひ草またゆるすよのかみもありけり」。

大納言殿の御局へ「待つかひありて、たゞ今ほとゝぎすの鳴き侍りつるは、もしおなじ聲をや聞く」とて、

「今鳴かむ聲をし聞かばほとゝぎすをしへやりつる初音とは忘れ」。

御返しに、

「君がやどに待つかひありて時鳥うらやましくも鳴きてけるかな。

いかにいかに哀と聞かむほとゝぎす今しもおなじ聲とおもはゞ。

雨はるゝ空にのどけくながめしてまつらむほどぞ思ひやらるゝ」。

やまひわづらはしくて里に侍るに、新宰相殿、

「もろともにながめばとのみおもはえてけさの雪にも君ぞ戀しき」。

返し、

「さこそとぞおもひやらるゝふる雪に我もきみをし思ひ出でゝは。

あはれなり思ひ出でつゝながめつる時しも人にとはれぬるかな」。

正應五の二月まで、局に侍へば、いよいよやまひおもくて里に出でたるに、三月つごもりに散りたる花に書きつけて、新宰相殿、

「散る花のなごりのみこそなげかるれまた來む春も知らぬ我が身に」。

返し、

「ことしはた花吹く風もいとはれずたゞわが身をもさそへと思ふに」。

中務内侍日記 終

徒然草

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

いでやこの世に生れては、ねがはしかるべき事こそ多かめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生のすゑばまで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさらなり、たゞ人も舎人など給はるきはゝゆゝしと見ゆ。そのこうまでまではゝふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほどにつけつゝ時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめどいと口をし。法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひまうにのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御をしへにたがふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなむ。人はかたちありさまの勝れたらむこそあらまほしかるべけれ。ものうちいひたる聞きにくからず、あいぎやうありて詞多からぬこそあかずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の心おとりせらるゝ、本性見えむこそ口をしかるべけれ。しなかたちこそ生れつきたらめ、心はなどかかしこきよりかしこきにもうつさばうつらざらむ。かたち心ざまよき人も、ざえ

なくなりぬれば、しなくだり、顏にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそほいなきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人のかゞみならむこそいみじかるべけれ。手などつたなからずはしりがき、聲をかくして拍子とり、いたましうするものから、げこならぬこそをのこはよけれ。

いにしへの聖の御代のまつりごとをもわすれ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづにきよらをつくしていみじと思ひ、所せきさましたる人こそうたて思ふところなく見ゆれ。「衣冠より馬車にいたるまで、あるにしたがひてもちゐよ。美麗をもとむることなかれ」とぞ九條殿（師輔）の遺誡にもはべる。順徳院の禁中の事ども書かせ給へる（禁秘抄）にも「おほやけのたてまつりものは、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

よろづにいみじくとも、色このまざらむ男はいとさうざうしく、玉のさかづきのそこなき心ちぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめずまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるは獨ねがちにまどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとてひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれむこそあらまほしかるべきわざなれ。後の世の事心にわすれず、佛の道うとからぬ、心にくし。不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて待つこともなくあかし暮したるさるかたにあらまほし。顯基中納言のいひけむ、配所の月罪なくて見むこと、さもおぼえぬべし。

我が身のやんごとなからむにも、まして數ならざらむにも、子といふものなくてありなむ。「さきの中書王(兼明親王)、九條の太政大臣(伊通)、花園左大臣(有仁)、皆ぞう絶えむことを願ひ給へり。染殿のおとゞ(良房)も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろきことなり」とぞ世繼の翁のものがたりにはいへる。聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひけるときも、「こゝをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

あだし野の露消ゆるときなく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかにものゝあはれもなからむ。世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏のせみの春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一とせをくらす程だにもこよなうのどけしや。あかずをしとおもはゞ、千とせを過すとも一夜の夢の心ちこそせめ。すみはてぬ世に、みにくきすがたを待ちえて何かはせむ。命長ければ辱おほし。長くとも四十にたらぬほどにて、死なむこそめやすかるべけれ。そのほど過ぎぬればかたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはむことを思ひ、夕の陽に子孫を愛し、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、物のあはれも知らずなりゆきなむあさましき。

世の人の心まどはすこと色欲にはしかず。人の心はおろかなるものかな。にほひなどはかりのものなるに、しばらく衣裳にたきものすと知りながら、えならぬにほひには心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女のはぎの白きを見て通を失ひけむは、まことに手あし

はだへなどのきよらに肥えあぶらつきたらむは、外の色ならねばさもあらむかし。

女は髮のめでたからむこそ人の目たつべかめれ。人のほど、心ばへなどは物うちいひたるけはひにこそ物ごしにも知らるれ。事にふれて、うちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女のうちとけたるいもねず、身をしとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにもよく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふがゆゑなり。まことに愛著の道その根深く源とほし。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中にたゞかのまどひのひとつやめがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆ。されば女の髮筋にてよれる綱には、大象もよくつながれ、女のはけるあしだにて作れる笛には、秋の鹿必よるとぞいひ傳へ侍る。みづからいましめて、恐るべくつゝしむべきはこのまどひなり。

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、すの子、すいがいのたよりをかしくうちある調度もむかし覺えて、やすらかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くのたくみの心を盡してみがきたて、からのやまとのめづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目もくるしくいとわびし。さてもやはながらへ住むべき。また時の間の煙ともなりなむとぞうち見るよりもおもはるゝ。大かたは家居にこそことざまはおしはからるれ。後徳大寺の大臣(實定)の寢殿に鳶ゐさせ

じとて縄をはられたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらむ何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」とてその後は參らざりけると聞きはんべるに、綾の小路の宮(性恵法親王)のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、「まことや烏のむれゐて、池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなむ」と人の語りしこそさてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけむ。

神無月のころ栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙なる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊紅葉など折りちらしたるさすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそすこしことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

おなじ心ならむ人と、しめやかに物がたりして、をかしき事も世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、露たがはざらむとむかひ居たらむは、ひとりある心ちやせむ。たがひにいはむほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝかたがふ所もあらむ人こそ、我はさやは思ふなどあらそひにくみ、さるからさぞともうちかたらはゞ、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこつかたも、我とひとしからざらむ人は、大かたのよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、遙にへだゝる

所のありぬべきぞわびしきや。

、ひとり燈のもとに文をひろげて、見ぬ人を友とするこそこよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集老子のことば、南華の篇、この國のはかせどもの書けるも、いにしへのはあはれなることおほかり。

、和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづやまがつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪のしゝも、ふすゐの床といへばやさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうにいかにぞや。言葉の外にあはれにけしき覺ゆるはなし。貫之が「絲によるものならなくに」といへるは、古今集の中のうたくづとかやいひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えず。その世の歌にはすがたことばこの類のみおほし。この歌にかぎりてかくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、ものとはなしにとぞかける。新古今には、「のこる松さへ嶺にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じ、おほせ下されけるよし、家長が日記には書けり。歌の道のみいにしへに變らぬなどいふこともあれど、いざや、今もよみあへるおなじことば、歌枕も、むかしの人のよめるは更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたも淸げにあはれも深くみゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそまたあはれなる事はおほかめれ。むかしの人は、いかにいひ捨てたることぐさも皆いみじく聞ゆるにや。

ゝいづくにもあれ、しばし旅だちたるこそめさむるこゝちすれ。そのわたりこゝかしこ見ありき、ゐなかびたる所、山里などは、いと目なれぬことのみぞおほかる。都へたよりもとめて文やる、「その事かの事便宜にわするな」などいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそよろづに心づかひせらるれ。持てる調度までよきはよく、能ある人かたちよき人も常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びてこもりたるもをかし。

ゝ神樂こそなまめかしくおもしろけれ。大かたもの ゝ音には笛、篳篥、つねに聞きたきは琵琶、和琴。

ゝ山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそつれづれもなく、心のにごりもきよまるこゝちすれ。

ゝ人はおのれをつゞまやかにし、驕を退けて財をもたず、世をむさぼらざらむぞいみじかるべき。昔よりかしこき人のとめるは稀なり。もろこしに許由といひつる人は、更に身にしたがへるたくはへもなくて、水をも手してさゝげて、飲みけるを見て、なりひさごといふものを人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風にふかれてなりけるを、かしがましとて捨てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけむ。孫晨は冬月にふすまなくて、藁一束ありけるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそしるしとゞめて世にも傳へけめ。これらの人はかたりも傳ふべからず。

19をりふしのうつりかはるこそものごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と人こゝとにいふめれど、それもさるものにて今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥のこゑなどもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに垣根の草もえ出づるころより、やゝ春深くかすみわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心をのみぞなやます。花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞいにしへのことも立ちかへり戀しう思ひいでらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたるすべておもひすてがたきことおほし。「灌佛のころ、まつりのころ、若葉の梢すゞしげに繁りゆくほどこそ世のあはれも人の戀しさもまされ」と人のおほせられしこそ實にさるものなれ。五月あやめふくころ、早苗とるころ、水鷄のたゝくなど心ぼそからぬかは。六月のころあやしき家に夕がほの白く見えて、かやりびふすぶるもあはれなり。六月ばらへまたをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜さむになるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、わさ田かりほすなど、とりあつめたることは秋のみぞおほかる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、おなじ事また今さらにいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬がれの景色こそ秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとゞまりて、霜いとしろうおけるあした、やり水より

煙のたつこそをかしけれ。年の暮れはてゝ人ごとに急ぎあへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月のさむけく澄める二十日あまりのそらこそ心ぼそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞあはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて、もよほし行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦の夜いたうくらきに、松どもともして、夜半すぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらむことごとしくのゝしりて足を空にまどふが、曉がたよりさすがに音なくなりぬるこそ年のなごりも心ぼそけれ。なき人のくる夜とてたまつるわざは、このごろ都にはなきを、あづまのかたにはなほすることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心ちぞする。大路のさま松たてわたして、華やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。

なにがしとかやいひし世すて人の、この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞをしきといひしこそ誠にさもおぼえぬべけれ。

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり「露こそあはれなれ」とあらそひしこそをかしけれ。折にふれば何かはあはれならざらむ。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて淸く流るゝ水のけしきこそ時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人のためにとゞまることしばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤にあそ

びて魚鳥を見て心たのしぶ」といへり。人遠く水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらじ。

何事もふるき世のみぞしたはしき。いまやうはむげにいやしくこそなりゆくめれ。かの木の道のたくみの作れるうつくしき器も、古代のすがたこそをかしと見ゆれ。文のことばなどぞむかしの反古どもはいみじき。たゞいふことばも、くちをしうこそなりもて行くなれ。「いにしへは、車もたげよ、火かゝげよとこそいひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人數だてといふべきを、たちあかししろくせよといひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御かうのろといふべきを、かうろといふくちをし」とぞふるき人の仰せられし。

衰へたるすゑの世とはいへど、なほ九重のかみさびたるありさまこそ世づかずめでたきものなれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじともきこゆれ。あやしの所にもありぬべき小蔀、小板敷、高遣り戸などもめでたくこそきこゆれ。「陣に夜のまうけせよ」といふこそいみじけれ。夜のおとゞのをば、「かいともしとうよ」などいふまためでたし。上卿の陣にて行へるさまはさらなり、諸司の下人どものしたり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこにねぶり居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴の音はめでたく優なるものなり」とぞ徳大寺の太政大臣（公孝）は仰せられける。

齋宮の野宮におはしますありさまこそ、やさしくおもしろきことのかぎりとはおぼえしか。經佛などいみて、なかご、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ捨てがたくなまめ

かしきものなれや。ものふりたる森の景色もたゞならぬに、玉垣しわたして、榊にゆふかけたるなどいみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、加茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松の尾、梅の宮。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかひて、華やかなりしわたりも、人すまぬのらとなり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ。桃李物いはねば誰とともにか昔をかたらむ、まして見ぬいにしへのやんごとなかりけむ跡のみぞいとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ志とゞまり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園おほく寄せられ、我が御ぞうのみ御門の御うしろみ、世のかためにて、行く末までとおぼしおきし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてむとはおぼしてむや。大門金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は燒けぬ。金堂はその後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞそのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いとたふとくてならびおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂などもいまだ侍るめり。これもまたいつまでかあらむ。かばかりのなごりだになき所々は、おのづからいしずゑばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに見ざらむ世までを思ひおきてむこそはかなかるべけれ。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月をおもへば、あはれと聞きしことのはごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ なき人のわかれよりもまさりて

悲しきものなれ。されば白きいとのそまむことをかなしび、道のちまたのわかれむことをなげく人もありけむかし。堀川院の百首の歌の中に、

「むかし見しいもが垣根はあれにけりつばなまじりのすみれのみして」。

さびしきけしき、さること侍りけむ。

御國ゆづりの節會おこなはれて、劔、璽、内侍所、わたし奉らるゝほどこそかぎりなう心ぼそけれ。新院花園のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや、

「とのもりのとものみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく」。

今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞさびしげなる。かゝるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。

諒闇の年ばかりあはれなることはあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけ、布のもかうあらあらしく、御調度どもおろそかに、みな人のさうぞく、太刀、平緒まで、ことやうなるぞゆゝしき。

しづかにおもへば、よろづ過ぎにし方の戀しさのみぞせむかたなき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじとおもふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ唯そのをりの心ちすれ。このごろある人の文だに久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけむと思ふはあはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくかはらず久しきいとかなし。

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしくせばき所にあまたあひ居て、後のわざどもいとなみあへる心あわたゞし。日かずのはやく過ぐるほどぞものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう互にいふ事もなく、我かしこげにものひきしたゝめちりぢりに行きあかれぬ。もとのすみかにかへりてぞ更に悲しきことはおほかるべき。「しかしかの事は、あなかしこ。跡のため忌むなることぞ」などいへるこそかばかりの中に何かはと人の心はなほうたておぼゆれ。年月經てもつゆ忘るゝにはあらねど、さるものは日々に疎しといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覺えぬにや。よしなしごといひてうちも笑ひぬ。からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふりうづみて、夕の嵐、夜の月のみぞこととふよすがなりける。思ひ出でゝ忍ぶ人あらむほどこそあらめ、そもまたほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々はあはれとやは思ふ。さるはあととふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ心あらむ人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千とせを待たで薪にくだかれ、ふるき墳はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。

雪のおもしろうふりたりしあした、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のことは何ともいはざりし返り事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからむ人の、仰せらるゝ事聞き入るべきかは。かへすがへす口をしき御心なり」といひたりし

こそをかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

九月二十日のころ、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おぼしいづる所ありて、あないせさせて入りたまひぬ。あれたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひしめやかにうちかをりて、忍びたるけはひいとものあはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、なほことざま優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今すこしおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば口をしからまし。あとまで見る人ありとはいかで知らむ。かやうの事はたゞ朝夕の心づかひによるべし。その人程なくうせにけりときゝ侍りし。

今の内裏つくりいだされて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日近くなりけるに、玄輝門院御らんじて、「閑院殿のくしがたの穴は、まろくふちもなくてぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。これはえふの入りて、木にてふちをしたりければあやまりにてなほされにけり。

甲香は、ほらがひのやうなるがちひさくて、口のほどのほそながにして出でたる貝のふたなり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所のものは「へなだりと申し侍る」とぞいひし。

手のわろき人の、憚らず文かきちらすはよし。見ぐるしとて人にかゝするはうるさし。

「久しくおとづれぬころ、いかばかり恨むらむと、我がをこたり思ひ知られて、ことばなき心ちするに、をんなのかたより、仕丁やある一人などいひおこせたるこそありがたくうれしけ

れ。さる心ざましたる人ぞよき」と人の申し侍りし。さもあるべきことなり。

「朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時に、我に心をきひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今さらかくやは」などいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしくよき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるこそおろかなれ。財おほければ身をまもるにまどし。害を買ひ煩を招くなかだちなり。身の後には金をして北斗をさゝふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚なる人の目をよろこばしむるたのしみ、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらむ人はうたて愚なりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名を、ながき世に残さむことあらまほしかるべけれ。位たかくやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚に拙き人も、家に生れ、時にあへば、たかき位にのぼり驕をきはむるもあり。いみじかりし賢人聖人、みづからいやしき位にをり、時にあはずしてやみぬる又おほし。ひとへに高きつかさ位をのぞむも次におろかなり。智恵と心こそ世にすぐれたるほまれものこさまほしきを、つらつらおもへば、譽を愛するは人の聞をよろこぶなり。譽むる人そしる人ともに世にとゞまらず。傳へ聞かむ人またまたすみやかに去るべし。誰をかはぢ誰にか知られむことをねがはむや。譽はまた毀のもとなり。身の後の名のこりて更に益なし。これをねがふも次におろかなり。たゞししひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはゞ、智恵い

で丶はいつはりあり。才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き、學びて知るはまことの智にあらず、いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。眞の人は智もなく徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰かつたへむ。これ徳をかくし愚を守るにあらず、もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。まよひの心をもちて、名利の要を求むるにかくのごとし。萬事はみな非なり。いふにたらず、ねがふにたらず。ある人法然上人に、「念佛のとき睡におかされて、行を怠り侍ること、いかゞしてこのさはりをやめ侍らむ」と申しければ、「目の覺めたらむほど、念佛し給へ」とこたへられたりける、いとたふとかりけり。また「往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもたふとし。また「うたがひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これもまたたふとし。

因幡の國に、何の入道とかやいふものゝむすめ、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、このむすめたゞ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひをくはざりければ、「かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらず」とて親ゆるさゞりけり。

五月五日加茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人たち隔てゝ見えざりしかば、おのおのおりて埓の際によりたれど、ことに人おほくたちこみて分け入りぬべきやうもなし。かゝるをりに、むかひなるあふちの木に法師ののぼりて木のまたについゐて物見るあり。とりつきながらいたうねぶりて、落ちぬべき時に目をさますこと度々なり。これを見る人あざけりあざみて「世のしれものかな、かく危き枝の上にて安き心ありてねぶるらむよ」といふに、我が心

にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來唯今にもやあらむ、それを忘れて物見て日をくらす、愚なることはなほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最も愚に候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへいらせたまへ」とて所をさりて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひよらざらむなれども、をりからの思ひかけぬ心ちして、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

唐橋中將(雅清)といふ人の子に、行雅僧都とて、敎相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目眉額なども腫れまどひて、うちおほひければ、ものも見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞおそろしく鬼の顔になりて、目は頂のかたにつき、額のほど鼻になりなどして、後は坊のうちの人にも見えずこもり居て、年久しくありて、猶わづらはしくなりて死にけり。かゝる病もあることにこそ。

春の暮つかた、のどやかに艶なるそらに、いやしからぬ家の奥ふかく、木だちものふりて、庭に散りしをれたる花見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆おろしてさびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたちよげなる男の、年二十ばかりにてうちとけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机の上にふみをくりひろげて見居たり。いかなる人なりけむ、たづねきかまほし。

あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月かげに色あひさだかならねど、つやゝかなる狩衣に、こき指貫いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人をぐして、遥なる田の中の細道を、稲葉のつゆにそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたるあはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむかた知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山のきはに總門のあるうちに入りぬ。榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまるこゝちして、下人にとへば、「しかしかの宮のおはしますころにて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂のかたに法師ども參りたり。夜さむの風にさそはれくる、そらだき物の匂も身にしむこゝちす。寢殿より廊にかよふ、女房の追風ようゐなど、人めなき山里ともいはず心づかひしたり。心のまゝにしげれる秋の野らに、おきあまる露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣り水の音のどやかなり。都の空よりは雲のゆきゝもはやき心ちして、月の晴れくもること定めがたし。

公世の二位のせうとに良覺僧正ときこえしは、きはめて腹あしき人なりけり。坊の傍に大なるえの木のありければ、人、榎の僧正とぞいひける。「この名しかるべからず」とてかの木をきられにけり。その根のありければ、きりぐひの僧正といひけり。いよいよはらだちて、きりぐひをほりすてたりければ、その跡大なる堀にてありければ、堀池僧正といひける。

柳原の邊に、強盗法印と號する僧ありけり。たびたび強盗にあひたるゆゑに、この名をつけにけるとぞ。

ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼のゆきつれたりけるが、道すがら「くさめくさめ」といひもて行きければ、「尼御前何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほいひやまざりけるを、たびたびとはれてうち腹だてゝ、「やゝ、はなひたる時かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君の比叡の山におはしますが、たゞ今もはなひ給はむとおもへば、かく申すぞかし」といひけり。ありがたき志なりけむかし。光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御をいだされてくはせられけり。物くひちらしたるついがさねを、御簾の中へさし入れてまかりいでにける。女房「あなきたな、誰にとれとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひやんごとなき事なり」とかへすがへす感ぜさせ給ひけるとぞ。

老きたりて、始めて道を行ぜむと待つことなかれ。ふるき塚おほくはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれることは知らるなれ。あやまりといふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事を急ぎて、過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらむや。人はたゞ無常の身にせまりぬることを、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらばなどかこの世の濁りもうすく、佛道をつとむる心もまめやかならざらむ。「昔ありけるひじりは、人きたりて自他の要事をいふとき、答へていはく、今火急の事ありて、既に朝夕にせまれりとて耳をふたぎて念佛して、終に往生を遂げゝり」と禪林の十因にはべり。心戒といひ

けるひじりは、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、しづかについゐけることだになく、「常はうづくまりてのみぞありけり」元如。

應長のころ、伊勢の國より女の鬼になりたるをゐてのぼりたりといふことありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに、京白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に參りたりし。今日は院へまゐるべし。たゞ今はそこそこに」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。そのころ東山より、安居院へんへまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、みな北をさしてはしる。「一條室町に鬼あり」とのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更にとほりうべうもあらず立ちこみたり。「はやく跡なき事にはあらざめり」とて人をやりて見するに、大かたあへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬪諍おこりて、あさましき事どもありけり。そのころおしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、「かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけり」といふ人も侍りし。

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられむとて、大井の土民におほせて、水車を作らせられけり。おほくのあしをたまひて、數日にいとなみ出してかけたりけるに、大かためぐらざりければ、とかくなほしけれども、終にまはらでいたづらにたてりけり。さて宇治の里人を召してこしらへさせられければ、やすらかにゆひてまゐらせたりけるが、おもふやうにめぐりて、水を汲み入るゝことめでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やんごとなき

ものなり。

仁和寺にある法師、年よるまで石清水ををがまざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひたちて、たゞ一人かちよりまうでけり。極樂寺高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さて傍の人に逢ひて「年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにもすぎてたふとくこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそほいなれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺のほふ師、童の法師にならむとするなごりとて、おのおのあそぶことありけるに醉ひて興に入るあまり、かたはらなるあしがなへをとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ることかぎりなし。しばしかなでゝ後ぬかむとするに、おほかたぬかれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむとまどひけり。とかくすれば、首のまはりかけて血たり、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うちわらむとすれど、たやすくわれず。響きて堪へがたかりければ、かなはですべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きける。道すがら、人のあやしみ見ることかぎりなし。醫師のもとにさし入りて、むかひ居たりけむありさま、さこそことやうなりけめ。ものをいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは文にも見えず、傳へたる敎もなし」といへば、また仁和寺へかへりて、親し

きもの老いたる母など、枕上により居て泣き悲しめども、聞くらむともおぼえず。かゝるはどにあるものゝいふやうは、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらむ。たゞ力をたてゝ引き給へ」とてわらのしべをまはりにさし入れて、かねをへだてゝ、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻はかけうけながらぬけにけり。からき命まうけて、久しくやみ居たりけり。

御室（仁和寺）にいみじきちごのありけるを、いかでさそひ出して遊ばむとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流のわりごやうのもの、ねんごろにいとなみ出でゝ、箱風情のものにしたゝめ入れて、雙の岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ參りて、ちごをそゝのかし出でにけり。うれしく思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵になみゐて、「いとうこそこうじにたれ。あはれ紅葉を焼かむ人もがな。しるしあらむ僧たち、いのり試みられよ」などいひしろひて、埋みつる木のもとに向ひて、數珠おしすり、印ことことしくむすびいでなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやつやものも見えず。所のたがひたるにやとて、掘らぬ所もなく山をあされどもなかりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ參りたる間に盗めるなりけり。法師どもことの葉なくて、聞きにくゝいさかひ腹だちて歸りにけり。あまりに興あらむとすることは、必あいなきものなり。

家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にもすまる。あつき頃わろきすまひは

堪へがたきことなり。深き水はすゞしげなし。淺くて流れたる遙にすゞし。こまかなるものを見るに、遣り戸は蔀の間よりもあかし。天井の高きは冬寒くともしびくらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし。

久しくへだゝりて逢ひたる人の、我が方にありつること、かずかずにのこりなく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなくなれぬる人も、程へて見るははづかしからぬかは。次ざまの人は、あからさまに立ち出でゝも、興ありつる事とて、息もつきあへず語り興ずるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人もきくにこそあれ。よからぬ人は誰ともなくあまたの中にうち出でゝ、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひても、いたく興せぬと、興なきことをいひても、よく笑ふにぞ、品のほどはかられぬべき。人の見ざまのよしあし、ざえある人はそのことなど定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたるいとわびし。

人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそほいなけれ。すこしその道知らむ人は、いみじと思ひてはかたらじ。すべていとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく聞きにくし。

道心あらば住む所にしもよらじ。家にあり人にまじはるとも、後世をねがはむにかたかるべきかはといふは、更に後世知らぬ人なり。げにはこの世をはかなみ、かならず生死を出でむ

と思はむに、何の興ありてか朝夕君につかへ、家をかへりみるいとなみの いさましからむ。心は緣にひかれて移るものなれば、靜ならでは道は行じがたし。そのうつはものむかしの人に及ばず、山林に入りても飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あられぬわざなれば、おのづから世をむさぼるに似たることも、たよりにふればなどかなからむ。さればとて、そむけるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てしなどいはむは、むげのことなり。さすがに一たび道に入りて、世をいとはむ人たとひ望ありとも、いきほひある人の貪欲多きに似るべからず。紙のふすま、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさむ。もとむる所はやすく、その心はやく足りぬべし。かたちにはづる所もあれば、さはいへど惡にはうとく、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらむしるしには、いかにもして世をのがれむ事こそあらまほしけれ。ひとへにむさぼることをつとめて、菩提におもむかざらむは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

大事をおもひたゝむ人は、さりがたく心にかゝらむことの本意をとげずして、さながら捨つべきなり。しばしこのことはてゝ、おなじくはかの事沙汰しおきて、しかしかの事、人のあざけりやあらむ、行く末難なくしたゝめまうけて、年ごろもあればこそあれ、その事待たむほどあらじ、物さわがしからぬやうになど思はむには、えさらぬことのみいとゞかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし心あるきはゝ、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。

身を助けむとすれば、耻をもかへりみず、たからをも捨てゝのがれ去るぞかし。命は人を待つものかは、無常の來ることは、水火のせむるよりもすみやかにのがれがたきものを、その時老いたる親、いときなき子、君の恩、人のなさけ、すてがたしとて捨てざらむや。

眞乘院（仁和寺坊）に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いもがしらといふものをこのみて多くくひけり。談義の座にても、大なる鉢にうづだかくもりて、膝下におきつゝ、くひながら文をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日など療治とてこもり居て、おもふやうによきいもがしらをえらびて、ことに多くくひて、萬の病をいやしけり。人にくはすることなし。たゞ一人のみぞくひける。きはめて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋をいもがしらのあしとさだめて、京なる人にあづけおきて、十貫づゝとりよせて、芋魁をともしからずめしけるほどに、またことように用ふる事なくて、そのあしみなになりにけり。「三百貫のものをまづしき身にまうけて、かくはからひける誠にありがたき道心者なり」とぞ人申しける。この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは、何ものぞ」と人のとひければ、「さるものを我も知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てむ」とぞいひける。この僧都みめよく力つよく、大食にて、能書、學匠、辯說、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも重くおもはれたりけれども、世をかろく思ひたるくせものにて、よろづ自由にして大かた人にしたがふといふことなし。出仕して饗膳などにつくときも、皆人の前すゑわたすを待たず、我が前にす

ゐぬれば、やがてひとりうちくひて、かへりたければ、ひとりついたちて行きけれ。ときひじも人にひとしく定めてくはず。我がくひたきとき、夜なかにも曉にもくひて、ねぶたければ晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聽き入れず。目覺めぬれば幾夜もいねず。心をすましてうそぶきありきなど、よのつねならぬさまなれば、人にいとはれず、よろづゆるされけり。德のいたれりけるにや。

御産のときこしきおとすことは、定まれることにはあらず。御胞衣とゞこほるときのまじなひなり。とゞこほらせ給はねばこのことなし。下ざまより事おこりて、させる本說なし。大原の里のこしきをめすなり。ふるき寶藏の繪に、いやしき人の子産みたる所に、こしきおとしたるをかきたり。

延政門院(稚)いときなくおはしましける時、院へまゐる人に、ことづてとて申させ給ひける御歌、

「ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる」。

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

後七日の阿闍梨、武者を集むること、いつとかや盜人に逢ひにけり。とのゐ人とてかくことごとしくなりにけり。一とせの相はこの修中のありさまにこそ見ゆなれば、つはものを用ゐむことおだやかならぬことなり。

「車の五緒はかならず人によらず。ほどにつけて、きはむるつかさ位にいたりぬれば、のるも

のなり」とぞある人おほせられし。

「このごろの冠は、昔よりは遥に高くなりたるなり」とぞある人おほせられし。古代の冠桶を持ちたる人は、はたをつぎて今用ふるなり。

岡本關白殿(家平)さかりなる紅梅の枝に鳥一雙をそへて、この枝につけて參らすべきよし、御鷹飼下毛野の武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず、一枝に二つつくることも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々にとはせ給ひて、また武勝に、「さらば己が思はむやうにつけてまゐらせよ」と仰せられたりければ、花もなき梅の朶に、一つをつけて參らせけり。武勝がまうし侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つぼみたると、散りたるとにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、或は六尺、かへし刀五分に切る。枝のなかばに鳥をつく。つくる枝ふまする枝あり。しゞら藤のわらぬにて二所つくべし。藤のさきは、火うち羽のたけにくらべて切りて、牛の角のやうにたわむべし。初雪のあした枝を肩にかけて、中門よりふるまひてまゐる。大みぎりの石をつたひて、雪にあとをつけず、雨おほひの毛を少しかなぐりちらして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、肩にかけて拜してしりぞく。初雪といへども、沓のはなのかくれぬほどの雪にはまゐらず。あまおほひの毛をちらすことは、鷹はよわごしをとることなれば、御鷹のとりたるよしなるべし」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけむ。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、「君がためにとをる花は時しもわかぬ」といへること、伊勢物語に見えたり。作り花はくるしからぬ

にや。

加茂の岩本橋本は、業平實方なり。人のつねにいひまがへ侍れば、一とせ參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼びとゞめて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければとおぼえはべる。吉水和尙、

　月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにあり原

とよみたまひけるは、岩本の社とこそうけたまはりおき侍れど、おのれらよりはなかなか御存じなどもこそさふらはめ」といとうやうやしくいひたりしこそいみじく覺えしか。今出川の院（中宮娍子）の近衞とて、集どもにあまた入りたる人は、わかゝりける時、常に百首の歌をよみて、かの二つの社の御前の水にて書きてたむけられけり。まことにやんごとなきほまれありて、人の口にある歌おほし。作文詩序など、いみじくかく人なり。

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなるもののありけるが、土おほねをよろづにいみじき藥とて、朝ごとに二つづゝやきてくひけること、年久しくなりぬ。ある時館のうちに人もなかりける隙をはかりて、敵おそひ來りてかこみ責めけるに、館のうちにつはもの二人いできて、命ををしまず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議におぼえて、「日ごろこゝにものし給ふとも見ぬ人々の、戰ひしたまふはいかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、あさなあさなめしつる土おほねらにさふらふ」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる德もありけるにこそ。

書寫の上人（性空）は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅のかりやに立ち入られけるに、豆のからをたきて、豆を煮ける音のつぶつぶとなるを聞き給ひければ、「うとからぬおのれらしも、うらめしく、われをば煮て、からきめを見するものかなといひけり。たかるゝ豆がらのはらはらと鳴る音は、わが心よりすることかは。やかるゝはいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ」とぞきこえける。

元應の清暑堂の御遊に、玄上はうせにしころ、菊亭のおとゞ（兼季）牧馬を彈じたまひけるに、座についてまづ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふところにそくひをもち給ひたるにて、つけられにければ、神供の參るほどに、よくひてことゆゑなかりけり。いかなる意趣かありけむ、物見けるきぬかづきのよりてはなちて、もとの樣におきたりけるとぞ。

名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心ちするを、見るときは、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、このごろの人の家のそこほどにてぞありけむと覺え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかくおぼゆるにや。またいかなるをりぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、我が心のうちも、かゝることのいつぞやありしかとおぼえて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心ちのするは、我ばかりかく思ふにや。

いやしげなるもの、居たるあたりに調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木のおほき、家のうちに子孫のおほき、人にあひて詞のおほき、願文に作善おほく

書き載せたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。
世にかたり傳ふること、まことはあいなきにや、多くはみなそらごとなり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月すぎ、さかひもへだゝりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定まりぬ。道々のもの、上手のいみじき事など、かたくなゝる人のその道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れぬ人はさらに信も起さず、音にきくと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるゝも顧みず、口に任せていひちらすは、やがてうきたる事ときこゆ。又我もまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどおごめきていふは、その人のそらごとにはあらず。げにげにしく所々うちおぼめき、能く知らぬよしして、さりながら、つまづま合せてかたるそら言はおそろしきことなり。わがため面目あるやうにいはれぬるそら言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらごとは、一人さもなかりしものをといはむも、せむなくて聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定まりぬべし。とにもかくにもそら言おほき世なり。たゞ常にある珍らしからぬことのまゝに心えたらむ、よろづたがふべからず。下ざまの人のものがたりは、耳おどろくことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、神佛の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗のそら言をねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふもせむなければ、大かたはまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

蟻の如くにあつまりて、東西にいそぎ南北にはしる。たかきありいやしきあり。老いたるあり若きあり。行く所あり歸る家あり。夕にいねて朝に起く、いとなむ所何事ぞや。生を貪り利をもとめてやむときなし。身を養ひて何事をか待つ、期するところたゞ老と死とにあり。そのきたることすみやかにして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、何のたのしみかあらむ。まどへるものはこれを恐れず、名利におぼれて先途の近きことをかへりみねばなり。愚なる人はまたこれをかなしぶ、常住ならむことを思ひて變化の理を知らねばなり。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ、まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ。世にしたがへば心外の塵にうばゝれてまどひ易く、人にまじはればことばよその聞にしたがひてさながら心にあらず。人にたはぶれ物にあらそひ、一度はうらみ一度はよろこぶ、そのことさだまれることなし。分別みだりに起りて得失やむときなし。まどひの上にゑへり。醉のうちに夢をなす。はしりていそがはしく、ほれて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑にし、事にあづからずして心を安くせむこそ暫くたのしむともいひつべけれ。「生活、人事、伎能、學問等の諸縁をやめよ」とこそ摩訶止觀にもはべれ。

世のおぼえ華やかなるあたりに、なげきもよろこびもありて人おほくゆきとぶらふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れたゝずみたるこそさらずともと見ゆれ。さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなむ。

世の中にそのころ人のもてあつかひぐさにいひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内知りて、人にもかたりきかせ、問ひきゝたるこそうけられね。ことにかたほとりなるひじり法師などぞ、世の人のうへはわが如く尋ねきゝ、いかでかばかりは知りけむと、おぼゆるまでぞいひちらすめる。

今やうの事どものめづらしきを、いひひろめもてなすこそまたうけられね。世に事ふりたるまで知らぬ人は心にくし。今さらの人などのある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、物の名など心えたるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心知らぬ人にこゝろえず思はすること、世なれずよからぬ人のかならずあることなり。

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知りがほにやいふ。かた田舍よりさしいでたる人こそ萬の道に心えたるよしのさしいらへはすれ。されば世にはづかしきかたもあれど、みづからもいみじと思へるけしきかたくななり。よくわきまへたる道には、かならず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。

人ごとに我が身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものゝ道をたて、えびすは弓ひくすべ知らず。佛法知りたるきそくし、連歌し、管絃をたしなみあへり。されど愚なるおのれが道より、なほ人に思ひあなどられぬべし。法師のみにかぎらず、上達部殿上人、上ざまゝでおしなべて、武を好む人おほかり。百たび戰ひて百たび勝つとも、いまだ武勇の名をさだめがたし。その故は運に乘じてあだをくだくとき、勇者にあらずといふ人なし。兵盡き矢さきはまり

て、遂に敵にくだらず、死をやすくしてのち、はじめて名をあらはすべき道なり。生けらむほどは武にほこるべからず。人倫にとほく禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば好みて益なきことなり。

屛風障子などの繪も文字もかたくなゝる筆樣して書きたるが、見にくきよりも、宿のあるじの拙くおぼゆるなり。大かたもてる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよきものを持つべしとにもあらず、損ぜざらむためとて、品なく見にくきさまに爲なし、めづらしからむとて、用なき事ども爲そへ、わづらはしくこのみなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくことごとしからず、つひえもなくて物がらのよきがよきなり。「うすものゝ表紙はとく損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「うすものはかみしもはづれ、らでんの軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ心まさりておぼえしか。一部とある草紙などのおなじやうにもあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、「ものをかならず一具に整へむとするは、つたなきものゝすることなり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじくおぼえしなり。「すべて何もみな事のとゝのほりたるはあしきことなり。爲のこしたるをさてうちおきたるは、おもしろくいきのぶるわざなり。內裏造らるゝにも、必つくりはてぬ所を殘すことなり」とある人申し侍りしなり。先賢の作れる內外の文にも、章段のかけたることのみぞはべる。

竹林院入道左大臣殿(公衡)、太政大臣にあがり給はむに、何のとゞこほりかおはせむなれども、め

づらしげなし。一の上にてやみなむとて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿(公賢)の事を甘心したまひて、相國ののぞみおはせざりけり。「亢龍の悔あり」とかやいふこと侍るなり。月滿ちては缺け、物盛にしてはおとろふ。萬の事さきのつまりたるは、やぶれに近き道なり。法顯三藏の天竺にわたりて、故郷の扇を見てはかなしみ、疾に臥しては漢の食を願ひ給へることを聞きて、「さばかりの人のむげにこそ心弱きけしきを、人の國にて見えたまひけれ」と人のいひしに、「弘融僧都、「優に情ありける三藏かな」といひたりしこそ法師のやうにもあらず心にくゝおぼえしか。

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されどおのづから正直の人、などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむはよのつねなり。いたりて愚なる人は、たまたま賢なる人を見てこれをにくむ。大きなる利をえむがために、すこしきの利をうけず、いつはりかざりて名を立てむとすとぞしる。おのれが心にたがへるによりてこのあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路をはしらば、すなはち狂人なり。惡人のまねとて人をころさば惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢をまなばむを賢といふべし。

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれしとき、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申

しつれど、寺はなければ、いまよりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

下部に酒のまするこ とは心すべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、こじうとなりければつねに申しむつびけり。ある時むかひに馬をつかはしたりければ、「はるかなるほどなり。口つきの男にまづ一どせさせよ」とて酒をいだしたれば、さしうけさしうけ、よゝと飲みぬ。太刀うち佩きてかひがひしければ、たのもしくおぼえて、召し具してゆくほどに、木幡のほどにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ちむかひて、「日暮れにたる山中にあやしきぞ。とまり候へ」といひて、太刀をひき拔きければ、人もみな太刀ぬき矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「うつし心なく醉ひたるものに候ふ。まげてゆるし給はらむ」といひければ、おのおの嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、「御坊は口惜しきことしたまひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず、高名つかまつらむとするを、拔ける太刀空しくなし給ひつること」といかりて、ひたきりに斬りおとしつ。さて「やまだちあり」とのゝしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山だちよ」といひてはしりかゝりつゝ斬りまはりけるを、あまたして手おはせうち伏せてしばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入りたり。あさましくて、男どもあまたはしらかしたれば、具覺坊は、くちなし原にによび伏したるを、求めいでゝかきもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。

あるもの、小野道風の書ける和漢朗詠集とてもちたりけるを、ある人、「御相傳うけることには侍らじなれども、四條大納言(公任)えらばれたるものを、道風かゝむこと時代やたがひ侍らむ、おぼつかなくこそ」といひければ、「さ候へばこそ世にありがたきものには侍りけれ」とていよいよ秘藏しけり。

「奥山にねこまたといふものありて、人をくらふなる」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて、ねこまたになりて、人とることはあなるものを」といふものありけるを、なにあみだ佛とかや連歌しける法師の、行願寺(一條北堂)のほとりにありけるが聞きて、一人ありかむ身は心すべきことにこそと思ひけるころしも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小川のはたにて音に聞きしねこまた、あやまたず足のもとへふと寄りきて、やがてかきつくまゝに、頸のほどをくはむとす。肝心もうせて、防がむとするに力もなく足もたゝず、小川へころび入りて、「助けよや、ねこまたよや、ねこまたよや」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに」とて川の中より抱きおこしたれば、連歌の賭物とりて、扇小箱などふところに持ちたるも水に入りぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。飼ひける犬のくらけれど、ぬしを知りて飛びつきたりけるとぞ。

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常にゆき通ひしに、ある時いでゝかへりきたるを、法印「いづくへ行きつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿のがりまか

りて候ふ」といふ。「そのやすら殿は男か法師か」とまたとはれて、袖かきあはせて、「いかゞさふらふらむ、かしらをば見候はず」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけむ。

赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なきことなり。むかしの人これを忌まず、このごろなにものゝ出でゝ忌みはじめけるにか「この日あること末とほらず」といひて、「その日いひたりしこと、志たりしことかなはず、得たりしものは失ひ、くはだてたりしこと成らず」といふ、おろかなり。吉日をえらびてなしたるわざの末とほらぬを、かぞへて見むもまたひとしかるべし。その故は無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始あることもをはりなし。志は遂げず望は絶えず、人の心不定なり。ものみな幻化なり。何事か志ばらくも住する。この理を知らざるなり。「吉日に惡をなすにかならず凶なり。惡日に善を行ふにかならず吉なり」といへり。吉凶は人によりて日によらず。

ある人弓射ることをならふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人ふたつの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一箭に定むべしとおもへ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことをおもひ、あしたには夕あらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。なんぞたゞ今の一念において、たゞちにすることのはなはだかたき。

「牛を賣るものあり。買ふ人、あすそのあたひをやりて牛をとらむといふ。夜のまに牛死ぬ。買はむとする人に利あり、賣らむとする人に損あり」とかたる人あり。これを聞きてかたへなるもの、いはく、「牛の主まことに損ありといへども、又大なる利あり。その故は、生あるもの死の近きことを知らざること、牛すでに然なり。人またおなじ。はからざるに牛は死し、はからざるにぬしは存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛の價鵝毛よりもかろし。萬金を得て一錢を失はむ人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」といふ。またいはく「されば（三字イ無）人死をにくまば生を愛すべし、存命のよろこび日々にたのしまざらむや。愚なる人この樂を忘れて、いたつがはしく外の樂をもとめ、この財を忘れてあやふく他の財をむさぼるには、志滿つることなし。いける間生をたのしまずして、死に臨みて死をおそれば、この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死をおそれざるにはあらず、死の近きことを忘るゝなり。もしまた生死の相にあづからずといはゞ、實の理を得たりといふべし」といふに、人いよいよあざける。

常磐井の相國（實氏）出仕したまひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにがしは勅書をもちながら下馬し侍りしものなり。かほどのものいかでか君に仕うまつり候ふべき」と申されければ、北面をはなたれにけり。「勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、おるべからず」とぞ。

「箱のくりかたに緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」とある有職の人に尋ね申し

侍りしかば、「軸につけ表紙につくること兩說なれば、いづれも難なし。文の箱はおほくは右につく、手箱には軸につくるも常のことなり」と仰せられき。

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなむ、見知りておくべし。

そのものにつきて、そのものを費しそこなふものの數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり。國に賊あり、小人に財あり。君子に仁義あり、僧に法あり。

たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えしことども、

一 しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうせぬはよきなり。

一 後世を思はむものは、糂汰瓶ひとつももつまじきことなり。持經本尊にいたるまで、よきものをもつ、よしなきことなり。

一 遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一 上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一 佛道をねがふといふは別のことなし。いとまある身になりて、世のこと心にかけぬを第一の道とす。

この外もありし事どもおぼえず。

八〇〇

堀川の相國（基具）は、美男のたのしき人にて、その事となく過差を好みたまひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられけるに、この唐櫃は上古よりつたはりて、そのはじめを知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊をもつて規模とす。たやすく改められがたきよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

久我の相國（雅通）は、殿上にて水をめしけるに、主殿司土器をたてまつりければ、「まがりをまゐらせよ」とてまがりしてぞめしける。

ある人任大臣の節會の内辨をつとめられけるに、内記のもちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへりとるべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位の内（イ外）記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院左（イ右）大臣殿（實泰）に次第を申し請けられければ、「又五郎男を師とするより外の才覺候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は老いたる衞士のよく公事に馴れたるものにてぞありける。近衞殿着陣したまひける時、ひざつきをわすれて外記をめされければ、火たきて候ひけるが、「まづひざつきをめさるべくや候ふらむ」と忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

大覺寺殿（後宇多院）にて、近習の人どもなぞなぞをつくりてとかれけるところへ、くすし忠守參りた

りけるに、侍従大納言公明卿、「我が朝のものとも見えぬ忠守かな」となぞなぞにせられけるを、「唐瓶子」と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかりでにけり。

荒れたる宿の人めなきに、女のはゞかることあるころにて、つれづれと籠り居たるを、ある人とぶらひ給はむとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びてたづねおはしたるに、犬のことごとしくとがむれば、げす女のいでゝ、「何處よりぞ」といふに、やがて案内させて入りたまひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらむと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、「こなたへ」といふ人あれば、たてあけ所せげなるやり戸よりぞ入り給ひぬる。内のさまはいたくすさまじからず、心にくゝ、火はあなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる。御車は門の下に。御供の人はそこそこに」といへば、「今宵ぞやすきいはぬべかめる」とうちさゝめくも忍びたれど、ほどなければほのぎこゆ。さてこのほどの事どもこまやかに聞え給ふに、夜ぶかき雞もなきぬ。こしかたゆくすゑかけて、まめやかなる御物がたりに、この度は雞も華やかなる聲にうちしきれば、明けはなるゝにやと聞きたまへど、夜深くいそぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、ひましろくなれば、忘れがたきことなどいひて、立ち出でたまふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる、卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしをおぼしいでゝ、桂の木の大なるがかくるゝまで、今も見おくり給ふとぞ。

北のやかげに消えのこりたる雪の、いたうこほりたるにさし寄せたる車のながえも、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれどもくまなくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻りかけて、物がたりするさまこそ何事にかあらむつきすまじけれ。かぶしかたちなどいとよしと見えて、えもいはれぬにほひのさとかをりたるこそをかしけれ。けはひなどはづれはづれ聞えたるもゆかし。

高野の證空上人、京都へのぼりけるに、ほそ道にてうまに乗りたる女の行きあひたりけるが、口ひきける男あしくひきて、ひじりの馬を堀へおとしてけり。ひじりいと腹あしく咎めて「こはけうの狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくうばいなどの身にて、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の悪行なり」といはれければ、口引の男、「いかに仰せらるゝやらむ、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」とあらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひけるけしきにて、馬ひきかへしてにげられけり。たふとかりけるいさかひなるべし。

女のものいひかけたる返り事、とりあへずよき程にする男はありがたきものぞとて、龜山院の御時、たはれたる女房ども若き男だちの參らるゝごとに、「時鳥や聞き給へる」と問ひて試みられけるに、なにがしの大納言とかやは、「數ならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり。堀川内大臣殿は「岩倉にて聞きて候ひしやらむ」と仰せられたりけるを、「これは難なし。數

ならぬ身むつかし」などさだめあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬやうにおふしたつべしとぞ。浄土寺の前關白殿は、をさなくて、安喜門院のよく教へまゐらせさせ給ひけるゆゑに、御詞などのよきぞと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、あやしの下女の見奉るも、いとはづかしく心遣ひせらるゝとこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひきつくろふ人も侍らじ。かく人にはぢらるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性はみなひがめり。人我の相ふかく、貪欲はなはだしく、物の理を知らず、たゞまよひの方に心もはやくうつり、詞もたくみに、苦しからぬ事をも問ふときはいはず。用意あるかと見れば、又あさましき事までとはず語りにいひ出す。深くたばかりかざれることは男の智惠にもまさりたるかと思へば、その事あとより顯はるゝを知らず、すなほならずして拙きものは女なり。その心に随ひてよく思はれむことは、心うかるべし。されば何かは女のはづかしからむ。もし賢女あらば、それも物うとくすさまじかりなむ。たゞ迷をあるじとして、かれに随ひたがふとき、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり。

寸陰をしむ人なし。これよく知れるか、おろかなるか。愚にして怠る人のためにいはゞ、一錢かろしといへども、これをかさぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢をしむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽にいたる。されば道人は、遠く日月を惜むべからず。唯今の一念空しくすぐることを惜むべし。もし人きたりて、「我が命明日は必ず失はるべし」と告げ知らせたらむに、今日の暮るゝ間、何事を

かたのみ何事をかいとなまむ。我等がいけるけふの日、なんぞその時節にことならむ。一日のうちに飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止むことを得ずして多くのときを失ふ。そのあまりのいとま、いくばくならぬうちに無益の事をなし、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時をうつすのみならず、日を消し月をわたりて、一生をおくる尤愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠白蓮のまじはりをゆるさゞりき。しばらくもこれなき時は、死人におなじ。光陰何のために惜むとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まむ人はやめ、修せむ人は修せよとなり。

高名の木のぼりといひし男、人をおきてゝ高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いとあやふく見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」とことばをかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるゝともおりなむ、いかにかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて、必仕ることに候ふ」といふ。あやしき下﨟なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して、後やすくおもへば、必おつると侍るやらむ。

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たむとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手がとくまけぬべきと案じて、その手をつかはずして、一めなりとも、遲くまくべき手につくべし」といふ。道を知れるをしへ、身ををさめ國を保たむ道もまた

志かなり。

「圍棊雙六このみてあかし暮す人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ」とあるひじりの申しゝこと、耳にとゞまりていみじくおぼえ侍る。

明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心志づかになすべからむわざをば人いひかけてむや。俄の大事をもいとなみ、切に歎くこともある人は、他の事聞き入れず、人の愁喜をもとはず、とはずとてなどや(元如)と恨むる人もなし。されば年もやうやうたけ、病にもまつはれ、いはむや世をも遁れたらむ人、又これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗のもだしがたきに志たがひて、これをかならずとせば、ねがひもおほく、身もくるしく、心のいとまもなく、一世は雜事の小節にさへられて空しく暮れなむ。日暮れ途とほし。吾が生既に蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ。禮義をも思はじ。この心をもたざらむ人は、ものぐるひともいへ。うつゝなし、なさけなしともおもへ。そしるともくるしまじ。譽むるとも聞きいれじ。

四十にもあまりぬる人の色めきたるかた、おのづから忍びてあらむはいかゞはせむ。ことにうち出でゝ男女のこと、人のうへをもいひたはるゝこそ似げなく見ぐるしけれ。大かたきゝにくゝ見ぐるしきこと、老人の若き人にまじはりて、興あらむとものいひたる。數ならぬ身にて世のおぼえある人を、へだてなきさまにいひたる。貧しきところに酒宴このみ、客人に饗應せむときらめきたる。

今出川のおほい殿（兼季）、嵯峨へおはしけるに、ありす川のわたりに水の流れたる所にて、さい王丸御牛を追ひたりければ、あがきの水前板までざゞとかゝりけるを、爲則御車の志りに候ひけるが、「希有の童かな。かゝる所にて御牛をばおふものか」といひたりければ、おほい殿御けしきあしくなりて、「おのれ車やらむこと、さい王丸にまさりてえ志らじ。希有の男なり」とて御車にかしらをうちあてられにけり。この高名のさいわう丸は、太秦殿（信清）の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はことづち、一人ははうはら、一人はおとうしとつけられけり。

宿河原といふ所にて、ぼろぼろおほく聚りて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろぼろの、「もしこの中にいろをし坊と申すぼろやおはします」と尋ねければ、その中より、「いろをしこゝに候ふ。かくのたまふはたぞ」と答ふれば、「志ら梵字と申すものなり。おのれが師なにがしと申しゝ人、東國にていろをしと申すぼろにころされけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろをし「ゆゝしくも尋ねおはしたり、さること侍りき。こゝにて對面したてまつらば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはむ。あなかしこ。わきざしたち、いづかたをもみつぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人河原に出であひて、心ゆくばかりにつらぬきあひて、ともに死にけり。ぼろぼろといふもの昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひけるもの、そのはじめなりけるとかや。世をすてたるに似て、我

執ふかく、佛道をねがふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死をかろくして、少しもなづまざるかたのいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけはんべるなり。

寺院の號、さらぬよろづの物にも名をつくること、昔の人はすこしも求めず、たゞありのまゝに安くつけゝるなり。このごろはふかく案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむつかし。人の名も、めなれぬ文字をつかむとする益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異說を好むは淺才の人の必あることなりとぞ。

友とするにわろきもの七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める兵、六にはそらごとする人、七には欲ふかき人。善き友三つあり、一にはものくるゝ友、二にはくすし、三には智惠ある友。

鯉のあつもの食ひたる日は、鬢そゝけずとなむ。膠にもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にてもきらるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉さうなきものなり。雉松茸などは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は心うきことなり。中宮(後深草院の)の御方の、御湯殿の上のくろみ棚に雁の見えつるを、北山入道殿(實兼)の御覽じて、歸らせたまひて、やがて御文にて、「かやうのものさながらそのすがたにて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはず、さま惡しきことなり。はかばかしき人のさふらはぬ故にこそ」など申されたりけり。

鎌倉の海にかつをといふ魚は、かの境にはさうなきものにて、この頃もてなすものなり。そ

れも鎌倉の年寄の申し侍りしは「この魚おのれら若かりし世までは、はかばかしき人の前へいづること侍らざりき。頭は下部もくはず、切りてすて侍りしものなり」と申しき。かやうのものも世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

唐のものは、藥の外はなくとも事かくまじ。書どもはこの國に多くひろまりぬれば、書きもうつしてむ。もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとり積みて、所せくわたしもてくるいとおろかなり。「遠きものを寶とせず」とも、また「得がたき寶をたふとまず」とも、ふみにも侍るとかや。

養ひ飼ふものには馬牛、繋ぎくるしむるこそいたましけれど、なくてかなはぬものなればいかゞはせむ。犬はまもり防ぐつとめ、人にもまさりたれは必あるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなむ。そのほかの鳥獸すべて用なきものなり。はしる獸は檻にこめ、くさりをさゝれ、飛ぶ鳥は翼をきり、こに入れられて、雲を戀ひ野山をおもふ愁やむ時なし。そのおもひ我が身にあたりて忍びがたくば、心あらむ人これをたのしまむや。生をくるしめて目をよろこばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林にたのしぶを見て逍遥の友としき。とらへ苦めたるにあらず。「凡めづらしき禽、あやしき獸、國にやしなはず」とこそ文にも侍るなれ。

人の才能は、文あきらかにしてひじりの敎を知れるを第一とす。次には手かくこと、旨とする事はなくともこれを習ふべし。學問にたよりあらむためなり。次に醫術を習ふべし。身を

養ひ人をたすけ、忠孝のつとめも醫にあらずばあるべからず。次に弓射、馬に乘ること六藝にいだせり。必これをうかゞふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味をとゝのへ知れる人大なる徳とすべし。次に細工よろづの要おほし。この外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに絲竹にたへなるは、幽玄の道、君臣これを重くすとはいへども、今の世にはこれをもちて世を治むること、漸おろかなるに似たり。こがねはすぐれたれども、くろがねの益多きに𛀙かざるがごとし。

むやくの事をなして時をうつすを、おろかなる人とも、ひがことする人ともいふべし。國のため君のため、止むことを得ずしてなすべきことおほし。そのあまりの暇いくばくならず思ふべし。人の身に止むことをえずしていとなむ所、第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事この三つにすぎず。飢ゑず寒からず、風雨にをかされずして、𛀙づかに過すを樂とす。たゞし人みな病あり、病にをかされぬればその愁忍びがたし。醫療をわするべからず。藥を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つかけざるを富めりとす。この四つの外をもとめ營むをおごりとす。四つの事儉約ならば誰の人か足らずとせむ。

是法法師は、淨土宗にはぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛してやすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

人におくれて四十九日の佛事に、あるひじりを請じ侍りしに、說法いみじくして、みな人涙

をながしけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、「いつよりも殊に今日はたふとくおぼえ侍りつる」と感じあへりし返事に、あるもの丶いふ「何とも候へ。あれほど唐の狗に似候ひなむうへは」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。「また人に酒勸むるとて、おのれまづたべて人に強ひ奉らむとするは、劔にて人を斬らむとするに似たることなり。二方にはつきたるものなれば、もたぐる時まづ我が頭を斬るゆゑに人をばえきらぬなり。おのれまづ醉ひて臥しなば、人はよもめさじ」と申しき。劔にて斬りこ丶ろみたりけるにや、いとをかしかりき。

「ばくちの負きはまりて、のこりなくうち入れむとせむに、あひてはうつべからず。立ちかへりつゞけて勝つべき時のいたれるを知るべし。その時を知るをよきばくちといふなり」と、あるもの申しき。

あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

雅房大納言は、才かしこく、よき人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、院の近習なる人「唯今あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿鷹にかはむとて、生きたる犬の足をきり侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましくにく丶おぼしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進も去給はざりけり。さばかりの人、鷹をもたれたりけるは思はずなれど、犬の足はあとなきことなり。そらごとは不便なれども、か丶ることをきかせ給ひてにくませ給ひける君の御心はいとたふとき事なり。

大かた生けるものを殺し、痛め鬪はしめて遊び樂まむ人は、畜生殘害のたぐひなり。よろづの鳥獸小き蟲までも、心をとゞめてありさまを見るに、子をおもひ親をなつかしくし、夫婦をともなひ、妬みいかり、欲おほく、身をあいし、命ををしめること、偏に愚痴なるゆゑに、人よりもまさりてはなはだし。かれにくるしみを與へ、命を奪はむこと、いかでかいたましからざらむ。すべて一切の有情をみて、慈悲の心なからむは人倫にあらず。

顔回は志人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ物をしへたぐること、賤しき民の志を奪ふべからず。又いとけなき子をすかしおどし、言ひ辱かしめて興ずることあり。おとなしき人は、まことならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみておそろしく、耻かしくあさましきおもひ、誠に切なるべし。これをなやまして興ずること慈悲の心にあらず。おとなしき人の、喜び怒り、悲び樂むも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身をやぶるよりも心をいたましむるは、人を害ふことなほはなはだし。病をうくる事も、多くは心よりうく、外より來る病はすくなし。藥を飲みて汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦耻ぢ恐るゝことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額をかきて、白頭の人となりしためしなきにあらず。

ものにあらそはず、おのれを枉げて人にしたがひ、わが身を後にして人を先にするにはしかず。萬の遊にも勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。己が藝のまさりたることをよろこぶ。されば負けて興なくおぼゆべきこともまた知られたり。我負けて人をよろこばしめむ

と思はゞ、更にあそびの興なかるべし。人には意なくおもはせて、わが心を慰まむこと徳に背けり。むつまじき中にたはぶるゝも、人をはかり欺きて、おのれが智のまさりたることを興とす、これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長きうらみを結ぶ類おほし。これ皆あらそひを好む失なり。人にまさらむことを思はゞ、たゞ學問して、その智を人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがらに爭ふべからずといふことを知るべきゆゑなり。大なる職をも辭し、利を捨つるは、たゞ學問の力なり。

貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて及ばざる時は速にやむを智といふべし。許さゞらむは人のあやまりなり。分を知らずして強ひて勵むはおのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざればぬすみ、力衰へて分を知らざれば病をうく。

鳥羽のつくり道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、むかしよりの名なり。元良親王、元日奏賀の聲はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽のつくり道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

「夜のおとゞは東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣を受くべきゆゑに、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常のことなり。白川院は北首に御寢なりけり。北は忌むことなり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を、御跡にせさせ給ふこといかゞ」と人申しけり。たゞし太神宮の遙拜は、たつみに向はせ給ふ。南にはあらず。

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時鏡をとりて貌をつくづくと見て、我がかたちのみにくゝあさましきことをあまりに心憂く覺えて、鏡さへうとましき心ちしければ、その後永く鏡をおそれて手にだにとらず、更に人にまじはることなし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそありがたくおぼえしか。かしこげなる人も、人のうへをのみはかりておのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふことわりあるべからず。されぱおのれを知るを物知れる人といふべし。かたちみにくけれども知らず、心のおろかなるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをもしらず、病の冒すをもしらず、死の近き事をもしらず、行ふ道のいたらざるをもしらず、身の上の非をもしらねば、まして外のそしりをもしらず。たゞし「かたちは鏡に見ゆ。年は數へてしる。我が身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ知らぬに似たり」とぞいはまし。かたちをあらため、齢を若くせよといふにはあらず。拙きを知らば、なんぞやがて退かざる。老いぬと知らば、なんぞしづかに身をやすくせざる。行おろかなりと知らば、なんぞ茲をおもふこと茲にあらざる。すべて人に愛樂せられずして衆にまじはるは耻なり。かたちみにくゝ、心おくれにして出でつかへ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪の頭を戴きてさかりなる人にならび、いはむや及ばざることを望み、かなはぬことをうれへ、來らざることを待ち、人におそれ、人に媚ぶるは、人の與ふる耻にあらず。貪る心にひかれて、みづから身をはづかしむなり。貪ることのやまざるは、命ををふる大

事今こゝにきたれりとたしかに知らざればなり。

資季大納言入道とかやきこえける人、具氏宰相中將に逢ひて、「わぬしの問はれむほどのこと、なに事なりとも答へ申さゞらむや」といはれければ、具氏「いかゞ侍らむ」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかばかしき事は片はしもまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゞろごとの中に、おぼつかなき事こそ問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもとの淺きことは、何事なりともあきらめ申さむ」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて諍はるべし。負けたらむ人は供御を繏けらるべし」と定めて、御前にてめしあはせられたりけるに、具氏「幼くより聞きならひ侍れど、その心知らぬことはべり。馬のきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんどうと申すことは、いかなることにか侍らむ、うけたまはらむ」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これはそゞろごとなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず。そゞろごとを尋ね奉らむと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道まけになりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

醫師のあつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御のまゐりけるに、「今まゐり侍る供御のいろいろを、文字も功能もたづね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける。時しも六條の故内府まゐり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らむ」とて「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らむ」と問はれたりける

に「土偏に候ふ」と申したりければ、「才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ。ゆかしきところなし」と申されけるに、とよみになりてまかりいでにけり。

花は盛に月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころおほけれ。歌のことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるにおとれることかは。花のちり月の傾ぶくを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ「この枝かの朶散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。萬の事もはじめをはりこそをかしけれ。男女の情もひとへにあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなるちぎりをかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲ゐをおもひやり、淺茅が宿にむかしを忍ぶこそ色このむとはいはめ。望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いとふかう靑みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木のまのかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樫などのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそいとたのもしうをかしけれ。よき人はひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。かた田舍の人こそ色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちよ

り、あからめもせずまもりて、酒のみ連歌して、はては大なるえだ心なく折りとりぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物よそながら見ることなし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。見ごといとおそし。そのほどは棧敷不用なりとて、奥なる屋にて酒のみものくひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたり候ふ」といふ時に、おのおの肝つぶるゝやうに爭ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾張りいでゝおしあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とありかゝりと物事にいひてわたり過ぎぬれば「又渡らむまで」といひておりぬ。唯物をのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。若くすゑずゑなるは、宮仕にたちゐ、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明け離れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど思ひよすれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくもきらきらしくも、さまざまに行きかふ見るもつれづれならず。暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なくなみゐつる人も、いづかたへ行きつらむ、程なくまれになりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾たゝみもとりはらひ、目の前にさびしげになりゆくこそ世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前を、こゝら行きかふ人の見知れるがあまたあるにて知りぬ。世の人數もさのみはおほからぬにこそ。この人みな失せなむ後、我が身死ぬべきにさだまりたりともほどなく待ちつけぬべし。大きなる器に水を入れて、細き孔をあけたらむ

に、滴ることとすくなしといふとも、怠るまなく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都のうちにおほき人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數おほかる日はあれど、おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうちおくほどなし。わかきにもよらず、つよきにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日までのがれ來にけるは、ありがたき不思議なり。しばしも世をのどかに思ひなむや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて立て並べたるほどは、とられむこといづれの石とも知らねども、數へあてゝ一つをとりぬれば、その外はのがれぬと見れど、またまた數ふれば、かれこれまぬき行くほどに、いづれものがれざるに似たり。つはものゝ軍にいづるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をもわする。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へるはいとはかなし。しづかなる山の奥、無常のかたきはひ來らざらむや。その死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御簾なるを皆とらせられ侍りしが、色もなくおぼえ侍りしを、よき人のしたまふことなれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

「かくれどもかひなきものはもろともにみすの葵の枯葉なりけり」

とよめるも、「母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉をよめる」よし家の集にかけり。ふるき歌のことばがきに、「枯れたる葵にさして遣はしける」とも侍り。枕草紙にも、「こしかた戀しきもの、かれたる葵」とかけるこそいみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季の物語にも

「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞかける。おのれと枯るゝだにこそあるを、名殘なくいかゞとり捨つべき。御帳にかゝれるくすだまも、九月九日菊にとりかへらるゝといへば、さうぶは菊のをりまでもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮(三條后)かくれ給ひてのち、ふるき御帳の內に、さうぶ藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「をりならぬねをなほぞかけつる」と辨の乳母(順時女)のいへる返りごとに、「あやめの草はありながら」とも江の侍從(匡衡女)がよみしぞかし。

家にありたき木は松、櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、このころぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにてこそあれ、八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。栽ゑずともありなむ。遲櫻またすさまじ。蟲のつきたるものむづかし。梅は白き、うす紅梅、一重なるがとく咲きたるも、かさなりたる紅梅の、にほひめでたきもみなをかし。おそき梅は櫻に咲きあひて、おぼえおとりけおされて、枝に萎みつきたるこゝろうし。「一重なるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて京極入道中納言(定家)は、なほ一重梅をなむ軒近くうゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本はべるめり。柳またをかし。卯月ばかりのわか楓、すべて萬の花紅葉にもまさりてめでたきものなり。橘、桂、いづれも木はものふり大きなるよし。草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮、秋の草は荻、薄、きちかう、萩、女郎花、藤袴、しをに、われもかう、苅萱、りんだう、菊、黃菊も、蔦、葛、朝顏、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に繁からぬよし。この外世にまれなるもの、唐めきたる名のきゝにくゝ、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。

大かた何もめづらしくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうのものなくてありなむ。

身死して財のこることは、智者のせざるところなり。よからぬものたくはへおきたるもつたなく、よきものは心をとゞめけむとはかなし。こちたく多かるまして口をし。「我こそえめ」などいふものどもありて、あとに爭ひたるさまあし。後は誰にとこゝろざすものあらば、いけらむうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらむものこそあらめ、その外は何ももたでぞあらまほしき。

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來て物がたりすとて、「あづま人こそいひつることはたのまるれ。都の人はことうけのみよくて、まことなし」といひしを、聖「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しくすみて、馴れて見るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人のいふほどのこと、けやけくいなびがたく、よろづえいひはなたず、心よわくことうけしつ。僞せむとは思はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意とほらぬこと多かるべし。吾妻人は我がかたなれど、げには心の色なく情おくれ、偏にすくよかなるものなれば、はじめよりいなといひて止みぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるゝぞかし」とことわられ侍りしこそ。この聖聲うちゆがみあらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言の後心にくゝなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、

かくやはらぎたるところありて、その益もあるにこそとおぼえ侍りし也。
心なしと見ゆるものも、よきひとことはいふものなり。ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人ももち侍らず」とこたへしかば、「さてはものゝあはれは知りたまはじ。なさけなき御心にぞものし給ふらむといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝるものゝ心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もちてこそ親の志はおもひ知るなれ。世をすてたる人のよろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ望ふかきを見て、むげに思ひくたすはひがことなり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ。親のため妻子のためには、耻をも忘れぬすみもしつべきことなり。されば盗人をいましめ、僻事をのみつみせむよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人恒の產なきときは恒の心なし。人きはまりてぬすみす。世治らずして凍餒のくるしみあらば、科のもの絶ゆべからず。人をくるしめ法ををかさしめて、それをつみなはむこと不便のわざなり。さていかゞして人を恵むべきとならば、上のをごり費すところをやめ、民を撫で農をすゝめば、下に利あらむこと疑あるべからず。衣食よのつねなるうへに、ひがことせむ人をぞまことの盗人とはいふべき。
人の終焉のありさまのいみじかりしことなど、人のかたるをきくに、たゞしづかにして亂れずといはゞ、心にくかるべきを、愚なる人はあやしくことなる相を語りつげ、いひしことば

もふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそその人の日ごろの本意にもあらずやとおぼゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず。博學の士もはかるべからず。おのれ違ふところなくば、人の見きくにはよるべからず。

栂尾の上人明惠道を過ぎ給ひけるに、河にて馬あらふ男、「あしあし」といひければ、上人たちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」と答へけり。「こはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて感涙をのごはれけるとぞ。

御隨身秦の重躬、北面の下野入道信願を「落馬の相ある人なり。よくよく愼み給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言神の如しと、人おもへり。さて「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「極めてもゝじりにして、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

明雲座主、相者に逢ひたまひて、「おのれもし兵仗の難やある」と尋ね給ひければ、相人「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」とたづね給ひければ、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて、假にもかくおぼしよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみのきざしなり」と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふこと、近く人のいひ出せるなり。格式

等にも見えず。

四十以後の人、身に灸をくはへて三里を燒かざれば、上氣のことあり。かならず灸すべし。

鹿茸を鼻にあてゝ嗅ぐべからず。ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

能をつかむとする人、よくせざらむ程は、なまじひに人にしられじ。うちうちよく習ひ得てさし出でたらむこそいと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人一藝もならひ得る事なし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて譏り笑はるゝにも耻ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず妄にせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは終に上手の位にいたり、德たけ人にゆるされてならびなき名をうることなり。天下のものゝ上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきてたゞしく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。

ある人のいはく、年五十になるまで上手に至らざらむ藝をば捨つべきなり。勵み習ふべきゆく末もなし。老人の事をば人もえ笑はず、衆にまじはりたるもあいなく見ぐるし。大かたよろづのしわざは止めて、暇あるこそめやすくあらまほしけれ。世俗のことにたづさはりて、生涯をくらすは下愚の人なり。ゆかしくおぼえむことは學び聞くとも、その趣を知りなば、おぼつかなからずしてやむべし。もとより望むことなくしてやまむは、第一のことなり。

西大寺靜然上人、腰かゞまり眉しろく、まことに德たけたるありさまにて、内裏へ參られた

りけるを、西園寺内大臣殿、「あなたふとのけしきや」とて信仰のきそくありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候ふ」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛はげたるをひかせて、「このけしきたふとく見えて候ふ」とて内府へ參らせられたりけるとぞ。

爲兼大納言入道めしとられて、武士どもうちかこみて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿一條わたりにてこれを見て、「あなうらやまし。世にあらむおもひでかくこそあらまほしけれ」とぞいはれける。

この人、東寺の門にあまやどりせられたりけるに、かたはものどもの集り居たるが、手も足もねぢゆがみうちかへりて、いづくも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなきさくせものなり、尤愛するに足れりと思ひて、守り給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせくおぼえければ、たゞすなほにめづらしからぬものにはしかずと思ひて、かへりて後、この間栽木を好みて、異やうに曲折あるをもとめて、目もよろこばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢に栽ゑられける木ども、みなほり棄てられにけり。さもありぬべきことなり。

世にしたがはむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にも逆ひ心にも違ひてその事成らず。さやうのをりふしを心得べきなり。たゞし病をうけ子うみ死ぬることのみ、機嫌をはからず。ついであしとてやむことなし。生住異滅のうつりかはるまことの大事

は、たけき河のみなぎり流るゝがごとし。暫しもとゞこほらず、たゞちに行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならず果し遂げむと思はむ事は、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足をふみとゞむまじきなり。春くれて後夏になり、夏はてゝ秋のくるにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も靑くなり梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下にまうけたるゆゑに、待ちとるついで甚はやし。生老病死のうつり來ることこれに過ぎたり。四季はなほ定まれるついであり。死期はついでをまたず。死は前よりしも來らず、かねてうしろにせまれり。人みな死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、おぼえずして來る。沖の干潟はるかなれども礒より潮の滿つるがごとし。

大臣の大饗はさるべき所を申しうけて行ふ常のことなり。宇治左大臣殿賴長は、東三條殿にて行はる。內裏にてありけるを申されけるによりて、よそへ行幸ありけり。させることのよせなけれども、女院の御所などかり申す故實なりとぞ。

筆をとればものかゝれ、樂器をとれば音をたてむと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、賽をとればだうたむことをおもふ。心はかならず事に觸れて來る。かりにも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖敎の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。かりに今この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これすなはち

ふるゝ所の益なり。心さらにをこらずとも、佛前にありてずゞをとり經をとらばをこたるうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に座せば、おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず。外相もしそむかざれば、內證かならず熟す。しひて不信といふべからず。わふぎてこれをたふとむべし。

「盃のそこをすつること」はいかゞ心えたる」とある人の尋ねさせ給ひしに、「凝當と申しはべれば、底に凝りたるをすつるに候ふらむ」と申し侍りしかば、「さにはわらず。魚道なりっ流を殘して口のつきたる所をすゝぐなり」とぞ仰せられし。

「みなむすびといふは絲をむすび重ねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ」とあるやんごとなき人仰せられき。になといふはわやまりなり。

門に額かくるを、うつといふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門行忠は、「額かくる」とのたまひき。見物の棧敷うつもよからぬにや、ひらばりうつなどはつねの事なり。棧敷構ふるなどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する護摩するなどいふなり。「行法も、法の字をすみていふわろし。濁りていふ」と淸閑寺僧正道我仰せられき。常にいふ事にかゝることのみ多し。

花の盛は、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日おほやうたがはず。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろかひつけて、堂の內まで餌をまきて、戶ひとつをあけたれば、數もしらず入りこもりける後、おのれも入りて、立て籠めて捕へつゝ殺しけるよそほ

ひ、おどろおどろしく聞えけるを、草苅るわらは聞きて人に告げゝれば、村の男ども、おこりて入りて見るに、大鴈どもふためきあへる中に、法師まじりてうち伏せねぢ殺しければ、この法師をとらへて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言別當のときになむ侍りける。

太衝の太の字、點うつうたずといふこと、陰陽のともがら相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

世の人相逢ふ時、しばらくも默止することなし、かならずことばあり。そのことを聞くに、おほくは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他のために失多く得すくなし。これをかたる時、たがひの心に無益のことなりといふことを知らず。

あづまの人の都の人にまじはり、みやこの人のあづまに行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして人にまじはれる見ぐるし。

人間の營みあへるわざをみるに、春の日に雪佛をつくりて、そのために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔を建てむとするに似たり。そのかまへをまちてよく安置してむや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪のごとくなるうちに、いとなみ待つこと甚おほし。

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろにのぞみて、「あはれ我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知

らぬ道のうらやましくおぼえば、「あなうらやまし。などかならはざりけむ」といひてありなむ。我が智をとり出でゝ人に爭ふは、角あるものゝ角をかたぶけ、牙あるものゝ牙をかみいだすたぐひなり。人としては善にほこらず、物と爭はざるを德とす。他にまさることのあるは大なる失なり。品のたかさにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ詞に出でゝこそいはねども内心にそこばくのとがあり、謹みてこれをわするべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひをも招くはたゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづからあきらかにその非を知るゆゑに、志常にみたずして、つひにものにほこることなし。

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には誰にか問はむ」などいはゞ、老のかたうどにて生けるもいたづらならず。さはあれどそれもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮れにけりと拙く見ゆ。今は忘れにけりといひてありなむ。大かたは知りたりとも、すゞろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづからあやまりもありぬべし。「さだかにも辨へ知らず」などいひたるは、なほまことに道のあるじともおぼえぬべし。まして志らぬこと、志たりがほに、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人 いひきかするを、さもあらずと思ひながら、聞き居たるいとわびし。

「何事の式といふことは、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふことばなり」と人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫(伊行女)、後鳥羽院の御位の後、また內ずみしたること

をいふに、「世の式もかはりたることはなきにも」と書きたり。

さしたる事なくて、人のがり行くはよからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなばとくかへるべし。久しく居たるいとむづかし。人とむかひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず。萬の事さはりて時をうつす、たがひのため益なし。いとはしげにいはむもわろし。心づきなきことあらむをりは、なかなかそのよしをもいひてむ。おなじ心にむかはまほしく思はむ人の、つれづれにて、「いましばし、今日は心しづかに」などいはむは、このかぎりにはあらざるべし、阮籍が靑き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに人の來りて、のどかに物がたりしてかへりぬるいとよし。また「文も久しく聞えさせねば」などばかりいひおこせたるいとうれし。

貝をおほふ人の、我が前なるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、膝の下まで目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人はよそまでわりなくとるとは見えずして、近きばかりおほふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石をたてゝはじくに、むかひなる石をまもりて彈くはあたらず、わが手もとをよく見て、こゝなるひじりめをすぐにはじけば、立てたる石必あたる。萬の事外にむきてもとむべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。淸獻公(趙抃)がことばに、「好事を行じて前程を問ふことなかれ」といへり。世を保たむ道もかくや侍らむ。内を愼まず、輕くほしきまゝにしてみだりなれば、遠國必そむく時、はじめて謀をもとむ。「風にあたり濕に臥して、病を神靈にうたふるはおろかなる人なり」と醫書

にいへるがごとし。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし、道を正しくせば、その化遠く流れむことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍をかへして德を布くにはしかざりき。

若き時は血氣内にあまり、心物に動きて情欲おほし。身をあやぶめて碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて財を費し、これを捨てゝ苔の袂にやつれ、勇める心盛にしてものと爭ひ、心にはぢうらやみ、このむ所日々に定まらず、色にふけり情にめで、行をいさぎよくして百年の身を誤り、命を失へるためしねがはしくして、身のまたく久しからむことをば思はず、すけるかたに心ひきて、ながき世語ともなる身をあやまつことはわかき時のしわざなり。老いぬる人は精神衰へ、あはくおろそかにして感じ動く所なし。心おのづからしづかなれば、無益のわざをなさず、身をたすけて愁なく、人のわづらひなからむことを思ふ。老いて智のわかき時にまされること、若くしてかたちの老いたるにまされるがごとし。

小野小町がこと、極めてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文清行がかけりといふ說あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛なることその後のことにや、なほおぼつかなし。

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大に就き小をすつることわり、まことにしかなり。人事おほかる中に、道を樂むより氣味ふかきはなし。これまことの大事なり。一たび道を聞きてこれに志さむ人、いづれのわざかすたれざらむ。何事をかいとな

まむ。愚なる人といふとも、かしこき犬の心におとらむや。

世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめ志ひのませたるを興とすること、いかなるゆゑとも心えず。飲む人の顔いと堪へがたげに眉を顰め、人めを謀りて捨てむとし、にげむとするをとらへてひきとゞめてすゞろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりてをこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も志らず倒れふす。祝ふべき日などはあさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物くはずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず、おほやけわたくしの大事をかきてわづらひとなる。人をしてかゝるめを見する事、慈悲もなく禮義にもそむけり。かくからきめにあひたらむ人、ねたく口をしと思はざらむや。ひとの國にかゝるならひあなりと、これらになき人事にて傳へ聞きたらむはあやしく不思議におぼえぬべし。人の上にて見たるだに心うし。思ひ入れたるさまに心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり詞おほく、ゑばう子ゆがみ紐はづし脛たかくかゝげて用意なきけしき、日ごろの人とも覺えず。女は額髪はれらかにかきやり、まばゆからず、顔うちさゝげてうち笑ひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人は肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたるさまあし。聲のかぎり出しておのおの謡ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩ぬぎて目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましくにくし。あるは又我が身いみじき事ども、かたはらいたくいひきかせ、あるは醉ひなきし、下ざまの人はのりあひいさかひて、あさましくおそろし。はぢがましく

心憂きことのみありて、はては許さぬものどもおしとりて、椽より墮ち馬車より落ちてあやまちしつ、ものにも乘らぬきはゝ大路をよろぼひ行きて、ついひぢ、門の下などに向きて、えもいはぬ事ども云ちらし、年老い袈裟かけたる法師は、小わらはの肩をおさへて聞えぬ事どもいひつゝよろめきたるいとかはゆし。かゝることをしてもこの世も後の世も、益あるべきわざならばいかゞはせむ。この世にては過おほく、財を失ひ病をまうく。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。憂を忘るといへど、醉ひたる人ぞ過ぎにしうさをも思ひいでゝなくめる。後の世は人の智惠を失ひ、善根をやくこと火の如くして惡をまし、よろづの戒を破りて地獄におつべし。酒をとりて人にのませたる人、五百生が間手なきものに生るゝとこそ佛は說き給ふなれ。かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨て難きをりもあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても心のどかに物語して盃いだしたる萬の興をそふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に友の入りきて、執り行ひたるも心慰む。なれなれしからぬあたりの御簾の中より、御くだものみきなど、よきやうなるけはひして、さし出されたるいとよし。冬せばき所にて火にてものいりなどして、へだてなきどちさしむかひておほく飲みたるいとをかし。旅のかりや野山などにて、御肴何などいひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、强ひられてすこし飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、今ひとつうへすくなしなどのたまはせたるもうれし。ちかづかまほしき人の上戶にて、ひしひしと馴れぬる又うれし。さはいへど上戶は、をかしく罪ゆるさるゝものなり。醉ひくたびれてわ

さいたる所を、あるじいひきわけたるに、まどひてほれたる顏ながら、ほそきもとゞりさしいだし、物も着あへず抱きもち、ひきまつひてにぐる、かひどりすがたのうしろ手、毛おひたるほそはぎのほど、をかしくつきづきし。

黒戸は小松の御門位につかせ給ひて、昔たゞ人におはしましゝ時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすゝけたれば黒戸といふとぞ。

鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨ふりて後いまだ庭のかわかざりければ、いかゞせむと沙汰ありけるに、佐々木隱岐入道、鋸の屑を車に積みておほく奉りたりければ、一庭に敷かれて泥土のわづらひなかりけり。「とりためけむ用意ありがたし」と人感じあへりけり。この事をある者のかたりいでたりしに、吉田中納言の、「乾沙の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、はづかしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しくことやうのことなり。庭の儀を奉行する人、かわき砂をまうくるは故實なりとぞ。

ある所のさぶらひども 内侍所の御神樂を見て人にかたるとて「寶劍をばそい人ぞもち給へる」などいふを聞きて うちなる女房の中に「別殿の行幸には晝御座の御劍にてこそあれ」と忍びやかにいひたりし心にくかりき。その人ふるき典侍なりけるとかや。

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたりやけ野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那爛陀寺と號す。その聖の申されしは、「那爛陀寺は大門北むきなりと、江師の説とていひつたへたれど、西域傳法顯傳などにも見えず、さらに所見なし。江師はい

かなる才覺にて申されけむ。おぼつかなし。唐土の西明寺は北むき勿論なり」と申しき。

さぎちやうは、正月にうちたるぎちやうを、眞言院より神泉苑へ出して燒きあぐるなり。法成就の池にこそとはやすは、神泉苑の池をいふなり。

「ふれふれこゆきたんばのこゆき」といふ事、よね搗きふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこゆきといふべきを、あやまりてたんばのとはいふなり。かきや木のまたにとうたふべし」とあるもの知り申しき。昔よりいひけることにや。鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降るにかく仰せられけるよし、讃岐のすけが日記にかきたり。

四條大納言隆親卿、からざけといふものを、供御にまゐらせられたりけるを、「かくあやしきものまゐるやうあらじ」と人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚まゐらぬことにてあらむにこそあれ、鮭のしらぼしなんでふことかあらむ。鮎のしらぼしはまゐらぬかは」と申されけり。

人つく牛をば角をきり、人くふ馬をば耳をきりてそのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、ぬしのとがなり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみなとがあり。律のいましめなり。

相摸守時賴の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して、きりまはしつゝはられければ、せうとの城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、なにがし男にはらせ候はむ。

さやうの事に心えたるものに候ふ」と申されければ、「その男尼が細工によもまさり侍らじ」とてなほ一間づゝはられけるを、義景「皆をはりかへ候はむは、遙にたやすく候ふべし。まだらに候ふも見苦しくや」とかさねて申されければ、「尼も後はさわさわとはりかへむと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐることぞと若き人に見ならはせて、心づけむためなり」と申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつほどの人を子にてもたれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

城陸奥守泰盛は、さうなき馬乘なりけり。馬をひきいださせけるに、足をそろへてしきみをゆらりと超ゆるを見ては、「これはいさめる馬なり」とて鞍をおきかへさせけり。また足を延べてしきみを蹴あてぬれば、「これはにぶくしてあやまちあるべし」とて乘らざりけり。道を知らざらむ人、かばかりおそれなむや。

吉田と申す馬乘の申し侍りしは、「馬ごとにこはきものなり。人の力爭ふべからずと知るべし。乘るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に危きことやあると見て、心にかゝることあらば、その馬を馳すべからず。この用意を忘れざるを、馬乘とは申すなり。これ秘藏のことなり」と申しき。

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必まさることは、たゆみなくつゝしみて、輕々しくせぬと、偏に自由なるとのひとしからぬなり。藝能所作の

みにあらず、大かたのふるまひ心づかひも、おろかにしてつゝしめるは得の本なり。たくみにしてほしきまゝなるは失の本なり。

あるもの子を法師になして、「學問して因果の理をもしり、說經などして、世わたるたづきともせよ」といひければ、敎のまゝに說經師にならむために、まづ馬に乘りならひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられむ時、馬などむかへにおこせたらむに、もゝじりにて落ちなむは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒などすゝむることあらむに、法師のむげに能なきは檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざやうやう境に入りければ、いよいよよくしたくおぼえて嗜みける程に、說經ならふべきひまなくて年よりにけり。この法師のみにもあらず、世間の人なべてこのことあり。若きほどは諸事につけて身をたて、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行く末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事のみにまぎれて、月日をおくれば、ことごとなすことなくして身は老いぬ。終にものゝ上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、とり返さるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へゆく。されば一生のうちにむねとあらまほしからむことの中に、いづれかまさるとよく思ひくらべて、第一のことを案じ定めて、その外は思ひすてゝ、一事を勵むべし。一日の中一時の中にも、あまたのことのきたらむ中に、すこしも益のまさらむことを營みて、その外をばうちすてゝ、大事をいそぐべきなり。いづ方をもすてじと心にとりもちては、一事も成るべ

からず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすてゝ大につくが如し。それにとりて三つの石をすてゝ、十の石につくことはやすし。十をすてゝ十一につくことはかたし。一つなりともまさらむかたへこそつくべきを、十までなりぬれば惜しくおぼえて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも捨てずかれをもとらむと思ふ心に、かれをも得ずこれをも失ふべき道なり。京にすむ人、急ぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益まさるべき事を思ひえたらば、門よりかへりて西山へゆくべきなり。こゝまできつきぬれば、この事をばまづいひてむ、日をさゝぬことなれば、西山の事はかへりてまたこそ思ひたゝめと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる、これをおそるべし。一事を必ず成さむと思はゞ、他の事の破るゝをもいたむべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては一つの大事成るべからず。人のあまたありける中にて、あるもの「ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふことあり。わたのべの聖この事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「簑笠やあるかしたまへ。かのすゝきのことならひに、渡邊の聖のがり尋ねまからむ」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人のいひければ、「むげの事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨のはれまをも待つものかは。我も死に聖もうせなば尋ね聞きてむや」とてはしり出でゝ行きつゝ習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそゆゝしくありがたうおぼゆれ。「敏きときはすなはち功あり」とぞ論語といふふみにも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひける

やうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

今日はその事をなさむと思へど、あらぬいそぎまづ出で來てまぎれくらし、待つ人はさはりありて、たのめぬ人はきたり。頼みたる方のことはたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。煩はしかりつる事はことなくて、安かるべきことはいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくのごとし。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし皆たがひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよいよものは定めがたし。不定と心えぬるのみまことにて違はず。

妻といふものこそをのこのもつまじきものなれ。いつもひとりずみにてなど聞くこそ心にくけれ。たれがしがむこになりぬとも、又いかなる女をとりすゑてあひすむなどきゝつれば、むげに心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女をよしと思ひ定めてこそそひ居たらめと、賤しくもおしはかられ、よき女ならばこの男をぞらうたくして、あが佛とまもりゐたらめ。たとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。まして家の内を行ひをさめたる女、いとくちをし。子などいできて、かしづき愛したる心うし。男なくなりて後、尼になりて年よりたるありさま、なきあとまであさまし。いかなる女なりとも、明暮そひみむには、いと心づきなくにくかりなむ。女のためもなかぞらにこそならめ。よそながら時々通ひすまむこそ年月へても絶えぬなからひともならめ。あからさまに來てとまり居などせむはめづらしかりぬべし。

夜に入りてもの丶はえなしといふ人、いとくちをし。萬の物のきらかざり色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎおよすげたる姿にてもありなむ。夜はきら丶かに華やかなるさうぞくいとよし。人のけしきも、夜のほかげぞよきはよく、物いひたる聲も、暗くてき丶たる、用意ある心にくし。にほひもの丶音も、たゞ夜ぞひときはめでたき。さしてことなることなき夜うちふけて參れる人の、きよげなるさましたるいとよし。若きどち心とゞめて見る人は、時をもわかぬものなれば、殊にうち解けぬべきをりふしぞ、けはれなくひきつくろはまほしき。よき男の、日暮れてゆするし、女も夜ふくるほどにすべりつ丶、鏡とりて顔などつくろひ出づるこそをかしけれ。

神佛にも人のまうでぬ、日夜まゐりたるよし。

くらき人の人をはかりて、その智を知れりとおもはむ、更にあたるべからず。拙き人の碁うつことばかりにさとくたくみなるは、かしこき人のこの藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばずとさだめて、よろづの道のたくみ、我が道を人の知らざるを見て、おのれすぐれたりと思はむこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、おのれにしかずと思へる、ともにあたらず。おのれが境界にあらざるものをば、爭ふべからず。是非すべからず。

達人の人を見る眼は、すこしも誤るところあるべからず。たとへばある人の世に虚言をかまへ出して、人をはかることあらむに、すなはちまことゝ思ひて、いふま丶にはからる丶人あ

り。あまりに深く信をおこして、なほわづらはしく虚言を心えそふる人あり。また何としもおもはで、心をつけぬ人あり。又いさゝかおぼつかなくおぼえて、たのむにもあらず、たのまずもあらで案じ居たる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらむとて止みぬる人もあり。又さまざまに推し心えたるよし志て、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみて居たれどつやつや知らぬ人あり。また推し出してあはれさるめりと思ひながら、なほあやまりもこそあれとあやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけると、手をうつて笑ふ人あり。また心えたれども、知れりともいはず、おぼつかなからぬは、とかくの事なく知らぬ人とおなじやうにて過ぐる人あり。またこの虚言の本意をはじめより心えて、すこしも欺かず、かまへ出したる人とおなじ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中のたはぶれだに知りたる人の前にてはこのさまざまの得たる所、詞にても顔にても、かくれなく志られぬべし。ましてあきらかならむ人の、惑へるわれらを見むこと、掌の上のものを見むがごとし。但しかやうのおしはかりにて、佛法までをなずらへいふべきにはあらず。

ある人久我畷を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を田の中の水におしひたしてねんごろにあらひけり。心えがたく見るほどに、狩衣の男二三人いできて、「こゝにおはしけり」とてこの人を具していにけり。久我内大臣殿基通にてぞおはしける。よのつねにおはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

東大寺の神輿東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿まゐられけるに、この殿大將にてさきを

おはれけるを、土御門の相國、「社頭にて警蹕いかゞ侍るべからむ」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵仗の家が知ることに候ふ」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國北山抄を見て、西宮の說をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にては、殊に先をおふべきことわりあり」とぞ仰せられける。

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと延喜式に見えたり。すべて數さだまりたる公人の通號にこそ。

揚名介にかぎらず、揚名目といふものもあり。政事要略にあり。

橫川の行宣法印が申しはべりしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單律の國にて、呂の音なし」と申しき。

吳竹は葉ほそく、かは竹は葉ひろし。御溝にちかきはかは竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは吳竹なり。

退凡下乘の卒都婆、外なるは下乘、內なるは退凡なり。

十月をかみな月といひて、神事にはゞかるべきよしは記したるものなし。本文も見えず。たゞし當月諸社の祭なきゆゑに、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなどいふ說あれども、その本說なし。さることならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月諸社の行幸、その例おほし。たゞしおほくは不吉の例なり。

勅勘の所に靫かくる作法、今は絕えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがし

き時は、五條の天神に靫をかけらる。鞍馬にゆきの明神といふも、靫かけられたる神なり。看督長の負ひたる靫を、その家にかけられぬれば、人いで入らず。この事絶えて後、今の世には封をつくることになりにけり。

犯人をえもとにて打つ時は、拷器によせてゆひつくるなり。拷器のやうも、よする作法も今はわきまへ知れる人なしとぞ。

比叡山に大師勸請の起證文といふことは、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起證文といふこと、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起證文につきて行はるゝ政はなきを、近代このこと流布したるなり。また法令には、水火にけがれをたてず、入物にはけがれあるべし。

徳大寺右大臣殿（公孝）、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定おこなはれけるほどに、官人章兼が牛はなれて、（廳のうちへ入りて）大理の座のはまゆかの上にのぼりて、にれうち嚙みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよし、おのおの申しけるを、父の相國きゝたまひて、「牛に分別なし。足あればいづくへかのぼらざらむ。尫弱の官人、たまたま出仕の微牛をとらるべきやうなし」とて牛をばぬしにかへして、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなむ。「怪を見てあやしまざる時は、あやしみかへりてやぶる」といへり。

龜山殿たてられむとて、地をひかれけるに、大なる蛇數もえらずこりあつまりたる塚ありけ

り。此所の神なりといひて、事のよしを申しければ「いかゞあるべき」と勅問ありけるに、「ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし」とみな人申されけるに、この大臣一人、「王土に居らむ蟲、皇居を建てられむに何のたゝりをかなすべき。鬼神はよこしまなし。咎むべからず。たゞ皆ほりすつべし」と申されたりければ、塚をくづして蛇をば大井川に流してけり。更にたゝりなかりけり。

經文などの紐をゆふに、上下よりたすきにちがへて、二すぢの中より、わなのかしらを横ざまにひき出すことはつねのことなり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘舜僧正解きてなほさせけり。「これはこの頃やうのことなり。いとにくし。うるはしくは、たゞくるくると卷きて、上より下へわなのさきをさしはさむべし」と申されけり。ふるき人にてかやうのこと知れる人になむ侍りける。

人の田を論ずるもの、うたへにまけてねたさに、「その田を刈りてとれ」とて人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「これは論じたまふ所にあらず。いかにかくは」といひければ、刈るものども、「其所とても刈るべきことわりなけれども、僻事せむとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらむ」とぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。

喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、よぶ子鳥なくとき招魂の法をば行ふ次第あり。これは鵺なり。萬葉集の長歌に、「霞たつながき春日の」などつゞけたり。鵺鳥も喚子鳥のことざまにかよひてきこゆ。

萬の事はたのむべからず。愚なる人はふかくものを頼むゆゑに、怨み怒ることあり。勞ありとて頼むべからず。こはきものまづ滅ぶ。財多しとて頼むべからず。時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべからず、孔子も時に遇はず。德ありとて頼むべからず。顏回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅をうくること速なり。奴したがへりとて頼むべからず。そむき走ることあり。人の志をも頼むべからず。かならず變ず。約をも頼むべからず。信あることすくなし。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なるときはうらみず。左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず、せばき時はひしげくだく。心を用ゐることすこしきにして、きびしき時は物にさかひ爭ひやぶる。ゆるくしてやはらかなるときは、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性なんぞことならむ。寬大にして窮らざるときは、喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて思ひわかざらむ人は、むげに心うかるべきことなり。

御前の火爐に火をおくときは、火箸してはさむことなし。土器よりたゞちにうつすべし。さればころびおちぬやうに心えて、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣をきて、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人、「白きものを着たる日は、火箸を用ゐるくるしからず」と申されけり。

想夫戀といふ樂は、女男を戀ふるゆゑの名にはあらず。もとは相府蓮、文字のかよへるなり。

晉の王儉、大臣として家に蓮を植ゑて愛せしときの樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とてえびすのこはき國あり。その夷漢に伏して後にきたりて、おのれが國の樂を奏せしなり。

平の宣時朝臣、老ののち、むかしがたりに「最明寺入道（時賴）あるよひの間によばるゝことありしに、やがてと申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使きたりて、直垂などのさふらはぬにや、夜なればことやうなりともとくとありしかば、なえたるひたゝれうちうちのまゝにてまかりたりしに、銚子にかはらけとりそへてもて出でゝ、この酒をひとりたうべむがさうざうしければ申しつるなり、肴こそなけれ、人はしづまりぬらむ、さりぬべきものやあるといづくまでも求めたまへとありしかば、しそくさしてくまぐまをもとめしほどに、臺所の棚に小土器に味噌の少しつきたるを見出でゝ、これぞ求め得てさふらふと申しゝかば、事足りなむとて、心よく數獻におよびて、興に入られはべりき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

最明寺入道、鶴が岡の社參のついでに、足利左馬入道（義氏）のもとへまづ使を遣して、立ちいられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一獻にうちあはび、二獻にえび、三獻にかいもちひにて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正あるじの方の人にて座せられけり。「さて年ごとにたまはる足利の染物心もとなく候ふ」と申されければ、「用意しさふらふ」とていろいろのそめ物三十、前にて女房どもに小袖に調せさせて後につかはされけり。その時見たる人

のちかくまで侍りしが、かたり侍りしなり。

ある大福長者のいはく、「人はよろづをさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかむと思はゞ、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他のことにあらず。人間常住のおもひに住して、かりにも無常を觀ずることなかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある自他につけて所願無量なり。欲に從ひて志を遂げむと思はゞ、百萬の錢ありといふともしばらくも住すべからず。所願は止む時なし。財は盡くる期あり、かぎりある財をもちて、かぎりなき願に從ふこと得べからず。所願心にきざすことあらば、我をほろぼすべき惡念きたれりとかたく愼みおそれて小用をもなすべからず。次に錢を奴の如くして、つかひ用ゐるものとしらば、長く貧苦をまぬかるべからず。君の如く神のごとくおそれたふとみて、從へ用ゐることなかれ。次に恥に臨むといふとも怒り怨むることなかれ。次に正直にして約をかたくすべし。この義を守りて利をもとめむ人は、富の來ること火のかわけるにつき、水のくだれるに從ふがごとくなるべし。錢つもりて盡きざる時は宴飲聲色を事とせず、居所をかざらず、所願を成せざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。そもそも人は、所願を成せむがために財をもとむ。錢を財とすることは、ねがひをかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ゐざらむは、全く貧者とおなじ。何をか樂とせむ。このおきてはたゞ人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずときこえたり。欲をなして樂とせむよりは、しかじ財なか

らむには。癰疽を病むもの、水に洗ひて樂とせむよりは、病まざらむにはしかじ。こゝにいたりては貧富分くところなし。究竟は理即にひとし。大欲は無欲に似たり。

狐は人にくひつくものなり。堀川殿にて、舍人が寝たる足を狐にくはる。仁和寺にて夜本寺の前をとほる下法師に、狐三つ飛びかゝりてくひつきければ、刀を拔きてこれを拒ぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつき殺しぬ。二つは逃げぬ。法師はあまた所くはれながら、ことゆゑなかりけり。

四條黄門命ぜられていはく、「龍秋は道にとりてはやんごとなきものなり。先日きたりていはく、短慮のいたり極めて荒涼のことなれども、横笛の五の穴はいさゝかいぶかしき所の侍るかと、ひそかにこれを存ず、そのゆゑは、干の穴は平調、五の穴は下無調なり、その間に勝絶調をへだてたり、上の穴雙調、次に鳧鐘調をおきて、夕の穴黄鐘調なり、その次に鸞鏡調をおきて中の穴盤渉調、中と六とのあはひに神仙調あり、かやうに間々にみな一律をぬすめるに、五の穴のみ上のあひだに調子をもたずして、しかも間をくばることひとしき故に、その聲不快なり、されば この穴を吹く時はかならずのく、のけあへぬときは物にあはず、吹きうる人かたしと申しき。料簡のいたりまことに興あり。先達後生をおそるといふこと、この事なり」と侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、「笙は調べおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛はふきながら、息のうちにてかつしらべもてゆくものなれば、穴ごとに口傳の上に性骨を加へて心を入るゝこと、五の穴のみにかぎらず。ひとへにのくとばかりも定むべか

らず。あしく吹けばいづれの穴もこゝろよからず。上手はいづれも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは人のとがなり。器の失にあらず」と申しき。

「何事も遊士は卑しくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ都に恥ぢず」といへば、天王寺の伶人の申しはべりしは、「當寺の樂はよく圖を志らべ合せて、ものゝ音のめでたくとゝのほり侍ること、外よりもすぐれたるゆゑは、太子(聖徳)の御時の圖今にはべるをはかせとす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。そのこゑ黄鐘調のもなかなり。寒暑に隨ひてあがりさがりあるべきゆゑに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。秘藏のことなり。この一調子をもちていづれのこゑをもとゝのへ侍るなり」と申しき。およそ鐘のこゑは黄鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舍の無常院のこゑなり。西園寺の鐘、黄鐘調にいらるべしとて、あまたゝび鑄替へられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

建治弘安のころは、祭の日の放免のつけものに、ことやうなる紺の布四五端にて馬をつくりて尾髮にはとうじみをして、くものいかきたる水干につけて、歌の心などいひてわたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心ちにてこそ侍りしか」と老いたる道志どもの今日もかたり侍るなり。この頃はつけものの年をおくりて、過差ことの外になりて、萬の重きものを多くつけて、左右の袖を人にもたせてみづからはほこをだにもたず、息つきくるしむありさまいと見ぐるし。

竹谷の乘願房、東二條院（後深草天皇后宮）へまゐられたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利おほき」とたづねさせ給ひければ、「光明眞言寶篋印陀羅尼」と申されたりけるを、弟子ども「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛にまさること候ふまじとは、など申したまはぬぞ」と申しければ、「我が宗なればさこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して、巨益あるべしと說ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと重ねて問はせたまはゞ、いかゞ申さむと思ひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

たづのおほいどの（基家）は、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひけるゆゑにと申すはひが事なり。

陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて尋ねまうできたりしが、「この庭のいたづらに廣きことあさましくあるべからぬことなり。道を知るものは植うることをつとむ。ほそ道ひとつのこして、みな畠に作り給へ」と諫め侍りき。誠にすこしの地をも、徒におかむことは益なきことなり。くふ物藥種などうゑおくべし。

多久助が申しけるは、通憲入道（信西）舞の手の中に興あることゞもをえらびて、磯の禪師（靜母）といひける女に敎へてまはせけり。白き水干にさうまきをさゝせ、烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ靜といひける、この藝をつげり。これ白拍子の根源なり。佛神の本緣をうたふ。その後源の光行、おほくの事をつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に敎へさせ給ひけるとぞ。

後鳥羽院の御時、信濃の前司行長稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番にめされて七

德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心うきことにして、學問をすて丶遁世したりけるを、慈鎭和尙、一藝あるものをば下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に敎へてかたらせけり。さて山門のことを殊にゆ丶しくかけり。九郞判官のことは委しく知りて書き載せたり。蒲冠者のことはよく知らざりけるにや、多くの事どもを忘るしもらせり。武士のこと弓馬のわざは、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きてか丶せけり。かの生佛がうまれつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りてつとめにしけり。その後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讃も、おなじく善觀房はじめたるなり。

千本釋迦念佛は、文永のころ如輪上人これをはじめられけり。

よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙觀（寛弘年間佛工）が刀はいたくたゝず。

五條の內裏には妖物ありけり。藤大納言殿（爲世公）かたられ侍りしは、「殿上人ども黑戶にて碁をうちけるに、御簾をか丶げて見るものあり。たぞと見向きたれば、狐人のやうについゐてさしのぞきたるを、あれ狐よとよまれて、惑ひ遁げにけり。未練の狐ばけ損じけるにこそ」。

園の別當入道（基氏）は、さうなき庖丁者なり、ある人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、皆人別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でむもいかゞとためらひけるを、

別當入道さる人にて、このほど百日の鯉を切り侍るを、今日かきはべるべきにあらず、まげて申しうけむとてきられける、いみじくつきづきしく興ありて人ども思へりけると、ある人北山太政入道殿（兼公）にかたり申されたりければ、「かやうのことおのれは世にうるさく覺ゆるなり、切りぬべき人なくばたべ、きらむといひたらむはなほよかりなむ、なんでふ百日の鯉を切らむぞとのたまひたりし、をかしくおぼえし」と人のかたり給ひける、いとをかし。大かたふるまひて興あるよりも、興なくて安らかなるがまさりたるなり。まれびとの饗應なども、ついでをかしきやうにとりなしたるも誠によけれども、たゞそのこととなくてとり出でたるいとよし。人のものをとらせたるも、ついでなくてこれを奉らむといひたるまことの志なり。惜むよし志てこはれむと思ひ、勝負のまけわざにことづけなど志たるむづかし。

すべて人は無智無能になるべきものなり。ある人の子の見ざまなどあしからぬが、父の前にて人とものいふとて史書の文をひきたりし、さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらずともとおぼえしなり。

又ある人の許にて、琵琶法師の物語をきかむとて、琵琶を召しよせたるに、ぢうのひとつ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、ある男の中にあしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの柄ありや」などいふを見れば、爪をおほしたり。琵琶など彈くにこそ、めくら法師の琵琶、その沙汰にもおよばぬことなり、道に心えたるよしにやとかたはらいたかりき。「ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬものに」とぞある人仰せられし。わかき人は、すこし

の事もよく見えわろくみゆるなり。

よろづのとがあらじと思はゞ、何事にもまことありて、人をわかずうやうやしく、詞すくなからむにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども、殊にわかくかたちよき人のことうるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとがは馴れたるさまに上手めき、所えたるけしきして、人をないがしろにするにあり。

人のものを問ひたるに知らずしもあらじ。ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうに返り事したるよからぬことなり。知りたることも、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。又まことに知らぬ人もなどかなからむ。うらゝかにいひきかせたらむは、おとなしく聞えなまし。人はいまだ聞き及ばぬことを、我が知りたるまゝに「さてもその人の事のあさましさ」などばかりいひやりたれば、いかなることのあるにかと推し返しとひにやるこそ心づきなけれ。世にふりぬることをも、おのづから聞き漏すこともあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらむ、惡しかるべきことかは。かやうの事はものなれぬ人のあることなり。

ぬしある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、道行人みだりに立ち入り、狐ふくろふやうのものも、人げにせかれねば、所えがほに入りすみ、こだまなどいふけしからぬ形もあらはるゝものなり。また鏡には色かたちなきゆゑに、萬の影きたりてうつる。鏡にいろかたちあらましかば、うつらざらまし。虚空よくものをいる。我等が心に念々のほしきまゝにきたりうかぶも、心といふもののなきにやあらむ。心にぬしあらまし

かば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたくつくれり。志だのなにがしとかやゑる所なれば、秋の頃聖海上人、その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲をがみに、かいもちひめさせむ」とて具しもていきたるに、各拜みてゆゝしく信をおこしたり。御前なる獅子狛犬、背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子のたちやういとめづらし。深きゆゑあらむ」となみだぐみて「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。むげなり」といへば、おのおのあやしみて、「まことに他にことなりけり。都のつとにかたらむ」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顏ゑたる神官をよびて、「この御社の獅子のたてられやう、定めてならひあることに侍らむ。ちと承らばや」といはれければ、「そのことに候ふ。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ふことなり」とてさし寄りてすゑなほしていにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

やない箱にすうるものは、縱ざま横ざま物によるべきにや。「卷物などはたてざまにおきて、木のあはひより紙ひねりを通してゆひつく。硯も縱ざまにおきたる、筆ころばずよし」と三條右大臣殿仰せられき。勘解由小路の家の能書の人々は、かりにも縱ざまにおかるゝことなし。かならず横ざまに居ゑられ侍りき。

御隨身近友が自讃とて、七箇條かきとゞめたることあり。みな馬藝させることなき事どもなり。そのためしを思ひて、自讃のこと七つあり。

一人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の邊にて、をのこ馬をはしらしむるを見て、「いま一度馬をはするものならば、馬たふれて落つべし。ゑばし見給へ」とて立ちとまりたるにまた馬を馳す。とゞむる所にて馬を引きたふして、乘れる人泥土の中にころび入る。その詞のあやまらざることを人みな感ず。

一當代いまだ坊におはしまし〻頃、萬里小路殿御所なりしに、堀川大納言殿〈俊〉伺候し給ひし御さうじへ御用ありて參りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給ひて、「たゞ今御所にて、紫の朱うばふことを惡むといふ文を御覽ぜられたきことありて、御本を御らんずれども御覽じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰せ事にて求むるなり」と仰せらる〻に、「九の卷のそこそこのほどに侍る」と申したりしかば、「あなうれし」とてもてまゐらせ給ひき。かほどのことは、ちごども〻常のことなれど、昔の人はいさ〻かのことをも、いみじく自讃ゑたるなり。後鳥羽院の御歌に、「袖と袂と一首のうちにありなむや」と定家卿にたづね仰せられたるに、「秋の野の草のたもとか花す〻きほに出てまねく袖とみゆらむ」とはべれば、何事かさふらふべき」と申されたることも、「時にあたりて本歌を覺悟す、道の冥加なり。高運なり」などことごとしく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通公の款狀にも、ことなる事なき題目をも書きのせて、自讃せられたり。

一常在光院のつき鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、いかたにうつさせむとせしに、奉行の入道かの草をとり出で〻見せ侍りしに、「花の外に夕をおくれば聲百里

に聞ゆといふ句あり。陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか」と申したりしを、「よくぞ見せ奉りける、己が高名なり」とて筆者の許へいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行となほさるべし」と返事はべりき。數行もいかなるべきにか。もし數歩のこゝろか、おぼつかなし。

一人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂のうち、龍華院と書けるふるき額あり。「佐理、行成の間うたがひありて、いまだ決せずと申し傳へたり」と堂僧ことごとしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず」といひたりしに、裏は塵つもり、蟲の巣にていぶせげなるを、よくはきのごひておのおの見侍りしに、行成位署名字年號さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

一那蘭陀寺にて道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰かおぼえ給ふ」といひしを所化みなおぼえざりしに、局のうちより、「これこれにや」といひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、いまだはてぬほどに僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもをかへして求めさするに、「おなじさまなる大衆多くて、えもとめあはず」といひて、いと久しくて出でたりしを、「あなわびし、それもとめておはせよ」といはれしに、かへり入りてやがて具していでぬ。

一二月十五日月あかき夜うちふけて、千本の寺にまうでゝ、うしろより入りて、一人顔ふ

かくかくして聽聞し侍りしに、優なる女の、すがたにほひ人よりことなるが、わけ入りて膝に居かゝれば、にほひなどもうつるばかりなれば、びんあしと思ひてすりのきたるに、なほ居寄りておなじさまなれば立ちぬ。その後ある御所さまのふるき女房の、そゞろごといはれしついでに、「むげに色なき人におはしけりと見おとし奉ることなむありし。なさけなしとうらみ奉る人なむある」とのたまひ出したるに、「更にこそ心えはべらね」と申して止みぬ。この事後に聞き侍りしは、かの聽聞の夜、御局のうちより人の御覽じしりて、さぶらふ女房をつくりたてゝいだし給ひて、「びんよくばことばなどかけむものぞ。そのありさま參りて申せ、興あらむ」とてはかり給ひけるとぞ。

八月十五日、九月十三日は婁宿なり。この宿淸明なるゆゑに、月をもてあそぶに良夜とす。

しのぶの浦のあまのみるめも所せく、くらぶの山ももる人しげからむに、わりなく通はむ心のいろこそ、淺からずあはれと思ふふしぶしの、忘れがたきことも多からめ。親はらからゆるし、ひたぶるにむかへすゑたらむ、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶる女の、似げなき老法師、あやしのあづま人なりとも、にぎはゝしきにつきて、「さそふ水あらば」などいふを、なかうどいづかたも心にくきさまにいひなして、しられずしらぬ人を迎へもて來らむあいなさよ。何事をかうち出づることの葉にせむ。年月のつらさをも、分けこしは山のなどもあひかたらはむこそつきせぬことの葉にてもあらめ。すべてよその人のとりまかなひたらむ、うたて心づきなきこと多かるべし。よき女ならむにつけても、品くだりみにくゝ、年もたけな

む男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらに、なさむやはと、人も心おとりせられ、我が身はむかひ居たらむも、影はづかしくおぼえなむ、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の朧月にたゝずみ、御垣が原の露分けいでむありあけの空も、我が身ざまに忍ばるべくもなからむ人は、たゞ色このまざらむには志かじ。

望月のまどかなることは、志ばらくも住せずやがてかけぬ。心とゞめぬ人は、一夜の中にさまでかはるさまも見えぬにやあらむ。病のおもるも、住するひまなくして死期すでに近し。されどもいまだ病急ならず、死に赴かざるほどは、常住平生の念にならひて、生の中におほくの事を成じて後、志づかに道を修せむと思ふほどに、病をうけて死門に望む時、所願一事も成せず、いふかひなくて年月の懈怠を悔いて、この度もしたちなほりて命をまたくせば、夜を日につぎてこの事かの事怠らず成じてむと、願をおこすらめど、やがておもりぬれば、我にもあらずとり亂してはてぬ。このたぐひのみこそあらめ。この事まづ人々急ぎ心におくべし。所願を成じてのち、いとまありて道にむかはむとせば、所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさむ。すべて所願皆妄想なり。所願心にきたらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふ時はさはりなく所作なくて、心身ながく志づかなり。

とこしなへに違順につかはるゝことは、ひとへに苦樂のためなり。樂といふは好み愛することなりこれを求むること止む時なし。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり、行跡と才

藝とのはまれなり。二には色欲、三には味なり。よろづのねがひこの三つにはこえかず。これ顚倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。求めざらむにはこえかじ。

八つになりし年、父に問うていはく、「佛はいかなるものにか候ふらむ」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛にはなり候ふやらむ」と。父また、「佛のをしへによりてなるなり」とこたふ。また問ふ、「敎へ候ひける佛をば何がをしへ候ひける」と。また答ふ、「それもまたさきの佛のをしへによりてなり給ふなり」と。またとふ、「その敎へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」といふ時、父、「空よりやふりけむ、土よりやわきけむ」といひてわらふ。「問ひつめられてえこたへずなり侍りつ」と諸人にかたりて興じき。

徒然草
終

藤河記

胡蝶の夢の中に百年の樂を貪り、蝸牛の角の上に二國の諍を論ず。よしといひあしといひ、たゞかりそめの事ぞかし。とにつけかくにつけて、ひとつ心を惱すこそ愚なれ。應仁の初、世の亂れしより此のかた花の都の故郷をば、わらぬ空の月日のゆきめぐる思をなし、ならのはの名におふやどりにしても、六かへりの春秋を送り迎へつゝ、うきふし繁き呉竹のはしになりぬる身をうれへ、こひぢに生ふるあやめ草のねをのみそふる比にもなりぬれば、山の東みのゝ國に、武藏のゝ草のゆかりをかこつべき故あるのみならず、高砂の松のしる人なきにしもあらざれば、さみだれかみのかき曇らぬさきにと、みのしろ衣思ひたつ事ありけり。「此の月はよろづに忌なる物を」といふ人ありけれど、「人の事はしらず、我が身にとりてはこの七日に生れたればかへりてよき月と思ひ侍る物を」と有りしかば、きく人こととわりとや思ひけむ。さるほどに二日の明け方に、ならの京を立ちて般若寺坂をこえ、梅谷などいひて、人はなれ心すごき所々をへてかものわたりをすぎ、三日の原といふ所に輿を止めて、思ひつゞけ侍り。

「かぞふればわすは五月のみかの原けふまつならの都出でつゝ」。

泉川を舟にてわたりて、

「渡し舟棹さす道に泉川けふより旅の衣かせ山」。
これよりして新關どもを世の亂れにことよせて、思ふさまにたておきつゝ、旅行の障と成りにけり。仁木などいへる領主のかたがたをこしらへて、事故なくはとほり侍れど、心苦しき事のみありけり。

「さもこそは浮世の旅にさすらはめ道妨げの關な留めそ」。
伊賀の國あけ宮といふ所に至りぬれば、日もやうやう暮れ方になり、雨そぼふりて前路もとけがたく、「行きかゝりてやどりもなくは中々惡しかりぬべし」と人々申し侍れば、其のあたりに小家のあるをかりて一夜を明かし侍りぬ。

「行き暮れて雨は降りきぬ朝宮をあさたつまでの宿やからまし」。
三日、あさみやを立ちて、野じり、とひかは、くらはねなど聞きも習はぬ木こり草かりならでは通はぬ所々を過ぎて、道のゆくてに石山寺にまうでゝ、大悲者を禮し奉る。

「騷ぎたつ世にも動かぬ石山はげにあひがたき誓なりけり」。
濱の關とかやは青蓮院の座主に申して通り侍りぬ。松本をすぎ大津に至りて、過ぎこしかたをかへりみて、俳諧の體を思ひつゞけ侍り、

「くらはねは早く過ぎてき荷かけ駄を大津の里にしばし休まむ」。
かくて其の夜は坂本の宿に泊りぬ。七の社はそなたとばかりをがみ奉りて、

「老が身もこえむ千歳の坂もとに杖とぞ頼む七の神がき」。

四日、坂本を出でゝ舟にのるとて、

「さゞ浪やけふを日よしの船出せむおひ風おくれ唐崎の松」。

されども順風なければ、ひねもす艫をおしてゆく。堅田の浦に船をよせて、

「こし方は堅田の浦にほす網のめに懸りつる山のはもなし」。

山わひを過ぐる時、嵐烈しければ、片帆に風をうけて走らしむ。「時の程に三四里ばかり過ぎぬ」といふを聞きて、

「舟人の心づかひはみえてけりまほもかたほも風に任せて」。

よるの四時に、はつさかといふ里に舟をよせて、しばらく休息す。これより夜舟を出して、五日のほのぼのに、朝妻につきぬ。

「ほのぼのと朝妻にこそ着きにけれまだ夜をこめて舟出せし道」。

さめが井といふ所、清水岩ねよりながる。一すぢは上より、一すぢは下より流れて、末にてひとつにながれあふ。誠やらむ、みのゝ養老の瀧につゞきたりといへり。しばらくこゝにすゞみて、

「夏の日も掬べばうすき氷にてあつさやがてさめが井の水。
岩がねを別れていづるさめがゐの流れや終にあふみぢの末」。

かしは原にて、

「吹く風やまたこぬ秋を柏原はびろがしたの名にはかくれず」。

たけくらべといふは、近江とみのとの山を左右に見て行く所なり。
「右ひだりみて過ぎ行くはわふみぢの二つの山ぞたけくらべする」。
伊増峠といふは、みのゝさかひにて、堅城とみえたり。一夫關に當れば萬夫過ぎがたき所といふべし。
「此の山に神や坐すと手向せむ紅葉のぬさはとりわへずとも」。
鶯の瀧といふ所を、
「夏きてはなくねをきかぬ鶯の瀧のみなわや流れわふらむ」。
藤川のはしのけたのおちたるをみて、
「尋ねばやいくとしなみを渡ればかなかは絶えぬる藤河の橋。
思へ君おなじながれのたえずして萬代ちぎるせきのふぢ河」。
くろぢのはしといふ所を、
「白浪は岸の岩ねにかゝれどもくろぢの橋の名こそかはらね」。
野上の茶やにこしをたてゝ、又ざれうたを、
「旅人にめざまし草をすゝめずば野上の里にひるねをやせむ」。
昔、清見原の天皇、東宮の位を辭し、出家して吉野山にいられしかども、なほ許しなくて、大友の皇子に襲はれ給ひしとき、ひそかに山を逃れ出でゝ伊賀伊勢の國をへて、みのゝ野上に行宮を建てられし事は、日本紀などに記し侍れど、事遠き事なれば、宮の舊跡などたしかに

去る人は有りがたかるべし。今は草かりわらはの、あさゆふふみ通ふ道となりにたるを見侍りて、

「あげまきは野上の草をかり宮の跡ともいはず分けつゝぞ行く」。

山中といふ所を過ぎて、

「時鳥おのがさ月の山中におぼつかなくも音を忍ぶかな」。

不破の關屋を見侍るに、なにとなく昔おぼえて物哀なり。中御門攝政の、「あれにし後はたゞ秋の風」とよみ給ひし事など、思ひ合せられて、

「あれはつるふはの關屋の板びさし久しくも名を留めけるかな」。

關屋の中にちひさきほこらのあるを、里人に尋ね侍れば、「これなむ淨見原をいはひ奉る」といふ。誠やかの御代に、いくさをふせがむとて建てられし事なれど、今は關いやうにもわらぬをみ侍りて、

「淸み原遠きまほりの名をとめば關の固めはさもあらばあれ」。

五日のさるの時ばかりに、たる井の宿につく、けふは南宮の祭とて見物のともがら物さわがしく立ちさまよひけり。風流の山かさだなどありとかや。昔の如くならば、此の所に遊女などあるべきにや、杜牧が「珠簾十里楊州路」といへる事を、思ひなずらへ侍りて、

「あさはかに心なかけそ玉簾たる井の水に袖もぬれなむ」。

又、軒にあやめを葺きわたすこと都にもかはらざりければ、

「我が宿の妻にはあらぬあやめ草今夜かりねにかたしきの床」。

六日の早朝、たる井を立ちぬ。みちすがらの名所ども多くは忘れ侍り。あをのが原を過ぎ侍れば、昔もの丶ふのありしが、討死したる所とかやいへり。

「分け行けば四方の草木の色も猶あをのが原の夏の一ころ」。

あかさかをこゆとて、

「た丶かひの昔の庭もには鳥のあかさか越えて思ひ出でつ丶」。

くひせ川といふ所を舟にてわたりて、

「渡守ゆき丶にまもるくひせ川月の兎もよるや待つらむ」。

江口といふは、攝津國にある同名なり。されど遊女などはなくて、夜になれば鵜飼のくだると云ふをき丶て、

「うかひ舟よるを(をたイ)契ればこれも亦(おなじ)(はいへイ)江口のあそびなりけり」。

七つ打つほどに、鏡島の小庵につく。院主かたらく「此の程の庵はさはる事ありて、此の二日こ丶に移り侍り、こ丶をば長寧院といふ僧の所をかれる」となむ。紫のゆかりともすだく所なれば、よろづにまづ心やすし。

七日、かはでの持是院に、かくくだりたるよしをつぐ。三位の大僧都妙椿即ちきたりて、思ひよらざるよしをいふ。さらばあすよりは正法寺に休所を構ふべきよしをしめす。旅のつかれなど懇に下知を加ふ。くだくだしければ洩しつ。八日、正法寺にうつる。此の寺は禪刹の諸山

なり。由良門徒にて山號をば靈藥山といへり。國中最初の禪林なり。かたはらに新造の一寮あるを、休所に構へて移り住ましむ。朝夕のまうけなどくだくだしければ、志るすに及ばず。去りながら夙のあぶり物、鱗のはじ志のなきばかりにや有りけむ。

九日、歌の披講あり。

十日、連歌百韻あり。

十一日、正法寺の向ひに、城をつき池を深くして軍壘の構をなせり。則ち舟を浮べて堀の内に至る。僧都常に居庵あり。山居のすまひを學び、後園などあり。持佛堂は淨土の三昧をもとゝ(イよは)せるとみえたり。名作の本尊ども多し。此のたび庵號を求めしかば、法城と云ふ二字を書き遺し侍り。齋藤新四郎利國は、僧都の姪ながら猶子にせり。其の人の館に行きてみ侍れば、いづくもかき拂ひて、武具ども取り並べ、なに事もあらば則ちうち立つべき用意なり。去りながら又風月歌舞の道をもすてざると見えたり。此の所にして酒宴の興を催す。美伊法しといふ土岐美濃守源成賴の息男生年九歳なり。同齡の袖を飄へす。うまれながらにして天骨を得たり。昔長保の比、東三條女院の御賀の試樂に、御堂關白の長男宇治關白なり。十歳のわらはにて陵王をまひ、次男堀川右大臣なり。九歳にて納蘇利を舞ひし事思ひ出され侍り。古の舞と今の舞とは、手使ひ足ふみなどかはるべけれども、少年の人其の骨をえて感歎せしむる事は、異曲同工といふべきにや。

十二日、猿樂あり。寶春(イ松)といふ猿樂なり。一場はてゝ後美伊法師又舞臺にして袖をかへす。

猿樂には遙にまさゝれるよし、人皆感じけり。僧都も興に入る、ことわりと覺えたり。
十三日、正法寺にて短冊の評あり。詩の題は龍尾硯なり。此の硯は東坡が詩集にみえたるにや、さる硯のありし故なり。抑作文の事、久しく筆をさしおきて、跡かたもなく韻聲などを忘れはてぬれど、僧都しきりにすゝめ侍れば、廿八字をやうやうかき連ねたるばかりなり。又方丈の前に二株の松をうゑてみたび鋤を下す事有りき。追述一偈云、

「鷲峰正法遍塵々　靈藥毒人還活人

五祖山中誰作主　栽松道者是前身」。

十四日、鏡島へかへる。たまたま下向の次、國中の名所舊地をも歴覽したくは侍れど、此の十一日に細川右京大夫勝元朝臣卒去の聞えあり。東軍の棟梁かくの如くなれば、此のきざみに國界また蜂起することもやあらむ。しからば通路思ふやうなるまじき疑あるによりて、後會期遙といへども前路ほど遠かるべければ、急ぎ僧都に此の趣を示して歸馬にむちうつものならし。
十五日、ことなることなし。
十六日、竹の内の僧正のあくたみの庄を一見すべきよししめす。よて江口より舟に乘りて二里ばかり川傳ひに溯る。因幡山のふもとを過ぐる路なり。此の山は奥州より金の化來せるよし因幡社の縁起にありとかや。

「峯に生ふる松とはしるやいなば山こがね花さく御代の榮を。」

さなへとる麓の小田にいそぐなりそよぐいなばの峯の秋風」。

けふは小雨そゝぎて風いさゝか吹く。日入りてかしこに至る。船の中の窮屈たへず。すなはち假臥す。前後をしらず天明に及ばす。明くる日僧正申し侍りけるは、「昨日は涯分奔走いたし、谷の底まで堀り求めしかひもなく遂に纔かでとありしかば、睡眠のきざしゝに、やがて枕を傾けし心よさは邯鄲遊仙の樂びもかくこそと覺えしなり。それにまさるほどのもてなしは、心にくゝも覺えぬ」とて笑ひ侍りき。

十七日、又鏡島へ返る。月出でぬ程、江口に出でゝ鵜飼をみる。六艘の舟にかゞりをさしてのぼる。又一艘を設けてそれにのりて見物す。「大凡此の川ののぼりくだり、やみになれば獵舟數をしらぬ」といふを聞きて、

「夕暗に八十とものをの篝さしのぼる鵜舟は數もしられず」。

鵜の魚をとる姿、鵜飼の手縄を扱ふ體など、けふ初めてみ侍れば、言のはにも述べがたく哀とも覺え、又興を催すものなり。

「鵜飼人くるや手縄の短夜もむすぼゝれなばとくはわけじを」。

則ち鵜のはきたる鮎を篝火にやきて賞翫す。これを篝やきといひならはしたるとなむ。

「とりあへぬ夜川のあゆの篝焼めづらともみつ哀ともみつ」。

十八九日、ことなることなし。僧都しばしば來る。

廿日、歸宿せむとす。けふ則ち鏡島をたちて、もとの路をへてたる井に至る。民安寺といふ律

院に泊る。献餉などは僧都の被官人たかやの某に仰せつけて、懇なる事どもあり。くだくだしければ洩しつ。まことや文和の比、後光嚴天子、南軍に（イの）恐れましまして、小島に行幸のありし次に、此の寺にも渡らせ給ひけるとなむ。行宮の礎など今にあり。其の時身づからうゑさせ給へる松の、老木となりてあるをみて、

「世におほふ君が御蔭にたぐふらし民安かれとうゑし若松」。

あふはかといふは、たる井より此方なり。名寄に青墓里といへる、この事にや。

「契あれば此の里人にあふはかのはかなからずば又もきてみむ」。

美江寺といふは鏡島より五十町ばかりをへだてたるといへり。本尊は十一面觀音ばかり、帳などの中にもましまさず、うち顯れて人に拜まれさせ給ふ。利生をかうぶるものおほしとなむ。往來のたよりに一度詣でゝ禮拜をいたす。緣起など委しく尋ぬるにいとまあらず。

「たのもしな佛は人にみえ寺のとばりをたれぬ誓おもへば」。

廿一日、垂井を立ちての道すがらの名所、おろおろさきに記し終りぬ。いぶきの明神の鳥井は北にあり。南宮ゝ鳥ゐは南にあり。おのおのその前をすぐ。

「又こむといぶきの山の神ならばさしも契りし事な忘れそ。

名も高き南の宮のちかひとて山のひがしの道ぞたゞしき」。

みのゝ國の歌枕の名所其所はいづくとも志らねども、心に浮ぶ事どもを、筆の序に書き集め侍るべし。

「稀にきてみの〻お山の松のうれの嬉しさみにも天のは衣。
あま衣みの〻中山こえ行けばふもとにみゆる笠ぬひの里。
いのるぞよをさまる世をまつことはみの〻お山の一つ心に。
時鳥ねざめの里にやどらずばいかでか聞かむ夜半の一聲。
は〻きゞの梢ありともみえなくに誰をも山と名づけ初めむ。
明けくれはしげき浮身のわさみのに猶分け迷ふ夏草の露。
五月雨の紅葉を染むる例あらば舟木の山のいかにこがれむ。
七夕の逢瀬は遠きかさ〻ぎのおふさの橋をまつや渡らむ。
東路のうるまのし水名をかへばしらじな旅にたつの市人。
鳰鳥のすのまた川に月すめばあらはれわたる浪のしたみち。
わかえつ〻見るよしもがな瀧の水老を養ふ名に流れなば。
席田を織物ならばしき浪やいつぬき川のたてとならまし。
幾千歳かぎらぬ御代は席田のつるの齢もしかじとぞ思ふ。
蘆がきのまぢかき跡を尋ねても小島の里にみゆきやはせぬ。
世の人のあだを結ぶの神なりと祈らば心とけざらめやは」。
近江の國に番馬といふ所より路をかへて南へ行く。番馬を物の名にとりなして、
「わくるの〻また末遠き草葉には日かげの駒よしばし留れ」。

すりは峠を南へ下るとて右にかへりみれば、筑夫島などかすかにみえて、遠望まなこをこらす。麓には神田といふ所の一つなき田など見ゆ。又左の方には聳えたる岩に松一木ある、その下に石搭あり。西行法師が墳といひ傳へたるとなむ。

「南行數里下陽坡　西望平湖遠不波
孤島屹然何所似　琉璃萬頃一青螺。」

旅衣はころびぬれやすり針の峠にきてもぬふ人のなき」。

西行が歌に、「願はくば花のもとにて春志なむそのきさらぎの望月の比」とよめることを思ひ出でゝ、

「いかにして松の影には宿るらむ花のもとゝかいひしことのは」。

かねては、かの村に泊るべしと定めしかども、とかくして日も暮れ方になりぬれば、小野といふ所まで行きて、其の夜はさる小庵に一宿しぬ。今春大夫來り逢ひて、一聲を出して羈愁を慰め侍り。

「枕ゆふをのゝをざゝの短夜も旅にしあれば明かしかねつゝ」。

廿二日、小野をたちて、たがといふ所をすぐ。社あり。

「ふりはてゝ神さびにけりたがの宮誰が世にかくは祝ひそめけむ」。

四十九院を物の名にあらはす。

「狩人は山に志ゝふくいむことも志らぬためには我ぞ音をなく。

亂れ行く世に近江路のおのがじゝうくいむべきは此の身なりけり」。

たがみや河原は、水のおとばかりなり。

「過ぎ行けばたがみやがはら水もなし今年はおそき五月雨の比」。

えち河をすぐとて、

「えち河のさてさす瀨々に行く水の哀も忘らぬ袖もぬれけり」。

觀音寺といふ山寺をみやりて、此の名は諸國にあるにや。いさゝか聖廟の御詩をおもひ出でゝ、

「あふみぢも心づくしの旅なれやたゞ鐘を聞く古寺の前」。

おいそのもりにて、

「我が袖よ駒もすさめぬたぐひにておいその杜の朶をぞ忘る。

われこそは老その杜の郭公おのがさかりの聲なをしみそ」。

其の日は武佐といふ所にやどる。

「武夫のゆかけはたてぞ靡くなるうべこそむさの名は殘りけれ」。

廿三日、猶むさに逗留す。うちおくりの事、法印(イ僧都)方より伊庭に申しつけ侍るが、三里ばかりをへだてたる所へ使にいでゝ、留守なりければ、伊庭方へ使の行きかへるあひだ、時刻移るによりてなり。その日は雨ふり風烈しくて、はにふの小屋のかりふし、ならはぬ旅のものうさ、いはずとも知るべし。

「南來北望漢宮天　一夜江邊聽雨眠
白髮更添新白髮　青氈不是舊青氈」。
廿四日、伊庭かたより兵士きたる。その日も雨風やまず。水口をすぐとて、
「雨ふれば小田の水口せきもあへずすだく蛙の聲ぞ爭ふ」。
からうじて五十町ばかり行きて、新宮の馬場に到る。禪侶の庵をかりて宿す。新宮は山王にてましますとかや。所のこほり司など來りて、警固をいたす。終夜雨風はなはだし。
廿五日、馬場をたつとて庵室にかきおく、
「憶得三生石上縁　一庵風雨夜無眠
今朝更下山前路　老樹雲深哭杜鵑」。
契りあらば又あふみぢのかり枕結びやすてむ一夜ばかりに」。
かねて水口より伊賀のはとりにつくべき支度なれど、洪水に路とはる事やすからず。同じ國のうち、玉瀧寺といふ律院にとまる。本尊は藥師如來にてましますといへり。
「ながめばや玉瀧寺の雲はれて瑠璃の光にうつる朝日を」。
廿六日、けふは日の景色なほれり。玉瀧をたちてかは井といふ所を通る。一つはしあり。高松宮は右の方にありてみやる。牛頭天王にてましますとかや。
「渡りえぬ浮世の波におぼゝれてかはゐの橋をふむぞ危き。
ゆふかけて猶こそきかめ時鳥手向のこゑの高松のみや」。

北川といふ川はた水落ちず。法印伊賀の住人におほせつけたるによりて、藤長などいふものども來りて、輿を肩にかけてわたす。

「いかゞせむ此の五月雨に北川の淺瀬ふみ渡る人なかりせば」。

又服部川をわたりて菩提寺に至る。これも招提門徒の律院なり。まうけの事は法印申しつけて、伊賀のともがらさたせしむとなむ。

廿七日、なほ菩提寺に逗留す。伊賀のものどもさりがたく抑留する故なり。

「菩提樹下古精藍　殿閣微凉來「自」南

暫借「藤床」兼「瓦枕」　齁々一睡味方甘」。

活計のうちにも故郷の心は又忘れがたきにや有りけむ。

「旅衣きのふもけふもくれはどりあやに戀しきならの古郷」。

廿八日、菩提寺をたちて上野小田寺など云ふ所をとほる。たやま越は川の水いまだ渡りがたかるべしとて、かさきとほりにおもむく。島の原川といふ河をわたりて、

「島の原川せの浪のうち渡りたやまこえをばよそになしつゝ」。

大河原といふ所は伊賀と山城との界なり。河原の木石さながら前栽などを見る如くなれば、

「苔むせる岩手に松は大河原かはらざりけり庭のすさきに」。

笠置川をば舟にて渡る。ならより迎のもの來るによりて、いがの送をばこれより返しぬ。歸路を急ぐによりて山をば見やりたるばかりなり。ことさらにこそ詣でめと思ひ侍りき。きの

ふけふは雨ふらず。

「えぞ忘らぬ龜山過ぎて降りし雨の笠置にきては又はれにけり。

雲の上にそのわかつきを待つほどや笠置のみねにありあけの月」。

秉燭の時分南都の宿坊につく。この晩雨はなはだくだる。よくせずば笠置にとまるべかりけり。

藤河記 終

小夜寢覺

唐國には多く春をあいし、我が國の人はむかしより秋に心をよするなるべし。されば光源氏も「我が身にしむる秋の夕風」となかめ給へり。萬葉集より代々の歌にも、此の二つのあらそひいまだいづれと定めがたし。かすめる空に花鳥のいまめかしう色なることは、わかき時のはこらしき心なれば、秋のうれへのみぞ老の夕はげにしのびがたく侍る。長月廿よ日（二字日あまりイ）もすぎぬれば、うら枯れわたる荻の音も、空とぶ雁の羽風もとりあつめて身にしむ心ちぞするや。さらぬだにあつしうおぼえ侍る身に、よはひのかずあらはれて夜寒のねざめもことわり過ぎ、まろねの手枕も所せきまでぬれまさる。曉は見ぬ世のことも、そ（ゆイ）のさき（往イ）への哀（悲イ）も思ひのこすことぞなきや（一字かなイ）。すべて人の身はあさがほの花のつゆ、きえをあらそひ、ひをむしの朝の命、夕をまたぬものぞかし。されど心を養ひ身をたもちて、百のよはひをのぶるたぐひ、昔今おほくぞ侍るめる。まことに二つなき寶、命にしくはなし。いきとしいけるもの、いかでか身ををさめざらむ。されど人ごとのならひにて、色にそみ、醉にふけり、あぢはひにたのしむゆゑに、おほく心をもくだき身をもそこなひ侍るなり。唐國にも、文を學び詩をつくり、酒をあいしなどさまざまの人のくせ侍るとかや。樂天といひし人は、朝夕ふみをつくるくせあるゆゑに、心をくだきてわかくより「鬢の髮白し」と詩にもつくられ侍りき。此のおき

なも其のかみよりなにとなくものを好むくせの、すべてなほり侍らぬは、我ながらもどかしくおぼゆるなり。代々のふること、やまともろこしの筆のすさび、源氏、狹衣やうのものまでも、もてあそび侍ること、老の病ともなり侍るべきなり。されど空なる星をたらひの水にうつし、ひろきわたつみを蛤の貝にてすくひ侍る程のことだに、はかばかしからねば、心の水淺きにまかせて、ふかきむねをくみ玄ることもなし。朝夕人のもてあそびとなれる三代集の中にだに、いまだあきらめざることは多く侍り。まして日本紀、萬葉集などはいまだかなもなかりし世のえびす歌、國々の境談とて、いやしき民の言葉をもひろひあつめたるものなれば、よみとくことだにもかたかりしを、顯昭といひし人、日本紀の、神代よりの歌の心をかきあらはし、仙覺といひしもの、萬葉集のむねをえて、三百餘首、順などだにも、よみとかざる點を加へ侍り。光源氏をば光行といひしゐなか人、水原抄五十餘卷をつくりてむかしよりの難義どもも多くあかせり。これらの中にも、ひがこともまじれることはあれど、數寄の心ざしは、此の世ひとつなる一字と（のイ）事にあらず。佛神の御たすけによりて一道をさとりえたるとぞ覺え侍る。これはいやしき者なれども、名をあらはし、かしこき御門の御前に召し出され、身にあまる御いつくしみをも蒙り侍りしなり。後鳥羽院、後嵯峨院などの御代はことには之ばえしかりしかば、かやうのふるき道をもおこさせ給ひけるにこそ。このごろ承はり侍れば、うたよむ人の中にも、萬葉は見ぬことなどゝ申すかたがたも侍るとかや。いとおぼつかなきことなり。俊成、定家、爲家卿なども、殊さら萬葉をば、もてあつかはれけるとぞ。「さのゝわたりの

雪の夕暮、花のさかりをおもかげにして」などいふ名歌も、此の人々は萬葉よりこそよみ出されたれ。後鳥羽院も、「歌のこゝろひろくゑること、この集に過ぎず」とこそ仰せられけれ。又、源氏の物語などをも、この頃はいたく(有よイ)みわかす人(有人イ)もなきにや。「紫式部が源氏、白氏が文集、身にそへぬことはなし」とこそ後京極殿(摂政)も仰せられけれ。俊成卿も、「源氏見ぬ歌よみは口をし」とぞ判の詞にもかゝれて侍る。又狹衣の歌を、源氏にまさりたりといふこと心うし。歌もことばもふしぎのものなり。「およぶものあるまじき」とぞ順徳院の御記にもあそばし侍るなる。時うつり風變ずることわりはさることなれども、歌よみのもてあそばぬことになり侍るは、いかなる事にか(は侍るイ)おぼつかなし。又連歌といふことは、歌よむ人のいむことになれり。これもいかゞとぞおぼえ侍る。爲氏卿は「日本のもの〻上手を唐國へつかはされば、我が身は連歌の(名人イ)にてや人のくにまでもわたるべき」など狂言申されけるとかや。後鳥羽院の御代には連歌の上手をば柿本の衆と名づけられ、わろきをば栗本の衆と名づけられ侍りき。柿本の長者と(有てイ)なる、ことなる嚴重の事ぞか(一字侍りイ)し。おなじき御とき、とねゐも(だイ)の(元如)、百のかけもの〻をりも、定家卿は四十とられたるとぞ日記にも侍る。爲家卿も「よはひたけては、歌わんじつゞくるはむつかしき」とて朝夕連歌をのみせられけるとぞうけたまはりし。後嵯峨院の御代には、弁内侍、(こ)少將内侍などいひし女房連歌しにて、いとはえばえしき事ども侍りき。此のころ地下にのみもてあそぶことになれる、いと無念なるわざなり。連歌(二字花の本イ)のことば歌と(イに)たがひたらば、(脱文歟)たゞ歌のやうにおもしろき句どももせられ侍れば、子細有るまじ

きに、歌の毒とて一向にすてられ侍るは、昔にはたがひたることにこそ。詩つくる人の、聯句嫌ふことはいまだなし。何とて歌よみの連歌をいみ給ふやらむ。初心のをりこそなほ用心も侍るべけれ。口も心も定まりたらむ人の、連歌にとられ給ふことやはあるべき。さて又歌の判のことばといふことも、すべて道の人のかゝぬことになれり。これもいといぶかしくおぼえ侍る一字アリ○けウイ後嵯峨の院の御ときなどは、當座の歌合イ一字にも判のことばかゝれぬはなかりき。爲家卿、光俊朝臣などこそたびごとに筆をとりて、詞の花をそへらしか。此のごろうけたまはれば、道の過あらじとてかやうにとゞめられ侍るとぞ云云。これはことわりなる方もあるにや、唐國の文をうかゞはざる人は、すべて判の詞をばおもふまゝにはかきのべられがたきに侍イや。されば基俊などは詩作りにて有りしかば申すにおよばず、俊成、定家、爲家卿までは、博く學問をせられたる人にてあれば、歌の判も唐國の詞をかざり、優にとりなされてこそかゝれしか。今は我が道のことをこそわづかにたしなみ給ふらめ。あらぬ道まではうかゞひ侍ることのなければ、判の詞かゝれざらむもいはれあることなり。せむなきことなれども、あまりおぼつかなく覺ゆるにつきて申し出せるなり。さきにも申しつるやうに、もの好むくせの老のひがみになほまさり侍ることとこそかへすがへす我が身ながらもどかしく覺ゆれ。されどむかしより好みたきこと有イ一つあるを、いまだ好みいだし侍らぬが、この世の恨とも後むイ一字ニ世の障ともおぼゆるなり。馬牛よろづの鳥獸は、がいぶんもとめ出すこともありき。茶香の具足はやるころは、伊勢物ふせい尋ね出して、茶のひくつはきあつめて、からみたてたる

も、心ひとつはものでのみのかずとも思ひなし侍るべし。井の中の蛙の、水をたのしみて、宮殿樓閣とおもひたるもことわりなり。大鵬といふ鳥の、一羽に千里をかけるも、せきわんとてゆめばかりなる二寸の鳥の、一二寸を飛ぶも、たゞ其のたのしびはおなじことゝ、かや申せば、心一つをなぐさめむことは、まことに不足なくや。たゞすべて好むになきものは人にて侍るなり。わづかなる家のうちのことを申しわはせむと思ふにだにもその器なし。まして事ひろく、人をも世をもたすけ侍るほどの人を好みいだして、御門にもまゐらせたくおぼゆることの、いまだ叶はぬに、其のはかのものでのみは、ものうく侍るなり。中頃も匡房、邦綱などいひし人々はみな攝籙大臣の家のうちには、いやしき人なりしかども、後は天下の重寶となりき。かの邦綱大納言は、武家ざまのことをも、ひとへに我が心に任せてはからひき。又廣元などいひし人は賤しくかずならぬものにてわりしかども、鎌倉の右大將いとはしくせられて、日本國のことをもはからひ申して、今の世に諸國に地頭などおかれたるも、この人の申されたるとぞうけたまはり侍りし。かやうの人を尋ね出してこそものでのみの灌頂にてもわるべけれ。さりながら「人を知ることは、から物、茶香の具足などには似るべからず。何としてよしあしをも、やがてわきまへ知るべき」と申す人のありし。それはまことに大事にて侍るに[illegible]や。さてこそ昔より人を知らせ給ふ御門をば、聖主とも畏き御代とも申す。人を知らせ給はぬ御時は、亂れがちなることのみおほく侍るなり。大かた臣をみること君に知かず、子を見ること父に知かずと申し侍れば、などか上として下を御らんぜぬ事は侍るべき。たゞわ

ろしとはおぼしめせども、しりぞけらるゝ事もなく、よしとはおぼしめせども賞せらるゝ事のなきにてこそ侍らめ。又人を好み、賢きをもとめ給はゞ、やがて人の善惡は顯はるべきにや、唐物、鳥獸などもてあそぶ人も、そのことになれてこそものゝ善惡はおぼゆべけれ。佛と佛との境界、聖と聖との一たび目をあはせ、蓋をかたぶけて、胸のうちのしらるゝことは、まことにあるまじき事なり。たゞよの常の人のよしあしは、世に隠れなきものにや、二つの目の見る所、十のゆびのさす所、などかかくれはて侍るべき。孟子といふ人の申したるは、「左右の人のよきと申すとも、又あしきと申すとも用ゐるべからず。たゞ天下の人の、おなじ口にいふを用ゐるべし」とかや侍るなる。げにも物のよしあしはさすが名聞によることなり。世の末にはあしきこともよくなり、よき事もあしくなることもあれども、物の上手、人の稽古などはかくれぬものぞかし。唐國の文にも、我が國の日記にも讒言といふことをあさましきことに申し侍るなり。白を黑く黑を白く申し侍る。蠅といふ蟲の、塗物などには白くはこをしかけ、白きものには黑くはこをしかけ侍るに譬へたるにや。唐國にもさしもめでたかりし成王と申す御門だにも、周公旦とていみじき聖人のめでたく國を治め侍りしを、あしき弟の二人ありて讒奏せられしに、御門まことに思しめしてしりぞけられき。其の時雨風あらく、世の中さわがしくて、草木もかれしぼみ、秋の田の實も損ぜしうへ、周公旦、成王の父の武王の命にかはらむといふ願書を、物の中よりもとめ出されて、これほどに忠ある人なりけりとてやがてめしかへされて、讒奏したる弟二人をば誅せられてこそ世はめでたく侍りしか。源氏

の大將を、繼母のあし后、あし大臣などのそねみて、須磨へ流され給ひし時、雨風やまず、世の中さわがしく、めしかへされし事はこの周公旦の例を、露もたがはずかきたるこそいみじき女の才覺とおぼえ侍れ。又めでたきためしに申す延喜の帝醍醐も、時平の大臣の讒奏によりて、北野の御事も出で來たりしことなり。鎌倉の右大將の時、景時が讒言によりて、あまたの人の損じて侍るとかや。さてこそ後には景時もあさましき死をして侍りけめ。人のあしきことは、何よりも讒臣にて侍るとかや、人ごとのならひにて、親しくうときによりてそのけぢめあることは常のことなれど、たゞ心のひくに任せて、さはさはと空ごとなど申しつげ侍ることはあさましきなり。まめやかの道理などをひが事に申しなさむは、たゞそのことばかりにてもあるまじきなり。やがて國の政のたがひて、仏神の御心にもかなふまじければ、まことに心おかれ侍るべきにこそ。かやうのことやがてきはきはとなけれども、心えぬればすべて其の人にはばかされ侍らぬことなり。狐狸などいふものもそれと知りぬれば、あやまちのなきことにて侍るとぞうけたまはりし。さて又人の世のならひ、名利思はぬことはなし。寶物もほしく官位もねがはしく侍れば、それにつけておのづから人をもつゐしようなどすることはつねの習なり。さればとてまさしきひがごとを道理にいひたてゝ、其のかはりに多く物をとらむは、たゞひたすらに大罪にて侍るべし。盜人などゝ申すものは我が身一つにてこそあれ、よそをばそこなふことはあるべからず。かやうならむ輩はたちまちに國をも人をも損じ侍るべければよくよくその器を定めらるべきにや。世の末にはまことに欲もなく、

名聞のなきことはあるまじけれども、さすがはぢあらむ人は、さほどの道なきことはあるまじければ、淺深厚薄につきてさたもあるべきとぞおぼえ侍る。さて又人の恩をしらず、不義に過分なることの、世の末にはおほく侍るにや。臣として君をかたぶけなどし、子として父をあやまつほどのことは、よのつねになき事なれば申すにおよばず。上をかろくし、おのれをさきとするたぐひのみ多く侍るにや、大かた恩を思はざるは、鳥獸におとり侍るとぞ申す。心なきたぐひ、なほ恩を報ずることおほし。人としていかでか思ひしらざることあるべき。むかし韓信といひし人、わかくてはあさましく貧しかりしかば釣などをもしけるにや、浦人の家へ行きたりけるに、「うへにのぞみ給へるにや」とてさまざまもてなしたりけるに、この韓信、後に御門に召し出されて、國の管領などになりて此の浦人の家に行きて、色々の寶物をもたせて、「昔の心ざしを報せむ」と申しけるに、浦人申しけるは、「たゞまづしきを憐み奉りしにこそあれ。かならず恩を報ぜられ侍るべしとはさらさら思はず」とて寶ものをもみなかへしてとらざりけり。韓信も一度のもてなしを報ひけるもやさしく、又浦人の志もまことに有りがたきためしにぞ申し傳へたる。「一飯もかならず報ゆ」といふことはこれより申し侍るとこそ。此のころのやうは、我が身のかなしき折は手すり足ずりして其のことやみぬれば、やがてあくる日よりさることのありしとだに思ひ侍らぬこと、いと心うきわざなり。もとより心もあり、世になれたる人などはさることあるまじけれど、人にもまじらぬやうなるものゝ俄にいみじくなりぬればやがて心おごりせらるゝ事にぞ侍るにや。されば「虞

舜は始めは民にてありしが、御門の位につきて〔一字なし或イ〕後も、たゞもとの民の心を失はで、世をも恵み、人をもおそれ、やすけれどもあやふきを忘れぬ」とこそ申し侍れ。當時の人はやがておごり心ち侍るこそかへすがへすもせむなく覺ゆれ。大かた唐國にも大臣公卿以下定まりて、其の位にわたりたる祿のあれば、さのみ法をこえて朝恩などたぶことはなし。すゑおもきものは必ずをるとて根より枝葉のかちたることは、常にはわろきことに申し侍れば、かまへて上に下のまさること侍るまじきことにや。いくらも申したき事は侍れども、まづさしあたることはこれらにて侍るなり。又もろもろの道をよくよくあきらめ給ふべきなり。男はいかはども稽古才學あらむ人、僧はいかほども戒行清淨にて驗ありてたふとからむ人、その外は詩歌管絃にいたるまでも、一道の堪能ならむ人をばまことにめぐみ給ふべきにや。さてこそ人も稽古を宏、みなもろもろの道もおこることにて侍れ。さても人のよしあしはいかなるをさだめ申すべきにか、おろかなる心にはわきまへがたく侍れど、唐の文、五經三史などをはじめとして、聖人たちのかきおかれたるものには、みな人のよしあしを示をとりてをしへ侍るなり。今更ことあたらしきことなれども、かの文などをみざらむ人のため、はかなき女房、をさなき人などのために申し侍るなり。まづ人の本とは聖人を申すなり。これは獸にたとへば麒麟、鳥にたとへば鳳凰のごとし。すべて世に出づることのかたく侍るごとくに、今はさる人もあるまじければ、中々こまやかに申してもせむなし。堯、舜、夏禹、般湯、文王、武王、周公旦、孔子などより外は、まさしき聖人と世にもゆるし、人も用ゐたることなければ、おろかな

る言葉にてとかく申すべきにあらず。我が國にも聖德太子、大師たちなどをやさしも申すべからむ。この聖人と申す程の人はよろづかけたることなくて、天地と心ざしをひとしくし、日月に德をならべたる程のことなれば、とかく申すにおよばず、たゞよの常はまづ賢人君子の分際をこそよき人とは申し侍らめ。それだに今はあるまじきこそ無念におぼえ侍れ。賢人君子などの位になる程の人はさらに我が身といふものを思ふ事はあるべからず。ひとへに國のため、民のために心を碎き、おのれを忘れ、人を助くるなり。又志たしきによりてあしき事をはゞかることもなく、うときによりてよきことを隱すこともあるまじきなり。唯道理といふこと一つをいさゝかの偏頗もなくおこなひて、世を志づめ人をめぐむより外のことは更にあるべからず。君をあがめ、親を敬ひ、兄弟の道をたがへず、朋友の禮をみだらず、よきを擇び、あしきをすて、忠あるものを賞し、科あるものを罪するも、みなその分際にたがふまじきなり。名利をこのまず、財寶をおもくせず、もとより國の寶は賢人君子なり。金玉の類をもてあそぶ事なし。かやうならむ人は賢者とも君子ともいはれ侍るべきにや、これほどの事も今の世にはかへすがへすあるまじければ、たゞよの常の人の、ちと佛神をも心がけ、國をも民をも助け、さのみ我が身をさきとせず、賄賂獻芹にふけらず、よろづのことに道理といふことをさきとして私なからむぞ、今の世にはかへすがへすよき人とも申すべき。大方三皇の代に、至極わろき人と申すは、中古はよき人になり、中古にわろき人といはれたるは、末の世には又よき人にてあるべしと、唐の文にもみえたり。かやうにのみなりゆかば、此のごろの

人はいかにかなりゆかむと覺え侍れども、政よくて國のおこる時は、又すべて昔にもたちおよぶことの有るべきなり。五百年に一たび聖人は出で侍るとかや申せば、あはれ其の時にあひ侍らばやとぞ覺ゆる。又才學いみじくて、唐大和のことを知りたる人も、それによりて心のよきことはあるまじきなり。「たとひ何もしらぬ人にてありともおのづから道理をしりたらむぞ學文したる人とは申し侍るべき。いかに才學ありとも道理に背きたらむ人をば、學文せぬ人と申すべし」とこそ孔子も仰せられけれ。北條時政より九代たもちたることもすべて才學のすぐれたることはなかりしにや、わづかに貞觀政要、御式條などいふ物ばかりをおぼえて私なくおこなひ侍りし程は、すべて國もしづかに、世もめでたくぞ侍りし。わづかなる家の內をさめ侍らむ事だにもたやすからず、まして日本國の事を（一字をさりイ）さたし侍らむほどのことは、まことに人のきりやうをもよくえらばるべきにてこそ。それも私といふことだにもさはさはとなくばわづらひあるまじきとぞ古き人はいひおかれ侍る（七字かきおさだるイ）。人のうちには諫臣とて常にわろきことを申し侍る人のあるが、何よりもめでたきことにて侍るなり。藥はにがけれどもつひには身をたすく。毒はあまけれども後には病をなす。むかしの賢き帝は、よき諫言を聞きてはその人を拜し給ひて賞翫せられしなり。さりながら此のごろの人は、いかによきことなれども、我が心にたがふことをばわろしと申す。わろき事なれども我が心にかなふ事をばよしと申し侍るなりべし。かやうならむいさめごと（二字なイ）は、たゞ我が心にまかせていふことなれば、すべて國のためも其のしるしあるべからず。まことに私なからむ人の君の心

ざしもふかく、二心なく申し侍らむことのはや、げに世のたすけとなり侍らむ。先人をよく
よく試み給ふべきなり。その人の心のうちをもふるまひをも御らんじすまして、今は心やす
きほどに思しめして後こそ政をもはからはせ、世をもあづけ給ふべきことなれ。されば堯と
申す御門の、舜をめし出してはまづよろづの事をせさせて、至極心みられて後、天下の政を
もあづけ申されしなり。聖人なほかくのごとし。ましてよの常の人の、やがてよしあしを御
らんじさだむることはあるまじきなり。うへは穏便にて下の利根なる人の、過分になからむ
ぞ世のためも人のためもよかるべきと覺え侍るあまりに、いたづらごと申し侍るついでに、
ちと女房の有りさまをも申し侍るべし。大かた女といふものは、わかき時は親にしたがひ、
ひとゝなりてはをとこにしたがひ、老いては子にしたがふものなれば、我が身をたてぬ事と
ぞ申すめる。いかほどもやはらかに、なよびたるがよく侍ることにや、大かた此の日本國は、
和國とて女のをさめ侍るべき國なり。天照大神も女體にてわたらせたまふうへ、神功皇后と
申し侍りしは、八幡大菩薩の御母にてわたらせ給ひしぞかし。新羅百濟をせめなびかして此
の葦原の國をおこし給ひき。近くは鎌倉の右大將の北の方尼二位殿（政子）は二代の將軍（賴家實朝）の母に
て、大將ののちはひとへに鎌倉を管領せられいみじく成敗ありしかば、承久のみだれの時も
この二位殿の仰とてこそ義時ももろもろの大名には下知せられしか。されば女とてあなづ
り申すべきにあらず。昔は女體のみかどのかしこくわたらせ給ふのみぞ多く侍りしか。今も
まことにかしこからむ人のあらむは、世をもまつりごち給ふべきことなり。又男女の中いろ

なることゞもは、光源氏にこまかに申し侍れば今更申すにおよばず（一字ぬけ こなりイ）。雨夜の品さだめにことつき侍るべし。それも「心をさまりたらむ人をこそいへとうしとも定めて、まことのよるべともえ侍るべけれ」とくれぐれかゝれたれば、唯男も女もうからうかしからず。正直に道理を知りたらむが（人イ）よりほかは何事もいたづらごとにて侍るにや。「裝束する人の一さいの之もんをばわきへかきいるゝとかや申すやうに、萬のことは道理といふ二つの文字にこもりて侍る」とぞ慈鎭和尚と申す人のかきおかれ侍るいとありがたきことなり。今申したることはみなかしこき文どもの旨を、かなにかきなし侍れば聊も私の言葉はなきなり。又權道とて世にひがごとなる樣なることの終に道理になることあるにや、弓矢とる人は、約といふことの堅く侍るべきとぞ承りし。承久の亂の時、院宣の御うけ文にも、「武士は約を變せぬ」よしをこそ義時朝臣もかゝれたりし。唐國には盟と申して、牛の血をのみて起請などのやうに契約せしなり。今も一揆など申すは、かやうなること侍るにや、大かた「君子は比せず」とてよき人は黨をたつることあるまじきなり。唐國にも國のみだれたりし時より、牛の血などをものみけるにや、三皇五帝などの世にはさることもあらじとぞ覺え侍る。唯うへ（二存代イ）をのみあふぎて私の一揆などはなきこそよきことなれ。「小人は比す」と申してわろきもの〻集りて黨をたてゝよきことをも申し破りなどすることは、かへすがへすあしきことなり。盟と申し侍るも唯合戰のときのわざにてあれば、今もさやうの時は一きもさもありぬべきことなり。さしたる事もなき時、私の契約はせむなき事にぞ覺ゆる。そもそも近きころ、波風さわがしか

りしわきつしまのうち、今は人の國までをさまりて、ゐながらとほきを玄たがへ給ふ時になりぬ。かの漢高三尺のつるぎもこれに玄かじとぞ覺ゆる。末の世には今の時をこそ又めでたきためしにもひき侍るべければ、いよいよかしこき御政もわれかしと、今老のあらましには玄侍る。わまのさえづりとかやのやうに、はじめもはてもなき二字闕ことを申し侍るなり。小夜のねざめに思ひのこさぬふしぶしを、曉の燈のかすかなる闇におきゐてかきつけ侍るなり。

小夜寢覺

終

いほぬし

いつばかりの事にかありけむ、世をのがれて心のまゝにあらむと思ひて、世の中にきゝときく所々、をかしきを尋ねて心をやり、かつはたふとき所々拝みたてまつり、我が身の罪をもほろぼさむとわける人ありけり。庵主とぞいひける。神無月の十日ばかり熊野へ詣でけるに、「人々もろともに」などいふもの有りけれど、我が心に似たるも無かりければ、たゞ忍びてとうしひとりしてぞ詣でける。京より出づるひに八幡に參でゝとまりぬ。その夜月おもしろうて、松の梢に風涼しくて、蟲の聲も忍びやかに、鹿の音はるかに聞ゆ。つねの住みかならぬ心ちも、よのふけ行くに哀なり。げにかゝれば、神もすみ給ふなめりと思ひて、

「こゝにしもわきて出でける石清水神の心をくみて知らばや」。

それより二日といふ日の夕暮に、住吉に詣でつきぬ。みれば遙なる海にていとおもしろし。前には江流れて水鳥の樣々なる遊ぶ。あまの家にやあらむ、蘆垣のやのいとちひさきどもあり。秋の名殘、夕暮の空のけしきもたゞならずいと哀なり。御社には庭も見えず。色々さまざまなるもみぢ散りて冬籠りたり。經などよみ聲して人しれずかく思ふ、

「ときかけつ衣の玉はすみのえの神さびにける松のこずゑに」。

かくて、社々にさぶらひて祈り申すやう、「この世はいくばくにもあらず、水の泡、草の露よ

りもはかなし。さきの世の罪を亡して行く末の菩提をとらむと思ひ侍る心ふかうて、世を厭ふこと、思ひをこたらずあらむによりてなり。願はくば吾、春は花を見、秋はもみぢを見るとも、匂にふれ色にめでつる心なく、朝の露、夕の月を見るとも、世間のはかなきことを教へ給へ。

世の中をいとひて捨てむのちはたゞ住のえにある松と頼まむ」。

いづみなる信太の杜にてあるやうあるべし。

「我が思ふこととの志げさきにくらぶれば信太の杜の千えはものかは」。

きの國の吹上の濱にとまれる、月いと面白し。此の濱は天人常に降りて遊ぶといひ傳へたる所なり。げに所もいと面白し。今宵の空も心ぼそうあはれなり。夜の更け行くまゝに、鴫の上毛の霜うち拂ふ風も空さびしうて、たづはるかにて友をよぶ聲も、さらにいふべきかたもなう哀なり。それならぬ樣々の鳥ども、あまた洲崎にもむらがれて啼くも、心なき身にも哀なること限なし。

「少女子が天の羽衣ひきつれてうべもふけ井の浦におるらむ」。

月の海の面にやどれるを、浪の志きりあらふを見て、

「月に浪かゝるをり又ありきやとふけゐの浦の蜑にとはゞや」。

波いとあはれなるよしを、また、

「浪にもあれかゝるよの又あらばこそ昔を志れる海士も答へめ」。

吹上の濱に泊れる、夜深くそこをたつに、浪の高う見ゆれば、
「おまのとを吹上の濱に立つ浪は夜さへみゆるものにぞありける」。
玄ゝのせ山にねたる夜、鹿の鳴くを聞きて、
「うかれけむ妻のゆかりにせの山の名を尋ねてや鹿も鳴くらむ」。
磐代の野にねたる夜、あるやうあるべし。
「石代のもり尋ねてといはせばやいくよか松は結びはじめし」。
ちかの濱(浦イ)に小石拾ふとて、
「うつ浪にまかせてをみむ我が拾ふはまゝのかずに人もまさらじ」。
みなへの濱に、知りたる人のみやまより歸るに逢ひぬ。「同じうはもろともに、まて給へかし」といへば、歸る人、「忍びて申し給ふこともこそあれ」といへば、庵主、「なにごとにかあらむ。ものうたがひは罪うなり」とて拾ひたる貝を手まさぐりになげ遣りたれば、「ものあらがひぞまさるなる。かうなあらがひ給ひそ」とてがうなの殼をなげおこせたり。又浪に藻うかびて打ちよせらるゝを、「かれ見給へ。入りぬる磯の」といへば、歸る人、「こふる日は」と心有り顔にいへば、庵主、「くまのおのづから」といへば、「浦のはまゆふ」といらふる(有にイ)庵主、「重ねてだになし」といへば、歸る人、「中々に」とて、
「もしは草浪はうづむと埋めどもいやあらはれにあらはれぬめり」。
庵主、返し、

「三熊の丶浦にきよする濡衣のなき名をすゝぐ程と知らなむ」

などいひてたちぬ。「さらば京にて」といへば、庵主、「おさふる袖の」といらふれば、「あなゆゝしや、後瀬の山に」などいひて立ちぬ。その夜、室の港に泊りぬ。きのもとに柞のもみぢして、いほり作りて入りふしぬるに、夜の更くるまゝに、時雨いそがしうふるに、

「いとゞしくなげかしきよを神無月旅の空にもふる時雨かな」。

御山につくほどに木の本ごとに、手向の神おほかれば、水のみにとまる夜、

「よろづ代の神てふ神に手向しつ思ひと思ふことはなりなむ」。

それより三日といふ日、御山に着きぬ。こゝかしこ巡りてみれば、あんしちども二三百ばかりおのが思ひ思ひにしたるさまもいとをかし。親しう知りたる人のもとにいきたれば、蓑を腰にふすまのやうにひき懸けて、ほだ杭といふものを枕にしてまろねにねたり。「やゝ」といへば驚きて、「とくいり給へ」といひていれつ。「おほんあるじせむ」とていしけの大きさなる芋の頭をとり出でゝやかす。「これぞ芋の母」といへば、「さはちのあまさやあらむ」といへば「人の子にこそ食はせめ」といひてけいめいすれば、さて鐘うてば御堂へ参りぬ。頭ひきつゝみて蓑打ちきつゝ、こゝかしこにかず知らずまうで集まりて、れいしはてゝまかり出づるに、あるはそ上の御まへにとゞまるもあり。禮堂のなかのはしらのもとに、蓑うちきつゝ忍びやかに顔引きいれつゝあるもあり。ぬかづき陀羅尼よむもあり。さまざまにきゝにくゝ、あらはにそと聞くもあり。かくてさぶらふほどに、霜月の御八講になりぬ。そのありさま常

ならずあはれにたふとし。八講はて丶のあしたに、或人からいひおこせたり。
「おろかなる心の暗に惑ひつ丶浮世にめぐる我が身つらしな」。
菴主も此の事をまづ心に、たう心を佛のごとしと思ふ。
「白妙の月また出で丶照さなむかさなる山の遠く（一作を）にいるとも」。
また年ごろ家につくせることをくいて、
「玉のをも結ぶ心の裏もなくうちとけてのみ過しけ（一作つ）るかな」。
さて侍ふほどに、「霜月廿日のほどのあすまかでなむ」とて音無川のつらに遊べば、「人志ばし侍ひ給へかし。神もゆるし聞え給はじ」などいふ程に、頭白き鳥ありて、
「山がらすかしらも白く成りにけり我がかはるべき時やきぬらむ」拾遺。
さて人の室にいきたれば、ひのきを人のたくか、走りはためくをとりて侍（候）れば、むろのあるじ、「この山は、ほだくひけんありて、はたはたとぞ申す」といへば、「たきでゑならむ」といひてたちぬ。さてみふねじまといふ所にて、
「そこ（一作は）のをに誰さはさしてみふね島神の泊りにことよざせけむ」。
たゞの山の瀧の本にて、
「名に高く早くよりきし瀧の絲に世々の契を結びつるかな」。
この山のありさま、人にいふべきにあらず、哀に尊し。還るとて、そこに貝拾ふとて、袖のぬれければ、

「藤衣なぎさによするうつせ貝ひろふたもとはかつぞ濡れける」。

この濱の人、はなの岩屋のもとまで着きぬ。見ればやがて岩屋の山なる中をうがちて、經を籠め奉りたるなりけり。これは彌勒ほとけの出でたまはむよに、とり出で奉らむとする經なり。天人つねに降りて供養し奉るといふ。げに見奉れば、この世に似たる所にもあらず。そとばの苔に埋もれたるなどあり。側にわうじの岩屋といふあり。たゞ松の限りある山なり。その中にいとこきもみぢどもあり。むげに神の山と見ゆ。

「法こめてたつの朝をまつ程は秋の名殘ぞ久しかりける」。

夕日に色まさりて、いみじうをかし。

「心あるありまの浦の浦風はわきて木の葉も殘すありけり」。

天人のおりて供養し奉るを思ひて、

「天津人いはほをなづる袂にや法のちりをばうち拂ふらむ」。

四十九院の岩屋の許にいたる夜、雪いみじうふり、風わりなく吹けば、

「浦風に我がこけ衣ほしわびて身にふり積る夜半の雪かな」。

たてが崎といふ所あり。かもゐのたゝかひ志たる所とて、楯をついたるやうなる巖どもあり。

「うつ浪に滿ちくる汐のたゝかふをたてが崎とはいふにぞ有りける」。

伊勢の國にて汐のひたる程に、見渡りといふ濱を過ぎむとて、夜なかにおきてくるに、道も見えねば、松原の中にとまりぬ。さて夜の明けにければ、

「よを籠めていそぎつれども松の根に枕をしてもあかしつるかな」。

逢坂越えして休むほどに雪うち降りなどす。もの丶心細ければ、なちの山にとまりなましものを、いづちとていそぎつらむなど思ふ程に、きあひたる人、「いかで關は越えさせ給ひつるぞ」などいふにつけて、から覺ゆ、

「雪とみる身のうきからにあふ坂の關もあへぬは涙なりけり」

とて立ちぬ。堤のもとにて京極の院の築土崩れ、馬牛いりたち、女どもなど笠をきて、こんくうちありくをみるに、ことのおはせし時思ひあはせて、猶世の中かなしやなど思ふ。

「げにぞ世はかもの川浪たちまちに淵もせになる物には有りけり」

など見ることゝいひ木草につけていはれける。

かもに葉月ばかり、鈴蟲のいみじうなき侍りしかば、

「聞くからにすごさぞまさるはるかなる人を忍ぶる宿の鈴蟲」。

荻多かる家にて、風の吹き侍るに、よの中のはかなきことなど思ひ給へられて、

「いかにせむ風に亂る丶荻の葉の末葉の露にことならぬみを。

秋の野に鹿のしがらむ荻のはの末葉の露の有りかたの世や」。

同じ月の十日比に、月出づるまで侍りしに、たゞ入りにいり侍りしかば、これを思ふやう侍りて、

「さもあらばあれ月出で丶さも入りぬれば見るべき人のある都かは」。

同じころ、つれづれにねられで侍りしに、月の出で侍りければ、

「天の原はるかにひとりながむれば袂に月のいでにけるかな」新。

その比のことにや侍りけむ、いつとも侍らねども、

「つれなくておさふる袖の紅にまばゆきまでになりにけるかな」。

かものふだ經にわび侍りしに、鹿のなき侍りしかば、

「鹿の音にいとゞわりなさまさりけり山里にこそ秋はすませめ」。

鈴鹿山に、

「音にきく神のふをとるとるとすゞかの山をならしつるかな」。

かはのまゝにかんだちにまかりしに、川波のいみじうたちしかば、

「わりなくも心一つをくだくかなよをへて岸にたつ浪はたゞ」。

つの國なる寺にまかりけるに、神なびのほどに鹿のなきければ、

「我ならぬ神なび山のまさきへて角まく鹿もねこそ鳴きけれ」。

よの心うき心ひとつに思ひわびて、

「君だにも都なりせば思ふこととまづかたらひて慰めてまし」。

十月かもに籠りて、曉がたに、

「瑞籬にふる初雪を白妙のゆふしでかくと思ひけるかな」。

二三日侍りて、貴船のもとの宮に侍りしに、むら消えたる雪の殘りて侍りしかば、うち解け

ぬことや思ひ出でけむ、
「白雪のふるかひもなき我が身こそ消えつゝ思へ人はとはぬを」。
もみぢのえもいはず見え侍りしかば、みくらし侍りて、夜になしていで侍るとて、
「紅葉ばの色の赤さに目をつけてくらまの山に夜たどるかな」。
或人の初雪のふり侍りしつとめて、菊にさしていひて侍りし、
「まぜの中に移ろふ菊のけさいかに初雪といはぬ君を恨みむ」。
かへし、
「初雪のふるにも身こそ哀なれとふべき草の園しなければ」。
あけぼのになかめたちて侍りしに、霧のいみじうみるまゝに立ち渡りて、空に見ゆらむと、
まことにいひ侍りぬべかりしかば、
「から錦染むる山には立田姫きりのまくをぞ引きまはしたる」。
かたらふそうのまうでこで、川藻にさして、
「こゝにとてくるをば神も諫めしを御手洗川の川藻なりとも」。
かへし、
「皆人のくるにならひて御手洗のかはもたづねずなりにけるかな」。
御手洗川のつらにはべりしに、もみぢのかたへはきくにをばなみはへしを、人々みたまへて、歸り侍りてみえず侍りしに、ちり侍りしかば、

「御手洗のもみぢの色に川のせに淺きも深くなりはてにけり」。

京よりまうできたりける人の侍らざりけるほどにまうできて、かういひ置きて歸りにける、

ぬしの御社なりしほどに、

「御手洗の飾ならずは色のみはつゝ紅かゝらましやは」

とてまかりにければ、こと人を「かくなむ」といひて誘ひて、はし殿にもろともに侍りしに、

日の暮れ侍りしかば、

「ひとの落つる御手洗川の紅葉はをよに入るまでもおりてみるかな」。

夜ねられ侍らぬまゝに、きゝ侍ればまことに夜中うちすぐる程に、千鳥の啼き侍りしかば、

「曉や近くなるらむもろともにかならずもなく川千鳥かな」。

神の御前に宵曉とさぶらひて、佛の御號を祈り申すに、

「いひいづれば淚さし出づる人の上を神もあはれや思ひすぐらし」。

ぬしもおきて侍りしつとめて「もみぢはいかに」と人のいひて侍りしに、

「おく霜のあさふす程やわらばわらず今一目だにみぬに紅葉ば」。

紅葉の散りはてかたに、風のいたう吹き侍りしかば、

「落ち積る庭をだにとてみるものをうたて嵐の吹きはらふらむ（吹きにはくれなゐ）」拾遺。

十月一日かんしに、人々歌よみしに、

「紅葉はこのもとゝしに見もわかずいをのみもめぐらかすかな」。

月を、

「山のはを出てかてにする有明の月は光ぞほのかなりける」。

しぐれを

「ことぞとて思ふともなき衣手に時雨のいたく降りにけるかな」。

戯僧の、御社に一夜侍ひてまかでけるに、ゐもの御社にまうでゝ侍りし程に、かく書きて罷にさし挿みてまかりにける、

「たびのいもねて心みつ草枕霜のおきつる曉ぞうき」。

返し、いひにつかはしゝ、

「さてをゐもの社もとをへてはおきつゝ通ふ我か衣手を」。

神に申し侍りし、よに侍るかひ侍らぬを心にかなふなど覺え侍りしかば、ながれむのちの名ゐらでや侍りなましなど思ひ給へられ侍りしかは身をゐゝなげてましと覺え侍りて、

「ひたぶるにたのむかひなきうき身をば神もいかにか思ひなりなむ」。

まかりいでしに、「貴船に、

「うきことのつひにたえずば神にこそ恨を殘す身とやなりなむ」。

片岡の杉に結び付けし、

「片岡のいがきのすきしゐるしあらば夕暮ごとにかけて忍ばむ」。

ひちぎる事ありける人に、

「契りおきし大和瞿麥忘るなよみぬまに露の玉きえぬとも」。
こまかなる文を尋ねて、嬉しき事の侍るに、
「うきことも君がかたまづ見つるより露殘さずぞ思ひすてつる」。
上らむ事遙に人のの給へるに「暗うなる程、部下す人のなどかさては」といふに思う給へし、
「思ひやるかたしなければつれづれと」。
よろづに思ひやり聞ゆるに、しだりをのとのみ思ひしられ侍るみによろづしられ侍りて、
「かくしわらば冬のさむしろ打ち拂ふよはの衣手今やぬるらむ」。
風俄におこり侍りて「みやしろよりまかりいで侍りて、
「かつらぎのくめの岩橋しるまではと思ふ命の絶えぬべきかな」。
きくやうわる人に、
「下紐は結びおきけむ人ならでまだうちとけむことやものうき」。
返し、
「濡衣につけゝむ紐はきながらも結びもしらず解きも習はず」。
すのりとゝにとて、人々わまだまうできて、かりたてゝゐてまうできたるに、これをと思ふ人や侍りけむ。夜半のけしきぞいとわはれに侍るや。
「すのりとるぬまかは水におり立ちてとるにも先ぞ袖は濡れける」。
さきざき見る人のねごろになりて、うとうもてなして侍るに、月の哀なりし夜、

「ほのかにもほのみしものをはるかにも雲がくれ行く空の月かな」。
これはとほたわふみの日記。
三月十日あづまへまかるに、つゝみてあひみぬ人を思ふ、
「都いづるけふばかりだにはつかにも逢ひみて人に別れにしかは」。
粟田寺にて京をかへり見て、
「都のみかへりみられし東路に駒の心にまかせてぞゆく」。
關山の水のほとりにて、
「せき水に又衣手はぬれにけりふたむすびだにのまぬ心に」。
人の「とうくだりね」といひしを、せきいづる程に思ひ出で、
「うかりける身は東路の關守も思ひがほして留めざりけり」。
をかだの原といふ所をめぐるに、
「浮名のみおひ出づるものを雲雀あがる岡田の原を見捨てゝぞ行く」。
鏡山の峯に雲の昇るを、
「鏡山いるとてみつる我が身にはうきより外の事なかりけり」。
曉に雉子のなくを、
「すみなれの野べにおのれは妻とねて旅ゆくかはに鳴く雉子かな」。

遙にひえの山をみて、あすよりはかくれぬべしと思ひて、

「けふばかり霞まざらなむあかで行く都の山をわれとだにみむ」。

昔、籠りて行ひ侍りし山里侍の、火にやけて、有りしにもあらずなりて、あんずかちの前にありし山吹の、草のなかにまじりて所々にあるを、

「あだなりとみるみるうゑし山吹の花の色しもくだらざりけり」。

また、

「山吹の志るしばかりもなかりせば何處を住みし里と志らまし」。

そこより下るに日暮れぬ。かたらひし聖のある所にまかりたれば、その人は志にけり。もろともにはじめ侍りしに、ふけからを行ふとて、人々あまた侍れど、みも志らぬ人なり。ひとを呼びいだしていふ、

「我をとふ人こそなけれ昔みし都の月はおもひいづらむ」。

又ことと人々のさるべきもなくなりにけりとき丶て、

「なぞもかくみとみし人は消えにしをかひなき身しも何とまりけむ」。

すのまたの渡にて雨に逢ひて、そのよやがてそこにとまりて侍るに、こまどもあまたみゆ。

「澤にすむこまはしからぬ道にいで丶日暮れし袖を濡らしつるかな」。

をはりなる鎮のうらにて、

「かひなきはなほ人忘れずあふことの遙なるみの恨なりけり」。

ふたこ山にてつゝじのはるばると咲きて侍るに、

「唐國のにし元ニなりとてもくらべみむふたむら山の錦にはにじ」。

その夜こふにとまる。この折、志のなかに人々とまりて、きたなどいふべきにもあらず。柏木の志たに幕引きてやどり侍りて、人志れず思ふことおほう侍るに、曉がたに、

「ねらるやとふしみつれども草枕有明の月も両袖にみえけり」。

志かすがのわたりにて、わたし守のいみじうぬれたるに、

「旅人のとしも見えねど志かすがにみなれてみゆるわたしもりかな」。

みやぢ山の藤のはなを、

「紫のくもとみつるはみやぢ山名だかき藤のさけるなりけり」。

たかし山にてすゑつきつくる所ときゝて、

「たづならぬ高師の山のすゑつくり物おもひをぞやくとすときく」。

はまなのはしのもとにて、

「人志れず濱名の橋のうちわたし歎きぞ渡るいくよなきよな」

橋のこぼれたるを、

「中絶えて渡しもはてぬ物ゆゑになにゝ濱名の橋をみせけむ」。

まかり着きてのち雨のふり侍りければ、かくおぼえ侍る、

「誰にいはむひまなき頃の眺かはる物おもふ人の宿りからかと」。

郭公の聲をきゝて、
「此のごろはねてのみぞまつ時鳥こゑばし都のものがたりせよ」。
はこ鳥のなくを聞き侍りて、
「故郷のことづてかとてはこ鳥のなくを嬉しと思ひけるかな」。
ぬなはの長きを人の持てまうできたるをみて、
「我ならばいけといひても浮きぬなは遙にくるはまづとめてまし」。
夜ふかく郭公をきゝて
「身をつめば哀とぞきく時鳥よをへていかゞ思へはかなし」。
五月五日、雨のふり侍るに、
「世の中のうきのみまさるながめには菖蒲のねこそまづ流れけれ」。
立花の木に郭公のなき侍るに、
「ほとゝぎす花橘のかばかりになくはむかしや戀しかるらむ」。
山里侍より梅をもてまうできたるをみて、
「都にはこゑづえの梅も散りはてゝたゞ香ばかりの露やのおくらむ」。
郭公のなくを、
「我ばかりわりなく物や思ふらむ夜ひるもなくほとゝぎすかな」。
六月七日、またつとめて、

「夏山のこの志たかげに泣く露のわるかなきかのうき世なりけり」。

よもすがら月をながむる曉に、

「つれづれとなぐさまねどもよもすがらみらるゝものは大空の月」。

晦日にねられず侍るまゝに、夜更くるまで侍りて、

「空はると闇のよるよる眺むれば哀にものぞ見え渡りける」。

同じ月の六日、つゆの螢にかゝりて侍りければ、

「戀ひわびてなぐさめにする玉づさにいとゞ袖もまさる我が淚かな」。

七日のつとめて、河原へ人の「いざ」と申すに、

「たなばたの天の羽衣すぎたらばかくてや我を人の思はむ」。

同じ日、うらやまれぬなど思ひ侍りて、

「七夕をもどかしとみし我が身しもはては逢ひ見ぬためしとぞなる」。

又、

「逢ふことをけふと賴めて待つだにもいかばかりかはわるな七夕」。

わる僧のもとより女郎花をおこせて、

「白露のおくに咲きける女郎花よはにやいりて君をみるらむ」。

男の「こと所よりかよふ人の許より、つくろふ人侍らねばいとことやうになむ」とて瓜をおこせて侍るに、

「秋ごとにたゞみるよりはうりふ山我がそのにやはなり心みぬ」。

暁に蟲のなくを、

「きゝしかなわがでと秋のよもすがらねられぬまゝに蟲も鳴くなり」。

或僧の、上り侍らむ事とひて侍りしに、

「君はおもふ都はこひし人忘れずふたみちかけて歎くころかな」。

菊をいと多う植ゑて侍るに、「のぼり侍りなむ」とて結び付け侍りし、

「みつぎなは古郷もこそ忘らるれこの花咲かぬまづ歸りなむ」。

おちゝうるこどものはゝの、こと男につきて侍れば、いみじうなげくよしをきゝ侍りて、

「その原の梢をみれば箒木のうきをほののみきく袖もぬれけり」。

かひのすけといふものゝ、でをいみじう好み侍りしにつかはす時、鹿の啼き侍りしに、

「よりこをぞ忘かも誠に思ひけるかひよかひよとこと草にして」。

京よりねんごろなる人々の御文どもあるに、なくなり給ひにし人おはせましかばと、みれば覺え侍りて、

「今一人そへてやみましたまづさを昔の人のあるよなりせば」。

菊に結びつけしふみを、ある人のみ給ひて、九日、

「みつきなく留れとまでは思はねどけふはすく侍てといふ花にこそみれ」。

返し、

「眞心によはひしとまる物ならばちゝの秋まですぎも去なまし」。
なはいでゝ、十一日濱名の橋の本にとまり得て、月のいとおもしろきを見侍りて、
「うつしもて心靜かにみるべきをうたても浪のうたち騷ぐかな」。
夜ふけて鹿の啼くに、
「たかし山松の木ずゑに吹く風のみに去む時ぞ鹿もなきけたる」。
うつろひする所に、親の心を、
「君が代はなるをの浦になみ立てる松のちとせぞかずにわつめむ」。
このまへに、なるをの濱といふ所の侍るなり。さてその松は、見え侍りしなりとぞ。

いほぬし
終

無名草子

やそぢあまり三とせの春秋、いたづらにて過ぎぬる事を思へばいとかなしく、たまたま人とうまれたる思ひ出に、うき世のかたみにすばかりのことなくてやみなむ悲しさに、髮をそりこゝろをそめて、わづかに姿ばかりはみちにいりぬれど、心はたゞそのかみにかはることなし。とし月のつもりにそへていよいよ昔はわすれがたく、ふりにし人は戀しきまゝに、人しれぬ忍びねのみ泣かれて、苔の袂もかわくよなき慰めには、はなこをひぢにかけて朝ごとに露をはらひつゝ、野べの草むらにまじりて花をつみつゝ、佛にたてまつるわざをのみして、あまた年へぬれば、いよいよかしらの雪つもりおもての浪もたゝみて、いとゞ見まうくなりゆくかゞみの影も、われながらうとましければ、人に見えむこともいとゞつゝましければ、みちのまゝに花をつみつゝ、ひんがし山わたりをとかくかゝづらひありくほどに、やうやう日も暮れがたになり、たちかへるべきすみかもなければ、いづくにても行きとまらむ所によりなむと思ひて、「三界無安猶如火宅」とくちずさみてあゆみ行くほどに、最勝光院の大門あきたり。うれしくてあゆみいるまゝにみだうのかざりほとけの御さまなどいとめでたくて、淨土もかくこそといよいよそなたにすゝむこゝろもよほさるゝ心ちして、むかしよりふるき御願どもおほくをがみ奉れど、かばかり御こゝろにいりたりけるほど見えで、かねい柱、

たまのはたをはじめ、障子のゑまで見どころあるを見侍るにつけても、まづ此の世の御さいはひもきはめ、後の世もめでたくおはしましけるよとうらやましくふしをがみたち出でゝ、西ざまにおもむきて、こなたざまはむげに山ざとめきていとをかし。五月十日よひのほど、ひごろふりつるさみだれのはれまちいで、ゆふ日きはやかにさしいで給ふもめづらしきに、ほとゝぎすさへ伴なひがほにかたらふも、しでの山路の友とおもへば、耳とまりて、

「をちかへりかたらふならば時鳥しでの山ぢのしるべともなれ」

とうち思ひつゞけられて、こなたざまには人里もなきにやと、はるばる見わたせば、いなばそよがむ秋風おもひやらるゝ、さなへ、青やかにおひわたりなど、むげに都とほきこゝちするに、いとふるらかなるひはだいむねとほきより見ゆ。いかなる人のすみ給ふにかと、あはれに目とまりてやうやうあゆみよりて見れば、ついぢも所々くづれ、かどのうへなどもあばれて人すむらむとも見えず、たゞしんでん、たい、わたどのなどやうのやども、しようしよう（蕭條）いとすみたるさまなり。庭の草もいと深くて、光源氏の露わけ給ひけむ蓬も所えがほなる中をわけつゝ、中門よりあゆみいりて見れば、南おもての庭いとひろくて、くれ竹うゑわたし、卯の花がきねなどまことにほとゝぎすかげにかくれぬべし。やま里めきてみゆ。せんざいむらむらいとおほく見ゆれど、まださかぬ夏草のしげみいとむつかしげなる中に、なでしこ、ちやう春げばかりぞいと心よげにさかりとみゆる。軒ちかきわかぎの櫻なども、はなざかりおもひやらるゝ木だちをかし。南おもてのなか二間ばかり目、持佛堂などにやと見えて、か

みしやうじしろらかにたてわたしたり。ふだんかうの煙けだかきまでくゆりみちて、みやうかうのかなどかうばし。まづ佛のおはしましけると思ふもいとうれしくて、はなこをひぢにかけ、ひがさをくびにつらされながら、えんにあゆみよりたれば、しんでんの南東とすみふたまばかりあがりたるみすのうちに、しやうの琴のおとほのぼのきこゆ。いとすゞろにくゝゆかしきに、わかやかなる女ごゑにて、「いと哀なる人のさまかな。さほどの年にいかばかりの心にていと見ぐるしげなるわざをし給ふぞ。をのゝこまちがひぢにかけゝむかたみよりはめでたく」などいふ人あり。「阿私仙につかへけむ太子の御こゝろよりも有りがたくこそおぼゆれ」などいふよりうちはじめ、おなじほどなるわかき人三四人ばかり、色々のすゞしのきぬ、ねりぬきなど、なえばみたるをきて、えんにいでたり。ところのさま神さびふるめかしかりつるほどよりは、めやすきさまなめるかなと見る。「むかしの身のありさまいかなりし人のはてぞ」などなつかしくとひ尋ねあへれば、いとうとましげなるありさまをちにて見などもしたまはで、「むげにわかきほどに、慈悲ふかくものしたまひけるも、かゝる佛の御あたりにものせさせ給ふ御ゆゑにや侍らむ」などいひはじめて、「わかくての身のありさま、人々しくぞものなどかたりきこえむ。きゝどころありとおぼしめさるべきものにも侍らず。たゞ年のつもりには哀にもをかしくもめづらしくもさまざまおぼしめされぬべきことをきゝつめて侍りしかども、その久しくなりてはかばかしくもおぼえねばいとかひなしや」ときこゆれば、「それこそは聞かまほしけれ。さてさて昔より身にありけむことも、きゝつめけむ

よのことも、露のこらずこのほとけの御まへにてざんげし給へ」といへば、むかしがたりはげにせまほしくて、花こ、ひがさなどえんにうちおきて、からんによりかゝりぬ。「人なみなみのことには侍らざりしかども恥ながら十六七に侍りしより、皇嘉門院（聖子）と申し侍りしが御母の北の政所にさぶらひて、讃岐院（崇徳）、近衛院などくらゐの御とき、もゝしきの内もときどき見侍りき。さてうせさせ給ひしかば、女院にこそさぶらひぬべく侍りしかども、なほ九重のかすみのまよひにはなほもてあそび、雲のうへにて月をもながめまほしき心あながちに侍り、後白河院くらゐにおはしまし、二條院春宮と申し侍りしころ、その人かずにはべらざりしかど、おのづからたちなれ侍りしほどに、さるかたに人にもゆるされたるなれ。ものになりて六條院、高倉院などの御よまでときどきつかふまつりしかども、つくもがみくるしき程になりはべりしかば、かしらおろして山ざとにこもりゐはべりて、一部よみたてまつることをこたりはべらず。今朝とく出ではべりて、とかくまどひはべりつるほどに、今までけたいし侍りにけり」とてくびにかけたる經ぶくろよりさうし經とりいでゝよみゐたれば、「暗うてはいかに」などあれば、「今は口なれてよるもたどるたどるはよまれはべり」とて一のまきの末つかた、方便品比丘偈などよりやうやうしのびてうちあげなどすれば、いとおもはずにあさましがりて「今すこしちかくてこそきかめ」とてえんへよびのぼすれば、「いと見ぐるしくかたはらいたく侍れど、法華經にところをおき奉り給はむを、しひていなびきこえむもつみえ侍りぬべし」とてえんにのぼりたれば、「おなじくはこれに」と中門のらうによびのぼ

せて、たゝみなどしかせてすゑられたり。「十羅せちの御とくに殿上ゆるされ侍りにたり。ましてのちの世もいとゞたのもしや」などきこえて、ところどころうちあげつゝよみたてまつる。いとおもはずに僧などにかばかりそひて、七八人とゐなみて、「こよひは御ときしてやがてゐあかさむ。月もめづらし」などいひて集ひあはれたり。一部よみはてゝ、「滅罪生善」などすゞおしすりて、「いまはやすみ侍りなむ」とてよりふしぬれど、このひとびとはそゞろごとゞもいひ、經のよきあしきなどほめそしり、花もみぢ月雪につけても、こゝろごゝろとりどりにいひあへるもいとをかしければ、つくづくときゝふしたるに、三四人はなほゐつゝ物がたりをしめじめとうちしつゝ、「さてもさても何ごとかこのよにとりて第一にすてがたきふしある。おのおの心におぼされむことのたまへ」といふ人あるに「はなもみぢをもてあそび、月雪にたはるゝにつけても、この世はすてがたきものなり。なさけなきをもあるをもきらはず、心なきをもかずならぬをもわかねば、かやうの道ばかりにこそはべらめ。それにとりてゆふづく夜ほのかなるより、ありあけの心ぼそきをりもきらはず、所もわかぬものは月のひかりばかりこそ侍らめ。夏もまして秋冬など月あかき夜は、そゞろなる心もすみ、なさけなき姿もわすられて、しらぬむかしいまゆくさきもまだ見ぬこまもろこしも殘るところなく、はるかに思ひやらるゝことは、たゞこの月にむかひてのみあれ。さればわうしいうはたいあんだうを尋ね、せうしがめの月に心をすまして雲に入りけむもことわりとぞおぼえ侍る。この世にも月に心をふかくしめたるためし、昔も今もおほく侍るめり。勢至菩薩にてさへおは

しますなれば、くらきよりくらきにまよはむ玄るべきまでもとこそたのみをかけ奉るべき身にて侍れ」といふ人あり。又「かばかりひとりおはかるすゑの世まで、いかでかゝる光のとゞまりけむと、むかしのちぎりもかたじけなく思ひ玄らるゝことは、この月のひかりばかりこそ侍るを、おなじ心なるともなくてたゞひとりながむるは、いみじき月の光もいとすさまじく、見るにつけても戀しきことおはかるこそいと侘しけれ。また此の世にいかでかゝることありけむとめでたく覺ゆることは、ふみにこそ侍るなれ。まくらざうしに返す返す申して侍るめれば、事あたらしく申すにおよばねど、なはいとめでたきものなり。はるかなる世界にかきはなれて、いくとせ逢ひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれば、たゞ今さしむかひたる心ちして、なかなかうちむかひては思ふほどもつゞけやらぬ心の色もあらはし、いはまほしきことをもこまごまと書きつくしたるを見る心はめづらしく嬉しく、あひむかひたるにおとりてやはある。つれづれなるをり、昔の人のふみ見いでたるはたゞそのをりのこゝちして、いみじくうれしくこそおぼゆれ。ましてなき人などのかきたる物など見るはいみじく哀に年月のおはくつもりたるも、たゞいま筆うちぬらしてかきたるやうなるこそかへすがへすめでたけれ。たゞさしむかひたる程のなさけばかりにてこそはべれ。これは昔ながら露かはることなきもめでたき事なり。いみじかりける延喜天暦の御ときのふることも、もろこし天竺の玄らぬ事も、此の文字といふものなからましかば、今の世の我らがかたはしもいかでか書き傳へましなど思ふにも、なはかばかりめでたきことはよも侍らじ」といへば、また「何

のすぢと定めていみじといふべきにもあらず。あだにはかなきことにいひならはしてあれど、夢こそあはれにいみじくおぼゆれ。はるかに跡たえにしなかなれど、夢にはせきもりも強からで、もとこし道もたちかへること多かり。昔の人もありしながらのおもかげをさだかに見ることはたゞ此の道ばかり侍り。上東門院の、今はなきねの夢ならでとよませ給へるも、いとこそ哀に侍れ」などいふ人あり。また「あまたよにとりていみじきことなど申すべきにはあらねど、涙こそいとあはれなる物にて侍れ。なさけなきもの丶ふのやはらぐことも侍り。いろならぬ心のうちあらはすもの涙に侍り。いみじくまめだちあはれなるよしをすれば、すこしも思はぬことにはかりにもこぼれず。ことにはかなきことなれどうち涙ぐみなどするは心にしみて思ふらむ程おしはかられて、あはれに心ふかくこそ思ひしられ侍れ。亭子のみかどの御使にて、きんたゞの弁の、なくを見るこそあはれなりけれとよみけむ、ことわりにぞ侍るや」といふ人あれば、また「ことに新しく申すべきにはあらねど、此の世にいりて第一にめでたくおぼゆることは、あみだ佛こそおはしませ。念佛の功徳のやうなどはじめて申すべきならず。南無あみだ佛と申すはかへすがへすめでたくおぼえ侍るなり。人のうらめしきにも世の業の侘しきにも、もの丶うらやましきにもめでたきにも、たゞいかなる方につけても、したひて心にしみてもの丶おぼゆる慰めにも、なむあみだ佛とだに申しつれば、いかなることもこそ、とくきえうせてなぐさむ心ちすることにて侍れ。人はいかゞおぼさるらむ、身にとりてはかくおぼえ侍れば、人のうへにもたゞ南無阿彌陀佛と申す人は おもふならむ

と、心にく〳〵、おくゆかしく、哀にいみじくこそ侍れ。左衞門督公光ときこえし人、本みなれたる宮づかへ人の、こと心などつかひけると聞きてのち、たまたま行きあひて今はそのすぢのことなどつゆかけず、おほかたよの物語、うちわたりのことばかり、ことずくなにて、南無あみだ佛南無あみだ佛といはれて侍りけるこそ、きしかた行く先のことはいはむよりもはづかしく、あせも流れていみじかりしかと語る人侍りしか。まして後の世のためいかばかり功德のなかに何ごとをかおろかなると申すなかに、おもへどおもへどめでたく覺えさせ給ふは、法華經こそおはしませ。いかにおもしろくめでたきものがたりといへど、二三べんも見つればうるさきものなるを、これは千部を千部ながらきくたびにめづらしく、文字ごとに始めてきゝつけたらむことのやうにおぼゆるこそあさましくめでたけれ。無二無三とおほせられたるのみならず、法華最第一とあめれば、こと新しくかやうに申すべきにはあらねど、さこそは昔よりいひつたへたることも必さしもおぼえぬことも侍るを、これはたまたまうまれあひたる思ひいでにたゞあひ奉りたるばかりとこそ思ふに、など源氏とてさばかりめでたきものに、此の經のもじの一偈一句おはせざるらむ。なにごとかつくり殘しかきもらしたることひとことも侍る。これのみなむ第一のなんとおぼゆる」といふなれば、あるがなかにわかきこゑにて「むらさき式部が法華經をよみ奉らざりけるにや」といふなれば、「いざや、それにつけても いと口をしくこそあれ。あやしの我がうたに、後のよのためはさるものにて、人のうちきかむもなさけおくれて覺えぬべきわざなれば、あながちにしても見奉らまほ

しくこそあるに、さばかりなりけむ人、いかでかさることあらむ」などいへば、又「さるはいみじく道心あり、後世のおそれを思ひて朝夕おこなひをのみ志つゝ、なべて世には心もとまらぬさまなりける人にやとこそ見えためれ」などいひはじめて「さても此の源氏つくりいでたることこそ、おもへどおもへどこのよ一つならずめづらかにおもほゆれ。誠に佛に申しこひたりける志るしにやとこそおぼゆれ。それより後のものがたりは、おもへばやすかりぬべきものなり。かれをさいかくにてつくらむに、源氏にまさりたらむことを作り出す人ありなむ。わづかにうつぼ、たけとり、すみよしなどばかりを物語とて見けむこゝち、さばかりに作りいでけむ凡夫の志わざともおぼえぬことなり」などいへば、またありつる若きこゑにて、「いまだ見侍らぬこそくちをしけれ。それをかたらせ給へかし。きゝ侍らむ」といへば、「さばかりおほかるものを、そらにはいかゞ語りきこえむ。本を見てこそいひきかせ奉らめ」といへば、「たゞまづこよひ仰せられよ」とゆかしげに思ひたれば、げにかやうのよひつれづれ慰めぬべきわざなどくちぐちいひて「まきまきのなかにいづれがすぐれて心に志みてめでたく覺ゆる」といへば、「きりつぼにすぎたる卷やは侍るべき。いづれの御ときにかとうちはじめたるより、源氏はつもとゆひのほどまで、ことばつゞき有りさまを始め、あはれにかなしきこと此の卷にこもりて侍るぞかし。はゝきゞのあまよの品さだめ、いと見どころおほく侍るめる。夕がほ、ひとすぢにあはれに心ぐるしき卷にて侍るめり。紅葉の賀、花の宴、とりどりえんにおもしろし。えもいはぬまきまきに侍るべし。葵、いとあはれにおもしろき卷なり。

榊　伊勢の御出立のほどもえんにいみじ。院かくれさせ給ひて後、ふぢつぼの宮さまかへ給ふ程などあはれなり。須磨、あはれにいみじき巻なり。京を出で給ふほどのことゞも、たびのすまひのほどいとあはれにこそ侍れ。あかしは、浦より浦にうらづたひ給ふほど、又浦をはなれて京へおもむき給ふほど、

都出でし春のなげきにおとらめや年ふる浦をわかれぬる秋

などあるほどに、みやこを出で給ひしはいかにもかくてやむべきことならねば、またたちかへるべきものとおぼされけむに、おぼしなぐさみたまひけむ、此の浦はまたはなにしにかはと、限りにおぼしとぢめけむほど、ものごとに目とまり給ひけむ、ことわりなりかし。よもぎふ、いとえんある巻にて侍る。あさがほ、紫のうへのもの思へるがいとほしきなり。十七の並びのなかにはつね、小蝶などはおもしろくめでたし。野わきのあしたこそさまざま見所ありて、えんにをかしきことおほかれ。藤のうら葉、いと心ゆきうれしき巻なり。わかなの上下ともにうるさきことゞもあれど、いとおほく見所ある巻なり。柏木の右衛門督のうせ、いとあはれなり。御法、幻いとあはれなることばかりなり。宇治のゆかりはこしまにやうかはりて、ことづかひもなに事もあれど、姉宮のうせをはじめ、中の君などいといと」などくちぐちにいへば、此の若きひと「めでたき女はたれたれか侍る」といへば、「きりつぼのかうい、ーーの宮、あふひのうへのあれから心をもちゐ、むらさきのうへさらなり、あかしも心にくゝいみじといふなり。またいみじき女はおぼろ月夜の内侍のかみ、源氏ながされ給ふもこのひと

のゆゑと思へば、いみじきなり。いかなるかたにおつる涙にかなど、みかどの仰せられたるほどなどもいといみじ。あさがほの宮、さばかり心づよき人なめり。世にさしもおもひとめられながら、心づよくてやみ給へるほど、いみじくこそおぼゆれ。空蟬もそのかたはむげに人わろき、後にあますがたにてまじらひゐたる、また心づきなし」などいへば、「空蟬は、源氏にはまことにうちとけずうちとけたりと、とりどりに人の申すはいかなることにか」といふ人あれば、「はゝきゞにいふ、なにとてうちとけざりけりとは見えて侍るものを、あしくこゝろえてさ申す人々も、ときどき侍るなめりといふ。うちのあね宮こそかへすがへすいみじけれ。六條のみやす所の中將こそみやづかへびとのなかにいみじけれ。このもしき人は花ちる里、なにばかりまほならぬかたちありさまながらめでたき人々にたちまじりて、をさをさおとらぬよのおぼえにて、まめ人の大將子にゑなどせられたるが、このもしういみじきなり」といへば、また「まめ人をばやしなひ君にして侍らむ。さばかりめでたかりしあふひのうへの御はらのきみも、など人わろきのちのおやをばまうけ給ふべき」とていとはらだゝしげなめれば、たれもうち笑ひぬ。また「すゑつむはな、このもしといふとて、にくみあはせ給へど、大貳のさそふにも心づよくなびかでゑにかへり、昔ながらのすまひあらためず、終にまちつけてふかき蓬のもとの心をとて、わけいり給ふを見る程は誰よりもめでたくぞおぼゆる。みめよりはじめて、なにごともなのめならむ人のためには、さばかりの事のいみじかるべきにも侍らず。其の人がらには佛にならむよりも有りがたきすくせには侍らずや。六條のみやす

所は、あまりにもの丶けに出でらる丶こそおそろしけれど、ひとざまいみじく心にく丶このもしく侍るなり。御子の中宮も我から心もちゐなど、いみじく心にくき人のなかにも、ませ聞えつべきかなどやらむとねましきは、源氏のおとゞの、あまりにもてなし給ふが心づきなかるべし。玉かつらの姫君こそこのもしき人とも聞えつべけれ。みめかたちをはじめ、人ざま心ばへなどいとおもふやうによき人にておはするうへに、よにとりてとりどりにおはする。おとゞたちふたりながら左右におやにて、いづれもおろかならずかずまへられたる程、いとあらまほしきを、その身にてはたゞ内侍のかみにて冷泉院などにおぼし時めかされ、さらずばとしごろ心ふかくおぼしわたる兵部卿宮のきたの方などにてもあらばよかりぬべきを、いと心づきなきひげくろの大將の北の方になりて、すきまもなくまもりいさめられて、さばかりめでたかりし後のおやも、見奉ることは絶えて過すほどに、いといぶせく心やましき。又ものはかりしゆふがほの、ゆかりともなくあまりにはこりがにさがさがしくて、このよにか丶るおやの心はなどいへるぞあの人の御さまにはふさはしからずおぼゆる。又つくしくだりもあまり志なくだりておぼゆる。されど大かたの人ざまはこのもしき人なり。いとはしき人、むらさきのうへかぎりなくかたひしくいとほしく、あたりの人の心ばへもいとにくき。ち丶宮をはじめ、おほぢのそうにいたるまで、思はしからぬ人々なり。ま丶は丶などの心ばへさるべきなかなれど、さばかりになりぬる人のために、いとさしもやはあるべき。夕がほこそいといとほしけれ。は丶にもにずいみじげなるむすめもちたるぞ、その身のあり

さまにはさらでもありぬべき。かやうならむ人は、たゞあとかたもなくやみなむこそいますこししのび所もあらめ。まめ人の大將の北の方、ふぢのうら葉のきみ、むげにえん有るさまなんどぞ見えざめれど、何となくをさなくよりいとはしき人に思ひそめてし人なり。うぢの中の宮こそいといとほしけれ。はじめはいとさしも覺えざりしかど、兵部卿の宮まめ人のむこになりて、ものおもはしげなるがいとほしきなり。ましてかばかりにてやかけはなれなむなどいへるは、見るたびに涙とゞまらずこそおぼゆれ。女三の宮こそいとほしき人ともいひつべけれど、袖ぬらせとやひぐらしのとよみて、月まちてもといふなるものをなどあるほどは、いと心ぐるしきを、あまりにいふかひなきものから、さすがにいろめかしきところいおはするが、心づきなきなり。かやうの人はひとすぢにこめかしくおほどきたればこそらうたけれ。あさましきふみおとゞに見ゆることも、その御心のしわざぞかし。さることありとおぼすらむには、とゞまらむをだに、しひてそゝのかしいだしてむとぞおぼさるべきを、さかしらに心ぐるしげなることゞもいひとゞめて、さる大事をばひきいだし給へるぞかし。てならひのきみこそにくきものともいひつべき人。さまざま身をひとかたならず思ひみだれて、

　　鐘の音の絶ゆるひゞきにねをそへて我が世つきぬと君に傳へよ

とよみて身をすてたるこそいとほしけれ。兵部卿の宮の御ことゝつけて、かをる大將、

　　浪越ゆるころとも知らず末の松まつらむとのみおもひけるかな

とのたまへるを、ところたがへならむとて、むすびながら返したるほどこそ心まさりすれ」。

またれいの人、「をとこの中にはたれたれか侍る」といへば、「源氏のおとゞの御事はよしあしなどさだめむも、いとあたらしくかたはらいたきことなれば、中すにおよばねども、さらでもとおぼゆるふしぶしおほくぞ侍る。おほうち山のおとゞ、わかくよりかたみにへだてなくて、なれむつびかはしてあまよの御ものがたりをはじめ、

もろともに大うち山はいでつれど行くかた見せぬいざよひの月

といへる。又源内侍のすけのもとにてたちぬきておどしきこえしやうのことは、いひつくすべくもなし。何ごとよりもさばかりわづらはしかりしよのさわぎにもさはらず、須磨の御たびずみのほど尋ねまゐりたまへりし心ふかさは、よゝをふともわするべくやはあると、それ思ひえらすよしなきとりむすめして、かのおとゞの女御といどみきしろはせ給ふ、いと心うき御心なり。えあはせのをり、須磨の繪ふたまきとりいでゝ、かの女御まけになし給へるなど返す返す口をしき御心なり。また須磨へおはするほど、さばかり心ぐるしげにおもひいり給へるむらさきのうへもぐしきこえず、せめて心すまして一すぢに行ひつとめ給ふべきかとおもふほどに、あかしの入道がむこになりてひぐらしびはの法師とむかひゐて、琴ひきすましておはするほど、むげにおもひ所なし。またさまざまなりし御ことえづまりて、いまはさるかたにさだまりはて給ふかとおもふよのすえにたちかへりて、女三の宮まうけてわかやぎ給ふだにつきなきに、衛門督のこと見あらはして、さばかりおぢはゞかりまうでぬものを、えひてめしいでゝとかくいひまさぐり、はてにはにらみころし給へるほどむげにけしか

らぬ御心なりかし。すべてかやうのかたに、つじやかなる御心のおくれ給へりけるとぞおぼゆる。兵部卿の宮、さして其のことのよしあしなどは覺えぬ人の、源氏のおとゞの御はらからいと多かる中に、とりわき御中よくて、なにごともまづきこえあはせ給ふ、いとこゝろにくきなり。玉かつらの御事えしえたまはぬむげに心おくれたり。大内山のおとゞいとよきひとなり。まして須磨へたづねおはしたるほどなどかへすがへすめでたしっまめ人をいたくわびさせたるこそうらめしけれど、そもことわりなりや。なごりなく思ひよわりてゆるす程などはいとよくこそせられためれ。まめ人の大將、若き人ともなくあまりにうるはしだちたるはさうざうしけれども、つじやかなるかたちはおとゞにもまさり給へり。さまざまきこゆる事どもにもなびかで、藤のうら葉のうらとけたまふを、心ながくまちつけ給へるほどありがたし。女だにさることはいかでかはとぞおぼゆる。さていとおもふやうにすみはてたまひにたる世の末になりてよしなきおちばのみやまうけて、まめ人のなをあらためさまかはり給ふぞおもはずなるや。かしはぎのゑもんのかみはじめよりいとよき人なり。いはもる中將などいはれしほどより藤のうら葉のうらとけしほどなども、いとをかしかりし人の、女三の宮の御事、さしも命にかふばかり思ひ入りけむぞもどかしき。もろともに見たてまつり給へりしかど、まめ人はいでやと心おとりしてこそ思へりしに、さしもこゝろにしめけむぞいと心おとりする。紫のうへはづかに見て、のわきのあしたながめいりけむまめびとこそいといみじけれ。かせのほどいと哀にいとほしけれど、そもあまり身のほどおもひくんじ、人わろげ

なるぞさしもあるべきかとおぼゆる。そのおとゞのこうばいの大納言といふ人、ゐんふたきのをりたかさごうたひしよりはじめ、弁少將などいひて、藤のうらはにてあしがきうたひし程なども、いといたかりし人の、源氏などうせ給ひてすゑの世にとりなきしまのかはほりとかやして、かをる大將のみかどの御むこになるをそねみて、つぶやきなどしありくほどこそ心づきなけれ。にほふ兵部卿宮、わかき人のたはれたるはさのみこそといふなるに、けしからぬほどに色めきすき給ふさまこそふさはしからね。紫の上のとりわき給へりしゆゑ、二條院にすみ給ふこそいとあはれなれ。かをる大將、はじめよりをはりまでさらでもと思ふふしひとつ見えず、かへすがへすめでたき人なんめり。まことに光源氏の御子にてあらむだに、はゝみやのものはかなきを思ふにはあるべくもあらず。紫の御はらなどならばさもありなむ。すべてものがたりの中にも、ましてうつゝの中にも、むかしも今もかばかりの人はありがたくこそ」などいへば、又ひと、「さはあれどけぢかくまめまめしげなるかたはおくれたる人にや。うきふねのきみ、すもりの中の君などの、兵部卿宮にはおもひおとし侍るこそくちをしけれ」といふなれば、又、「そは大將のとがにはあらず、女のせめていろなる心のさまよからぬゆゑにぞ侍る。すもりの君は心にくき人のさまなれば、にほふさくらにかをる梅と、こよなくたちまさりてこそ侍るめれ」などいへば、又れいの人、「人々のありさまはおろおろきゝて侍りぬ。あはれにもめでたくも、心にしみておぼえさせ給ふふしぶしおほせられよ」といへば、「いとうるさきよくぶかさかな」なんどわらふわらふ、「哀なることは桐壺のか

ういのうせのほど、みかどのなげかせ給ふほどのこと、長恨歌の女もおもひしかぎりあれば
ふでおよばざりけむ。をばなの風になびきたるよりもなよびかに、なでしこのつゆにぬれた
るよりもらうたくなつかしかりし御さまは、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。

　尋ね行くまぼろしもがな傳へにても玉の有りかをそこと志るべく

とてともしびをかゝげつくして、ねぶることなくながめおはしますなどあるに、なにごとも
殘りの六十卷はみなおしはかられ侍りぬ。また夕がほのうせのほどのことも、空にうちくも
りて風ひやゝかなるに、いたくながめて、

　見し人のけぶりを雲とながむれば夕の空もむつまじきかな

とよみてまさにながき夜などうちずし給ふところ、あふひの上のうせのほどの　こともあは
れなり。御わざの夜ちゝおとゞのやみにまよひ給へるなど、ことわりにあはれなり。にばめ
る御ぞをたてまつりかふとて、われさきだゝましかば、ふかくそめ給はましなどおぼして、

　かぎりあればうすずみ衣淺けれどなみだぞ袖をふちとなしける

とよみにまふ所、又風あらゝかに吹き、志ぐれうち志けるほどに、涙もあらそふ心ちして、雨
となり雲とやなりにけむ、いまは志らずとひとりごちたまふに、頭中將參りて、

　みし人の雨となりにし雲ゐさへいとゞ時雨にかきくらすかな

とあるところ、またらうたく志給ふわらはの、かざみの志やうぞくなべてよりもこくて、い
みじくくんじ志めりてさふらふを、いとあはれにおぼしてとりわきらうたく志給ひしかば、

われをさなむおもふべきと慰め給へば、いみじく泣きて御前にさぶらふ所など、いとあはれなり。また御いみはて丶きみもいで給ひ、ひでろさぶらひつる女ばうども、おのおのあからさまになどとて、おのがじ丶わかれをしむところ、いたくあはれなり。またかきたまへる御手ならひども、おとゞ見てなき給ひなどするも、すべてあはれなるなり。須磨のわかれのほどのことも、あふひのうへのふるさとにまかり申しにおはして、

鳥べ山もえし煙にまがふやとあまの衣はやくうらみにぞゆく

とある所、またきやうだいに御びんかき給ふとて見給へば、いとおもやせたるかげの、われながらきよらなるもあはれにおぼえて、此のかげのやうにやせ侍るとて、

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡のかげはなれじ

ときこえ給へば、むらさきのうへ涙をひとめうけて見おこせて、

別るともかげだにとまるものならばかゞみをみてもなぐさみなまし

とある所、また賀茂の衣もの御やしろのほどにて、神にまかり申し給ふとて、

うき世をば今ぞ別る丶とゞむらむ名をばたゞすの神にまかせて

とある所、またいでたまふあかつき、むらさきのうへ、

をしからぬ命にかへてめのまへの別れを衣ばしとゞめて衣がな

とのたまへるこそいと人わろけれ。なにのひとかずなるまじきはなちるさとだに、

月かげのやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを

とこそきこえたまふめれ。またうらにおはしつきて、なぎさによるなみのかへるを見たまひて、うらやましとうちずんじて、ながむる空はおなじ雲ゐになどわる所、また心づくしの秋風にうみは少しとほけれど、ゆきひらのそちのせきこゆると、浦なみいと近くきこえて、

戀ひわびてなくねにまがふ浦なみはおもふかたより風やふくらむ

とよみ給ふ。八月十五夜の殿上のあそびこひしくて、ところどころながめ給ひし昔をおもひやり給ふにも、月のかほのみまぼられて、二千里の外古人の心とずんじたまへる所、また南殿のさくらはさかりになりぬらむかし。ひとゝせの花のえんに、院のうへの御けしき、うちのうへなど思ひいでたまひて、

いつとなく大宮人の戀しきにさくらかざしゝけふはきにけり

とよみ給ふところ、またおほうちやまのおはして、かたみになごりをしみ、うたよみふみつくりかはし給ふほどのことゞもなど、おかしにて二條院へつねよりも御ふみこまやかにて、

玄はしほとまづぞながるゝかりそめにみるめはあまのすさみなれども

とある御返り事に、

うらなくもたのみけるかなちぎりしを松より浪はこえじものぞと

とあるこそいとあはれなれ。又かしは木の右衛門督のうせのほどの事どもこそあはれに侍れ。女二の宮にふみたてまつるとて、手もわなゝけば、おもふこともみなかきさして、

今はとてもえむ煙もむすぼゝれ絶えぬおもひのなほやのこらむ

とよみて、あはれとだにのたまはせよ、心のどめて人やりならぬやみにまどはむ道の、ひかりにも志侍らむとある御かへりに、

たちそひて消えやしなましうきことをおもひみだるゝ煙くらべに

とて、おくるべくやはあるゝ、女宮ぞにくき。又ちゝおとゞのさまざまのことゞものたまひつゞけて、空をあふぎてながめ給ふに、ゆふべのくものけしきにび色にかすみて、はなちりたるこずゑども、けふぞめとまりたまふ。

木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの衣きたる春かな

とある所、いとあはれなり。紫のうへのうせのほどのことゞも申すもおろかなり。なくなりはてゝふしたまへるを、まめ人のはのかに見て、

いにしへの秋のゆふべの戀しきにいまはと見えしあけくれのゆめ。

野分のまぎれに見たてまつりたまへりしことをおぼし出でたるなるべし。まぼろしに女房のこゑにて、いみじくつもりたる雪かなといふをきゝたまふにも、かの心ぐるしかりしゆきのよのこと、たゞ今の心ちして、くやしくかなしきにも、

うき世には雪きえなむとおもへども思ひのほかにわれぞほどふる

とよみたまふところ、又御志つらひなどもおのづからさびしくことそぎて、みえわたさるゝも心ぼそくて、

いまはとてあらしやはてむなき人の心とゞめし春のかきねを

とある所、又御ふみどもやりたまひて、經にすかすとて、

かきつめて見るもかなしきもしは草おなじ雲ゐの煙とをなれ

とある所も、すべてまぼろしはさながらあはれにはべり。また宇治のわかみやのうせこそあはれに悲しけれな。かをる大將、かぎりあれば我が御ぞのいろはかはらぬに、かの御かたの心よせわきたりし人々、いと黑うきかへたるを見て、

紅に落つるなみだのかひなきはかたみの色をそめぬなりけり。

むかひの寺のかねのこゑ、枕をそばだてゝ、けふもくれぬとあはれにおぼしつゞけて、いきいでゝものしたまはましかばなどある所、またやり水のほとりの岩にしりかけて、とみにもたちたまはで、

絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかげをだにとゞめざりけむ

とのたまふこそいみじくあはれにうらやましけれ。かゝる人もちてこそしなむ命もいみじからめとおぼゆ。またいみじきこと、六條わたりの御しのびありきの、曉いでたまふみおくりきこえに、中將の君まゐるを、すみの間のかうらんのもとに、しばしひきすゑたまひて、

咲くはなにうつるてふ名はつゝめどもをらで過ぎうきけさの朝がほ。

いかゞはすべきとて、手をとらへたまへるに、

あさぎりの晴れまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る。

おほけごとに聞えなしたるほど、いみじく覺ゆ。又忍びてかよひ給ふ所のかどのまへをわた

るとて、こゝある隨身して、

朝ぼらけきりたつ空のまよひにも過ぎうかりける妹がかどかな

とふたこゑばかりうたはせ給へるに、よしある志もづかへをいだして、

たちとまりきりのまがきの過ぎうくば草の戸ざしにさはりしもせじ。

また花のえんこそいみじけれ。おぼろ月夜に志くものぞなきなどいふよりうちはじめて、そのほどのことゞもいといみじきに、また院のみかど山にこもらせ給ひてのち、なほたちかへり、いとめづらしきに、心あわわたゞしくて、

沈みしもわすれぬものをこりずまに身もなげつべき宿のふぢなみ

などあるもいといみじくおぼゆ。又齋宮の御くだりのほどぞなにとなく神さびいみじけれ。

曉のわかれはいつも露けきをこは世に志らぬあきの空かな、

松むしのなきかはしたる、をり志りがほなりなどあるほども、又伊勢までたれかなどあるもいみじ。また流され給ふほどの事どもかへすがへすいみじけれども、さきにおろおろ申し侍りぬれば、またひだちの宮の御もとをとはり給ふとて、見しこゝちするでたちかなとおぼしいでゝ、御車よりおり給ふに、これみつ、さきにわけさせ給ひぬよもぎの露けく侍るときこゆるに、おぼしわびて、

尋ねてもわれこそとはめ道もなくふかきよもぎのもとの心を

とてなほいり給へば、これみつさきに立ちて、よもぎの露うちはらひていれ奉るほど、申し

ても申してもいみじともおろかなり。源氏、のわきのあした、まめ人の大將御かたがたのありさま見ありきたるこそいみじけれ。なかにも中宮の御方いとをかし。姫君の御かたにて御すゞりかみなどこひいでゝ、ふみかき給ふほどもいといみじ。御すゞりとりおろしてかき給ふほどこそ人わろけれど、さまでわるべきことかはとおぼす。御こゝろたけかりけむ、

颪さわぎむら雲まよふ夕にもわするゝまなくわすられぬ君

とてかるかやにつけてうちさゝめきてやり給ふなどもいみじ。うちのゆかりにも、いみじき所々おほく侍れど、さのみはうるさし。いとはしきこと、すまの御いでたちの程の紫のうへ、をとめの卷に六位すくせをはしたなめられて、雲ゐのかりもわがごとやひとりでち給ふを、まめ人たちきゝて侍從のきみや候ふ、これわけたまへとあるほどこそいとはしけれ。わかなにて、紫のうへかたしく袖も志みこほり、ふしわづらひ給へる、曉おはしてたゝき給ふに、そらね志て人わけぬをりのこと、うぢの中の宮、かをる大將をはじめて、

いたづらにわけつる道の露志げみむかしおぼゆる秋の空かな

といひやるあしたに、兵部卿宮わたり給ひて、御にほひのしめるをとがめ給ひて、ともかくもいらへぬさへ心やましくて、

また人もなれける袖のうつりがを我が身に志めて恨みつるかな

とのたまへば、女君、

見なれぬる中の衣とたのめしをかばりにてやかけはなれなむ

とてうちなきたるほどこそかへすがへすいとほしけれ。心やましきこと、むらさきのうへすまへぐせられぬことだにあるに、あかしのきみまうけて、とはずがたりしおこすること、うらよりをちにこぐ舟のいとはれて、文のうはづゝみばかりみせたること、須磨の給ふたまき日ごろかくして、ゑあはせのをりとりいだしたる事、

ひとりゐてながめしよりはあまのすむ方をかくてぞみるべかりける

とておぼつかなさは恨みなましものをなどある所よ。これはいとほしきことにもいれつべし。女三のみやまうけて、紫の上にもの思はせたること、正月一日のひ御かたがたへまゐりありきて、いつしか御さわがれもやとはゞかりながら、あかしの御かたにとまりたること、おほうち山のおとゞも、源氏院との御なか心よからずなりたること、玉かづらのきみの、ひげくろの大將のきたのかたになりたること、ゆふぎり、みやす所うせ給はむとてのをり、

女郎花しをるゝのべをいづことて一夜ばかりの宿をかりけむ

とかきたるふみ、六位すくせのうへとりかくしていつしかかへりごといはせぬこと、まめ人の大將おちばの宮むかへて、もとのうへならべもちたることとあさましきこと、ゆふがほのこだまにとられたること、おぼろ月夜のないしのもとに、源氏のゆふだちのよふかして、父おとゞにみつけられたること、女三の宮のゑもんのかみのふみ源氏に見えたること、てならひの君のうせたること、ひたぶるに身をなげたらば、よしやものにとられて、はつせまうでのひとに見つけられたるほどこそいとむくつけなどいひて、ほんにむかひてこそいみじきこ

ともあはれなることも覺ゆれ。そらにはいと聞えにくゝこそ侍れ。いまのどかに讀みてきかせ奉らむ。これはたゞかたはしばかりなれば、いとなかなかにおぼされぬべし」などいふなれば、又「ものがたりのなかに、いみじともにくしともおぼされむことおほせられよ」といへば、「そもそらにはなどはゞかりながら、さごろもこそ源氏につぎてはようおぼえ侍れ。少年の春はとうちはじめたるより、ことばづかひ何となくえんに、いみじく上ずめかしくなどあれど、さしてそのふしととりたてゝ、心に志むばかりのところなどはいと見えず。またさらでもありなむと覺ゆることもいとおほかり。一品の宮御心もちゐ有りさま、あいぎやうなくぞあれど、いとあてやかによき人なり。ものがたりにかやうなる人のあるは、いふかひなくはれざらねばおこなひなどこそ志たるめるに、これはいとよし。女二の宮の尼になりしこそ又いとうれしけれ。一品の宮の御ことといできてのち、

　思ひきやむぐらの門を行きすぎて草のまくらにたびねせむとは

ときこえたるに、

　ふるさとは淺茅がはらになりはてゝ蟲の音志げき秋にぞあらまし、

今こそうれしくと院のおほせられたるもいみじ。大宮のうせ、いとあはれなり。誰かはさやうのこと心うくおもはぬ人はあるべきといふなかに、たちまちに哀にかうばかりおぼしいりけむ、いとあはれなることなり。

　雲ゐまでおひのぼらなむたねまきし人も尋ねぬ峰のわか松

とよみたまへるこそいとかなしけれ。女二の宮をばしもおぼしのどめず。おぼし捨て給ひけむこともことわりなり。源氏の宮こそいといみじげなる人の、いとかたひかしくなどもなけれ。すこしものなど思へるこそ人は心ぐるしきふしにてあれ。みちをばいとあはれなり。あすはふちせにといふより、

天の戸をやすらひにこそ出でしかど夕つげ鳥よとはゞこたへよ

などいふほども、

早きせのそこのみくづとなりにきと扇の風の吹きもつたへよ

などあるも、またときはにての手ならひどもなどもいみじくあはれに、さばかりの人にさはどに思ひとめられけむほど、めでたきを見いでられたるはじめいりのしとのりくしたるはど、いと心うくうとましきを、またのちのふるまひさへこそ、心よりほかのことゝいひながら、人しもこそあれ、此の君の御もとなる人にしもとりもちていかれたる程は、あはれもさめて口をしき人のすぐせなり。さりとならば又をばしの命だにありて、心ざしのほどをも見はてよかし。かたがたいと口をしきちぎりなりかし。さらでもありぬべきことゞも、大將のふえの音めでゝ、天人の天くだりたること、こかはにて普賢のあらはれ給へる、源氏の宮の御もと賀茂大明神の御けさうぶみつかはしたること、ゆめはさのみこそといふなるに、あまりにけんてうなり。齋院の御かうとのなりたること、なにごとよりもなにごとよりも、大將のみかどになられたること、かへすがへす見苦しくあさましきことなり。めでたきざえかく

すぐれたるひと世にあれど、天地六反震動することやはあるべき。いとおそろしくまことしからぬことゞもなり。源氏の院になりたるだに、さらでもありぬべきことぞかし。されどもそれはたゞしきみこにておはするうへに、冷泉院のくらゐの御時、我が御身の有りさまをきゝあらはして、ところおき奉り給ふにてあれば、さまでのとがにはあるべきにもあらず。太上天皇になずらふ御くらゐは、たゞ人もたまはるれいもあるを、これは今すこしくろしてまねびなされたるほどに、いとみぐるしきなり。さりとて帝の御子にてもなし。そんわうにてちゝおとゞの世よりしやうたまはりたる人の、いとあさましきことなり。なにのいたりなき女のしわざといひながら、むげに心おとりこそし侍れ。おとゞさへ院になりて堀川院と申すかとよな。ものがたりといふもののいづれもまことしからずといふなかに、これはことの外なることゞもにこそあんめれ。ねざめこそとりたてゝいみじきふしもなし。又さしてめでたしといふべき心なけれども、はじめよりたゞ人ひとりごとにて、さる心もなく、しめじめとあはれに心いりてつくりいでけむほどおもひやられて、あはれにありがたきものにて侍れば、いづくかすこしむねのひまある。心づくしなるといふなかに、身にしみて覺ゆるふしぶしはたちまちにあらずと見なしたる、心さわぎたるあさましきに、

こぎかへりおなじ湊による舟のなぎさをそれとしらずやありけむ

といひいでたるを聞きつけたまへる心のうち、又ことゞもあらはれて、中のうへひろさはへおはするほど、

立ちもゐもはねをならべしむら鳥のかゝるわかれを思ひかけきや

などあるをり、雪の夜ひろさはにおはして、むなしくたちかへり給ふを、心ぐるしく見わびて、少將、

めぐり逢はむをりをもまたず限とや思ひはるべき冬の夜の月

となぐさめきこゆれば、

今宵だにかけはなれたる月を見て又やは逢はむめぐり逢ふ夜を

宮中將も心深くたづねきにけるを、おもふ心わらむかしとあやめ給ふ所、又おい關白のもとへわたらせ給ふほど近くなりて、わりなくたいめん志給ふほどのことゞも、ひめぎみの御ことゞもきこえ給へるに、いとゞつゝましげなるかほひき入れて、おなつきたるほどなるこそいとほしけれ。さてのみわるべきならで、出で給ふわかつきのことゞもなど、又關白殿へわたらせ給ひてのち、あやにくなる御きそくにてなぐさめわび、おとゞひろさはにおはして愛へ給へる。入道もいとものしとおぼして、宰相中將御つかひにてさいなみおこせたまへるを、かしらもたげてつくづくときゝても、いふべきかたもなきまゝに、いとはかなげにつゞきもなくまぎらはして、袖にかほおしあてゝゐたまへるこそいとほしけれ。大將、女一の宮へまゐり給ふをり、あねうへ、

絶えぬべきちぎりにかへてをしからぬ命をけふに限りてしがな

とてとゞめもあへぬ涙のけしきなどこそいとほしけれ。右衛門督たづねおはして、

さめがたき常に常なき世なれども又いとかゝるゆめをこそみね

とのたまふ。かへし、まさこ、

かけてだに思はざりきやはどもなくかゝるゆめぢにまよふべしとは

などあるほど、また右衛門督法師になるときゝて、まさこ、

これはうき夢をさますといひながらなほもうつゝの心ちこそせぬかね

とあるこそいとあはれなれ。なにごとよりもいみじきことは、まさこと女三の宮との御あはひとこそ。院のかんだうにていとはしたなきをり、中納言のきみにあひて、

吹きはらふ嵐にわびて淺ぢふにつゆのこらじと君につたへよ

とのたまへば、中納言の君、

わらし吹く淺ぢがすゑにおく露のきえかへりてもいつかわすれむ

などいふほどのことまで、ことゞともなほりてかへりあひたてまつりて、

ながらふる命をなどていとひけむかたる夕もあればありけり

ときこゆれば、

消えのこる身もつきもせず恨めしきわらば又うきをりもこそあれ

とのたまふほどなど、かへすがへすもめでたくいとほし。女一の宮の御心もちゐありさまこそめでたけれ。なからひもみだりがはしき身の契こそいみじく口をしけれ。心もちゐいとよし。さばかりちぎり深く、かたみにおもひかはしながら、あねうへにはゞかりて、心よりほか

なることこそあらめ、一くだりのかへりごともわれとはせじと思ひかためるほどに、關白殿にわたり給ひてのち、たとしへなき人の御さまを見るにつけても忍びがたくて、をりをりの返りごともわりなくまぎらはして去たるほど、日ごろいみじくわさからずかきかはさむを、こののちしもおとたえましかば、いかにくちをしからましと、限なく思ひ去られたるもことわりなりかし。さてやうやうおとゞにもおもひなび、姉上とも中よくなりなどしてのちは、またきこえにくゝおぼしたるもさることなり。おとゞに入るものゆるしとらせたまひしほど、大將のちゝの言葉をつくして、ゐてかくしてむといられもまれ給ひしに、身をばちゞにくだき、命もたゆばかり思ひ去づみながら、心づよくなびかで我も人もひとぎゝおだしきさまにもて去づめて、やみ給ひしほどは、いみじき心しやうずとこそおぼゆれ。辨のめのと左衞門督などのものいひ給ふにて、さには本ながらへてのおとぎゝ、おねうへの御ためうしろめたき心はづかはしなど、さまでおもひのどむべくやはある」などいへば、又「すべて中のうへはいみじき心上ずとこそものすめれ。わりなくひとのまどふをりは、いみじくあやにくたち心づよく、また思ひたえむとすれば、あはれを見せむとしためるを、

かぎりとて思ひたえゆく世の中になど涙しもつきせざるらむ

といはれても、

君はさはかぎりと思ひたえぬなりひとりやものをおもひ過さむ

といづれもいとゞあはれをそへむとなるべし」などいへば、又「さしもは侍らじ。唯わが關白

をうらみ、かくふかく思ひしめたるなめり。うき世をしりそめしはじめ思ふには、かたがたちぎり淺からぬ中なれば、ことわりとはいひながら、この人のみにはあるが中に恨めしきふしある人にてこそ侍るめるを、つゆおもひしらずといふも、まだ宰相中將といふ人のあるこそいみじくめでたけれ。あにのゑもんのかみ、大將殿のふみもてきて、けふをすごさず御返事たまはらむはいかにいかにぞ。品のかずをうちはこび、かならずけふの御返事侍らずともなどいひたるこそかへすがへすうれしけれ。すべてそれならず、あはれにありがたきこと多かる人なり。にくきことゑもんのかみ辨のめのとなどのいひ、大宮の御心がまへさもすぎてうとまし。又きさいのみや春宮などいちどにたち給ふをり、中のうへゐざりいでゝ、

　　ねざめせし昔のこともわすられてけふのまどゐに心ゆくかな

といはれたる程いとにくし。また關白、われとも見ましなかのちぎりとのたまふ。大將のうへゐざりいでゝ、

　　武藏野のゆゑのみならずえだふかきこれもちぎりのあるとこそみれ

とよみたるもいとにくし。また中のうへいとにくし。ゑもんのかみのうへぞかくもいふべきと、殿のおぼしたることもはづかしき。また中のうへうせ、右衛門督は法師になりなどしてのち、ゑもんのかみのうへ、とのゝおもひ人にて、たいの君などいふなつきてきみ達うしろ見してあるだに心づきなきにうけばりて、ものゑんじなどしたるこそにくけれ。父おとゞのあるが中にかしづき、人がらもいとよかりしに、あさましくおもはずにくちをしき人のちぎ

りなり。また關白こそにくきもの丶うちにいれつべけれ。中のうへ人よりさきに見そめて、さばかりあさからぬ契のほどをさしもおもはず、たまたま行き逢ひても、それをかぎりなくうれしくめでたしと思ひもあらで、はかなきひとことにつけて、いひなやましわびしめなどする、いと心づきなし。朱雀院の御いみにこもりてあからさまにわたり給へるをり、院の御ふみの御へんじ志ひて尋ね出で丶、とかくいひまさぐるに、なごりなく昔おもひいでられたる」などいふに、また人、「かへすがへすもすてがたくおもへるも、いと人わろし」などいふに、またひと、「かへすがへすこの物語おほきなるなんは、志にかへるべきはらのあらむはさきのよのことなればいかゞはせむ。その丶ちとのにき丶つけられたるを、いとあさましなども思ひたらで、こともなのめになべてしくうち思ひて、子どもむかへてみなとするをいみじきことにして、さばかりなりにし身のはて、さちさいはひもなげにて隠れゐたるいみじくまがまがしきことなり。その丶ちまさこのことにおもひあまりて、院に御ふみたてまつりたるほどこそさすがあはれにはべれ。

たぐひなく浮身をいとひすてしまに君をも世をもそむきにしかな

ときこえたるこそいみじけれ。せめてはおとゞにかくれ忍びてだにはてたらば、ひとすぢに身をもなきになしてもやみなむ。とのもき丶つけて、あさましくめづらかになどもいとおもひたらず。なべてよにだめしあらむことのやうに、泣きみわらひみ物がたりなど志たまふほど、めづらかにあさましきかたなり」とくちぐちにいふ。「またみつのはま松こそねざめさご

ろもばかりのよの覺えはなかめれど、詞づかひありさまをはじめ、なにごともすべて物がたりを作るとならば、かくこそおもひよるべけれと覺ゆるものにて侍れ。すべてことのおもむきめづらしくうたなどもよく、中納言の心もちゐありさまなどあらまほしく、このかをる大將のたぐひになりぬべくめでたくこそあれ。ちゝ宮のもろこしの親王にうまれたるゆめみたるあかつき、宰相中將たづねきて、

ひとりしもあかさじと思ふ床の上におもひもかけぬ浪の音かな

といふよりはじめ、もろこしにいでたつことゞもいといみじ。もろこしにて八月十五日のえんに、河陽縣后のきんの音きかせむとみかどの仰せらるゝ。御いらへは申さでわざやかにゐなほりて、ゑやくと扇とをうち合せて、あなたふとうたひたるほど、后に御らんじあはせて、きさきは我が世の第一のかたちびとなり、中納言は日本にとりてすぐれたる人なむめりとごらんずるに、月日の光をならべて見る心ちしてめでたくいみじと、仰せられたる程こそまことにめでたくいみじけれ。一の大臣の五のきみこそいとあはたゞしけれ。玉のかんざしあざやかに、うちわをてまさぐりにしつゝ、おきいで見いだしたる程いとなつかしからぬを、中納言かへりなむとてわかれをしむをり、

かたみぞとくるゝ夜ごとにながめてもなぐさまめやは半なる月

とよめるいとあはれなり。中納言つくしより、

あはれいかにいづれのよにかめぐり逢ひてありし有明の月を見るべき

といへりけむ、まちみけむ心おしはかるゝもいとあはれなるを、まことにも、

　此の世にもあらぬ人こそ戀しけれ玉のかんざしなにゝかはせむ

とて、かみをそり、ころもをそめてやまふかくたえこもりにけむほど、心ふかくめでたし。大將のひめぎみ、つじやかにおくふかくなどはなけれども、

　いかにしていかにかすべきなげきわびそむけば悲しすめばうらめし、
かゝれともなでざりけむをうば玉の我がくろかみのうきすゑぞうき

とてさばかりをしげなく髮をそぎやつしけむほど、いとあはれに悲しくこそあれ。大貳のむすめこそ何となくいとほしくあはれなれ。くずの下ばのかぜのなどいふよりはじめて、

　契りしを心ひとつにわすれねばいかゞはすべき賤のをだまき

などよみてゐて、かくしてむよなどいはれて、うちうなづきたるなども、わかき女のさまで深き所なからむなどは、かやうならむぞらうたき。又よしの山のひめぎみもいといとほしき人なり。式部卿宮にぬすまれておもひあまるにや、中納言につげさせたまへといへるこそあさましくいとほしけれ。さて、

　云での山戀ひわびつゝぞかへりこし尋ねむ人を待つとせしまに

などよめるも、「又いとほし」などいへば、「げになにごとも思ふやうにめでたき物語にて侍るを、それにつけても、そのことなからましかばとおぼゆるふしぶしこそ侍れ。式部卿宮もろこしの親王にうまれたまへるをつたへきゝ、ゆめにも見て、中納言たうへわたるまではめで

たし。そのはゝ河陽縣后さへこの世の人のはゝにて、よし野のきみのあねなどにて、あまりにもろこしと日本とひとつにみだれあひたるほど、まことしからず。また中納言まめやかにもてをさめたるほど、いみじといひながら、まことの契むすびたる人のなくて、いづこにもたゞ、夜とともものまろねにてはてたるほどむげにすさまじく、河陽縣后忉利天にうまれたると、そらにつけたるほどだに、いとまことしからぬに、又かの后よしのゝ君の腹にやどりぬと、ゆめに見たるほどなどみだりがはしく、忉利天の命はいとひさしくあなるを、いつのほどにか又さることはあらむなど覺ゆるこそ口をしけれ。はじめよからぬものはいかなることもみゝにもたゝず、いみじきにつけてはかなきこともかくこそ覺えけれ」などいへば、「またたまもはいかに」といふなれば、「さして哀なることもいみじきこともなけれども、おやはありくとさいなめと、うちはじめたる程、何となくいみじげにて、おくのたかき物語にとりては、よもぎの宮こそいとあはれなる人、のちに内侍のかみになりてもとのおとゞにたいしたてられたるひろあきいでたるほどこそいとにくけれ。またむねとめでたきものにしたる人の、はじめの身のありさまもとたちこそねぢけばみうたてけれ。なにのかずなるまじききみこしは、のりのしなどだにいとくちをしき、ものがたりにとりてあるじと志たる身のありさまは、いとうたてありかし。またいははにおふるまつ人もあらじといへる女こそさるかたにてゝからぬ」などいへば、又「とりかへばやこそはつゞきもわろく、ものおそろしくおびたゞしきけしたるものゝざま、中々いとめづらしくこそ思ひよりためれ。おもはずに哀なることゞ

もぞあんめる。うたこそよけれ。四の君こそいみじけれ。あらまほしくよき人にて侍り。また内侍のかみの、をとこになりて後の人がらこそよけれ。またおくになりて、このひとびとの子どもなどおほく、わか上達部殿上人内の御もののいみにこもりて、殿上にあまたひとつどひて、物語のさたなどしたるこそあまよのしなさだめなどおもひ出でられ、いとめづらしくをかしといひつべきに、まねびそんじていとかたはらいたしともいひつべし。女中納言こそいといみじげにて、もとゞりゆるして子うみたるなど、また月ごとのやまひいときたなし。四のきみのはゝ中將の法師になりたるいとあはれなり。雪のあしたにみのきたるなどよ。女中納言のしにいりよみがへるほどこそおびたゞしくおそろしけれ。かゞみもてきて、よろづのことくらからず見たるほど、まことしからぬことどもの、いとおそろしきまでこそはべれ」といへば、又「かくれみのこそめづらしき詞。ことにとりて見どころありぬべきもの丶、あまりにさらでありぬべきことおほく、詞づかひいたくふるめかしく、うたなどのわろければにや、ひとてにいはる丶とりかへばやには殊のほかにおされて、いまはとみる人すくなきものにて侍る。あはれにもめづらしくも、さまざま見どころありぬべきことにおもひよりて、むげにさせることもなきこそくちをしけれ。今とりかへばやとて、いといたきものいまのよにいできたるやうに、今かくれみのといふものをしいだす人の侍れかし。今の世には、見どころありてしいづる人もありなむかし。むげにこのごろとなりていできたりとて、せうせう見侍りしはふるきものどもよりは、なかなか心ありてこそ見え侍りしか」などいへば、「源氏よ

りはさきのものがたりども、うつぼを始めてあまた見てはべるこそみないと見どころすくなく侍り。こだいにしふるめかしきはことわり、ことばづかひ歌などはさせることなく侍るは、萬葉集などのふぜいに見え及び侍らぬなるべしなど、唯今きこえつる今とりかへばやなどの本にまさり侍るさまよ。何ごとももののまねびは、かならずもとにはおとるわざなるを、これはいとにくからずをかしくこそあめれ。ことばづかひ歌などもあしくもなし。おびたゞしくおそろしき所などもなかめり。本には女中納言のありさまいとにくきに、これは何ごともいとよくこそあれ。かゝるさまになる、うたてけしからぬすぢには覺えず。まことにさるべきものゝ報ひなどにてぞあらむとおしはかられて、かゝる身のありさまをいみじくくちをしく、内侍のかみもいとよし。中納言の女になり、子うむほどのありさまも、内侍のかみのをとこになるほども、これはいとよくこそあれ。本のはもとの人々みなうせてきたるほど、いとまことしからず。これはかたみにもとの人になりかはりていできたるなど、かゝること思ひよるすゑならば、かくこそすべかりけれとこそみゆれ。四の君ぞこれはにくき。うへはいとおほどかにらうたげにて、

春のよも見るわれからの月なれば心づくしの影となりけり

とよむも、何ごとのいかなるべしとおもひて、さばかりまめにあくる心もなき人をもちながら、心づくしに思ふらむとおもふだに、おいらかならぬ心のほどふさはしからぬを、

上にきるさよの衣の袖よりも人忘れぬをばたゞにやはきて

とよみたるこそいとうたてけれ。また宮の宰相こそいと心おくれたれ。さしもふかくものをおぼえずば、なでふ入らぬくまなき色でのめかしさをこのまるゝ。女中納言とりこめて、いまはいかなりとも、心やすく思ひあなづるほど、まづいとわろし。さばかりになりたる身を、さしもてやつして、さるめざましき目をみてあるべしと、何ごとを思ふべきぞ。又そのゝちまさしきをとこになりて、ゐてまじろはむを、女なる四のきみだにありし。それともおもはぬはとこそよみたるに、けざやかにさしもむかひ見る見るあらぬひとゞも、いとおもひもわかぬほどむげにいふかひなし。まづこの人のみのありさまを思はむにも、かのれいけいでんの内侍のかみのしづまり、つきづきしくひきくゝみてかくべくもあらざりしきそくを、思ひあはせよかし」といへば、また「それもさまことにて、吉野の中の君むことられて、さばかりのうらみのこりたりと思ひしられて、ほけありくなどこそいみじく心おとりすれ」などいふ。また「心たかきこそ春宮のせんじなど、いまの世にとりてはふるきもの侍れ。まことにことばづかひなどはふるめかしく、うたなどわろく侍れど、いと名だかきものにぞはべる。そのひとゝなきものゝ、身のあまるばかりのさいはひをかきあらはさむとしたるものこそ。されどさばかりおぼしめされたりし春宮には候ひ給はず。うちのおとゞのわくる心多かるに、ちぎりをむすびたるほどこそ心やましけれ。さて春宮の御位のすゑにむすめまゐらせて、そのたよりに、たゞゆめばかりたちながら行きあひて、かたみにせきかねて、たちわかれさせ給へるほどこそいとあはれに悲しけれ。あさくら、かはぎりなどもかやうのすぢのものぞか

し。おさくら、はじめはいとあはれに、すゑ心にくゝ覺えて、見もてゆくほどに、くもでが子をほりかはどのゝうみたるぞかしといふほど、むげにさだまりてにくゝこそおぼゆれ。かの車にて行きちがふいしやまにこもりたるほど、いとあはれなり。またいはうつ浪など、むげにたゞありに、ことばづかひもふるめかしけれど、大將にすかされたるつとめてしやうぞくさしの少將、女房のしやうぞくさくの色々なるをみて、

いろいろの花を折りては見ゆれどもひとりきくにはかひなかりけり

といへるをおもひつめて女御にまゐり、のちにたち給ひ、めでたきをりおなじいろいろをきて、左衞門督といふひと、ありし少將に、

菊の花かひゐるをりもありけるをさしもなどかは言ひくたしけむ

といひたるこそうれしけれ。またわか宮のうまれたまへる御はかしの使にて、この少將まゐりたるに、大將わるじの方にて御はかしとりつぐに、見あはせてほゝゑむもをかし。させることなきものがたりながら、かたきうちたるがそゞろうれしきなり。今やうの物語にとりては、わまのかるもこそしめやかにえんある所などはなけれども、詞づかひなども、よつぎをいみじくまねびて、したゝかなるさまなれ。物語のほどよりはあはれにもあり。一條院のにしのたいに、權中納言三位中將すみ給ふに、藏人少將うちの御使にまうでゝみるに、おのおのすみ給へるさまどもこそとりどりにいみじけれ。なかにも權中納言びはしのびやかにしらべつゝ、從冥入二於冥一永不レ聞二佛名一を口ずさみ給へるほどこそいみじけれ。按察大納言う

へのうせのほどこそいとあはれなれ。又かう侍從內侍こそいと心深くこのもしけれ。大納言山へのぼりざまに、そのたまといふわらはにあひたるほどこそいみじくあはれなれ。さて出家したまひてのち、大宮雪のふるをみて、わがこのもとはうづもれぬらむとながめ給ひしをりしも、大將かつふる雪をうちはらひてまゐり給へるほど、齋宮の御かたにてわがきみの、大將をばて丶、齋宮をばは丶とおぼしたるを、關白殿みだりがはしのことやとうちわらひ給ふものから、なみだのこぼれたるなど、いとあはれなり。大將そでにかほおしあて丶ゐ給へる、ことわりなりや」などいふひとあれば、また「この大納言のきたのかたのなきこそいとくちをしけれ。さまでは覺えずぞ。またにく丶はなきほどなる人がらやんごとなくなどもちて、法師になりたらむをりなげかせみむこそいますこしあはれもまさり、また中宮のむげになにごともおぼしたらぬこそ大納言も心おとりしてくちをしけれ。おなじ心にうちなびき、心をかはし、ふみのかへりごとなどこそせざらめ、御心のうちにはいとあはれとおぼさるべきなり。また關白殿、大將殿などのおのおのきよき北の方もちたりといひながら、おのづからちる心なく、うへの御はらからたちのさばかりうつくしきを、ちりばかりもおもひかけぬこそむげにさうざうしけれ。中宮の御さんの御いのりの佛のおほさこそまことしからね。まだなにごとよりも、權大納言の即身成佛こそかへすがへすくちをしけれ。法師になりたるあはれ皆さめてねざめのなかのきみのそらじに丶も、おとらぬほどの口をし」などいふ。「ひと末葉のつゆあまのかるもとひとでに申すめれど、ことばづかひなどもむげにた丶ありにぞあん

める。皇太后宮の御ふるまひ心ざまこそかへすがへすめでたけれ。すべて其のおたりはいと心にくゝいみじくおぼゆ。又源氏中將よりそなたざまの人々といひつべくて、心にくけれ。宰相中將のやまひよくなりてまゐりたるに行きおひて、うち見て、唯こしうやばかりうちして行き過ぎたるなどこそいみじくねたけれ。ものゝけのしわざなれども、宰相中將の心、たゞかはりにかはることそいとおさましく哀なれ。また大將のうせのほど、正月に隨身がふくいと黒くて、申し入りたるところなどこそおさましく哀なれ。またをかしきことゝもあんめり。うちの得業がしひくるひなどもをかし。さても思ひいでもなき宰相中將たちかへりてばかりめでたき。前關白大將なにごともおはやうにうち見て、わづかに東宮女御、藏人少將などいだしいれて、女のぐわはうこそいとくちをしけれ。また露のやどり、こものがたりの中には、ことばづかひうたなどもいとおしくもなし。おまりに人のうせたるぞまめまめしき。大貳がむすめこそいとほしけれ。おふぎの風を身にしめてなどあるほどはいみじ。八條のひともわれからはいとよし。一條のうへといふひとこそなどやらむにくけれ。大原野行幸、關白のうへさじきにて見るに、二條のうへ車にて、中宮の女房くるまおまたやりつゞけて見たる所こそいみじけれ。兵部卿宮ちゝおとゞのいみに、ひとりおこなひをするほどに、

　おもひやる袖だに露もかわかぬにくちやしぬらむ君がたもとは

とてさしおきたるほども いとをかし。みかはにさけるこそうたはよけれ。東宮宣旨といふひと、

うきに又つらさをそへてなげゝとやさのみはいかゞものは思はむ

とよめるも、またそれならずもいとおほかり。みくしげどのこそいみじくいとほしけれ。うぢの河なみこそあまのかるもをあまりまねびたれども、あしくもなし。大將師の中の君にあひて、雪のあした弁にあひて、この雪とゝもにきえ侍りぬるぞといひかけてぬるこそいと心やましけれ。大將のきゝつけたるこそ嬉しけれ。大將のうせこそいと哀なれ。また前齋宮の、むげに思いだしたる事もなくてはてたるにはさうざうしき。またあねぎみ式部卿宮の北のかたになりて、いみじきことと思えたりおもひて、おとゝひめぎみにして、女御にまゐらせて、さいはひひきいだしたるこそいとにくけれ。また齋宮のひめ君とて、なにごともめでたげなる人こそいと心づきなけれ。のちに北政所などいはるゝよ。中の君こそいとほしけれ。よき子もちたるほど、このもしきかたもあり」などいふ。また「こふむかへ、詞づかひえんにいみじげなるほどよりは、むげにすゑがれにぞある。大將の心もちゐるこそいみじけれ。人はくちにまかせてさこそはものはいへども、かならずそのすぢをとほすことは、今も昔もありがたきわざなるを、はじめのおもむきにてすゑまでとほりたるいみじきなり。雪の夜ゆめみておどろきわたりながら、いと心ぐるしげなるありさまを見おきて、たちかへる心などこそあまりになさけなかめる。又のひめ君の身をかへて、按察大納言のとりむすめになりてくらすほどこそいとあらまほしくも覺えね。おたえのぬま、あまりに今めかしくこそおぼゆれども、人の心さまざまにおほく見えて心あるものなり。宮の大將こそいとよき人にてあれ。や

がてそのきたのかたも、にくからぬさまにてよし。式部卿の中むすめの物がたり、宮大將たちぎゝしてとの、大將にかたりたるほど、いとをかしくうれしからずとわらふもをかし。新宰相のきみがつぼねに、「三の宮おはしましてけるまへ「中納言中將わたるとてこひしなどはおろかなど口ずさむこそいとをかしけれ。又おなじ人うちよりてともにゆきあひて、このよのほかの思ひいでにもとうちながめたるもいとあはれなり」などくちぐちにいひ、「これよりしもひとびとしからぬものがたりも、すこしわれはと思ひたるも、かずもえらずおほく侍れど、さのみ申さばよも明日もくれぬべし。はつ雪といふものがたり御らんぜよ。それにぞものがたりのことは見えて侍る。またむげにこの頃いできたるものあまた見えしこそなかなかふるきものよりは、詞づかひありさまなどいみじげなるも侍るめれど、なほねざめ、さごろもはまゝつばかりなるこそえ見侍らね。またたかのぶのつくりたるとて、うきなみとかやこそことのほかに心にいれてつくりけるほど見えてあはれに侍れど、そもなどかことばづかひなど、てつゞけにて、いと心ゆきておぼえはんべらず。又定家少將のつくりたるとてあまたはんべるめるは、ましてたゞけしきばかりにて、むげにまことなきものどもに侍るなるべし。まくらの宮とかやこそひとへに萬葉集のふぜいにて、うつぼなど見る心ちして、おろかなる心もおよばぬさまに侍るめれ。すべて今のよのものがたりは、ふる御かどにてさでろものあまのをとめ、ねざめのうちしきなども今すこしことごとしく、いち早きさまに え
したるほどに、いとまことしからず、おびたゞしきふしぶしぞ侍る。有明のわかれゆめ語り、

なみぢのひめぎみ、あさぢがはらの内侍のかみなどは、ことばづかひなだらかに耳た、しからず、いとよしと思ひて見もてまかるほどに、いとおそろしきことゞもさしまじりて、なにごともさむる心ちするこそいとくちをしけれ」などいへば、れいのわかき際にて、「思へばみなこれは、されば、いつはりそら事なりな。まことにありけることをのたまへかし。伊勢物語、大和物語などはげに有ることゞもゝ侍れば、かへすがへすもいみじくこそ侍れ。それもすこしのたまへかし」といへば、「いせ物語など申すは、たゞなりひらがすき心のほど見せむれうにしたるものにこそ侍れ。たれかはよにあるばかりの人のたかきくだれるも、すこしものおぼゆるほどの人、いせやまとなど見おぼえぬやは侍る。されば、こまかに申すにおよばず。すみだ川のほとりにて都鳥にことゝひ、やつはしのわたりにてなれにしつまを戀ひたるなど、都のほかまでおくがるらむも、たゞかのいたらぬくまなきしわざにこそ侍るめれ。大和物語と申すも、たゞかやうのおなじすぢのことなれば、とゞめ侍りなむ。たれも御らんじおぼえたることなれば、その内の歌のよしあしなどは古今集などを御らんぜよ。これによきとおぼしき歌はいり侍るべし」といへば、れいのひと、又「さらばふるきあたらしきともなく撰集の中に、いづれかすぐれてめでたく侍らむ」といへば、「撰集など申すな歌かぬにておろかなるも侍らじときこえはべりき。萬葉集などのことは、心もことばもおよび侍らず。くにもとゝ申す歌よみこそ我が歌は萬葉集をもちてかゝりどくにするとは申しけれ。古今でぞふるごといづれもと申しながら、かへすがへすもめでたく侍れ。歌のよしあしなど申さむことはいとお

そろし。撰べる人々たとひ思ひあやまちて、よろしき歌をいるとも、みかど御らんじとがめせさ給はざらむやは。後撰はあまりにかみさびすさまじきさまして、凡夫の心およびがたく侍り。またしふる集、しふるせうとて侍るめれ。定家少將にめすとはいづれいづれを申すぞと、人のとひて侍りし返り事に、さまざまこまかにしるされて侍りしことゞものなかに、ふるき人のしわざなれど、集にはしようははるかにおとりて見ゆとこそ申して侍りしか、萬葉集よりせんざい集にいたるまでは、八代集とやいふらむとて、それまでがことをぞこまかに申されて侍りし。後拾遺、よきうたども侍るめり。ふるき集どもよりはよしなど申す人々侍れど、古今のまねはいかでか侍らむ。公薬集とて三たび集の歌をせんじて四條大納言公任のせられたるものを御らんぜよ。さてそれなる歌どもやうならむ。心もことばもすがたもかきあひてめでたきうたとはしらせ給へ。また公薬集よしと思へる人も侍り。されどその心、うたすべてめのおよび侍らぬやらむ、さしもおぼえ侍らず。また今すこし見どころすくなくぞおぼえ侍る。世にもさ思ひて侍るなるべし。いたくおほくも侍らず、そのゝちも家々にえらべる集ども、あまた聞え侍る。からむす(元如)でせんすなどは人よしと思ひて侍るめり。されどちよくせん集ならぬは心にくきにや、いとあなづらはしくおぼえ侍る。かつはかやうの事などはえらべるひとがらによるべきなり。けんそん月げすなどはめでたかるらめども、心にくゝもいとおぼえ侍らず。まして申さむやならずと申すものゝ侍るとかや。いまだえはべらねどさしも心せばきものにてこそ侍らむ、心をだにこそ見侍らね。きよくわすとて建久七年にえらべ

るよし見えたるものはんべり。それがしなどいふほどのもの丶しわざにもはえ(元如)らぬにや」などいへば、また人、「されどそれは旅のうたばかりにて、さともの丶ようにたちぬべきとかや」といへば、「題のうたはせんずならずとも、堀川院百首、新院(崇徳)百首、ちかくは九條どの丶左大將(良經)と申し侍りしをりの百首など侍るは、それを見ても題の歌はいとよく心えぬべし。なかなかいとうつくしきとも侍るめるは、あはれをりにつけて三位入道(俊成)のやうなる身にて、集をえらび侍らばや、千載集こそはその人のしわざなれば、いと心にく丶侍るを、あまりにひとに所をおかる丶にや、さしもおぼえぬ歌どもあまた入りてはべめれ。なにごともあいなくなりゆく世の末に、この道ばかりこそやまびこのあと絶えず、かきのもとの塵つきずとかやうけたまはり侍れ。まことにき丶しらぬ耳にもありがたきうたども侍るを、ぬしの所にはゞかり人のほどにかたざる歌どもには、かきませずえりいでたらば、いかにいみじく侍らむ、いでやいみじけれども、女ばかりくちをしきものなし。昔よりいろをこのみ、みちをならふともがらおほかれども、女のいまだしふなどえらぶことなきこそいと口をしけれ」といへば、「かならず集をえらぶことのいみじかるべきにもあらず、むらさき式部が源氏をつくり、せい少納言がまくらざうしをかきあつめたるより、さきに申しつるものがたりどもおほくは女のしわざに侍らずや。さればなほすてがたきものにてわれながら侍り」といへば、「さらばなどか世の末にとまるばかりの一ふし、かきとゞむるほどの身にて侍らざりけむ」「人のひめぎみ北のかたなどにてかくろへば、見たらむ人はさることにて、宮づかへ人とてひたおも

てにいでたち、なべて人に志るばかりの身をもちて、このごろはそれこそなど人にもいはれず、世の末までもかきとゞめられぬ身にてやみなむは、いみじく口をしかるべきわざなりかし。昔よりいかばかりのことかは多かめれど、あやしのこしをれ一つよみて、志ふにいることなどだに、女はいとかたかめり。まして世のすゑまで名をとゞむばかりのことはいひいでじ。出でたるたぐひはすくなくこそきこえ侍れ。いとありがたきわざなんめり」などいへば、れいのわかき人、「さるにてもたれたれとか侍らむ。昔今ともなし、おのづから心にくゝきこえむほどの人々思ひ出でゝ、その中にすこしもよからむ人のまねを志侍らばや」といへば、「ものまねびは人のすまじかるわざを、ふちにいたり給ひなむず」といひてわらふ。「女御きさきは、心にくゝいみじきためしに書きつたへられさせ給ふばかりのはいとありがたし。ましてすゑずゑはことわりなりかし。いろをこのみ、歌をよむもの昔よりおほからめど、をのゝ小町こそみめかたちも、もてなし心づかひよりはじめ、なにごともいみじかりけむとおぼゆれ。

色みえてうつろふものは世の中の人の心のはなにぞありける、

わびぬれば身をうきくさの根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ、

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と志りせばさめざらましを。

とよみたるも、女の歌はかやうにこそと覺えて、心に涙ぐましくこそ」といへば、「またおいのはてこそいとうたてけれ。さしもなき人もいとさまでゐることやは侍る」といふひとあれ

ば、「それにつけても浮世のさだめなき思ひしられて、哀にこそはべれ。かばねになりてのちまで、

秋風の吹くたびごとにあなめあなめをのとはいはじすゝきおひけり

などよみて侍るぞかし。ひろき野のなかに、すゝきのおひて侍りける、かく聞えたるなりけり。いと哀にてそのすゝきをひきすて侍りける夜のゆめに、かのかしらをば小野のこまちと申すものゝかしらなり、すゝきの風にふかるゝたびごとに、めのいたく侍るに、ひきすてたまひたるなむいとうれしき、このかはりにはうたをいみじくよませ奉らむと、見えて侍りけるとかや、かの夢に見たる人はみちのぶの中將と、人の申し侍るはまことにや。たれかはさることあるな。色をもかをも心にしむとならば、かやうにこそあらまほしけれ」といへば、また人「すべてあまりになりぬる人の、そのまゝにて侍るためし、ありがたきわざにこそあめれ。ひがきのご、せい少納言は、一條院のくらゐの御とき、宇治の關白よをしらせ給ひけるはじめ、皇太后のときめかせたまふ盛りにさぶらひ給ひて、ひとよりいうなるものとはおぼしめされたりけるほどのことゞもは、まくらざうしといふものにみづからかきあらはして侍れば、こまかに申すにおよばず。うたよみのかたこそもとすけが女にて、さばかりなりける程よりはすぐれざりけるとかやとおぼゆる。ごしふゐなどにもむげにすくなく入りて侍るめり。みづから思ひ知りて、申しこひて、さやうのことにはまじり侍らざりけるにや、さらではいといみじかりけるものにこそあめれ。そのまくらざうしこそ心のほど見えていとをか

しう侍れ。さばかりをかしうもあはれにもいみじくもめでたくもあることゞも、のこらず書きとるしたるなかに、宮(定子)のめでたくさかりにときめかせ給ひしことばかりを、身のけもたつばかりかきいでゝ、關白殿うせ給ひ、うちのおとゞ(伊周)流され給ひなどせしほどのおとろへをば、かけてもいひいでぬほどのいみじき心ばせなりけむ人の、はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、めのとの子なりけるものにぐして、はるかなるゐなかにまかりてすみけるに、あをなといふものはしに、といづとて昔のなほしすがたこそ忘れぬと、ひとりごちけるを見侍りければ、あやしのきぬきて、つゞりといふものばうしにして侍りけるこそいとあはれなれ。まことにいかに戀しかりけむ」などいへば、また「小式部内侍こそたれよりもいとめでたけれ。かゝるためしをきくにつけても、命みじかゝりけるさへいみじくこそ覺ゆれ。さばかりの君に、とりわきおぼしときめかされたてまつりて、なきあとまでも御ぞなどたまはせけむほど、宮づかへのほいこれにはいかゞすぎむと思ふかはうさへいと思ふやうに侍るかし。よろづのひとの心をつくしけむ、ねたげにもてなして、大二條殿(道教)にいみじく思はれ奉りて、やんごとなき僧子どもうみおきてかくれにけむこそいみじくめでたけれ。うたよみのおぼえは泉式部にはおとりためれど、やまひ限りになりて忘ぬべくおぼえけるをりに、

いかにせむいくべき方もおもほえず親にさきだつ道を忘らねば

とよみたりけるに、そのたびの病たちまちにやみたりけるとかや。それにてこの道のすぐれたる程はみ忘りぬ。またさだよりの中納言に、

おはえ山いくのゝみちの遠ければまだふみもみずあまの橋立

とよみかけたりけるなども、をりにつけてはいとめでたかりけりとこそおしはかららるれ。いづみ式部、歌かずなどよみたることは、まことに女のかばかりなる歌どもよみいづべしとも覺え侍らぬに、さかるべききさきのよのことにこそあめれ。この世ひとつのことゝは覺えず。そのなかにも、やすまさにわすられて、きぶねにもゝまうでて、

もの思へば澤のほたるも我が身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る

とよみたるなど、まことにあはれにおぼえけり。

おく山にたぎりて落つる瀧つせに玉とるばかりものな思ひそ

と御返しありけむこそいとたとけれ。また小式部内侍うせてのち、女院陛下よりたまはせける御ぞに、小式部内侍とふだつけたるを見て、

もろともに苔の下にはくちずしてうづもれぬなをみるぞ悲しき

とよみてまゐらせけむ、

とめおきて誰をあはれと思ふらむこはまさるらむこはまさりけり

とよめるもいとあはれなり。またうまでのなにがし僧のもとへ、

おやのおやと思はましかばとひてまし我が子のこにはあらぬなりけり

とよみてたてまつりたるもあはれなり。さよしやのひじりのもとへ、

暗きよりくらきみちにぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月

とよみてやりたりければ、かへしをばせで、けさをなむつかはしける。さてそれを見てこそうせ侍りにけれ。そのけにや泉式部つみふかゝりぬべき人後のよ助かりたるなどきゝ侍るぞなにごとよりもうらやましく侍る」といへば、「また宮のせんじこそいみじく覺え侍れ。をとこも女も人にもかたり傳へ、よにいひふらずばかりのものおもはざらむは、いとなさけなくはいなかるべきわざなり。さだよりの中納言かれがれになりて侍りけるに、

　はるばると野中にみゆるわすれ水絶えま絶えまを歎くころかな

とよみけるほどに、たえはて給ひてのち、賀茂にまゐり給ふときゝて、よそながらも今一たび見まほしさに、まうでゝ見きこえても、

　よそにても見るに心はなぐさまでたちこそまされかもの河波。

さてもいとゞ涙の催しなりけり。

　戀しさを忍びもあへずうつせみのうつし心もなくなりにけり

とよめる、かへすがへすもいみじきなり。誰々かはほどほどにつけてものおもはぬ。されどもうつし心もなきほどに思ひけむ、いとありがたくあはれにおぼえ侍るなり。されどもさやうのたぐひは、昔よりいと多く侍るめり。あかぞめがまつとはとまる人やいひけむとよめる、伊勢たいふが近江のうみにかたからめとよめるも、ほどほどにつきていみじからぬやはある。まことに名をえていみじく心にくゝあらまほしきためしは、いせのみやすどころばかりの人は、いかでか昔も今も侍らむ。寛平法皇世をそむかせおはしまして、つれづれにてこも

りゐたりけむありさま、きゝ侍るなどこそたぐひなくいみじく覺ゆれ。にはかいとしろきものから、こけむらむらおひて、もかうのす所々やぶれて、かみさび心ぼそげなりけるに、延喜の御とき、わか宮の御はかまぎ御屏風の歌たゞいまよみてたてまつるべく、これひらの中將の御つかひにはおほせられたりけるに、

ちりちらずきかまほしきに故郷のはなみてかへる人もあらなむ

とよみて奉りたるほどの事どもなどこそかへすがへす心もことばもめでたく覺え侍りといふなれば、またかならず歌をよみ、ものがたりをえらび、いろを好むのみやは、いみじくめでたかるべき。なにごとにも歌の道にたりぬるばかりは、いみじくめでたかるべきことやは侍る。その中にもしやうのことは、女のしわざと覺えて、なつかしくあはれなるものゝねなれど、あやしのなま女房わらはべ、さぶらひなどまで、おほかたよからぬつまならして、なべてみえならしたるがいと口をしきなり。びははなべてひく人すくなく、まして女などはたまたままねぶをきくも、いとめでたく心にくゝおくゆかしくこそ侍れ。はくがの三位あふさかの關へもゝよまでゆきて、せびまろがてより習ひ傳へたまへりけむほど、思ふもいとありがたくめでたきを、兵衞内侍といひけるびはひき、むらかみの御ときのすまうのせちに、げんじやうたまはりてつかまつりたりけるが、陽明門まできこえけるなどこそいとめでたけれ。はくがの三位だにかばかりの音はひきたて給はずと、ときの人はめ侍りけるほどこそ女の身にはありがたきことに侍れ。うたなどをよみ、すぐれて人にはめらるゝためしは、昔もいま

もいとおほかり。これはいとありがたくうらやましきことに侍り」などいふなり。さまざま心のほど見えて、いとをかしくきゝ所あるに、いみじくさしいらへもせまほしきこと多かれど、よしなければ、身じろぎをだにせでそらねをして侍るに、また、「されどさやうのことはわがよにある限にて、なき跡までとゞまりて、すゑのよの人見きゝ侍ることなきこそ口をしけれ。をとこも女も、くわんげんの方などは、そのをりにとりてすぐれたるためし多かれど、いづらは末のよにそのねの殘りてやは侍る。歌をもよみ詩をもつくりて、なをもかきおきたるこそ百年千とせをへて見れども、たゞ今そのぬしにさし向ひたる心ちして、いみじくあはれなるものはあれ。さればたゞ一ことばにても、すゑのよにとゞまるばかりのふしを書きとゞむべきとはおぼゆる。くりごとのやうには侍れど、つきもせずうらやましくめでたく侍るは、大齋院選子より上東門院彰子つれづれなぐさみぬべき物語やさぶらふと、たづねまゐらせ給へりけるに、むらさき式部をめして、何をかまゐらすべきと仰せられければ、めづらしきものはなかに侍るべき、新しくつくりてまゐらせ給へかしと申しければ、つくれと仰せられけるをうけたまはりて、源氏をつくりたりけるをこそいみじくめでたく侍れ」といふ人侍れば、又「いまだ宮づかへもせで里に侍りけるをり、かゝる物つくりいでたりけるによりて、めし出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたりとも申すは、いづれかまことにてはべらむ、其の人の日記といふもの侍りしにも、まゐりけるはじめばかりはづかしうも心にくゝも又そひぐるしうもあらむずらむと、おのおの思へりけるほどに、いとおもはずにほけづきか

たはにて、一もんじをだにひかぬさまなりければ、かく思はずとともだちとも思はるなどこそみえて侍れ。きみの御ありさまなどをばいみじくめでたく思ひきこえながら、つゆばかりもかけかけしくならしがほにきこえいでぬほどもいみじく、また皇太后宮の御ことを限なくめでたく聞ゆるにつけても、あいぎやうつきなつかしく候ひけるほどのことも、君の御ありさまもなつかしくいみじくおはしましゝなどきこえあらはしたるも、心にくゝぬ(元如)ていにてあめる。かつはまた御心がらなるべし」などいへば、また「皇后宮(定子)、上東門院いづれかいますこしめでたくおはしましける」といへば、「皇后宮御みめもうつくしう おはしましけるにこそ院もいと御心ざしふかくおはしましける。うせさせたまふとて、

志る人もなき別れぢにいまはとて心ぼそくもおもひたつかな、

夜もすがらちぎりしことをわすれずはこひむ涙の道ぞゆかしき

などよませ給ふらむこそあはれに侍る。のちに御らんじけむみかどの御心ち、まことにいかばかりかはあはれに思しめされけむ、さて御わざの夜、雪のふりければ、

野べまでにこゝろ一つはかよへども我がみゆきとは志らずやあるらむ

とよませ給へりけむもいとこそめでたけれ。おはしまさぬあとまで、さばかりの御身に、めもあはずおぼしめしあかしけむほどなども、かへすがへすもめでたし。また中關白殿(道隆)かくれさせ給ふ。又うちのおとゞ流されなどして御世の中おとろへさせ給ひてのち、かすかに心ぼそくておはしましけるに、頭中將それがしまゐりてすのそばかせに吹きあげたるより見

給ひければ、いたくわかき女房のきよげなる七八人ばかり、色々のひとへがさねもからぎぬなどもあざやかにて候ひけるも、いとおもはずに、今はなにばかりをかしきこともあらじと思ひあなづりけるも、あさましく覺えけるに、庭の草はあをく茂りわたりて侍りければ、などかくはこれをこそはらはせでおはしますさめときこえ給ひても、宰相のきみとなむ聞えけるひと、露おかせて御らんぜむとてといらへけむこそは、なほふりがたくいみじく覺えさせたまへ。上東門院の御ことはよしあしなど聞ゆべきにもあらず。なにごともめでたきためしにはまづひかれさせ給ふときなれば、とかく申すにおよばず。なにごとも御さいはひきはめさせ給ふあまりに、御いのちさへこちたくて、あまたのみかどにおくれさせ給ふこそ口をしく侍れ。そのたびにいとあはれなる御歌どももよませ給ひたるは、やさしくこそ侍れ。一條院かくれさせ給ひて、

あふことも今はなきねの夢ならでいつかは君をまたはみるべき

などよませ給へるもいとめでたくこそ侍れ。又あきもとの中納言御返り事に、よはふたゝびはそむかざらましなど侍るもいとあはれなり。なにごとよりもいうなる人おほくさぶらひけむこそいとゞ心にくゝめでたくおぼえ侍れ」といへば、「其の御おとうとのびはどのゝ皇太后宮姸子ときこえさするにこそいと華やかにもの好みしたる人々多くさぶらひけれ。やまと祈せむもその宮の女房なるべし。をりをりの女房のしやうぞくうちいでなどもためしなき程にせいをやぶり、女房の一品經供養など恚けることもいとおびたゞしく侍りけれ。女院に

はさばかりなをのこしたる人々さふらひけれど、さやうのことなども、ひとの目おどろくばかりはあらじとつゝませ給ひけむ程も、さまざま心のいろいろ見えてめでたくこそ」といへば、また「昔のやうの宮ばらの御ありさま、あまたうけたまはる中に、大齋院こそめでたくおはしましけむと覺えさせ給へ。たゞ今の時さきにておはしまさむ御方々は、はなやかに今めかしくもまた心にくゝもおはしまさむ、ことわりなり。これはいつもめづらしからぬときはのかげにて、ありすがはのおとより外は、ひとめまれなる御すまひにて、いつもたゆみなくおはしましけむ程こそ かぎりなくめでたくおぼえさせ給へ。さりながら御年などもわかくはおはしまさむほどはことわりなりや。むげにおいおとろへ、御よも末になりて其のかみまゐりなれて侍りけむ人もをさをさなく、今の世の人もはかばかしくまゐることもなき末のよになりてしも、九月十日よひの月あかゝりけるに、雲林院のふだんの念佛のはてにまゐりたりける殿上人四五人ばかり、かへさに本院のみかどのはそめにあきたるよりやをらいりて、むかしより心にくゝいはれさせ給ふ院のうち忍びて見むとおもひけるに、ひとのおともせずしめじめとありけるに、御前のせんざい心にまかせてたかくおひしげるを、露は月のひかりにてらされてきらめきわたり、蟲のこゑごゑかしがましきまできこえ、やり水のおとのどやかにて、ふなをかのおろし風ひやゝかに吹きわたりけるに、御まへのすこしはたらきて、たきものゝ香いとかうばしく匂ひいでたりけるだに、いまゝでみかうしもまゐらで月など御らんじけるにやと あさましくめでたくおぼえけるに、おくふかくしやうのことをひや

うでうに志らべられたる聲はのかに聞えたりける。さはかゝることこそとめづらかに覺えけることわりなり。さてかゝる御ありさまを見けると志らせ奉らざらむ口をしさとて人などの參る方へたちまはり給へりける。そこにも女房二三人ばかり物がたりして、もとより侍りけるに、いとをかしくて、琴などひき遊びてあけがたになりてこそうちにかへりまゐりてめでたかりつることゞも語りたまひけれ。ときの所などはあけくれ人おほく、とのばら宮々もつねに立ちまじりたまへれば、たゆみなからむもことわりなりや。皇太后宮とききこえけるは大二條どのゝ女、公任の大納言の御まご、世をのがれこもりゐさせ給ひて後、峯のあした白川院の御幸にはかになりて侍りけるに、いさゝかあともなく、法花堂のかたに三昧經志のびやかによみて、南面にうちいで、十くばかりありけるなかより、きりて如元そでどもいだして、ひがくしのまに院は御車ながらたゝせ給へりければ、かざみ着たるわらは二人、銀のてうしに御みきいれて、志ろがねのをしきに金のさかづきすゑて、大かうじ御さかなにてまゐり給へりしほどこそいとめでたけれ。かねてよういしたらむには、それにまさること何ごとかなからむ、俄にはいとありがたき御よういなりかし。いまのよには何ごともといふなかに、かやうのことこそむげに有りがたかんめれ」といふなり。又いかなることいはむずらむときゝふしたるに、れいの人、「さのみ女のさたにてのみ、よをわかさせ給ふことのむげにをとこのまじらざらむこそ人わろけれ」といへば、「げにむかしも今もそれはいときゝ所あり。いみじきこといかにおほからむ、おなじくばさらば、みかどの御うへよりこそいひたちな

り。よつぎ大かゞみなどを御らんぜよかし。それにすぎたることはなにごとかは申すべき」といひながら。

無名草子 終

明治三十六年十月二十四日印刷
明治三十六年十月二十七日發行

國文大觀日記草子部奥附
全九册定價金貳拾圓

編者 松下大三郎
編者 丸岡桂
發行者 下田度計
東京市京橋區銀座二丁目十番地
印刷者 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷所 株式會社國光社印刷部
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所 板倉屋書房
東京市京橋區銀座二丁目十番地
（電話長距離加入新橋一六三四番）

国文大観

丸岡 桂

松下 大三郎／編